THE KAIZO

改造

四月特大号

1923

バツアラ

黑人ルネ・マラン作
高瀨毅譯

四六判
布裝

定價壹圓五拾錢
書留送料拾五錢

卅二版

行き詰まれる現代文明に松明の如く光り出でたる、大藝術!、時代から置いてきぼりを喰つて世界人の嘲笑裡にある黑人の一大天才が未知の世界である! 彼のサハラ大沙漠と、神秘靜寂のナイル河畔の一大密林を背景として黑人生活の生々しき獸慾、墮落、殘忍、穢汚の極致赤裸々に描き出した豐富な情操に神秘の詩聖タゴールをして驚嘆せしめた。

本書の筋書は或る酋長の寵愛する美青年が酋長の愛妾と通じたため、大狩獵の折、作の美青年を殺さんと試みたが酋長は却つて豹のために腕脛を打たれ、その結果若き愛妾と美青年が戀の凱歌を擧ぐるのが本筋となつてゐるが、それよりは白人に對する憎惡、反抗、呪咀敵對のためにかき下された「恐るべき國際小說」である。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番


Moore's
non-leak

新時代に活躍の基礎を造る獨學機關は是れ

早稻田大學六大講義

經營將に四十年—講義錄界の權威

政治經濟科	法律科	文學科	中學科	商業科	高等女學科
一箇年半修了	一箇年半修了	一箇年半修了	二箇年修了	一箇年半修了	一箇年半修了
每月二回發行	每月二回發行	每月二回發行	每月二回發行	每月二回發行	每月二回發行

葉書にて申込次第　各科見本附規則書　直ちに送呈す

東京牛込
早稻田

早稻田大學出版部

電話 三四五
　　 三四六
牛込 三七四八
　　 三七四九

中村吉藏作

戯曲 錢屋五兵衛父子

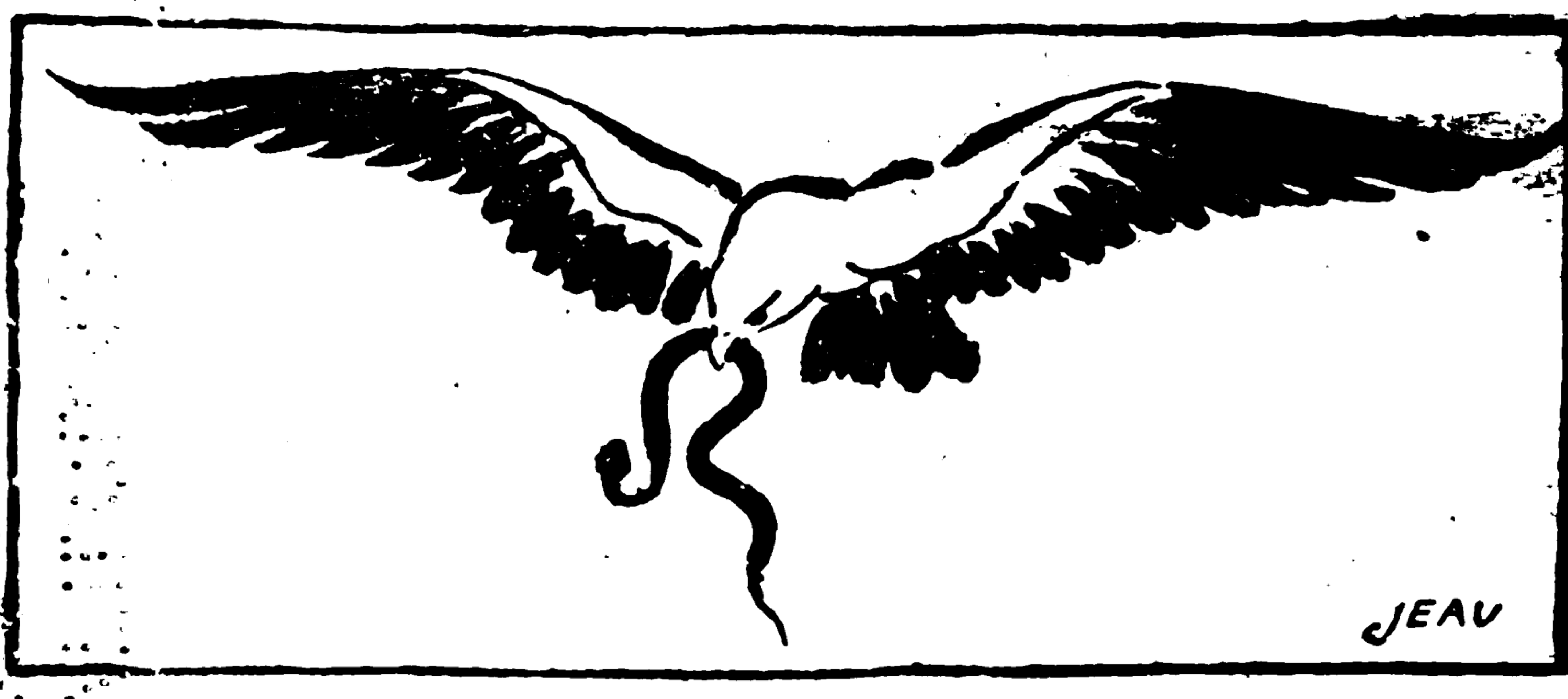
定價壹圓五拾錢

◇送料十五錢
◇四六判上製

第六版

北越の俠商『錢屋五兵衛』父子は封建末期に於ける事業的天才の一巨人として無產階級の民衆との葛藤から胚まれて來た運命的な、又性格的な一悲壯劇を描いてそこに舊社會體の一の豫兆としての、ブルジョアジーの崩壞を示さうとしたのが作者の意圖である。現代の思想と生活の潮流の或る方向への指標を、その中から發見する者もゐるであらう、又『白隱和尚』は嘗て幸四郎氏に依て『帝劇』に、『小山田庄左衛門』は延若氏に依て『浪花座』に初演せられ、共に成功したものである。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

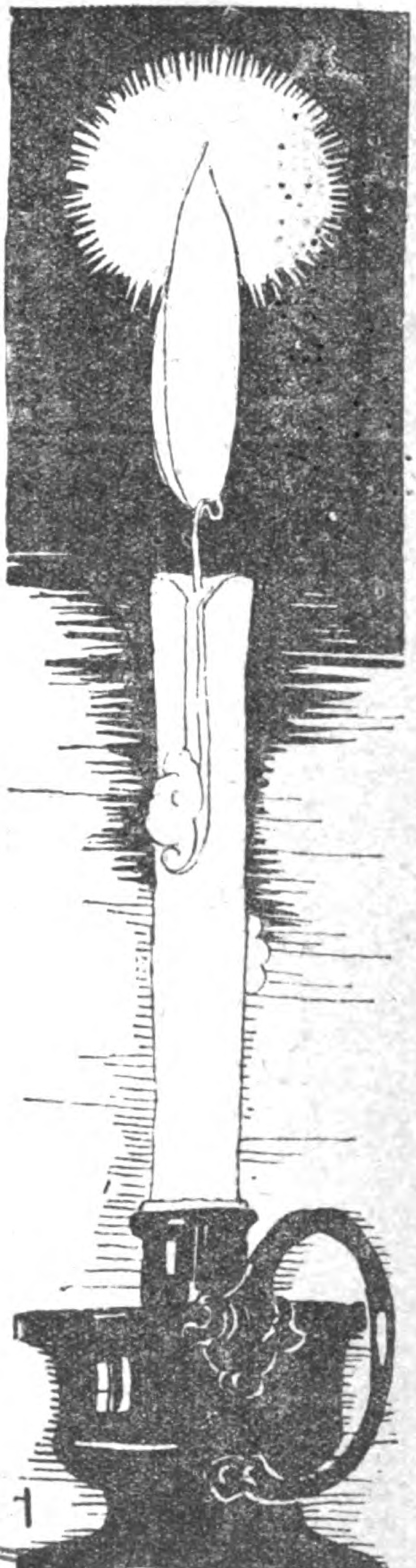


我國の一問題

我國の社會運動で、最も統制あり眞劍味あり、實力あり、そしてその將來の運動に片唾をのましむるのは水平社運動であらう。彼等の欲するところ、行動するところ理義に於て將に首肯すべく、その運動に對して萬腔の同情を表すべきである、ヴェルサイユ會議に於て、華盛頓會議に於て幸か、不幸か我國は五強に列しながら他の四強からは依然として黄色の猿待遇を受け、四強の國民よりも特種扱ひされた、そのとき諸君はどう云ふ氣持になつた。人種差別撤廢案が有耶無耶に葬られて七千萬國民はべソをかいて策のすべてを拋棄したではないか、しかし我々はそのとき退いて靜思の林に入つた。がそれはどうでもよい、自分が自分で資力を蓄へて人格としての完璧を期しさえすれば何も歐米人から我々を人間の仲間に入れるとの免狀を貰ふことの愚であり、そしてそのことが人間として馬鹿げた擧であることに想ひ到つた、歐米人にそうした神祕もなければ、人格的優秀さもない、彼等は物慾にかけてはまことに動物的の本質を赤裸々に繼承し、精神的遠慮なくそしてその日その日の享樂に熱するほど墮落し果てておる。高人としてその風を欽するの人種ではない彼等も依然として猶太人を嫉忌する猶太人であるその精神荒廢者を對手として愚痴るの愚こそ笑はなければならぬ、されど亦我々も現實に即する限り、物慾が人類の重大問題を決する有力素であることは否み得ないそこに觀鬪も生れ妥協も必要となつてくる。妥協を必要とすればそこに人種の融合が無理にも必要になつてくる。そこに我々また高人として我不關焉の態度もすてねばならぬ、精神荒廢者とも或る方面に妥協せねばならぬ。學童、軍隊、婚姻其他彼等が行くとして、差別待遇され、政府よりも部落民として特種視され、一般人民よりもエタとして輕蔑さるることは忍び難き恥辱であらう。人種として差別撤廢を各強國に高唱した七千萬國民はこの事をどう考へる同じ日本の同胞に對して不道義のかず〳〵を敢えてしながら。それを人に強ひ、他國人に強ひ他人種に強ゐることがどうして出來る。水平社運の主張の解決は我國が、我國民が人種撤廢案を提出する前に解決すべき先決條件だ。

近く我國民が政治問題として、社會問題として尤も惱まねばならぬのは此問題の解決であり、そして朝鮮問題である。だが、此問題の解決は立ちどころに出來る、國民の總てが謙虛であることが直に問題を解決へと導く、

ただ時代錯誤の政治屋によりて形勢が惡化することなくば幸だと思ふ。敢て當面の問題として冷靜なる國民の熟慮と判斷を要求しておく。



王道と覇道

北昤吉

一

改造が社會若しくは國家に關する限り、共の理原は或る規範に從へる意志でなければならぬ。斯かる規範は與へられたる儘の意志には內在してゐない。若しさうであるならば、意志は常に夫れ自體に於て合理的であり、自律的であることになる。さればといつて規範は意志に全然そよ〳〵しいものであつてはならぬ。斯くては規範は意志に對する支配力を喪つて了う。意志に直接與へられたものも、また、意志と無關係のものも、共に自然意志を合理化することは出來

ぬ。從つて意志を合理化すべき規範は、意志に對して課題となるべきもの、未だ實現されずして、而も實現さるべきものでなくてはならぬ。改造とは、一言に云へば、規範に適ふ合理的意志を原理として、現實せられたる文化價値即ち財を變形し、更に實現せられざる純粹價値を現實化することに外ならぬ。通俗に理想の實現とは即ち純粹價値を文化價値化することに外ならない。

若し規範に從つて活動する意志を合理的意志又は實踐理性と稱し得るならば、我々が過去に於て改造の事實を認め、又將來に於ても改造の可能を信ずる限り、改造の原理としての合理的意志を認めなければならぬ。我々の改造の努力が幾度か錯誤し、無效に歸したにしろ、歷史に於て、唯一回なりとも改造の事實があつたならば、改造の事蹟の先要條件としての合理的意志、從つてまた規範は承認されなければならぬ。こは科學の命題に幾多の誤謬があつても、或る種の命題が確實のものならば、命題を成立せしめる論理的先要條件が承認されざるべからざると同じである。一切の學說に於て、之を可能ならしめる論理的最小限が認められなければならぬ如くに、改造の事實に於ても、其の論理的最小限が、必然に認められなければならぬ。科學的眞理は凡て相對的である、改造は何れも一時的價値の實現に過ぎぬと主張する人あらば、其の人は、既に、凡ての相對的なる命題に唯一の例外を置いて、相對性の命題のみを絕對化する自己矛盾に陷つてゐる。

科學の命題の各に就いて、內容的に其の眞理性を決定することは困難である。之を同樣に、意志の遵奉する法則が個々の場合に於て、規範としての妥當性を有つてゐると立證することは至難である。併し歷史の進行にも拘はらず、其の權威を維持し來つた數學的命題がある如くに、我々の誤り多き意志決定に於ても、歷史の潮流に洗ひ清められて、益益其の光輝を增す合理的決定もあるに相違ない。科學の命題に於ても、社會改造に於ても、絕對的懷疑論と徹底的虛無

主義とは、我々の從來犯し來り、現在犯しつゝある過誤の列擧に依つて成立せず、我々の捕へ得た眞理、我々の實現し得たる價値なしとの積極的證明に依つて始めて成立し得る。而も斯かる積極的證明は、現實即合理の樂天觀に立つて、歴史に過誤なしと主張したヘーゲルと同樣の窮地に陷ゐる。歴史の絶對的過誤の證明の重荷を負擔する懷疑論者虛無主義者の姿程、世に憐れなるものはあるまい。而も今日、懷疑論者と稱し、虛無主義者を以て任ずる者が、反對說の抹殺に饒舌なるは、畢竟何に基づくのか。其の果しなき徒勞は、篩で水を汲む亡者の運命と同等でなければならぬ。

凡ての智識は經驗より由來すと主張して相對說を擁護せんとする者は、須らく此の主張が經驗的のものであるかを反省する必要がある。殊に「凡て」なる形容辭か經驗的のものであるかを反省する必要がある。所謂經驗論者、實證論者は凡ての智識は經驗より由來すと主張する一面、他の主張及び學說に就いて空想的だと攻擊する。併し此の場合に、論者は更に反省を要する。空想的な智識は經驗より來るか、はた來ないかと。若しそれが經驗より來るものならば、他の經驗から來る智識と同樣に確實なものでなくてはならぬ。若し之に反してそれが經驗より來ないものならば、經驗から來ないものゝあること其事が經驗論者に取つては不可思議でなくてはならぬ。蓋し經驗論に從へば凡ては經驗から來るもので、經驗ならざる或物があつてはならぬ筈である。若し經驗論が經驗から來らざる或物があることを經驗し得るならば、其の經驗論者は奇怪なる經驗の所有者でなくてはならぬ。即ち常人の經驗し得ざる物を經驗し得る特殊の經驗論者でなくてはならぬ。

經驗論者にして斯かるデイレマを脫しやうと思はゞ、凡ての智識は經驗より來るが、之に確實のものもあり、不確實のものもあると主張せざるを得まい、而して眞僞の批判に關する或る絶對的のものを假定せざるを得ぬことゝなる。若し經驗論者にして眞僞の標準に關する絶對性の承認を避けて、之も亦相對的なりと轉論せば、相對說の眞理其物も相對

的にして、從つて凡ての智識は經驗より由來すとの主張も眞僞保證すべからざることゝなり、自己自からを愚弄することゝなる。經驗說、實證說は斯くして相對說の當然として、認識論上の水掛論となり、自殺論となり了る。論者はカントの「智識は經驗と共に始まるが經驗からではない」との一語を玩味する必要がある。萬法流轉すと述べたヘーラクライトスも、流轉の法則其物が流轉すとは考へなかつた。進化の理法を發見したダーウィンも、進化の理法其物の進化は主張しなかつた。經驗論者も經驗其物の概念までが經驗的のものであると主張は出來まい。此の意味に於て經驗說と相對說とは、其が懷疑論と虛無主義に陷らないが爲めには、或る普遍的のもの恒常的のものを豫定しなければならぬ。

二

個人の個々の意志は、既に述べた如く、必ずしも合理的のものではない。從つて個人の集團たる社會又は國家の一般的現實的意志は、普遍妥當なる規範を遵奉する合理的意志たるとは限らない。而して、一般的意志決定が、個々の場合に於て、合理的意志決定なるや否やの判定は困難である。團體を構成する各員が、個々の偏見と我欲とを離れて公平に意志決定をなし、而も其の團體內に於て有力なる反對意志の表示なくして、一般的意志が作成さるゝ場合に於ては、殊に然りである。政治的教養ある或る國民又は自治體が、一般投票に依つて、大多數を以て其の意志を表示する場合の如き即ち之れである。併し概念的には現實的なる一般的意志と規範に遵ふ合理的意志を飽くまで區別しなければならぬ。二者の偶の一致は、未だ決して同一を意味しない。蓋し同一は分離の不可能を意味し、一致は分離の可能を前提する。ルソーの volonté de tous と volonté générale との區別は、此の見地より深甚の意義がある。今日の哲學を以て說明すれば、前者は集團各員の現實的なる集合的意志であつて、後者は普遍妥當なるべき規範に遵へる合理的意志である。

者を單に心理的の現實なる意志と解釋すべきではない。之は寧ろ倫理的妥當性を有する理想的意志でなくてはならぬ。改造の原理は、その價値の實現に關する限り、單なる規範でもなければ、此の規範を離れた單なる現實的意志でもなく、其は正しく規範に遵へる意志である。此の意志は心理學的に解釋せられたる個人的意志にも社會的意志でもなく、一の先驗的意志である。

自由とは現實的意志が規範に遵つて夫れ自身を合理化する過程に對する名稱である。自由は現實なる心理的の事實ではない。其はまた與へられたる儘の意志の性質でもない。自由は現實的意志と規範との關係の豫定に於て成立するものであつて、ロッチエの語を借りて云へば、其は“die Wirklichkeit d.r B ziehung”「關係の實有態」である。時間的空間的の意味の存在でも生成でもない。意志と規範との關係は、意志の規範に從ふ可能性と規範に從はざる現實性との二條件を包含し、從つて自由は二面性を帶びて來る。意志が規範に遵はざる現實態…其は外的ミリユーたることもあれば、カントの所謂「偏向」“Neigung”の如き内的ミリユーたることもある…を離脱することが「解放」“Befriung”であつて、之を自由と稱すれば、其は「或物よりの自由」“Freiheit von etwas”であつて、自由の消極面を構成し、更に意志が規範に遵ふべき可能態が現實化することが「或物への自由」“Freiheit Zu etwas”となり、自由の積極面をなすものである。若し人格を意志に關係させて、此の要素のみを高調して倫理的に解釋すれば、人格は意志の規範遵奉の可能態と規範背犯の現實態の二面の總括であつて、人格主義とは二種の自由を求むること、即ち或物よりの解放と、他の或物の實現とを要求することに依つて成立するに外ならぬ。

事實としての所與の儘の人格は、決して純粹價値ではない。從つて其は努力の對象とはならぬ。意志と此の意味の人格との關係からは改造の原理は成立しない。斯かる人格は或る價値の實現せられたるもの、別言すれば純粹價値の限定

である。之のみからは改造は不可能である。人格主義が主義として成立し得るのは、人格の現實態が或物…內的又は外的の…から解放され、他面其の內在の可能性を現實化する自由を條件とするに依るのである。されば改造に於ては、人格又は自由の概念を中軸とするにしても「何からの自由」"Freiheit wovon"と共に「何への自由」"Freiheit wozu"が重要となる。ノラは人形の家を脫出したことに依つて、未だ眞の自由を獲得しない。脫出は單に或物からの解放である。詳しくは外的ミリユからの解放である。未だ內的ミリユからの解放ではない。況んや「或物への自由」へは遼遠である、現今青年が解放を叫ぶ時、其の求むるものは外的ミリユよりの解放であつて、多くの場合は內的ミリユよりの解放でもなく、更に例外なく「或物への自由」ではない。外的ミリユよりの解放の結果、自己の氣儘の囚となつてゐる青年の如何に多いことであらう。物欲の解放が即ち自由ならば、我々はスピノザと共に「饒舌の婦人は其の饒舌なることに於て、醉漢は其の醉狂なることに於て自由である」と嘲らなければならぬ。

改造に於ける最必要事は、自由の二面を正視することでなくてはならぬ。或物よりの解放は未だ精極的の何物をも將來するに足らぬ。傳統的の凡てよりの解放を求むるに急にして、或物の精極的實現を閑却せし佛蘭西の十八世紀哲學は改造の原理となすに足らぬ。さればとて或物よりの解放を忘れて、ひたすらに或物への自由を求めんとすることは、眞の改造を不可能ならしめる。エマソン等の哲學的無政府主義は破邪の一手のなき顯正、破壞の勞を惜しむ空中樓閣の建設である。

三

此の種の無政府主義者は改造せられたる社會に棲息すべき生類であつて、改造すべき社會に於ては無緣の衆生である。

社會及び國家の改造は自律的なる實踐理性、一種の自由を求むる合理的意志に依つてのみ可能であるとしたならば、改造の第一歩は團體を構成する各員をして、他律より自律に、消極より積極へと進ましめることでなければならぬ。勿論自律的なる各員より成立する團體に於ても、支配と被支配との關係はある。其の團體が國家なる場合は、殊に此の支配と被支配との權力關係は著しい。政治の理想は人の支配に非ずして、單なる事務の處置であるとは、或る人々の抱く美はしい空想ではあるが、原罪とも認むべき人性本具の不合理的要素の存在は、斯かる空想の實現を不可能ならしめる。理想的の社會に於ては自利心と利他心とは何等の背馳なく完全に調和して、義務は遊戯化すると考へたスペンサーは、人性の不合理的要素の存在に敏感にして、道德とは此の要素との不斷の戰ひであると考へたカントに比して人性の理解が淺い。政治は、ヘーゲルの考へた如く、單に人類の合理性の所産ではなく、同時に不合理性の所産でもある。中世紀の政治學史の主要問題は、强制力を伴ふ政治と私有財産と奴隷制度との成立の根據如何といふことにあつたが、教父等の之に對する答案は、例外なく、人性に根ざす不合理的要素を原罪視することにあつた。政治は殆んど原罪とも見做すべき人性の不合理に依つて可能であるとは、人性：有りの儘の人性に於けるペツシミズムから當然に來たる結論であつた。政治は此の本具の不合理性の正視なくしては到底理解されぬ。クロポトキンの誤謬の本源は此の人性の不合理性の看過である。要するに彼の人性に關する樂觀說は必然に政治無用論に彼を導ひた。彼のみならず、無政府主義者は例外なく、人性に關する合理論者である。政治は「必要な害惡」だといふ。然り、政治は人性の原罪が相續する限り、我々の避くることの出來ない、同時になくてはならぬ害惡である。

既に云へる如く、改造は各人が自律的なることに依つて可能である。而も政治が支配と被支配との關係を意味する以上、眞の自律はあり得ない。こゝに外見上の矛盾がある。實際に於ては、文字通りに解釋した意味でのデモクラシイは

存しない。デモクラシイが民衆の支配を意味するならば、多數の民衆が支配した例は殆んどない。外見上の多數の民衆の支配は、豫め其の民衆が其の內の一小分子に依つて支配されたことを前提する。イタリイのセラテイはレーニンを評して云つた「彼はプロレタリアの獨裁政治を口にするが、其の獨裁政治はプロレタリアの一部が他の大部分に向つて始められた」と。然り實體は常に少數者の支配である。若しデモクラシイが自律を意味するならば、デモクラシイは政治ではない、寧ろ無政治である。何となれば、政治は支配と被支配とを豫定し、而して自律は支配と被支配との關係たる他律と兩立しないからである。完全なる自律は、自己支配從つて無政府を要求する。

併し之にも拘はらず、改造は各人が自律的なることに依つて可能なると主張せられたのは何に依るか。此の場合は完全なる自律、一切の支配を排除する意味での自律を意味しない。政治的に消極的なる要素が積極的要素と化することを意味する。或る國家が他の國家に比してデモクラチックなりや否や、一層改造の可能を有するや否やは、國家の分子が積極的なる程度如何に依つて定まる。普通選擧權を有し、政黨內閣制を有し、憲法改正の權利を有し、實にイニシアチヴ、レファレンダム、レコール等の權利を有する國民は、之を有せざる國民に比して一層デモクラチックであり、一層改造の可能を有することは疑がない。更に國民のデモクラチックなる程度の最も簡單なる測量は國民の政權の最小限の比較に依つて可能となる。今や代議士選擧權は文明國民の政權の最小限度である。之をだも有せざる我が國民は世界に類のない非デモクラチックであるといはざるを得ぬ。斯かる政權の最小限度までも拒否せられたる國民は、改造の最小の機會までも奪はれたるものである。世の普選反對論者…最右黨的及び最左黨的の…は云ふ、普選の實施に依つて政治の弊は絕滅しないと。之は普選權が政權の最大限と考ふる誤謬から來るものである。普選は政權の最小限度である、改造の機會の最小量である。之に依つて勿論多きを望むことは出來ぬ。併し此の最小限度の政權すらなくしては、國民は改

造の最小限をも希求することは出來ぬのである。米國の政治學者バーゼスは英米獨佛の憲法の比較研究に依つて國民の自由の保證の程度を考究した。斯かる研究に依つて國家のデモクラチツクの程度は頗る精確に研究されるが、政權の最小限の比較に依つて、日本と英國又は獨逸との改造の機會の程度が最も簡單に明かにされる。

四

政權の最小限の獲得は、國民をして消極的要素より積極的要素に化せしめる。政權の最小限の擴大と比例して、政治的要素の積極化は進行する。デモクラテイゼーションとは要するに消極性政治的要素の積極化を意味するに外ならぬ。政治的に積極的たることに依つて、我々は國家並に政府の施設に默從することの代りに、之を承認し得ることになる。一票の投票と共に、消極的默從は積極的承認と化する。勿論政治的に積極的なる要素は、否認權をも賦與せらるゝことになる。併し此の場合否認權は承認權と表裏してゐる。反對の自由なくして、如何に贊成の可能が成立しやう。國家の存在は、何人も、無政府主義者と雖も、之を否認することは出來ぬ。問題になるのは、國家の存在に關せずして、其の價値に關する。無政府主義者は、國家の價値の否定者である。從つて無政府主義者に對しては、國家の存在を指示し證明する千言萬言凡て無効である。無政府主義に對して有効な途は、國家の價値に關する論證でなければならぬ。換言すれば國家は其の價値の承認に依つて、始めて是定される。政治學の任務が國家の存在と發生との闡明にあるならば、政治哲學の任務は正しく、其の價値の立證であらなければならぬ。蓋し國家は單なる存在ではなく、正しく價値的存在であるからである。西南學派的に云へば、財であり、文化的所産であり、價値の實現である。ラスキ、コールの如き新らしき政治學者が、古き契約說に對して、承認說 consent heory を唱道するのは、政治哲學の中心問題が價値の

承認にあるからである。而して承認の最小限は投票權の行使に依つて可能となる。

デモクラチツクの國家とは、單に默認せられずして、積極的に其の價値が承認される國家である。改造の過程は、其が國家に關する限り、承認の過程である。國家が、又其の國家の意志を遂行する政府が、政權の最小限なりとも、之を有する國民に依つて是認せられることに依つて、國家又は政府の支配は合理的に成立する。國家の方針、政府の政策が投票に依つて、形式的に多數に依つて支持せられる時…形式的に云つたのは實質的には多く小數に支持せられることを意味する…政治は多數の支配といふ形式を取る。デモクラシイは此の意味に於ける多數の支配である。

多數の支配は、ラスキの如く實質的に見れば、主觀の多元を豫想しなければならぬ。多數が殆んど全員を網羅する場合には、外觀上普遍的であるが、其は未だ主觀的普遍以上に出でない。ルソーの言を借用すれば、volonté de tous であるに過ぎない。主觀的普遍は未だ客觀的妥當ではない。或る國家の現實的な一般的な意志決定は過誤に陥らないとも限らぬ。其は客觀的妥當を意味するルソーの volonté general ではない。多數者の絶對無過誤說は、羅馬法王の絶對無過誤說と同樣に、僭越な要求である。個人の現實的な意志決定が多く過誤に陥ると同樣、團體の現實的意志決定も過誤に陥らざるを得ぬ場合が多い。勿論團體的意志は個人意志の機械的集合ではない。人間社會に於ては、數學的總和としての多數意志、普遍意志なるものはない。併し、團體の意志が個人意志の機械的總和に非ずといふことは、未だ前者の無過誤を立證するに足らぬ。團體は此の場合淨罪火とはならぬ。晨にブルタスを喝采し、夕にアントニイを讃美する多數意志が無過誤ならば、眞僞の標準は意志の世界に適用しないことゝなる。故に我々は多數意志の無過誤を輕々に承認してはならぬ。眞理は夫れ自體に於て妥當なるものであつて、一人の承認者なくとも眞理は眞理であり、多數が承認しても、眞理ならざるものが眞理と化することはない。眞理は個人の村氣、民衆の喧噪を超越して夫れ自身の淸節を保

つてゐる。民衆は殘忍なる暴君なるか、然らずんば卑屈なる奴隷であると、マキヤヴエリーは云つた。眞理は、客觀的に妥當なる意志決定は、民衆に所依するものではない。

我々は多數意志の無過誤說を否認する。而も多數意志の支配するデモクラシイを要求する。我々はまた一の矛盾に陷つた、併し此の矛盾はデモクラシイの一層深き理解に依つて除去される。我々は多數意志の支配のみを高調するデモクラシイに比して、少數反對者の意志の尊重を條件とするデモクラシイを要求する。何故に少數者の意志を尊重するかと云へば、多數意志必ずしも無過誤ではないからである。"volonté de tous" が必ずしも "volonté générale" でないから、多數意志の過誤を訂正すべき因子として、動力としての反對の少數意志の可能的最大限の機會を要求する。少數意志必ずしも客觀的妥當を有しない。併し過去に於て如何に多くの眞理が少數者の維持より始まつたかは、歷史が實證してゐる。地動說、進化論等の科學上の眞理、立憲制、婦人解放、資本の公共化等の社會改造の要求は、何れも少數者に支持され始まつた。若し多數意志を神聖視して之に最大の機會を與ふるならば、社會の進化は不可能となる。蓋し社會の進化はイニシアデヴを取る個人又は少數者が多數の贊同を得る過程に依つてのみ可能である。別言すれば社會の進化は今日の少數者が明日の多數者たることに依つて可能である。多數の支配は勿論是認されなければならぬ。併し多數の構成する分子は常に新陳代謝さるゝことを要する。而して之は少數者の批評の自由、反對の寛容、イニシアチヴの機會に依らずんば不可能である。多數の支配が理想的となるには、夫れ自身に背反する要素を包含することを條件とする。多數の支配と反對的少數者の最大機會との外見との矛盾のみが改造を可能ならしめる。內的矛盾は、ヘーゲルの思推した如く、常に社會進化の動力である。此の種の矛盾なき社會は、硬化せる、死灰の如き社會である。故に社會と國家を理想的ならしむる條件は其の內的矛盾である。若しデモクラシイが政治の理想であるならば、個人のイニシアチヴ

の機會の可能的最大量を條件とする多數の支配でなくてはならぬとのヘンレイ教授の言は不磨の眞理を道破してゐる。若し個人のイニシアチヴの機會の最大限を要求することをリベラリズム（自由主義）と稱するならば、リベラリズムを內容として多數の支配を危殆ならしむる如き多數の支配が、理想のデモクラシイである。若し夫れ、リベラリズムとデモクラシイ、自由と平等とが互に相背馳するとのみ思惟して、「反對の歸一」の眞理に覺醒しない政治學者があるならば、夫はヘーゲルの唱つた Reflektions Philosophie の斷見に墮したものである。併し見渡すところ、此の種の政治學者ならざるものが幾人かある。

五

少數者の反對の機會の要求は多數意志の過誤の可能よりの必然の所産であるか、少數の機會の爲めには、比例選擧も必要であり、職業代表の制度も更に機能代表も亦必要である。比例代表は政治學者としてはスチユーアート・ミルの主唱に係るが、此は實に婦人解放の卓見と共に、彼をして政治學上、吾人類の社會改造の歷史に於て赫々の功績を擧げしめたものと云はねばならぬ。英米のデモクラシイが多數の支配の一面あつて、少數の機會の分量が少いのは、其の選擧制の不備の然らしめる所である。米國の現行制度に於ては、第一黨、第二黨のみが機會を得て、第三黨は有ゆる機會を奪はれてゐる、故にルーズベルトの進步黨の失敗も、社會黨の無勢力も凡て米國の擬似デモクラシイの結果である。紐育州に於て嘗て五割五分を得た共和黨の投票が、九割の州議員を送り出すが如き不合理は、容赦出來ぬ擬似多數者の專制である。ゴンパース派の勞働者が政治に斷念するも、I・W・Wが直接行動に走るも、米の擬似デモクラシイに依る諦めと自棄との結果と見做される。比例選擧は小黨分裂を結果し聯立內閣を將來すと、依然として舊式な二大政黨對立論を維持

する擬似デモクラットは、擬似多數に依る支配を要求する專政家であつて、斯かる政治學者の俗論が改造途上の妨害たることは今日の政友會以上たる時期があらう。

試に思へ、二大政黨交替の傳統を有する英國は、戰時中如何であつたかを。ブルジュワ二黨の妥協すら無力なりとして勞働黨とも提携した事實は、一大政黨の擬似多數の支配が如何に無力であるかを立證してゐる。聯立內閣を攻擊するに政局の不安定を以てするなかれ。佛國の如くA・B・C・D・E・F・G等の少政黨分立する場合、兩極の右黨的左黨的過激派を除外してBよりEに至る諸政黨が聯合するも、CよりFに至る諸政黨が聯合するも政治の大方針はさまで動搖するものではない。政治の舞臺に於ける登場人物の顏振れの變化は國是の動搖、政策の變更を意味しないことは、最近の佛國が實例である。同一政府が長く政權にあつても、國是動搖し、政策變轉したる場合に於ては、政治の安定は單に外面的である。閣員の顏振れの變化は佛國に於ては日本に於けるよりも甚だしいが、外交の方針は、彼の對獨外交の一貫と我の對支外交の昨是今非とを比較すれば、日本に於てより多くの動搖を認めなければならぬ。而もまた大觀すれば、此の動搖の世相に於て、獨り政局の安定のみを期する必要があるか。此の種の人は去つて菩提樹下に結跏趺座せよ。ツアールの滅亡、カイザーの逃亡は、世相の動搖を無視して、彼等が玉座に結跏趺座した結果でなくて何であらう。

多數の意志決定に過誤があるとの考慮は、比例選擧に依る少數代表を必要ならしめる。此の必要を無視する多數決神聖の聲は朕は國家なりと僣したルイ十四世の聲である。デモクラシイの國家に革命が發生するならば、少數者の機會を否定することに依らう。此の意味に於て、多數者の意志決定を直ちに普遍妥當の合理的意志決定と認める擬似デモクラットは、革命を教唆する者であると云はねばならぬ。

多數意志の支配の可能的過誤に對する考慮は、凡ての成文法の相對性を認めしめる。成文法の絕對視は、專制國に於

ても、民主國に於ても、現實的意志を理想的意志と同一視する誤謬から生れる。成文法の絶對視は被支配者の意志決定に何等の機會を與へざることゝなり、此の機會の拒否が有効なる時は、國家は常に舊態を維持する保守的なものとなり、そうして此拒否が無効なる時は、革命を誘發する。支配者の意志が、多數に依る場合にも、また少數に依る場合にも、被支配者の意志に支配者たる機會を合法的に賦與するに於ては、改造は常に合法的となり、革命の可能はあり得べからざることゝなる。何となれば合法的革命とは矛盾語であるからである。

トライチュケは其の著「政治學」に於て、革命權を否認した。彼の論據は革命權の承認とは、主權に代はる他の主權の承認と同義であつて、最高唯一不可分の主權の概念と兩立しないといふにあつた。然り成文法は革命權を規定することとは出來ぬ。而も革命が事實として勃發するのは、支配意志の絶對無過誤の迷信よりして、反對意志の一切の機會を奪ふ成文法の絶對性其物から來る。支配意志の過誤の可能は當然成文法の相對性を承認せしめなければならぬが、此の當然の承認を拒否して、成文法の根本たる憲法を固定的ならしめ、法の自己改造の一切の手段を封ずる時、成文法の相對性を實證せんが爲めに革命は勃發する。實に革命を有効ならしむる最善の手段は成文法のアブソリューチズム「絶對主義」であるのである　英國に革命、別言すれば非合法的革命なく、佛と露と獨とが斯かる革命を經驗した事實は、革命が成文法のアブソリューチズムに誘發されることを示すと共に、成文法の絶對化が事實的に不可能なることをも實證してゐる。故に革命を廻避する唯一の途は、成文法の絶對性の否認にあり、成文法の絶對性の否認は、支配意の：夫れが多數意志の場合であつても：可能的過誤の考慮に依らざるを得ぬ。而して又支配意志の可能的過誤の承認は、普遍意志の客觀的妥當の承認を條件とする

元來革命は歴史上の事實である。而して革命には歴史の進運を阻害したものもないではないが、又之を助長したもの

もある。佛蘭西革命もそうであつた。明治革新もまた素よりそうであつた。革命は歴史上の事實であり、功利的に見て有効なる革命もまた歴史上の事實であつた。併し政治哲學の任務は、單なる事實の承認、其の發生の條件と經路との認識ではない、寧ろ其は價値的立證である。政治哲學は凡ての哲學と同様に、事實の因果關係の攻究ではなく、事實の價値の批判である。發生の說明ではなく、妥當の立證である。

然らば從來の政治哲學は革命の妥當を如何にして立證したか。ロックは、個人主義より出發する天賦人權說に立つて、支配者が契約の本旨に背く場合に、革命權を擁護した。「反抗權」「天に訴ふる權」は個人本具の權利の恢復として擁護せられた。トーマス・ゼファーソンも此の意味の反抗權の擁護者であつた。個人主義よりする天賦人權說は、事實に於て革命を有効ならしめる××なる任務を果し來した。併し今日に於ては國家生活を豫想せずしての個人の權利なるものは疑問とされる。國家と法律と、何れが優先なるかが既に法理學上の重大問題である。シュタムラーは其著「經濟と法律」に於て法の優先を說いた、併し、眞理は國家を「規範的活動としての法」法を「被規範的狀態としての國家」（“Der Staat ist das Recht als normierende Aktivität, das Recht der Staat als normierte Zuständlichkeit”）と見做すラードブルヒの卓見に宿つてゐる。何れにしても、團體生活を豫想せざる個人本具の權利に立つて、革命權を擁護するは謬見である。

ルソーは一般に誤解せらるゝ如く革命權の擁護者ではなかつた。彼の思想は英のボサンケットと丁抹のヘフデイングとが夙に主張した如く、又佛のデユグユイが次いで主張した如く、革命佛蘭西の人權宣言とは沒交涉であつて、寧ろ契約的に成立せる社會の多數意志を神聖視し、之に服從を勸說した點に意義があつたもので、此の思想は彼に於て充分發展はされなかつたが、後にカント及びヘーゲルに至つて大成されたものであつた。故に或る意味に於ては、ルソーはカ

ント及びヘーゲルと共に革命權の否定者であつたのである。

カントは歷史上の事實としての契約は否認したが、契約に依つて成立せるが如き合理的なる國家を要求し、自己自からが立法に參與せる法律に服從することは自律であると考へ、自律即服從の所說を唱へた。而して彼は此の立場より革命權を否認した。勿論彼と雖も或る國家が革命に依つて發生した事實を無視することは出來なかつた。併し革命權を否認する彼は革命より發生した國家を否認せよとは主張しなかつた。却つて彼は、國家の起原を問題とせず、既に存在せる國家の價値の是認 "Rechtfertigung" のみを問題としてゐた。而して彼は自律の可能に依つて國家を是認し、革命權を否認した。ヘーゲルも亦、自由即ち必然なりと主張するもの、普魯西の一切の成文法と一切の制度を辯護せる革命權の否認者であつた。

我々は先に改造の原理として合理的意志の自律を高調した。然らばカントと共に革命權は否認せなければならぬ運命にあるが如くである。我々はこゝに革命權の立證を試みんとするものでないから、此の點には詳しく論及しないが、而も、國家生活に於ての自律即服從、自由即必然の主張に對しては、大に警戒する必要がある。國家意志は個人意志の數學的總和ではないが、而も實質的には當然に個人意志の自律を豫想しなければならぬ。而して國家の立法に於て行政に於て自律と服從とが一致するは支配意志に贊同する個々人にのみ限らるゝ。反對意志を代表する個々人に於ては服從は常に他律であり、決して自律ではない。自律と服從とが常に一致すべきを主張するは、政治が如何に其の理想的なるものに於ても、支配意志と被支配意志更に反對意志とに分裂するものである以上、反對意志の支持者に於ては、自律と服從とは兩立しないことを看過してゐる。國家が支配者と被支配者、反對者との總括體であるならば、支配意志即ち國家意志ではない。若し理想の政治が多數意志の支配と少數意志の反抗の可能とを包含するものならば、其は當然に自律と

服從とが一致する意志と、二者が一致せずして背馳する意志とを包含しなければならぬ。エリネックの云つた如く主權が「支配者」"Herrscher"の意志であるならば、斯かる主權と之に默從し又は反抗する被支配者の意志に依つて國家は成立する。國家に於ては支配者側から見て其の意志が合理的ならば、反抗者側の意志は不合理である。政治は不合理的要素の存在に依つて可能なるとは此の意味に於ても眞理である。改造は合理的意志と見做されたものが、所謂不合理的意志に取り代はらるゝことに依つて可能である。革命とは非法律的手段に依る意志の價値轉換である。然るに若しカントの如く自律即服從を主張すれば、革命權は否認さるゝのみならず、眞の改造も亦否認されることゝなる。蓋し改造は自律と服從とが一致せざると考ふる反對要素が…若しデモクラシイの國に就いて云へば…少數意志が多數意志となり、自律と服從との一致する境地に進み行くことに依つて可能であるからである。

六

革命が歷史上の事實であり、革命に依つて發達せる國家の存在もまた歷史上の事實である。政治哲學は此の嚴然たる事實の前に立ちて、單に天賦人權說とカントの革命權否認とを提出することに了るのみであるか。必ずしもそうではない。現に佛のエスメーンは國民生活の悠久なる價値の優先に依つて、成文法に表現せられたる國家の現實的形式を破壞する革命權を承認せんとした。彼に取つては、法は國民的生命に從たるものであつて悠久なる國民的生命は成文法以上の價値がある。國家の非常時に際して、狂瀾を既倒にかへさんと努力した志士は、自から法を破り刑辟に觸れてまでも、社稷を救はんとした。志士と稱せらるゝものは、何れも皆、エスメーンの反省なくしてエスメーンの學說を實行しつゝあつたのである。併しながら、エスメーンの學說は其の事實的有力にも拘はらず、革命權の是認としては、其の實

在論的見解の爲めに支持されない。蓋し現實の成文法の形式を離れての國民的生命の實在には、之を認識するに困難であるのみならず、如何なる場合に成文法を無視して革命權を行使することが、國民的生命に寄與し得るかも判定し難い。

此の故にデュグュイは更に別個の考察に依つて、佛人特有のソリダリテ・ソシアールの說に立つて革命權を擁護せんとした。彼に從へば國家の存立は夫自身最高の目的でなく、ソリダリテ・ソシアールを實現する條件として階梯として其の意義を有する ソリダリテ・ソシアールに於ける法的秩序は實在ではなく單に觀念的のものであるが、此の觀念的のものに所依してのみ現實の國家は其の價値と意義とが承認される。然るに若しソリダリテ・ソシアールの法的秩序に所依してのみ其の意義を有し得る現實の國家が、現實の國家の法制夫れ自身自己目的となり、即ち方便としての價値が最高目的の價値たらんとする時、こゝに現實の國家に對する反抗權がソリダリテ・ソシアールの立場より是認せらるゝことになる。彼は反抗權の行使に於て主として消極的反抗を擁護せんとしたが、彼の革命權の擁護論が、エスメーンの如く國家生活のリアリテートよりではなく、ソリダリテ・ソシアールのイデアリテートに立脚してゐるのは、素より學理上の進步である。而してデュグュイがソリダリテ・ソシアールの立場より、現實の國家目的を神聖視し、法は國家目的に從屬すとのエーリング及びエリネック一派の獨逸學者の國家觀を攻擊し、成文法に對してソリダリテ・ソシアールに於ける法秩序の價値の優先を主張したのは、彼の卓見であつた。

併し理論はデュグュイルに停止することは出來ぬ。筆頭更に一轉步を要する。支配意志の可能的過誤の考慮は、既に述べし如くデモクラチックの國家に於ける多數意志の決定に就いても其の普遍妥當に疑を挾ましめる。斯くて多數意志の決定に對して普遍妥當の法則を規範とする合理的意志の價値的優先の承認を餘儀なくせしめる。從つて一切の成文法は相對的のもの、自己改造の可能を含む類のものでなければならぬとの主張に根據を與へる。一切の成文法は相對性たる

べきに、之が絶對性を僭する時、其の內在の矛盾に依つて革命が生ずる。革命權の擁護の爲めに實在としての國民生活の悠久を說く必要もなく、又觀念的狀態としてのソリダリテ・ソシアールの法的秩序を說く必要もない。革命權は相對性なるべき成文法が絶對性を主張する時、das positive Recht に對する das gellende Recht 又は das richtige Recht の自己主張として必然に生ずる權利である。自然人としての人間に天賦の權利があるとの主張には否定を以て答ふべきだが、成文法の個々の形式を超越して妥當なる法的秩序本具の權利は神聖不可侵のものである。古人は之を自然法と稱して人爲法に對立せしめた。

併し斯かる法的秩序は自然ではない、否一切の實在性を有しない。然らば其は觀念性のものかと云へば、個人の心理に所依する觀念性のものではなく、即ち das ideal Existierende のものでなく、其は單に妥當性的 geltungsartig の もので、凡ての存在性を離れて夫自身を維持してゐるものである。絶對性を有すべきは獨り此の種の法であつて、之れ以外の…如何に多數者なりとも現實的意志の決定に依る成文法は凡て相對性のものでなくてはならぬ。革命は成文法の絶對性の僭取から結果する自己矛盾の排除である。假りに理想法を擬人視して說けば、成文法の權利侵犯に對する理想法の正當防衞權の行使である。ロックが「天に訴ふるの權」と稱したのは、正に理想法の正當防衞權に對する不完全なる理解に基づくものである。革命は成文法の側よりせば、一時絶對性を僭取した成文法が本來の相對性を恢復することである。相絶性の復辟運動である。革命が權利として承認せらるゝは、夫は新しき權利の主張としてゞはなく、喪はれたる權利の恢復である。革命權の論理的根據は、成文法の本來の目的の背反にある。別言すれば成文法の絶對性の僭取に依る自己矛盾と、此の矛盾の解除が、革命を權利として成立せしめる。

斯くの如く革命は成文法の本具の權利の喪失を前提とするものであつて、政治の失敗に依つてのみ可能である。革命は

政治の失敗なることは、戰爭が外交の失敗なると同樣である。戰爭の防止は各國の利益目的の相對視に依つてのみ可能なるが如く、革命の廻避もまた、成文法の相對性の承認に依つてのみ可能である。而して成文法の相對性の承認は支配意志…其が多數意志の場合に於ても…の可能的過誤の認識を必要とし、反對意志に合法的反抗の機會を與ふることを必要とする。別言すれば、リベラリズムを內容とするデモクラシイのみが、革命に依らざる改造を可能ならしめる。リベラリズムを內容とするデモクラシイは、法律の自己改造の機會を要求し、更に成文法の基本たる憲法の流動化を要求する。自己改正を可能ならしめる條項を包含せざる法律は、殆んど絶對禁止にも等しき改正難の條項を含む憲法は、成文法の相對性原理と相容れず、理想法の絶對性を僭することに依つて、革命を誘發する危險がある。革命は、擬人的に云へば、成文法の横暴に教唆せられたる理想法の非常手段である。若し反對意志、少數意志のイニシアチブの機會の可能的最大量を基礎とするリベラリズムが改造の王道であるならば、支配意志の横暴と成文法の絶對性の教唆に依る革命は改造の覇道である。

然るに見渡すところ、世界は、殊に我が國は、反對意志のイニシアチヴの有ゆる機會を奪ひつゝあるではないか。斯くて改造の王道たるリベラリヅムが甚だしく薄弱であつて、强力に依る非合法的革命權が主張されつゝあるが如き觀がある我々は規範を遵奉する合理的意志に改造の原理を認め、更に自律と服從と背馳せる被支配的又は反抗的意志に最大の機會を與ふるリベラリズムを內容とするデモクラシイに改造の王道を認めたのであるが、今日の日本に於ては以上の原理を如何に適用すべきか、改造の王道は坦々として開けてゐるか。改造の原理を說き來つた我々は今や改造の實踐について、我が國の政治の現實を正視しなければならぬこととなつた。

七

リベラリズムを内容とするデモクラシイのみが政治の王道である。被支配意志、少數意志に批評の自由、反對の機會が與へられ、更に之が合法的に支配意志、多數意志に轉化し得る可能の途が開かれる場合には、實現せる文化財の改價も、未だ實現せずして而も普遍的に妥當なる純粹價値の事實化も、期待し得らるゝ。勿論被支配意志が支配意志に轉化する過程は鬪争の過程を取る。此の意味に於て、社會進化は鬪争の形式に於てのみ可能であるとのギッデイングの言は正しい。併しリベラリズムを内容とするデモクラシイのみが、此の鬪争を合法的ならしめ得るのである。此の意味のデモクラシイは、シャデマン其の他の淺薄なる社會主義者等の考ふる如く、社會主義の單なる手段と考ふべきではない。寧ろカウツキーの考へた如く、よし社會主義が無理なりと假定した場合にも、人生の最高目的の達成の爲めに、之と同等の資格に立つ手段と考ふべきである。政治的民主々義と産業的民主々義との關係は、手段と目的との關係との目的と考ふべきものではなく、形式と實質との關係と考ふべきものである。可能なる理想的政治は、其の實質が如何であつても少數に機會を與ふる多數の支配といふ形式に依らずしては、想像されない。共産主義は專制政治に依つても可能なることはエンゲルスが夙に認めたところであるが、其は決して祝福すべきものではない。改造の覇道として、レーニンの場合に於てのみ××××べき現象である。嘗ては個人主義がリベラリズムの必要條件であつたが、今や國際社會主義がリベラリズムの必要條件であるとラッセルは云つたが、國際社會主義の實現其物がリベラリズムに依つて可能であるかの考慮を別にすれば、彼の主張には、リベラリズムの要求を最高と認める健全な政治的意識が含まれてゐる。「人民に依る」一面を無視した「人民の爲め」の政治が、enlightened despotism であるならば、「人民に依る」一面を無視し

た社會主義も亦專制主義の一種である。多數の支配と少數のインシヤチヴの機會を無視することに於て、共に改造の覇道である。

或は云ふであらう。リベラリズムの徹底はアナーキズムに導かざるを得ぬ、從つてアナーキズムのみが王道であると一應は尤もらしい。政治の理想は無政府であることは、刑法の目的が犯罪の消滅であり、醫術の理想が病患の根絶であるが如くであらう。併しかゝる豫想は、原罪にも比すべき人性の不合理性の閑却に依つて生ずる。政治は人性の合理性と共に其の不合理性の前提に於てのみ事實となつてゐる。アナーキストは、例外なく此の不合理性を無視してゐる。クロポトキンの無政府主義も、スペンサーとの思想的類同からの所産である。彼の特長は、インテレクチュアリストであり、ラショナリストであり、又フューチュアリストたる點にあつた。從つて道德の規範、政治の理想が自然法の如く理解なることの可能を信じた。彼はゾルレンをミュッセンと考へてゐた。彼は人間の背規範的自然性の永久性に對して深刻な體驗がなかつた。リベラリストは個人のイニシアチヴのみを重視し、從つて無政府主義に陷る傾向はあるが、此は個人のイニシアチヴが多數意志の支配に依つて限定されなければならぬことを忘れた結果である。人性の不合理性に敏感なる限り、我々は支配意志と被支配意志との對立を條件としてのみ政治が可能であり、政治の理想は此の對立より生ずる闘爭を出來得る限り合法化するにあることを閑却してはならぬ。元來政治生活は、宗教的生活や、哲學的生活に比しては、文化生活中の低級生活である。無政府主義に政治の王道を認めるのは、人性の不合理性に關する理解の缺乏と共に、政治生活以上の生活に對する無理解を證明してゐる。故に政治の王道はアナーキズムに導くリベラリズムであつてはならぬ。其は少數意志に機會を與ふるデモクラシイでなくてはならぬ。其は支配意志を多數意志たらしめ、而して兩者の闘爭を合法的ならしむることでなくてはならぬ。

八

今若し我が日本が以上に述べて來た政治の王道に依るとしたならば、日本の改造の方向は大體に於て豫定し得らるゝ。先づ急務の第一は普通選擧制の即行である。而して此の普通選擧制は大選擧區制に依る比例選擧を内容としたものでなくてはならぬ。一度無反省に英米流の普通選擧を實行すれば、少數者は機會を失ひ、リベラリズムの要求は無視され、我が國民は今日の普選運動の如き努力を再び繰り返さなくてはならぬ。比例選擧を内容とする普選の即行は、我が國の混沌たる政況に平定を與へ、改造の覇道を不可能ならしめるであらう。勿論今日の代議政治は單なる地理的代表の形式であつて、職業的代表は認められず、殊にコール等の要求する機能代表の理想には極めて遠い。將來は消費者又は使用者側よりの政治議會と生産側から産業議會との二院制の問題となるに相違はないが、現在の急務は、脊式ながら、比例選擧制を内容とする普通選擧制の實行にある。斯かる制度の實行は、理論の問題たるよりも實行の問題である。脊式とはいへ、デモクラシイは過去の各國の政治的經驗の教ふる所であるから、我々は此の高貴なる經驗を無視してはならぬ。普通選擧論を以て直譯論として笑つてはならぬ、我々は政治は、人性の不可理性を豫定するものであつて、之には單なる理論よりも過去の經驗を重視する要を認めるが故に普選の即行を要求する。勿論普選の結果は、一般の豫期する程の效果を生じまい。然し代議士選擧權は國民の政權の最小限たることを忘れてはならぬ。之がデモクラシイの極致でも實體でもない。必要なる第一歩であるのみである。

今日の衆議院が普通選擧制に依つて構成せらるゝとなると、政治の重心は衆議院に置かれるであらう。之が改造の第一歩である、勿論社會主義者は、衆議院中心の政治をブルジョアデモクラシイとして攻撃するであらう。併しブルジュ

ワ中心の政治は各國とも一度は免れざる運命である。英米のブルジョア、デモクラシイが不備だからとて、我が國に於て社會主義の實現を期待するは、莊子の所謂鷄卵を見て時夜を求むる類である。社會主義が資本主義の成熟に依つてのみ可能なることは、マルクス及びエンゲルスの夙に認めた所であつて、彼等は革命家であつても、彼の噪急者流の如く、革命の製作家ではなかつた。政治的デモクラシイをブルジョア、デモクラシイであると攻撃する論者の存在は、我々の理解する政治が、常に被支配意志、反對意志を條件とするとの我々の主張に、論據を與ふるに過ぎない。否、政治は不合理的要素を豫定するとの眞理を維持するに過ぎぬ。元來デモクラシイがブルジョアデモクラシイであるか、ソシアル、デモクラシイデあるかの問題かは、實質に關するもので、政治の形式としてのポリチカル、デモクラシイの問題には關係がない。ポリチカル、デモクラシイとソシアルデモクラシイとは形式と實質との對立として意義があるが、實質的對立としては無意義である。

普通選擧を基礎とする衆議院に政治の重心が移動すると共に、今日の貴族院と樞密院とは存在の意義を喪つて了ふ。代議政治に於ては、一院制は種々の弊害が伴ふから、何等かの形式に於て二院制は保存すべきものである。勿論終局はコールの想像する政治議會と産業議會との二院が地理的代表と職業的代表の意味にて成立すべきであらうが、我が國の現狀は斯かる制度を必要とする程度に進んでゐない。從つて、我が國の二院制は、政治的能力の代表といふ意味よりも各種の生活階級と各地方の利害とを代表する衆議院と、政治的能力を代表する少數者よりなる上院とを包括するものでなければならぬであらう。上院の構成は米制の如く直接選擧に依るべきか、佛制の如く間接選擧に依るべきかは、更に攻究の餘地はあるが、今日の如く政治の能力を代表せずして、無能力と怠慢とを代表する華族議員及び政治的に退役した後備軍としての勅選議員等より構成せらるゝ貴族院は、根本的に改革を要することは明瞭である。而して上院の構成

に於て政治的能力の代表を目的としても、地理的の代表のみとすること米制の如くするか、之に多少職業的代表を加味して、各大學の代表者、勞働組合の代表者、資本家の代表者等を交ふるかは之れ又攻究の必要がある。而して上下兩院は米制の如く權限に多少の相違あらしめることも、議事の敏速と政治の能率上の必要であらう。又三權分立も今日に於ては學說上舊きのみならず、實際の政治に於ても不便少くないから、司法權の一部も議會に賦與されなければならぬ。

立法部の民主化に次いで必要なるは行政部の民主化である。最近革新俱樂部及び一部政友會員間に問題となつた地方長官公選の如きは即行すべきである。元來立憲主義は地方より中央に及ぶが順序であるから、地方行政の民主化は中央行政部の民主化に先だつて必要である。日本の任命政治は今日に於ては不徹底となつてゐる。高等文官及第の官吏は局長以上となれば政黨の色彩を附けられて、內閣の交替と共に、其の運命は頗る不安である。而して地方長官も此の政黨的色彩を帶びざることは不可能である。之を帶びざらんとせば、積極的に事功を樹つるよりも、小心翼々失敗なきを期するの外はない。元來任命政治の本質は政黨政治を超越する點にあるが、今日に於ては之は望まれない。從つて地方行政に於ても政黨政治を徹底せしめて、公選主義に依るべきである。政黨政治にも幾多の弊害はあるが、政黨政治と官僚政治との矛盾より生ずる政治よりも弊害は尠ない。

地方長官の公選に就いては、種々の懸念が起り得る。第一は地方長官が政治の素人となつて、政治の能率が上らないとの懸念である。併し此は無要の杞憂である。地方行政長官は地方議會、日本に於ては縣會の執行機關たるべきものであつて、特別なる黑人政治家たるを要しない。政治が民主化する場合には、政治の素人であつても民望を負ふて局に當る方が、民望を背景とせずして黑人政治家が局に當るよりも。政治の能率が上る、而して公選に依る地方長官の任期は成る可く短期にして再選の餘地を與ふることゝしたならば、政治の固定化を防ぎ、黨弊を避くることが出來る。こは米國

の新英國の諸州が立證してゐる。例へばマサチューセッツ州の如きは知事の任期は一年であるが、米國の他の諸州に比して政治は遙かに健全である。又地方長官は縣會の多數黨の横暴が縣民の利福を害する場合の防衛として、一定の制限の下に否認權を有しなければならぬ。地方長官の否認權は、其が縣會に依つて選出せられず、一般縣民に依つて選出せらるゝが爲めに、縣會の多數の意志と沒交渉に發動し得る。之れデモクラシイに於ける"check and balance"の妙諦である。公選主義に依る場合には素人政治家に多くの機會を與ふる懸念はあるが、此の懸念は單に地方長官の場合にのみ適用するのみならず、縣會議員にも、國會議員にも、又議會の多數を背景にする政黨内閣の閣員にも適用するものであるが、地方政治の場合に於ては、長官の任命に依る專門家よりなる調査會の設置に依つて、素人政治の弊を避けることが出來る。縣の立法部たる縣會も素人政治家を以て滿され、行政の長官も亦素人政治家なる時は、專門家の調査に依る報告を基礎とし、立法部にて立案し決議し、行政長官にて執行すれば差支ない。地方議會内の委員會も、亦斯かる調査會の任務を果することが出來る。日本の中央政府にて設置する各種調査會、例へば外交調査會、教育調査會、經濟調査會等は政府の責任分擔の機關であつて、政府の官吏が大部分專門家であり、調査員の方が却つて素人たる有樣であるから、調査會の能率の上らないのは寧ろ當然である。

國會及び縣會議員の選擧權は國民の政權の最小限であるから、政治の理想は之を以て滿足することは出來ない。是非共イニシアチヴ、レフレンダム、レコールの實現に進まねばならぬ。而して此は地方政治より始めて、漸次に中央政治に及ぼすべきである。ルソー始め多くの政治學者は徹底的デモクラシイは小國に於てのみ可能でありと云つたが、此は大國なりとも地方政治に於ては實行可能なりと云ふことを意味する。自治體の政治並びに縣政に於て一層の獨立と自由とが與へらるゝならば、政治の劃一主義は打破され、農業地には農民の勢力を中心として、工業地に於ては、獨逸のザ

クセンに於けるが如く、工場勞働者の勢力を中心として、夫々各地方の事情に依つて政治が行はるゝことゝなる、殊に地方政治に於けるイニシアチブ、レフレンダム、レコール等は地方長官の否認權と相待つて地方議會の腐敗を防ぐに有效である。米の上院議員ジョンソンが太平洋沿岸鐵道會社の惡辣手段に罹つて腐敗してゐた州議會を革正するに、知事の否認權と州氏のイニシアチヴ、レフレンダム、レコールを利用して成功せる例が之を證明してゐる。

九

次に現今最も重要視されてゐる勞働問題の解決も、リベラリズムを内容とするデモクランイに依つて解決の方向が暗示される。徹底的社會主義は地上何れの國に於ても實行不可能である。政治の覇道に依つて或る階級又は團體が政權を獨占すれば、實行は或る程度まで可能であるが、デモクラシイの基礎からは不可能である。否、實に不可能なるのみならず、不必要であり、有害である。社會主義の眞理其物が疑問である以上、改造の王道は飽くまで漸進的でなくてはならぬ。我々の子孫に何等の課題も遺さない様な社會問題の徹底的解決は不當な僭越である。政治的デモクラシイが必ずしも共和制たるを要しない如く、産業的デモクラシイは必ずしも社會主義たるを要しない。日本の今日の社會の病患が社會主義の即行に依つて醫せられると想像する人々其人等が實は重病患者である。社會の弊害の一は、患者が醫師と錯覺して投藥せんと力むるにある。斯かる人々は社會問題の主體たるべきものではなく、實は客體たるべきものである。重大なる社會問題の一は、斯かる錯覺者を如何に處置すべきかにある。

革命は疫病の如く傳播する。佛蘭西革命が米國の共和制の原因となり、維新革命が倒滿興漢の革命の動力となつた。近くは一九一七年三月の露國革命後一ケ月にして獨逸社會民主黨内の戰爭反對派は公然獨立社會黨を樹立し、一七年十

一月の露國過激派革命に後るゝ三ヶ月に足らずして伯林には勞兵會が公然と出現した。一九年三月の匈牙利の勞農會制共和國、同年四月の巴威の勞農會制共和國の成立は、何れも永續はせざりしも、露國過激派革命の餘波であつた。從つて飜譯革命も可能なる場合がある。併し之には政治的經濟的條件の類似を前提とする。大化の革新は土地均分の儒敎思想の飜譯革命であつた。之が成功したのは土地問題の解決が唯一の社會問題の解決たりし經濟的事情の類似に依つたのである。露國過激派革命も、政權の獲得と維持とは、巴里コンミユーンの飜譯であり、土地問題の解決は佛蘭西革命の徹を踏んでゐる。露國革命の眞相は農民革命たるにあつて、資本主義の發達に依る社會主義の實行とは沒交涉である獨逸多數社會黨員のみならず、獨立社會黨員（現今二者合體して統一社會黨となる）には、資本主義の發達せる西歐、及び英國に社會主義が實現せず、露國に實現したるは、マルクス主義の强味とならぬと認めてゐるものが多い。又舊獨立社會黨の學者ベルンシユタイン、ヒルフアーヂング、ストレーベル、諸氏は獨逸革命が露西亞革命の如くならざりしは、前者に於て農民が小ブルジヨア的であつて革命の要素たらず、後者に於ては農民並びに大部分農民よりなれる軍人が革命の要素となり得た爲めであると見做してゐる。否、獨逸の農民のみならず、工業勞働者も、所謂プロレタリアの獨裁政治に反對してゐたことは、革命後間もなく伯林に開かれた全獨勞兵會が五十對四百の大多數を以て一九年一月十九日に國民議會を召集することを可決した事實に明かである。露西亞革命の有ゆる影響にも關せず、獨逸に於て革命が徹底せざりしは、一に政治的經濟的事情が異なつてゐた爲めである。今や獨逸の統一社會黨は其の政綱より「階級闘爭」なる文字を除き、土地問題に就きては定見なく、單に石灰とカリと水力との國有を主張するのみである。（鐵道は革命後國有になつた）從つて飜譯革命の可能には大なる制限がある。

果して然らば、日本に於て露國の革命を直譯的に輸入せんとするが如きは愚も亦甚だしい。レーニンの軍[illegible]光を信

する某々主義者の如きは、大本教信者の筆の光を信ずるよりも愚である。後者は事幽冥界に關するものなり、前者は眼ある者ならば明かに看取し得る現象に關するからである。露國に於ては、小作人が貴族及び地主の土地を分割することに於て、革命の目的は大部分達成せらるゝに反し、日本にては五割以上の國民が農業に從事しつゝ食料の不足に苦しむ體たらくであるから、土地問題の解決は大した意義がない。日本に於ける土地問題の解決は、露國の如く土地所有の不平均と共に、又は其れ以上に、土地の不足を考慮してのみ可能である。

日本の社會狀態は決して單純でない。封建時代の現象も呈してゐれば、近代の資本主義的社會の面目をも呈してゐる從つて王道に依つて日本を改造するには、社會の多樣相に應じて各種の主義及び政策の併用を必要とする。産業の發達の程度に應じて、國有官營にすべきものもあり、國有にして而も關係者の自治に任ずること、現今の帝國大學の經營の如くすべきものもあり、又半官半民の經營にすべきものもあり、私有にして政府の管理を加ふること戰時中の英國の炭山、鐵道の如くすべきものもあり、又純然たる民有民營にすべきものもある。現今の狀勢にて國有事業を增したりとて、政黨員をして政權と共に財權を私せしむる機會を與ふるのみである。陸軍海軍は神聖なる國家事業なるも、薩の海軍長の陸軍の觀ありしは何の狀であるか。國有財産にても私有財産の如く取り扱ひ得べく、私有財産も公有財産の如くなし得べきものである。憲法の×××××××、×××××××××××××××、××××××が政治の重心となりつゝある。之と同樣に私有財産なりとて、使用人の敎養の程度如何に依つては之を公共化することが出來る。日本にても財産權を有する資本主が實力を有せずして、重役專政の大會社もある。之れ獨裁政治より寡頭政治又は貴族政治への轉化に類してゐる。故に使用人にして其の敎養向上し團結鞏固となれば、利益配當の要求も、株の分配も、更に代表者を重役として選出することもあり得ないことはない。profit-sharing co-operation, co-partnership 利益配當より共

同監理への道か、産業的デモクラシイの進むべき道である。

更に勞働者に於いて考ふるに、近代プロレタリアの性質を有するものは、工場法其他の勞働法の如き産業的欽定憲法を以て滿足せず、團結の力に依つて自己の運命を解決し、少くとも資本家の勢力とバランスを保ち、更に階級鬪爭に依つて階級の撤廢に進むものもあらう。併し勞働者の或る者が此の道を進み得るとて現在産業的欽定憲法に依つて保護さるべき種類の勞働者があることを忘れてはならぬ、織絲工業に關係せる女工の如き之である。其他の今日の所謂勞働問題の內容をなさゞる各種勞働者にして法律に依らざる溫情主義の對象たるものもあらう。殊に近海の漁業に從事する自前の漁業者の如きは、頗る悲慘なる境遇にあり、而も歐米諸國に類なき程の多數なれば、之が運命の救濟も特別の考慮を必要とする。此の問題の解釋の如きは直譯論にては全然不可能である。以上の考慮は我が國の社會問題の解決には單なる一主義を以てすることを不可能ならしめる。

最後に國家社會主義の方向に進むに當つても、國有にすべき富の性質を明にしなければならぬ。露國に於ては土地が最大の富であるから、之を國有にするも分有せしむるも、社會問題の中心は土地問題である。然るに獨逸に於ては、土地問題は第二義となり、鐵道國有後の今日、アルサスローレンスの鐵鑛を喪失せる今日、社會黨は石炭とアリと水力の國有を當面の問題としてゐる。然らば日本に於てに何を問題とすべきか。石炭の如きは二三十年も掘れば盡きて了ふから、國營にすることは疑問である。獨逸のルール地方の炭量が千二百億噸で、一年一億二千萬噸（戰前の採炭量）を採掘しても千年を保つのとは、比較にならぬ。日本の土地に就いては、之を國有にすべきか、はた土地兼併の弊を防止する立法に依つて、土地均分の方向に向はしむべきかは、考慮を要するが、何れにしても大した差はあるまい。余は寧ろ日本の富は人力と水力でなからうかと思ふ。少くとも土地資本と共に人力は富を作る源泉であるから、人力を國有にし

て、新しき富を作り出すことに力めなければならぬ。軍備縮少に依つて退職軍人の不平を招くよりは、寧ろ軍備を擴大して、其の大部分を生産的に使用すべきではないか。ブルガリヤは平和條約の規定數以上の壯丁を徴集して、其の一部をして道路、橋梁の修築及び土地の開墾に當らしめ、戰後經營を容易ならしめた。昔時支那に於ても富は農産物と人力であつたから、此の二者を租税とした。其理は古くして新らしい。日本は須らく人力を徴發して、住宅改良、道路改良、下水工事、鐵道の廣軌改築等に利用すべきである。余は戰敗の獨逸を見て羨望したものは山林と住宅と鐵道網とであつた、日本にして人力を強制的に徴發することは、生産的事業の上に便利なるのみならず、一朝有事の際、工場動員を有效ならしめる。而して人力の徴發に就ては。今日の有權者の如き納税階級は無償とし、無納税階級へは相當の賠償をなすべきである。水力の國有と統一とは石炭の不足を補ひ、鐵道の電化、農業改良等を可能ならしめるであらう。水力は私有とならざる部分多く、人力に至つては蘇東坡の江上の清風と明月の如く、自由に使用し得る狀態にある。二者は石炭の如く一定量を有せず、人の産れ來る限り、雨水の降り來る限り、盡ざるものであらう。人力と水力とを利用すべき資本は今日の税律を重くし、民間の大産業を國有にする事に依て一部は得らるゝか、更に大に國債を起すも一策であらう。

一〇

以上はリベラリズムを內容とするデモクラシイの王道に依る改造方針である。而も如何せん今日の支配階級は政權の最小限たる普選權すら拒否しつゝある。換言すれば、國民に向つて覇道を教授しつゝあるが如くである。大政黨も暴力團を利用し、社會主義者も過激派の暴力政策を讃美しつゝある。殺すを嗜まざる者以て王たるべしと云つた孟子の王道は嘲笑され、殺すを嗜むもの以て王たるべしをモツトーとしつゝある、雨後の筍の如く發生しつゝある結社は何れも暴

力國たるべき色彩を、濃淡の差こそあれ、有してゐる。而して朝日某、中岡某の如く、國體を背景にせざる暴力覇者の實行者もある。「一夫村」ツアールを始めとし執政以來百五十萬餘を犠牲にせる露國過激派は勿論、革命の徹底の爲めには少くとも九十萬を死刑にせざるべからずと豫定したるロベスピールの先例もあるから、此等は直接間接に日本の暴力團を刺激してゐないとも限らぬ。而して此の暴力鬪爭に勝利を占め、覇道を實行し得るものありとせば、其は國際社會主義を信條とするプロレタリアではなく、勞資の階級的鬪爭乃至は妥協をいまいましいと考へ、國家本位の立場より、日本の國際的地位の考慮より出發する軍人（日本の軍人は官僚、資本家にせず、又プロレタリアにも非ず）を中心とする愛國黨であらう。而も此の愛國黨の信條は國際間の現狀維持を豫定する微温的退嬰的社會主義に非ず、ムソリーニよりも實に數歩を進めたる進取的なる現狀打破的なる帝國主義的社會主義であらう、凡て覇道の實行に於ては、實行の方法も共に、其の主體を重大問題とするが、斯かる主體は自然に形成さるゝ形勢がある。覇道の方法は問ふべからず、其は未だ不立文字である。寧ろ覇道の覇道たる所以横道の横道たる所以は、不立文字たる點にある。日本の重大問題は土地の均分に非ず、國有に非ず、實に擴大である。現在の富の共有に非ず、寧ろ創造である。富の分配の不平均のためにプロレタリアの侵略的行動の是認さるゝならば、何故に物資の不平均を理由とするプロレタリア的國家の侵略が否認されなければならぬか。而して此の軍國主義的社會主義の準備の爲めには、工場動員の必要からも、人力國有が先決問題であらねばならぬ。日本に覇道の實行を促がすものとしては、國外に米國の對日本的外交の不寛容あり、國內に權力者のリベラリズムの拒否がある。誰か自から好で坦々たる王道を棄てゝ、崎嶇たる覇道を進むものがあらう。蓋し止むを得ざるものがあるからである。我々も亦王道の信者にして而も覇道を說く、之れ佛心にして魔手を弄するに比すべきである。嗚呼成文法の絕對性の簒奪！覇道の血染の花道を進むべき新日本の悲壯にして而も華麗なることよ！

都會文明から農村文化へ

室伏高信

(一)

都會文明から農村文化へ。私はこゝに社會問題の歸着點を見出しつゝあるものである。そして更に、社會問題の方向よりもより以上のものをこの點に見出さうとしつゝあるものなのである。

後に述べるであらうように農村に流行はあり能はぬ。農村問題は流行を超えて考へねばならぬ。今日の謂ふところの農村問題とは流行の農村問題である。革命家にとつても反革命家にとつても、彼等の謂ふところの農村問題とは流行の農村問題である。それが果して何ものに價ひするであらうか。反革命家にとつては農村問題とは農村救濟の問題である農村は救はねばならぬ。農村は飢えてゐる。小作人だけがそうであるのではなくて自作農もまた飢えてゐる。地主でさへも將に行詰らんとしてゐる。飢えたる農村は救はねばならぬ。反革命家の農村救濟は地主の救濟以上に出ることができないかもしれない。それさへも今日は必要であるごとくに見える。しかも農村はかくして救ひうるであらうか。謂ふところの農村救濟とは農村絞め殺ろしに終ることではないであらうか。革命家は農村問題において何ものを見つめてゐるか。私は農村問題が小作人問題に始まることに何の異論もない。都會においての階級鬪爭を否認することはできないごとくに農村においての階級鬪爭を否むことはできぬ。私たちは戰はねばならぬ。仆れるまで戰はねばならぬ。來るべき時代は天から忽然として落ちてくるものではないとしたら私たちは戰つてとらねばならぬ。しかも戰は戰ひに價ひするものでなくてはならない。農村階級鬪爭は農村問題の初めではありうる。最後の解決者でありうるであらうか。最後の問題は遠く隔つた問題であると思つてはならない。最後の問題を心に描くことなくしては凡ての鬪爭は人間に價ひす

ることはできない。社會問題が人の心を鼓舞することができるとしたらそれはたゞなる制度と方法との問題から救はれねばならぬ。私は農村問題は階級闘爭に始まりながらもそれに終つてはならぬと考へてゐるものである。農村問題が革命の問題に高められたことはロシヤ革命以後のことである。ロシヤ革命は農村問題において躓づいた。ロシヤ革命は五周年以上を過ぎて尙ほ存續しつゝある。將來も尙ほ生きるであらう。私はロシヤ革命に失望しない。そこから善きものの多くが流れ出るであらうことを信ずるものである。獨逸からでなく英國からでなく勿論殖民地的な米國からではなくてロシヤから善きもの美しきものゝ多くが流れ出るであらうことを信じてゐるものである。だからロシヤ革命が躓づいたといふたら私の言はんとするところが誤まり解せられるであらう。私の言はんとするところはマアクス主義が躓づいたと云ふことである。ロシヤ革命は五周年を越へた。そして將來も生きるであらうと私はいふた。マアクス主義が幾何殘つてゐるであらうか。マアクスは彼等にとつては神である。共產黨宣言は彼等にとつては一つのミイスである。しかも基督教の歷史がイエスの心から遠ざかりきた記錄であつたがごとくにロシヤ革命はマアクスから益々遠ざかりゆく記錄ではないであらうか。マアクス主義はロシヤ革命によつて證明されたのではなくてそれによつて試めされたのではないであらうか。農民問題においての躓きがこれでなかつたであらうか。新經濟政策はマアクス主義であると何ものの大膽がいひうるか。それは一時の退却であるか永遠の退却であるか。辯護することも非難することも何の價をももたない。新經濟政策は或は成功であるであらう。新經濟政策が成功だとしたらレニンが喜びマアクスが悲しむであらう。ロシヤ革命はそれによつて救はれたであらう。それなくしてはロシヤ革命は既に死滅したであらう。ロシヤ革命が生きてマアクス主義が滅びつゝあるのではないか。私は農民問題についていふてゐるのである。ロシヤの工場において何ごとが行はれてゐるかを知らぬではない。農民問題においてロシヤ革命の中心を見なくてはならないと云ふてゐるのである。社會階級をブルヂョアとプロレタリヤとの二大階級に分析することが社會進化の必然の行程のうへから正しいか否かをここに問はない。ロシヤを見よ。ロシヤ革命はブルヂョア對プロレタリヤにおいてその中心を求めることができるか。ブルヂョア階級はそこに支配階級として有力な組織であつたかどうか。プロレタリヤ階級は巴里コムミユウンのように

「自然に國民會議のうには多數を制することができたかどうか。ブルヂョア階級がそこに無力であつたがごとくにプロレタリヤ階級がそこに微弱ではなかつたであらうか。ペテログラアドもピイタア大帝によつて造られた町である。ロシヤに幾何の都會人口があつたか。大工場が今日國家の經營のもとに立つてゐることは事實である。マアクス主義はここに憐に殘つてゐる。ロシヤの人口は一億五百萬である。大工場勞働者は八十萬である。八十萬のプロレタリヤは共產黨宣言の謂ふところの人口の「巨大なる多衆」であるか。この八十萬こそ疑もなくロシヤ資本主義の全遺產である。こゝにおいてラデックの所謂タアトの社會主義は眞理である。彼は社會主義時代におけるイソクラテスである。――Die Entwicklung des Sozialismus von der Wissenschaft zur Tat――書物の名前であつてロシヤ革命の名前でもありうる。マアクス主義者はロシヤ革命の經驗によつて科學から行動への社會主義を說かなくてはゐられなかつた。しかもロシヤ革命は更に異質な他の一つのものを發見しなくてはならなかつた。ラデックがイソクラテスであるならレニンはソロンである。ソロンはより多く現實的なものゝ發見者であつた。農民階級の發見がこれであつた。農民階級の發見はレニンが力强く高調したごとくにロシヤ革命の偉大な收穫であつた。マアクス主義の試めされたのはこの點である。そは農村問題について何の準備をもゝつてはゐなかつた。そは都會的社會主義であつた。都會の城壁を越へて考へる力をもつてはゐなかつた。ロシヤ革命がマアクスに始まつてマアクスを越へなければならなかつたのはこのためである。そは都會に始まつて都會を越へなければならなかつた。社會改造の問題は都會に始まつて都會を越へねばならぬ。こゝに社會問題の深化が橫たはる。都會は都會を越へてゐる。農村問題は農村を越へて考へねばならぬ。しかも社會問題はその深化の段階において都會を越へて考へねばならぬ。こゝにたゞなる制度と方法と權力との社會運動は第二義にと落ちなくてはならぬ。社會問題は所謂社會問題以上のものに繋がらねばならぬと云ふのはこのためなのである。一社會主義者の言葉を憶ふ――Je weiter die moderne Arbeiterbewegung fortschreitet, desto offenkundiger wird es auch, dass der Sozialismus nicht nur eine politische Machtfrage, sondern eine Frage der Gesamtkultur ist.

――人々は全文化の問題に眼を注がねばならぬ。

（二）

世界史は都會史である。シペングラアのいふてゐるとほり、Weltgeschichte ist Stadtgeschichte である。山中暦日なきごとくに農民は世界史の圏外に孤立してゐる。農民は歴史喪失である。都會人は歴史人である。世界の發達は都會の發達である。世界史は都會史であるがゆえにそれはまた都會膨脹史である。そこに文明の諸相が横たはる。文明とは何か。ミユラア・デイアの「文化の諸相」に從へば農業と牧畜の時代は野蠻である。農工商業の時代は文明である。野蠻から文明への推移は農業から工商中心への推移なのである。從つて農村生活から都會生活への推移なのである。山村水廓の原始生活からアテネのロオマの若しくは近代諸都市のキウイスの生活への推移なのである。それが文明である。文明人である。アリストオトル流に論ずると、それだけが「人」なのである。人は生れながらにして都會に住む動物である。都會に住まざるものは野蠻人若しくは文明の程度のごく低い人たちである。人とはキウイスである。私たちはこゝにヘレニック文明の勝ち誇つた驕慢哲學を見うるのである。アテネの盛時には二十七萬の人口がこゝに集まつた。文明を追ふ凡ての人は大都市にと集まつてゆく。大都市は人口を喰らう場所であるごとくに野蠻人をキウイスに變へてゆく。ロオマ帝國の全盛時においてはロオマの町は六十萬の世界都市であつた。近代都市はロオマの復活である。あらゆる意味においてロオマの復活である。ロオマ文明がロオマの世界都市において要約されたように近代文明は倫敦、紐育、伯林、維也納、巴里、ペトログラアド、若しくは東京の世界都市において要約されてゐるのである。世界を通じて、歐羅巴でも亞米利加でも亞細亞でも亞弗利加でさへも、農村に對する都會人口の割合は近代文明とともに非常な勢をもつて増大してきた。十七世紀に人口五十萬の都會であつた倫敦は今日は人口七百萬の世界都市である。歐羅巴を通じて十九世紀の初めには人口十萬以上の都市が十四しかなかつたのをその世紀の終りには百四十となつた。一世紀にして十倍になつたのである。或國では全人口の半ばは、既に都會人である。或國では全人口の四分の三は都會のうちに住むでゐる。世界の各國はかくして都市の各國となりつゝある。敗殘の墺太利を見よ。維也納の一都市を除いて墺太利に

尙ほ何ものかゞ殘されうるであらうかを思へ。世界の各國は都市の各國であるごとくに世界は世界都市の世界である。文明とは都市の獨裁政治である。世界文明は世界都市の獨裁政治——Diktatur des Weltstädtes——なのである。ロシャの半野蠻國において、尙ほ農村の動かすべからざる基礎が殘されてゐることを疑へと云ふのではない。かるがゆえにロシャは革命前においてブルヂョアの獨裁政治、從つて都會獨裁政治が存在するまでに至らなかつたのである。またかるがゆえに革命後においてのマアクス主義的プロレタリア獨裁政治、即ち新らしい都會獨裁が存在することができないでゐるのである。しかも野蠻若しくは半野蠻國の一部において何ごとがあまされてゐようとも世界を大觀せよ。世界都市の獨裁政治が或は濃厚に或は稀薄に全世界に行はれつゝあることの事實を拒むことはできまい。私は農村に流行はないと云ふた。農村の原理は都會生活と根本的對立關係に坐してゐるのである。しかも今日、かくのごとき農村が世界に幾何あまされてゐるか。山間避村と雖も文明の及ばぬところとてはこの地上から殆んどなくなつてきた。文明は境を知らない。われ〳〵を支配してゐるものは何ものであるか。政友會であらうか。官僚若しくは軍閥の徒であらうか。それともマンチエスタアの商賣人であるか。倫敦、巴里、紐育、伯林、若しくは東京の世界都市であるか。世界の爲替相場は何人によつて若しくは何のために變動しつゝあるか。その變動がわれ〳〵の日常生活を支配しつゝあるのは何のためであるか。われ〳〵自身とは遠く隔つた何ものかの偉大な力があつて外部からわれ〳〵を日々に支配しつゝあるのではないか。佛蘭西軍がルウルを占領した。その新聞電報が直に日本の市場において染料工業の景氣を挽回したことに文明の微妙なる働きを見ることができないであらうか。その染料工業の景氣回復は農村から幾何かの勞働者を都會に集め若しくは農民の衣服生活をとほして幾何かの絞り取を及ぼさずして止むであらうか。われ〳〵はこの意味に於て多かれ少かれ巴里に住み、倫敦に住み、若しくはマンチエスタアに住むでゐる。またこの意味において農民も今日は文明人である。都會は都會を越えてゐると云ふたのはこの意味にほかならぬ。都會文明が農村生活を支配してゐるのである。農村の都會化なのである。田園都市を見よ。文化村なるものを見よ。それは都會の農村化ではなくて田園の都會化である。文化村ではなくて文明村なのである。愚かなる農民は文化村を彼等の隣りのごとくに思つてゐる。それは彼等の隣りではな

くて彼等の餌である。農村の都會化は都會の農村征服である。經濟的及び精神的征服である。即ち農村の都會崇拜及び都會の農民搾取である。小作人を直接に搾取しつゝあるものは勿論地主であらう。地主だけが小作人の搾取者であるか。自作農を搾取するものは何人であるか。自作農は何故に貧しいか。田園に米麥よく實つて農村の疲弊すると云ふのは何故であるか。私は農村は飢えてゐると云ふた。田園に灌漑なくして農村が飢えてゐるのではない。米麥實るも實らざるも農村の病むは何故であるか。農村は病んで死なんとしつゝある。田園に出で丶見よ。到るところに瀕死の村の病床に横たはるのを見るであらう。それが文明なのだ。文明は農村を飢餓線に陷れてゐるのだ。都市は吸血鬼である。世界都市は世界的吸血鬼である。都市は農村の血をすゝらねばならぬ。食物と原料とをもたない都市は農民の汗と油とを吸はねばならぬ。金、機械、ラビッシな工業品。都會は何ものかの斷路をもつて農民を欺くことを知つてゐる。無邪氣なる農民は幾何かの金を與へられて富は貨幣のうへにあると考へてゐる。煙草を作る農民は、それをもつて幾何かの金に代へる。煙草は都會に送られてそれに紙片を卷きつける。そして再び農民の手に歸つてくる時に卷煙草の名によつて農民の懷中を搾取する。原產煙草は農民の汗と油である。卷煙草は搾取者である。原產煙草は野蠻であり、卷煙草は文明である。野蠻とは原產煙草を吸ふことであり、文明とは卷煙草を吸ふことである。今日は農民もまた卷煙草を吸ふてゐる。故に農民もまた文明人である。その意味において農村人もまた今日は一種の都會人である。鐵道線路が縱橫に敷かれる。農民は鐵道を神のごとくに崇拜する。政友會は農民の弱點を知ることにおいて何ものよりも鋭敏である。政友會は鐵道を地方民に與へて勢力を擴大しつゝある。政友會が勢力を擴大することは農民が勢力を擴大することではなくして農民がより多く欺かれてゆくことである。鐵道は農民に何ものを與へつゝあるかを思へ。政友會が益々榮えてきて農村が益々疲弊してゆくのは何のためであるか。鐵道がいよ〳〵普及して農村がいよ〳〵疲弊してゆくのは何のためであるか。政友會が農村の搾取者でなくて何んである。鐵道が農民の搾取者でなくて何んであゝ。政友會が與へるためにでなくて奪ふがために存在してゐる如くに鐵道は農民に與へるためにあるのではなく都會に奪ふがために存在するのである。原產煙草を農民の手から奪つて卷煙草を農村に送る爲に鐵道は存在してゐるのである。都會が農村を搾取する最も

有力な機關の一つを鐵道と云ふのである。鐵道、汽船、飛行機、電信、電話、郵便、新聞、科學、議會、政黨。田園搾取の機關は今や完備に近づいてゐる。こゝに都會の獨裁政治が存在するのである。私は今日の世界都市はあらゆる意味においてロオマの復活だと云ふた。ロオマ帝國はロオマ市民から租税を徴取することをしなかつた。その意味においはロオマは自由市である。ロオマ市民は自由民である。ロオマの自由民の傳統を近代に復活した卒先者は佛蘭西のチュルゴウである。商工業税の免除を求めたのは彼の政治であつたからである。私たちはこゝに都會獨裁の最も露骨なる傳統が、文明の精神を離すこととなく流れつゝあるのを見る。そは世界都市の獨裁政治において爛熟の域に達した。世界都市は世界文明の爛熟の證明である。今日は正にその時代なのである。世界都市が世界に君臨する。マンチエスタアの商賣人が日本の農村を搾取しつゝある。社會問題が都會を越へて考へねばならぬごとくに農村問題は農村を越へて考へねばならぬ。再びいふ、農村を搾取するものはたゞなる地主ではない。地主は搾取し、そして搾取される。小作人を搾取しながらマンチエスタアの商賣人に搾取されつゝある。農村問題を考へるものは地主だけが敵であると思ふてはならない。農村の敵はまた遠くマンチエスタアにある。小作人の手によつて作られた米は地主の土藏の中に入つてゐる。地主が搾取者であることはあまりに明白である。しかも米が地主の土藏の中にあることは米があるのではなくて商品があることである。商品の目はマンチエスタアに向いてゐるやうにマンチエスタアの目は凡ての商品に向つてゐる。米の一部は地主の腹の中に、他の一部はマンチエスタアの商賣人の懐中にと入つてゆく。私たちはそれゆえに常にマンチエスタアを見つめねばならぬ。世界都市が何故に太つてゆくかを見つめねばならぬ。從つて文明を見つめねばならぬ。文明の全伽藍を見つめねばならぬ。再び Gesamtkultur の問題に面しなくてはならぬ。そは恐ろしいほどの大問題である。文明が何千年の間われ〳〵を支配してきたことであらう。希臘文明が、ロオマ文明が、若しくはアラビヤ文明がわれ〳〵の生活の中に織りなされてゐる。學藝復興からでも既に五、六百年、産業革命も既に一世紀を越えて記錄されてきた。ニユウトンの三百年祭はこゝ二十年のうちにきたらんとしてゐる。アダム・スミスの二百年祭は正に今年である。古き文化の年齢は永續し、新らしき文化の生命は短い。新らしければ新らしいほど短命であることが文化の歴史の教ゆるとこ

ろである。その短かるべき現代文化もかくして既に久しきを生きた。常住坐臥、それは深く私たちの生活のうちに織りこまれてゐる。クロウチエの Historiography に從へば凡ての眞實な歷史は現代史であると。凡ての文明史は少くとも文明史である。現代に面することは文明史の全流に面することである。こゝに文明に對立することの恐ろしさがある。文明それ自身は後に述べるであらうように無恐怖である。文明に面することは恐怖である。一つの Furchtbarkeit である。しかもラスキンの言葉はまたわれ〳〵の叫びでなければならない。—— Raise the v il baldly, face the light ——大膽に面紗を脫して光に面せよ。そこに眞實の自由が生れるであらう。ラスコルニコフが最後に西伯利の監獄のうちにあつて冷たき獄屋を「自由」と観じたことを思へ。

(三)

都會の獨裁政治は文明の獨裁政治である。都會は文明の場所である。世界史が都會史であることはまた文明史であることである。歷史は今日においては文明史である。バックルの英國文明史を讀むことなくして文明を論ずる人は少くないであらう。彼は歷史を形而上學や神學の祭壇から科學の低くに落とした。There can be no history without the natural science's ——自然科學なくして歷史はあり能はぬとは「英國文明」の第一卷の冒頭に特筆された有名な一句なのである。それが彼にとつては「獨創」であつたのである。この種の獨創家は歐羅巴中を探し步るいても三人か四人しかなかつたとは彼の言葉である。その時から六十餘年を過ぎた。バックルの謂ふところの獨創家は相嗣いで世界に湧出した。エッチ・ヂイ・ウエルスの「歷史の梗概」は文明史中の文明史である。文明史とは何ものであるか。民族史と對立して考へることが便利であらう。民族史と文明史とは調和すべからざる二つである。世界史を如何に分折しても民族史とはならないように民族史を如何に集めても文明史とはならない。英國の國史に從へばウオタアロウの戰はウエリントンの勝利である。獨逸の國史によればブリュウフアの勝利である。世界史は獨逸の國史でもなく英國の國史でもないごとくに如何なる民族の歷史でもなく、またその綜合でもない。民族史は民族精神の記錄である。從つてその要部にお

いて神秘であり傳說でもある。少くともそは民族的ヒロイズムなくして存在することはできない。世界史は如何なる神秘でもなく傳說でもなくヒロイズムでもない。そは世界精神の記錄である。從つて科學である。從つて文明の記錄である。ウエルスの「歷史の梗概」を見よ。そは如何なる民族の記錄でもなく如何なる部分精神のドキユウメントでもない。地球の創生に始まつて世界合衆國建設の除幕に終つてゐる。從つて如何なる民族の歷史よりも長くまた如何なる記錄をも越へてゐる。神秘なるものは科學の法廷に曝らされ、特異なる者は一般化の前に姿を沒してゐる。こゝに文明史は科學である。證明と一般化とが文明史の特質である。神秘にして特異なのが民族史である。特異なるものは神秘である。一般化は證明の世界である。民族史が證明すべからざる特異の記錄である如くに文明史は證明されねばならぬ一般化の跡である。

都會史の特質は都會の特質である。文明史の特質は文明の特質である。文明の特質はそれゆえに證明と一般化とである。都會がそれを代表するのである。都會は「世界」である。星學上の世界がケルビンのいふように二千五百萬年の年齡であるか。ハックスレイのいふとほり四億年であるか。若しくは十六億年であるかは私の知らうとするところではない。そは人間世界の歷史ではなくして岩石の歷史であるからである。人間の「世界」は岩石に比べたらまだ幼兒である。その意味において人間の生命は地球の歷史上における一つのエピソオドであるに過ぎないであらう。星學上の世界と社會學上の世界とを區別せよ。文明史は科學である。そは星學上の世界創生に始まらねばならる。世界創生があつて動物があつて野蠻時代がある。その間が二千何百萬年であり若しくは十六億年である。文明はその後にきたる。都會とともに文明はきたるのである。そは社會學上の概念であるからである。しかも文明史が科學であるごとくに文明も一つの科學の世界である。證明と一般化の世界である。再び文明は境を知らない。境を知らざることが文明である。甲の村乙の部落、若しくは或る種の民族の間に特有なものは文明ではない。そこに如何なる美しい精神の花が開いてもそれが乙の村、丙の部落、若しくは他の民族にも共有され若しくは共有の普遍性をもつてゐるものでなくては文明ではない。たゞなる文化は文明であることはできない。文化の本質は靈魂の表現であることである。一つの文化は靈の統一である。一つの民族は Einheit der Seele なのである。それゆえに經驗世界ではなくして超經驗世界の所產なのである。こゝに

おいて文化の最も本質的なものは宗教と藝術とである。私は神學を含めてゐるのではない。神學は宗教でもなく科學でもない。私は本質宗教と藝術とを云ふてゐるのである。一つは敬虔の感情である。一つは靈魂の美的表現である。卽ち原始感情である。宗教と藝術とがあることなくしては文化はあることはできない。宗教と藝術とが榮える時代は文化の時代である。宗教的精神の旺溢とゴシック藝術の燦然たる光を見ることのできた中世紀はこの意味において正に文化の時代であつたのである。それは證明の世界を超えてゐる。何人も宗教と藝術とを證明することはできない。それは質の世界である。靈性の世界である。個性の世界である。個性を如何やうに集めても國家とはならない。靈性を如何に綜合しようとしても知識となることはできない。量の世界の如何に精妙巧緻なる機械をもつてしても質の世界を測ることは不可能である。科學者マックスウエルが「我在り」は自然科學の對象にはならぬと云ふたことを思へ。神學と科學との戰ひをもつて宗教と科學の鬪爭だと解する科學者の淺薄さはこゝに問題とするには足らぬ。科學は神學を征服したであらう。國家は教會を征服したであらう。宗教的感情は抑壓することのできるものであつても永遠の火であることを失ふものではない。靈性の抑壓は精神の機制である。しかもそは靈性そのものの破壞ではなくてその表現の拘束である。今日はその時代である。精神の機制が靈制を拘束することが現代文明である。科學と宗教とは並び立つものであるとする位ひ屈辱的な妥協はありえない。科學は宗教的感情を死滅せしめるためにはあまりに無力であるにしても宗教的表現を破壞すべく最大の武器ではありうる。ロオマ帝國の偉大をもつてしても宗教的運動を如何ともすることはできなかつたが近代科學は一歩々々宗教的表現を征服し近代的精神の機制をもつて中世紀的靈性の王國をこの地上から驅逐したのである。こゝに宗教と科學の一致ではなくてその兩立すべからざる對抗が存在するのである。カアライルの言葉でいへば宗教の世界は Everlasting. Yea の世界なのである、科學の世界は Everlasting No の世界なのである。前者は神を愛する。後者はいふ、Behold, thou art fatherless, outcast, and the Universe is mine. ――科學は自由思想家である。一切の傳說、一切の神秘から自由である。「我在り」と云ふ時に科學にとつては「我」とはたゞ數學上の對象である。概念上の問題である。科學は心をもたない。冷めたい知識の網である。質の世界ではなくて量の世界である。神の國ではなく

て數學の國である。この世界においては宗教でなくて實踐道德以上に出ることはできない。藝術は美的生命の躍動ではなくて機械の作用である。心なき機械の作用である。寫眞、蓄音機、活動寫眞。それが科學時代の藝術なのだ。ルネサンス以後の藝術の生命なきことを見よ。ロオマ獨裁政治のもとにおける藝術がアカデミシズムを出ることができなかつたがごとくにルネサンス以後の近代藝術の生命なきを見よ。ウヰリアム・モリスに從へば希臘と中世との藝術は謂ふところの substansive art である。ロオマと近代の藝術は adjective art である。カッピスの「光の哲學」に從へばゴシックは靈と光とである。ルネサンスは物質の藝術である。前者は文化である。後者は文明である。科學に心はないごとくに文明に心はない。心なきことが文明なのである。そは靈の統一ではなくて機械的秩序である。精神及び物質の機械的秩序なのである。文明は機械そのものではない。近代的機械なくしても文明はありえたのである。しかもそは機械の發明によつて完成する。農村は靈の場所である。都會は機械の場所である。文明とは機械をもつて萬物を尺度しようとするのである。機械をもつて靈魂を封鎖し、神を抹殺し、藝術をたゞなるマテリイにまで墮せしめるのである。鐵道、電信、電話、汽船、飛行機、新聞、國家、議會、政黨、國際聯盟、インタナショナル、エスペラント、爲替關係。文明は世界のあらゆる部分から特異なるものを破壞し、個性を蹂躪し、世界を一つの機械的統一にともちきたしたのである。東洋と云ひ西洋と云ふ。地理學的境界をほかにしてどこに西洋と東洋との境があるか。われ〳〵は日本人だと云ふ。人類學上の問題をほかにして何處に日本人があるか。今に尙國體論を云々し國粹を叫ぶものがある。國家に傳說がありうるか。國家に神秘がありうるか。私は民族は靈の統一だと云ふた。民族は國家ではない。國家は機械的秩序である。國家主義と傳統主義とは兩立すべからざる二つである。國家主義をとるものは傳統主義を捨てねばならぬ。國家とは何か。內閣、議會、法律、裁判官、政黨を見よ。「日本」の何ものがそこに殘されてゐるか。官僚政治にしても、軍閥政治にしても、若しくは政黨政治にしても、一つとして日本の傳統であるものはない。政治の世界には「日本」の何ものも殘されてゐない。軍人が國粹主義を唱へる。自らを顧みよ。洋服を着て月給を貰つてゐる軍人に「日本」が殘されてゐるか。資本家が國粹黨の兵站部であると云ふ。資本主義に民族性がありうるか。社會主義がインタナショナルを創設したので

はない。資本主義が先鞭をつけたのである。International Capitalism があつて International Revolution があるのである。資本主義は最も多く國際的である。前代の如何なる文明よりも包括國際的である。ロオマ文明は地中海を遠く出でることはできず、希臘文明はガンヂス河を越へることはできなかつた。文明の完成、從つて一般化の完成は機械の力に俟たねばならなかつたのである。近代文明が前代の如何なる文明よりも高度の文明であるのは機械の發達が機械的秩序の發達をもちきたしたためであるにほかならぬ。三度いふ、文明は境を知らない。文明の時代は「世界」の時代である。民族史の時代が去つたごとくに今や民族の時代は去つた。民族的特性は世界的なる機械的秩序にと併呑された。世界を一周して見る。世界は何れに行つて見ても同じである。柳は今に綠、花は今も尙ほ紅。自然の風物に相違はあるであらう。その自然の風物さへも文明は大半これを征服し盡した。沼澤は埋められ山は崩された。紐育へ行つて見ても、倫敦、巴里、伯林へ行つて見ても、若しくは東京へ歸つても、そこに何等の本質的な相違はない。文明が、從つて西洋文明が亞米利加を開拓し、南洋に都市を建て、日本に煉瓦造りを並べて、全世界を征服し盡した。星學上の地球は文明史上の世界となつた。世界は統一された世界となつた。アレキサンダアも、アウグスツスも、ナポレオンも、カイザアも、成吉汗も、世界を統一することはできなかつたが、文明は今や殆んど隅なきまでにこの地上を征服してそこに嚴かに君臨しつゝある。この巨大なメキヤニズムを見よ。それが文明なのだ。文化ではなくて文明なのだ。特異ではなくて一般なのだ。人格ではなくて機械なのだ。目的ではなくて手段なのだ。光ではなくて物質なのだ。外部的生活の内面的生活を支配することを文明と名づけるのである。

（四）

外面的生活の二つの動力は金と權力とである。文明史はその要部において經濟史と政治史とである。金が最初から人間の社會に用ゐられたのでないごとくに政治もまた最初からわれ／＼の世界に存在してゐたのではない。われ／＼の祖先は久しい間無政府共産主義の時代に住むでゐた。政治もなく金もなき世界に住むでゐた。政治を必要とせず金も必要

としない社會に住むでゐた。金が最初に發明されたのは紀元前七世紀のことである。この發見のごとく大きな發見は曾つてこの地上に存在したことはなかつた。或學者は金の發明を蒸汽機關の發明に比較してゐる。蒸汽機關の發明の効果の偉大であつたことは勿論である。しかも其は金の發明の効果の補助的なものと見ることはできないであらうか。金は私有財産を産んだ。金は原始的共産主義を破壞した。金がかくのごとき巨大な革命を成しとげたのは數十年の短い間の經過だとされてゐる。都市國家は最早や Landstadt ではない。即ち農民都市ではない。農民都市は Stadtmensch n の場所ではなくて却つて Landmenschen の場所なのである。都市國家の時代は貨幣經濟の時代である。都市とともに金があり、金とともに都市がある。こゝに職業が分化して賣買を職業とするものが出てくる。商人がそれである。商人は金の人である。都會が金の場所であるごとくに商人とは金の人である。それゆえに商人こそ眞正の都會人である。都會精神の最も根本的なものは商賣人精神であるにほかならない。こゝに金が人を支配する。金の階級の存在することは金なき階級の存在することである。金は不公平である。不公平であることが金の本質である。金は階級を造る。アリストオトルは體力勞働を卑しめた。彼は體力勞働は人間を墮落させるといふた。體力勞働は奴隸のことである。自由民は科學藝術の人民であると彼はいふた。奴隸の勞働を搾取しながら金の階級ができた。金の階級の發生は職業分化をいよいよ複雜にした。ソフヰイストは職業學者の嚆矢であるといはれてる。職業軍人が既に希臘の時代に存在した。彼等は金によつてのみ行動した。本國であつても外國であつても、苟くも金を與へるものがあれば劍をもつて仕へた。イソクラテスのようなヂヤアナリストさへも既に希臘文明の産出したところであつた。こゝに政治が生れた。政治の需要は金錢の効果とともにあつた。部落生活の時代は血族と共産の時代であつた。この時代には政治は何の需要もなかつた。權力需要の社會的原因が存在してゐなかつたからである。われ〳〵の社會の最初の革命家は金であつた。金が鄕士を破壞し、血族團體を破壞し、社會經濟階級をこの地上に押したてた時に權力なくして秩序を維持することはできなかつた。ソロンは希臘の革命家であるといはれた。その革命家ソロンさへも四つの經濟階級を彼の社會の改革の基礎となした。財産のあるところに權力がある。權力なければ財産であることはできない。何故なら財産とは法律によつて保護された

利益でなければならないからである。金は階級を造つた。階級は不正義を産むだ。ロツク曰く、財産なくして不正義なしとはユウクリツドの證明のごとくに正確な命題であると。ユウクリツド幾何學の基礎は動いてもロツクのいふたことは動かない。その不正義のあるところこそ政治のあるところなのである。繰返していへば金のあるところに都會がある。都會のあるところに階級があり、不正義があり、そして政治がある。政治とは純粹に都會の產物である。眞の農村に政治はあり能はぬ。政治は都會に始まつて都會に終るのである。都會は polis といはれた。polis から politics, polity, politician, political party が生れたのである。都會が血族を超えるごとくに政治は血族を超える。それは最早や血族觀念ではなく地域的觀念である。クライステネスの選擧區制度は近代的國民政治の基礎を開いたといへるだらう。政治は地域的であるがゆえに集中的である。權力は常に求心力である。中央集權的であることが權力の本質である。デセントラリゼエシヨンは權力分化であるとともに反權力である。中央集權主義はボルシエヴヰキとともに存在するのでなくて政治とともに存在する。史上において中央集權の最も發達したのはロオマである。ロオマが中央集權の國であつたことはロオマがプロレタリヤの國であつたからではない。プロレタリヤが人口の大多數を占め、そしてその手に政權を掌握した時は最早や巨大なる國家機關が必要でないとはマアクス・エンゲルスの考である。ロオマに巨大な權力の必要であつたことはロオマが金の國、金權階級の國であつたからである。ロオマの盛時に富豪階級は二千人であり、奴隷の數は六千萬人だと云はれる。二千人の利益において六千萬人を壓迫するのである。こゝにロオマはアウグスツスの獨裁政治を生み出さなければならぬ社會的經濟的必要が存在してゐたのである。ロオマ法の精神はアウグスツスの奴隷國の精神なのである。そはベンテイの指摘してゐるとほり善き人を惡しき人のうちに住ませることではなくて、富める人が貧しき人のうちに住むことを可能にすることである。ハイネに從へばロオマ法とは惡魔のバイブルであるにほかならぬ。ロオマは一面において軍人と法律家の國である。法律家は俠客でないごとくに職業軍人は騎士ではない。軍人とは何か。Soldat とは金錢の支拂をうける人の謂である。ロオマの政治の墮落は世間周知の事實である。墮落なくして政治はない。墮落することが政治の本則なのである。何故なら政治は金の場所の產物であるからである。ロオマでは徵稅權さへも賣

買の目的物であつた。法律と軍人の國であつたロオマはその根底において金の國であつた。外國貿易は勃興し商事會社は盛んに設けられた時に公會堂は政治のためよりも却つて株式取引所のごとくに用ゐられた。劍と商賣とはロオマを富ました。ロオマは富んで細民は路上に飢えた。伊太利の野獸は歸つて眠るべき洞穴をもつてゐた。平民はたゞ空氣と日光とをもつてゐた。家もなく定住の場所もなくて彼等は妻子とともに轉々として流浪し歩るいたのである。こゝに、ロオマの獨裁政治は金と金持階級の獨裁政治であつたことを知るのである。

近代世界都市はあらゆる意味においてはロオマの復活だと私はいふた。中世紀の公正價格の代りに再び利潤が勞働の動機となつた。宗教と藝術との代りに金が再び最高の道德にまで高められた。金が凡ての都會を造るごとくに近代都市の創造者もまた金である。ゾムバルトの「ブルヂョア」はブルヂョア精神の研究者の何人も逸すことのできない好著である。彼の集めた資料のうちから私はこゝに一節を借りよう。—— Die Geldsucht ist eine Urhebrin der menschlischen Gesellschaft; Macht Ehebündnisse; Macht Freundschaft und Bündnisse; Errichtet Staaten und Städte; Sie erhält sie auch in Stande; Verschaft Ehre und Achtbarkeit;.....Freude und Ergetzlichkeit; Sie befördert Künste und Wissenschaften......Den Kaufhandel,...Die Alchymie, Geldmacherey,...Die Artzneykunst: ——貪慾が人間社會の創造者なのである。結婚、友情、社會、國家、都市、地位、名譽、喜び、藝術、科學の創造者は貪慾なのである。金は神である。文明のかゝわる範圍においては金は神である。金は宗教を買ふ。今日の宗教は買はれた宗教である。金は藝術を買ふ。ブルヂョア藝術がこれなのである。金は女を買ふ。賣淫がこれである。金は人を買ふ。賃銀勞働者と月給取りとは買はれた人である。買はれた人は文明人である。文明人は金によつて繋がつてゐる。ショウのメエヂヤ・バアバラのうちにあるように現代文明においては金と生活とは分つべからざる二つである。富とは効用ではなくて交換價値である。金である。ラスキンの言葉でいへばギニイの價値をその所有する馬や田園によつて計るのではなくて馬や田園の價値をギニイの數によつて計るのである。都會人は金造り—— money maker ——である。生產をするのは勞働者のことである。食物を造くるのは農民のことである。都會人は金を造る。猶太人は昔から西洋の到る

ところで輕蔑されてゐる。しかもイエス時代から金造りになれてゐた猶太人は文明の製造者である。富める猶太人が世界を支配しつゝあるを見よ。猶太人でなくても猶太主義が世界を支配しつゝある。世界都市を見よ。それは猶太人と猶太的マムモニズムの場所ではないか。私は伯林にゐた間に一日マックス・ベイア君と唯物史觀について話したことがあつた。彼は猶太人であつた。鼻の線、應接の態、彼は典型的な猶太人の一人であつた。彼曰く、猶太人でなくては唯物史觀のほんとうの理解者であることはできないと。私は彼のこの一言を彼の鼻とゝもに今に忘れることはできないでゐる。しかも今日の文明人、都會人、金の人は、猶太人であるとないとにかゝわらず唯物史觀の理解者であるべき一切の資格を備へてゐる。猶太人が故郷喪失の人種であるがごとくに、世界都市は民族喪失である。倫敦には常に二十萬の外國人が往來してゐると云ふが伯林には十萬の猶太人がクルヒュルステンダムの富者街を獨占しつゝある。猶太人が一定の土地に定住する人民でないがごとくに都會人は流轉の人である。彼等は自己の家を所有しない。所有慾が極度に發達しながら自己の住むべき家を所有しないのが常である。都會人は借家人である。世界都市人は借室人である。隣人は何人であるかを相識するのは農民のことである。都會人は彼の隣人を知らない。隣人は外國人である。若くは少くとも九州、北海道の僻遠の人である。それが泥棒であるか掏兒であるかも分らぬ。夕刊新聞によつて初めて彼の隣人が掏兒であり泥棒であり國粹會員であり若くは社會主義者であることを知る。新聞がなくては彼等の世界は交遊の數人であり十數人である。數十人を出すことは滅多にない。その幾人であつてもそは友情と友情、戀愛と戀愛との關係ではなくして主として金と金との關係である。「貪慾が友情を造つて」ゐるからである。貪慾が友情を造る。友を捨て、故郷を捨て、父母と妻子さへも捨て、都會に上る。野心ある青年は一日も故郷に止まつてゐることはできぬ。金は價値があるからである。「成功」は價値であるからである。そして金と成功とは都會によつて製造されてゆくものであるからである。成功とは何か量的觀念である。一人が成功して幾人かゞ失敗する。一將功成るためには萬骨枯れねばならぬ。乃木大將が「軍神」となるために幾千萬の犧牲のあつたかを思へ。質の問題は何のかゝわりもない。善きものを造ることは成功の道ではなくて安價なものを多量に造くることがそれである。安價であるためには多量生産でなければならぬ。多量消費のためには

一般的宣傳方法をとらねばならぬ。廣告、特に新聞廣告がこゝにある。新聞は一つの魔術師である。虛僞を眞實にし、醜婦を美人に化する。農民に新聞は用なき紙片である。新聞の發達は都會の發達の結果である。新聞は金の紙である。金なくして新聞はありえない。新聞紙は都會文明の日々の記錄である。文明人は新聞を讀まねばならぬ。成功せんとするものは新聞を利用せねばならぬ。新聞は一地方を他地方に、田園を都會に接續すべき精神的最高機關である。そは都會獨裁即ち經濟的中央集權とともに存在し、且つそれを助長するものである。新聞が發達してヂヤアナリズムが藝術を征服する。金が藝術を征服することとなのである。金は征服者である。人々は消費の目的のために金をもつてゐるだけではない。富豪が消費の不可能なほどの富を蓄積するのは何のためであるか。多くの富豪がタウネイの所謂 functioless property を擁しながらしかも尙ほ貪慾にも慘酷なる勞働絞取をつゞけつゝあるのは何んのためであるか。權力は金から生れる。名譽も地位も結婚も喜びも金から生れる。その喜びは神の喜びでないことは勿論である。是の世界の喜びである。永遠否定者の喜びである。即ち創造ではなくして破壞の喜びである。神の喜びではなくて惡魔の喜びである

國民的政治を見よ。議會を見よ。政黨を見よ。政治的民主々義を見よ。經濟的權力の都會集中とゝもに政治が都會に集中したのである。議會とはコンモンスのいふてゐるとほり國民化の機關である。中央集權の機關なのである。政黨も近代民主々義も都會の獨裁政治、都會的世界觀の要求に奉仕するの機關でなくて何んであらう。都會の經濟的獨裁政治とともに都會の政治的獨裁が生れるのである。政治及び經濟の都會獨裁があつて文明はその組織を整備したのである。文明とは目的ではなくて方法である。靈魂ではなくて機械である。內面的世界ではなくて外面的世界の秩序である。從つて政治と經濟とは文明の二つの種である。工業主義、商業主義、そして政治的主權の觀念がそれを支配する。文明は尙ほその職分を盡さされてゐるかも知れぬ。經濟的にはトラストが尙ほ世界的に統一し、貨幣が世界的に統一し、經濟的權力が一つの世界都市に集中されねばならぬかも知れぬ。政治的にはウエルスの所謂世界合衆國、若しくはボルシエヴヰキの所謂世界社會主義聯邦勞兵共和國が生れなければならぬかも知れぬ。即ち世界的自由國若しくは世界的奴隸國が生れなければならぬかも知れぬ。機械化は止まるところを知らない。アレキサンダア大王が天に二日なしと呼んだごとくに

貨幣と機械と權力とは天に二日なしと呼びつゝある。しかもその段楷はアウグスツスの時代である。現代文明崩壊の時代である。かくして私たちは今や文明爛熟の段楷に立つてゐる。文明の滅亡する時は全文化の滅亡する時である。文明のもとにおける文化とは文化ではなくて一つの機械作用である。文明の附屬物である。文明の上部構造である。宗教家が政治家の鼻息を窺つてゐるように藝術家が資本家に迎合しつゝある時代は本質的文化を生み出すの時代ではないのである。こゝに私は三度全文化の問題に面して立たなくてはならぬと云ふのである。

（五）

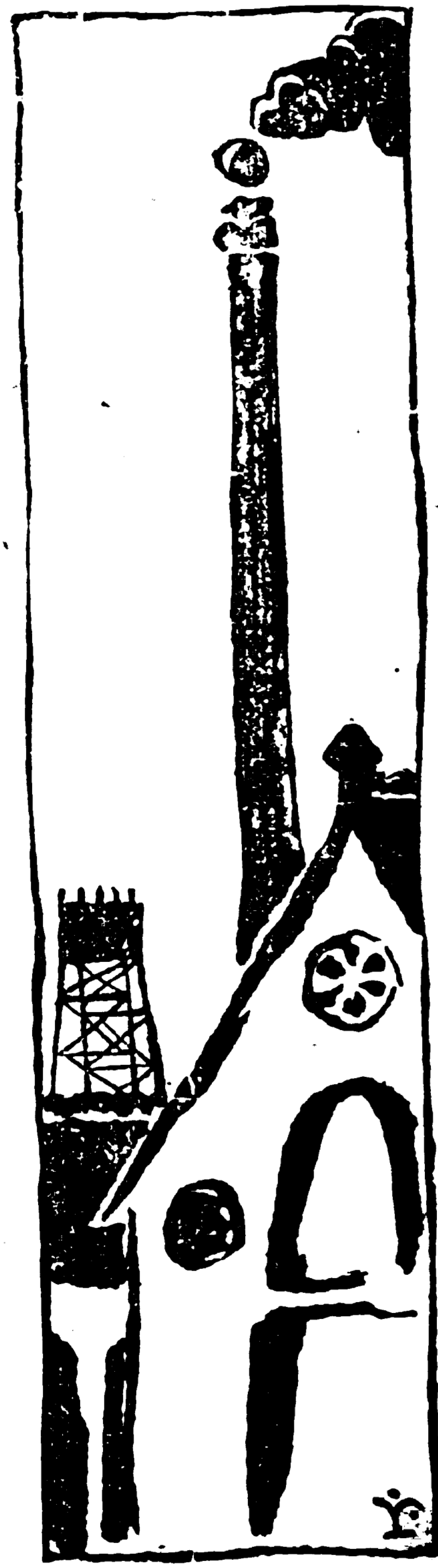
文明とは機械的秩序である。文化が靈性の表現であるのに對し文明は精神の機械化である。一方は靈的飛躍である。他方は物的秩序である。ペンテイの Restoration of the Gild System は最も多く獨創的である。彼は一九〇六年に中世紀と現代とを比較し前者は宗教と藝術との時代であつたに對し後者は政治と商業の時代であると云ふてゐる。前者は文化の時代であつて後者は文明の時代である。文化の時代は宗教的敬虔と美的感情の支配的である時代である。文明の時代は外面的機械作用が支配的である時代である。機械的秩序の二つの柱は政治と經濟とであると私はいふた。科學は更に知性の最高位にあつて一切の機械的秩序の知的統裁者である。科學は人間の知的生活の最高産物である。科學の發達によつて社會の機械的秩序は完成に近づいたのである。カアライルの言葉を借りていへば今日の世界は一つの世界蒸汽機關——World-ste mengine——である。必然とメキヤニズム、神ではなくて No-God が支配する。文明は神を知らない。文明は自由思想家である。無神論者である。十八世紀の唯物論が神を否定したごとくに科學的社會主義が宗教征伐に急がしい。マアキストに從へば宗教はブルヂョアである。しかもレェンの宗教抹殺論を讀め。Unter der Fahne des Marxismus の一文を讀め。彼は十八世紀のアタイズムの崇拜者である。彼の無神論は十八世紀の無神論のほかの何ものでもあらぬ。宗教的敬虔がブルヂョアであるか。唯物的無神論がブルヂョアであるか。金は權力を求める。金の勝利は外的秩序の勝利である。拜金宗は神を知らない。反敬虔である。「アンツウ・ジス・ラスト」を讀む。——財

布の規律はその本質にをいて想像力と心との規律である。──外的秩序は神を否定する。No-Godの世界である。文明はNo-Godの世界である。惡魔の世界である。永遠の恐怖である。神への恐れではなくて恐怖の惡魔である。科學と機械と金と惡魔とが崇拜されて靈性は獄屋のうちに幽閉されてゐる。文明とは靈の獄屋である。そこに何の文化があり得るであらう。そこに何の藝術がありうるであらう。人々はカアライルの「チャアチズム」を讀まなくてはならぬ。「チャアチズム」は現代の拜金崇文明を論じていふ。拜金宗は寂しい信條であると。文明は寂しい。騒々しくて寂しいのは文明である。市場が寂々しくて心の寂しさは文明である。貧民だけではない。ブルヂョアの心の寂しさを見よ。拜金宗は寂しい信條だ。科學は冷たい宗教だ。

(六)

文明から文化へ歸れ。機械から人間に歸れ。靈の獄屋を破つて新しい天地に出でよ。量の崇拜から質の世界に入れ。そこに生命の再生がある。── There is no wealth but Life ──生命のほかに何の富があらう。一切の外衣を脱せよ。私たちはあまりに多く晝の世界に住むできたではないであらうか。晝の世界は知性の世界である。私たちは夜の世界を見なくてはならぬ。そこに靈の暗があるではなからうか。

私は文明は都會とともにあると云ふた。農民都市ではない。商業都市である。工藝ギルドの都市ではなくて機械工業の都市である。都會は文明の場所である。來るべき時代は再び農民の時代ではないであらうか。工藝都市を伴つた農村そこが再びわれ〳〵の生活の中心となるべきの時代がきたらぬであらうか。都會の人は時間人だ。農民は永遠人だ。都會人は機械人だ。農民は靈性人だ。農民に金は入らない。ほんとうの農村生活には外的秩序は入らない。晴耕雨讀。悠々自然とともにある。こゝにほんとうの人間の生活はないか。文化が機械的秩序から解放されなければならないとしたら、藝術が階級と商業主義とそしてまた官僚主義とから救はれなければならないとしたら、農村、そして工藝ギルドの小都市を伴つた農村生活こそ、來るべき時代の方向を示してゐるのではないであらうか。



リーブクネヒト獄中遺稿
マルクス價値論批評
（其の二）

福田德三

一三

『社會的價値額の成長』篇は、論を『價値の連續性』に起して居る。曰く、勞働力の價値と勞働力生產物の價値とを分立せしむることは、概念的、構成的に不可許的である。此兩者を同一視すると云ふ事は、予の見解の出立點であり、

ルクス説と袂を分つ分岐點である。何となれば、斯く見ることは、取りも直さず、勞働力の價値は、勞働力の社會的平均生産能性によつて定めらると云ふことの精確な價値論上の言ひ表はしであるから。社會的平均に於いて勞働力の生産に委ねられる（實際上事實上其の目的には必ずしも充用せられなくとも妨げはない）諸財の價値と、勞働力の價値とを別物と見るのも、予の見解に從へば前述の見解同樣に、構成的並に概念的に不可許的である。元より、社會的平均に於いて、勞働力の生産に委ねられる諸財の範疇は――前述した如く――啻に掠奪による消費諸財の不均等なる分配、階級的に奪ひ去られる諸財を含むのみでなく、其外猶ほ、人口増殖の目的の爲め、社會的富の増進の目的の爲め、並びに、勞働力の品質上進の目的及其他の文化的目的（餘剩範圍）の爲めに、事實上貯蔵せられ、蓄積せられ、從つて消費せられない諸財をも含むのである。此種の蓄積（蓄積的維持）は、全社會的價値額を繼續的、事實的に高め、又た社會的全勞働力の全價値を（勞働力を増すによつて）高めるのである。此く考ふるによつて、我々は、マルクスが僅かに挿話的に觸れたのみで、構成的には毫も顧慮せず、單に一異分子として取扱つた歷史的道德的要因を、永續的に作用し而かも絶へず變化するものとして、一貫連續する構成的、組成的のものとして考察することが出來るのである。

更らに又た、勞働生産物の價値と、社會的平均に於いて勞働力の再生産に可能的に委ねられる諸財の價値との分立なるものも存せないのである。（茲に再生産すると云ふのは、勞働力並に社會的富の向上發展と増進との爲めに要せられる凡てのものを含むのではない。此種の向上發展は、消費せられざる乍併消費用に委ねられた諸財を貯蔵するによつて遂げられるのである。換言すれば、其等の財は、消費用に委ねられてあり乍ら事實に於いては消費せられないと云ふ可能性、消費用に充てられて居乍ら事實上は貯蔵せられると云ふ可能性を認むるによつて、如上の考察は彈力的餘地を有つことを得るのである。

勞働力——生產物——勞働力云々てふ回轉時間の經過中に於いて、勞働力の生產能性が漸状循環を爲して變化（或は昇り或は降り）するときは、其の反比例に於いて、此變化の作用を被むる諸財の價値は或は降り或は昇るのである。而して此の昇降は獨り、新たに生產せられる諸財の價値のみに止まらず、其れより以前に生產せられて而して現に貯藏せられて居る諸財の價値に就ても起るのである。要言すれば、此くの如き變化は勞働力に體化せられて居る價値の高さに就ても、貯藏生產物に體化せられて居る價値の高さに就ても、共に連續的に起るので、歷史的動因は此場合に於いても亦た連續的に干與するのである。今、生產諸要件、否、寧ろ生產に向つて平均的に委ねられる諸財量の其時々に於ける價値に照して測つた生產時に於ける勞働力の價値を a とし、勞働生產力の價値を（生產能性變化の結果として其れが生產諸要件若くは生產に委ねられた諸財よりも分量若しくは品質に於いてより多くの生產財に當るとも、又はより少き生產財に當るとも）p とし、生產後の生產力（其は a よりもより多くの分量又は品質のものたりとも、より少きものたりとも）を a とすれば、我々は次の公式を作ることが出來るのである。

$$a = p = a$$、

生產能性變化より起る現存諸生產物の價値に於ける連續的變化は、蓄積同樣に、之れを有機的に價値構成の中に入れる可きものである

以上言ふ所に依つて、予の見解による價値構成は、發展原則と、其の變動に必要な彈力性とを含むものであることが明かであらう。此の彈力性は非常に異つた各種の發展階段を網羅し、全發展を其一切の時代に亘つて可能ならしめるものである。換言すれば、予は、價値は文化的相對性を有すと主張するのであると。

次にリープクネヒトは『價値運動の種類』を簡潔なる一覽表にして居る。（a）其の期間。無限の連鎖（因果連鎖）。

（b）内的品質。継續性。間斷句切れなき継續的連絡。（c）文化經過に於ける運動の形態（發展、進化）及び反作用（内展、轉置）。循環。但し其の半徑は絶へず變化す（或はより大に、或はより小に、但し全體としては增大しつゝ）るも其長さは、必ずしも均等ならず不規則的に變化す。即ち或は外方に向つて、或は内方に向つて。（但し全體としては、外方に展開する渦狀循環を爲す）。以上 a+b+c= 不規則的渦狀循環、無限連鎖、連續的連絡、となると。是れがE篇に說く所の要旨である。マナセ氏が『社會政策年報』に紹介したものは、以上丈けで終つて居るが、新刊の遺稿全文には、更らにF篇なるものが、附け加へられてある。次に其の大要を紹介して見よう。

一四

F篇は題して『價値の變遷と生産能性』と云ひ、先づ價値流轉の連續行程を說く。曰く、社會に於いては、一の間斷なき無限なる價値變化行程が連續的に起る。而して其は（一）需要額に對する社會的必要が絶へず變化する限りに於て起る。之に二つある（a）消費者の數量に變化が起るによるもの（b）消費者の品質に變化が起るによるもの——其の生活程度に於いて、即ち道德的要素、マルクスの語を藉れば、歷史的因子に於いて變化が起るによるもの。此變化は（甲）需要額の量か（乙）需要の性質かに影響する。需要の性質への影響は又た社會的富の構成部分の價値減少を惹き起すこともあれば、其の價値增進を惹き起すこともある。（二）需要額の作り出しに充つる勞働に對する社會的必要が絶へず變化——即ち、技術の變化並に總じて勞働の生産能性の變化——する限りに於いて起る。要言すれば、價値の一切の諸構成要素即ち消費者數、自然的組合せ及道德的因子（需要額に對する社會的必要の二決定條件として）、並びに勞働の生産能性（勞働に對する社會的必要の決定條件として）は、不斷的變化の中にある。其變化には二樣ある。（一）一の

與へられた點若くは一の與へられた直線を中心とする動搖——大體に於いて變化なき平均平準に於いて自然的の周圍界並に內界に於ける無數の多樣性、其の變化的結合及び變種から生ずる波狀運動——是れは不變性、執着性に於ける變動である。(二)一個、數個又は總ての價値構成要素の向上又は向下に現はれる前進的平準變化　是れは發展に於ける變化である。此後者の方が遙かにより重要である。殊に社會的發展の因果性に對しては、前者の重要は遙かに下位に立つものである。何んとなれば、前者は大數平均——因果性を考ふるとき殊に問題となる——に於いては、相殺せられて仕舞ふものであるからと。

次に問題とせられて居るのは、社會的富の連續的價値變化是である。以上の價値諸變化——今茲では發展に於ける價値變化のみを考へよう——は、啻に其時々に於いてこれから生產すべきもの若しくは生產行程中にありと考へられるもののみに起るのではなく、他の條件の下に於いて既に生產せられてあるもの——其の需要額と勞働支出量との社會的必要性は絕へず新らしく吟味せられる所の——にも、逆作用的に、價値變換的に影響するのである。是れ即ち經濟的意義に於ける一切の價値の間斷なき價値變換である。需要額と勞働支出量に對する社會的必要性の絕間なく連絡する修正——價値の一切の構成要素、過去の一切の生產物に關して抑も修正す可きや否や、修正するとせば其程度は如何と云ふ檢討——が絕へず行はれるのである。從前より傳來せる社會的富の全體に亘つて、此の修正、此の新決定が不可避的に行はれるのである。社會的富の價値は、啻に其の組合せと、其の範圍との變化によつてのみならず、同時に又變化なく不易的に承繼せられた維持部分の價値の變化によつて、絕へず變動するものである。

過去の生產物の價値の連續的修正は、其時々の現在を過去に適用し、過去を測定するに現在を以てすることを可能ならしめる傾向を有つ。但し此傾向は、重大な制限を以てのみ實現せられる、此制限からして價値修正に對する重要原則

が生じて來るのである。其時々に現在的な生産條件が――其時々に現在的な他の諸の價値構成要素と結合して――過去の他の生産條件の未だ現存する生産物に對しても價値尺度を與へるのである。――但し其は、其等の生産物に充用せられた勞働の社會的必要性は、其時々の現在の立場から判斷せられ、決定せられると云ふ意味に限るのである。

一五

其時々の現在は、原則として問ふて云ふ。此の過去の生産物を今日新たに生産するには、幾干の勞働を要するであらうかと。乍併、過去の生産物は、現在が既に之を要する限りに於いては、現在――即ち其時から云へば將來――に於いて之れから生産する可きものではあり得ぬのである、其は現に其處に存在して居るのでなければならぬ。即ち現在が活き而して其の增進した能性に從つて生産し能ふ爲めには、現在の社會的富の大部分は過去に於いて既に生産せられて居るのでなければならぬ。現在が其全經濟を其上に築き其全經濟の物質的根柢を形づくる社會的富なるものは、決して、之れから新たに生産す可きものであつてはならぬのである。現在は――凡ての浪費の不經濟性てふことは問題外として――今日何時でも其等をより安く生産する可能ありと云ふ理由を以つて、過去の生産物にして上述の部分に屬するものを斥けることは決して出來ないのである。過去の生産物中の上述の部分に屬するものは、現在の立場から云つても、既に過去に於いて而して過去其時々の必要的社會的條件の下に生産せられたものでなければならないのである。ダカラ、過去の社會的必要と云ふことは、此意味に於いては、現在に對しても亦た社會的に必要なのである。斯くの如くに、過去と其の生産條件の大いなる部分は絕へず現在に於ける價値決定に入り込んで來るのである。

社會的富の大部分の價値決定に對しては、單に現在生産能性の尺度のみが決定的であるのではない。現在生産能性は

其の尺度に從つて必要なるより以上の勞働を現在に於て支出することを餘儀するのみである。現在生產能性は單に一の價値尺度たるのみのものでなく、一の命題である。社會的富の大々部分の價値決定に向つて決定的なるは、次の一事である。曰く、此く今日現存し今日必要なる生產物を今日に向つて生產する爲めに、變化の流れの中にある從來の歷史的生產條件に從ふときは、幾干の勞働量が必要であつたか、是れである。此れは一の客觀的問題で一の客觀的なる價値決定の根據を與ふるものである。之を主觀的に見れば次の問題となる。曰く現在（即ち發問の時から云へば將來）に於いてそれと同じものを生產し得るまで、過去の生產物の利用を拒絕するときは、これによりて被むる不利益は、現在の最も完全なる生產條件が正當なりとする價格に對比して、予に要求せられるより高き價格に比較して、何れ丈け大であるか是れであると。

次にリーブクネヒトは、『一の與へられたる社會狀態に於ける生產能性の定義』と題して論じて云ふ。現在の全經濟の現在生產能性なるものは、其時々の最完全な生產方法に從ひ、科學並に技術の最新の成果に從ひ築かれる可き經濟が有す可き生產能性と同一視す可きではない。何んとなれば、此くの如き經濟は決して現在に既存するものではない。現在は唯だ此等の成果を出來る丈け廣い範圍に於いて、而して出來る丈け迅速に過去から承繼した不完全な部分に適用し經濟建造物を連續的に出來る丈け迅速に且つ十分に近代化することを努め得るのみである。而も其れは其の最高の可能性に比するときは、常に遙かに下位に留ることを免れないものであつて、而して其活動は絕へず又た不可避的に過去——遠き過去又は近き過去、現在の成果により遠きかより近きかの——得來つた成果に基かざるを得ざるものである。換言すれば、其れは從前の發展階梯の殘物の多量を自分と共に引摺つて行かねばならぬものであると。

次には『現在生產物の價値に對する決定根據としての過去の生產條件』を論じて居る。曰く、社會的必要性を以つて現在に入り込み來る過去の生產條件と現在の生產條件との間に橫る間隔は、又た現在生產物の價値に影響するものである。何んとなれば、其時々に於いて最有利なる生產條件が生產物の價値を決定するのでもなければ、各個々の生產物が其の個別的生產條件に從つて評價せられるのでもない、決定力を有つものは現在に對して社會的に必要なもの、生產に、具體的に、社會的に必要なる一切の生產條件の全體是れであるから。詳しく云へば、(a) 現在の生產條件を絕へず限りなく科學的技術的成果に從つて可能なる完全性の最高度以下に壓抑する、進步の後れた過去から傳來する一切の不完全と重荷とを相伴ふ事實上現存の現在の生產條件の全體。(b) 今日の社會的富中今日の生產に向つて必要なる部分の生產を左右する過去の生產條件の全體、是れである。此く定められる度合は此等の條件の平均ではなく、地代原則に從つて必要的最不利の條件の最低限度である――是れよりして餘剩價値より生ずる利潤以外に、一の資本賃子が存するのである。此く現在に侵入し來る過去の生產條件は無數であり、種々異つた發展階梯に屬するもので、中には遙かに遠い過去にまで溯及するものもあるのである。我々は現在諸財の中に過去の諸時代に於いて生產せられた諸財の部分――過去の社會時期の勞働の諸斷片――を數々所有しそれを使用するが如くに、我々の今日の諸財の價値の中には、(其れが過去に於いて生產せられたものであつても、現在に於いて生產せられるものであつても) 過去の生產條件を、現在の諸財の價値の決定根據として、測定の要素として、重要なる構成要素として有つものであると。

最後の一節は『絕對的及相對的價値尺度、全人類の富の價値』と題してある。曰く、人類の富(諸財)の一部分の價

値は、其の中の他の部分——例へは、貨幣——の價値に照して測定せられる。此れは一の相對的の價値尺度である。絶對的の價値尺度なるものは存在しない。ダカラ、全人類の富（一切の財）の全價値なるものは測定し得られるものではない。絶對的の尺度、人類以外に立つ尺度なるものがないから。併し、人類以外に立つ尺度はないけれども、人類諸財以外に立つ一の尺度がある。其は他でもない人間の勞働力即ち之れである。人間の勞働力も矢張一の人間的な使用財、經濟財であり、否或社會秩序に於いては一の商品でさへあるものである。然し其れと同時に勞働力は又た人間の一部であり、人間性の一側面である。財價値と人間性とが結合すてふ此の二重性格に於いて、勞働力は最完全なる尺度である。元より其れは絶對的なものではない、併し社會的物質富から釋放せられて居り、人間が所有する經濟諸財外のものであり、被測定物に固着した尺度以外のものである。此れは無論一の相對的尺度であるが、併し其相對的と云ふのは極々異なつた被測定物間の關係に於て相對的であるのでなく、人間の本性に關して限られたものであると云ふ點に於て相對的なりと云ふのである。否、人間の本性が一の宇宙的事實であり、宇宙の一定大さである限りに於いては、我々は勞働力を目して絶對的なりとも云ひ得るのである。

勞働力は又た、其の有機的性格により、其の給付能力は變化するものであり、其の經濟的性格に於いては發展するものであると云ふ事實により、最完全な價値尺度である。一歩を進めて云へば、其の性格の發展は全人類の經濟發展の根本的事實であり、從つて又た價値變化の根本的事實である。勞働力は、連續的な價値變化に對する與定の而して自然的なる尺度である。其時々に於いて全人類的富の全價値を體現する再生産價値は、勞働力からのみ構成す可く、勞働力に照してのみ測定せらる可きものであると。是れでリーブクネヒトはマルクス評論に鋒を擱いて以下第八章「發展行程」の考究に進み入つて居る。

以上のリーブクネヒトのマルクス價値論評は、マナセも云ふ如く、極端に簡潔な而して緊縮的のものであつて、一言半句の冗語を弄して居ないものであるから、一讀下した丈けで直ちに其趣意を會得することは稍々困難である。乍併彼の文は無用な辨證論法の遊戯に耽つて居るものでもなく、又近頃流行の生命の哲學者一流の美文を並べて居るものでもない。少し思を潜めて熟讀すれば、彼の論旨は條理井然として全篇を透徹して居る。我々は彼の强き論理の力、彼の鋭き思索の行程の前に肅然として襟を正さゞるを得ないのである。此點において彼の此一小篇は、マルクス資本論第一巻の或部分――殊に其初めの部分――を凌駕するものと斷言するも決して不當ではないと信ずる。リーブクネヒト自ら其稿の全體に序して云ふ『予の論述は演繹的に見へるかも知れないが、予の思索の行程は決して左樣ではない。予が茲に述ぶる所は、悉く歸納法の結果であり、歴史的研究から、批判的、分解的、經驗的に得來つた認識に基くものである。唯だ叙述の上に於ては、研究と其行程を反對にして、明瞭、透徹、一貫した緊縮、體系的統一を確保せんとした。(中略)此書は其收穫は非常に多いものであり乍ら必竟一の當代的思想を述ぶるに過ぎないマルクスの理論と異り、より多く組成的、構成的な理論、體系を得んと努むるものである。此書に於ける體系的叙述の試みが――予は能く之を知る――單に一の當代的思想を提出するに比しては、一體系に伴ふ凡ての不利、殊に遙かに廣き攻撃部面(批評せらる可き部面を有つが、併し予は繰返して力說する。予の體系は決して不過性完結性を有すと僭して提唱するものではなく、又た斷じて一の『ドグマ』を與へんと思ふものでもない、唯だ此種研究に對し一のより多く遂行せられ、築き上げられた方法論上の補助手段、指針、正準、當代思想の一體系――殊に主として一の分解方法を與へんと則するものであること

を。認識論的には、予はヒュームの懷疑主義よりより懷疑的に、カントの批評主義より、より批評的にフキヒテの唯我主義よりより唯我的に、率直に不可知論（アグノーシス）の地帶上を行くものである』と。編纂者モリスは、リープクネヒトの本書に對する標語とも云ふ可きものを獄中執筆原稿の第一頁に鉛筆で認めたものを見出したと云つて居る。其語に曰く Mehr Selbstverständigung als Abschluss（完結よりもより多く自己理解）と。獨り右に紹介したマルクス批評のみでなく、遺稿文の全部を讀過した者は、リープクネヒトの此一語は、最も能く本書に於ける彼の學問的態度を暗示することを悟らざるを得ないであらう。小泉教授の語を藉れば、堅法華、亞流道樂に殆んど盲なるが如きマルクス主義エピゴーネンの間を經過して、リープクネヒトの此書に遭ふのは、熱鬧の巷から水清く草緑なる郊外に脫れ出でたような感がする。リープクネヒトは一九一七年六月十日の日付で獄中から其妻に送つた手紙の中に、此書執筆の感を述べて云ふ『私は今私の主要著述（『運動法則』）で行詰つて居る、其骨組みは第一草稿に於て、餘程前から既に出來て居る――併し其れは混沌たるものである。此れから之を整理し、按排し、築き上げるのだ。此仕事は初めの製作、考の湧出し、本當の創造、出産に比べれば、私に取つては遙かに面白くない業である』と。又た一九一八年六月十六日の獄中からの手紙に云つて居る。『紙袋張り（彼の獄中作業）は御前の思ふより私に取つて遙かに面白い。私は其れによつて系統的に技術の本質、發明の心理、熟練の概念を學んで居る。御前は笑ふだらう。確かに私と同じ様な經驗心理的研究をし學問上之を利用したものは澤山ある。併し精密な自己觀察のみが十分の透明を與へるものである。身體と各肢體との一切の最小な運動、肢體の態度、五官殊に視覺と觸覺の適用に於ける最小の變更、精神的機能と氣分狀態の役目、材料の種類と其整理、同一運動の絕へざる繰返し、手の働きの緩急と其韻律、他人の爲す事の觀察、之れより學ぶこと、自分の實際的經驗の觀察――此等の無數な個々の事、小さい事、之れから人間發展の最重要な運動法則が生じ來るのである。此れよ

最大な事に於いても最小な事に於けると同じである』と。此くの如き聖者的に嚴肅な自己考察、體驗實證の結果が即ち『社會發展の運動法則研究』の大著となつたのである。而して其起稿はモリス氏の記す所によれば、晝間の囚徒作業に身心困憊の後夜間僅かの時間點燈を許された其間に於いて、僅少の參考書のみを左右に置くことを許された丈けで、他に何の賴る所なく、一に全く自己考察と思索との結果を書き認めたものである。而もリープクネヒトは決して自ら學究を以て任じた人ではなく、『勞働階級の解放鬪爭に於ける革命的、國際的一兵卒』を以て任じて居た人である。此くの如き人が此くの如き事情の下に、刻苦勵精して到達した思索の結果が、マルクスの學說と著しく異るものであることは唯だ其一事丈けを以てしても我々に考ふ可き多くの事を暗示せずには濟まないのである。少くとも私は、河上博士の顰（ヒソミ）に倣つて『私は今多忙である、其んな議論にかゝり合て居る閑を有たない、マア茶でも吞んで行き玉へ』（『我等』一掲載の訪問答）などと放言する餘力を見出すことは出來ない、極めて敬虔な心持を以てのみ彼の說に對し得るのである。

一八

マナセ氏はリープクネヒト文に序して云ふ『政治上の立場に於いては全くマルクスと結合し彼を以つてプロレタリアの第一指導者なりと尊敬しつゝも、リープクネヒトは久しい以前から、一定の學問的根本思想に於いては、マルクスの敵手であつた。彼は其本質に於いて既にマルクスとは、正反對の極點に立つて居るのである。マルクスは、其の世界觀に於いても、其の經濟學說に於いても、悟性と、數學及自然科學から得來つた論理（辨證法）とを以てする。從つて生活及生產行程を其の有機的發展に於て、一の全體として、一の行程としてでなく、空間的併立の靜態に於いて、機械化したもの、死んだものとして、言ひ換れば、之を僞造し之れを曲解して捕捉した。リープクネヒトは之れに反し、姿を觀

照し、自ら其中に感じ、連絡を體驗し、行程を概念し、普遍的である。兩人間の此の自然的なる反極性から、勞働者の掠奪、餘剩價値の成立、並びに之れと關連する他の經濟的現象に關し、マルクスとは根本的に異る見解が生じたのである。從つて又たリーブクネヒトは、資本主義的生產行程にのみ特殊的に妥當な法則を立てず、彼れに取つて根本的な概念は、價値は之れを一の特定な經濟形態に對してでなく、全經濟界に對して建設してこそ正しく理解せらると云ふにある。之れに基く構成によつて、彼は掠奪の概念を遙かにより純粹に作り出し得、又た生產行程、價値の循環行程を、直接の生き生きした有樣に於て描出することを得たのである。更らに又た彼は之れによつて、經濟上の經過を孤立的でなく、政治社會的問題と融合して——此くてこそ始めて理論的に諒解し得るのである——會得することが出來た。彼の意義は、彼が純粹(孤立)經濟に反して、經濟現象の權力政治的包圍の客觀的動因を力說したことに存する。之れによつて彼れは價値論に於ける主觀論者と袂を分つ。殊にボエーム・バヴエルクと袂を分つ。(ボエームの內在的マルクス批評とは彼は最も多くの點に於いて一致するにも拘らず)。ボエームの心理的方法は孤立經濟に對しては正しいかも知れない。乍去、問題は、勞銀や利潤やの問題に對しては、孤立經濟的考察法が果して十分であるか、此等の問題に於いては權力問題、經濟以外の社會問題を疏外すること可能なりや否やに存する。マルクス批評に於けるリーブクネヒトの方法に關しては、ゾムバートが嘗て言明した方法分類を適用することが出來よう。曰く。マルクスの體系を味ひ之を批判するには次の如く試みねばなるまい。(一)經濟學に於ける客觀主義は排他的に又は補足的に正當なりや。此問題を肯定するときは次の問題に答ふるを要する。(二)價値概念てふ思想上の補助手段によつて經濟的事實を數量的に決定せんとするマルクスの方法は正しきや否や。此問を肯定するときは更らに第三の問題を生ずる。(三)然らば、マルクスの立場、體系的建設、歸結等は非難なきものなりやと。リーブクネヒトは(一)(二)の二問を肯定したが、(三)に

於いて價値概念の內容として勞働を撰ぶことの正當を否認した。此點が即ち彼れのマルクス批評の出立する點である』と。

私は右のマナセ氏の言に悉くは贊同することは出來ない。殊にゾムバートの方法排列のシエーマをリープクネヒトに當てはめて、彼は初めの二問を肯定して、唯だ終りの一問だけを否定したものであると云ふことを、十分に理解し能はざるものである。抑もゾムバートのシエーマは、出來る丈けマルクス說を救はんとの努力を爲しつゝあつた頃の同氏の着想であつて、右のシエーマを提出してあるゾムバートの論文『カール・マルクスの經濟的體系の批評』（『社會立法統計年報』第七卷第四冊五九三頁以下掲載）はヘルクナーが其『勞働問題』に於て、許して居る通り、全く一の失敗の企てゞある。（但し河上博士は小泉教授に對する批評文に於いて、此の遼東の豕を其產地を明記せずして再び賣り出さうと試みられて居るやうではあるが）。私はリープクネヒトのマルクス評論の價値を測るにゾムバート尺を以てすることを、甚だ時代後れな且つ間違つた企てであると信ずるもので、殊に彼のマルクス評論は『人類發展の運動法則研究』てふ一の更に尚大きな——且つ私の見る所では深い——思想體系の一部分を成してゐるもので、其價値の測定は、此體系の一部として爲されねばならぬと思ふものである。私はゾムバート尺をも、將た亦たボーエーム・バヴエルク尺をも借用しないで、玆に言ふ樣に、リープクネヒトのマルクス評論——否、寧ろ彼自らの價値構成、掠奪構成——を、彼の思想體系の一部として、少し吟味して見たいと思ふのである。（吟味の參考材料は本論文の終に一括して擧げて置く）

一九

リープクネヒトは其『運動法則研究』の趣意に就て、序文中に次の樣に言つて居る。（此甚だ肝要な一節は何故か分

らぬがモリス氏編纂の遺稿版の序文中からは（省いてあるが、マナセ氏の抄錄には載せてある。而して遺稿版本の第一篇第七章第五節の文句は、此序文と全く同じである）。『一切の自然的並に特殊的なる人類狀態研究、從つて本書に述ぶる所の重要なる結果は次の一事である。無機世界、有機世界と無機世界との關係、而して有機體一切の間に於けるが如く、人と人との間に於ける一切の關係の根柢（根元、建設的形成的原則）及び殊に人類從來の歷史の凡ての社會的現象の根柢は、權力である。而して權力の最終の論據、其の從來の歷史的經過に於ける最深の根柢は、暴力、最粗なる、物質的、身體的意味に於ける暴力、脅威的潛勢力として一見最理想的な關係の後に潛む暴力である。最優しい、香しい結合（男女夫婦關係を指して云ふのであらう）に就ても、暴力は最終の制令者である。其外に又た心理的暴力（即ち普通云ふ權力）がある。此れは世界に於いて、人類の社會的關係に於て非常に重要な役目を演ずるものである』と。此一節は、少くともマルクス評論を附錄とする第一篇第七章『社會的支配關係。暴力の役目』と題する一章の根本思想を披瀝したもので、而して其れは、私を以て見れば、リープクネヒトのマルクス批評の出立點であり、彼れがマルクスとの分袂點である。リープクネヒト自らは、勞働力の價値と勞働力生產物の價値とを分立するものとして考ふることを許さないと云ふことが、自說の出立點であり、マルクスとの分袂點であると云つて居るが、私は、其れは即ち彼の權力觀を價値論のオブラートに包んだものであると解釋せざるを得ないのである。更らにマナセ氏の樣に、彼はゾムバートの與へたシエーマの第三を否定して、價値概念の內容として勞働を認むることの正當を否定したことが、彼の出立點であると云ふのは、寧ろ冠履を顚倒した觀察ではないかと思ふのである。彼が其論を價値概念の內容に關するマルクス說の否認から起して居るのは、彼れの自らの言を藉れば、全く演繹的（推理的、綜合的、組成的）であるが、其れは彼の云ふ如く單に敍述の上の話であつて、彼れが此結論を得た行程は其れとは全く反對に、社會發展の具體的事實に就て批評的、

分解的、經驗的に刻苦勵精して最終に右の斷案を歸納的に得たのである。而して、私は此の經驗的分解的批判の出立點は、現實なる掠奪の事實それであつたものと信ずるものである。（後段參考）

私は今から十二年の昔、明治四十四年に『經濟學教科書』と云ふ小著を起稿したとき、次の樣に言つたことがある『契約締結は所得の大小を定むる所以にして、之に際し、實力の比較的强弱は、引渡契約所得にありては、兩者殆んど相均しきを常とし、貸借契約所得にありては、兩當事者に均しからずして、時としては一方、時としては他方の實力强きを常とし、勤勞契約所得にありては常に一方のみ强きを例とするものなり。從つて次の結果を生ず。引渡契約所得に就ては、一般價格を定むる原因は、契約締結上の實力の爲めに影響せらるゝこと最も少く（追記、但し其の經濟上の地位相均しきときは、原則としては、貨幣の所有者たる買手は、商品の所有者たる賣手より實力强きを一般とす）、概ね價値決定の原則其儘に行はるゝものなり。貸借契約所得に就ては、實力弱き當事者の所得は、其强きものゝ所得より少く、從て一般價格決定原因は、それが爲に左右せらるゝこと大にして、時には其作用を著しく妨げ、單に實力の强弱のみによりて所得の大小定めらるゝことあり。勤勞契約所得は、勞務の給付を爲すもの（追記、給付の賣手）即ち勞働者の實力常に弱く、それに報酬を與ふるもの（追記、給付の買手）即ち雇主の實力常に强し。從つて勞働者の所得は、此實力關係によりて著しく左右せられ、時としては一般價格決定の原因の作用を全く停止することあり』（右書一八一頁至一八三頁）又た勞銀の說明中次ぎの如く言つて置いた。『勞銀は勞働所得にして而して昔にありては强制所得たること多かりしも、今日に於ては全く契約所得と認めらる。但し單に名義上の契約所得にして事實上は强制所得たる場合甚だ多し。而して最近に於ては賃銀協約の制度行はれ、團體と團體即ち勞働組合と企業者團體との間に總括的協約を締結して勞銀の程度を定むることとなり。協約は契約にあらず、從來の私法の契約の觀念を以て協約を論ず可からず。故に此制度普及するに

至れば、勞銀は契約所得の名義をも脱し、一種の新所得たる協約所得となる可きなり。契約所得の中勞銀は勤勞契約殊に雇傭契約によるものなれば、一方當事者即ち雇主の實力甚だ強く、從つて勞銀の大小は、一般價格の法則以外雇主の意志によりて影響せらるゝこと極めて大なるものとす』と。（同書一八九頁）私は久しい前から、所得決定、就中勞銀決定に於いて當事者間の實力（權力）關係が甚だ大なる力を有つものなることを深く信じて居たから、教科書とするつもりの簡單な叙述に於てさへも右の如く斷言して置いたのである。所が其後段々考へて行く中に、右勞銀に就て考へて居た所の事は、更らに廣く一般價格の決定に於いても、有力なる現象であることを悟るに至つた。此の思索の結果を、私は『改造』に掲げた『價格鬪爭より厚生鬪爭へ』なる論文中に少く詳しく述べて置いたのである。（拙著『社會政策と階級鬪爭』二一二頁以下に收む）

二十

私が右『經濟學教科書』を書いてから二年の後一九一三年に、トウガン・バラノフスキー『分配の社會的理論』と云ふ著が出版された。其全篇の要旨は所得の決定に實力（權力）が最重要の因子を成すものであることを力說するにあつて、私が右教科書に書いたのと殆んど同一趣意を述べたものである。私が後に到達した考即ち一般價格にも其理を及ぼすと云ふことは、トウガンは之を否認して居て、私が教科書に述べた通りの說を主張して居るのである。河上博士は再び私を以つてトウガンを受賣したものと云はれるかも知れないが、トウガンの右の書は單行本としては一九一三年三月の日付の序文を載せて同年の秋頃に出版せられ、同時に伯林發行のブラウン氏主宰『社會政策及立法年報』の第二卷第五、六册（同じく一九一三年後半季發行）に掲げたものである。河上博士の博聞は或は、其れより以前に夙くに露西亞語で公けにされてある事實を發掘するに至るかも知れないが、私の見た所では、露語に原本のあることは何處にも斷つ

てないし、よし原本があつても、其れは露語に全く盲目なる私には七つの鍵を以て鎖された卷である。兎に角、私に取つては、一九一三年にトウガン說を見出し、今又一九二二年に至つて、リープクネヒトを見出すことは、甚だ心強く感ずる處である。トウガンは其書に序して云ふ『此書に於て予は現今支配する所の分配理論と異る一の分配論を說かんとの企てを爲した。予は此理論に名くるに社會的なる名稱を以てする。何んとなれば其特色は、所得形式に於ける社會的動因を力說するに存するから。現今に於ける經濟學の理論家は、大體に於いて二派に分つことが出來る、即ち限界利用學派（私は限界效用を斥けて利用とすること久しいもので、曾て河上博士から其の不可なるを指摘されたが、私は之を改めない方が宜いと思つて居る。然るに『解放』本年三月號に於て瀧本博士も亦效用を斥けて利用とせられて居るは一の會心事である）の代表者とマルクス主義の代表者とである。予は其何れにも屬することが出來ない。限界利用學派は個人心理的方法に基いて分配問題を見るもので此點で予の見解は異る。マルクスの分配論も予を以て見れば欠陷あるもので、其基礎が社會的であるに拘らず、個人主義的要素を以て充されて居る。此等兩理論共同の根本欠點は予を以て見れば、分配の諸現象を價値現象として考察する一事にある。其れと同時に、予は理論的見地に於て限界利用派ともマルクス主義とも多く共通の點を以て居る。（中略）兩說共其中に多くの正しきもの有用なるものを持て居る、而して予は吾人の時代の經濟學の最重要の仕事は、此兩說のシンテーゼ（綜合）に存すと認むるものである』と。私は經濟學の理論に於て限界利用論もマルクスの理論も共に甚だ肝要なるものであるを認めると共に、費用派、利用派其何れにも全部服す可きでないと久しい以前から主張し（國民經濟講話其他に於て）て居るものである。其れと共に私は社會政策を認める立場からしても、正統學派の所得論、マルクスの勞銀、利潤論を取る可からずとするものである。此事は拙著『階級鬪爭と社會政策』の中に稍々詳しく論じて置いたが、若しも勞銀基金說や勞銀の鐵則が正しいものならば、タトへ其れはマカロックやフオーセットに從つて、勞働運動の可能を否定することにはならないとしても、到底する所社會政策の可能を否定すること

になる外はない。マルクスの説に從つても亦同じ事である。分配の問題、所得の問題が、マルクスの意味するような價値問題――價格問題は別である――であるならば、社會政策が發動し得る餘地はなく、國家の租税による所得分布の調節（土方成美教授の財政の新定義に顯はれ居るように）を外にして社會政策は全く無用のものとなる外はない。故に私はマルキシストにして社會政策を説く學者を以て矛盾の甚しいものであると屢々公言して居るのである。更らに私は、一般價格の問題も亦マルクス論の價値法則を以つて説く能はざるものと信ずる。マルクスに於ける價格と價値との交渉は甚だ複雜した問題である――小泉教授の『價値論と社會主義』と云ふ卓越なる近業多く此の問題に觸れて居る。高田博士が近頃評論の對象とせられた河上博士の剩餘價格論なるものは、マルキシストとしては、甚だ妙なものである。餘剩價値と剩餘價格とをつきまぜるのは、餘りに技巧を弄し過ぎた考へ方で、當代の才人河上博士の一悪戯である。其れに就ては、此論文に引續いて詳しく考へて見ようと思ふ。兎に角、私は此點に就てはトウガンよりも更らに先を考へて居る。即ち分配現象を價値現象（マルクスの意味にても亦た限界利用學派の意味にても）と見るの不可なるが如く、一般價格の事實をも、其意味に於いての價値法則を以つて説明せんとするは、一の不可能事であり、一の不當事であると信ずるものである。此立場に立つにあらざれば、價格に對する社會政策の『ベグユンドウング』は到底之を見出すことは出來ないと確信するものである。私が我邦に於て公共團體の中央市場設置の必要を力説し、他方に於て公共團體以外の其れに極力反對する所以は、此のベグルユンドングを取るからである。經濟學の理論に於て、一の不可動的な自然法則的な價値法則を以て流通の現象を説きつゝ、社會政策に於いて、流通生活を遠慮なく其對象とする學者の態度は、私を以つて見れば、自家撞着の道に陷つて居るものである。然し此點、殊に價格と價値との交渉は、今私の論題とする所ではない。私は今、リープクネヒトのマルクス批評の主要點の若干に就て考察するを以つて滿足せねばならぬ。私が價格一般に就て、殊に勞銀と利潤とに就て、之を價値問題と分離して考へた所は、トウガンも亦分配理論と價値理論との分離の主張を以てし、而して今茲にリープクネヒトに至つて、最も明瞭に『各種の社會秩序に向つて、價値構成を引放すことは暴擧である、否、不可能事である。……價値な

るものは決して單に一の資本主義的社會事實たるものではない……價値問題を分配問題から綺麗に分離することが必要である。マルクスの爲す樣に、分配問題を、價値構成問題中に押し入れ、挿し込み、挿み込むのは、兩問題共に之れを害することになる。價値問題は超各個社會的なる範圍に横つて居る。分配問題（從つて其れと共に掠奪の問題）は、各個社會の範圍、一定の社會形態の各個部門間の關係の範圍に横つて居るのである。（前號十三頁）と明言し、而して更らに價値に就ては其文化的相對性を力說して居るを見るのである。價値の相對性の事は、近頃私が見た經濟論文中解放二月號の高田博士論文『河上博士の剰餘價格論』と相並んで最も力の入つた傑作だと思ふ土方成美教授の左右田博士に對する批評文『貨幣價値の成立と租稅の作用』（經濟學論集一卷三號本年二月十五日發行）に關連して、私は後段リープクネヒトを評すると共に少し自分の考を述べる。

二十一

先づレキシスに從つてマルクスの餘剩價値論の考察から始める。マルクスの餘剩價値論の題目とする所は何等新らしい事實を含んで居るものではない。彼の理論は久しく知られ又た論究せられて居た現象に、彼一流の解釋と判定とを下したに過ぎないのである。生產に從事する勞働者以外に資本家階級なるものがあり、其階級は所謂勞働には從はないで、而かも勞働生產物の一部を消費するものであると云ふ事は、取りも直さず、勞働者階級は、其生產收穫の全部を收得するものでなく、從つて收穫と勞働者所得との間には差額が存し、其差額が資本所得となると云ふ事は、一見明瞭なる事實である。ソコデ問題は起る。此の資本所得は何處に如何にして成立つかと。經濟學の通說は、其成立を流通行程の中に求めて云ふ、資本の流通は幾多の賣買行爲の一連鎖である、此の連鎖の中に於いては勞働も亦一の商品として取扱はれ、一定の大さに於いて發現する給付能力として買はれ、而して後生產物中に發現體化せられたる給付として費用されるの

である。資本的賣手たる原料生産者、製造家、卸商、小賣商等は、其販賣に方つて利潤を收得する。其れは彼等が買つた價格よりより高い價格に於いて賣るによつて得られるのである。換言すれば、彼等は其商品の生産價格に縣直を加へて賣るからである。然るに同じ賣手であつても、勞働の賣手たる勞働者は、此くの如き割増を附けることが出來ない。勞働者は其不利なる立場の爲めに、彼れの勞働を賣るに方つては、其れが彼れに費用をかけた價格即ち必要生計費丈けの價格をしか買手たる資本家から得ることが出來ない。資本家も亦消費品なり生産要品なりを買ふ買手たる時は、右の割増を附け懸けされた價格を支拂はなければならぬものである。從つて彼等は賣手として附け懸けして得た所得の一部分は、買手として吐き出さしめられるものであつて、場合によつては、得たものゝ大部分を吐き出すことがあるかも知れない。乍去、彼等の賣り出す商品にして勞働者に賣り渡した部分に附け懸けた割増は全部之を其儘に着服することが出來るものである。かくて一社會の全生産の一部分は永久に資本家階級の手に歸着して、再び流れ出ることなきに至るのであると。

解放本年二月號高田博士論文『河上博士の剰餘價格論を讀む』參考。此の附け懸けを、河上博士は『剰餘價格』と云ふ尤もらしくて、而も甚だ不徹明な名稱を以て呼んで居られるのである。而して博士は同時にマルキシストであると云ふ餘程面白いことを此頃高田博士は捉らへて新たに問題とせられた。河上博士の之れに對する答辯（社會問題研究四十三號）は確かに一の『チホ・プライズム』である。何れ他の事と共に論ずであらう。

マルクスは此の通説を斥ける。而して云ふ、資本所得は決して、資本の固有的流通行程中に於いて成立するものではない。資本所得は其全部を擧げて、流通行程を中斷する生産階段中に於いて成立するものである。一切の商品の價値は割増や附け懸けによつて形成せられるものではない。各商品の價値の大さは、其商品の生産に社會的に必要なる勞働時間によつて決定せられるものである。從つて勞働力も、亦た現在の社會秩序の下に於いては、此の標準によつて決定せられる價値を有するものである。換言すれば、勞働力は、勞働力を絕へず新たにするに必要なる生活要品と等價である。而して此等の生活要品は亦た結晶勞働時間の同一量を體現するものである。であるから、資本家は凡ての商品を其の正準

價値に任せて置くものであつて、之をいぢくり廻はすものでない如くに、勞働に對しても亦た其の正準價値の儘に其價格を支拂ふもので之を引きこぎるものではない。乍去、資本主義的生產行程に於いては、勞働者は、每日の勞働に方つて、彼れが雇主に賣渡した勞働力の給付能力を一杯に傾け盡くして提供することを餘儀なくせられる。トコロが、彼れが支拂を受ける勞銀に當る丈けの價値(勞働時間で測つた)は、其一日中の一部分で既に生產して仕舞ふのである。從つて其部分を差引いた殘りの時間に於いては、勞働者は資本家の懷中に歸着す可き餘分の價値の大さを生產するものである。是れが即ち餘剩價値である。其れは、正準價値を有する一商品の量の增加であつて、一定商品量の價値の增進を體現するものではない。此の餘剩價値は他の生產物同樣に、貨幣に換價せられて、現金資本所得を形成するのである。此換價が行はれる流通範圍に於いては唯だ等價價値の單純なる交換が行はれるに過ぎないので、餘剩價値其ものは決して此範圍内で成立つのではないと。

マルクスの此說は、實際生活に於ける價格成立の事實に毫も合して居ないは言ふまでもないが、假りに一步を讓つて資本所得の成立を右の樣に說明し得るとしても、必ず此說明によらなければならないといふ强制は些も認められないのである。何故となれば通說の附け懸け懸値の說明でも、其到達する所は、Lexis, Conrad's Jahrbücher, N. F. 11.—quarterly Journal of Economics. X. 右のマルクス說と少しも異なる所はない。而して通說の方がマルクス說よりは、少くとも實際の事實により近いのである。附け懸け說に從つても、勞働生產物と勞働所得との間に差のあることは勿論、連續的、規則的なる資本更新の循環行程も亦た之れを說明することと容易である。今、エンゲルスが最も善くマルクスの眞意を解したと稱揚したレキシス說を藉りて讀者の諒解を助けて置かう。

三

生產せられた諸財の全體を二分して、其一部は、勞働階級の生活維持に充つる分、他の一部は、資本家と資本家に

費はれる諸々の人々（家族、從者等）の消費に充つる分として見る。後の部分は、勞働者に取つて迚も問題にならない奢侈品を含むのみならず、普通の消費品が含まれて居るとする。此等の普通消費品の生産は、其最終の二用途に從つて或は第一部に屬し或は第二部に屬するものとして差支ない。又た原料、機械、道具等の生産に必要な資本及勞働量の中には、直接消費財の生産に必要な要素の一部を成すものもある。從つて其等は其々各部に分屬するものと見る可きものである。ソコデ毎年勞働者の生活用に充つる部分をAとし、資本家用の部分をBとする。Aの生産、Bの生産に其々に要する勞働者の數は、元より資本所得の相對的大さによつて左右せられ、流通行程に於いて經驗上粗ぼ誤りなく各部に分割せられるものとする。（結局の正か誤かは今問題としない。此點は資本生産行詰り論再論の折詳論する）。今A生産用の勞働者數をxとし、B生産の勞働者數をyとし、各勞働者の平均一ケ年所得勞銀額をl貨幣單位數とする。

ソコデ、A量はxl賃銀額を代表し、其中には消費用商品の一切の準備階段、生産經過、其の運送及賣買取引等に際して支拂はるゝ勞銀も含まれて居るものとする。然るときは、此のA量の價格は、生産から消費に至るまでの經過中それに干與した各種の資本家（原料生産者、製造家、商人等）が、其れ〳〵に附け懸けした割増があるから、axlとなる。凡ての資本所得を支拂勞銀の100％即ちマルクスの引例を藉りれば、餘剩價値は年々運轉する可變資本の額に等しい（即ち餘剩價値率100％）とすれば、此aの値は1より大で、2である。ソコデ、Aを生産する勞働者全體は、其生産する物の價格が其支拂はるゝ勞銀額以上であるから、其の生産物の一部分（價格で云へばxlの一部分）のみを、其生活用として買ひ戻し得るに過ぎない。從つて、他の部分即ち價値で云へば、$(a-1)xl$は、A部の勞働者を雇傭する資本家の全體（之をKとする）の手に殘る。

Kは此く得た餘剩を「K′と云ふ資本家全體の下に勞働するB部の勞働者全體に賣る。B部の勞働者の得る勞銀總額はylである。從つて、」

$$(a-1)xl=yl$$

と云ふ不變式が成立つて、x と y との關係はそれによつて定められることになる。

次に B 部に就ても、資本所得總額の勞銀總額に對する關係はA部と同じとして見よう。（此假定は實際の事實とソンナに距つて居るものではあるまい。何となれば各種（固定、流通）資本の分布の狀態は兩部とも粗ぼ同である可きだから）然るときは a の値はB部に於てもA部と同じである。此假定を許すとすれば、$\bar{K}'$ なる資本家全體はB並の商品の價格を am として支出すであらう。K資本家全體はB並の商品中B部の勞働者が支拂を受けた勞銀額 m に對する丈の生活要品を買ふ。從て $\bar{K}'$ 部の資本家の手には資本所得として（$a-1$）m 額の價値の自己生活要品が殘るわけである。

即ちKの資本所得も $\bar{K}'$ の資本所得も同じ樣な組み立てゞ成立し、其差違は、單に使用勞働者の數に比例するに止る可きである。（但し其前提として、年々生産を終り最終消費者に交付せられる消費財の價値は、其年の總生産によつて作り出された新價値に等しいと云ふ一の不變式が成立つて居るものとするのである）。然るに、玆に假定を變じて、Bの生産に於てはAの生産に於けるより比較的に多額の固定資本を要するとすれば、Aに對する a の比例よりも、Bに對する其比例は大（a' とする）となる。然るときは、Bの價格は am よりも大なる $a'm$ となる。トコロがKの資本家全體は m だけ支出すること前例の場合と同一であるから、$\bar{K}'$ 資本家全體の手には、B並の資本家用の財に對してより大なる部分が殘る可きである。即ち（$a-1$）m でなく、其れよりも大なる（$a'-1$）m が其資本所得を表はすことにある。從つて $\bar{K}'$ がより多く得る丈け $\bar{K}$ はより少く得ることとなるが、勞働階級は此も其れによつて影響せられないのである。換言すれば、勞働者全體と資本家全體との間に於ける生産收穫の分配に就ては、如上の通説的附け懸け説明も、マルクスの餘剩價値論による説明も、其到着する結論は、最後に於て全く同じ事となるのである。ソウすると玆に疑問が起る。曰く、結局同一論結に到達することが、斯くも容易い道理であれば、マルクスの鋭い頭を以てして、其れに心付かないわけはあるまい。然るに彼が通説を斥けて、特に——而も甚だ複雜なチアレクチックまでも擔ぎ出して——其の餘剩價値説を立てたのは何故であるか。此の問に對する答は軈てリープクネヒト説の當否を判する鎖鑰とならねばならぬ、次節に於いて少し此點を考へて見よう。

（以下刪出）

發光植物

ハンス・モーリシッュ



植物の發光に關する吾人の知識は、過去二十五年間に於て著しく增進し、學界に於て多大の注意を喚起した。そこで此れに關する研究の結果を廣く通俗的に發表するとは、敢て無益の事でないと思ふ。故に私は崇徹せる改造所主の依囑に應じ、此所に前述の問題に關し通俗的論文を、主として自己の研究の結果を基礎として、起草するの機會を得たるを喜ぶのである。(Molisch, H., Leuchtende Pflanzen. 2. Auflage 1912. Jena, G. Fischer. モーリシュ發光植物、第二版一九一二年)。

發光植物の中で、單に外觀上發光するやうに見へるものと、眞に光を發するものとを區別する必要がある。外觀的發光植物の例としては、光蘚(ひかりごけ)(Schistostega Osmundacea)と光藻(ひかりも)(Chromophyton Rosanoffi)を擧げることが出來る。

深山の洞窟の内に、往々不思議なる綠玉色の光輝を發するものがある。これは一種の蘚(こけ)類の幼芽（原絲體）であつて、其の一つ〳〵の細胞は兩凸レンズの形をなし、外より入り來る光線が其の細胞の陰側に偏在せる葉綠粒の所に集注して後、反射して再び外へ出る爲めである。かくて暗い洞窟内の土や岩の上に生へて居る蘚の數百萬の細胞は、全然物理的の方法によりて美麗なる發光現象を呈するのである。

光藻の光るのも同樣の現象である。光藻は單細胞の球形の生物であつて、顯微鏡的微粒として水中に混入し、水垢のやうに水面に浮漂して居る。各細胞は一個の黃褐色の色素體を持つて居る。これは常に陰側に偏在して居る。水面に浮びて居る數萬の細胞に入り來つた光線は、前に述べた光蘚の細胞のやうに再び反射せられて、外に出でゝ黃金色の光輝として吾人の眼に映ずるのである。水面は恰も一面に黃金の粉末をふりまいたやうに見へる。この光藻より起る光的現象は、私は歐羅巴に於て野外に於ても、又溫室內に於ても度々實見した。日本では有名なる植物學者にして東京帝大の植物園長なる三好博士及び仙臺の大學の日比野教授が此の光藻を發見した。三好博士の推唱により、日本の或地方に於て、特に光藻の立派に發生せる所を天然紀念物として保護することゝなつた。以上述べた光蘚や光藻の光るのは、何れも反射現象であつて、一種の僞光と見なすべきものである。

此他に眞正に光を發する植物がある。これは植物とも動物ともつかざる蟲藻類を除いては、悉く菌類に限られて居る。熱帶地方に於ては、以前より發光する蕈類のあることが知れて居た。それは多くは菌蕈科に屬するもので、Agaricus igneus, A. noctilucus, A. phosphoreus, A. Premetheus 等である。然し唯に熱帶地方のみならず、歐羅巴に於ても

發光菌はあるので、南歐地方からウイーン附近に至る迄に發生する Agaricus olearius、及び各地に廣く分布せる食用菌としても珍重されて居るクリタケ(Agaricus melleus)はそれである。クリタケの光るのは菌帽ではなくて、其の根とも云ふべき種々の樹の皮と材部との間にある黒い菌絲束である。私が二十四年前生物學上の研究の爲めに瓜哇に滯在して居た時、私の宿所の附近で、夜になると帽菌類の一種で Mycaena illuminans と呼ぶ蕈が、綠色を帶びた可なり強い光を發するのを見た。其の光は人の足で四十歩位先迄見へる程明るかつた。私は又瓜哇で種々の發光菌類を採集して、これを硝子瓶に入れて寢室に置いた。夜寢室の上から蚊帳を通してこれ等の種々の發光物を見て居ると、何だか妖怪の室に居るやうな感じがした。その光は月の光位の強さがあり、入れてある一つ〳〵の瓶の形や其の近くの物がはつきり分るのみならず、其所にある時計や寒暖計がはつきり讀めた。

若し夜森の中を歩いて見ると、よく木片の光るのに出くわす事がある。これは嚴密に云へば木が光るのではなく、腐朽せる木の内に繁殖して居る菌類が光るのである。この菌類は木から分離して、パンの上に培養することが出來る。歐羅巴で木片に附着して光を發する菌類で最も普通なるものは、前に述べたクリタケである。私は此の他に木に附いて發光する一種の菌類を發見し、假りにこれに菌絲Xと命名した。其の後二十年以上も續けて培養したが、少しも子實體が出來ないから、今以て名のつけ様がない。

木の他に腐朽せる葉も亦光ることがある。私は初め竹の葉の光るのを熱帶で見たが、後になつて歐羅巴でカシやブナの葉の光るのを發見した(第一圖)。私は又日本に來て間もなく、朽ちた葉の光るのを仙臺で見たが、これに就ては何れ改めて精しく報告するつもりである。

一般に興味ある事實は獸肉の光る事である。牛、馬、豚の肉は何れも光る。以前はこれは稀れな現象と思はれて居た

が、多くの都市では決してこれは稀有の事でなく、例令ばプラーグの如きでは普通に見る現象である。これを實見するには、肉屋から買ひ立ての獸肉の掌大のものを三パーセントの食鹽水を入れた皿に載せて置いて、下の方の半分は食鹽水に浸され、上の方は空氣に露出して置く。而してこれを成るべく火の氣のない室に置いて、二日乃至四日位すると、その肉の表面に小さい星のやうに澤山の光點が現はれて來て、日を經るに從つて光點が大きくなつて段々と融合し、終に主として空中に露出して居る肉塊の表面が全體光るやうになる。其の内に肉が腐敗して臭氣を發するやうになると、發光は終に消滅するのである。

此の實驗の結果は何所でも同様ではない。プラーグでは試驗に供した牛肉の八九パーセントが光り、馬肉の六五・五パーセントが光つた。ウイーンではその成績がずつと惡かつた。日本でも獸肉が同様に光るかどうかを知る爲めに、私は目下實驗中である。獸肉の發光する原因は、歐羅巴では獸肉を貯藏する氷室、屠畜場、公設市場等に廣く公布して居る一種のバクテリア（Bacterium phosphoreum）の作用に歸するのである。遠き昔から死んだ海産動物殊に魚類がよく光ることは知れて居た。然し實際に光るのは死んだ魚ではなくて、眼に見へざる微細なるバクテリアであることは、近世生物學の研究によつて始めて分つたのである。

死んだ魚の發光することは極めて普通な現象であることは、私はトリエストの魚市場で地下室に入つて見て實見した。此れに就ては私の著物の中に次のやうに書いて置いた（モーリシュ發光植物、七九頁）。『其の時の光景は驚嘆するの外なく、又永久に私の記憶に殘るであらう。數多き籠の中にある幾百とも知れざる大小各種の魚の表面には、暗夜の星の如く無數の光點が光つて居る。間もなく眼が暗黒に馴れて微量の光線に對しても感覺が鋭敏になると、其の光線は段々集合して、銀白色の光斑となり、中には魚の全表面が光つて見へるものも少くない。多

くの箭よりは特殊なる魔法の光りとでも云ふべき月の光に似たやうな光を發し、何となく人間世界からかけ離れた世界に居るやうな感じを與へた。殊に私の傍に立つて居た子供等が、手を持つて魚に觸れると其の指の先が光つた。面白がつて手を振ると、空中に光つた指の先が動くのが見へる。

發光する獸肉や魚肉は食用として少しも差支へがない。又その發光の原因であるバクテリアは人間には全く無害である。發光する魚肉には別に不快の臭氣はないが、唯他の腐敗バクテリアが發光バクテリアを驅逐して腐敗分解を起し、惡臭を放つやうになると、其の魚は食用に供することが出來ぬやうになるのである。

獸肉や魚肉につく發光バクテリアを採つて、種々の人工的の培養器で純粹培養を行つて研究して見ると、三十種以上の發光バクテリアがあることが證明せられた。

私のやうに多年發光バクテリアの培養を行ひ、比較的强度の光を發する種類のあることを知つて居ると、此のバクテリアを使つて、一種の生けるランプとでも云ふべきものを造り出して見てはどうかと云ふ考が起るのである。

佛蘭西のヅボア（Dubois）と云ふ人が初めて此のバクテリアランプを造つた。然し其のランプは余り强い光を出さなかつた。次で私は別種のバクテリアランプを製造した。それは硝子瓶（コルベン）の内面に養分を混ぜたヂエラチンの薄い層を造り、それに光度の强いバクテリアを培養するのである。一兩日の後にはヂエラチンの內壁に發光バクテリアの集落（コロニー）が無數に發育し、暗い所で見るとコルベン全體が美しい靑綠色の光を發するやうに見える。此のランプの光で暗夜庭園に出て、六十四歩の遠方迄見ることが出來る。此れは必要によつては夜室內の物を探す爲めに、手灯の代りに用ひることが出來る。時計や寒暖計を見ることも出來るし、余り細かくない活字なれば讀めるのである。此のランプは又學術上の目的に使ふことも出來る。光が連續的のものであるから、其の分光的性質を研究することは容易で

ある。然し此のバクテリアの光は余り微弱であるから、普通の光線のやうに暗室で發芽した植物の黄白色の芽生を綠變させることが出來ないが、向日性の現象を起さす事は出來る。例令ばエンドウの芽生をバクテリアランプか又はペリトの皿に培養したバクテリアの光から一〇乃至二〇センチメートルの距離に置けば、光の方に向つて屈曲する(第二圖)。バクテリアの光は青い方の光線を多量に含んで居るから、寫眞板によく感ずるであらうと誰しも思ふが、實際附圖(第三圖)にある五つの圖はそれをよく證明するのである。

然らば、此の光は如何にして發生するか。バクテリアの細胞の内には如何なる作用が起るか。先づ第一に述ぶべきは、これは酸素と水分の存在する所にのみ起る化學作用であることは明瞭である。而して此の發光には極少量の空氣があれば充分である。今一方の閉ぢた硝子管にバクテリアを混入して、光つて居る肉汁を一ぱい入れると、硝子管全體が光るやうに見へる。然るにバクテリアが肉汁の中に含まれて居る酸素を呼吸によつて消費するに從つて、此の光が段々下の方から消へ初めて、終には全體の光が消滅する。此の時硝子管を傾けて小さな氣泡が肉汁の中に入るやうにすると、肉汁が空氣の酸素に觸れると再び光り出すのである。此のあざやかな實驗及び他の事實から、此の發光現象は一種の燃燒作用であることが分る。此の作用は酸素の他に尙ほ水分を要することは、發光バクテリアの附着して居る小塊を皿の上に載せて置くと暫くは光つて居るが、段々乾燥して水分を失ふと終に光は消滅する。それに水を少し與へると直に光り出すのである。私は十九年前に『發光する細胞には遊離酸素と接觸して初めて光る或る物質が形成されて居る』と云ふ説を主唱した。此の發光物質を私はフオトゲーン(Photogen)となづけた。其の後ヅボア(Dubois)ハーヴエー(Harvey)兩氏の精密なる研究によつて、發光動物に於けるフオトゲーンの性質が明かになつた。(Harvey, N. E. The nature of animal light. 1919 Philadelphia and London. ハーヴエー動物光の性質、一九一九)。私はバクテリアに

於て、大體に於て發光動物に於ける研究の結果と一致することは疑ない事と思ふ。ハーヴェー氏によると發光動物には二種の物質があつて、一つはルシフエリン(Luciferin)と云つて、非常に酸素が好きで容易く酸化する物質と、今一つはルシフエラーゼ(Luciferase)と云つて、酸素をルシフエリンに供給する働を有する酵素類似の物質である。而して此の二つの物質を動物から取り出して分離することが出來た。二つの物質を別々にして置くと決して光ることはないが、これを一所にすると光を發するのである。かくて生活現象の中で最も美しく顯著なる一に數ふべき生物の發光が、一種の化學作用として滿足に説明せられたのである。

最近ミュンヘンの動物學者ブフネル氏(Buchner)は誠に有益にして興味ある書物を書いて、其の中に藻類、バクテリア類、酵母類と動物との相互扶助的の共同生活卽ち共生に關する事實を網羅し、これに自己の研究の結果を書き加へて居る。(Buchner, T., Tier und Pflanzen in interzellularer Symbiose. Berlin, 1921. ブフネル動物と植物の細胞間共生、一九二一)。此の書物の主なる結論は、從來の動物と植物の共生の現象は、少數の動物の部類に限られて居ると云ふ考は誤りであつて、想像以上に廣く自然界に存在して居ると云ふのである。今唯二三の例を擧げて見るとアブラムシ類(Blatta und Periplaneta)はバクテリアと共生生活をして居る。蟻の類(Formica fusca, Camponotus ligniperda等)は其の體内にバクテリアを保持して居る。而して其のバクテリアは卵に附着して其の子に傳はつて行く。アリマキ(Aphiden)にも同じく微細なる球形の小體(バクテリア)が附着して居て、これを取り出して人工培養器に移して發育させることが出來た。又虱、毛虱、南京蟲等にも同樣の共生現象のあることが證明せられた。ブフネル氏の書物の内で特に吾々の興味を惹くのは『發光共生』(Leuchtsymbiose)と云ふ章で、其の中に恐らく動物には眞正の發光作用はなくて、動物が光るのは、其の體内に共生的に生活して居るバクテリアの作用であると云ふのである。生きた動物が發光バ

クテリアの附着によつて光ると云ふ事實は私の書物に書いて置いた。(モーリッシュ發光植物、八十頁)。ギヤール氏(Giard) はワイミュリューの海岸で、數萬の小さなエビの類 (Talitrus) の中で、一匹だけは他のエビのやうにとび廻らずに靜かに砂の上をはひながら强い光を發するのに氣がついた。ギ氏はこれは恐らく病的現象であらうと考へて研究して見た。發光するエビを調べて見ると、無數の發光バクテリアを持つて居た。此のバクテリアを持つて居る病的動物の血液を健康の動物に注射すると、其の「光病」が健康體に傳染するのを見た。

此れと同樣に、タルヒヤノフ氏 (Tarchanoff) は發光バクテリアを蛙に注射して、これを發光せしめた。即ち發光バクテリアを含んで居る肉汁の二、三立方センチメートルを背の方にある淋巴嚢に注射すると、バクテリアは其所から血液の中に入り込み、終に全身に循環して全身が光るのであるが、就中舌其他の透明の部分が殊によく光る。イサチエンコ氏(Isatschenko) は一九一〇年の夏ニコラエフ市附近の南方の入江の岸で、蚊の一ユスリカ (Chironomus) がバクテリアを保有して光るのを見た。此の光る蚊は草叢の中に澤山群集して居て、或ものは活潑に飛び廻つて居たが、或ものは既に死んで居たものもあつた。イサチエンコ氏は此の光る蚊は病氣であつて、通例二十四時間以內に死ぬると云つて居る。而白いことには此の蟲は死んで後、三四日間は絕へず光を發して居ることである。同じ物でも光らぬ方の蟲は、捕へて置いても二三週間は生きて居る。然らば此場合は發光バクテリアの寄生の爲めに起つた病的現象と見て宜しいのである。

此迄時々主唱せられたる發光バクテリアとの共生は、病的でなくて普通の健康狀態にも行はれると云ふ說に對しては、私は以前から缺點のない精密なる實驗によつて證明せられざる限り、疑問を以て迎へるの外ないと考へて居た。其の後ピーラントニー氏 (Pierantoni) は螢 (Lampyris noctiluca) に關する研究によりて、此の蟲の發光體には發光バクテリアが棲で居て光るのであるとの說を立てたが、ブフネル氏は全然これに贊成して居る。然し其の發光バクテリアに

關する記載は餘りに簡單で、其の純粹培養が實際光つたかどうかと云ふことも書いてない。ブフネル氏でもピーラントニー氏の記載は懷疑者に對しては不充分であるし、又取り出したバクテリアの集落には果して不純物の混入がないか疑はしいと述べて居る。私も其の懷疑者の一人である。私はブフネル氏が說く如く、或る動物の發光は常に發光バクテリアと共生することによりて起るといふ事實のあることは決して疑ふものでない。然しブフネル氏が主として死せる固定せる材料の研究によりて得たる結果を基礎として立論し、發光微生物の純粹培養を行ふこと稀なるに拘らず、次の如き結論に達せるは餘り早計であると考へる。(ブフネル動物と植物の細胞間共生、三九五頁)。曰く『吾人が生物の發光器官を研究して其の生理を探知すると、あらゆる多細胞動物の發光は、其の動物固有のものでないのと假說に反對すべき著しき反證に出遇はない。此の假說によると、多細胞動物は一つとして自己の力で光を發するものはないと云ふのである。

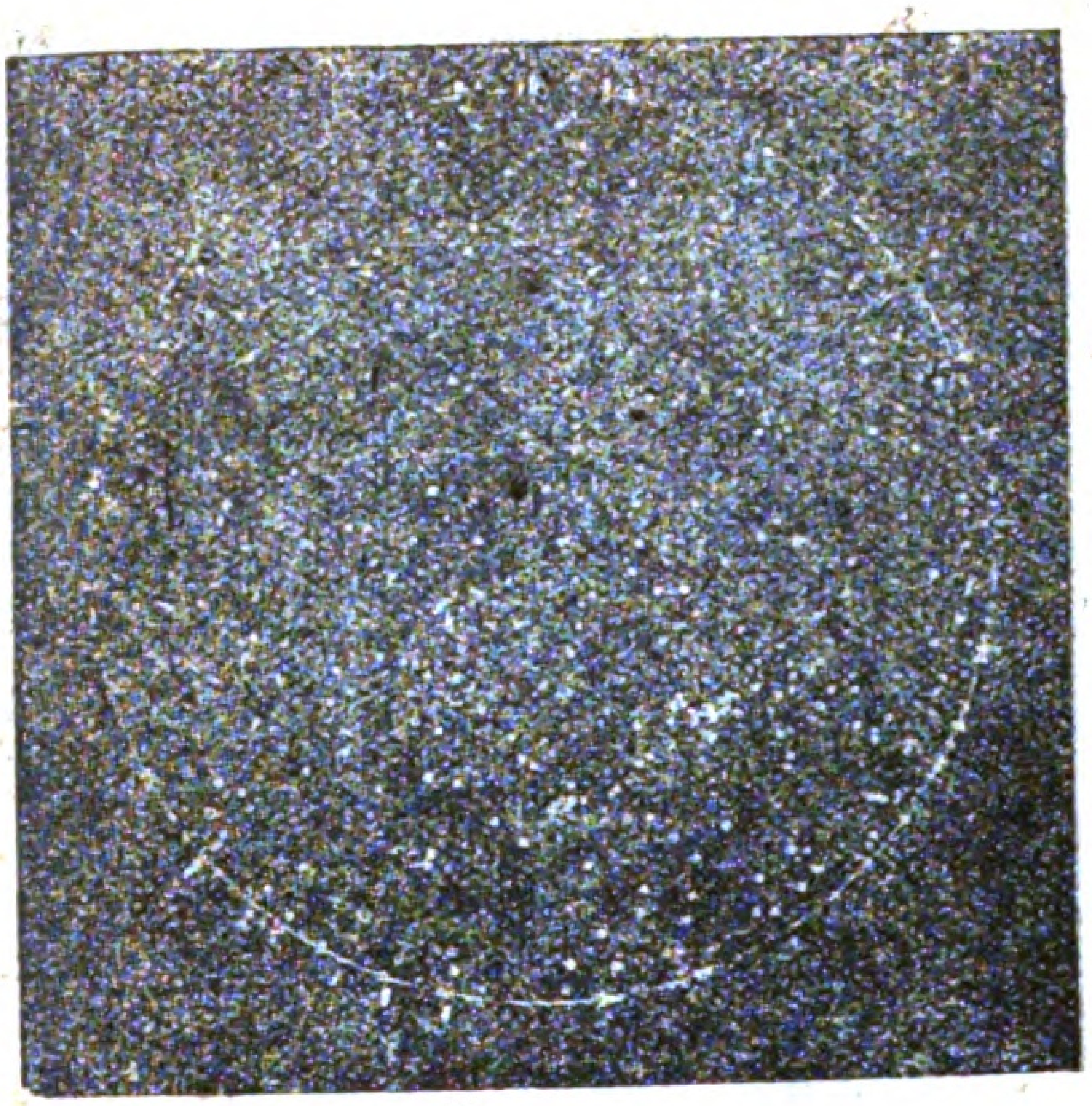
私の經驗によると將來研究の結果は、かくの如き思ひ切つた一般的の假說は恐らく成り立たぬであらうと考へる。

終に臨み一言すべきは、生物の發光の意義は何であるかと云ふことである。動物の發光が多くの場合に於て、其の動物の利益になると云ふことは、爭はれないことである。非常に複雜なる驚くべき發光器官を深海に産する魚や鰕の類が持つて居ることは、暗夜の如き海底で他の動物を引き寄せたり、餌を見つけたりする爲めに便利である。螢の類では、發光が雌雄の接近に便宜を與へる。即ち螢では雌雄共に光を發するが、雌の方は飛ぶことが出來ないで、草の中に止つて居る。そこで若し雌の光ることがなかつたら、飛で居る雄がこれを見つけることは餘程困難であらうと思ふ。然し植物に於ては動物と事情が違つて居る。生態的の說明を與へる際に、好んで空想を交へ過ぎる傾向のある一派の博物學者は、發光菌體は夜の昆蟲を誘引して、蟲が菌體の上を匍匐する際其の體に胞子をつけて、其の散布を助けるものであると考へて居る。然しクリタケでは子實體は少しも光らずして、黑い太き菌絲束が光るのである。この菌絲束は樹の皮

と材部との間に廣がつて居るから、飛で來る昆蟲には少しも見へないのである。然らばバクテリアはどうであるか。これも又或學者の考へる如く、海岸などで動物の死體に附着して繁殖し、發光によりて夜の動物を誘引し、それに附着して廣く分布するのであるか。私はさうは考へない。此の種のバクテリアの分布には、海水の運動、即ち風波や潮の干滿や海流等によつて充分行はれるのであつて、分布の手段として發光すると云ふやうな事は少しも必要がないのである。

自然が與へた生物の光は、余り強くはないが、或點から云へば理想的の光――即ち冷光である。我々の用ひる光の殆ど凡ては、蠟燭にしても、瓦斯の光にしても　電燈にしても、理屈から云へば非常に不經濟なる光である。それはこれ等の光は、光線の他に多量の熱を發するからである。瓦斯の光の如きは、それが爲め又加熱に用ひられる位である。そこで最近の光明工學に於いては、出來るだけの熱のない冷光を發見せんことに努力して居るのである。此の方面に於ては多少の進歩があつたが、倘理想の彼岸に達するには前途遼遠である。然し人力の未だ及ばざる所を自然は既に早くより成功して居るのである。暗い夜に飛ぶ星かと思はるゝ螢の光、深林の中に妖怪の如く光る茸の光、船の龍骨が波を切つて進む時に、刺戟によりて小さな電光の如くにきらめくクラゲの光、死魚の上に繁殖するバクテリアの光等は、殆ど熱線のない理想的の光、即ち冷光である。多くの他の場合に於けると同樣に、此の場合でも自然は人間が不幸にして未だ達することの出來ない模範を示して居るのである。

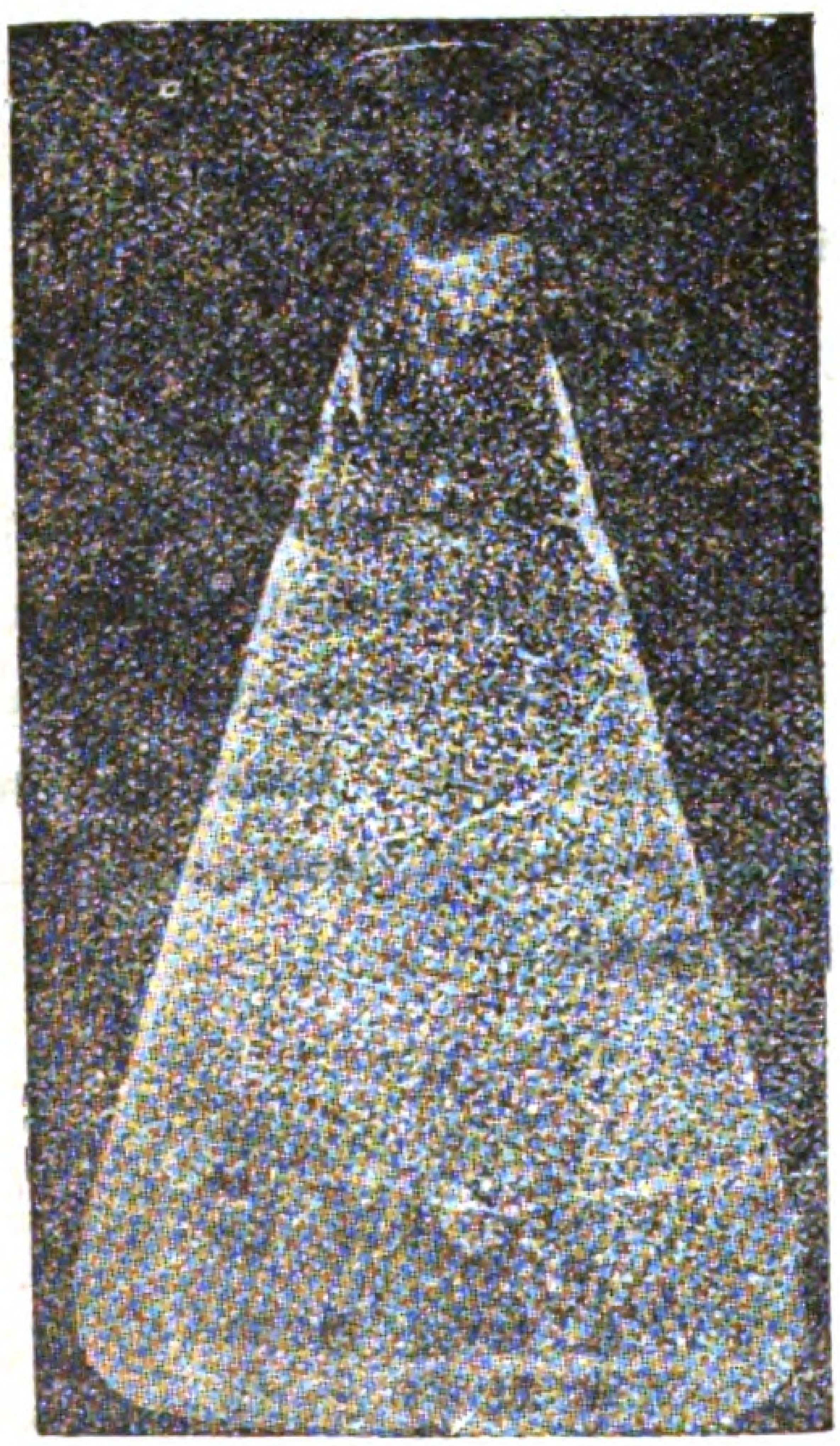
（一九二二年十二月仙臺にて）



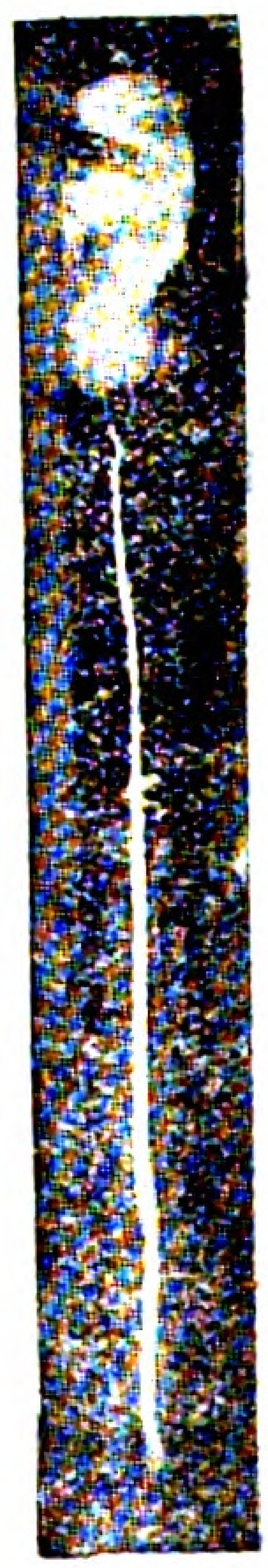
2



3



1



4



5

第三圖

1. 自己の光で撮影したバクテリアランプ。

2. ペトリの皿に培養せる發光バクテリア（Bacterium Phosphorum）の發光集落の寫眞、感光時間十五時間。

3. 十日間培養した發光バクテリアの集落、バクテリアは内部よりは表面の方が強く光る。

4. 自己の發光にて撮影せる發光バクテリアの穿刺培養。

5. バクテリアの光でとつた詩人シルレルの半身像の寫眞。



第　二　圖



第　一　圖

Fig. 1. Ein verwesendes Blatt der Buche (Fagus silvatica). Hauptsächlich die hellen, in Wirklichkeit weisslich gelben Stellen leuchten.

Fig. 2. Positiver Heliotropismus von Erbsenkeimlingen, hervorgerufen durch das Licht mehrerer leuchter, in einer Glasschale befindlicher Strichkulturen von Bacterium phosphoreum. Alle Keimlinge erscheinen zum Bakterienlichte hingekrümmt.

第一圖　腐朽せるブナ（Fagus sylvatice）の葉、實際は黃白色で白い部分が主として光るのである。

第二圖　硝子皿に培養したる發光バクテリア（Bacterium Phosphoreum）の光によつて起れるエンドウの芽生の向日性現象、芽生は全部バクテリア光の方向に屈曲せるを見るべし。

Auffinden, der Geschlechter begünstigen. Beim Johanniskäfer leuchten beide Geschlechter. Das Weibchen aber kann nicht fliegen, sitzt im Grase und würde nur schwer von dem fliegenden Männchen gefunden werden, wenn es nicht ein Lichtsignal darbieten würde.

Anders steht aber die Sache bei der Pflanze. Manche Naturforscher, die bei biologischen Erklärungen ihrer Phantasie allzu grossen Spielraum gewähren, meinen, die leuchtenden Hutpilze locken mit ihrem Lichte Nachtinsekten an und diese sollen, indem sie sich beim Überkriechen der Pilze mit Sporen beladen, für die Verbreitung der Pilze beitragen. Aber dem gegenüber kann man einwenden, dass der Hut des Hallimaschpilzes gar nicht leuchtet, wohl aber sein aus schwarzen dicken Strängen bestehendes Mycel. Dieses wird aber von den fliegenden Insekten gar nicht gesehen, weil es sich zwischen Holz und Rinde ausbreitet.

Und die Bakterien? Sollen diese, wie man angenommen hat, wirklich durch ihre Lichtentwicklung, wenn sie sich auf toten Tieren am Meeresstrande vermehren und ausbreiten, Nachttiere anlocken und durch diese verbreitet werden? Ich glaube nicht. Für die Verbreitung der Bakterien ist durch die Bewegung des Meerwassers, den Wellengang, den Sturm, die Brandung und die Meeresströmungen in so ausgezeichneter Weise gesorgt, dass sie der Lichtentwicklung hiezu nicht bedürfen.

Mit dem Lichte der Lebewesen hat uns die Natur zwar ein wenig intensives aber in gewissem Sinne ideales Licht geschenkt—ein kaltes Licht. Fast alle unsere Lichtquellen, das Kerzen—, Gas— und elektrische Licht sind im Grunde genommen sehr unökonomisch, da sie neben Licht auch viel Wärme entwickeln. Das Gaslicht kann ja geradezu zum Heizen verwendet werden. Daher hat die moderne Beleuchtungstechnik das eifrige Bestreben, wenn möglich, ein kaltes Licht zu schaffen. Obwohl bereits in dieser Richtung einige Fortschritte gemacht worden sind, sind wir doch von Ideal noch weit entfernt. Was aber die menschliche Technik noch nicht erreicht, das hat die Natur schon lange erzielt.

Das Licht des gleich einem beseelten Sterne dahin fliegenden Johanniskäferchens, das magische Licht des im Urwalde lebenden Hutpilzes, der blitzartig auftauchen Schein der vom Schiffskiel gereizten Meduse und die mikroskopisch kleine Lampe der auf dem toten Fisch hausenden Leuchtbakterie—all diese Lebewesen spenden ein ideales, von Wärmestrahlen fast freies Licht, ein kaltes Licht. Wie in so vielen Fällen erscheint uns die Natur auch hier als ein leider noch unerreichtes Vorbild.

im Laufe von 24 Stunden und es war interessant zu sehen, dass sie noch nach dem Tode 3-4 Tage fortfuhren zu leuchten, während die nicht leuchtenden noch 2-3 Wochen in der Gefangenschaft weiter lebten.

In den zuletzt angeführten Fällen handelte es sich um eine pathologische Erscheinung als Folge von Leuchtbakterieninfektion. Hie und da auftauchenden Ansichten, dass die Leuchtsymbiose auch normal sein kann, trat ich seinerzeit skeptisch entgegen, solange nicht einwandfreie und exacte Versuche darüber vorliegen. Inzwischen haben nun die Untersuchungen von PIERANTONI für das Johanniskäferchen (Lampyris noctiluca) zu beweisen versucht, dass der Leuchtkörper tatsächlich der Sitz von Leuchtbakterien sei und BUCHNER stimmt dem vollkommen zu. Die Befunde über die angeblichen Bakterien sind ziemlich kurz beschrieben, auch gibt der Autor gar nicht an, dass seine Reinkulturen wirklich geleuchtet hatten. Auch BUCHNER kann die Bemerkung nicht unterdrücken, dass PIERANTONIS Schilderung für einen Skeptiker zu kursorisch sei und dass auch die Möglichkeit, die erhaltenen Kolonien, konnten auf Verunreinigen zurückzuführen sein, zu Recht besteht. Ich gehöre nun tatsächlich zu diesen Skeptikern. Es fällt mir nicht ein, daran zu zweifeln, dass nach den Ausführungen BUCHNERS bei leuchtenden Tieren Symbiosen mit Bakterien ähnlichen Organismen vorliegen und dass das normale Leuchten gewisser Tiere auf einer Leuchtsymbiose mit Leuchtbakterien beruhen mag. Wenn aber BUCHNER jetzt schon, wo viele Schlüsse nur auf Grund von totem und fixiertem Material gewonnen worden sind, und Übertragungskulturen der Leuchtsymbionten auf künstliche Nährmedien vielfach noch ausstehen, sich zu dem folgenden Satze versteigt (p. 395), so geht er wohl zu weit. "Wenn man aber die Fälle der übrigen Licht aussendenden Organe überschaut und das, was man über ihre Physiologie weiss, durchmustert, so begegnet man nirgends unüberwindlichen Schwierigkeiten, die sich einer Hypothese entgegenstellen würden, dass das gesamte Leuchten der vielzelligen Tiere kein wirklich tierisches ist." Nach dieser Hypothese würde also kein mehrzelliges Tier die Fähigkeit haben, selbständig zu leuchten.

Die Zukunft wird aber nach meiner Erfahrung wahrscheinlich dartun, dass diese Hypothese in einer solchen Ausdehnung nicht richtig sein dürfte.

Zum Schlusse noch die Frage: Was ist der Sinn des Leuchtens? Dass das Leuchten der Tiere diesen in vielen Fällen zu Nutzen gereicht, wird wohl bejaht werden müssen. Die wunderbaren und höchst komplizierten Leuchtapparate die man bei Fischen, Krebsen namentlich der Tiefsee gefunden hat, lassen whol keinen Zweifel darüber aufkommen, dass diese Vorrichtungen in der pechschwarzen Finsternis, die diese Tiere in der Tiefe umgibt, dazu dienen mögen, andere Tiere anzulocken, die Beute besser wahrzunehmen und leichter überfallen zu können. Bei den leuchtenden Käfern dürfte das Licht das gegenseitige

in dem unsere Kenntnisse über das sich gegenseitig fördernde Zusammenleben von Algen, Bakterien und Hefen mit Tieren übersichtlich zusammengestellt und durch neue Untersuchungen ergänzt werden. Das Hauptergebnis dieses Werkes liegt nun darin, dass die Symbiose zwischen Pflanze und Tier durchaus nicht, wie man bisher anzunehmen geneigt war, im grossen and ganzem auf wenige Tiergruppen beschränkt, sondern sehr weit verbreitet ist. Um nur einige wenige Beispiele zu nennen: Alle zu der Famile der Schaben (Blatta und Periplaneta) gehörenden Insekten leben in Symbiose mit Bakterien. Manche Ameisenarten (Formica fusca und Camponotus ligniperda etc.) führen in ihrem Körper Bakterien, die schon durch die Eier auf die nächste Generation übertragen werden.

In den Blattläusen (Aphiden) finden sich gleichfalls kleine rundliche Gebilde, die man aus dem Körper der Blattläuse herausgezüchtet und auf künstlichen Nährmedien zur weiteren Entwicklung gebracht hat. Auch für die Kleider, Kopflaus und die Bettwanze wurden Symbiosen festgestellt.

Was aber das Buch von BUCHNER für uns besonders interessant macht, ist ein Kapitel, das den Titel "Leuchtsymbiose" führt und das nichts geringeres behauptet, als dass es wahrscheinlich überhaupt kein tierisches Licht gibt, sondern dass, wenn Tiere leuchten, dies auf Leuchtbakterien zurückzuführen ist, die in den betreffenden Tieren symbiotisch leben. Dass lebende Tiere in Folge von Infektion mit Leuchtbakterien leuchten können, ist in meinem schon erwähnten Buche angegeben worden (p. 86). GIARD sah am Strande von Wimereux unter Tausenden von Krebschen (Talitrus), die nicht leuchteten, einen, der im Gegensatz zu den anderen nicht sprang, sondern langsam über den Strand dahinkroch und ein intensives Licht verbreitete. GIARD vermutete ganz richtig, dass es sich hier um eine krankhafte Erscheinung handelte. Die leuchtenden Exemplare waren alle von Leuchtbakterien durchsetzt und, wenn man gesunde Tiere mit dem bakterienhaltigem Blute der kranken impfte, so konnte man diese "Lichtseuche" auch auf die gesunden übertragen. In ähnlicher Weise konnte TARCHANOFF durch Impfung mit Leuchtbakterien Frösche leuchtend machen. Wenn man dem Frosche einige Kubikcentimeter leuchtender Bouillon in den Lymphsack des Rückens einspritzt, so gelangen die Bakterien von hier aus allmählich in das Blut und machen nach und nach den ganzen Körper, insbesondere die Zunge und andere durchscheinende Teile, leuchtend. ISATSHENKO beobachtete während des Sommers 1910 am Ufer des südlichen Bug in der Nähe der Stadt Nicolaieff das Leuchten der Zuckmücken (Chironomus) als Folge von Bakterieninfektion. Die leuchtenden Mücken waren hier überall unter Gebüschen und im Rasen in grossen Mengen vorhanden. Die einen waren noch lebend und konnten noch fliegen, die anderen waren bereits tot. Der genannte Autor hielt die leuchtenden Fliegen für krank, sie starben gewöhnlich

2. Photographie leuchtender Kolonien von Bacterium phosphoreum gewonnen in ihren eigenem Lichte. Die Kolonien befinden sich in einer Schale. Die Expositionszeit betrug 15 Stunden.
3. Mikrophotographie einer zehn Tage alten Kolonie. Die Bakterien leuchten an der Oberfläche viel stärker als im Inneren.
4. Photographie einer Strichkultur von Bacterium phosphoreum in eigenem Lichte.
5. Photographie einer Schillerbüste im Bakterienlichte.

Wie kommt das Licht zustande? Was geht in der Zelle vor? Zunächst sei hervorgehoben, dass es sich hier um einen chemischen Vorgang handelt, der nur bei Gegenwart von Sauerstoff und Wasser abläuft. Es genügt schon eine ganz kleine Menge von Luft. Füllt man eine unten geschlossene Glasröhre mit einer durch Bakterien leuchtend gemachten Bouillon, so erscheint unmittelbar nach dem Füllen die ganze Flüssigkeitssäule leuchtend. Nach und nach beginnt, da die leuchtenden Bakterien den in der Nährflüssigkeit absorbierten Sauerstoff verzehren, die Flüssigkeit von unten her zu erlöschen und schliesslich erlischt sie ganz. Wendet man nun die Röhre um, wobei man dafür sorgt, dass ein kleines Luftbläschen in der Bouillon aufsteigt, so beginnt die Flüssigkeit in Berührung mit Sauerstoff sofort wieder zu leuchten. Dieser schöne Versuch und andere Tatsachen lehren, dass die Lichtentwicklung einen Verbrennungsprozess darstellt. Dabei ist auch Wasser erforderlich. Streicht man eine kleine Menge leuchtender Bakterienmasse auf eine Glasplatte auf, so leuchtet sie nur so lange als eine gewisse Menge Wasser vorhanden ist. Sobald diese verdampft ist, erlischt das Licht, fügt man aber neuerdings Wasser hinzu, so erscheint das Licht wieder. Schon vor 19 Jahren sprach ich daher die Ansicht aus "dass in den leuchtenden Zellen eine Stoff gebildet wird, der im Kontakte mit freiem Sauerstoff zu leuchten vermag." Diesen leuchtenden Stoff nannte ich provisorisch Photogen. Inzwischen haben zwei ausgezeichnete Forscher R. Dubois und Harvey [1] die Natur des Photogens für leuchtende Tiere näher aufgeklärt und ich zweifle nicht, dass sich die Sache bei den Pilzen im wesentlichen ähnlich verhalten wird. Nach Harvey finden sich in leuchtenden Tieren 2 Stoffe, das Luciferin, ein sehr sauerstoffgieriger und leicht oxydabler Körper, und die Luciferase, ein fermentartiger Stoffe, der den Sauerstoff auf das Luciferin überträgt. Es gelang beide Körper aus Tieren auszuziehen und zu separieren. Getrennt leuchten sie nicht. Bringt man sie aber zusammen, so erscheint Licht. So ist das Lebenslicht auf einen chemischen Vorgang zurückgeführt und eine der schönsten und auffallendsten Lebenserscheinungen in befriedigender Weise erklärt worden.

In letzter Zeit erschien ein anregend geschriebenes, wertvolles Buch von dem Zoologen P. Buchner [2] in München,

[1] Harvey E. N. The Nature of a animal light. 1919 Philadelphia and London.

[2] Buchner P., Tier und Pflanze in intrazellularer Symbiose. Berlin 1921.

Umgebung etwas Phantastisches und Geisterhaftes, das nur noch gesteigert wurde, als die um mich herumstehenden Knaben ihre Finger durch Berührung mit den Fischen leuchtend machten und unter staunender Bewunderung mit den leuchtenden Fingerspitzen in der Luft herumfuhren."

Es sei besonders harvorgehoben, dass sowohl leuchtendes Fleisch als auch solche Seetiere genussfähig sind und dass auch die das Leuchten verursachenden Leuchtbakterien für den Menschen unschädlich sind. Solche Fische haben auch noch keinen unangenehmen Geruch; erst wenn die stinkende Fäulnis einsetzt und andere Bakterien die leuchtenden verdrängen, werden die Fische ungeniessbar. Sowie vom Fleische der Schlachttiere hat man auch von den leuchtenden Fischen die Leuchtbakterien in Reinkulturen auf verschiedenen künstlichen Nährmedien gezüchtet und konnte feststellen, dass es sicher mehr als 30 Leuchtbakterien gibt. Wenn man sich längere Zeit mit der Kultur der Leuchtbakterien abgibt und bei einzelnen Arten eine verhältnismässig starke Lichtintensität bemerkt, so frägt man sich schliesslich, ob es denn nicht möglich wäre, die Leuchtbakterien zu einer Art lebenden Lampe zu verwenden. Das hat zuerst Dubois in Frankreich getan, seine Lampe litt jedoch an verschiedenen Mängeln. Ich habe dann eine andere Lampe hergestellt, die im wesentlichen aus einem Glaskolben besteht, dessen innere Oberfläche mit einer dünnen Schichte Nährgelatine ausgekleidet ist und mit einer gut leuchtenden Bakterienart geimpft wurde. Nach 1-2 Tagen entwickeln sich an der ganzen Innenwand so reichlich Kolonien, dass der Kolben in wunderschönem bläulich grünem Lichte erglänzt. In diesem Zustande kann das Licht der Lampe während der Nacht in einen Garten auf 64 Schritte wahrgenommen werden. Man kann sie zur Not als Nachtlampe verwerten, um einem Gegenstand im Zimmer zu finden, man kann dabei die Uhr, das Thermometer erkennen, ja sogar groben Druck lesen.

Eine solche Lampe kann auch wissenschaftlichen Zwecken dienen. Da das Licht ein lange andauerndes ist, kann man seine spektrale Zusammensetzung bequem erforschen, man kann sich überzeugen, dass das Bakterienlicht, weil es zu schwach ist, ein sichtbares Ergrünen bei Keimlingen nicht hervorruft. Hingegen werden diese im Pilzlichte leicht heliotropisch. Stellt man z, B. Keimlinge der Erbse in einer Entfernung von 10-20 cm vor die beschriebene Lampe oder vor in einer Petrischale befindliche leuchtende Strichkulturen, so krümmen sie sich scharf der Lichtquelle zu (Fig. 2). Da das Licht der Pilze reich an blauen Strahlen ist, so konnte man schon mit grosser Wahrscheinlichkeit annehmen, dass das Pilzlicht auch auf die photographische Platte wirken durfte. Die Figuren 1-5 auf der beistehenden Tafel (Fig. 3) geben einen deutlichen Begriff davon.

Fig. 3.

1. ist eine Bakterienlampe, die in ihrem eigenen Lichte photographiert wurde.

Eintreffen in Sendai das Leuchten von faulen Blättern auch für Japan festgestellt. Ich werde darüber an einem anderen Orte ausführlich berichten.

Weitere Kreise wird es interessieren, dass auch das Fleisch der Schlachttiere leuchten kann, das Fleisch des Rindes, des Pferdes und des Schweines. Man hielt dies früher für eine Seltenheit, aber in manchen Städten z. B. in Prag ist dies eine häufige Erscheinung. Um sich davon zu überzeugen, lege man ein etwa handgrosses Stück des vom Fleischer eben gekauften Fleisches auf einen Teller so in eine 3 prozentige Kochsalzlösung, dass die untere Hälfte des Fleisches in die Flüssigkeit und die obere in die Luft ragt. Verläuft der Versuch in einem ungeheizten Zimmer, was zu empfehlen ist, so sieht man oft schon bereits nach 2-4 Tagen helle Sternchen auf der Oberfläche auftauchen, die sich im Laufe der Zeit zu mehr oder minder grossen leuchtenden Inseln vereinigen und schliesslich kann die ganze, insbesondere die aus dem Wasser herausragende Oberfläche leuchten. Sobald die stinkende Fäulnis einsetzt, hört das Leuchten auf.

Die Ergebnisse der Versuche sind nicht in allen Orten gleich. In Prag (Böhmen) leuchteten von den auf diese Weise untersuchten Proben des Rindes 39%, des Pferdes 65.5%. In Wien aber war das Resultat viel ungünstiger und nun bin ich damit beschäftigt, nachzusehen, ob auch in Japan das Fleisch die Erscheinung des Leuchtens zeigt. Die Ursache des Leuchtens des Schlachtviehfleisches ist eine in den Eiskellern, wo Fleisch regelmässig aufbewahrt wird, in Schlachthäusern und auch in den Markthallen Europas weit verbreitete Bakterie, das Bacterium phosphoreum. Wohl seit den ältesten Zeiten bekannt ist das Leuchten toter Seetiere, insbesondere der Fische. Aber erst die moderne Biologie konnte dartun, dass nicht der tote Fisch sondern wieder ein Lebewesen, eine Bakterie leuchtet. Von der weiten Verbreitung leuchtender toter Fische konnte ich mich in Triest überzeugen, als ich mir hier den Eintritt in den Fischkeller verschaffte, wo die auf dem Fischmarkt zum Verkaufe angebotenen Fische über Nacht aufbewahrt werden. Ich sagte darüber an einem anderen Orte:[1] "Das Schauspiel, welches sich mir hier darbot, war überraschend und wird mir in dauernder Erinnerung bleiben. In zahlreichen Körben, in welchen viele Hunderte grosser und kleiner Fische der verschiedensten Art angehäuft waren, tauchten auf der Oberfläche der Fische gleich den Sternen am nächtlichen Himmel zahllose Lichtpunkte auf, die, sobald sich das Auge an die Finsternis gewöhnt und für kleine Helligkeiten grosse Empfindlichkeit erhalten hatte, immer deutlicher wurden, zu silberweissen Flecken zusammenflossen und den Fisch nicht selten an seiner ganzen Oberfläche leuchtend erscheinen liessen. Die vielen Körbe strahlten ein eigentümliches, magisch erscheinendes, der Mondbeleuchtung vergleichbares Licht aus und verliehen der ganzen

[1] Molisch H., l. c. p. 70.

Anregung Miyoshis wurde diese Alge für einen bestimmten Ort in Japan, wo sich die Lichterscheinung besonders schön zeigt, als Naturdenkmal erklärt, um auch künftigen Geschlechtern erhalten zu bleiben.

In beiden Fällen, sowohl bei dem Leuchtmoos als auch bei der Goldalge handelt es sich um eine Reflexerscheinung, also nur um ein scheinbares Leuchten.

Es gibt aber auch Pflanzen, die wirklich leuchten, und diese sind, wenn man von den Peridineen absieht, die bald zu den Pflanzen bald zu den Tieren gestellt werden, ausschliesslich auf die Pilze beschränkt.

In den Tropen kennt man schon seit langer Zeit einzelne Hutpilze, die Licht entwickeln. Es handelt sich meist um Blätterpilze: Agaricus igneus, A. noctilucens, A. phosphoreus, A. Prometheus und andere. Aber nicht nur in den Tropen auch in Europa gibt es leuchtende Pilze, so der in Südeuropa und bis in die unmittelbare Nähe von Wien vorkommende Agaricus olearius und der überaus verbreitete und als Speisepilz sehr geschätzte Hallimasch, Agaricus melleus. Bei diesem leuchten aber nicht der Hut sondern seine schwarzen Wurzel—oder Myzelstränge, die zwischen Rinde und Holz verschiedener Bäume sich vorfinden. Als ich mich vor 25 Jahren biologischer Studien halber auf Java aufhielt, konnte ich lange Zeit in der Nähe meiner Wohnung während der Nacht einen kleinen Hutpilz (Mycaena illuminans) beobachten, der ein grünliches ziemlich intensives Licht entwickelte, das noch auf 40 Schritte zu sehen war. Hier auf Java sammelte ich verschiedene lichtentwickelnde Pilze, gab sie in Gläser und stellte sie in meinem Schlafzimmer auf. Wenn ich dann in der Nacht durch das Mosquitonetz meines Bettes mit wohl ausgeruhtem Auge die verschiedenen leuchtenden Objekte betrachtete, glaubte ich in einer Geisterstube zu sein. Das Licht glich in seiner Intensität dem Mondlicht und war so stark, dass man die Form der Gläser und der nächsten Gegenstände erkennen, die Uhr und das Thermometer deutlich ablesen konnte.

Wer aufmerksam in der Nacht den Waldboden betrachtet, wird vielleicht schon manchmal leuchtendes Holz gesehen haben. Dieses ist in der Tat gar nicht so selten. Es leuchtet aber streng genommen nicht das in Zersetzung befindliche Holz, sondern ein lebender Pilz, der das Holz durchwuchert. Man kann den Pilz leicht aus dem Holz rein herauszüchten und auf Brod lange in Kultur halten. Der Pilz, der in Europa das Leuchten des Holzes am häufigsten hervorruft, ist der schon erwähnte Hallimasch. Ich fand noch einen andern im Holze Licht entwickelnden Pilz und nannte ihn vorläufig Mycelium X, da er trotz bereits 20 jähriger fortgesetzter Kultur keine Fruchtkörper bildet.

Nicht nur Holz, auch tote in Verwesung befindliche Blätter leuchten. Ich sah leuchtende Bambu-Blätter zuerst in den Tropen, später fand ich dieselbe Erscheinung an Eichen—und Buchenblättern (Fig. 1) in Europa und nun habe ich bereits wenige Tage nach meinem

LEUCHTENDE PFLANZEN.

Von

Prof. Dr. Hans Molisch (Sendai).

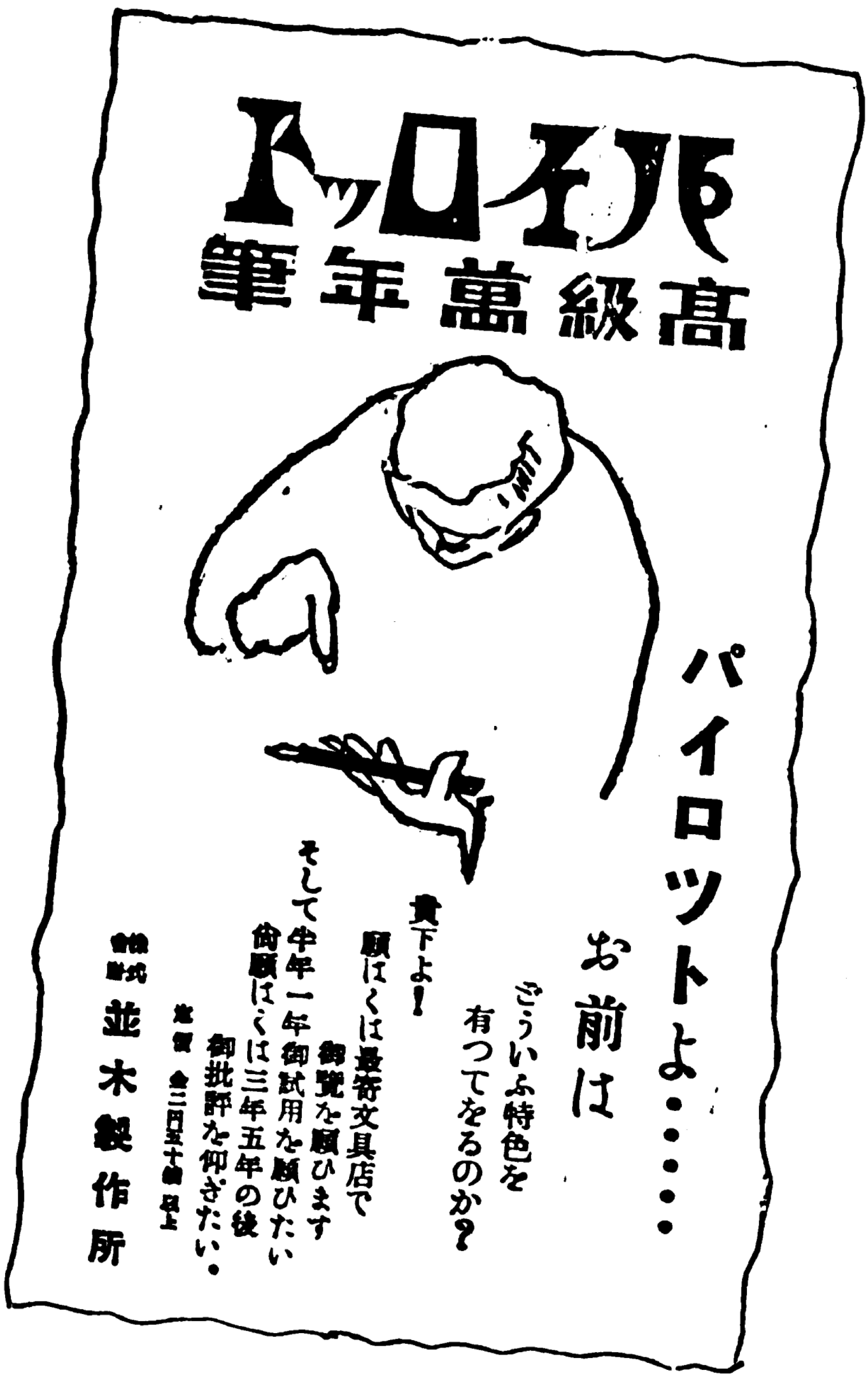
Unsere Kenntnisse von der Entwicklung von Licht durch die Pflanze haben in den letzten 25 Jahren so grosse Fortschritte gemacht und haben in der wissenschaftlichen Welt so grosses Interesse erregt, dass es vielleicht nicht unangebracht erscheint, auch weiteren Kreisen diese Erfolge bekannt zu machen. Ich komme daher gerne der Einladung des verdienten Herausgebers dieser Zeitschrift, einen gemeinverständlichen Artikel über das erwähnte Thema zu verfassen, nach, um so mehr, als ich in der glücklichen Lage bin, vielfach aus eigenen Erfahrungen zu schöpfen.[1]

Wenn man von leuchtenden Pflanzen spricht, so muss man wohl unterscheiden zwischen solchen, die nur scheinbar leuchten und solchen, die wirklich Licht entwickeln. Ein Beispiel einer scheinbar lichtspendenden Pflanze ist das sogenannte Leuchtmoos Schistostega osmundacea) und die Goldalge (Chromophyton Rosanoffi). In den Spalten und Grotten des Urgebirges bemerkt man zuweilen einen wunderbaren smaragdgrünen Glanz. Er rührt von dem Vorkeim eines Laubmooses her, dessen Zellen wie bikonvexe Linsen gebaut sind, das einfallende Licht auf die stets an der Schattenseite befindlichen Chlorophyllkörner konzentrieren und von hier wieder zurückwerfen. Millionen solcher Mooszellen, die die Oberfläche eines Erde oder Felsspaltes bedecken, rufen auf rein physikalische Weise diese reizende Lichterscheinung hervor.

Ähnlich verhält es sich mit der Goldalge. Sie ist ein einzelliges, kugeliges Lebewesen, das sich im Wasser einem Infusor gleich herumtummelt und sich schliesslich auf die Wasserfläche aufsetzt. Jede Zelle hat einen gelbbraunen Farbstoffträger, der sich gleichfalls stets auf die Schattenseite begibt. Wenn nun tausende solcher Zellen auf dem Wasserspiegel sitzen, so werfen sie das einfallende Licht ähnlich wie die vorher erwähnten Mooszellen zurück und rufen dadurch für das menschliche Auge einen goldigen Glanz hervor. Das Wasser erscheint wie mit glänzendem Goldstaub bedeckt. Das von der Goldalge hervorgerufene Lichtphaenomen habe ich in Europa sowol in Gewächshäusern als auch im Freien oft gesehen.

Es verdient hervorgehoben zu werden, dass der rühmlichst bekannte japanische Botaniker M. Miyoshi, Direktor des botanischen Gartens in Tokyo, und nach ihm Prof. Hibino in Sendai die Goldalge auch für Japan entdeckt haben. Auf

[1] Molisch H., Leuchtende Pflanzen. 2. Auflage 1912, Jena bei G. Fischer.


パイロット
高級萬年筆
パイロットよ・・・・
お前は
どういふ特色を
有つてをるのか？
貴下よ！
願はくは最寄文具店で
御覧を願ひます
そして半年一年御試用を願ひたい
尚願はくは三年五年の後
御批評を仰ぎたい。
定價 金三圓五十錢以上
株式會社
並木製作所

賀川豊彦三名著

星より星への通路

四十六版

愛の結晶と歌で稱せらるゝは賀川氏である。現代の荒みに荒める精神界を根こそぎに革命せんとする著者の鋭き血の迸りは詩となり、歌となり文章となり遂に本書となつた、氏の本色は此書の詩、歌、文章に依りて代表されると云つても宜しい。

定價貳圓
送料十七錢
四六判
布裝上製

死線を越えて

（二八三版）

定價參圓
送料十九錢

太陽を射るもの

（一八三版）

定價貳圓八十錢
送料十九錢

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

賀川豊彦著（第十二版）定價貳圓
送料十七錢
四六判上製

生存競爭の哲學

我々は何故に生存するか？

生存競爭は愛の力を超越するか？

本書は賀川氏の人生哲學から出發して、生存競爭の原理を闡明したものだ、生存競爭と成長競爭、生存競爭と生存互助の哲理を解說し、生存競存は建設か、破壞か――のどちらであるか――を指示し、生命力と愛の力は生存競爭を超越するものであることを進化論的に實證して人類の向ふべき針路を科學的に解示し、相互扶助と生存競爭が延び上らんとする生命の倫道であることを斷言して第一線に立たんとする先驅者たちへのはなむけとした。

生命力は生存競爭を超越するか？

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

理學博士 石原純著

增補 アインスタインと相對性理論

定價貳圓貳拾錢

送料十七錢

四六判上製

ニュートン引力を否定して全科學界を革命せる「相對性理論」と、氏の人となりを知ることの出來る一番評判のよい書籍は本書です、著者が石原氏であることが何より本書の權威です、そして三十六版を重ねたことによつても本書の權威を推知できます、ア氏の著作案內も本書に收められてゐます、それに寫眞も七葉挿入されて光彩を添へてゐます。

三十六版

アインスタイン氏及相對理論を知る最善の道しるべ

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

長篇小説

結婚禮讃

◇第廿二版◇武林無想庵作◇

戀の前にはすべてが虚無だ！

虚無だと鞄一つになつて放浪の旅に出たが『遠くへ行つちやいやよ、私は死ぬつは平氣ですよ』と媚びる如く接吻した奥さんの姿が執拗にコビりついて又鎌倉に舞ひ戻つた、暗いわねと…………私語くやうに云つてホツト熱い溜息をついた。

その息を感ずると私のからだはブル〳〵震へた女の髪の毛が私の頬に觸れさうになつた、そのとたん…………奥さんの眼が鱗のやうにキラリと光つた思はずだき緊めた奥さんの唇の上へ熱鐵のやうに濺いだはじめての接吻より……情緒を描くに天下一品、戀の前には大膽不敵なる無想庵のいつはらざる横戀慕の實錄である

深刻無比人妻への戀の實錄！

定價貳圓卅錢
送料十七錢
四六判上製

發行所 東京市芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

◎ラヂオレーヤー愛用者報告 (26)

ぜんそく

毎年冬期發するぜんそく快癒し
女子供のしもやけにも
實に偉効
代議士望月小太郎氏偉効に驚歎し議會宣傳

僕は毎年冬となるとぜんそくが發して苦しむのであるが今年は先頃買入れたラヂオレーヤーのお蔭で快癒し實に驚いた初め買ふ時ぜんそくによいと聞き半信半疑で實は半額と言ふので丸きり欺されても十七圓五十錢だと笑つて買つたが其のラヂオレーヤーで永年の病氣が治つたので實に嬉しく會ふ人毎にラヂオレーヤーの偉効を宣傳してゐる先頃も近所の女中が手がシモヤケでクヅレ掛つてゐたのを見て早速應用して見たら實に驚いたクヅレてゐたシモヤケが三四回で水を引く如く快癒したには僕自身の驚嘆は兎も角女中の喜びはなかつた何んでも其女中は毎年シモヤケに苦しみ泣いて暮すと申しゐたりしがこんな喜ばしき事はないと申し一具買ひ入れたいと申し居りしに付貴店所在地を教へやり申候内の子供もヒゞにて實に閉口の折柄ラヂオレーヤーを試みしに何れも何の雜作もなく快癒せしに家内一同唖然と致し申候其他各種の疾病に應用して實にラヂオレーヤーの偉効にます〳〵驚嘆し先頃も代議士望月小太郎氏小生方に立寄られたま〳〵世間話しとなり望月氏が小生毎年のぜんそくに苦しむのに本年は馬鹿に元氣でないかと言はれて貴家ラヂオレーヤーの御蔭なりと答へて倚奇蹟的有效な事を語りしに望月氏も是非共一具買入申すとのことに付貴店所在地教へ申せしに付 れ本日頃望月氏御邪魔相成らるべくに付特に優良品選び相成られ度其砌望月氏議會に備へて此の靈器を大に宣傳してやらうと申し居られ其他會ふ人毎に貴店のラヂオレーヤーの事相語る可くに付小生より聞いて來たと言ふ人あらば特に選定なし優良品御選定なし下され度く先づは取敢ず

相州茅ケ崎驛々長
長沼謙吉氏

我ラヂオレーヤー愛用者は自己の身體全癒のみに滿足せずこれを一の誇として大に世に宣傳なし下さるは眞に本店の多幸とする所である本器の如く高價な物は體驗者の御宣傳は何にも我の幸福にして又以て一の社會奉仕であるさらば切に偉効御宣傳を御愛用者各位に御願す

器械買入方法

斯る靈器は今すぐ御註文になれば特價半額提供中に付半額の金十七圓五十錢で買ふ事が出來ます（普通は定價參拾圓で一厘一錢の割引はありません特價提供中でも各地支店出張所では定價三十五圓より一錢も引きません）此の機會を逸せず御註文せられよ金を以て御註文の場合は送料は無料であります此の場合は代金を振替東京四六二番へ御拂込下さい着金次第送料無料で送ります代金引替にて御買入御希望の方はハガキにて御註文次第代金引替送料五十錢海外壹圓にても御送りします東京市内の方は電話又はハガキにて御註文次第社員參堂實驗に供します

日本總發賣元　東京市芝區芝園橋際三田四國町二番地七號
東京ラヂオレーヤー本店
電話高輪二七四九
振替東京二四六二番

す。五月號以後の本誌が燦然たる一大光彩を放つであらうことは唯今から期待される次第です。此以外、大橋房子氏が本誌の特派として英、佛伊、獨に、佐藤紅緑氏も佛、獨より得意の劇場通信をなさるゝことになつてゐます。それかあらぬか來月號には此以外の一大新音を齎らして我『女性改造』の一大使命と信ずる他雜誌の鯱鉾立してても模倣だになし得ざる一大寄與をなし得る成算を抱藏してをることを告白して置きます。

見よ！本誌の大雄圖を！

た集[illegible]

む、悩み、悶え、憤怒、悲みをありのまゝに、その姿をくづさずに引きずり出す氏の藝術の力の異常さには一種の恐れを抱かしむ。本書は「愛すればこそ」の姉妹篇で、三角戀愛を取扱ふメスは寒月の如く冴え、そして暗に漾ふ宿命の情緒には思はず讀む人の涙をそゝる、眞に名匠の名作で、名光千里の暎がある

谷崎潤一郎著

戯曲 愛すればこそ（七十版）

定價壹圓六拾錢
送料十五錢

出版元
東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

勞農新經濟政策と露國の將來

「新經濟政策」と露國の將來

山川均

一

一九一七年三月の革命は、多くの意味に於て、一九〇五年の革命の繼續であつた。この革命によつて、民衆に助けられたブルジョアの自由主義と民主主義は中世紀的の專制政治に打ち勝つた。

三月から十一月に至る間は、露西亞の無產階級が新たに獲得した政治上の自由によつて、階級的に成熟し、階級的に組織し、そして急速に成長する力を以つて、ブルジョア・デモクラシーと戰つた時代である。

十一月革命によつて、無產階級は初めて、國家權力を獲得して支配階級となつた。一九一七年十一月から一九二一年の春に至る三年の間は、歷史上の最初の無產階級國家が、專ら存在の爲に鬪つた時期であつて、內にはブルジアジーと帝制派との陰謀を剿絕し、外に向つては、是等の反動勢力を操つてゐる資本主義列國の武力干涉に對抗する爲に無產階級獨裁が最も基本的な形で行はれ、無產階級國家の權力が、反對階級の上に最も露骨に、辛辣に、假借なく差向けられた時であつた。

斯ように一九一七年十一月に高潮に達した階級鬪爭は、尙ほ三年の間上ぼりつめてゐた。この鬪爭によつて、無產階級の政治的支配は初めて確立した。そして露西亞は初めて、徐々に社會主義經濟の建設期に這入ることが出來た。そして此の二つの時期の境をなしたものは、即ち一九二一年三月の農業稅の布告であつて、從來の穀物の徵發制度を廢して農產物による一定の租稅に變へ、殘餘の穀物の自由賣買を許した農業稅の布告こそ、

謂ゆる露國に於ける新經濟政策の基調となつたものであつて、同時に露國革命が、無產階級の權力確立の時代から、社會主義的建設の時代に推移した此の二つの時期を劃したものである。

二

斯ように一九一七年から二一年に至る無產階級の權力確立の時代は、全世界の資本主義に助けられた舊支配階級――ブルジョアジーの反抗と敵對とに對して、無產階級國家が存在の戰ひをしてゐた時代であつた。從つて無產階級の全勢力は、一方には內亂と外患とに對抗する有力な赤軍の組織と維持、軍需品の生產、內外の戰線に於ける軍事上の行動と同時に、他方にはブルジョアジーの政治的勢力の基礎となり泉源となつて居る經濟上の根據を、根柢から覆へすとに向けられてゐた。そこで一時は五百萬に達した赤軍の兵士を維持し、都會の勞働者の生活を保障する當面の必要から、農民に對しては穀物の徵收制度を實施した。即ち穀物の自由賣買を禁じ、農民の生活に必要な穀物の一定の分量を差引いた剩餘は、悉く國家の手に納め、之に對しては、都會から工業生產物を送ることにした。しかし農民の生產は全然ブルジョア的の生產であつて、斯ような經濟上の基礎の上に直ちに共產主義を行ふことは、到底望みの無いことであつた。けれども當面の必要の前には、止むを得ず農村に粗笨な共產主義を行ふの外なかつたのである。

それと同時に工業の方面では、社會主義的の管理に適した主要な大工業に限つた、之を資本家から沒收して國有とした。ところが實際の形勢は、產業の國有化を、右の如き可能にして合理な程度に止どめることを許さなかつた。といふのは、多くの資本家と專門技術者とは、新制度に對する消極的の反抗として生產を中止した。さもなくば、工場を積極的反抗の手段に利用した。そこで是等の小工場は直ちに國有にしても、到底國家の手で集中的に管理し運轉さることの不可能が見え透いてゐたにも拘らず、實際の形勢は、全ての產業の國有化に突進することを餘儀したのである。そこで農業の方面にも工業の方面にも、謂ゆる『戰時共產主義』が行はれることゝなつた。

三

斯ように當時の謂ゆる『戰時共產主義』は、眞の共產主義の行はれる經濟的基礎の備はつて居らぬ所に。無產階級國家の非常時の必要の爲に、强いて行はれたものであつた。從つて少くとも歐羅巴の主要な國々に無產階級の政權が確立され、露西亞の無產階級が是等の諸國から、共產主義的經濟の建設に必要な材料――資本主義の下に發達した生產力――を自由に供給されぬ限りは、斯ような非常時の共產主義は、到底維持すべからざ

るものであつた。

斯ような意味から云へば、當時の共産主義的施設は革命當時の遣り過ぎであつた云ふことも出來る。けれども此の遣り過ぎは、革命の實際の形勢が必要としたところであつた。敵を撃破する爲には、到底味方の手に維持する見込みのない）陣地をも奪取する必要がある。そして再び退却を餘儀なくされることの分つて居る地點までも、一時は進歩することの必要な場合があるそして斯ような革命の『遣り過ぎ』がなかつたなら、露西亞の無産階級は、今日の陣地を保ち得なかつたに相違ない。

斯ように一九一七年十一月から二一年に至る三年間の謂ゆる『戰時共産主義』は、社會主義的經濟を建設する努力と見るべきものではなくて、無産階級の政權確立の努力、無産階級國家の存在の戰ひと見るべきものである。それは高潮に達した階級鬪爭の一形相に外ならぬ。

然るに一九二〇年の末頃になると、内外の形勢は著しく緩和した。そして露西亞は戰時狀態から初て平時の狀態に入つた。穀物の徵發を廢して納税制度を採用することは、十一月革命の一年後に一度び布告せられたが、實際の形勢は之を許さなかつたので、此の布告は空文に終つてゐた。そして一九二一年三月二十三日の布告により、露西亞は愈々、新經濟政策の新しい軌道に這入ることゝなつた。新經濟政策の骨子は、（一）從來の穀物に對する國家の獨占制度が廢止され、（二）農民が租税として、現品を以つて國家に引渡した殘餘の農産物は、市場に於て自由に賣買できることゝなつた。即ち、少くとも小規模な地方的の自由商業が復活した譯である。既に生産物が生産者たる小企業家の私有に屬する以上は、農産物と工業生産物との交換は、或る程度までは自由賣買即ち商業に待つの外ないからである。之に應じて工業の方面でも、（三）一度び資本家から國家の手に取上げた事業や工場のうちで、社會主義的の管理に適せぬものは、團體又は一個人に貸下げることゝなり、（四）外國の財團又は資本家に對しても、天然の富源や一定の事業の租借を許すことゝなつた。また斯ような變化に應じて、（五）財政上の政策も改められ、郵便、電信、鐵道なども一定の料金を取ることとなり、金融上の必要に應ずる爲に國立銀行が開かれた。

この新經濟政策の採用は、資本主義の世界からは共産主義の拋棄、無産階級革命の降伏として、歡び迎へられたものである。謂ゆる『戰時共産主義』から見れば、新經濟政策は共産主義の『一歩退却』であり、資本主義への逆轉ともいふことが出來るけれども露西亞の經濟狀態と世界の形勢から見れば、露國に無産階級革命は此の『一歩退却』によつて、初めて眞の社會主義的

建設の軌道に入つたものである。

四

共產主義の理想が、如何なる形に於て、又どの程度まで實現せられるかは、單に人間が之を欲するか欲しないかの問題ではなくて、社會の生產力がどの程度の發達をして居るかによつて定まる問題である。そこで資本主義の下で高度の發達をした生產の技術と生產力とは、共產主義的建設に缺く可らざる材料である。

然しながら資本主義の舊社會は、その生產力が充分に發達して、直ちに共產主義を實現するに適するまでの成熟を遂げた時、都合よく倒壞するものではない。經濟上の發達がおくれて居り、後くれ走せに經濟進化の道程を辿つて居る國では 一方には或る產業部門には近代的の工業が發達し、近代的の大資本階級が擡頭して居るにも拘らず、尙ほ一方には、ブルジョア的の農業と小規模生產が大部分を占めて居り、從つて政治上では漸くブルジョアジーの實力が加はつては來るが、さりとてブルジョアジーの政權は確立して居らず、却つて中世紀的の專制政治が其儘に新興ブルジョアの勢力を抱合して存續して居る場合がある。革命前の露國は其一例であつて、資本主義が斯ような變則的の發達をして居る國では 半ば中世紀的、半ば資本主義的な舊社會は、其の內に共產主義の實現に必要な生產力を發達せしめるまで存續することは出來ぬ。そこで生產力發達の狀態から云へば、無產階級革命が月足らずで生れることにある。そして露國は卽ち、其の著しい實例なのである。

然しながら工業化と生產力の發達とは、如何なる場合にも、共產主義的社會の基礎である。資本主義の先進國では、新社會の基礎たり材料たる生產力は、資本制度の手によつて準備せられたが、露國の場合には、他の國々では資本制度がブルジョア支配の下にやつて置いてくれたことを無產階級國家の手で新たに造らねばならぬ。露國は今、恰かも此の時期を通過して居るものであつて、この事業がやがて國家資本主義の形を取るのである。

然しながら現に露國に進行して居る國家資本主義なるものは、普通の意味での國家資本主義とは形に於ては似て居るが、其の意義に於ては全く相反して居る。普通の意味での國家資本主義とは、在來のブルジョアジーの國家の手に資本を集中することであるが、露國の場合には、無產階級國家の手に資本を集中し、若くは無產階級國家の手に資本を支配し、之によつて工業化と生產力の增進を計ることである。ブルジョア國家の手に資本を集中する國家資本主義は、要するに資本主義の一發達

形態である。資本主義が其の存在を續ける必要の爲に、新しい形勢に頓挫して、新しい一形態に進んで居るのである。然るに露國の謂ゆる國家資本主義の場合は、全く之に反して居る。即ち國家資本主義の外觀を以つて行はれる工業化と、それによつて增加した生産力とは、直ちに社會主義的經濟を建設する材料として、無産階級國家によつて用ひられるからである。

そこで露國の將來――勞働者と農民の露西亞が其の目標とする共産主義の新社會に到達するかどうか――は二つの條件に懸つて居る。即ち第一には、無産階級が確實に、國家の權力を把持して行くことである。露西亞が勞働者と農民との露西亞である限りは、謂ゆる國家資本主義の發達は資本主義への逆戻りではなくて、直ちに社會主義への推移そのものである。第二には、生産力の增進である。

そして現在の露國は、この二つの條件を充分に備へて居ると云つてよい。ソヴイエツト政府の基礎が最早や充分に堅固となつたことは、無産階級獨裁の形式が、漸次に緩和されて居ることによつても知ることが出來る。そしてソヴイエツト政府の基礎が、最早や動かし難きものとなつた事實を最もよく反映して居るのは資本主義列國の對露政策が、急速に變化して居ることである。

二

新經濟政策の採用以來、露國が經濟的に復活し、生産力が增加して居ることは、幾多の材料を數學によつて知ることが出來る。勿論、今日での所では生産力の恢復と增進とは尙ほ甚だ不充分である。けれども少くとも戰後に於ける歐羅巴の資本主義列國のうちには、露國の如き速度を以つて經濟的に復興して居る國は、唯だの一國もないことだけは明かである。

露國に生産力が、どれほどの速度で復活して居るかは、昨年と一昨年との生産を比較した次表により、その一斑を知ることが出來る。

(1) 石炭

一九二〇―二一	七、八七〇、〇〇〇 噸
一九二一―二二	九、七九五、〇〇〇
	二割四分增加

(2) 石油

一九二〇―二一	三、八八〇、〇〇〇(噸)
一九二一―二二	四、六六五、〇〇〇
	二割增加

(3) 銑鐵

一九二〇―二一	一一六、六〇〇(噸)
一九二一―二二	一六六、六〇〇
	四割二分增加

(4) 鐵及び鋼鐵

一九二〇―二一	一六七、五〇〇（噸）
一九二一―二二	三二六、六〇〇
	九割増加

(5) 金屬製品

一九二〇―二一	一五五 〇〇〇（噸）
一九二一―二二	二五三、〇〇〇
	六割六分増加

(6) 綿布

一九二〇―二一	一〇一、〇〇〇、〇〇〇（ヤード）
一九二一―二二	三四七、〇〇〇、〇〇〇
	二十四割三分増加

(7) 綿糸

一九二〇―二一	三八、〇〇〇、〇〇〇（ポンド）
一九二一―二二	一〇三、〇〇〇、〇〇〇
	十八割増加

(8) 毛織物

一九二〇―二一	一七、二五〇、〇〇〇（ヤード）
一九二一―二二	二三、一八〇、〇〇〇
	三割二分増加

(9) 麻布

一九二〇―二一	三一、四八〇、〇〇〇（ヤード）
一九二一―二二	五七、一三〇、〇〇〇
	八割二分増加

兎にも角にも、露國が最早や危險期を通り過ぎたことだけは明かである、そして國内に於けるブルジョアと帝制派の殘黨の反抗も、巴里に巣くうてゐる小ブルジョアとメンセヰキの陰謀も佛蘭西の侵略主義も、英國の帝國主義も全世界の資本主義の武力干渉と經濟封鎖の力も、人類歷史に於ける最初の無産階級國家の成長を遂に如何ともなし得なかつたことだけは明かである。

勞農露國の危機と新經濟政策

田口運藏

一

勞農ロシアの新經濟政策及びその意義を解せんするには、先づ一九二一の春頃以來、ロシアのプロレタリアートが當面せる經濟的及び社會的の危機を、これと關聯して吟味しなければならない。

革命の徑路に關するボルシヰウエキ從來の概念は、むしろ純白すぎた樣に思はるゝ。これが十一月革命から五年の經驗に依つて立證せられて來た。當初ボルシエヴヰキー正統派マルキシトーの首領ですらも、支配權を握つてゐるブルジュアの上層を追放した後は、プロレタリアートは、直ちに、産業機關の總てをそのまゝ繼承すべきであつたと考へてゐたのである。然し彼等の經驗はなか〳〵、それを裏書きしなかつた。——（但し彼等の取つた政策が失敗したと云ふ意味は少しもない。）そしてプロレタリアートが獨裁の期間に於いては、舊資本主義的に組織せられたる産業制度が混亂に陷つて一度は全然解體する事が革命進行に必然的に來る階段である事が證明せられたのである。

多分、この實證論に對しては、ゴーター、カウツキーの徒に限らず、總ての經濟學者はこれに駁論するであらう。これは論理的に價値がない。それはロシアに於ける特有のもので、他の資本主義産業の發達した國に於いては他の途をとつてくるに相違ない。ロシアに於いては、プロレタリアートの類に極めて僅で高度資本主義産業に微々たる發達であつた。然しながらこの反駁論はあまりに經濟を無視したものである。革命の發展に伴ふて、その進行期間は、一般的に經濟的混亂の極に達する事は否定が出來ない。

二

總ての革命は社會的關係の改造である。たゞブルジュア革命に於てはプロレタリアートと革命のそれほど激烈でないまでの事である。如何となれば、ブルジュア革命に於ては、資本主義が既に發達して封建財産はすでに私有財産となつてゐるから、たゞ政權の轉嫁のみが必要とさるゝのである。そして、この財産權を確實に獲得し、尙ほこれを擴き限界に適應せんとするのである。要するに、政權を一つの所有から他のそれに移讓するに過ぎない。が、このブルジュア革命に於いてすらも、産業にある程度の混亂を伴ひ、生産率は減退せざるを得ないのである。

これはフランス革命及びアメリカの南北戰爭のそれに立證せられてゐる。そして、プロレタリア革命に於いては、これが最も顯著に起るものである。蓋しプロレタリア革命は、國家機關を破壞するばかりでなく、資本主義産業關係を全く改造しなければならないからである。之が正しくその主要の點である。

三

然らば、資本主義産業關係とは何を云ふであろうか？即ちこれは、順次に從屬的に構成せられてゐる産業の階級的組織關係を云ふのである。資本家がその上に座し、次に支配人、專門技師、熟練職工、そして末座に勞××××××××××、×の關係を改造するには、その×××××××××××××××××××××××××××。正卒が將校に服從してゐる間×××××××。×××××××××××××××へ××××、××、×××××××らなければならない。この組が打ち切られたる時。産業の行程が停止し或は混亂するのは當然である。

勞働者がストライキに出で、或は防寨に立籠る時、或は又技師がサボタージに依つて反抗を試みる時は、全行程が混亂に陷る事は明かである。××××××××××××××××××××××××××××。これまで生産行程は蹂躪して運轉が滑かに行はれないのは止むを得ないことであつた。

されば、カウツキー一派が革命と生産行程の繼續を說いてゐる邊りは、確に沒常識に見える。×××××× ×××××伴ふ弊害に對しては犧牲を拂はなければならない。そこで、初めてプロレタリアートの經濟生活を×××××××××××出來るのである。一時的の○○は敢て怖るべき事ではないであらう。

四

プロレタリアートに對する頑强なる反抗は、この獨裁政治を最初に採用したロシアに於て最も激烈であつた。ロシアの階級爭鬪はロシアの內亂（反動革命）に止らなくて、國際的に外戰となつて表はれてゐる。內亂が外戰となる時は、革命は非常なる犧牲を二重に拂はなければならない。これが三年間の勞農ロシアの疲弊の極にあつた最大原因である。

ロシアはこの小規模生産の七十五パーセントを犧牲にして、その上に赤衞軍の大衆を支へなければならなかつた。このために勞農ロシアのプロレタリアートが、止むを得ず取つた政策が所謂『戰時共産主義』と云ふ强制的經濟政策であつた。勿論これは、彼等の理想實現のための豫定の手段ではなくて、戰爭に强いられて採用した一時的の政策であつたに相違ない。

五

パンがなくては何人も生きられない。パンの解決は革命の最も艱難なる問題である。革命期の經濟崩壞は、また農村と都市との隔離に依つても表されてゐる。階級戰爭が都市に起り、工

業生產が癩痺する時は、村落と都市との聯絡は停止する。卽ち大地主若くは豪農と都市銀行との經濟關係が停止すると同時に農村の共同組合も都市との關係を絶つ樣になる。そして農村と都市との總ての交換が止まつて信用制度の影が薄くなつて來る。

都市が農村に何物をも供給しなければ、農村をして都市に穀物を與へしむる刺激はなくなる。こゝに於て經濟の均等が破れるのであるであるから、××××××××をいかにして養ふ手段を採るといふ事は最も重大な問題である。都市の倉庫の穀物を消費する事(一)、農民に對する强制徵發の手段を採る事(二)農民に革命的理解と意識的刺激を與へる事(三)これ等がボルシエヴヰキの採つた手段であつた。

內亂(反革命)及び外戰に當面して來たロシア農民は、この强制徵發の意義をよく理解——少なくとも大多數は——したのであつた。そこでこの「戰時共產主義」の經濟政策は、この狀態に於いてのみ——(戰時中のみ)——ジヤスチフアイせられたのであつた。

六

カウツキー一派やゴーター一派などの說を、丸飮みにする批評家等は論じて曰く、『ロシアの農民はボルシエヴヰキに反對であるが、ボルシエヴヰキは唯力任せに農民を壓迫支配してゐる』と。然しこれは全く當を得てゐない正統派のマルキシトならば誰でも次の樣な答をしなければなるまい。『そんな輕業はカイザーの政府でも出來ないであらう、まして農民の多いロシアに於いてをや。』

農民に對する强制徵發政策が、ロシアに於いてジヤスフアイされる主なる理由は、ロシアの農民が一般的に事態を理解した事によるであらう。

歷史が證明する如く經濟的方針の變更は平時よりも、戰時に於いて容易く行はれる。これがロシアの內亂に於いて、特によく行はれたのである、ロシアの共產主義者でない小ブルジユアですらも、正直に『萬事を戰爭のために』といふスローガンを高調してゐた、そしてプロレタリアートは財源をこゝに得て來强なるプロレタリアートの獨裁政治の下に、沒落せる國民經濟をやつと規則立てゝ進んで來たのであつた。これを思ふとき何人も、彼等の超人的努力に驚かぬものはなからう。

七

然しながら、戰爭がほゞ終結すると、この經濟的矛盾はすぐ表面に讀めるようになつて來た。內亂が勞働階級の勝利として終りをつげるや、農民の剩餘生產を增進せしめる刺激誘因が消

減し始めたのである。『農民の剩餘生產の穀物が常に徵發せられるならば、我等の使用する丈けを耕す事に止めやう』と云ふ傾向が確かに表れて來た。これは耕作地の面積統計數字が俄かに收縮した事に依つても知られる。勿論そは農民の子弟が、赤衞軍に投じて農業勞働に不足し、牛馬は缺乏し、新しき農具の供給がない上に、しば〲地方の農村は反動軍に蹂躙された事などが主因ではあるが。以上の仕末で、ロシアのプロレタリアートはパンを得る途に迷はさるを得なかつたこれは、すぐまた都市工業にも現れて來た。然し都市工業が破壞したと云ふのではなく如何にして、プロレタリアートは生きんとするかと云ふ問題であつた。前述の通り村落と都市との交換關係が杜絕されてあつたからである。

八

斯くの如き經濟關係は必然に社會的結果を生ずるのである。產業が困窮に陷る時、勞働者は生活のために他の方法を見出さんとする。例へば、彼等が從事しつゝある工場にありながら、自身勝手に小物品を製作して、それを賣りそして生活の補充にせんとする。この結果はプロレタリアートの社會的價値を失ふのである。勞働者がこの種の自由賣買に利益を知つてくると、自から小手工業者（小ブルジュア）の如く任じて來る。その結果は都市を退いて村落に歸り、小生產の手工業者と變化する樣にもなる。產業の混亂が大なれば、このプロレタリアートの社會的失位も激增するに相違ない。それがロシアに於て表れ、しかもこの種のプロレタリアートに依つて、自由取引が一九二一年の初め頃から要求されて來たのである。

かくして、ロシアのプロレタリアートは打擊を受けた。それプロレタリアートの前衞は既に、各方面の戰線に於てほゞ倒れ赤衞軍は農民と非政黨員により組織せられてあつた。

そして、ソヴヰエットはプロレタリアートの知識分子をもつと〲必要とした。國家の機關は勿論、すべての村落の行政機關には、是非ともプロレタリアートを置かなければならない。特に農民が人口の大多數を占めてゐるロシアでは、プロレタリアートの最重要分子を村落に送らなければ、プロレタリアート獨裁政治の實を擧げ得ない。で最も低級なるプロレタリアート、及び俄か作りの勞働者（革命前は勞働せざりし者）等のみが、工場に殘つてゐた。このために、工場で勞働してゐるロシアの勞働者は自由取引を要する程に、社會的價値を失はんとする氣分が見えたのは事實であつた。これが、ロシアのプロレタリアートに起つた社會的危機であつた。

九

同時に農民も困つて居るには相違ないが、勞働者のそれの如く激しいものでない事は誰にも想像が付く。單に經濟的の見方から云ふならば革命に依つて利益を最も多く獲たものは――現時では――農民に相違ない。ロシアの農村は未だ經驗した事のない程に自から强さを覺えてゐるに相違ない。

赤衞にあつた農村の子弟は、智的にも品性に於いても、高い人間に教育されて農村へ歸りつゝある。今では多くの農民は政治問題をよく解してゐる者が多い。『吾等は優秀の一勢力である。吾等は勞働階級を援けなければならない。然し、吾等の權利を主張する。』これが一般農村青年の叫びである。

戰爭（內亂）が終ると直ちに農民に彼等の要求を提出した。彼等は自由取引を要求し、强制的社會主義經濟（戰爭共產主義に反抗し始めたのである。それがトムボフ或はサイベリアの農民暴動となつて表れた。しかしこの暴動はブルジユア新聞に報ぜられた程のものでない。ある地方の農民の標語は『ボルシエヴヰキに贊成するが、共產黨には反對する』と云ふのである。そしてこれが一般から云ふとロシア農民の政治的傾向であつたらしい。一寸聞いたばかりでは馬鹿らしい可笑しな標語ではあるが、甚だかしこい智的の表白である。なぜならば十一月革命以前のボルシエヴヰキは、地主を倒せ、土地を衆へとの宣傳に農民にしてゐた。そしてボルシエヴヰキは政權を握つた後でも農民から何物も要求しなかつたのである。然るにそれが共產黨と改名する頃から、內亂が諸々に起つたので、ロシアのプロレタリアートは『戰時共產主義』の政策を採つて農民に何物をも供給せずに常に穀物の徵發するようになつたからである。それが戰爭中は、農民も正當視して居るのであるが、戰爭が終つた頃から以上の標語を揭げて來たのである。之に加ふに、サイベリア邊では、共產黨員が多忙であつたため、低級なる宣傳員が農村に於いて、農民に適切しない說明のみを續けてゐたのも事實らしい。そして、遂にその地方の農民は共產黨に反抗するやうになつたのである。

十

次に農村に表れた標語は『自由取引』それから『非政黨員組織のソヴヰエツト』或は『反政黨獨裁』などがあつた。これのみでなくて、プロレタリアート亦確かに階級的資格が弱められてゐた部分もあつたので、或る鐵工勞働者の間には、『反共產主義』『自由取引』或は『反政黨獨裁』と云ふ標語を可決したのであつた。斯くの如く、農民と勞働階級との經濟的均等が破れて甚だしき政治的誤解がロシアのプロレタリア獨裁政治を脅かしたのであつた。

この危機が、またクロンスタツトの暴動と何等かの關係があつた樣にも見える。クロンスタツトの暴動は、證據書類に依つて明白な通り、佛及び米の反動家に教唆され、組織せらたのではあるが、同時に『戰時共産主義』の經濟制度に反抗せるにブルジユアの暴動を代表せるものと見る事が出來る。當時のクロンスタツトの水兵に農民の子等が大部分であつた。そして、その九割までがウクレニア農村出身である。ウクレニアは中央ロシアとはよほど氣分が異つてゐて、むしろドイツの農民と質を同じくする點が多い。帝政にも反抗するが共産制にもあまり同情を持つてゐない。そのウクレニアの農民の氣分がクロンスタツトの暴動によく現れてゐる。

十一

クロンスタツトの暴動は二日の反抗ですぐ鎭定されたが、それ丈けでは根本問題が解決されない。そこでロシアのプロレタリアートは、他の經濟的解決の可能であり政策を見出す事が緊急問題となつた。勿論その當時ドイツの革命が具體化されてあつたならば、ロシアのプロレタリアートはかゝる政策を採る必要もなく前進したであらう。然し世界の形勢は甚だしく、ロシアのために不利であつたので、プロレタリアートは自から、その開拓すべき路を求めるために、一歩あとへと退がらなければならかつた。

併かも、如何なる代價を拂ふても、ロシアのプロレタリアートが支持しなければならない一つの主義がある。……それはプロレタリアートの獨裁政治である。又實にロシア革命の危機にあつた事は誰も否定はしまい。ハンガリ革命の運命が、實にロシアのプロレタリアートの面前に直接してゐたのであつた。

十二

國家機關をプロレタリアートの掌中に握つてゐればこそ、プロレタリアートは、それを如何なる方向にも運轉は出來るが、これを他に讓つては、それを左右する事は不可能になる。これはドイツに於いて立證されてゐる。……(如何にプロレタリアートの數字が多くとも　その政黨員の數字が多くとも、不可能である)。

そこでロシアのプロレタリアートはその政權をしつかり握つてゐるためには、多くの經濟的讓歩は仕方ない破目になつた。ゴーター及び極左連は、この讓歩を見て、ロシアのプロレタリアート(特に共産黨)は先づ經濟的讓歩を與へた。次には政治的讓歩を與へるのは必然であると、論じてゐる。然しこれは事實を研究しないで云ふ所の理屈のための議論である。彼等はロシアのプロレタリアート反聯合政府樹立或は勞働者及び農民の政

治的不等と云ふ様な政治的讓歩を避けるために、この經濟的讓歩が餘儀なくせられて來たのである。

經濟的讓歩を與へたとて、獨裁政治の階級的性質には何にも影響はない、變化はない。例へば、工場主がその雇人たる勞働者にある讓歩を與へたとて、工場主は勞働者となる筈はないと同樣である。然しこれを政治的及び社會的立場から見るならばこの讓歩の意義は下級中産階級の中立と和睦と云ふ所を表してゐる。

經濟的報難の主なるものを、生産を增加せしむべき奬勵的刺激の消失と見る事も出來よう。これは徴發を廢して、税法適用に依つて補はれて來た。この經濟法が一九二一のロシア共産黨大會に可決さるゝや、すぐ耕作地の面積の統計數字が一九一六年の數字以上にまで高められたと云ふ事もある。

十三

かくして、政治的には、ロシアのプロレタリアートは農民との和睦も出來た。ウクレニア地方を荒してゐた例のマクノー掠奪團（マクノー一派はアナキズムの標語を利用してゐるが、單なる馬賊團で何等政治的性質のものでもない）も平定され、ロシアのプロレタリアートの前衛であるロシア共産黨内に、一時この政策に猛烈に反對したシヤプニコフ一派も今年二月限り、黨の訓練に依つて協調することゝなつた。

然し或る者は恐れてゐる。小ブルジュア（外國資本團を含んで）に與へた經濟的讓歩は、必ず、永年の後までロシアに資本主義傾向を跡づけるであらうと。或はこれは事實になるかも知れない。ロシアが充分なる意味の、社會主義制度となつても、そこに多少のその傾向は殘るであらう。

然しこれはいつの時代でもどこの國に於いても仕方ない事である。例へば充分なる意味の資本制度の發達した國に於いても尚ほ未だ、封建的傾向或は原始的傾向の經濟關係のあるものは殘つてゐる事に依つて想像される。

十四

ロシアの此の社會的經濟の危惧は丁度一九一八年のブレストリトブスクの平和條約締結當時のそれに似てゐる。當時のロシアのプロレタリアートの多數はドイツの資本主義がロシアに侵入する事を怖れてゐた。然しそれは一時的のものであつた。

現在の緊急のプロレタリアートの欲望はパンと農民との和睦協調であらう。もしパンがたければプロレタリアートは食ふ事が出來なくなる。食ふ事が出來なければ勞働階級でも自分等の政府に反抗して立つは當然である。

もしロシアのプロレタリアートがこの新經濟を可決してゐな

かつたならば、例の大飢饉がロシアの一方に出現した時、なんとして救済し得たであらう。社會的危機、經濟的混亂に次でロシアの建設事業をさまたげたものは目下の大饑饉に相違ない。ロシアのコンムニズムが熟するには尚ほ多くの時間を要すであらう。そして、プロレタリアートはあの苦しき生活の下に、その進路を見出して、突進するに相違ない。

或はまた、資本主義的傾向が下層(農民を意味する)から芽出すかもしれない。だがプロレタリアートは主要工業、燃料、運輸の大産業をその掌中に握つてゐるから、敢て大事はなからう。然し、上層(プロレタリアート)から社會的危機が表れては、萬事休むのである。そのために彼等はこの政策を探つた。そして併かもこれはコロンニズムに則するものである。

パンを得る事は大産業の運轉を意味する。これが成功する時はすべての産業行程は正規にかへる。その時はロシアのプロレタリアートは外國勞働者を招いて技術上の革命を産業の上に實行するであらう。そしてその時はロシアの農業電氣化も完成する頃である。

このプログラムを實現するためには、小ブルジュアに對して與へる經濟的讓步は、プロレタリアートに取つては大事のものではなからう。

以上大畧して論じたのが、一九二一年春勞農ロシアに施行された經濟政策の主意と由來である。そしてロシアでこれをネップと呼び、投機業者、商人をスペキユラン(或はネップマン)と呼んで下等な不德な者としてゐる。

勞農露國の經濟的現勢

本文は改造社に寄稿して來たものでなく、『インターナショナル・コレスポンデンス』に發載されたものだが參考になると思つて飜譯して發載したものです(記者)

レオン・トロツキー

一

ソヴィエット露西亞の經濟的發展が取り來つた方面を理解する爲めには、全世界の階級的に自覺した勞働者は、二つの異つた立場から觀なければならぬ。即ち第一には、世界に於ける最初の勞働者共和國の利害といふ立場である。即ち世界に於ける最初の勞働者共和國を維持し、有力にし、其の福祉を增進し、そして社會主義への進化を促進するといふ立

場から觀ることである。第二には、露國以外の諸國に於ける……が、……掌握した後の建設的活動に應用する爲めに、露西亞の經驗から教訓と結論とを得るといふ立場から觀ることである。

勝利を得て國家……を掌握した……が、經濟上の建設的活動に移つた場合に、この建設的事業が如何なる樣式を取るか、そしてどれ程迅速に行はれるかと云ふことは、次の如き三つの事柄によつて定まつたものである。即ち第一には（一）生產力がどんな發達段階まで進んでゐたかと云ふこと、單に一般經濟の上ばかりでなく、經濟の各部門、殊に工業と農業との關係が、どの程度の發達をしてゐたかと云ふことである。第二には、（二）支配階級としての無產階級に、どの程度の教養と組織があるかといふ、無產階級の教養と組織の水準如何といふことである。第三には、（三）無產階級の權力掌握後に於ける政治上の形勢（即ち失脚したブルジョア階級の抵抗、小ブルジョアジーと農民との態度、內亂の範圍と其の影響、國外からの軍事干涉等）である。

一國の生產力が發達して居れば居るほど、無產階級の教養と組織の程度が高ければ高いほど、そして失脚した階級の抵抗が弱ければ弱いほど、勝利を得た無產階級は、資本主義から社會主義經濟への推移をより迅速に、より系統的に、より規則正しく、そしてより見事に實行することが出來る。

露西亞は、最も主要な產業部門は集中せられてゐたにも拘らず、經濟的には後くれた國であつた。また無產階級の前衞は、驚く可き革命的な政治上の素質を備へて居つたにも拘らず、勞働者と農民との一般大衆は、教養と組織に於いて後れてゐた。然るに、幾多の歷史的形勢が結合した結果として、斯ような露西亞をして、社會主義的進化の露拂ひをする最初の國たらしめた。

斯ような露西亞の經濟上、社會上、政治上の構造に於ける矛盾と、ソヴィエット共和國の樹立より今日に至るまで、資本主義に圍繞せられて居り、今も圍繞せられて居ると云ふ事實とは、勞働者と農民の政府の經濟的建設事業の運命を決定し、また此の建設事業の變化を決定したものであつて、やがて又今日の謂ゆる『新經濟政策』を採用する理由となつたものである。

二

大半のブルジョアのみならず、都會と地方に於ける小ブルジョアジーをも完全に收奪（エキスプロプリエート）したのは、經濟上の應急の必要と同時に、政治上の必要に餘儀なくされた政策であつた。露西亞以外世界には、依然として資本主義が支配を續けてゐた結果として、露西亞に於ける大ブルジョアばかりか小ブルジョアに至るまで、勞働者の國家が維持されようとは信じてゐなかつた。そして此の不信は、やがてブルジョア農民の反革命運動の爲に、豫備軍を構成するものとなつた。斯ような形勢の下にあつては、ブルジョアジーの抵抗を打破り、ソヴィエットの權力を維持する爲には、ブルジョアジーと、搾取者たる農民の上層とを、完全に收奪（エキスプロプリエート）するの外なかつたのである。この斷乎として假借する所なき政策によつてのみ勞働者の國家は勝を制することを得、その勝利は向背の決しない農民の大衆をして、地主の復活と勞働者との國家の間に去就を決せしめることを餘儀なくした。

かようにして勞働者の國家は政權を掌握すると同時に、工業的企業の一切を、最小のものに至るまで國有としてしまつた。種々の產業部門の相互間の關係は、戰時中、戰爭のために工業を組織し直したので、革命より遙か以前から既に甚しい混亂狀態に陷つてゐた。重要な經濟機關の主腦者達は國外へ移住するか、又は自衞軍の戰線に參加して居つた。ロ

シアに殘つた少數の者は、ありとあらゆる機會にサボタージュをやつた。

勞働階級は政權を獲得し、且つ維持するために、一切のブルジョア的經濟管理機關を、全國に亘り、且つあらゆる部門に亘つて忽ちの中に跡形もなく粉碎し去るほどの犧牲を拂はされた。

所謂『戰時共産主義』はかような狀態の下に起つたのである。

新政府の最も緊急な任務は、都會及び軍隊の爲めに食糧供給の方法を講ずることであつた。穀物の自由賣買は、既に帝國主義的戰爭のために官營に變へられてゐた。勞働者の國家は、内亂の壓迫の下に一切の商業資本の團體を破壞したので、第一着として、最早や穀物の自由賣買を許すことは出來なかつた。勞働者の國家はその亡した商業的機關の代りに、過剩農産物の強制徴發を基礎とする國家的機關を設けねばならなかつた。

食糧品及び他の消耗品の分配は、それを受取る人の資格や生産力には殆ど無關係に、劃一的な國家からの割當制度の形で行はれた。これは、單に軍事的方法を以て經濟的方法に代へたのみならず、何よりも第一に軍事的目的を達せんがためであつたので、當然にも『戰時共産主義』の名を得たのである。それはその當時の狀況の下に組織的な經濟の發達を計るためのものではなくて、戰線にある軍隊に食糧を供給し、勞働階級が餓死するのを防止するためのものであつた。戰時共産主義は籠城の際の手段であつた、

産業の方面に於ては勞働組合を基礎とする大ザッパな集中的機關が造られた。此機關は、戰爭、革命、及びサボタージュによつて全然破壞せられた、工業から、少くとも内亂を鎭定するに必要な最少限度の生産物を徴發するといふ限局の目的のために働いた。現在あるだけの生産力を極度に利用することによつて辛うじて多少統一的な計畫に似たものを作ることが出來たのである。

ロシアの無産階級の勝利に引つゞいて西歐の無産階級が勝利を得たならば、それはロシアの内亂を短時日に留め得たのみならず、その結果としてソヴィエット・ロシアの經濟が一層高度に發達した無産階級の諸國と密接な關係をもつようになるので、ロシア無産階級の組織と技術とに新しい可能性を賦與した筈であつた。その場合には『戰時共産主義』から眞の社會主義への推移は遙かに短時日の間に、また孤立したる無産階級のロシアが近年の間通らねばならなかつた動亂や退却を經ずして行はれ得たに違ひないのである。

三

歐洲の無産階級が政權を掌握するまでの、いつといふ當てのない間、ソヴィエット露西亞は自國のみの組織と技術者とによつて自國の經濟を建設しなければならぬといふ事實が遂に明白になると同時に、經濟的退却——一層正確に云へば經濟戰線に於ける政治的退却——は避け難いこととゝなつたのである。

一九二一年二月の反革命事件は、社會主義的建設事業の經濟的方法に一層よく適順する代りに、農民の要求は讓歩することを餘儀なくされた。一九二一年三月のドイツに起つた革命的な出來事は、勞働階級の大衆を引きつけるための準備的鬪爭といふ意味での『政治的退却』を、それ以上延期することは絶對に不可能であることを示した。是等の二つの運動は同時的であつて、上にも述べたように、密接な相互的關係をもつてゐるのである。是等は、ドイツに於てもロシアに於ても、或準備時代の必要を示したのであるから、それは制限された意味での退却と稱することが出來る。ロシアの新經濟政策、西歐に於ける過渡的要求及び協同戰線

のための戰ひに卽ちそれである。

ソヴィエット・ロシアは戰時共產主義の方法から市場の方法に移つた。過剩農產物の强制徵發の代りに現物稅が取られることゝなり、斯くて農民はその剩餘物を自由に賣買することが出來るようになつた。貨幣による交易が回復され、交換の率を固定させるための種々の手段が執られた。商業的打算の原則が再び國有工業にも採用せられ、賃銀は再び勞働者の熟練と生產高とによつて決まるやうになつた。多くの小工場及び中工場は私人に貸下げられた。「新經濟政策」の精髓をなすものは市場、賣買の方法及び組織の復活である。

ソヴイエット共和國が成立後五ケ年の今日、その經濟は大略次のような狀態にある。

(一) 一切の土地は國家に屬する。耕作し得べき土地の九割五分は農民の使用に委ねてある。過去一年間に農民が國家に納めた現物稅は、戰前の平作の約四分三に相當する一回分の收穫から得たライ麥三億プードに上つた。

(二) 鐵道組織全體(線路の延長六萬三千ヴースト)は國有である。八十萬以上に達する傭員及び勞働者は現在、戰前の仕事の約三分一をやつてゐる。

(三) 一切の工業的企業は國有となつてゐる。其中最も重要なもの(四千以上)は百萬以上の勞働者を傭ひ、國家自ら經營して居る。約八萬の勞働者を傭つてゐる第二流及び第三流の企業四千は貸下げられて居る。各國有工場は平均二百七名の勞働者を傭ひ、各貸下工場は平均十七名を傭つてゐる。けれども貸下げられた工場の中、私人の手にあるのは僅か半數にすぎず、他の半數は種々の國家的機關又は協同團體に貸下げられて居る。

(四) 現在では私有資本は主として商業の方面に活動してゐる。ザツとした見當だけで餘り信用はできないが、最初の統計によれば、商業の賣上總額の三分一は私有資本に歸し、殘る七割は國家的機關及び國家と密接な關係のある協同團體の所有であつた。

(五) 戰前の一ケ年輸入額の四分一と、同輸出額の十二分一に當る對外貿易は完全に國家の手に集中されて居る。

戰時共產主義、卽ち極度に粗雜に集中された徵發と分配との方法は新政策、市場制度、賣買、商業的打算、及び競爭に代へられた。けれども此市場に於ては最大の財產所有者、並びに賣手及び買手として、國家が最も重きをなしてゐる。工業生產機關の絕對多數は、一切の鐵道運輸機關と等しく、直接國家の手に集中されて居る。國家の經濟機關の活動はかようにして市場によつて統制せられ、且つかなりの程度までそれによつて支配されて居る。商業的打算と競爭とは、個々の企業が有利に運轉されるために行はれて居る。市場は農業と工業、都會と田舍との聯絡となつてゐる。

四

自由市場が存在する限りは、私有資本が其中で活動するのは已むを得ないことでこれは最初の中は商業の方面のみで國有資本と競爭するが、後には工業の方面にまで喰込んで來る。そこで無產階級とブルジョア階級との內亂の代りに、無產階級の工業とブルジョアの工業との競爭が起つて來る。そして恰かも內亂の主要な爭點の一つが農民を政治的に味方するか否かに係つて居つたように、現在の闘爭は農業市場の統制權を中心として行はれて居る。此闘爭に際して無產階級は國內の最高度に發達した生產機關と國家の權力との、極めて有利な味方をもつてゐる。一方ブルジョア階級にはより大なる熟練と或程度まで外國資本、特に日本、

の移民との間に闘爭をもつてゐるといふ強味がある。

勞働者の國家の徴税政策と、金融機關の國有は特に重要視せられねばならぬ。何故ならこれは國家的經濟の形式、即ち社會主義的傾向の形式が私有資本に對して勝利を得る有力な手段だからである。徴税政策は單に農業（現物税）のみならず、商業及び工業に於ても私人の收入に對する累進税を取つてそれを國家的目的のために利用することを許す政策である。かようにして私有資本（讓歩！）でさへ、プロレタリアの獨裁によつて、今や始まりつゝある社會主義的集積のために貢物を拂ふことを餘儀なくされてゐるのである。

一方、國家の手に集中された商工業の貸付は、（過去數ケ月間の統計の細目が示してゐるように）國家の企業に對しては七割五分、協同組合團體（消費組合等）に二割、私有企業には精々五分しか融通をしてゐない。

ソヴイエット・ロシアは資本主義に『降伏』したといふ社會民主黨の主張は、斯様に實際の事實の淺薄な、粗笨な曲律にすぎないのである。實際、ロシアは内亂のための焦眉の急がブルジョアジーを一擊の下に完全に收奪し、ブルジョアの經濟的機關を破壞し、且つそれに代ふるに戰時共產主義を以てすることを餘儀なくしたのでなかつたならば、一九一八——一九一九年當時に辿つてゐたに相異ない經濟上の道を今辿つてゐるのである。

新經濟政策の最も重要な政治的及び經濟的結果は、自由賣買によつて其仕事を一層擴張し增進する刺戟を與へられた農民との間に、眞の永久的な了解の成立したことである。最近一二年間の經驗、殊に冬期の收穫の增加は、農業の繼續的な、組織的な改善を、十分期待させるに足るものがある。これは單にロシアの工業的發達に備へるために食糧品の貯藏が出來るといふに當らず、對外貿易に備へるための極めて重要な食糧の貯藏をも意味してゐるのである。今日より以後、ロシアの穀物は大部に多く歐洲の市場に現はれるであらう。此要素が西歐の社會主義〇〇に對してもつ意義は明白である。

直接の消費のため、特に農村の市場のために生產する工業部門は、新經濟政策の一年間に、極めて顯著な、明白な進步を遂げた。重工業の立場は確かに猶ほ極めて困難であるが、最近數年間の狀態のみの結果にすぎぬ此重工業の退步は、商品交換の方法の改善に比例して改まるであらう。農業及び輕工業の方面で最初の勝利が得られたら、當然先づ第一に國家の極度の注意を受けるに極つてゐる機械の製造、金屬工業、及び燃料の生產の發達は、大に刺戟されるであらう。國家はその經濟的領域を擴張し、益々迅速に回轉する資本を其手に集中し、次に國家（最初の社會主義的）集積によつて基本的資本を繼續するのである。國家的集積の速力が私人的資本の集積に及ばず、結局私人的資本が勝利を占めるであらうといふ假定には全然理由がない。

五

合辨會社、租借その他の形に於ける外國資本は、極めて細心な政策を取つて居る爲に、是等の資本が露國に於て演ずる任務に限定せられて居る。のみならず、是等の外國資本が露國に於て演ずる任務は、勞働者國家の考慮と打算とによつても限定せられて居る。勞働者國家は、工業上の利權を讓與したり商業上の契約を結ぶに當つては、必ず國家經濟の維持に必要な斯くの如き限界を確守するものである。そして國家による外國貿易の獨占は、この點に於て、社會主義的發達に取つて極めて重要な保障となるものである。

勞働者の國家は、其の經濟を市場の原則に委せるが、それにも拘らず、進步將來の間と雖も、決して系統立つた經濟上の計畫を拋棄するもので

はない。全鐵道系統と産業の大多數とは、國家によつて利用され國家から資金を供給せられて居る。そして此の事實によつてのみ、是等の產業に對する國家の集中的の管理と、市場の自動的の管理との結合が、避く可らざるものとなつて居る。國家は重工業と輸送機關とを、經濟の根本と認めて、愈々益々之に注意を集中し、財政、歳入、利權、課稅等の政策を、是等の基本產業の所要に順應せしめる。現今の形勢の下に於ては、國家の經濟策は、需要供給の根本的の作用を除去する爲に、普遍的の施設を行ふやうな空想的の計畫を任とするものではない。之に反して現在の經濟策は、市場を以つて、生產物の分配と生產調節との根本的の形態と認め、之を前提として、課稅、工業、商業、信用等の有ゆる要素を結合したものを手段として、出來得る限り、國營產業をして市場を支配せしめることを目的とする。それと同時に現在の經濟策は、是等の國營產業の間を相互關係を確立して、出來得る限り豫定の計算と均一とを實現し、斯くて國家は市場に助けられて、急速に――特に國營產業間の相互關係の方面に於いて――進歩することを目的とするものである。

國家の組織的な經濟計畫――詳言すれば社會主義的經濟の計畫――のうちに農民を包括することは、一層復雜にして困難な仕事である。然しながら國家の管理と指導の下にある協同組合團體(消費組合等)は、最も緊急な農民の所要と農民の企業の所要とを滿たし、斯くて此の方向に途を拓いて居る。そして此の作用は、都會の工業生產部が增加し、從つて協同組合團體を通じて農村に配給することの出來る工業生產物の分量が增加するにつれ、益々急速度を以つて進んでゐる。けれども社會主義の原則が、農業地方に於て完全な勝利を得るのは、農業の電氣化が成就して、今日の如き農業生產物の甚しい不統一が除去せられた上のことである。そこで電化計畫は、國家の集產主義的經濟計畫の重要な一要素を成すものである。そして此の要素は、農業の生產力の增加に比例して益々重要を加へるものであるから、將來電化計劃は愈々重要となり、終には全社會主義的經濟の根底となるものである。

六、

經濟の組織とは、生產力と生產機關とを、種々なる部門と企業との間に、正當に且つ計畫的に分配し、そして各々部門と企業内に於て、是等の力と機關とを最も合理に、言葉を換へて云へば最も經濟的に利用することである。資本主義は需要供給、競爭、好景氣と恐慌などによつて此の目的を達して居る。然るに社會主義は、現存の生產機關と現在の所要とに基づく――從つて何處までも包容的にして、且つ同時に極めて彈力性のある――一般的の計劃を基礎として、其上に國民經濟、やがては世界經濟を渾然たる一つの全體として意識的に建設することによつて、同一の目的を達しようとするものである。斯ような計劃は、固より先天的に立てることは出來ぬ。それは無產階級が過去から讓られた經濟的遺產に準じて、計劃を立てなければならぬ。そして之には、系統立つた變更と改造とを加へる必要がある。そして斯ような變更と改造とは、無產階級が經濟上の經驗を積み、技術上の力の加はるにつれて、益々大膽にそして愈々的確となるのである。

資本主義の時代と完全な社會主義との間には、必然に長日月を經なければならぬことは明かである。そして此の時期の間は、無產階級は漸次に市場に對する支配の力を獲得する目的を以て、從來の資本家的機關組織の樣式と形態とを利用しなければならぬ。そして之によつて漸次に市場を集中統一し、遂には之を撤廢して、今日までの全てに經濟的進化を基礎とし、そして將來の經濟的發達の前提條件となるやうな、集中的の計劃を以て之に代へることを目的とする。ソヴイエット共和國は、今恰

もこの途を歩んで居る。けれども尙ほ踏み出したばかりで、前途は遼遠である。ソヴエット共和國が形勢に餘儀なくされて戰時共產主義を採用し、そして西歐に於ける革命の後れた爲に、若干の退却――とはいへ、實質上の退却といふよりも寧ろ形式上の退却――を餘儀なくされと云ふ事實は、勞働者國家に對する小ブルジョア的反對者に、資本主義への降伏を云々させる機會を與へた。けれども實際には、ソヴエット露西亞に於ける過化の道程は、社會主義から資本主義へではなくて、資本主義から――一時、謂ゆる戰爭共產主義によつて行き詰つて――社會主義への推移である。

露國に於ける生產力の減退は、社會主義的乃至は共產主義的の經濟方法の、不合理の致すところであるといふ主張は、全然維持すべからざるものであり、又た歷史的にも虛妄である。實際には、斯ような生產力の減退は、何よりも戰爭の結果であつて、尙ほ其上には、露西亞の革命が特殊な形態――即ち長日月に亙る內亂の形を取つた結果である。佛國と全歐羅巴とに於ける、有力な資本主義的發展の前提を造つた佛蘭西革命は、その當面の結果としては、最大の荒廢と經濟的衰退とを齎らした。そして佛蘭西革命の發端から十年後には、佛國は革命前よりも一層貧しくなつてゐた。ソヴイエット共和國の工業が昨年中（一九二一年）に生產したところは、戰前の平均生產力の四分の一に出でなかつたといふ形勢は、社會主義的方法の失敗を證據立てるのではない。何故ならば、ソヴイエット共和國に於ては、まだ社會主義的生產方法を應用することの出來る場合に至らなかつたと云ふことは暫く措いても、斯ような革命には、必然に大なる經濟上の衰退を伴ふからである。階級的社會の存續する限りは、全ての大なる進步を購ふ爲には、人間の生命と物質とを犧牲にしなければならぬ。之は封建制度から資本主義への推移でも、又は之とは較べものにならぬほど深刻な變革たる、資本主義から社會主義への推移でも同じことである。

七

以上は、露西亞に於ける謂ゆる新經濟政策なるものは、果してどの程度まで、全ての無產階級革命に缺く可らざる一段階級であるかと云ふ問題にも、自づから答へて居るものである。新經濟政策に就ては、二つの要素を特に注意しなければならぬ。即ち（一）上に定義した『退却』の時機と、（二）市場と其の一切の方法、手順、配置とに基づく、無產階級國家の經濟的經營である。

謂ゆる『退却』について云へば、之は他國に於ても、純粹に政治的な事變の結果として起る場合がある。即ち內亂の勃發に際し、敵の手から、無產階級が經濟的に組織することの出來るよりも、遙かに多數の事業を剝奪する必要に迫られた結果として起ることがある。斯ような原因から來る部分的の退却は、恐らく全ての國に起るであらうが、他の諸國に於ては、それは恐らく、農業國たる露西亞に於けるが如き、峻烈な性質は帶びないであらう。露西亞では、無產階級が權力を掌握した後になつて、初めて內亂が勃發したのである。然るに大多數の資本主義國に於ては、無產階級は頑強にして猛烈な、しかも長い內亂の後に、初めて……を掌握するものである――言葉を換へて云へば、歐羅巴の無產階級は、國家權力の掌握後ではなくて、國家權力を掌握するに先つて、敵の勢力に致命的の打擊を與へるものである――と云ふことは、今日では、吾々の少しも疑はぬところである。けれども何れにしても、ブルジョアジーの軍事上、政事上、經濟上の抵抗は、無產階級が既に……を掌握して居る國家が多ければ多いほど、薄弱である。そして之は產業の武裝的略取と其後に起る經濟的退却との時機が、露西亞以外の諸國に於ては、露西亞に

於けるよりも、遙かに意義の小さいことを意味して居る。

吾々の經濟を調整する爲に、資本主義の遺した方法と組織とを利用する點については、全ての勞働者國家は、多かれ少なかれ程度こそ違へ、資本主義から社會主義への途上に、必ず此の段階を通過するであらう。營業を換へて云へば、内亂中には多かれ少かれ、資本家的經濟機關（取引所、銀行、トラスト、シンヂケート等）…………は免かれぬところであるから、全ての……………、後日是等の設備を再び恢復して、政治的に……めるであらう。そして是等の機關を、無產階級獨裁の集產主義的組織のうちに組み入れた上で、創造的の事業によつて是等の機關を支配し、其の助によつて、漸次に社會主義に基づく經濟の再建を實行するであらう。無產階級が既に權力を掌握して居る國が多ければ多いほど、そして何づれかの國で權力を掌握して居る無產階級が有力であればあるほど、資本——乃至は資本家でも——が他國に移住することは益々困難となり、從つて管理や專門技術に携はるインテロゲンチャ側のサボタージに對する援助は弱くなる。その結果として、材料や在來の資本家的諸機關の混亂は少なくなり、恢復の事業はそれだけ容易になる。

勞働者の國家が此の段階を通過する速力——この期間中は、生まれ出でんとしてゐる社會主義は、尙ほ資本主義の繭のうちに包まれて居り、尙ほ資本主義の繭の中で發展しつゝある——の如何は、前にも指摘したように、どの程度に………………………………懸つて居る。次には勞働階級が、組織と教化とに達してゐたかといふこと、又た勞働者の國家が樹立された時の、生產力の發達狀態とに懸つて居る。即ち是等の階層業の進化の程度が高ければ高いほど、勞働者の國家は一層迅速に、一層容易に、社會主義的經濟への過渡期を通過し、やがて共產から完全な共產主義への過渡期を通過するものである。（一九二二年十一月）

戰時共產主義より國家資本主義への轉換

稻垣守克

地上に假に共產的人類團體生活を實現せしむることは人々の生活様式が複雜になりたる現代に於ては不可能である。共產的樂園の創設と政治的意義の共產主義とは同一でない。人類愛の基礎に立つ全人類の共產的共同生活主義の××××ではあるが共產黨の當面の使命はプロレタリヤの解放である。共產主義はプロレタリヤの解放の爲めには共政權の獲得と確

保とを重大視する。政權を得ることなくして社會主義の實現を不可能と觀る。「××××××××機關であつて、階級の對立する間××が存在する。プロレタリヤは政權を獲得したる後に於てはブルジョアを根絕するまで支配者として止まらねばならぬ。其爲めにはプロレタリヤ支配の階級國家が必要である。即ち國家を利用する。階級が消滅すれば××は自然終焉する。階級なき××とは觀念の矛盾であると。此れ共產主義の國家觀にして社會民主黨及アナルキストと甚だしく相異する點である。

共產主義は資本主義的社會より社會主義的社會に移る中間期を過渡期なりとして此期間に於けるプロレタリアの革命的使命を最も重大視する。共產主義の主張の特色は此期間の觀察に在る。ブルジョアの資本主義的社會を破壞する爲めに過渡期に於てはプロレタリヤの獨裁政治が必要とせられる。此獨裁政治を確保しブルジョアの逆襲に對して最後の勝利を得る爲めには共產主義は如何なる手段をも辭せない。資本の私有がプロレタリヤの權力を脅すならば經濟上の利害を顧慮することなく之を沒收して國有とするであらう、又或種の事業の私營がプロレタリヤ國家の維持に必要ならば敢て之を拒まないであらう。此れが共產主義の豫定の戰略であり、ソビエツト政府の行き道である。

露國に新經濟政策の現れたのを見て世界のブルジョアは此れ資本主義への立ち戻りなりとして喜んだ。ボルシエビストの考では政權がプロレタリアの手中に在る間、重要なる生產及分配がプロレタリアの利益の爲めに運用される可能性が存する間、露國は共產主義の國家である。

二

如何なる生產機關を社會有又は社會營、即ち社會化すべきかの問題に關しては既に社會主義者間に於て多く論ぜられたるところであつて時代と場所とに從て其程度方法が異にせらるべきであらう。生產機關の全部の社會化を主張するものでさへも大生產機關以外の急激なる社會化の不可能なるを認めてゐた。ボルシエビストの多くは全社會化を當初から主張してはゐなかつた。經濟上の必要を通り越してボルシエビストが行つた過度の社會化はソビエツト政府の權力確保の爲めの必要から出でたものである。即ち革命鬪爭の一手段であつた。一度び斷行したる社會化の一部を再び私營又は私有の制度に復歸せしめても、若しプロレタリヤの政權の維持に必要であるならば、それも革命的鬪爭の手段であると。

以下露國側の說明を基礎として新經濟政策に對するソビエツ

ト政府の覺悟を觀察して見やう。

ソビエット政府が農産物及或種工業産物の私的商業を許し中及小工業の國營を廢したことは其新經濟政策の一である。社會化はボルシエビストに取つては鬪爭の手段であつて根本方針ではない。彼等は當初より小工業の社會化すべからざることを認めてゐた。只革命戰の命ずる必要と勢とに乘じて之を行つたのである。反ボルシエビストが觀て以て共産主義の破産なりとするものはソビエット政府の本來の方針の實行であり戰界の一部である。

ボルシエビストの革命の當初に於ては革命の歩調は急激に進んだ。內には反革命の危險あり、外には帝國主義聯合國の脅威あり、之に對抗する爲めソビエット政府はブルジョアを破滅せしむる凡ゆる手段を採つた。激烈なる革命鬪爭の際中に於ては政權の確保に全力の傾倒を要し、經濟問題の解決は第二の問題となつた。一國の經濟の繁榮獨立の爲めに當然經過すべき道程も革命の必要の爲めには犧牲となる。故にロシヤ革命の當初に行はれたる國營又は社會化はソビエット政府本來の希望以上に進み過ぎた部分もあつた。彼等が國內の反革命黨を粉碎しプロレタリヤの權力の基礎を或程度まで確立したる後に於て始めて經濟の眞の建設に向ひ得る。露國の新經濟政策は本來の方針への復歸であり、世界の大勢に應じて持久戰に移らんとする計畫の實行である。

三

ソビエット政府は新しき力を養ひ、豫測し難い過渡期に備ふる爲め新經濟政策を採つた。彼等は此新しき武器によつて來るべき戰鬪に向はんとしてゐる。

革命の當初土地の國有が宣言せられたけれども事實に於てはソビエット政府は農民の心理狀態を尊重して土地を沒收したのではなかつた。農産物は戰爭の必要上徵收したことはあつたが土地自身は之を國有とする意思は本來持たなかつたのである。

ソビエット中央政府は全社會化（Vollsozialisierung）に反對であつたのみならず國營の數を出來る限り少數に止める考であつた。混亂の時期に於て多くの事業を經營することはソビエット政府にとつては殆んど不可能であつた。然るに地方に於ける勞働者團體又はソビエット地方機關は中央政府の意思に反して獨斷を以て徵發又は社會化を行つた。故に千九百十八年の始めに政府は地方機關の社會化實行を禁止し、その權限は國民委員會又は最高經濟會議議長のみに屬することゝした。

千九百十七年十月二十三日より千九百十八年五月十五日に

の間に國營とせる工場二百三十四、差押へたる工場七十、同年七月一日までには更に二百四十二の工場が國營とせられ百四十一の工場が差押へられた。此中地方の機關の處分したるもの四分の三を越してゐる。而して此等は皆國民の營養又は戰爭に必要なる大工業であつて金屬工業、化學工業、食料品製造業、材木業、製紙業等が其主たるものである。千九百十八年六月、獨逸帝國瓦解の數ケ月以前に於てソビエット政府は獨逸帝國主義侵入の危險を避くる爲めに大工業及中工業の全部を國營とする必要を認めた。然も五十萬ルーブル以下の資本を有する事業は國營とすべからざることを決定した。事實に於て小資本、中資本の事業は千九百二十年十二月まで私人の手に殘つてゐた。中資本の事業が次第に國家の監督事業の中に加へらるるに至つたのは特別の原因がある。即ち大工業は主として戰爭の爲めに使用せられ又は原料、燃料及勞力缺乏の爲めに閉鎖されたから國家及國民の需要の大部分を滿し得るものは中又は小事業のみとなつた。即ち此等の事業の國家的意義が次第に增加して來たから國營とする必要が生じたのである。大工業ならざる事業が社會化されたことはソビエット政府の一般經濟政策から出たのではないのである。

千九百十九年十月一日に於ける露國の全工場の數は六千七百七十五、其勞働者の數は百十八萬五千五百四十二人であつて國營とせられたる工場の數は二千五百二十二、其勞働者數は七十五萬六百十九人であつた。千九百二十年四月一日には國營とせられたる工場數四千百四十一、其勞働者數は九十八萬三千四十九人である。一工場の勞働者平均二百三十七人である。國營とせられざる工場數は二千六百三十四であつて勞働者の平均數は一工場七十六人である。故に中事業の三分の二位は事實に於て國營とせられずに殘つてゐた。

四

レーニンは「國家資本主義」(Staatskapitalismus) を露國に採用する必要を說いた。之を聞いた反ボルシエビストは「資本主義に對する降服」なりと解釋した。レーニンの云ふ意味はプロレタリア獨裁治下に於ける國家資本主義である (Der Staatskapitalismus unter der Diktatur des Proletariats)。

ブルジョア國家の資本主義に於ては利潤を收得するものはブルジョアである。ブルジョアは餘剩價値を資本の城壁の建築又は殺人武器の製造に用ふる。之に反してプロレタリヤの國家は國營事業より利潤を收め之を一般民衆の爲めに使用する。國家が其事業の一部を私人に貸し下げて經營せしめても、貸し下げ契約の條件をプロレタリヤ全體の利益のために定むる實力を有

してゐる間は決して資本主義への立戻りではない。國家が重要工業と交通機關とを掌握し全經濟生活に對し監督權を有しプロレタリアの支持と信賴とを得てゐる間は依然としてプロレタリヤの國家である」と。

千九百二十年七月十日の布告によつて國營事業を私人又は會社に賃貸することに關する規定が發表された。國家は賃貸せる事業に對し原料及機械を供給する義務なく、國家と事業主との間の問題は裁判の方法によつて裁決せられ決して國家の一方的意思によつて決せらるべきでないことになつてゐる。

更に穀物の國家專賣事業を廢し、穀物の强制徵收に代ふるに現品稅を採用することになつた。穀物の强制徵收はソビエット政府の考へ付きではなく各國に於て行はれたことであつて戰時中はザー政府によりて採用され、穀物專賣はケレンスキー政府の採用したところである。ソビエット政府は此兩者を採用した。農產物の專賣は一時に各種の產物に對して行つたのではなく必要に應じて次第に其範圍を擴げたのである。最初は穀物、次に肉類、馬鈴薯、牛乳製品等を專賣とした。此等の經濟政策は革命戰の步調に應じて行はれたものであつて、それが經濟上より實際必要であつたかどうかは別問題である。彼等はレーニンの云へる如く「戰時共產主義」(Kriegskommunismus)の手段として突擊したのであつた。將來の結果を深く考慮したのでもなく又平和的國民生活の爲めの平和的經濟の建設を目的としたのでもなかつた。國家の全力をプロレタリヤ權力の防禦の爲めに傾注する一手段として採用したのである。新經濟政策に於ては之を廢した。

五

新經濟政策に向ひ得るに至らしめた力は困難なる鬪爭の後に反革命軍を遂に擊退したるプロレタリアの勝利である。故に新經濟政策はソビエット政府の基礎が鞏固になつたことを示しこそすれ其崩壞を暗示するものではない。新經濟政策の實行を必要强力ならしめた原因は、西歐の革命の不振である。西歐の革命はレーニンの豫想に反して緩漫であつた。レーニンは露國に於ける革命の步調を早めた。西歐の革命もそれに和して進むことを期待したのである。世界大戰の爲めに破壞されたる露國の生產力は外國の力無くては恢復出來ない。レーニンは素より外國よりの援助を欲してゐた。西歐の革命が早く成功して、プロレタリヤ國家が來り援けることあらば此上もない幸である。レーニンは之を希望した。外國のブルジョア社會よりの援助も絕對に欲しなかつたのではないが、それよりもプロレタリア國家が生れんことを祈つた。其目論見が外れたのである。

西歐の革命が近き將來の間に成功する希望が少なくなつた故に露國は之に適應して新經濟政策を考へなければならなくなつた。露國はプロレタリヤ國家の來援を期待せずに自立しなければならなくなつた。露國はどうにかして持ち堪へなければならない。故に政權獲得の鬪爭より經濟の再建に向ふことゝなつた。第一期は生產及商業の國營化政策であつた（Nationalisielung）新經濟政策と稱せられる第二期は或點に於てブルジョア的、私資本的關係を復歸せしめる國營廢止の方針に向つたのである。（Denationalisielung）。

然しながら國營廢止のみにては露國の經濟は救はれない。ソビエット政府は外國資本家と經濟關係を結ばれなければならなくなつた。資本主義政府と經濟的關係を結ぶことはソビエット政府の躊躇するところではない。「却つてそれに依つて露國の經濟を再建し得るならば共產主義の國際的宣傳の最も有効なる手段である」とレーニンは云つた。露國の經濟的崩壞は世界の勞働運動に暗影を投げることは疑なからう。

英獨及其他二三の小國と貿易を開いてより僅々五ケ月間にして（即ち千九百二十一年の正月より五月に至る間に於て）輸出入は封鎖數年間の合計を超過した。露國の必要とする貨物は機械、染料、油及調革、其他北部の人民に對しては食料品、ペテログラードの工業に對しては外國炭である。大戰前に於ては露國の輸出は輸入を超過してゐた千九百十四年に至つて輸入超過となり革命後は輸入殆んど杜絕した。故に外國貿易再開さるゝならば莫大の輸入を必要とするのである。

六

露國は如何なる手段に依つて資本を外國より借り入れることを得るであらうか。露國は一度外國債を破棄した。今日より之を觀ればそれは露國に取つて賢明なる策なりしと云ひ得るかどうか疑問である。佛國は機會さへあれば露國の反革命黨をしてソビエット政府を顚覆せしめんとする。其爲めには何十億フランを支出することも惜まなかつた。外債破棄はボルシエビストのみの實行したことではなく外債破棄を宣言した時の會議にはボルシエビスト以外にメンシエビーキも社會革命黨も參加してゐた。即ち露國の革命的黨派は全部之に同意してゐたのである。其目的はザー帝政時代の債務の性質に反對せんが爲めではなく、此手段によつて戰爭を終結せしめんとしたのである。聯合國との間に結ばれてゐる黃金の鎖を切斷することに依つて露國は戰爭より退き得たのである。外債破棄は又革命の勢の向ふがまゝに行はれたものであつて資本主義に根本的打擊を與へんとする緊急手段の一であつた。

銀行の國有も同じく政治上の原因に從つて行はれた。當初は之を國家監督の下に置いたけれどもそれのみにては銀行は依然として反革命の應援者であつた。止むを得ず斷乎として國有としたのである。其經濟上の効果又は影響に付いては左程考慮しなかつた。若し「國家資本主義」を行ふ過渡期が長かるべきことを當初より豫期してゐたなら或は他の方法を採つたかも知れぬ。ソビエット政府自身も認める如く拙なふ方法によつて銀行の國有を實行し其結果積極的財産を得ることなく單に金融機關を破壞して終つた。

私立銀行の無くなつた事は外資輸入の上に最大の不便となつた。露國の經濟の恢復には莫大の借入れを要する。其信用は利權の許容に依るより外に道は無くなつた。

外國資本家の爲めに國土の藏蓄する富又は事業の一部の搾取權を一定の期間分讓し、その對價として卽時に一定の資本支拂ひを受くることは經濟上から觀れば現金拂ひに對する先賣りであり、國家は將來の生産物に對して現在必要なる生産機關を得ることになる。ソビエット政府は利權の許容は國内の生産を增加せしめ從つてプロレタリヤの解放鬪爭の道を開くものであるから結果に於ては資本主義に對する降服にはならぬと認め、千九百二十年十月二十三日の布告に於て西部シベリヤ及歐露北部の森林、シベリヤの鑛山、歐露東南部の農業の利權を許容すべしと發表した。

大工業の根幹を國家の手中に保持し、國策の根本性質を社會主義的に保ちつゝ利權の特許に依りて得たる資本を國營事業の生産力增進に轉用せんとするのである。

然らば外資輸入に關して外國銀行は助力するであらうか。ソビエット政府は此點を樂觀してゐる。「世界の經濟的不景氣の爲めに潤澤となれる資本は銀行を壓し遂に露國に投資せしめ、各國に於ける勞働運動は生産事業の間斷なき繼續を要求し從つて生産物の販路として廣大なる露國を問題にするに至る」と。卽ちソビエット政府は露國に對する資本の封鎖は破れ外國資本を得ることは次第に實現せらるべきことを信じてゐる。

六

勞働者の全部をして新經濟政策を理解せしむることはソビエット政府の重大なる内政問題である。特に利權を外國資本家に許容することは勞働力の搾取權を事業主に容易に與ふることである。反ソビエット黨特に今日に於ても多少勞働階級の間に關係を有するメンシエビーキは機會を利用してソビエットの地位を困難ならしめんとしてゐる。彼等はソビエット政府の新經濟策を以て資本主義への復歸として勞働者間に宣傳した。

新經濟政策は第三インターナショナルの支持の下に共產黨全員一致して承認したものであつてソビエット政府は共產主義の根本政策から少しも遠ざかつてゐるものではないことを極力主張してゐる。然しながらそれがレーニン等の意に反して將來客觀的に資本主義に進んで行くや否や、此點は別に論ぜらるべきところであらう。ソビエット政策の幹部は本問題を顧慮することなく彼等の政策を常に革命の必要に應じて立てゝ來た。新しき事情の發生と共に新しき道を選んだ。プロレタリヤの政權を確保せんが爲めには如何なる犧牲をも拂つた。外國の資本が遂に露國の經濟生活を壓迫し其運命の鍵を握るかも知れぬ危險に對しても勇敢に突進したのである。

七

露國は新經濟政策に依つて塹壕戰に移つた。露國は數年を塹壕に立籠る積りらしい。革命の歩調を緩めたる新政策に於ては經濟の再建は到底共產黨のみの能く爲し得るところではない。彼等は政派に無所屬の人々を官吏として其助力を求むることにした。產業の集中は共產主義の理想であるが露國の經濟狀態は未だ之に適當してゐなかつたにも拘はらず、「戰時共產主義」は革命鬪爭の必要上之を行つたのである。新政策は非集中主義へ向つた。地方機關に經濟上行政上次第に權限を得るやうになつた。從つて農民の政治上に於ける地位が重くなつた。「社會革命黨」が經濟問題に關して主張してゐたところはソビエット政府が新政策に於て採用した所と同一である。即ち現品稅、自由商業、重要工業の國營等である。故に農民黨なりと自稱する社會革命黨が農民の間に勢力を得てソビエット政府の地位を危くすることはあるまい。經濟政策が「戰時共產主義」の結果強制經濟の形をとつてゐた間は農民は其利益の毀損せらるることを恐れてゐたけれども新經濟政策の實施により小生產者は其生產品を自由に處分し得ることゝなつたから農民と勞働者との間の利害衝突の原因が消滅した。工業勞働者と農民とが結合して反革命に當ることゝなつたから內政上に於て新經濟政策はソビエット政府の地位を固めたことになる。

新經濟政策の內政的結果は工業勞働者及農民が經濟の再建を自動的に行ふに至りしこと、行政の地方分權、緊急狀態の解除、革命立法及革命裁判の基礎の上に立つ革命秩序の確立等である。

ソビエット政府が他の政黨と聯合政府を組織する可能性あるであらうか。問題になるのは社會革命黨である。社會革命黨の政綱はソビエット政府の既に實行せるところであるから別に之と聯合內閣を作る必要はあるまい。又農民を政治に參與せしむ

ることは社會革命黨を要しない。ボルシエビストは社會黨と共に政府を形成することは困難を增すのみであると云つてゐるからそれは實現しないであらう。

八

ソビエツト政府は科學的共產主義を基礎として其戰略を適用してゐるのであらうが、露國が農業國なること、反革命黨の勢力の强かりしこと、聯合國帝國主義の壓迫の大なりしこと等の爲めに未だ共產黨の政綱を實行し得ない。其行ふところは常に内外の情勢に從つてゐた。第一期は經濟上の效果を顧慮せざる戰時共產主義を用ひ第二期は經濟の復興を主とする國家資本主義を採ることゝなつた。何れも共產主義の常道とせらるゝところとは多少遠ざかるけれども共產主義は革命の必要の爲めには掛け引きを殆んど制限なく認める。故に新經濟政策は少くとも共產主義者よりは有效なる戰略の一と觀られてゐる。世界のブルジョアは之を以て共產主義其自身の無價値を證するものとして喜ぶ。

露國は建設に向つた。ソビエツト政府の基礎は益々鞏固になるのであらう。露國は諸外國との通商を希望してゐる。資本を要求してゐる。世界經濟の重要なる一部たる露國と交通を開かざるは賢明なる國家、國民でない。

世界平和、人道主義を目的として國際聯盟を組織したる程の聯合國々民は現在二つの罪惡を無智と利己との爲めに行つてゐる。一は對獨講和條約履行の强制、二は對露絕交である。露國一億數千萬の男女が餓へてもボルシエビーキが憎ければ政府は見殺しにする。「愛國心」に富む人民は見て見ぬ振りをする。

假りにソビエツト政府が失脚することありとしても露國には社會黨以外の政府は成立しまい。舊軍閥又は王黨が天下を取ることは想像出來ぬ。假令一時成功しても忽ち失敗するだらう。諸國の勞働階級が之を許さない。故にソビエツト政府の亡びるのを待つて然る後露國と交際を開くべしと考ふるのは極端なる愚である。聯合國政府は「勞農」露國と結局に於て交通を開くべきことを覺悟しなければならぬ。

文藝の心境

厨川白村

Our song is the voice of desire, that haunts our dreams,
A throe of the heart.
—*Robert Bridges.*

無限に昂揚飛躍せんとする生命力や、自我衝動(イッヒ・トリーブ)が、人間の日常生活に於ては必ず何等かの抑壓作用をうけて阻止せられる。そこに苦悶が生ずる。この無數の苦悶は、胸奥の底ふかきに隱れ、當人にも氣づかれざる無意識心理のかげに潜める「心の傷手」となつて殘る。しかも潜みながらも隱れながらも、此苦悶は絶大の力を以て其當人の心的生活の全部を搔き廻はし、個性の眞髓となり、中核となつて、かれの全生活を左右してゐる。それは、日常の業務などに從事し極めて外面的な生活をしてゐる時には、全く無意識界の底に葬られてゐるが、一たび睡眠狀態とか、藝術製作とか、觀劇とか、文藝鑑賞とか、さう云ふ凡べて吾々が通俗生活を離れた時に於て、この苦悶、この心的傷害(プシヒシエトラウ)は、やがて突如として擡頭し來つて、それが象徵の衣を纏うて、夢幻の形となつて出現し來る。文藝の創作と鑑賞とは、二つながら此心理を基礎として成立するものだ。それは象徵化せられた夢幻の境地に在るもので、この「夢の生活」に於て、吾等は日常の通俗的な表面的外面的生活に於けるよりも、一層深く一層突込んだ沈潜的内面的なる生活を體驗しつゝあるのだ。抑壓を離れたる、絶對的に自由なる創造生活が、玆に成立する。

以上の意味の事を稍々詳しく、私は一昨年一月の本誌の卷頭に於て、『苦悶の象徴』と題して論じた事があつた。これは私が遠からず世に公けにして大方の高教を仰ぎたいと思つてゐる『文藝序論(プロレゴメナ)』の一部であるが、わたくしは今この草稿のなかゝら、さきに既に公けにした所說の補遺となり釋註たるべき一節をこゝに抄出する。

夢の世界に於て、吾等は決して眠つてゐるのではなく、眞の意味に於て、實は目さめてゐるのだ。否、覺醒時よりももつと人として、また藝術家として――さうだ、其時は如何なる人もみな藝術家である――純眞な活動をなし創作をなす事を得るのだ。意識狀態が更に鋭く集注的となつて、ちやうど或る物象の上に强い光線が投じられた時と同じく一層際立つた明暗の度が附き、いつもは氣附かないやうな陰影(ニユアンス)の微をさへも捉へ、すがた、形、動きなどが精妙を極めて心に映ずるのである。肉眼を見開いてゐる時よりも、自分の心の一層深いところに、はつきりと現實の相を捉へる事が出來るのである。內に向つて、靈界に向つて、鋭く見開かれた心眼が、隈なく冴へ渡つた時の狀態だ。文學者が筆を執るとき、俳優が舞臺に立つとき、彫塑家が鑿をとつて大理石に向つたとき、更にまた、詩歌小說を讀んで强い感激に打たれたとき、悲劇を觀て袖をしぼつたとき、名畫に對して恍然として醉はされたとき、すべて鑑賞に於てもまた創作に於ても、この夢の心境にまで踏み入らない者は、いまだ藝術の三昧境に入つた者ではない。

昔から文藝の快感には無關心 disinterestedness といふことが要素であると說かれたのも、畢竟この點を指したのだ。即ち實利生活通俗生活の境地から一歩踏み出し、それを離れて尙ほ深きに沒入してこそ、はじめて現實を凝視し、靜觀し、觀照し、また批評し味識することを得るので、たとへば動物園のライオンの雄姿を見て、山野に咆哮するその生活をまでも想ふと云ふやうな場合、もしそこに鐵柵といふ隔てがなかつたならば、われ／＼は猛獸の危險が身に迫るといふ恐怖の爲にライオンの眞の姿を凝視し靜觀する事は到底不可能である。そこに檻の鐵柵が我と彼とを隔てゝ、無關心、

の狀態にわれを置いて與れるが故に、此藝術的觀照は成り立つのである。ハイカラな氣障な服裝をした男が石に躓いて倒れたとする。それは確に滑稽な場面だ。しかしその男が若し自分の親兄弟か何かであつて、直接自分との間に利害關係や實際上のインテレストがあるならば、吾々はそれを一場の痛快な滑稽味として、喜劇的場面として受取る事は出來ないではないか。そこに自分の實際生活との間に或る餘裕と距離とが存すればこそ、深く現實として此場面を感味する事が出來るのである。「夢」の中に於て、一層寫實的に觀照する事が出來、藝術家としての眞の活動が爲され得る所以は即ち玆に在る。或人が云つた、五感のうち藝術の根本となるのは視覺と聽覺とだけだ。即ち此二感覺は、他の味覺嗅覺觸覺の如くに直接的實際的でなく、そこに或る距離の存在が要件となる。即ち視覺や聽覺は、距離を隔てゝ觸れる事である。如何に肌ざわりの好い天鵞絨でも美味い料理でも、それは決して完全な詩でもなく藝術品でもない。料理人を藝術家だとは云はれまい。觸覺や味覺には此「隔り」がないために、それ自らでは文藝の領域には這入られない感覺である。それは藝術的たるべく餘りに肉感的であり實際的であるからだ。ライオンの柵の鐵柵が無い場合と同じいからだ。（以上「夢」と云ふのは「實際的(プラクチカル)」な日常生活を離れてゐると云ふ意味である。更に適切に云へば「醒めたる者の白日の夢」詩人が所謂 "waking dream" に他ならない。）

この「非實際的」であると云ふ事が、吾々をして利己的情慾其のほか色々の雜念の煩ひから離脫せしめる事によつて絕對自由の囚はれない創造生活の心境を現ずるのである。即ちあらゆる抑壓から放たれ淨化せられた藝術生活、批評生活、思想生活は、此「非實際的」「非實利的」と云ふ事を最大要件の一つとして成立する。美女を見ては之を己が妻とせんとし、黃金を見ては自ら富まん事を思ふのが、人々の實際生活に於ける心境で、若しそれ丈けに終始するならば、それは動物生活俗物生活であつて、靈的精神的方面を有する眞の人間生活ではない。吾々の生活が「實利」「實際」と

いふ者から浄化せられ醇化せられて、「離れて見る」事を得る「夢」の境地に入つてこそ、そこにはじめて吾々の生命は高められ深められ、強調せられ擴大せられるのである。渾沌として無秩序無統一なるが如き此世界が一つの纏まつた、秩序あり統一ある世界として觀照せられるのは、唯だ夫れ「夢の生活」に於てのみである。實際的と云ふ事から生ずる雜念の曇りを拂うて清朗一碧、さながら明鏡止水のごとき心境に入る時、そこに藝術的觀照生活の極致は到る。（拙著『象牙の塔を出て』九一頁―九八頁に「觀照」の意義を說ける一項を參照）

かくて「白日の夢」に於て、吾等の肉眼は閉ぢて心眼が見開く。それは即ち靜思觀想の三昧境に入つた時である。實行を離れ欲念を脫し、外圍の紛々擾々を逃れて到れる自由の美鄕。叡智靈光はさながら天心に懸れる明月の如くに其一切を照らしてゐる。この幻像この情景は、これを象徵によつて表現するほか道なき者である。

すべて文學に限らず一切の藝術創作は、渾沌として不統一なるかの如くに見ゆる現實生活の事象に、統一を認め纏りを見出す事である。即ち無意識心理の作用によつて、作家も鑑賞者も皆ともに自己の選擇作用を働かしてゐる。その人銘々の選擇作用によつて、色々の立場から、色々の態度で、統一ある創造創作が此渾沌たる事象の中から纏め上げられるのである。卑近の例を以て云へば、たとへば私の書齋には原稿紙や紙片や文具や書籍や雜誌や新聞などが、紛然雜然として混亂の狀態に置かれてゐる。他人の目から見れば確かに夫れは渾沌たるものである。しかし私は他人がこの室に入つて、指をだに夫れに觸れる事を迷惑に思ふ。そこに私みづからの目から見れば立派な秩序もあれば統一も在るのだ。もし女中の手で夫れが形付けられるならば、また別の個人の立場からの選擇作用が行はれるが故に、大切な原稿が紙屑と間違へられたり、書物排列の順序が違つて、手近に在るべき物が遠くに在つたりして、私に取つては非常な不便を感じなければならぬ。立場と態度とを變へて物を見ると云ふ事になれば、個人個人によつて差異あるは勿論、同一人に就

ても亦た異れる統一が見出だされる。文藝の創作が飽くまでも個人と個性とを主要としてゐる所以はこゝに在る。たとへば一つの景色に對しても、Aの人が見るのとBの人が見るのとでは、そこから掴み出す物が非常に違つてゐる。また東から見るのと西から見るのと、或は左右上下、各々その立場の差異によつて、それぞれ異つた採擇作用が行はれるのだ。同一人が同一の對象を見るにも、股ぐらから倒まに見た景色は、普通に直視した景色と全然趣を異にしてゐると同じだ。

序ながら、自然人生を文藝的に觀る事を知らない外面的な常識的な形式法則萬能主義者、或は道學先生の徒は、之を喩ふれば、私の書齋を形附ける女中のごとき者だ。何も解らないで、是は不都合だの亂雜だのと云つて、唯だ書籍の寸法色合ひによつて、或は單に因襲的な考へ方から硯箱やら煙草盆の位置を定める事によつて、私といふ個人を主要にした書齋の眞味を破壞し了るものである。（終）

らぷそでぃや・ぼへみあな

Some hieratic owl of wisdom has called the clown the epitome of mankind — J. H.

辻　潤

などと變に、ひとり呑み込みのやうな題のつけ方をするのは別段コケ嚇かしの積りではないのだ——なに分、異人の言葉を頭へ詰め込んだが因果で、なるべくソイツを使用しないのは損のやうな氣がするものだから。それに僕は兎角、人眞似がキライな性分で、出來るなら、言葉も全然自分獨特の奴を發明してやりたい位に考へてゐるのだ。けれど、世間に早速通用しないとなると、賣り物になりさうもないから、先づは我慢をして置く次第なのである。

これから書かうとするものが小說なのだか、創作なのだか、雜文なのだか自分にも一向見當がつかない——だが、結局、文學以外？に終りを告げさうなことだけは自分にも大抵豫想することが出來る。

さて、混沌が雲母のやうに腦漿の中で漂つてゐる或る日の黄昏時のことから話し出しても分裂した精神の破片があるこほるのふわんたあすを奏でてゐる眞夜中の出來事から話し始めても、それはどちらでもかまわないのだ。

その頃、自分は「おのれ一人の靈魂を獲得するために、」全世界の滅亡を別段翼ひ願つてゐたわけではないが、いつでもネルヴルの〝Le Lièvre et la Vie〟をふところにして、瘠犬のやうに都會の風塵にまみれながら、その日の餌さ、一生に一度出逢ふことが出來るかどうだかさへ覺束ない自分のオゥレリアをひそかに尋ね求めて彷徨ひ歩いてゐた。

自分はもつと烈しく嘔吐する爲めに——それは薄弱な意志の巧妙な酒辭であるかも知れない——パルク・ダサクサの泥海に漸りに沒入してハアレキンのデングリ返しを演じてゐた爲めか後頭部が時々錐で抉られるやうに痛んで、自己の存在を更に深く意識する助けをも得てゐたのだが、それを和らげ慰さめるためにも愈バッカスの盃は必用だつた。

終日歩き疲れて、自分はとある橋上の欄干にもたれながら空き腹を抱えて、しようことなしに落日のディスコルドを噛みしめながら妄想の奈落に顛落しようとしてゐた。恰度その時、自分の眼の前に一人の男が現はれた。

——おい、君は水島君ぢやないか？

恐らく彼は二三度、自分に注意を促がしたらしかつた。僕は朦朧とした意識の底から浮びあがつて亡者のやうに自分にかへつた。

——なにをこんなところで考へこんでゐるのだ？

——己は御覧んの通り疲れきつてゐるのだ、その上、今朝からまだ一度も飯を食はないので物を云ふのさへたいぎになつてゐる——、

——意久地のないことを云ふものぢやない、さあ、僕と一緒に來給へ、そして飯でも食つて元氣を出したらどうだ。

心は動いたが肉體は中々云ふことをきかずいつまでも絶望の塑像をその橋上に佇立ませて置きたかつたらしい。

自分をかう云つて促がした男の顔にもだがやはりアンニュイの雲がかかつてゐるのはスグト感じられた。四十に近い獨身の彼は心持ち猫背の肩を丸くして懐手をしながら、窃かに欠伸を噛み殺してゐるらしかつた。

〜〜〜〜〜〜〜〜

芭蕉庵には猫と婆さんと彼とが住んでゐた。門は傾き、[illegible]した雑草が庭一面に生ひ茂つてゐた。「忘却來時道」と書かれた古ぼけた扁額は主人無法庵の單調な生活を嗤やいてゐるやうに思はれた。

——行くところがなきやあ當分ゐるさ——自分は自分の意志と生話とを見失なつてゐた。何處でもいい、静かに當分ねかして置いてくれるところがありさへすれば——、さう考へながら僕は云はれるがままに芭蕉庵の一室へ腰を下したのだ。

煤けた天井の低い三疊の茶室めいた部屋には型ばかりの床の間があり、床柱には竹編みの一輪挿しが埃りにまみれてブラ下つてゐた。自分は飛び石づたいにいつでも庭の方からこの部屋に出入した。

日あたりのわるいセピヤ色の空氣が自分の心をかなり沈靜にさせた。

無法庵は二階の六疊に萬年床と共同生活をしながら、冷えきつた番茶をガブガブ呑み、時々「あ——あアー」と度外れな欠伸とも、嘆息ともつかない聲を出しながら、机に向つたり、ねころんだりしてゐるらしかつた

——おまいさん、おかまい出來ないが遠慮しないでおいでな

さい――

と、宣告めいた挨拶をしたのは七十あまりの小柄なショウ塚の婆さんにしては少なからず愛嬌のある異體の知れぬ存在で、その表情は複雜微妙を極めてゐた、――恐らく眼の見當が少しく外れてゐたことも與かつて力があつたのであらう。その上かなりなツンボで留守番の役にも立たない、と云はれてゐるこの婆さんは、毎日佛壇のお守り役と、ボロとぢくりとを仕事にして暮らしてゐるらしかつた。

腹がへる時分になると、時々「ニイヤア」と猫が鳴いた。

山の手のさびれた一角に立てられたこの家はもとなんとか云ふ宗匠が自分の住居に建てたもので、昔しはすぐ傍にある常念寺の境内の一部だつたのださうだ、無法庵のやらな男の住居としては先づお誂へ向きのものだつた。

芭蕉庵と云ふのは僕が勝手に命名したもので、門の上に、妾宅ならば見越しの松なのだらうが、芭蕉が蓋ひかぶさつてゐたところから思ひ付いたもので、僕はそれを見る度に、「白蛇の出るのは芭蕉庵」と云ふ文句を口吟んだ幼時を回想してよく一人で微笑した。

猫と婆さんと、無法庵と僕とが偶然にも果た又必然にも何時の間、この芭蕉庵に浮世の假りの宿りを定めたと云ふわけだ夕立に庚申堂に集まつた時代錯誤のダンマリの途中と別段大差はないので、四人が四人？とも別な世界に住んで、飯を食ふ時だけ顔を突きあわせてゐたと云つていいかも知れない。

無法庵が僕にとつて先輩であり、友人であるかの如く、僕が食客であり、又同居人であるかの如く、婆さんは無法庵の叔母さんであり、乳母であり、雇人であり、厄介物であるかの如くであつた。そして、實はみんなその孰れでもないのであつたかも知れない。

今迄に一度も顔を見たことのない男が、來る早々スグに食客になつたので、婆さんは少なからず不安な、警戒を與へるやうな眼で僕を眺めたのも無理もない。

――敏雄さんは又どこの馬の骨とも知れない變な人間を引張つてきたよ――

婆さんの此腹を安心させる恐らく爲めであつたらう無法庵は

――婆さん、この男はね、――これでも昔しア藏前の御札差しの倅れなのさ、――淺草だから滿更縁のない譯けぢやあるまい

――へえ、この人がかえ――

としばらく呆氣にとられて、例の異様な表情で僕を見てゐたが

――おまいさんも運のわるい人だと見えるね――なんだつて、こんなにお成りになつたのだえ、おかみさんはないのかえ？

年はとつても、いくらショウ塚でも婆さんは遂に女であつた。

待つてましたと云はないばかりに無法庵、

――おかみさんか――アッハッハッ――この男が貧乏なのでな男をこしらへて逃げてしまつたのさ、――おかみさんばかりぢやない、この男には子供が二人もあるのだよ――

――おや――ほんとかえ――隨分薄情な女だね、――おまいさんもおまいさんだ、――よくそれを默つて我慢してゐるものだねえ、――

我慢してゐるもゐないもありはしないのだ、我慢してゐないとすると、全體どんなことになるのだか――その邊の見當は一向無頓着おかまいなしで、婆さんは饒舌つてゐる――!

――お婆アさん、それだけの御親切があつたら一ツどうか別嬪のお嫁さんでも御世話願ひたいものだね、――せい／＼あてにして辛棒しますよ、

――でも、子供があッちや、中々むづかしいねえ――それにおまいさん御嫁さんをもらッたッて、食べさせてやることが出來なけりや、どんな人だつて駄目だよ――

――だから、なるべく持參金つきの大家のお孃さんかなんかを――

――好きなことを云つてるよ、この人は――それよりか、先づおまいさん一人の身ぢんまくをする方が先きぢやないか――

――水島君のお嫁さんより、僕の方を先きに願ひたいのもだね――敏雄さんはわがまゝだから來てがありやしない――

――結局、お嫁さんには緣なき衆生共か――No woman is か――助からない――、

機嫌のいい時には婆さんも時々味のあることを云ふが、たいていは變に氣むづかしい顏付をして、一人でゐる時もたえずなにごとをか不平らしく唸やいてゐた、――永年の獨居は婆さんの胸板をコンクリイトのやうに固めて古井戸のやうな穴を明けその上を氣味の惡い雜草で飾つてゐた。これでも昔しは無法庵の言ひ草によれば「新門辰五郎の從妹だか姪だかにあたり、その弟と仲よしの友達で名優川の助の崇拜者で、久米三梅を結たことのあるお江戸淺草の典型的な下町娘」だつたかと思ふとイヤになつてしまふ。だが、さう聽けば折々僕のおふくろを聯想させるアクセントと江戸なまりとを婆さんの會話から感じさせられることがあつた。

書いてゐるうちにどうやら小說らしいスタイルになつて來た。自分は昔からあまりデテイルの描寫が好きな方ぢやない――だから、硯友社の連中――ことに御祖師樣の紅葉山人のものな

とは讀む氣がしなかつた——いくらその技巧に感服してみたところで、面白くないものはどうも致仕方がない。髷の形やら、衣物の色合やら、歩きつき——一々微に入り細を穿つ筆法はいたツて不得手なのだ。—— 全體、衣物のことなどは少年の時分から興味がなかつたものだから、この年になつて、未だにメイセンとフタコとイトオリの區別がつかないと云ふ厄介な人間だ——勿論、當人にとつては一向厄介でもなんでもないが、——小說めいたものなどを書いてみようなどと人並の了簡を起す日になると、多少不便を感じないでもない。

從つて、芭蕉庵の部屋の模樣や、無法庵の服裝や、婆さんの物腰などに就ても、書かうと思へばまだまだいくらもあるのだがその邊はいい加減にして讀者諸君の豐富な想像力に任かせることとする。

芭蕉庵の書はまことに火の消えたやうに靜かで、人間が住んでゐるのかゐないのかわからない位だつた。各自與へられた部屋に引き籠つて自分一人の世界の主人になつてゐた。

No woman; No life —— たしかに芭蕉庵には生活と云ふものがなかつたのだ。

唯だ折々なまめかしい桃色や、水色の西洋封筒が入口の郵便受函に恥かし氣に訪ねて來てゐた。——

無法庵の日記より

××年、××月、××日

私は一室に籠りつきりで、しきりと書物を讀む。徒らに書物ばかり讀む。夜を日に繼いで讀む。恰も特別急行列車に乘つて硝子窓から瞬時も窓外へ向けた眼を離さぬ旅客の如く讀む。何の爲めに讀むのかと、昔はよく考へて見た事もあるが、今は全く何等の考へもなしに、勿論何等の目的もなしに、ただ無意味に讀む。貪れるだけ、貪つて讀む。哲學書も讀む。宗教書も讀む。科學書も讀む。語學書も讀む。小說も讀む。隨筆も讀む。なんでもかでも手當方題に續む。

面白くない。可笑しくない。有難くもない。悲しくもない。嬉しくもない。さうしてただ必死に讀みに讀むのである。書癡と云ふ字に相當する人間は、恐らく私の今の狀態に相當した人間の事であらう。

私に若し書物を讀まない時があるならば、それは必ず食事か上厠か、入浴か、睡眠か然らざれば、賴まれて文章を書いてゐる時かに限られてゐる。…………

飯を食ふ事が若し私の本能ならば、讀書も亦私の本能である

それゆゑに讀書を廢さうとする試みは私にとつては食事を廢さうとする試みと等しく全く不可能事であ。私が飯を食つて生てゐる以上、私は同樣に書を讀んで生きてゐなければならぬ。

讀書人の世の中の役に立たぬと云ふ事は、昔からよくきいてゐた事であるが、今日となつて見ると、少なくとも私自身の實例に徵して見ると、それが實際本當の事であつた事に心づく。私は全く世の中の役に立たない。世の中も亦私のやうな者を役に立てようとしない。緣雨なら、さしづめ、「お互ひさま也」とやらなければならぬところであらう。

××月、××日

丸一ケ月ばかりで外出した。外出などは全くしたくはないのであるが、なんにせよ、賴みもしないのに、いつの間にか耳を蔽ふばかりに延びひろがつた頭髮がうるさくてたまらなくなつたのである。若し頭髮の延ることが、果して眞の自然だとするなれば、それを煩さく思ふのは、或は不自然だとしなければならぬかも知れぬ。それに反して、若し頭髮を剃つて了ひたくなる考へが、却つて眞の自然だとするならば、賴まれもせずに延びひろがつて行く頭髮の生活が、私にとつては、どうしても不自然だとしなければならなくなる。然るに若しその頭髮の生活と私自身の生活とが、共に等しく自然だとするならば、その二ツの生活は必ず永遠に兩立することが不可能になるであらう。延びるままに延びれば、頭髮は私を不快にしなければ止まな頭髮の生活の爲めに私の生活を犧牲にすれば、私は必ず病氣になる、病氣を惹き起す根元たる頭髮のなすがままにして置けば私の病氣はそれからそれへと餘病を併發して、しまひには死期を早めなければならぬ事にならう。かるが故に、私は自ら生き續けて行かんが爲めに頭髮には氣の毒ではあるけれど、私としては是非短く刈り込んで了はなければならない事となる。

――箇々の自然は必ず兩立せぬ。さうして一の自然が眞の自然たる要求を發した場合には他の自然は悉く不自然にされて了ふ。と、私はさう云ふ定義を心の中で考へながら家を出た。…

二階でなにをやつてゐるかと思へば、原稿料にもならないこんな日記をつけたり、水色や、桃色の封筒の返事を書いたり、亂讀をしたり、欠伸をしたり、番茶を吸つたり、ゴロ〱したりしてゐるのだ。一寸近所の床屋へ出かけるにさへ、こんなことを一々考へ込んでからでなければ出かけられないと云ふ厄介な人物なのだ。「まことにはや、結構な御身分で――」と冷やかされたところで、仕方がないのだが、當人の身になるとあまり樂ではないらしい、樂どころか、暇のあるに任せて一向、役

にも立たず、生きてゐる上に、あまり爲めにもなりさうでない事ばかりを考へて毎日、暮らしてゐるのである。

こんな男の生活を客觀的にいくら描寫してみたところで一向面白からう筈がない。芝居なら、「動き」がないのだ、曲彔へ頬杖を突いて、ポカンとしてゐる馬鹿殿樣と云ふ役割りだ。こんな男を捉かまへて來て、小說にしようなどと云ふ人間は更にそれ以上「輪に輪をかけた」迂濶な代物なのである。

××月、××日

…………………

生まれなければそれで濟む。生れなければよかつたと、しみ〴〵思ふ。が、生れた以上はいくら生が好ましくなくても、いくら死が厭はしくなくても、誰れでも必ず死なない工夫ばかりする。さうして出來るだけ生の煩累を重ねて行く。

人生に對する考察は、先づ生苦と云ふことをば心魂に徹して感ずるところから發足する。故に苦の自覺がまだ始まらない人間は、進化論的に云ふと、人間の種族よりは、却つてまだ猿の方に近い時代の、過渡期的生物であると云はなければならぬ。なんとなれば生苦の自覺が生じないうちは、必ず生活そのものに對する考察が生ずる苦がないからである。

一日生きれば、一日だけ苦が增して行く。同時にその積頂する苦を脫却したいと踠く。が、踠けば踠くほど、苦はその度に殖えて行く。さうして苦が殖えれば殖えるほど、人はますます踠く。苦集滅道と云ふ事を考へ出した思想家は、最もよく人間の心事を了解した人だと思ふ。

××月、××日

…………………

ポカ〳〵暖くなると、たゞフラ〳〵と出步いて見たくなる。出ればなにか旨い物が食べたくなり、たべもの屋へ這入れば、一寸一口飲みたくなり、一杯機嫌になると、たゞもう無性に嬉しくなつて。自分の家へなんぞ全く歸へるのが癪になる。

が、一二軒飲みに這入ると、忽ち小使錢に差支へて了ふ。外をブラついてゐて小使錢の無いくらゐ馬鹿げた事はない。ボンヤリと公園の石垣の上などへ彳んで、見事に青蔦の絡まつた大榎の木下蔭から丹頂や家鴨なんぞののどかに遊んでゐる池を見卸してゐると、小使錢がなくても、平氣な顏をして、さも嬉しさうに咲き誇つてゐる岸の白菖蒲や、松島にありさうな岩組の噴水や、向ふ岸の青々としたプラタンの若葉や、その蔭を縫ひ步

るく老若男女が小腹の立つ程、羨やましくなつて來る。なぜ俺は小使錢など欲しいのかと思ふ。と小使錢がなければなぜ俺は馬鹿〳〵しくなるのかと思ふ。

書齋に閉ぢ籠つて、古本ばかり撚ねくつてゐる時は、小使錢なんぞ少しも欲しくない、人間は芋粥を啜つてゐたつて、健康に其日を送りながら、靜かに坐り、靜かに思ひ、靜かに高尙な書物でも讀んでゐれば、それで充實した人生が嚙みしめられてゐるものゝやうにのみ考へらる。

ところが、一旦外へ出ると、さうは行かなくなる。透き徹るやうな青空の下を威勢よく華麗な自働車が通る。その中には盛裝した美人までが、恰も六慾天界の人のやうに、唯々凡夫を橫目に見卸しながら、遠慮なく、つツつツと通り過ぎる。それを見送ると、私は忽ち馬鹿〳〵しくなる、すぐと小使錢が欲しくなる。出るたんびに百圓、二百圓と懷へ押し込んでゐられる身分なら、どんなに世の中は面白いところだらうと思ふ。

が、そんな事を考へる時は、必ず酒のさめた時か、或は酒を飮む丈けの懷錢を持つてゐない時にかぎる。小使錢がなくなつて、醉がまつたく醒めはてゝ了ふと、私はきまつてスゴ〳〵と電車へ乘る…………

――金も持たずに、世の中へ面を曝らすと云ふ法があるものか。人並みな面を曝らしたければ、泥棒でもなんでもして、もつと景氣よく世の中へ押し出すがいゝ。と心の中で、しきりと自分の意久地なさを叱責しながら、コソ〳〵と電車を降りてコソ〳〵と自分の書齋へ歸へる…………

每日汗水を滴らしながら、今夜の飯やおかずの心配をしなければ一日も暮らしてゆくことの出來ない人間から考へたら、私法庵のやうな男の生活はまるで贅澤貧乏の極致で、いゝ年をしてフラ〳〵となんにもやらずに每日ノホホンで送つてゐる羨やましい穀潰しと見えるに相異あるまい――

だが考へると世間と云ふ奴は不思議なところだ。每日、朝晩と銀行で人の金を數へてゐるのも立派な職業、死んだ人間の戶籍調べをして帳面に書き込んでゐるのも立派な職業、人殺しの練習をするのも立派な職業――なにしろ國法の御許しになる範圍で、御金を儲けることをさへしてゐれば、大きな面をして堂々と世間が渡つて行けるのだ。

高々二百圓たらずのハシタ金を――それも當然自分の權利に屬する！――もらつて、別段世間に迷惑をかけると云ふわけでもなく、暇さへあれば書物に耽溺し、自分の藝術的良心を滿足させる爲めに、原稿紙を何百枚と云ふことなく無駄にしながら、

自責の念に苛なまれて、自分一人の心身をもてあまし、なんとかして正しい生活を見出さんものをと苦心慘憺しながら、暮らしてゐる無法庵の生活は他眼でみるやうに決して樂なものぢやなかつた。

一週間ばかり芭蕉庵にゴロ〳〵してゐる間に僕はやうやく疲勞から解放されて、少しく元氣づいて來た。まさかに小遣までもいたぶるわけにはゆかないので、全財産とも云ふべき風呂敷包からホンヤク仕事を取り出して、氣の向くまゝにコツ〳〵とやり始めた。

――水島君、仕事かね？

――うむ、小遣どりさ、――まさか君から小遣までもせしめやうと云ふ虫のいい考へにはなれないからね――

――中々殊勝だな――仕事のある人は羨やましい――

――などと贅澤が云つてゐられる御身分だからな――

――みなさんがさうおつしやいますーだ

――もツとも藝術や、學問などと云ふものは撰まれた精神的貴族のやる仕事なのだから、――いくら贅澤を云つてもいいのかも知れない。

――君の平常の持論とは少々見當が外れた云ひ分だね？、

――僕には持論などと云ふものはないのさ。僕にだつて、番茶の飲みたい時もあれば、珈琲の飲みたい時だツてあるさ、――番茶が持論だと思はれては稍さか迷惑だ――

――つまり、さうすると、君の持論は議論にならないと云ふ譯だね――

――なになるさ、下戸に醉醒めの水を論じる資格がないと同樣に、――

――ダダの論理は降參だ、――それより、今夜は久しぶりで酒でも飲みに出かけやう――だいぶしばらく御無沙汰したから君は僕のところに來てから、まだ一度も酒を飲まないやうだが不思議だなあ……

――番茶の持論だよ――酒はありがたいが、地金を出して婆さんの信用を失なつて芭蕉庵を御拂箱などは感心しない――やうやく、人間並の心持に逆戻りしかかつたところなのだからなあ――

――それで小遣錢を稼ぐと云ふ氣になつたのかね――

――まあそんなものだ

…………………

夕燒の名殘りが空の一角を極めて微かに染め、晩秋の黄昏が街の燈火につれて、靑白いのくたあんを奏でてゐた。

二人はしばらく無言のまゝ外濠に沿ふて見付の方へと歩いた

「黄昏よ、おまへはなんと静かにも、やさしいのだらう」、地平の上にたゆたふてゐる薔薇色の光りは夜の力に征伏されて白日の最後の音閉を叩いてゐる。燦めく燈火はおぞましくも夕映の最後の微光を汚がしてゐる。見えざる手が東の海の深淵から引き出す重い帷帳は人生の荘厳な時間に於て人間の心に閃ぎ合ふ複雑な感情にも似てゐる。」

僕はかう云ふ意味を歌つたボオドレエルの散文詩をいつになく思ひ出してゐた。そして思はず "Crépuscule, comme vous êtes doux et tendre!" と口吟んだ。すると無法庵もなんの氣なしに釣り込まれたと見えて、

——Les lourdes draperies qu'une main invisible attire des profondeurs de l'Orient,——かと云ひながら、

——お相互に役にも立たないことばかりを覺えてゐるものだ——と吐き出すやうに云つた。

——「黄昏は氣狂ひを昂奮させる」と云ふ言葉もたしかあの詩の中にあつたねえ——

——うむ、そして、友達のことを憶ひ出すのだ、——一人の奴は友情も社會的の感情も一切紛失させて、野蛮人のやうに路傍で語つた最初の人間に飛びかかる——「[illegible]」へ入つた奴は、[illegible]のチキン料理に自分を侮蔑する[illegible]文字を發見して、イキナリそれをウエータアの頭へ叩きつけるのだ

——僕等も氣を付けないとツワイライト・マニアにとり憑かれさうだぜ——

——どこでもいい早く腰を下さうぢやないか?

——O nuit! O rafraîchissantes ténèbres! だ——

——時に猫と婆さんはどうしてゐるかね?

——なれッこさ——今頃、佛壇へ御燈明でもあげて、たにかブツブツ云つてゐるだらう、

——猫は恐らくランデヴウか——

——ハツハツハツ——

十字街を右に細い横丁へ曲がつて、二三丁歩いてゐるうちに僕等はあまり上等でもないカフエー・リベルテと云ふ家を發見したので、——名前に釣りこまれて思はず——中へ這入つてしまつた。

宵の口でもあるせいか、客は一人もゐず、平凡な女給が一人片隅のテーブルに突伏してゐたのが、遽かに顔をあげて、ボンヤリした慌てたやうな表情で、無意味な微笑を浮べながら、會釋した。

——ばかに閑静な家だな——

――時間が早いセイなのだらう

――だが、この様子ぢやウエイトレス・ハンタアは來さうぢやないな

――召しあがりものは――

――君は細腰喫茶だつたね――

――まさか最初からウヰスキイでもあるまい

――酒は瓶詰ばかりなのかね？、

――いいえ、樽もございます――生一本の白鶴で御座います

――黄菊でも、白菊でもいいから、それを一つ御願ひすることにしよう

――おさかなは――うにと鹽からが御座いますが――？、よろしかつたら蛸をお酢にして持つてまいりませうか？

――おい妙なカフエーだね――、それに白菊なんて酒はきいたこともないが、――なにしろ、ウニとシヨカラはありがたいね――

――カフエー・リベルテたる所以かね

久しぶりな爲めか、徳利を二三本並べてゐる間に、細胞が遙かに異常なアレグロで、活躍し始め、不思議なアルコホルの人格がそろ〳〵僕等の精神の領土を支配し始めた。

――ああ、少し氣持がよくなつて來た。――水島君、今夜は久しぶりだから、大に飲むこととしよう、――そしてボオドレエルの健康を先ず祝すことにでもするか――

――ボオドレエルは out of season だよ

――どうせウニとシヨカラぢやないか

――僕等はアナアキスタになる前に、先づアナクロニスクであることを自覺することが急務かな

――急務などはいづれの方面からも感じるやうな人柄ぢやないよ――

實際、もう僕等には取り立てて話すべき事はなに一つなくなつてしまつてゐるのだ。「お暑うござい、お寒うござい、御早よう、お休みなさい」は勿論のこと、「なにか、うまい儲け口」の話などのあらう筈はない、新聞などは、どうかすると半年でも一年でも見ないですましてゐる無法庵は、内閣がどう變らうが、町内に五人殺しがあらうが、芋屋の娘がカバンヤの職人と驅け落をしようが、セラピヤンスカヤが帝劇で尻フリダンスを演じようが、猶太陰謀團が、淺草へヒツポドロオムを開演しようが、親鸞上人の再來が救世軍を組織して、議會へ押しかけやうが、下田の盛ちやんが文部大臣になつて、國立世界文藝院を創立し、三川音吉を獨佛へ三ケ年ボルノグラフ研究の爲めに派遣しようが、須田齊人面社同人が遠征隊を組織してモナコへ出張しようが、

幸三君が丸の内へプロレタビルデイングをおッ建てようが——向シラントカンツンとして anti-social Stimmung に耽けり怠屈になるとアレキサンドリヤの花魁の品定めかなにかをやりながら、獨りでウヰスキイをチビリ〳〵味めてあまり上等でもない香を燻らして猫の鼻をクン〳〵させる位が落ちにならうと云ふ人物なのだ、—— 僕の方はと云ふと小遣取りにどんなことをやつてゐるかと思ふと、全體どこの古本屋から探し出して來たかわけのわからないやうな、一向人の知らない、時代と流行とに外づれた異人の本をスルメでも嚙むやうにコツ〳〵譯しながら、三疊の茶室に立て籠つて、自慰三昧に沒頭してゐやうと云ふのだ。

「……僕は君になぜ僕が人から期待されたやうなことをやらなかつたかと云ふことは既に話してきかせた筈だ。これから僕はなぜ僕があんな風な行動をとつたかと云ふことを改めて君にきかせなければならない。僕は先づ、自分がこれまでやらうと企てた方向を全然徹回しなければならず、その結果として自分はどんな方向に進み、如何なる決心をとらなければならないかと云ふことを考へることから始めたのだ。

「僕は自分の生活の爲めに、—— 今迄多くの人々が誇りとしてゐたどんな職業とも全然無緣な道を撰擇することによつて、自分を生かさうと試みたのである。僕は不幸にして僕の素質と沒交涉でない人間、僕の決心に相反してゐない人間を發見することが出來なかつたのだ。僕は自分の心の最も深奥な海底に住む自己に尋ね、翻つて、自分の周圍を改めて眺めてみた。自分は人生の諸相が果して自分の趣味に適合するか否かを怪しんだ果せるかな僕は、僕自身と社會との間にはなん等の調和もなく自分の要求するものと、社會の生んだものとの間になん等の一致のないことを發見したのであつた。僕はしばしば昏惑を感じて躊躇し、逡巡した、若し僕が社會を肯定するなら、耐えがたい倦怠と、目的のない反感にまで僕の生活を手渡さなければならないことがわかつたからだ。僕は凡そこの世に於て、人々が努力し、追求する樣々なる職業を代るがはる眼前に轉回させて見た。僕は人々がかれ等の情熱を托し、全生涯を賭して追求する種々なる目的と幻影に對し、强ひて自分の想像の炎をかき立てようとさへ努めたのだ。自分は努めた、しかし、それは無駄であつた。この世はなに故にかくの如く索漠として自分の眼に映ずるのであらうか？ 僕は自分を自足させるなに物をも知らないのだ。僕は至る處に唯だ空虛を發見するのみである。

「僕が自分の周圍の空虛を始めて見究めたその日に、僕が自分の生活の潮流を轉換させたその日に、若し僕の宿命の頁が僕

自からの手によつて慌だしくめくられ、若しくは永久に閉ぢられたなら、僕は多くの辛酸によつて傷け破られ、未だ嘗て一度たりとも眞の喜びに見舞はれたことのないこの數年來の空しい時計の行列を夙くに放擲して、全然無關心に過ごすことが出來たのでもあらう。君もよく承知してゐる通り、若さを感じ得ないのが僕の一番の致命的不幸である。これは明らかに僕の若き日の陰惨な艱難が早くも人生の魅力を奪ひ去つてしまつたからなのだ。爛爛たる鍍金の外觀は僕を最早欺きおうすことは出來ない。僕の半ば閉られた眼は決して眩惑され得ないのだ。それは驚くにしてはあまりにチツト見瞠えられてゐるのである。

「その逡巡躊躇の日が少なくとも自分にとつては自己の蒙を開らいてくれた日だつたのである。それが僕に嘗て自分の明らかに見ることの出來ないものを自分の内に啓示してくれたのである。自分の生涯のこの不安動揺の絶頂に於て、僕は始めて自己本來の姿を意識し、享樂することが出來たのである。僕の固定した不惑の時節な沈靜から驅り出されて、僕はとう／＼僕自身になつたのだ。そして、僕の今迄に覺えなかつた苦惱と焦燥の中に、僕は一種のエネルギイをさへ感じたのだ、その力の横溢が最初の緊張と困惑にも拘らず全然これまで僕の經驗し得なかつた安靜を僕に齎したのである、この思ひがけない心の狀態が僕の方針を決定させた考慮に導いてくれたのである。僕は人間が日常目睹する外觀的現象や、境遇が決して人間の眞の幸不幸を左右する重大な素因ではないことを漸やくにして悟ることが出來たのである。…………」

僕はどうかして一生に無論一度でいいから、こんな風な手紙を書いて自分を慰さめることの出來る自分のオウレリヤを見出すことが出來たなら、どれ程、幸福なことであらうと、――うつとりとして、小遣錢のないことなどは何時の間にか忘却して二時間でも、三時間でもポツ然として、婆さんから飯時の催促をされて始めて自分にかへる迄、とりとめのない妄想に耽けつてゐられる人間なのである。

こんな風な人間が二人顏を突き合せたところで纒まりのついた話の出來やう筈はない、しかし、アルコホルは摩訶不思議の力をふるつて、愈々僕等の駄辯を流暢に且つ奔放ならしめたのである。…………

ポスタアの娘が瓶を持ちながら、カアテンの蔭から微笑し始めた、チンザアノオの騎士が細長い喇叭のやうなベルモツトの笛を吹き鳴らし始めた、キングジョルヂ第五世が王冠を取りはづして、頻りに額の汗を拭ひ始めた、櫻正宗がボルドオに秋波を送り、キユラソオが月桂冠と握手したがつてある、――ウヱ

イトレスの數がいつの間にかふえて、テーブルからテーブルへ彼女等のエプロンの波を翻がへして歩いてゐる、自働ピアノが四角な眞顔でハンガリヤン・ワルツを奏でてゐる、煙草の煙りがハイログラフイツクにアチコチから漂よつて踊り歩いてゐる、——

——そりや、無論だ——

——では、今夜、君はそれを決行しようと云ふのだね——

——オイ、ビールのお代りだ

——なにがプロレタリヤだい、笑はしやあがる——

——テキニチヨウに、カツニチヨウ——

——ペリヤア……ミナミはジヤヅ……

——ずいぶん、お久しぶりだはねえ

——どうせ、わたしも利根川の、——

——君ちやん、そちらの御客様だわ——

——今日の示威運動は中々有効だつた、——

——では、明日、午後二時頃に——

雜音の斷片がそれからそれへと聽えてくる、色聲香味の混沌朦朧としたオーケストラが僕等の周圍に渦巻いて「時間」を滅却し續けてゐた、

——水島君、——やつとラギイの世界になつてきたやうだな——

——エランギタルにならなきあ駄目さ——

——歸へれば「猫と婆アなり」——ちやー助からない——、

——そんなら、サツサとデイスポースオブすることだね——己がアチテエタアの役割は引き受けるさ——

——そのプランはとうから立つてはゐるのだが、——例によつて僕一人ぢや、何時まで經つても埒があかないのだ——で、實は君を引つぱつてきたと云ふのも、——それを決行するための助手に雇つたつもりなのだ——

——だが、あの水色と桃色はどうする積りなのだ——

——あれかね、——あれはなんだ——まあ、それは第二の問題としてだね、僕は單身孤獨で、トランク一箇の生活に入りたいのが急務なのだ——

——形だけでも、一時、過去と全然絶縁して了ひたいと云ふのだね、——

——さうだ——

——僕ならとうにやつてゐるかも知れないのだが、少しでも荷物の餘計ある人間程、諦らめがわるくならあ——

——だが、昔からの親切な友人達は僕が結婚でもして、落着いて仕事をすることを望んでゐるのだ——

——それが出來る位なら、とうに君はやつてゐる筈なのだ——

なにも今更、そんなことを云つても始まるまい、——だが、僕は進んでアヂテエタアの役目を引き受けようとする程、——

——まあいいさ、——なんだか恐ろしくセンチメンタルになつてきた——こりやいけない—オイ—ウヰスキイのお代りだ—

——なんだ、——こんだはショパンか——こんなところで、ショパンなんかやつたつて駄目だ、——それより己の Chanson d'Orjkko の方が遙かに、、、ところを得てゐる——

——なにをやつてゐるのだね—

——アンプロンプチユなのだが——まあ、いいさ、ショパンのペダントリイは又永日伺ふこととといたしやせう—

——君はだいぶショパンが好きなやうだな

——ショパンとシユウマイさ——僕はSの頭文字のついた人間にはだいぶ御親類筋が多いよ——

——ショパンはSぢやないぜ——昔、チョピンと云つて笑はれた奴があつたッけ——

——チヤピンと云はないだけがメッケものだ——

——シユウマンよりシユウマイの方が好きだと云ふだらう—

——ベエトウベンよりソンタンメンか——

——ハツハツハツ——

——ショパンで憶ひ出したが、隨分デタラメのことを書く奴があるものだ——

——なんだ？

——なに、スタンダアルとスイフトとだ、エネチヤのカフエーで會話をしてゐるのだ——

——それが、ダダイズムと云ふ奴かね？、

——なに、さうぢやない、まあ聽き給へ、始め、スヰフトがスタンダアルに、「バイエル、おまへは山師だ。おまへが人間の心臓を知つてゐる程度は、おまへの文學趣味といい取り組みだ。おまへはフロウベルがおまへより、流暢な散文を書くと云ふのでフロオベルがきらいなのだらう」などとキメつけるのだ、すると、スタンダアルが怒鳴り出す、スヰフトが愈々面白がつて「おまへの弟子のメリメエの方がおまへよりはよツぽど御師匠さんだ」などと、愈々ひやかすのだ——

——それから？

——すると、その會話を傍で聽いてゐる奴が、默つてゐられなくなつて、なんとか差出口をするのだが、どう思つたがスタンダアルにショパンのことを訊ねるのだ——

——ずいぶんデタラメな話だな——

—どうせ醉ッ拂ひの寢言のやうなものさ—その男が、「あなたはショパンを聽きになつたことがありますか？」と云ふと、スタンダアルが「ショパンと云ふのは全體、誰れのことだ？」と云ふものだ、その男はビツクリして「ショパンの全盛時代に多分まだあなたは生きてゐらしつた筈ですが？」と云ふと、バイエルは如何にも不服な顏をして、「あなたの御噂れのショ

と云ふ男は死ぬかもしれませんが、私はインモウクルだ」と威張る。「イヤ、多分御存知の筈です。バルザックの友達で――永らく巴里に居りました、」――すると、それを受けたスヰフトの答がふるつてゐるのだ――

――おい、それは君の創作ぢやないのか？

――なにさうぢやないよ、――で、スイフトが、その時なんと云つたか、まあ聽き給へ、「バイエル、おいそれは多分――それあの小柄なポリツシユ・ピヤニストのことにちがひない、――ジョウヂ・サンドと云ふ女の腰卷で首を縊つた男さ――」と云つたものだ――

――なる程、如何にもスヰフトの爺がいいさうなことだ――

――それからまだ〳〵ひどいことを云ふのだ、サンドは文學を反芻する牝牛で、小說を吐きだす川合のポンプだ、己はあの女が大嫌いだ――名前をきいた丈けで、氣持がわるくなる――などと云ふのだ――

――痛快だ――

無法庵はウヰスキイの餘りをテーブルの上にこぼし、それにマッチを擦り付けて、紫の焰を出しながら、子供のやうに嬉しがつてゐる、僕はいつの間にか、チゴイネルワイゼンの一節を口笛に吹きならしてゐる僕自身を發見した。………

勿論、僕等はその晩、いつの間にか Another ken の數々をやつてゐたのであつた。

………………………………

どこをどんな風に歩いたものか、僕等は林の中に迷ひこんでゐた。冴えきつた月光が水の滴れるやうに萬象を青白いエーテで包んでゐた。地上に倒映する木々の葉が紫の斑點のやうに散らばつてビロードの感觸を與へてゐた、松風の音が微かに鳴り響いて、折々魚の跳ねるやうな音がどこかから聽えてきた。

二人は無言のまましばらく佇んでゐたが、無法庵はやがてなんと思つたか、サッサと一人で林の奥の方へ行つてしまつた。僕は少しく疲れたので樹の根元に腰をかけて動かうとはしなかつた。

僕は月光を浴びながら、行き暮れた旅人のやうなセンチメントに襲はれ、眞夜中の秋の氣を冷々と肌に感じながら、醉ひ醒めの渇きを強く意識し始めてゐた。

「自分は夜の靜寂にひたりながら、自分の不可思議た宿命と嵐の如く亂れた心と萬象もを包みながら、自分の慾望の滿足を含んでゐるやうにはどうしても思はれない自然の姿をいぶかり怪んだ。自分は全體、なんなのだ、と私は自分に訊ねてみた。現實の一切の具象に對して冷やかた限りない情感の悲惨な結合――？――しかも、自分の眼に限りなく美しく見える謎のやうな實在は、自分の想像の單なるまどわしであらうか？」

僕はフトこんな意味のことをたしかセナンクウルの書いた本

の中で讀んだことがあつた──などと、とりとめのない空想を一方でやりながら、──それにしても無法庵はどうしたのかと心待に待つてゐた。

凡そ二三十分も經つた時分に。無法庵がフラリと僕の傍へ現はれた──

──まだゐるのか?、君はこれから何處へ行くのだ?

──僕には先づ芭蕉庵より行くところはなささうだ──

──フーン、己は猫と婆アのゐるところへは歸へりたかあないのだ──歸へりたきあ君一人で歸へるがいいさ──

──おうきにお世話だ──と僕は心の中で云つた。

──己は人間の面を見るのがイヤになつてきたのだ──君と歩いてゐるのが不愉快なのだ──

──ぢや、一人で勝手に歩るき給へ──

──ハツハツハツ、──一人て勝手にか?

──月はひとりで勝手に光り、風はひとりで勝手に吹き、池の鯉はひとりで勝手に跳ね、無法庵はひとりで勝手に歩るき、猫はひとりで、婆さんもひとりで、君もひとりか!

──死ぬ時にはみんな誰れでもひとりなのだが、生きてゐる中も實はみんなひとりなのだ──そのくせみんなひとりぢやゐられないのだ──

──酒が見事に醒めてしまやあがつた──ザマヤ見やがれ──透得斯關、乾坤獨歩が聞いて呆れらあ──

──だから、己は的もないオウレリヤを探がしまわつて歩いてゐるのだ──

──あツたらお眼にブラ下がらあ──

──ザラに轉がつてゐるなら、探す張合もぬけるだらう──

──その癖……役にも立たぬ桃色の封筒にひきづられて淺間しく生きてゐるのだが──

──ひきづられるもののあるうちは結構さ──

──君には子供とおふくろがゐるな──

──この世は餌食さ──

──トルストイガ食はれ、マルクズがシヤブられか──

──耶蘇と佛陀とはなん遍蒸し返へされるかわからない──

──そこがありがたいところなのだ──

──千萬無量だ──

──ハツハツハツ──

……………………

月が次第にその光りを失ひ始め、銀河の流れが微かに眼に映ずるやうになつた。僕等は曉の空を無意味に仰ぎながら、無言のまま芭蕉庵の扉を潜つた。

〰〰〰〰

P、S、──

「らぶそでいや・ぼへみあな」と云ふ題は僕の拵物[illegible]

名したい位なものだ――こんだのは、「改造」の讀者なら、御存知な筈だと思ふが、無想庵の「結婚禮讃」の中に出てくる〝Another Ken〟を至極、アッサリと一晩だけ見本にしてお目にかけたやうなものなのだ。讀者の方さへ我慢すれば、まだいくらでも「アナザア　ケン」の續きがあるのだから、お目にかけてもいいが、それでは、「席亭」の方が困ると思ふから柄にない遠慮をして置く。

だから、「アナザア　ケン」としようか、「猫と婆アさん」としようかなどとも思つたのだ。

無法庵と僕とが度々こんな晩を繰りかへしたものだから、僕はまもなく豫定の如く、婆さんの信用を失なつてしまつた。

――折角、少し落ち付いた「傚雄さん」を又わるい友達がきて誘惑(とは婆アさんは云はなかつたらうが)――して、元のやうにしてしまつた、水島さんよりは坂本さんの方がまだいくらいいかわからない――と云つてこぼし始めた。

一寸註釋をほどこすが「坂本さん」とは文壇その他江湖のみなさんのよく御存知な、雷名天下に轟く「グレさん」こと、即ち坂本紅蓮洞氏で、グレさんが無法庵の食客第一世だとすれば、僕はその第二世に當るのだが、結局、第一世のグレさんの方が婆アさんから多大な尊敬と信用を博したことになつたのである。

By the way――グレさんと云へば、ついこないだ、久しぶりでカフエーダメリカで逢つて大に久濶を叙し、相互の健康を祝し無法庵の噂さなどヨロシクあつて氣焔をあげた結果、とうとうグレさんとアナザアケンをやつてしまひ一晝夜に亙つてバルクダサクサを泳ぎまわつてすツかりガツカリしてしまツた。しかし僕もグレさんの意氣の今なほ旺盛なのを見て、大にわが意を強くし省みて不甲斐ない自分に鞭撻を加へたのであつた。

さて、婆アさんがブツ〳〵と文句を云つてゐる間に、無法庵は着々トランク生活の準備にとりかかり、僕も助手として柄にない仕事に從事した。

芭蕉庵解散前後のデテイルは又引き延ばして書けば書けるのだが、今はお預かりとして置く。

こんな風なことを書くのはまるで幕がしまつてから、樂屋を展覽するやうなものだが、持つて生れた病ひなので、エキスプレッションズムでなくツて、エキジビショニズムとでも云ふのであらう。

なに分、當人が小說家でない爲めに、深酷な心理描寫や、瑰麗な自然描寫や、さては又時節柄なくてはならぬ熾烈な階級意識や――その他色々なものが不足してゐてまことに申し譯けがない次第である。しかし追々と勉强をして書かうと思つてゐるからあまり見捨らないやうにお願ひする。　おうる・ぼあ――

（一九二三年、二月）

偉大なる馬鹿

……日本よ！お前は何處に向つて生きんとするか……

麻生久

口

或る時、或る場所で、數人の者が寄り合つて雜談してゐる間に、何時か、話しが露西亞人の事に移つて行つた。すると、その中の一人が

『露西亞人なんて奴あ、要するに、頭の出來の惡い、血のめぐりの鈍い、馬鹿さ』と、さも、云ひ得たりと云つた樣子で斷言した。その時、私は、さう云つた男の顏や樣子を、つく〲眺めて、心の底から『成程なあ』と思つた。その男は頭髮を綺麗に分け、亞米利加仕込のチヤツプリンヒゲを、ちよこなんと生やし、洋服も當世流行の奴を一着に及び、頭から靴のさきまで寸分の隙間もなく小ぢんまりと出來上つてゐる。私は、あの、不得要領なルパーシカを着て、馬鹿氣て長い卷煙草をプカ〲ふかし乍ら、熊の樣にのそ〲歩いてゐる露西亞人の樣子を、ちらと目の前に浮べて、更にその男の顏や樣子を眺めた。全く此男は伶悧相だ。露西亞人に比べると伶悧に相違ない。たゞ併し、私はその時、その男の頭に冠した伶悧と云ふ字の頭に『小』と云ふ字丈けは、どうしても落す譯に行かぬと思つた　そして又、その伶悧な男の云つた樣に、露西亞人が馬鹿だとするとその馬鹿と云ふ字の上に、『偉大』と云ふ字を冠せぬ譯けに行かぬと思つたのだつた。

『小伶悧』に『偉大なる馬鹿』

小伶悧と云ふ字は、普通我々が云ひ馴れてゐる言葉で、使つた處が不思議はないが、偉大なる馬鹿と云ふ言葉は餘り使はない言葉だが、此言葉は、何となく露西亞人を形容するには適切な樣にも思はれる。

日本人を評するに小悧伶と云ふ言葉が當つてゐるかどうかは讀者の判斷に委せやう。たゞ夫れ、小伶悧と、偉大なる馬鹿とどつちがお前は好きかと問はれるなら、私は即座に答へる事が

出來る『俺は小伶悧よりも偉大なる馬鹿の方が好きだ』と。そして日本人たる私が、もしも偉大なる馬鹿の素質よりも小伶悧の素質の方が多いとしたなら、只自ら苦笑せざるを得ないのみだ。

ロ

何時であつたか、露西亞通のB氏から聞いた話しである。

日露戰爭のすんだ翌年の事だ。B氏は一行三人で、滿洲から西伯利を通つてペトログラードの方に行く事になつた。B氏の一行はハルピンの停車場に下車する事になつてゐたので、列車がプラットホームに止まると、重い荷物をさげ乍ら箱を出た。すると、むかうの方から一人の勞働者風の露西亞人が、誰れかを見つけると云つた樣子でやつて來た。そして、B氏を見つけると、いきなり駈けつて來て、にこ〳〵笑ひ乍ら何か口早に云ふと、B氏の荷物を、ひつたくる樣にして、自分の手に移し、さつさと出口の方に歩き出した。B氏は何の事かさつぱり分らず暫時くは飽氣に取られて、ぼかんとしてゐたが、ふと、こいつはあんな事をして俺の荷物をかつさらつて行くのに相違ないと氣がついたので、その男の後ろを追つ駈けた。處が、その男は大男で、大股で、のそ〳〵と歩いて行くのに、生憎B氏は、さらでだに小さな日本人中の小男と來てゐるので、歩いた位いでは追つつかない。さりとて、荷物を奪はれては一大事と、長いプラットホームを短かい足で駈け出した。漸く追ひついて、喧嘩面でその露西亞人をどなりつけた。さて、どなり乍らよくその男の顏を見ると、どうやら見覺えのある顏だ。不思議に思つて、『君は一體誰れだ』ときくと、その男は笑ひ乍ら『私を忘れたか、私は松山であなたに世話になつたWだ』と云つた。B氏はそれでやつと思ひ出した。その露西亞人は、戰爭の最中、俘虜になつて松山にゐた當時B氏が何かと世話をしてやつた男だつた。今日B氏が、此停車場に降りると云ふ事が、新聞に出てゐたので、その時の恩返しに、停車場に出て、せめて荷物でも運ばうと思つて、やつて來て、かくの始末に及んだ譯けだつたのだ。B氏は意外の奇遇と、その男のあたゝかい好意とに、すつかり感激して、自分のはしたない邪推を深かく耻ぢた。それから、その男は、馬車をやとつて、すつかり一行の荷物まで元氣よく馬車の中に積み込んで呉れた。B氏は、別れる時に若干の錢を出して、その男にやらうとしたが、どうしてもとらなかつた。

B氏の一行は、西伯利の或る町で、知事の晩餐會に招待せられた。旅行中の事ではありB氏等は晩餐會に出る禮服も持つてゐなかつたので再三辭退した。處が、服裝なんぞはどうだつて

いゝ、殊に旅行中の事だから、禮服なんぞ持たないのは當然だ。どんな服裝だつてかまはないから是非出よとの事だつた。それで三人は夜になつて知事の晩餐會に出掛けた。皆は盛裝して集つてゐた。その中には軍人も澤山交つてゐた。B氏等は自分の服裝を顧み、殊には、戰爭が終つて未だ間もない事ではあるし、露西亞にとつては不利な終結だつたのだから、これはてつきり、今晩あたり、自分等を招待して、何か耻でもかゝせるのではないかと、内心甚だびく／＼してゐた。這入つて行くと早速、知事の妻君が出て來て、よく來て吳れたと云つて、心地よく歡迎して吳れた。愈々晩餐が始まつた。B氏等は、びくびくしてゐたが、集つた多くの者達は、實に愉快で、少しもB氏等に對して、わだかまりや計畫がある樣な風も見えない。それでB氏等もやつと安心して酒を過ごし、大にメートルを擧げたそのうちに、話しが日露戰爭の事になつて來た。すると意外な事には、そこにゐる軍人の將校たちが、『日本人は强い』と云つて、頻りに日本の軍人の事をほめ始めた。そのほめ方が又實に無邪氣で眞劍だ。B氏等はすつかり恐縮して仕舞つた。そのうちに、知事の妻君が、「そりや日本の軍人は强いけれども、仁川で、露西亞の軍艦のワリヤークとコレーフとをだまし討ちにしたの丈けは、かんぺんがならん」といきり立つた。そこで、B氏等は、決してだまし討ちではなく、あの場合止むを得なかつた事情を縷々陳述した。それで妻君も、『成る程、それでは致方がない』と云ふ事になつて、しまひには、皆立ち上つてB氏等のために『日本萬歲』をとなへて乾盃した。B氏等は、すつかり面目をほどこして自分の宿に引き揚げた。

それからB氏は又次の樣な話しをした。

日露戰爭の後、貴族院の連中が露西亞を訪問した事がある。そして、ペトログラードで時の首相スチュルメルに一夕招待された。處がその一行の中に東郷安男も加はつてゐた。恰かも、東郷氏の席は、スチュルメルの隣りだつた。處が、スチュルメルは東郷氏に、『君の名は何と云ふ名か』と尋ねた。そこで安氏は、『東郷』と答へた。すると、スチュルメルはさも驚いた樣に眼をむいて、『東郷！東郷！それは露西亞人の一番嫌いな名だ』と言つて笑つたとの事だ。

B氏は、私にこんな話しをしてから、あとで、如何にも感慨深い樣な顏をして云つた。『君、露西亞人て奴は全く、馬鹿なんだか怜悧なんだか分らんよ。普通に云ふ怜悧ぢや勿論ないね。それかと云つて馬鹿ぢやない。兎に角偉大だねえ。戰爭の翌年にもう戰爭の事なんど忘れてゐる。まけた事なんぞは、てんで氣にもかけちやゐない。そして日本萬歲ぢや僕もすつ

たまげちやつた。スチユルメルの話しも隨分馬鹿にしてるぢやないか。東郷をそばに置いといて、東郷と云ふ名は、露西亞人の一番嫌いな名だなんて。併しそんな事を平氣で云つて、別に惡氣もないんだから始末が惡いさ。全く、露西亞を旅行してると氣がおけない。獨逸から佛蘭西に行くと、何だか僕等も獨逸だ、佛蘭西だと云ふ氣がするし、あ奴等も白眼で僕等を眺めるが、露西亞丈けはそんな事はないよ。全く、無邪氣で氣が大きくて、人情が深い。日本人なんかだつたら、自分が戰爭に勝つても、支那人なんかを白眼で見るんだから、萬一敗けなんかしたら大變だ。勝つた方の奴が來たら、吃度噛みつくねえ。ところが、露西亞人には全く驚かされる。神經があるんだかないんだか。てんで戰爭に敗けた事なんか、蚤に食ひつかれた程にも思つてゐないんだからなあ。とても露西亞にやかなはんよ、今に何か恐ろしく突飛な事をしでかすだらう。そして世界を呑んで仕舞ふよ。そこになると、獨逸だつて、佛蘭西だつて、英吉利だつて、皆怜悧で馬鹿なところがないから、どうしたつて、ちつぽけだ。まあ、露西亞の將來は括目に値するよ。』

私がB氏から、此話しを聞いたのは、未だ露西亞に革命の起らない前だつた

□

ゴーゴリ、ドストエフスキー、トルストイ、バクーニン、クロポトキン、曰く誰れ曰く誰れと、數へ立てれば露西亞には隨分偉大なる馬鹿が澤山ゐる。ドストエフスキー等も、常識では考へられない。トルストイ等は永遠の小兒である、八十幾年も生きて、彼れは何を考へて來たのか。實に空漠たる事である。そして、しまひには、家を飛び出して、アスターポーの寒驛に死んで仕舞つた。彼れは一生かゝつて、せつせと、無財産、無一物にならうとあせつたのだ。此金を欲しがる世の中に、一生かゝつて、自分の財産を棄てやうとあせり拔いた。實に物ずきな事である。例のチヤツプリンヒゲの男に批評させたら、一言にして、『要するに馬鹿さ』と斷定するであらう。『そんな事をする必要がない』と云ふだらう。勿論小怜悧な人間にとつては、そんな事は馬鹿な事であり、必要のない事であるに相違ない。併し、馬鹿であらうと、必要がなからうと、トルストイは一直線にさうしたのだ。せずにゐられなかつたのだ。バクーニン、クロポトキン亦然りである。無政府主義なんと云ふ夢の樣な事を考へ出して、故國を追つ拂はれたり、監獄に投ぜられたりする必要はないかも知らぬ。バクーニンにしろクロポトキンにしろじつとしてゐれば、金も名譽もある男だ。けれ共、彼等は、無政府主義者であらねば生きて行けなかつたのだ。

是等の人々の考へてゐた事は、決して、世間普通に云ふ怜悧な事ではなかつたに相違ない。随分馬鹿氣た事であり夢の様なことであり非實用的な事であつたに相違ない。たゞ併し、その馬鹿の上には『偉大』と云ふ字を落すわけに行かない。人間の心が、靈が、その馬鹿に偏れると、躍り出す。眞劍に躍り出す。怜悧な世界が根底からゆるぎ出すのだ。馬鹿も露西亞人位いになれば偉大と云ふべきであらう。

□

馬鹿程こわい者はない。と世間ではよく云ふが、馬鹿正直と云ふ奴は實際こはい。而もその馬鹿正直の上に『偉大』と云ふ字がくつつくと愈々こはいものになる。そして露西亞と云ふ國には全く、此の偉大なる馬鹿正直と云ふ言葉があてはまる様である。何故なら、露西亞人は、その考へた事は、どんな突飛な事でも直ぐそれを實行にうつすからだ。而も馬鹿正直の特徴として、その思想を實行に移す上から云つても、決して、まがりくねて小怜悧な眞似はしない。飽くまで一直線で、飽くまで徹底的で、飽くまで眞正面から直進する。

西歐では或る一つの思想が生れても、それは單に思想として存在する場合が多いが、西歐で生れた思想が一度露西亞に這入ると、それは猛烈な實行味を帶びて來る。日本等でも、思想が單に思想として存在する場合が多い。多くの者は、種々な思想を抱いてゐるが、その思想と生活とがぴつたり合つてゐる人は少ない様である。

革命と云へば直ぐ露西亞を聯想するが、全く露西亞の社會運動は猛烈な革命運動に一貫した。そして、馬鹿正直であるから敵味方共に生ぬるい妥協はなく、血を以て社會運動の歴史を染めて來た。その結果は、實に驚天動地の徹底的革命を成就するに至つた。獨逸、佛蘭西、英國、米國等とは其行き方が全然異つてゐる。その國の社會運動には、各々の國の國民性が現れてゐるが、ボルシエウヰツキーの革命にはよく、馬鹿正直な、一直線な、突飛な露西亞の國民性が現れてゐる。而もそのやり口は實に偉大である。或る者は露西亞の革命を評して、そのやり口を馬鹿氣てゐると云ひ、もつと巧みに犠牲を少なくしてやらねばと云ふが、それは兎も角もとして、何と云つてもそのやつた事は偉大であると云はざるを得ない。

□

馬鹿正直なものは自信が强いと云ふが、露西亞人は實に自信が强い。そして露西亞人は、露西亞……所謂國家と云ふ意味ではなく……と云ふものを極度に心の底から愛してゐる。そして世界中で、露西亞ほどよい處はなく、又露西亞は、人類の救

世主であると思ひ込んでゐる。それが又、露西亞の生んだ偉大な馬鹿正直な文學の中によく現れてゐる。文學と云ふものは、その國民生活の表現であるが、その表現たる露西亞文學の中には實によく、露西亞人の此氣持ちが現れてゐる。そして、馬鹿正直な露西亞人の文學には、佛蘭西の樣な氣のきいた處もなければ、英吉利の樣な皮肉なところなぞは少しもない。皆、眞正面から人生にぶつつかり社會にぶつつかつてゐるのである。ギリシヤやローマは別として私は他國の文學を見て、未だ偉大であると感じた事はないが、露西亞の文學を見ると、人類を眞正面からのみ盡くしてゐる樣な氣がして、眞に偉大さを感ずる。此の氣持ちは、今度のボルシエヴヰッキーの革命の中にも多分に現れてゐる樣に思はれる。

露西亞人が如何に馬鹿正直で、眞實でそして如何に露西亞を心の底から愛してゐるかは、ドストエフスキーのカラマゾフ兄弟を讀むと成る程と首肯される。

主人公の一人ドミトリーは父親を殺したと云ふ嫌ひを受けて……實は殺さないのだが……二十年間の西伯利流刑に處せられる。その弟達は、途中でドミトリーを逃亡せしめて、ドミトリーの戀女と一緒に亞米利加へやらうと計畫して、その事をドミトリーに勸める。それを聞いて、ドミトリーは次の樣に云ふ。

『……で、其あとを聞いて呉れ。僕は後の半分をもお前に打ら明けて了はう。僕の決心と云ふのは斯うなんだ。僕は假令金と旅行券とを持つて亞米利加へ逃げても、喜びを得るのでもなければ、幸福を受けるのでもなくて、全く別な監獄へ行くのだと考へて、自分で自分を勵ましてゐるんだ。亞米利加より西比利亞の方がいゝかも知れない。ほんとにその方がいゝかも知れないよ。アレクセイ、正直な話しが、西比利亞の方がいゝかも知れない！僕はあの亞米利加を今ではもう嫌つてゐる、假令グルーシヤ（戀女）が僕と一緒に行つてもだ。第一彼女を見るが可い。彼女を亞米利加の女と思へるかね。彼女は露西亞の女だ。彼女は徹頭徹尾露西亞の女だ。彼女は懷郷病に罹るにちがいない。で僕は毎日彼女が僕のために悲しんでゐるのと、僕のために十字架を脊負つてゐるのとを見なけりやならない。だがあれに何の罪があるだらう。それに僕だつて、どうして亞米利加の無賴漢共と一緒に生活して行けやう。亞米利加人は一人殘らず僕より善良な人間であるかも知れない。然し矢張り無賴漢なんだ。今ではもう僕は亞米利加が嫌いだ。假令彼等が一人殘らず立派な機械家であつても、決して僕の仲間ぢやない。僕の衷心からの友ぢやない！僕は露西亞を愛してゐる！アレクセイ、僕自身は惡者だが、然し僕は露西亞の神を愛してるんだ！だが、

僕は多分彼處で死ぬ事と思つてる……』

さう云つた彼の眼は輝き聲は涙のためにふるへた。彼は又語りつゞけた。

『でねえ、アレクセイ、僕の決心はかうなんだ。まあ聞いて呉れ。僕はグルーシャと二人で彼處へ行くとする。── 其處で直ぐ何處か人里離れた遠い處へ行つて、熊を相手に百姓をするつもりなんだ。あそこには未だ廣い土地があるんだからねえ。何でも人の話しぢや、彼處にや、あの地平線の端に、まだ印度人がゐるさうだ。僕等はそこまで、最後のモギカンの國まで行く積りなんだ。そして僕もグルーシャも直ぐに文法の勉强にかゝるんだねえ、三年間働き乍ら勉强する。そして英國人と少しも違はない位ゐ英語を覺え込むんだ。英語を覺え込んだら、もう亞米利加にはおさらばだ。そして亞米利加人になり濟まして再び露西亞に歸つて來る。心配するにや及ばないよ、此町にや來やしないから。北か、或は南の何處か遠い田舍へ隱れるんだ。それまでには僕も變つてゐる。彼女も變つてゐる。亞米利加の醫者に、額に疵か何かこしらへて貰ふさ。彼等は機械家だからそれ位ゐは出來るだらう。でなけりや、片眼を潰して、一アルシンも髯をのばすさ。白い髯をね。（露西亞戀しさに、髯も白くなるだらうよ）──さうすりや誰れにも分りやしない。若し見つかつたら又西比利亞にやられる迄でさ。つまり運が惡いのだからね。兎に角歸つて來て、何處かの山の中で百姓をするよ。そして一生涯亞米利加人で通すよ。さうすりや、故鄕の土に骨を埋める事が出來る譯だ。……』

何と云ふ、正直な……馬鹿と思はれる程正直な卒直な、そして又しんみりとした愛鄕の言葉だらう。何と云ふ情のこもつた土にからみつく樣な愛鄕の言葉であらう。私は多くの所謂愛國者の愛國の言葉を聞いたが、未だこの言葉の樣に眞實な愛鄕の言葉を何處の國の文學の中にも見た事がない。そして又、何といふ無邪氣さであらう。これが、のんだくれの親殺しの疑ひを受けて、二十年の流刑に處せられた男の言葉である。私は理窟なしに露西亞人が好きだ。全く怜悧者ぢやない。馬鹿であるかも知れない。併し何と云ふ無邪氣な純な馬鹿であらう。

私は曾てコロレンコの樺太脫獄記と云ふ小說を讀んだ時にも同じ事を感じた。それは樺太に流された囚人が、脫獄して、露西亞へ歸らうとする途中、發見されて島の中で官憲との格鬪となり、それに打ち勝つたが、その中の一老人ブランは、兵卒の打つた彈に中つて致命傷を受けた。ブランはもう自分の生命のないのを知つて、同志の一人を呼んで、目にいつぱい涙を湛め乍ら、云つた。

「どうぞみんなで己の墓を掘つて呉れ。どうせお前方は未だ舟を出す事は出來ない。……運と云ふものは極まつてゐる者だ。己は此島から外へは出られないのだ。それで好い。疾うから己の胸にはそれが分つてゐた。己は露西亞へ歸りたくて、始終樺太から西比利亞を眺めてばかり居たのだ。せめて西比利亞でゞも死ぬ事か、此島で死ななくてはならぬとは殘念な事だ。それも致方がない。……こゝに己の墓を掘つて呉れ。こゝは丁度好い所だ。向岸から吹いて來る風が、己の墓に當る。向岸から打寄せる波が、己の墓の下まで來る。どうぞ直ぐ仕事にかゝらして呉れ」

私は今一つ露西亞の小説を引かせて貰はう。そして私はもう幾度此一節を引いて文章を書いたか知れない。それは露西亞の未來を豫言したと云ふゴーゴリのトロイカの一節だ。『死せる魂』の上卷に出版されたのは千八百四十二年だ相であるが、トロイカの豫言はそれから八十幾年の後、共産主義の車をひくボルシエヴヰツキーの馬鹿によつて見事に實現せられた。私は未だ何處の國の文學にも、かくの如き愛國の自信を以て、自分の國の將來を豫言し確信し、而かもそれがかくも見事に適中した例を知らない。何と云ふ偉大な自信のある國民であらう。

『あゝトロイカよ……鳥のやうなトロイカよ。誰がお前を發明したのだ？勿論、お前はあの突進する國民の間に——平坦に、する〳〵と滑りながら、此地球の半ば以上に擴がつてゐるあの國に、其處には又一々それを數へたら目に涙の滲む程數多の里程標の立つてゐるあの國に生を享けたものに相違ない。お前は決して複雜な車ではない。わが友、トロイカよ。お前は又鐵のお釘で固められたものでもない。ヤロスラウルの怜悧な百姓が斧と鑿とで、手早く造つたものだ。お前の馭者は決して獨逸製の騎兵隊の長靴など穿いてはゐない。只髯と手套(ミツト)とを着けてさへ居りや、それでいゝのだ。此馭者が何の上に腰掛けてゐるか悪魔でゞもなけりや知らない。が、見よ、彼は立ち上つた。鞭を振りながら、早や歌を唄ひ出すのであらう。馬は旋風のやうに駛る。車輪の輻は姿を隱して、平の圓板の樣に見える。道は震動する。徒歩の旅客は立ち止つて、吃驚りし乍ら大きな聲で叫喚く。——其間にトロイカは前へ前へと飛ぶ！で、見よ、塵埃の雲を揚げ、空氣を劈き乍ら、もうあんな遠方へ行つて仕舞つた。そして、見る〳〵視界から消えて行く。

あゝ、露西亞よ、我國よ、如何にしても追つ着かれない大膽なトロイカの樣に、お前も亦街道の上を走つてゐるのではないか。道はお前の下に煙り、橋は轟く。總てがお前の背後に殘された。此後も殘される事であらう。見物人は神の奇蹟にでも出

合つた様に。ぼんやり口を開いて見迸つてゐる。これは天から降つた電光であらうかと。彼は訊く。人に恐怖の念を吹き込むやうな此運動は、抑も何の徴ぞ？世界にとつてあれほど不思議な馬は、何んな怪しい力を賦與されてゐるのであらうか。

あゝ馬よ、馬よ、露西亞の馬よ、お前達はまあ如何いふ馬だい！旋風がお前達の鬣の上に宿つてゐるのか。お前達の好く利く耳は血管の脈打つ音の一つ〳〵に耳を欹るのか。

で、見よ、お前達は天上から聞えて來る耳慣れた歌を聞いたか。今やお前達は一致して、各自黄銅の胸を張り出して努力する。お前達は殆ど蹄を地に觸れなゐ位いにして空氣を切つて飛びながら、一直線に進んで行く。左様だ。トロイカが飛ぶ。神に乗移られたトロイカが飛ぶ！、あゝ露西亞よ、お前は何處へ飛んで行くのか。答へよ。が、彼女は答へない。馬の鈴は驚くべき音を立てゝ鳴り、搔き亂された空氣は暴風雨となつて、雷霆は轟く。露西亞は地上のあらゆるものを乘り越えて飛ぶ。他の國民と、諸王國と、諸帝國とは、傍へ寄つて彼女に道を讓り乍ら、呆氣に取られて流眄に見てゐる……』

□

一九一七年三月、露西亞に革命が起きた。才子風の、怜悧相な、西歐仕込のケレンスキーがトロイカを引つ張つてゐる間は無事だつた。全世界は同感し革命を祝福した。けれ共露西亞は決して夫れに同感しなかつた。田舎物の様な、馬鹿な様な、突飛な、併し、偉大な信仰と確信とを持つた、神秘的現實主義者たるレーニンが現れた。ボルシエヴヰツキーが現はれた。露西亞は俄然として其偉大なる馬鹿者の本性を現はした。

ゴーゴリのトロイカが駈け出したのだ。世界は、聲をはり拐げて、此トロイカに向つてわめき立てた。

『突飛だ。夢だ、空想だ、亡國だ。危險だ、馬鹿だ……』

そして總がゝりで駛け出したボルシエヴヰツキーの馬を引き倒さうとあせりもがいた。だが大膽なトロイカは奇蹟の様に一直線に進んで行く。地上のあらゆるものを乘り越えて飛んで行く。そして此危險なトロイカを引倒さうとあせつた。他の國民と諸王國と、諸帝國とは、遂々わきへ道を讓りながら呆氣にとられて、ながしめで見るより致方がなくなつた。

そして數年が過ぎ去つた。馬鹿と呼び、突飛とのゝしり、亡國とあざけつた全世界も、今はもう、何とも云はなくなつた。そして、世界をのり越して一世紀さきに人類の進化をかけぬけたその國をたゞあつけにとられて見てゐる丈けだ。そしてひそかにつぶやく。

『露西亞つて奴あ、何て大膽な奴だらう』

露西亞は亡びない。儼然として地球の上に存在してゐる。

して凡ての國は彼等が曾て嘲つた亡國の露西亞を恐れてゐる。

□

「凡ての道はローマに通ず」と云つたのは何となく遠い昔の様な氣がする様になつた。今は『凡ての道はモスクワに通ず』と云ふ言葉が出來かゝつた。

見よ、年一回、モスクワに於て開かれる、世界共產黨大會には世界各國の無產階級の代表者が集つて行きつゝあるではないか。モスクワには共產黨大學があつて、そこには露西亞を師表とする共產主義革命の哲理を學ばんがために、各國の青年が留學しつゝあるではないか。

『萬國の勞働者結合せよ』と云ふ言葉が、國家と民族との境界の現存する世界に於て、現在幾何の現實味を帶び、又將來幾何の可能性を有するか知らないが、兎に角、現在の露西亞は民族の如何、國の如何を問はず、其政府には無產階級革命に働いた諸種の人物をあつめ、其憲法は、露國內に居住する外國人の勞働者及び農民には、露國人と同等なる政權を付與するを以て、地方ソヴエットは何等の手つゞきを要せず、彼等に露國公民權を與ふることを得と規定し、又、露西亞共和國は、人種、民族の如何に拘らず、之に平等に各種の權利を認むるものにして、差別的待遇は共和國の根本法規に背反することを規定してゐる。

今や、世界の虐げられたる無產階級、その國を奪はれたる民族は、悉く露西亞に集りつゝある。モスクワは宛然世界人の都市とならんとしてゐる。

ボルシエヴヰーキ革命の是非は問ふところでない。露西亞は、共產主義の哲理をまつかうにかざして、世界を統一して其霸者たらんとする大野心を抱く者であるとの批評も問ふところではない。畢竟人類の世界は、……………………………………………………運命ではないか。

それにしても、世界の曠野に向つて駈け出したトロイカの如何に卒直にして偉大な事よ。お前は世界の虐げられたる者を悉くその懷に抱き新らしき世界の建設に一直線に進みつゝある。

獨逸の抱いた資本主義的軍國主義による世界統一の夢は既に破れたが、共產主義の哲理をその頭に戴いて、世界の虐げられたる無產階級と民族とをその懷に抱き、凡ての道をモスクワに通ぜしめんとするソヴヰエット露西亞の偉大なる夢は破るゝか否か。

□

その國の文學は、國民の生活と精神とを表現してゐるもので

ある。文學は國民生活の影である。佛蘭西には佛蘭西の文學がある。獨逸には獨逸の文學がある。英國然り、亞米利加然り。文學は畢竟最も正直な國民生活の說明者である。その國の國民生活が偉大でなければ、その國の文學も從つて偉大ではない。

露西亞の文學を見よ。文學史に名を列する多くの人々を見よ。彼等の創り出した文學の中には人類の心を射ぬく偉大なる愛憐と理想とが脈々として波打つてゐるではないか。獨逸の如き理窟はないだらう。佛蘭西の如き技巧と纎細はないだらう。英國の如き常識と皮肉はないだらう。併し乍ら、生きた眞正直な人間の、しんみりした情がある。卒直な良心のひらめきがある。虐げられたる者に對する無限の同情がある。深き愛がある。全人類に對する憂悶がある。心の底から露西亞を愛する眞心がある。世界の人類を救はんとする確信がある。大膽がある。勇氣がある。トルストイを讀んで見よ、ドストエフスキーを讀んで見よ、ツルゲネフを讀んで見よ、ゴーゴリを讀んで見よ、ゴルキーを讀んで見よ、コロレンコを讀んで見よ、其他誰れ其他誰れ、彼等の描ける文學の中には、人類の心を心とする正直な卒直な大膽な露西亞人の眞に人間らしい血と靈が躍動してゐるではないか。

あゝ露西亞人は、露西亞は、小恰悧な者から見れば馬鹿に見えやう。併し偉大なる馬鹿は遂に小恰悧者をのみつくすのだ。

□

あゝ日本よ！私も亦その一人である日本よ！お前は、如何なる哲理をひつさげて、如何なる確信の下に、何處に向つて、人類の進化に棹さして進まんとするのか、私の學校にゐる時、帝國大學には、獨逸室があつた。佛蘭西室があつた。英吉利室があつた。だが、だが、日本室は何處にもなかつた。何處か外國の大學の片隅にでも置かれてゐたのだらう。私は夫れを如何に淋しく思つた事か。

日本よ！お前の本體は何處にあるのだ。その氣魄に於て、世界をのみつくす樣な哲理をお前はもたないのか。國民の興廢は畢竟、人類の眞實の進化の方向を洞察して、確信を以て力强くそれを押し進めて行き得るか否かに依つて定まる。

日本よ！お前は何處を見つめ、如何なる確信と眞面目さとを以て、人類の進化の流れに棹さゝんとするのか。

今、日本に橫行しつゝあるのを、偏見固陋の排他的國粹主義と、甘つたるい無批判な自分を忘れた國際主義と外國模倣とのみである。

偏見固陋排他の國粹主義は決して日本を生かす所以ぢやない。それと同時に、無批判な外國模倣や、甘つたるい國際主義も亦自己を生かす所以ぢやない。

日本よ！お前は何處に向つて生きんとするのか！

徳川實記内證話

佐々木味津三

一、ちん辰の事

ちん辰又の名は金木右京、左官屋辰兵衛と言ふのが本名で、神田豐島町名物白雪糕米屋七兵衛が西裏長屋の住んであつた。

仇名ちん辰の由來は、彼がゐざりだからであつた。十三の年に芝神明裏の左官職安次郎の元に弟子入して、性來の悧發者、はたちに充たずして已に出藍の譽あつたが、ある年高繩侯のお下屋敷で内塀の修繕最中、はからずも足場をはずして一丈近い築地のまうへから墜落の災難に出會ひその折兩脚を挫いてからと言ふもの以來歩行の自由を失つて、つひにちん辰の由來をつくつたのである。

不思議にその年妻帯を周旋する者があつて、結婚にゐざりは別して不自由もないものか、分に過ぎて十人並の女がちん辰の妻女にめあはされた。しかし四ツ違ひの姉女房で連子が一人あつた。その翌年神田豐島町白雪糕の裏長屋へ逼入つたのである。ゐざりになつても左官の方はなかなかの腕自慢で就中らでん塗り、みぢん塗りの二つにかけては、名とりの職人衆であつたので、ちん辰の怪名を慕つてわざわざ弟子入りする者も多ければ又年中仕事にもことを缺くやうなことはなかつた。

しかし彼が仕事の現場へ出向く時は又大變な騒ぎで、ちかまの普請場なら、息杖をたよりにちんちくちんちく歩いてもゆくが、半道一里とかけ隔つた箇所となると手梯子に泥舟をのつけて本人のちん辰はその泥舟に十萬石の顔つきでおさまり乍ら、前後を弟子共にひつかつがせて、白晝江戸の街をへいげいし乍ら道中したのである。

現場へのぞんでいざ一仕事と言ふ場合でも、下ぬりや荒ぬり

は遠くからさい配とつて弟子達を斷使してゐるが、上ぬり仕上げと言ふ段取りになると、ちん辰は例の手で以而十萬石の泥舟を手梯子の上に仕立て乍ら、高低自在に大胡坐をかいたまゝで仕事に取りかゝるのが恒であつた。

それが又甚だ手に入つたもので、高低自在に手數こそ要るが仕上げの出來榮を論じる段になると、遺憾乍ら兩脚完全な一人前のお職人衆では、逆さに這つても及びえない入神のわざがあつたのである。

ちん辰の怪名御府內にとどろくのゆゑんはそこにあつて、況んや十萬石の泥舟を以而白晝道中に及ぶの一事は、元元彼が不具なるだけに江戸の好事家を唸らすに充分であつた。

それを以而おさまりえたら、ちん辰ゐざりの左官屋と雖も甚だ無難であつた。しかし彼元來が下民には惜しい位な悧發者であつた。入神のわざはとにかくとして、天下が擧げて彼をゐざり故に名實以上に珍重がつてゐるのを熟知すると、つひ輕卒にも彼は分外の野望をつくつた。泥舟の道中位で人心を淺ひうるなら、存外世間は甘いものと言ふ驚くべき速斷を下したのである。

野望と速斷と生來の悧發が即夜ちん辰をして恐るべき惡心をまき起さした。彼の妻女が生來の癇持で、病氣平癒祈願のことから常々大の金比羅信心であつた事に思ひ當ると、突然彼は一策をめぐらして、深夜突拍子もない奇聲を發し乍ら、いきなりむつくと起き直るや否や夢うつゝの間に金比羅權現の感應に接した旨をおごそかな口調でもつてさもまことしやかに先づ妻女へ告げたのである。

ゐざりを承知で敢てちん辰の所へなぞかたづいて來る位な心得ある妻女のことであるから、況んやその夫たるちん辰が日頃信心に及べる金比羅權現の感應を得たとあつては、妻女に何んの疑ひもなかつた。頭から彼の言に信を置いて神命通りその場に妻女が身を横へると、肚に充分一物を貯へた彼ちん辰はいきなり數珠をつまぐつて世にも怪しげなる加持祈禱にとりかゝつたのである。

一端感應に接した以上は、數珠一つ加持祈禱だけで萬病たちどころに平癒すると言ふのがつまり彼ちん辰の神託で又彼ちん辰の一策で、妻女の成績效驗いかんによつては、あらたにそれ

を以而天下によこしまなる野望と瞞着をとげやうと言ふ肚であつた。

やがて彼は妻女が持病の癪を取り鎮めると言ふ名目で勿體ぶつた顔附をすると數珠をつまぐり乍ら二三ぺん出鱈目な加持祈禱を試みたのである。

一日二日容子を見ると、不思議千萬にも、従來日に兩三度位決つて起つた妻女の持病が忘れたやうにぴたりと跡を斷つた。忽ちにしてちん辰の惡心は增長したのである。そのおもむきを針小棒大世間へ對つて吹聽すると、いつかちん辰は左官屋辰兵衞の一枚看板迄かなぐり棄てゝ、名も金木右京と言ふ風に勿體ぶつて改めるや否や、彼は不敢取裏長屋に最初は心ばかりの祭壇を設けて、ひたすら感應あらたかなる修驗者をよそほつた。

ちん辰が得意の泥舟にすつかり好事心をあほられた程の大江戸の民心は、そこへ行くと甚だけつこう千萬である。ちん辰の野望惡心思ふ壺にはまつて、あらたかならざる者も猶ほあらたかとなし、感應せざる者も尙ほ感應せし者としてこれを許し、先のちん辰今の金木右京は一躍又その怪名を御府内中へとゞろかした。又不思議に一端彼の元へ加持祈禱を受けに集る求信者たちには、腰の冷が止まつたり、長年の癪痛が旬日にして平癒したり、性來の頭痛持ちが一朝にして天氣晴朗に變つたり、とにかくそれ相當の靈驗が見えた。一つはゐさりちん辰の不具なる一枚看板が逆に暗示を授けたとは言へ眼から鼻にぬけるていの口上上手と嘘八百が相當あづかつて力あつたのである。

天下人心を以而かくのごとくくみし易く又御し易いものと言ふ速斷をちん辰がこの上共に一層深めたのは勿論のことで、彼はつひにいちだんと大それた惡計を計るに至つた。日に日に參詣者群をなし、門前市をなすていの盛況を見るに及んで、翌年八月筋向ふなる比丘尼横丁へ百坪程の明地を求めて大々的に金比羅勸進日參百度場を營んだのである。表門すこし這入つた所へ、先づ參詣者下向の高札をかゝげて玉川砂礫をすつと奥へ社殿の正面には白木柾の玉垣を設け、求信者扣への席から左右の廊殿を通じて、夫々祭壇裏の別室へ導くやうに仕上げその別室がいわゆるゐさりちん辰の加持祈禱靈場と言ふ所であつた。單にそれだけの咄しなら、彼の計畫に何の不思議もなかつたが、

悪計にたけたちん辰の金木右京はこの上共に一層民心をあほらんための奸策をめぐらして、どこからか怪しげなる陽物に酷似した石を運んで來ると、れいれいしくおのころ島の靈石と言ふ一札を建てて、あまつさへ陽石には神々しい〆繩迄張り巡ぐらしたのである。

果して日參百度詣り、求信者門前群をなして、從來の加持祈禱をよそに、就中おのころ島の靈石に對つてはなんの願望か悉く妙齡の男女が裸體參りさへするに至つた。奇怪千萬なその評判は又一時に大江戸の民心をいやが上にもあほつて、參詣にことよせて、ひそかに寸間のたしなみを貪らうとする求信いやちこな善男善女達が名實共に群をなした。そのいやちこな參詣者達の休息所と言ふ名目で彼は又おのころ島の靈石を中心に左右目ぬきの箇所には數軒の餅屋葉茶屋神酒の酒屋、精進落の小料理屋なぞを所せまき迄營ましたのである。それらのことごとくが又表は葭簀張りの眼かくしをかたく施し乍ら、そのくせ充分見透しの利くやうな葭簀のみを用ひた。又靈驗あらたかなる可き筈の加持祈禱に上下の別があつて、十把ひとからげ百人位を束にしてうける加持祈禱にたんのうしない者は、廊殿から通じる祭壇うらの別室で上の部の祈禱をうけるならはしを設けたのである。

不思議なことには祭壇裏の別室で上の部の祈禱をうけやうとする者は、若後家か若隱居か乃至は又若い未婚の男女に限つた。

しかも一層奇怪千萬なことは、一度上の部の加持祈禱をうけた者に限つて殆んど一日おき位に、又同じ別室で同じ加持祈禱を求めがちであつた。しかし男女裸體詣りのともがらは、又日に日に十人位變つた顏觸れに改まるので、從つて葉茶屋水茶屋に陣取り乍らまたたきもせず熱心に參詣する手輩は、殆んど日參に近い者ばかりであつた。

此の盛況を見るに至つて、ちん辰の加持祈禱料はつひに一日銀一貫目にも及び、葉茶屋水茶屋のお茶代は、それにまさるとも劣らない程の豪勢を示した。往年ゐさりちん辰の名において白甍泥卅の道中で十萬石の顏付におさまつた位の彼であるから今にして金木右京たるものまんまと野望嚇着の圖に當つた勢ひを以而おそらく加賀百萬石以上位に鼻を高くしたのは當り前の

ことである。

しかし彼の瞞着並びにその豪勢ものの半年とは續きえなかつた。左官屋ちん辰の泥舟を昔から充分心得てゐたおん町方衆が、早くも彼のいわゆる金比羅權現感應のみしるしに疑ひをはさんだのである。

その直接動機は牛込二十騎町のさる小身者のまな娘が性來のそこひでゐざりちん辰の日參百度場へ、二三べん加持祈禱をうけに通つてゐたうちに、そこひの方にはこれと言つて別段のあらたかなる靈驗は見えなかつたのに、いつのまにそんな感應に接したものか、姫娘三ケ月の神託を蒙つてしまつたからであつた。

兩親からの上訴を手蔓でおん町方衆がひと洗ひ洗ひ立てるとちん辰の化の皮が即日にして他愛なく暴落したのである。ちん辰が金比羅權現の感應を得てゐたか否かは別問題として、日參百度場の男女裸體詣りは、悉くが雇ひ賃で狩り集めた者であると言ふ事が先づ洗ひ立てられた。はだか參りに從つた女は丹前風呂の湯女が多くて、男は湯島裏の若衆であつた。男はだか參り一日雇賃二百文、女はだか詣り一日雇賃銀三匁、但し男女共下帶なしで百度參りするものに限り男百文增しの三百文、女一匁增しの銀四匁と言ふ樣なこと迄悉皆ねたが上がつたのである。

又おのころ島藏石の左右なる葉茶屋水茶屋の營業者は悉くゐざりちん辰に弟子入りした左官屋共で、その賃一日お茶代〆の半分は親方のちん辰に即納と言ふやうなこと迄も判つた。

しかしたつた一つ流石のおん町方衆にも合點しかねる節があつた。果してちん辰に金比羅權現の感應があつたか否かである。拜殿を通じて左右へ別室の祈禱所が現存した位であるから、とにかくなにがしかは靈驗もいやちこだつたに相違なからうが、そのみしるしがどうやつて現れたか否かその邊のことに立ちゐると、こと苟しくも神託に拘る以上不思議に誰の口からも洩れなかつた。

現に牛込二十騎町のまなむすめが祭殿裏の別室でれつきとした神託を蒙むつたと言ふ事實がありながら果してそれが金比羅權現かどうかその所が齒痒い位はつきりと判らなかつたので

ある。

とは言ふもの丶、しかし程經て日參百度場を打ちこわした砌り祭殿裏の別室と言ふのは、せいぜい四疊半位のちいさな部屋で左右六つ程の間數があつたと言ことだけは明らかに判つた。

一、知慧伊豆の事

知惠伊豆がまだ在勤中の事である。

ひとゝせ秋の初め頃から夜分江戸の往來で、盲人めくらに限り、毎夜のごとく槍で突つころされると言ふ不思議な事件が持ち上つた。辻斬りでなくて辻刺しである、それも最初ははたち前后からせいぜい三十がらみ位迄の男の盲人に限つてゐたが、十日二十日と經つた頃から男女年齢に別なく、多い夜は江戸中で六人、少ない時も一兩人は辻刺しに出あつた。

しかも一層不思議なことはどの盲人もたいてい一突きで見事に參つてゐたことである。それも最初は氣がつかなかつたが、突かれる急所が又念入りで、どれもこれが紋切り型に眼の玉と限つて、若しその盲人が片眼の者であつた場合は、又きまりきつてつひえた方の眼の玉が一突きにぐさりとやられてあまつさへ其眼の玉が後方もなく抉ぐりとられてゐた者が多かつた。

十月二十日晩七ツ半時淺草成田町横町往來で突きころされた者無宿名前不詳非人體の者四十五歳位、同斷四ツ頃湯島切通しにて突き刺されその場に相果てし者盲目道心丁順六十歳、同月二十三日五ツ頃過ぎ海賊橋上にて突き疵こうむり翌々日相果てし者宣助二十六歳、同斷五ツ半時淺草仁王門そとにて突きころされたるまゝ往來に胡坐せるもの盲人非人體三十八歳、同月晦日六ツ半時麹町山王裏往還にて突疵蒙り、翌朝相果てし女盲人名前不詳二十二歳と言つたあんばいで、公儀御町奉行へお屆に及べる者殆んど寧日數へ切られなかつた。

此事件には流石の御町方も、全く頭を悩ましたのである。悉く盲人に限つて、又悉くが槍疵に限つて、どれもこれもが必ず兩眼か隻眼かを抉ぐり取られると言ふに至つては、事件の奇異に只呆然と手を拱ねいてゐるだけで當座殆んど施すべきすべがなかつた。

多分在來の單なる辻斬りに類するものだらうと言ふ見當を以

而、東西南北御町方衆が期せずしてその方面の手配りに當つたが、不思議にそう言ふ晩に限つて一つも事件が起らなかつたのである。二日三日と手配りに飽きが來かけたやうな寸隙をねらつて又二人三人と抉ぐりとられた。その間の消息が不思議に內外相呼應するやうな氣配さへあつて、ひと網張らうと言ふやうな公儀お評定の決定した晩は、常に一つの事件も起こらなかつた。乃至は又與力同心達が嚴重に網を張つてゐる晩であつても、どこは手落でどの方面は手厚でと言ふことが宛然見當でもついてゐるかのごとく、手薄の方面ではいつのまにか一人位やられてゐたのである或は又五ツ半から四ツ半迄は手配り嚴重であるがそれ以后その方面は手薄になると言ふ樣な公儀お手配りの方針に就いて下手人側にはなにか測定の秘策でもあるのか、その手厚と手薄の境ひ目をまんまとねらつてほんの小半時位の寸隙のまにいつの間にかぐさりと一人位抉ぐられてゐることさへあつた。

老中筆頭松平知惠伊豆がその奇怪な事件を小耳にはさんだのは已に弐十有餘人も抉ぐられたのちの事であつた。非難百出專權のそしりこそあつたが、知惠伊豆はしかし大德川の大知惠伊豆である。十八松平の筆頭をおさめ、双葉にして已に甚だ斉しかつた。知惠伊豆未だ十一歲にして長四郎と言はれたころの事である。西丸大御所秀忠の台命をうけて、家光遊び對手の選に上つたことがあつた。

一日家光西丸樣の御寢所屋根棟に子雀の巢を發見したからと言ふので、長四郎の松平知惠伊豆に取つて參れと言ふ君命を發したことがあつたのである。世に憚りなき君命とは言へ、西丸御寢所は名にし負ふ高殿であつたので、流石の知惠伊豆も雀の巢にはことごとく參らされた。

思ひ餘つて御近侍の某に相談に及んだ所、其のうち子雀のありかをしかと突き止めておいて、夜中ひそかに屋の棟に這ひ上るのが上策と言ふ秘法を授けられた。その秘法通り、即夜知惠伊豆の長四郎が梯子を用ひて、ひそかに御寢所の屋の棟を犯した迄はよかつたが、暗夜のためと子供心で、つひ足場を失なつて、有無を言はせず直逆さまに西丸御寢所の中庭に墜落を餘儀なくさせられたのである。

忽ちにして長四郎の知惠伊豆は西丸樣の御手の内に捕へられた逐一吟味をうけたまわつた所、そこが双葉にして彼の已に香しい所でつた。自ら才覺をめぐらしておのれ一身に罪を着ると何んとしても長四郎實を吐かなかつたのである。實を吐かない限りはと言ふので、知惠伊豆の長四郎はその場に西丸公お手の内を以而、ついに大きな用心袋の中へつまみ入れられて、結び目に固く封印を施されたまゝぶらりと柱に吊り下げられた。最初は單なる威嚇のつもりであつたろうが、西丸公元來の勤嚴と律義一邊の御性分から、つひに朝迄固く封を解かなかつたのである。所が知惠伊豆の長四郎は西丸公の向ふでも張つた氣か存外落ちついたものであつた。當の御座所へ將軍出御のあとになつて流石に御藥所が袋の縫目を内緒で解いて朝餉萬端の用意を整へさして呉れたので、知惠伊豆の長四郎一通りの用意を認めおわるとすましたもので、又のこのこ自ら袋の中に還入つたのである。

その夜に及んでつひに西丸大御所の方から、お前にはほどほと參らされたと言ひながら、お手の内を以而袋の縫目をほとかれる迄、終始彼は家光の名に於て緘默を守り通した。その剛情一邊がひどく秀忠の信賴を贏つて、竹千代には又なき忠義者と言ふ法外な讃辭さへ蒙むつたのである。

のち元和六年松平信綱を名乘るに及んで、新らたに五百石を加へられ、同じく九年竹千代家光となつて三代將軍の宣下あり、即日小姓組番頭より叙爵されて伊豆守を稱ひ、寛永十年宿老の列に入つて、武州忍の城主三萬石をふり出しに、年々歳々加増恩賞の台命に接して、つひに大德川の大知惠伊豆なる名を超した。

長四郎にして已に將軍の意表をついた位な知惠伊豆の事であるから、長じて彼に拔群の聰明と唯一者の頓才あつたことは當り前のことである。宛も將軍家光に於てたまたま御不例の事あり、將軍點灸を用ひると言ふに就いて、俄かに藥みごを上進しろと言ふ台命が降つた事があつた。君命を畏しこんで小姓衆が右往左往件の藥みごを探ねあぐんだがなにしろ營中の事ではあり急なる御縱であつたので、たとへ天下將軍職の名を以而して僅かに一本の藥みごをさへ求められなかつたのである。家光性來の剛排から、早々の御上進が火のつくやうに頻々と御近侍に降

るので小姓衆のうろたへ方は又格段で、その趣を例の知慧伊豆が通りがゝりにちよいと小耳にはさんだ。はさんだ者は名にし負ふ彼知慧伊豆のことである。年來とつておきの頓才をちよいと小出しに用ひると、殿中をも辨へ乍ら突然彼は腰なる小刀を引きぬいて、いきなり足元の新疊を眞中からずばりとやるや否やその場に所要の藥みごを滯りなく上進せしめた。以上のごときはほんのその一例で、その同じ頃一夏御守殿に夥だしく蚊が發生したと言ふので、或夜家光が例のごとく火急な君命を猪突に發して、即刻營中一間に榧の木を焚けと命じたことがあつた。點灸の藥みごと同一轍で、急には間に合ひ兼ねるので近侍の面々が矢張りうろうろ騒いでゐる由をひよいと聞き知つた知慧伊豆が又一流の頓才を以而、御納戸から榧の碁盤を幾面も取り出させると丁度いぶしにはかつこうの大きさに眼の前で又ずばりと打ち割つたのである。

將軍家綱の世になつてからも、その種の頓才はほとんど枚擧にいとまがなかつた。一日營中に猿樂の催しあつて、いざ開演と言ふ場合に際してから庭先へ白土塀を巡ぐらして、植込の見えないやうにしろと言ふ台命が降つた時のことであつた。併し伊豆何の憚りもない途方極まるその君命に驚くと思ひの外、例のごとく速座に台命をかしこまつて肯ふと、將軍家綱奥に入つて小半時間も過つてからやがて再び出御に及んだ時は、已に君命の仰せ出で通りに、ちやんと庭先には、お誂への白土塀が出來上つてゐたのである。元より知慧伊豆がとつておきの頓才で、營中處々なる矢倉門の土戸を悉皆取りはづさせると、いく枚かのその土戸をぐるりとお庭先に立て並べて急場の用に鎹を以而外側から止めさせたものであつた。

大體が以上のごときあんばいで、知慧伊豆の知慧伊豆たる本來の面目は隨時隨所に發溂たるものがあつた。その伊豆にしても暗夜盲人まなこを抉ぐられるの怪事件には流石に手古摺らざるを得なかつたのである。

然し松平伊豆守老ひたりと雖も彼に猶ほ年來のとつておきなる頓才があつた。盲人に限つて、暗夜を限つて、その盲人の眼の玉に限つて抉ぐりとられると言ふ不思議にして且つ一定不變なる方法の奥には、必ずや何か迷信上の秘密が潜んでゐるもの

と言ふ見當をにらんだ。

又一つにはその曲事たるや甚だ巧妙を以而、殆んど御町方衆お手配りの裏を掻くていの節々がつけとれるのは、必ずやどこか公邊にその犯罪張本人が潜んでゐると言ふ見當をつけたのである。そこ迄行くと知慧伊豆の頓才と聰明は疾風迅雷神出鬼沒の概があつた。彼は速座に公儀御目付の威權を以而近時新らたに江戸町方中に流布されてゐる程のあらゆる迷信流說のたぐひを、一切合切見る目かぐ鼻を使つて集め取つたのである。

その中の一つに、近時太陽が赤色を呈し勝ちであるので、一兩年を出でない間に、江戸に再び明曆以上の大火かさもなくば驚天動地の異變が起きるに違ひないと言ふ流說があつた。神出鬼沒の慨をもつた知慧伊豆のとつておきなる年來の頓才は、忽ちにしてその流說に疑ひを持つたのである。先には由井丸橋輩の不企と言ひ近くは明曆振袖の大火と言ひ近時江戸の民心にとかくの動搖あるをねらつて、そこをまんまとつけ込んだ何者か小さかしき輩の奇怪千萬なる曲事と言ふ見當を先づ持つた。

果して彼の見當通り、流說の奥には立派な迷信が伴つて、盲人あんまの類のめしいたまなこを應用すると、來るべき天變異變に一身を完うしうると言ふ一條を嗅ぎつけたのである。奇怪千萬なるその一條を知るに及ぶや否や知慧伊豆の聰明なる頓才は、忽ちにして奇想天外なる形をとつて現れた。即日彼は腹心の小者に內命を授けると盲人抉ぐられの曲事數最も多い。南町奉行配下の一人に、天下の松平伊豆が天災よけにめくらのまなこ一つ所望の旨を內密に傳へしめたのである。伊豆の守御用と聞いて、件の南町奉行なる配下の一人は何んの危ぶみもなく二つ返事でさつそくに所望の目玉を一つ整へた。

それを知るや否や疾風迅雷的に件の配下なる小者は即日を期せずして召し取られたのである。內密にして且つ嚴重なる吟味方を進めて行くうちに、果して伊豆が豫想通り、その犯罪の裏には、御町方衆のさる目きゝ者が張本になつて內外相呼應してゐたことを明瞭に突きとめた。

殆んど東西南北御町方衆の配下から多いところは三人少くとも一人與力でなくば同心手先の小者達が芋蔓をたぐられるごとくに擧げられたのである。

然しそれらの多くの者は彼等直接に手を下した手點ではなかつた。直接の下手人は恐くが腕の利いた町道場の主か、乃至は又浪人者のいちだんと槍法に秀でた者ばかりであつた。張本のさる眼きゝ者が自らその迷信流說を大方に流布せしめて、なにがしかのお鳥目を私しせんために、その傍ら浪人者を手先に使つた迄の話である。公邊お手配りの手薄手厚のあらかじめなる見當は元より彼の豫報に從つたもので、各所の共犯者腹心の小者達と內外相呼應せしめたものであつた。

いはゞ公儀お手盛りの一大奇怪至極なる曲事だつたのであるその數七人に及んだ直接下手人の浪人者が即日江戸町中を引巡しの上、品川に獄門の刑を蒙つたことは勿論のこと、與力同心一味の面々にも同じ梟首の刑が課せられた。

まなこを突かれ相果て候盲人前后四十三人、突疵蒙むり辛じて命ひろい候者十七人、鹽漬にて貯へ候まなこの實數餘す所僅かに十三箇、と言ふ事實だけは判明したが、當の張本人であつた公邊のさる目きゝ者と言ふのが果して何人であつたかどうかその邊はつひに知るよしもなかつたのである。況んや鹽漬にて貯へたるあんまのまなこが、一つ何匁の値で賣買されたものかどうか、現にお自分が一つ買つてゐ乍ら肝心の知惠伊豆さへそのところは言明をさけたと見えてはつきりした所は傳へられなかつた。

あんま上下十三文と言ふ位であるから、おそらく半金の六文半位だつたかも知れないのである。さうだとすると天下の[illegible]知惠伊豆は僅か六文半の鐚錢でもつてこの怪事件を一朝にして剿滅せしめた者に違ひなかつた。

一、一服盛りの事

慶長十二年と言ふから、德川もずつとさかのぼつて權現様未だに駿府に在世中の事である。德川八百萬石初まつて以來の珍事件とでも言ふべきか、城持大名出奔行衞不明と言ふ前代未聞なる一つの出來事が起つた。

ことの起りは鳥渡したことからである。駿州興國寺の城主に天野三郎兵衞尉康景と言ふものがあつて、慶長十二年猛春三月新らたにおのれの居宅を營まんため城外に多くの竹木を貯へておいた事があつた。

所が夜毎その竹木が頻々として盜難に遭つたのである。康景

甚だ心外に感じて、晝夜多くの足輕に命じてその竹木を嚴重に守らしめた。十日あまり二日の宵で、猛雨風を伴ひ起し天地晦瞑杳として人跡全く音を絶つた晩であつた。夜ごと夜ごとのこととは言ひ條さすがに今晩だけはよも來るまいと高をくくり乍ら一統の面々少しく油斷しきつてゐた所へ、大凡そ二更に垂んとする頃ほひ、猛雨を犯して突然たッたッたッと言ふ人跡が起つたのである。

　臆なるだんびらおッとつて警固一統の面々が、驅け出した時は既におそかつた。血氣さかんなるいでたちで夜盜の群が一團二團大きく密集し乍ら例の如く己に貯へた竹木に迫つてゐたのである。盜まんとする者防がんとするもの前後左右入りみだれて忽ちの間に棍棒大だんびらが猛雨さかんなる二更の夜陰に閃き渡つた。輕裝足輕の雜兵とは言へ流石は手の內に多少の心得を持つた者達である。その夜に限つて一物も盜み得ず夜盜の面々散々のていたらくで追ひ散らされた。警固の面々に瑾うけし者一人もなく、夜盜の群には二太刀三太刀かすり疵を蒙むつた者達があつたが、しかし殺された者は一人もなかつた。

　のち旬日を出ずして、件の夜盜が富士裾野田原の土民百姓達であつたと言ふことがはしなくも判明したのである。そのありやう次第は、前記田原村の土民百姓が所の代官井出志摩守正次の元へ天野が足輕雜兵共から、故なくして刄傷を蒙むつたと言ふことを訴へ出たからであつた。

　一目瞭然土民百姓の夜盜達の方に以而の他なる曲事のあることは充分承知してゐ乍らも彼等が敢てその理きを訴へるに及んだと言ふのは、そもそもが富士裾野田原村と言ふのは幕府直轄の天領だつたからである。

　いはゞ公儀おん直領と言ふ虎の威を藉りて曲事を以而猶ほ曲事たらざるものに歪めやうとしたからに過ぎなかつた。實際又大德川創業の頃のおん直領なる土民とあつては、虎の威以上に公儀權威を我もの顏に笠に着たものであつた。

　代官井出志摩守不出世の英才と雖も權現樣には頭が上らなかつたのである。土民の訴へを頭から信じて、理否曲直も正さず直ちに興國寺城主天野康景に使を立てた。

　苟しくも天下御直領の民を恣まに誅せんとせし條その罪決して輕からず、和殿が下手人首切つて早々に當代官迄渡さるべしと言ふのがつまり井出志摩が言分だつたのである。

案に相違して對手なる天野三郎兵衛尉康景天下稀に見るの硬直なる一箇の城主であつた。凡そ盗賊を殺ろすの條蓋し古今の定格也、かの時夜盗の群がり來れば、我番兵共無勢にしてその一人をだに或は捕へ或は殺し得ず、わづかに手疵のみにて、逃がせしてと頗る無念也、かの盗賊の強いかで御領の民と知るべきたとひ天下御領の民と雖も、公けに盗みを行はんに豈之を戒むることを得ざらんや、身不肖なりと雖も康景が命じて番させし者を夜盗の爲に下手人として參らすこと以而の他のこと也と言ふ思ひ切つた返事をきつぱりとはねつけたのである。

代官井出志摩守鳩に豆鐵砲のやうな當惑顏でひたすら思ひあぐねてゐた所へ、はしなくも權現樣關東よりの御歸駿で三島のほとりを通られた。

井出志摩が鳩豆の當惑に打つかつて案外の結果に蟲のおさまらなかつた御領の民共が、何の憚りもなく權現樣御通行の御乘物へ同行異曲の口實を求めて直訴に及んだのである。

近侍の者をして直訴の趣を點檢さすと、土民の中に數人後ろをうけた者があつた。それのみを以而權現樣いつになくたががゆるんで彼等が言ひ條の通り逃ぐる所を理由なくして天野が配下に負ひ疵うけたものに相違あるまいと言ふ甚だ天下泰平の判断をもつたのである。

果して駿府に立ち歸るや否や、代官井出志摩と天野康景の兩人を招致して權現樣お手づからその對決に立合つた。井出志摩は是を鬪爭と言ひ、康景は之を夜盗と言ひ、結局權現樣にもはじめがつかなかつた。本來公儀の威權のみを以而すれば敢て白をも黑と言ひ張り、曲をも枉げて直と言ひ張り、一も二もなく天野康景に曲事たりのお叱り位申し渡しうべきであるが、相悖くと權現樣當の天野三郎兵衛尉康景に對して一つ頭が上らない事があつたのである。咄しは遠く天文十六年の昔であつた。權現樣齡ひ六才にしてまだ竹千代と言つた頃駿府今川義元の所へ人質に遣はされやうとして岡崎を發足したことがあつた。

從者五十餘人の間に、天野康景又五郎と言つて僅かに十一才の小冠者であり乍らそのお伴を仰せつかつてゐたのである。岡崎を發足即日無事に海路を以而吉田に到着一門戸田彈正少弼の手元で一夜を憩ひ翌早朝、同じく海路を舟で遠洲灘を乗り切らうと言ふ御豫定のところを、即夜はからずも戸田彈正少弼裏切

りのために、まんまとたばかられ逆に海路を熱田へ織田信長の手元に護送されたのである。

その折彼天野康景が僅か十一才の小冠者であり乍ら一世一代の忠勤をぬきん出た。戸田少弼にたばかられたと知るや否や、又五郎なる彼康景は速座に心利いたるおのれの郎僕を呼び寄せて、遂一その趣を口授直ちに岡崎なる竹千代先君居城の所へ告げしらしめたのである。

のち數年經ずして織田の人質からは救はれたが竹千代の權現様以來その機先に乘じたる康景の忠勤をこよなくうい者として深く心にたゝみ込んでゐたものであつた。

單にその一事のみならず、竹千代先君の封を繼いで海道に覇を唱へるより遠くは大高鷲津丸根の戰ひを初めとして秀吉小田原の陣、近くは關ケ原の大戰に至る迄、天野康景終始權現様に影の形に沿ふがごとく附き隨つて、又その高名手柄數ふるに遑なかつた。

のち權現様完全に三河一國を手の中に治められた砌り、世に有名な三河三奉行の任命に際してもその天野康景が中なる一人として數へられた位である。世に謂所佛高力、鬼作左、どへんなしの天野三郎兵衛と言ふそのどんちりの三郎兵衛は言ふ迄もなく幼名又五郎天野康景その人であつた。

權現様に於ける天野の信頼大體以上のごとき有様であつたので、いはゞ前記の公事爭ひは權現様にとつて甚だ對手がわるかつた。と言つてしかし、天野に勝訴を申し渡したとするならば、つまりは天下公威を損することに他ならなかつたのである。さらばと言つて、對手が天野康景と承知し乍ら、無理にも曲事のお咎めには及びえなかつた。

痛し痒しと言ふやうな考へで、つひに權現様一策を案じて、本多正純に天野康景口説きおとしの秘策を授けたのである。正純内命に從つて康景の元に赴き、しかしその言ふ所はやはり公邊の威權枉げても尊重されたいと言ふ一條のみであつた。

彼等は土民たりと雖も公の民也、和殿の足輕は家子郎黨たりと雖も私の人也、たとひ和殿が兵の行過まらずと雖も、私の義を立てんことと公の威を損すやうである。枉げて下手人を出されんことこそあらまほしけれ、と言ふのがつまり正純の天野康景口説きおとしの口上で、又權現様の秘策であつた。

是が只の天野三郎兵衛康景であつたら、いわゆる公の威を損すやうであるの一喝を喰らつて手もなく心を枉げて迄もその下手人の首切つて差出す所であつたらうが、康景どこ迄もどへん

なしの天野三郎兵衞であつた。寛厚にして思慮深く、勤直にして、明を失はず、たとへ權現樣一代の內命と雖もその義ばかりは、頑つ平と言つてはねつけたのである。本多正純飛脚のやうにて飛んで歸へりその趣を逐一復命に及んだところ、流石の權現樣苦笑を洩らしたつきり暫く呆然手を拱ぬいた。

そこ迄行つてもしかし公邊威權のためには、背に腹はかへられなかつたのである。權現樣にたつた一つ最後の奥の手があつた。

一服もりと言ふ一手である。その手たるや、殆んど德川三百年の太平を通じ、常に公邊威權にとつて不利益なるものと言ふ場合にのみ限つて、白晝公然而して秘中の秘を以而、しばしば川ひられた背水の奥の手であつた。

どへんなしの天野三郎兵衞つひには權現樣直々の秘策によつて、最後の奥の手にうき目をさらすべき場合に立ち至つたのである。

一服もそれと言ふ恐るべき官命を問く秘中におさめて、間もなく本多正純が又康景の元に赴いた。

所がしかしその一足違ひである。次第に依つたら一服もらのべき筈のどへんなしなる天野三郎兵衞が、いつのまに城中かる脱出遁走を企てたものか、一子康宗と共に彼の姿は已に興國寺城外になかつた。

たつた一つ彼康景の傳言とでも言ふべきものが、城內の者から、本多正純から駿府權現樣へ滯りなく傳へられたのである。

直きを枉げて曲れるに從ふこと我等素懷には非ず、康景が足輕、身卑賤なる奴原なりと雖も、その罪に非らさる者を何假曲げて殺しうべきや、されど我等義を立てんが爲に、公けの威を損ぜん節々、公儀御政道の妨げともならば、しかし我等自ら身を失なふの他なきを、と言ふやうな傳言であつた。

のち慶長十八年閏二月二十四日どへんなしの天野三郎兵衞小田原西念寺にて卒す、行年七十八と言ふことだけが傳へられてゐるが、その他のことは全部詳らでなかつた。

只一つ一子對馬守康宗、並に左兵衞康勝の兩人は寛永五年相前後して再び幕府に召し出され、のち七年に至つて三子の六右衞門康世も同じく幕府に召し出されて新らしく德川の祿を食んだと言ふことだけは確である。

しかしそれとて、一服もりそこなつた罪亡ぼしであつたかどうだか、はつきりは判らなかつた。（完）

水平社大會特派記

饒平名智太郎

一

水平社——水平運動——といふ言葉は、まだ極めて新らしい言葉だ。少くともそれは辭書の中に見出すことは出來ない言葉だ。穢多とか特殊部落民とか呼ばれて、單に職業故に一千年以上も人間としての尊嚴を剝奪せられ、賤民視されて來た民族がある。日本全國に散在する其人口、三百萬人と云はれる。彼等は永い間の忍從と屈辱から今や醒めた。そして彼等自らの力に依りて、その失はれたる人間としての尊嚴を取戻さうとするようになつた。この彼等自らの、彼等のための、彼等に依つてなされる解放運動が、即ち水平運動で、そのための結社を水平社といふのだ。

穢多といふ名稱は、明治四年の太政官布令を以つて撤廢されて新平民といはれるようになつた。けれども依然として差別があつた。新平民が特殊部落民となり小數同胞となり後進部落民となつても、決して平等ではなかつた。彼等は學校に於て、軍隊又たは社會に於て、依然として傳統的の賤視と屈辱から脫がれるわけには行かなかつた。彼等は苦惱から解放されなかつた。殊に、近代の資本主義的生產組織は彼等の職業をも奪つて彼等をプロレタリアートの境涯に突き落すのであつた。かくして彼等の前途は、永遠の暗黑であるかのように思はしめた。

此時に當つて、彼等を外部から慈善的恩惠的に開發指導せんとする運動が興つた。有馬賴寧氏の代表する組織も其一つの例だ。それは如何に美はしいモツトーの下に組織されてあるにせよ、所謂小數同胞を利用し搾取しつゝある階級に則するものである以上、からした運動に通有なる性質を離れることが出來ないものである。それの動機が利他的に見えても、實は利己心の發動にすぎない。それは恩惠の名の下に行はれても、決して恩惠となるものではない。だから彼等がいつまでも、斯る恩惠的改善的の運動に誑されてゐる筈がなかつた。プロレタリアートが救はれるには、たつた一つの途——根本的の改造——しかないことを世界のプロレタリヤは深く理解してゐる。彼等が救はれるにも同樣である。彼等は彼等の團結の力に依る根本的の改造以外の何者も彼等を救するものでないと信ずるやうになつた。英國に於ける水平運動とも云ふべき愛蘭と印度の獨立運動も、この方角を志向してゐる。露西亞でも特殊民たる猶太民族が此點で偉大なる事業を成就した。それらは彼等の或者を鼓吹し感應せしめずにはおかなかつた。そして彼等を武者振り立たしめるに十分であつた。

かくて先づ奈良縣下柏原の青年駒井喜作阪本清一郎、西光萬吉君等を中心として水平運動の一大波紋が畫かれた。彼等は其組織を全國的にしようとの計劃から宣傳に着手した。その結果、各地の部落民が忽ちにして之に響應して遂に京都を聯盟本部とする第一回の創立大會を、召集することが出來たのは昨年の三月三日であつた。

その當時決定されたといふ綱領と宣言は次の通りである。

綱領

一、我々特殊部落民は部落民自身の行動こ

よつて絶對の解放を期す。

一、我々特殊部落民は絶對に經濟の自由と職業の自由を社會に要求し以て獲得を期す。

一、我等は人間性の原理に覺醒し人類最高の完成に向つて突進す。

宣　言

全國に散在する我が特殊部落民よ、團結せよ。

長い間虐められて來た兄弟よ、

過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々とによつてなされた我等の爲の運動が、何等の有難い効果を齎らさなかつた事實は、夫等のすべてが我々によつて又他の人々に依つて毎に人間を冒瀆されてゐた罰であつたのだ。そして、これ等の人間を勦るかの如き運動は、かへつて多くの兄弟を墮落させた事を想へば、此際我等の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは寧ろ必然である。

兄弟よ。

我々の祖先は自由、平等の渇仰者であり、實行者であつた。陋劣なる階級政策の犧牲者であり、男らしき産業的殉教者であつたのだ。ケモノの皮剝ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剝取られ、ケモノの心臟を裂く代價として暖かい人間の心臟を引裂かれ、そこへクダラナイ嘲笑の唾まで吐きかけられた呪はれの夜の惡夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は涸れずにあつた。そうだ、そして我々は、この血を享けて人間が神にかはらうとする時代にあうたのだ。犧牲者がその烙印を投げ返す時が來たのだ。殉教者が、その荊冠を祝福される時が來たのだ。

我々がエタである事を誇り得る時が來たのだ。

我々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる行爲によつて、祖先を辱しめ人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勦はる事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求禮讃するものである。

水平社はかくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

二

一年は瞬く間に過ぎた。水平社の組織者たちは、全國的の運動のため日夜、東奔西走殆んど席の温まるものがなかつた。或者は家を逐はれ或者は………のため囹圄の身となつた。それでも彼等の白熱的行爲は阻止さるべくもなかつた。彼等の態度と云ひ相貌と云ひまるで殉教者ソツクリだ。彼等は凡ゆるものを焼きつくさねば止まないと云つた概がある。彼等のこの獅子吼は睡れる者をも目醒ました。一千年も蓄積されてゐた彼等の同族の悲憤の血は沸き立つた。これまでは部落民たることを恥ぢて逃避してゐた人々も、今や自ら名乘りを揚げて部落民であることを誇るようになつた。そして彼等の運動は、一般プロレタリア階級からは驚異と喜悦の情を以つて迎へられ、政府者からは畏怖の念で見られた。かうした狀勢の下に、第二回全國水平社大會が京都の岡崎公會堂で再びこの三月三日に開催されたのであつた。

大會の前日は役員選擧と各地水平社代表の協議會であつた。私は本誌記者としてわざ〳〵京都まで出掛けて行つて、そして彼等の會議を傍聽するの光榮をもつた。

私が京都驛に降り立つたのは大會に先立つ二日即ち協議會の前日であつた。開札口を出た私の目に直ぐ留つたのは赤旗を取圍んだ二三の若者たちであつた。「はゝあ、水平社の連中だな」と私は首肯いた、そしてよく見ると『全國水平社第二回大會假本部京都館』と墨記されてゐた。彼等は各地から陸續參集する代議員なり社員を出迎へてゐたのである。私は彼等の手廻しの周到なるこの一事を見て、彼

等の組織力を疑ふことが出來なくなつた。

第一日、私は幹部の人たちにも會ひたかつたから少し早く會場に行つて見た。會場の正面には、黑の地に赤の荊冠を染出した大きな水平社旗が二つ交叉されてゐた。各地方々々の社旗——それは何れも竹槍に赤の荊冠の旗をつけたもの——の下に行列して社員が繰込んで來るのも見た。併かも、受付で一々顏を檢べて社員以外の入場を拒んだ。私は友人高橋貞樹君——若い有力な水平社同人の一人——を呼んで貰つて、漸く入場することが出來た。場内は全然彼等の自治に任せられ、警官の姿の代はりに赤線をした風紀係が活躍してゐるのも氣持ちがよかつた。演壇の背後には數十の社旗が立ち並んで、その鉾先が凄愴の氣を添えてゐた。前面若しくは側面には、紅白の長旒が垂れてゐた、或るものは『我等の歴史は血と涙、呪へ…………』と書かれ、或るものは『退いて死せんよりは……………………………………而して自由への門出である』と讀まれた。それらは場内に殺伐な色彩を與へ人々を緊張せしめるのであつた。開會を宣する頃には、流石に廣いあの公會堂も殆んど空席を餘さなかつた。來集した人々の服裝は雜然たるものだ。洋服があり和服がありルバーシカがあり在鄕軍人の服裝があり消防隊の半纏があるといふ風だ。けれど秩序はまことに整然たるものであつた。

午後二時、栗須七郎君の熱辯を以つて開會の辭が述べられ、南梅吉君を議長、寺田、島田兩君を副議長に押し駒井喜作君を進行係として議事に移つた。各府縣からの提出議案が六十餘もあつて、何れも眞面目に考慮されたので、夜の十時頃やう〳〵議了することができた、今、可決になつた議案の重なるものを見るに左の通りである。

一、人間は尊敬すべきことを小學校に徹底さすの件。
一、軍隊内差別に就て陸海軍大臣に反省を促すの件。
一、一般民間に於て穢多等の言辭を弄したる場合の態度に關するの件。
一、部落改善費を拒絶し徹底的改善策を建議するの件。
一、生産組合及び消費組合を設立する件。
一、本願寺より獨立して自由教壇とする件。
一、募財拒絶の徹底を期する件。
一、黑衣同盟に關する件。
一、水平圖書館、巡回圖書館設立の件。
一、青年團及び在鄕軍人會改造の件。
一、農村にありては農民組合を設立するの件。
一、全國婦人水平社設立の件。
一、全國少年少女水平社設立の件。
一、青少年鬪士養成の件。
一、水平印刷所設置の件。
一、『水平週報』發行の件。
一、水平運動の國際化に關するの件。
一、水平紀念日を三月三日とするの件。
一、和歌山縣に於ける搾取に對し德川家一門に反省を促すの件。

第二日は春雨が陰鬱として降りしきつてゐた。大會のことゝて前日よりも多く、社員が犇々と場内に溢れるばかりに詰め込まれてゐた。私にはちよつと數の見當が附かなかつたが新聞に依ると、無慮三萬だと報ぜられるほどの盛況であつた。此日の開會は午前十時であつた。尤も之より先き、京都驛前の各旅館に分宿した社員は何れも假本部京都館前に勢揃ひして、消防服を着た先頭の喇叭隊の吹奏に歩調を揃へ例の荊冠旗を飜へし水平歌を高唱し乍ら長蛇の示威行列をなし、東西兩本願寺に至り、その本堂を占領して、栗須、阪本君等の辯士は偶像の破壞、本當の親鸞に歸れを絶叫し募財拒絶斷行の決議文を朗讀し、水平社萬歳を三唱して引揚げ、そこから會場

雨の中を[illegible]繰り込んで來たのであつた。

[illegible]井君によつて代議員協議會の經過を報告するや、滿場は拍手して之に承認を與へ、次いで阪本君は過去一個年に於ける運動の經過を述べ、次に泉野、鈴木君等によりて綱領及び宣言が朗讀された、續いて各勞働團隊其他からの祝辭や祝電が朗讀され、協議會で委員附託として作製された陸海軍大臣への抗議書も承認された。その全文は、

抗議書

曾て穢多の稱は廢せられたるにも拘はらず、陸海軍隊内に於て我等特殊部落民に對する虐殺的差別は今も存在してゐる、其結果は我等同胞の胸裡に悲しむべき暗影を投げさせてゐる、之れ陸海軍當局の取締りの宜しきを得ざるに依るものと認め、我が水平社は此差別的待遇に對して極力抗議し、軍隊に訓示を與へられんことを要求す。

それから各地水平社代表の五分間演説があつて後自由演壇となり栗須、西光君等の火を吐くやうな強い感激に充ちた演説があつて四時頃閉會することが出來た。各代表演説は何れも永い間の迫害と屈辱とを體驗した人々の聲であるから、悲壯な憤怒に燃えた口吻は、聽くものをして襟を正させ、若くは熱狂せしめるところがあつた。中にも異彩であつたのは、少年代表山田孝野次郎君と少女代表嵜川久江の二人であつた。山田君は十五歳の眞の乳臭兒だが、その云ふところは大人をも後へに瞠若たらしめるものがあつた。私は少年プロレットカルトの實績を、山田君に於て如實に見せられて興味あることに思つた。

三

かくして水平社第二回全國大會は濟んだ。私は彼等水平社の同人又たは組織者たちの胸中を察して、彼等と共に喜悅の涙にくれたものである。彼等の運動があれほど強大なものとなり、それが恰も燎原の火の勢ひで全國に蔓延したといふことに就ては、勿論、社會的に然るべき條件が具備してゐたのだと云へる。そして機運が熟して來れば、組織者となり點火者となり得る人物を自然産出するものであるといふことも知つてゐる。が、それは彼等組織者たちの功績を沒却する理由には決してならない。私は彼等少數の先覺者等の嘗めた辛酸努力を思ふて、敬虔の念を懷くものである。

大會に於ける彼等の態度——辯舌——論旨——それは實に立派なものだ。何時、何處でからした訓練が出來上つたらうと、私は怪しまずには居れなかつた。私は未だソヴイエット大會といふものを見たことがないけれど、彼等の大會は、私をしてソヴイエット大會を彷彿たらしめるのであつた。そして最早、日本でもプロレタリアの能率は、ブルジョア議會以上のものがあることを思はしめた。そこでの雰圍氣は、とてもかの醜穢し切つた兩院のそれとは、比較の出來るものでなかつた。私は斷言する、水平社は日本に於ける根本改造にとつて確かに最大なる要素の一つであると。

今こゝで、この運動の本質を檢討するため各水平社から要求して來て附議可決になつた事項を顧みるに、大體から云つて、四つの立場があるようだ。卽ち、民族、經濟、政治、及び教化がそれである。

そして中にも、彼等の血潮を沸かせ彼等を勇躍せしめ、しかも彼等の運動の基調となつてゐるものは民族的の問題である。私はそれに對して承認を與へることが出來る。しろ何彼等がいはれもなく傳統的に賤視の府を冠せられ侮辱され迫害されて來たのであり、そして一般民とは血族的にも沒交渉のまゝで何代かを經て來たのだから、彼等特有の心理が發達し、彼等としての民族意識が發達するのは必然である。それであるから彼等の中の指

導者がそを强調して彼等同族の奮起と結束とに利用せんとするは、至極當然のことゝ思ふ又た各水平社の要求が、眞先きに小學校なり軍隊若くは社會に於ける彼等に對する差別觀念の撤廢に、期せずして一致することにも理があることゝ思ふ。『如何にすれば俺達に對する差別を撤廢し得るか』といふことは、彼等各人に通ずる最も切實な基本的問題であるといふことを無視することはできないことであるからだ。

このような差別觀念が嚴存せる結果、彼等は職業に對する自由に乏しく、且つ近代の資本主義的生産組織は、彼等を驅つて無産者の群に投ぜしめ、近代の無産階級的意識を與へつゝあるといふことも事實である。その證としては他の無産階級の組織と協同の戰線に立たうといふ傾向を指摘することが出來る。尙ほ英國に於ける協同組合運動の上に徵して、無産階級の救濟にとつて何程の効果があるかは疑問だが、兎に角、彼等の經濟運動として生産組合及び消費組合の設立が可決されたことは、注目に値ひすることである。

政治に對する彼等の要求の現はれとして、普通選擧と勞農露西亞の無條件承認等が提案されて、議論に花を咲かせたけれど、前者は否決、後者は保留となつた。普通選擧はどうでも、勞農露西亞の承認問題は聊か遺憾がないでもない。でも、彼等の無理解から來た保留ではなく、戰術上からの保留であつてみればそう悲觀したものでもない。彼等の政治に對する意見は、…………の上に立つてゐる。

最後に敎化問題だが、これに關する提案が相應多いのを見ても彼等が敎化問題を重視してゐることが分る。私はこれを最も重視することに賛成するものだ。そして水平社の同人諸君に一言したい。——諸君の重要任務は、こゝ暫くは敎化卽ち宣傳だ。諸君は諸君の同族をして、一般敎化若くは所謂高等敎育に對する要求を喚起させる必要は少しもない。たゞ彼等の社會的地位、その歷史的使命、一般プロレタリアートとの間に如何なる關係にあるかを徹底せしむれば十分だ。そして彼等の戰鬪心を養成することに腐心すればよいのだ。

協議會の可決になる水平圖書館、巡回圖書館、全國少年少女水平社、靑少年鬪士養成、水平印刷所、水平週報、水平運動の國際化——それらはすべてこの精神卽ち水平社としての獨自的且つ戰鬪的敎化の主旨に依つて指導さるべきものだと私は思ふ。この意味に於ける水平大學の設立は、大いに望ましいことであつた、西濱水平社の提案になる同案は、少しも官立大學と違はない意味の大學であつたけれども、あれを修正して、水平社意識乃至は無産階級意識に則する鬪士養成の大學として可決すべきであつた。けれども旣に靑少年鬪士養成を可決しあるからには、畢竟その方面に於ける用意も出來上つたものだと見ることが出來る。

過去に於ける迫害、侮辱、賤視を象徵するあの荊冠旗！　それは穢多とか特殊部落とかを知らずに育つた私の心をも痛くする。況して同じく人間でありながら穢多よと賤視の眼で彼等を呼びかけた者があつたら、乾度それを見て奮ひ上らしめられたであらう。

水平運動は決して彼等のみの解放運動に止つてはいけない。彼等の解放運動であると同時に、全無産階級を解放するの運動でなければならない。幸ひ彼等はその方角を指して突進しつゝあるのを私は見た。私は彼等の前途を祝福しながら筆を擱かう。（一一・三・一〇）

水平運動の一ヶ年

阪本清一郎

自ら土足にかけて蹴飛ばし、泥中に苦悶する狀態を面白く彼岸の上に眺めながら、一粒の淸良劑を投け與へて事足れりとする社會改良家の潜越な安價な同情心と恩惠的な改善事業と妥協的融和策を排して起つた水平運動の上に早や一ヶ年を經過した。血に滲むだ第二回大會を終へた今、顧て涙に濡れた創立大會の當時にまで及ぶ時、此間一ヶ年の吾等の運動は實に史的必然の力に煽られた吾等の人間的跳躍の姿であり、燃えあがる相であつた。しかもそれは嘗てあつた野心大名の手先に使はれたり近くは米騷動の如き單なる悲觀的な一揆的なものではなく、もつと根强い宗教的信念と感情によつてたされたものである。實に吾等の運動は始めからやかましい理窟は拔きであつた、難しい論議は無用であつた、それは吾々に、何故君等のAとBが分裂しないかときいた勞働團體の彼自身の屬する近代無產階級の發生以前から在つた、吾等の階級にはそれは等しく奴隷制度の所產であつてもそこに自ら彼等にないものがなければならぬ、そしてそれは理窟を通り越してそれよりもつと强力な深刻な感情の結合であり結合の本能であつた。

けれども吾等の中にもこうした信心を持ち得ない人々が何すくなくない、彼等はその僅に持てる金のためにそれを阻まれて苦しい內面的生活を金に依つて抹消し去ろうとして居るのである。實にこの金を唯一の生命の糧とせねばならぬ程に人間を瀆された吾等のシヤイロツク達は恰度フランス革命に死を賭して迄に恐る可き封建制度を擁護したブアンデーの飢民の樣な悲しい役割で水平運動のまへにたたねばならなかつた。シヤロイツクよ、吾等は何うしておまへの冷たい心の奧底に滲む熱い涙を見逃し得よう——吾等の役割もまたベニスの裁判官に當つていない、けれども吾等の台詞には、ユダヤ人の解放は先づ彼等を金そのものから解放することだ、と書いてある。

水平運動の一ヶ年を通じての非難嘲笑は所謂吾等の野蠻なる暴行と出來損ないの民族運動に對してゞある。これは諦めと因緣との慮の中にとぢこもつた無自覺な兄弟人間を踏みつけ馴れてきた冷たい一般民、形式の上に住居する官憲、勝手な枠内に納まつて口道樂な主義者、佛の假面をかぶつて人間を墮落させる宗教家、奇蹟賣りの改善家、道樂にする打間牒等の群である、しかも遂に吾等のとつた鬪爭の形態は恰も叢昧人の社會に於ける最初の挨拶であり交涉に等しかつた、吾等はこの一ヶ年間に於いて彼等が偶々非難嘲笑の度を高めながらも次第に吾等に近づきつゝある事實を見た、然しながらこれは彼等が近づきつゝあるよりも寧ろ奴隷と主人の間に於ける平和は實に屈辱と屈從の假面でゝある事を知つた吾等の進步の結果であらう。けれどもこの進步は自ら卑下の感情より解脫すると云ふ事の單なる槪念遊戯ではない。今も尙ほ一ヶ年に二百人以上の吾等の兄弟を自殺せしめる忌はしい毒々しい賤視觀念がその醜惡凄慘な呪咀の形相をこの地上に現出せる限り、この呪咀を解きこの暗影を消散せしむべく吾等は熱い血と涙をこの穢れたる大地に濺がねばならなかつた。

實にこの一年間に吾等によつて解決された侮辱事件の數は數百に近い、そしてその中の四十餘件は小學校内に於ける差別事件であつてこの無邪氣な神の樣な兒童の胸裡に恐ろしい賤視觀念と呪咀を植へ付けている事である、これ等は所謂水平社の糺彈事件となつたものであつて尙他に軍隊内に於いても又個人としてその場限りで解決した侮辱の事實は無數にあつたことを無視してはならぬ。此間に收監された兄弟も十七八人はあつた、吾等は勿論こうした犧牲者を出す事を悲しむけれ共それを辭するものではない、それは今尙世人の賤視觀念が餘りにひど過る故に斯した僞な兄弟が各々水平運動のために重大な使命を果し得たからである。野蠻なる吾等に依てなされる所謂聖代の不祥事を責める紳士、淑女、及び良民方はこの事實を確然と見るがよい、そして尙吾等に對する反動運動を試みんとする者は試みよ、勝敗は知らぬ、けれども吾等は闘ふ事を辭せぬ。しかもそれを試みた者が、この一年間に幾度かあつた、彼等は飽くまでも吾等を踏みつけて置きながらそれだけにまた吾等に謝罪する事を拒む、エタ風情に頭を下げて堪るものが、そうだ下げさせて堪るものか――そうして狼共は鐵砲を把り刀槍をひつ提げてロシヤのポグロムを豫想する。こんな事なら明治四年にエタ共を皆殺しにして置けばよかつた、と蛇より冷たい人間共が吾等を呪ふ、こんな事ならいかにもおまへは斯るために誘いたのではなかつたか。

反動運動中の道化役に改善家と稱する賣名事業家がいる、彼等が從來餘り下らない不眞面目な事業をやつて來たからだ、そこで彼等は穴居生活に等しい特殊部落には一向振り向きもせぬ、改善されたる部落の餘り使用せない尨大な寺院の傍へ餘り必要でもない青年會場を建築する事によつて更に改善の實を示した、そしてそれが水平運動を必要とせない唯一の理由であり無二の證據でありそれを阻止せんとする屈強な防寨である、彼等はこれによつて機を窺つては吾等に逆襲を企てる。こうした防寨が共同浴場、道路、下水道、ポンプ或は賞與金壹百圓也であつたりする、そして一方には依然たる賤視觀念と昔ながらに改らぬ部落とが厳然と存在して居つても彼等に關係ない、如何に關係ないか、吾等の兄弟はこの一年間にそれをハツキリと見て取つた、そこで第二回大會に政府に對して改善策の根本的改革を促す事の決議となつた。

この他に反動的世話役は官憲であつた、それは耳をふさいで鈴を盗まむとする、事なかれ主義と部落民の思想惡化の取締からである。かつてこの團結が何うもいかん、社會主義の團體であるから加入することならぬと云つた警官もあつた、それが一體何らいかんのであるが吾等は今尙知らずにいる。察するところ從來吾等の兄弟は何らも警察官を恐れていた、從つて部落民が團結すればやゝもすれば畏怖す可き官僚の光榮を瀆す恐れがあるからではなからうか。そしてそれはお上を恐れぬ振舞となり、やがて米騷動の二の舞を演じはせぬかの懸念であらうか、吾等にはもはやその懸念は無用であると共に、官憲を畏怖せなくなつたのも事實である

東西本願寺對水平社問題も亦此一年間の記錄にもれてはならぬものである、去年三月四日吾等の數名が東西本願寺を訪問した當時にあつては今さら若い者が偶像本願寺を對手にするかと態々抗議せられた人々もすくなくなかつた、けれども五月に入つて募財拒絶の通告を發するに及んで水平社對本願寺の問題は始めて社會の輿論を喚起した、ことに吾等の中に於ける贊否兩論は豫期に違はぬはげしさであつた。多くの僧侶と親父達は吾等を提婆外道と誇つて敵視したそして吾等の寺[illegible]

を頑として拒むだ、到るところの家には意見を異にする親父と伜と、祖母と孫との小さな抗爭がつゞいた、けれども十月に入つてつひに自覺せる僧侶の黒衣同盟が奈良縣大島の水平社から住職平岡氏によつて生み出だされた。そしてこれに加盟する僧侶連が京都、大阪、和歌山等の各地から相呼應して起つた。

かくてつひに舊い信仰を突き崩されたあわれな人々の耳に去る三月三日の朝の東西本願寺の光景が傳へられた、ものしづかな晨朝禮讃と香煙をたゞよはせる六條の別天地に突如朝霧を破つて喊聲があげられた、黒地に赤の荊冠旗をかゝげた三千の群衆が潮の如く山門から押崩れ込むだ、御影堂のまへの阿彌陀堂のまへに數十の荊冠旗が黒炎を上げ水平歌は渦卷いて鳴りひびいた。

嘗て鎌倉時代に天台眞言の僧侶連によつて名づけられたエタの子等が七百餘年の今、彌陀と親鸞の影象のまへにときの聲をあげて募財拒絶の斷行と黒衣同盟の徹底を期する決議をした。

こうした諸種の反動の中に吾等の運動は美事に擴大されて第二回委員會には殆んど全國各地方の部落の代表者を網羅することを得た、この委員會の日ロシヤと朝鮮問題を保留した時に吾等は傍聽者席から臆病者と詐され卑怯者と嘲られた、勿論委員の中にはこれを以てエタと誇られる以上にまで恥辱としたものも多くあつた、けれども彼等は眞にエタの名を誇る兄弟であるが故にそれを忍ばねばならぬ、そして默つた、吾等は主義者であるよりもエタの子であるが故に斯するのだ、一般民にはこれがわからぬ人が多からう、そして吾等の多くにはこれがわかるであらう。

かくて涙に溢れた第一回大會から血に滲んだ第二回大會まで、水平運動の上には、あわたゞしい一ケ年が經過した。（一九二三、三、〇）

プロレットカルトの問題

社會革命とプロレットカルト

佐野學

資本主義社會の直後に表はるべき社會革命に於て、無產階級はあらゆる方面に勝利すべきである。社會革命は無產階級がブルジョア階級より政治的權力を收奪することに始まり、次いで相應に長い年代を費して經濟組織の完全なる改革を終る事に依つて完了するのであるが、無產階級はその過程に於て階級的支配といふことを根本手段として行動せねばならぬ。社會革命の究極目的は人類社會に窮乏と隷屬とを產み出す一切の階級的支配を廢絶する事に存してゐるが、しかも此究極目的を實現する手段としては、今日のブルジョア階級の階級的支配とは正しく逆なる無產階級の階級的支配を必要とするのである。この意味の階級的支配の重要なる一項目として無產階級の知的支配といふ事を數へることが出來る。換言すれば社會革命の最後の仕上げのために、無產階級の知的勝利が缺くべからざる條件である。

プロレットカルト即ち無產階級の教化は、この社會革命の最後の仕上げを準備するものだと言つてもよい。精神的富なる知識は物質的富と同じく人類の共有財產たるべき筈のものであるが、資本主義社會の下に在りては階級的に獨占せられて居り、また知識自體が階級的特質を帶びてゐる。社會現象を取扱ふ多くの社會科學にはブルジョア階級の要具たるものが少くない。科學、思想、藝術等の領域に於て知識的の仕事を專門的に取扱ふ所謂知識階級の中にはブルジョア階級の代辯者たるものが少くない。若くは知識階級といふ特定の社會群の意欲を代表する知識が少くない。無產階級は斯くの如き階級的知識の一切に

遂げねばならぬ。資本主義社會の下に於ける無產階級は、その物質的發達の限度が制限せられてゐるが如く、知的勝利に必要なる社會的條件の限度をも制限せられて居るのである。無產階級はかくの如き諸々の障害を突破し、あらゆる機會と條件とを利用してプロレットカルトの發達に努力すべきである。

プロレットカルトが資本主義の下に於けるものと、社會革命の過程中に於けるものとに分れたるのは言を俟たぬ。後者に於る事業は今日の勞農露西亞の學藝が好個の模型である。資本主義社會に於けるプロレットカルトは如何なる方法と目的とを有するであらうか。英國のラスキン大學や勞働者教育協會の如きは眞の意味のプロレットカルトの機關であると言ひ得ないと思ふ。是に反して革命的原理の討究を職分とする米國のランド・スクールの如きは明かに資本主義社會の下に於けるプロレットカルトの代表的なものである。プロレットカルトなる概念が意識的に鮮明となつたのは戰後であるが、英國の中央勞働大學を始め、諸國に此種の機關が設立され、共聯合委員會の如き制度の急激に發達しつゝあるのは、無產階級の知的勝利が社會革命に缺くべからざる條件であることを語るものと言はねばならぬ。而して資本主義下のプロレットカルトの主要任務はマルクス主義の透徹であると思ふ。マルクス主義の經濟理論、社會理論、歷史理論は無產階級の知的支配の根本條件である。勞農露西亞の最高の大學がマルクス大學であるとは、勞働大衆の學問の中心として如何にマルクス主義が無比であるかを示すものであらう。

プロレットカルトの發達について知識階級は何程の機能を發揮し得るであらうか。プロレットカルトを志す知識階級は常に非常なる反省と謙讓の心とを以て進まねばならぬ。凡そ知識は行動と體驗とより生れたる知識、若くは行動と體驗とに依りて保障せられた知識が尊いのである。頭腦のみにより製造せられた知識は一の影であり、空虛な觀念である。プロレットカルトの要求する知識は、無產階級の現實的生活——その貧困、隷屬、窮乏、階級意識、革命精神等——より生れたる知識であつて、頭腦のみによりて製作せられた知識を現實的生活の中に編纂することは決してプロレットカルトの目的ではない。この意味に於て、無產階級的社會革命に獻身し且つ自己の生活を出來得る限り無產階級化する處の知識階級のみが、プロレットカルトに關與し得る資格が有る。昔から知識階級にコビリついてゐる知的支配若くは知的誇示の嗤ふべき空想と決定的に別離し得てゐない人々には此資格がない。とにかく社會革命に於ける自己の地位を認識し、不斷の努力を以て自己の階級的の本能を抑壓し、且つ社會革命の完成に獻身しようとする知識階級のみ

が、プロレツトカルトに關與することが出來ると共に、無産階級の知的訓練の社會的條件の制限せられてゐる資本主義社會に於ては、この種の知識階級の任務は甚だ大きいのである。

資本主義社會に於けるプロレツトカルトは積極的に一般的教育のプロレタリア化をも意識的目的とすべきである。昨年、勞働總同盟が小學校教科書より資本主義的要素を除去すべきことを決議したのは、その一表徴である。このことは他方に於て教師のプロレタリア化といふ問題をも提出するものである。昨年、モスカウから「あらゆる國の教師及び教育勞働者に訴ふ」といふ一文が發表せられた。それはロシア、ドイツ、フランス、匈牙利、墺太利、イタリー、英國、オランダ、ブルガリア、ポーランド、濠洲、スペイン、メキシコ、アルゼンチン等を代表する百七十名の署名したもので、その機關は赤色勞働組合インターナショナルの一部に屬し、世界の革命的教師のインターナショナルの形成を企てたものである。その末尾は「プロレタリアの文化の先驅者たる革命的教育勞働者萬歳」の一語を以て結んであつたと記憶する。とにかく教師のプロレタリア化はプロレトカルトの必要は一條件を成すであらう。

プロレットカルトの當面の意義

青野季吉

プロレタリヤの藝術運動は、民衆の創造性を極度に窒息させてゐる既成藝術の拒否、破壞、それによる民衆の創造性の解放の運動であるが、ここの運動は更にこれを包括するプロレツトカルトの運動のなかにあつて始めて有機的な働きをなすことが出來る。プロレツトカルトの運動は、今日の支配階級の組織的なカルトに對して、無産階級の組織的なカルトをもつて對抗してゆくもので、支配階級の組織的なカルトが、無産者大衆の鬪爭的精神、それに發露する創造性の厭殺を目的としてゐるのに對して、無産階級の組織的なカルトは、無産者大衆の鬪爭的精神の喚起、創造性の取戻し、解放を目的とするものである。こ

意味において、プロレタリヤの藝術運動は、廣汎な、組織的なプロットカルト中の一部門であり、それであつて始めてその社會的使命を十分に果すことが出來るのである。プロレタリヤの藝術運動が、その一歩を踏出したあとへ、踵を接してプロレットカルトの運動が、一個の實際運動として現はれやうとしてゐることは、極めて當然であると共に極めて力強い闘爭的精神の現はれと云はなくてはならぬ。

プロレットカルトの理論的方面は、もはや問題ではない。これをわが國の現在において、實際化する上の方策については、これから多くの論議があるであらうし、既にその二三が提示されてゐるやうである。プロレットカルトとは言つても今日の場合ではインテレクチエアルスがやるのであるから、何程のことが出來るかは疑問だとする悲觀說も出てゐるやうである。これは藝術運動の方での悲觀說すなはち、プロレタリヤ文藝とは言つても、結局インテレクチアルスの產物ではないかとの說を對應するものである。この觀測に一理あるとは認める。しかしそれが單なる悲觀に終り、現狀維持主義に墮するところに、僕たちの許せぬブルジョア懷疑精神の殘滓があるのである。あれも駄目これも下らぬ主義のブルジョア的退屈が、そのなかに有力な要素となつてゐるのである。僕だちも、主として、インテレクチアルスが働かねばならぬところに、悲觀も持ち危險も豫想するが、それだからと言つて、一刻も現狀の維持を許すことは出來ぬ。積極的な打破に向つて進まねばならぬ。悲觀的要素や危險な條件は、行動そのもののうちにあつて、常に切捨て常にそれと戰ふ可きものである。プロレタリヤの藝術運動にたいしても、そういふ悲觀的要素だけを誇張して賢者ぶつてゐる人も見受けるが、そう言ふ人だちは頹廢せるユトピスト以外の何物でもないのである。

本統のプロレタリヤの藝術はプロレタリヤの世でなければ生れないとか、本統のプロレットカルトはプロレタリヤ××の下でなければ行はれぬとか云ふ議論をして、ひとかどの智者をもつて任ずる者も多い。この智者に、それなら現在、僕だちは何を爲さねばならぬか、僕たちはプロレタリヤの世が、天の奏樂と共にこの世に明け渡り、プレロタリヤ××が後から門を叩いてくれるまで、じつと寢ころんでゐればいゝのかと問ふと、この智者は忽ちにして啞のごとく答へないのである。僕だちはこの智者だちのやうな單眼の持ち合せはない。社會の變革期に對しては、支配階級の「世」と被支配階級の「世」とが交錯し、支配階級の「文化」と被支配階級の「文化」とか交錯し、二つの世界が抗爭する事實しか僕だちは知らぬのである。この事實が僕だ

ちに教へ、僕だちに命令する「局面の任務」より殊に、他の任務を知らぬのである。

プロレツトカルトの運動においてもさうである。これに伴ふ「危險」は十分に見極めておく必要がある。しかし支配階級がその組織的な宣傳機關によつて、民衆に正しい「歷史」を示さず、「法」の正しい基礎を隱し、生產關係に基く社會的構成を神秘の奧に密閉して、民衆の創造性を壓殺しやうと努力してゐる間に、僕だちがその所謂階級侵蝕作用を放つたらかしておいていゝわけはないのである。支配階級の組織的でカルトをもつて、それをやるのに對して、被支配階級の組織的なカルトをもつてそれに對抗せばならぬのである。勿論、まだ被支配階級である。目醒めたる前衛の數も少ない。したがつて後者の「組織は」前者のそれに比して、不備不完全少規模たることは免かれない。しかしそれは決してその意義を左右する條件ではない。僕たちは民衆の心が、無自覺的に準備してゐるものを信じていゝのである。歷史的必然の生むゆはゆる環境の隆起が個々の精神に備へしめるものを信じていゝのである。不備不完成な「組織」が爲し得る大いなる仕事を信じていゝのである。

ブルジョアカルトの全體系をなすものは、教育と文藝と宗教とである。本來、眞乎の教育がどんなものか、文藝、宗教が何であるかは問ふ所でない。ブルジョアの支配の下において、その支配の確立に役立つてゐる現在において、その全體系に向つて戰線をひろげることは、支配の支持をくつがへす所以であると共に、新らしいカルトの確立の勝利の第一歩であらねばたらぬ。プロレタリヤの藝術運動は文藝の分野において、その使命を果たさうとしてゐる。プロレツトカルトは廣い意味の文藝をも含めた教育、宗教の全野に向つてその使命を果さねばならぬ。元來プロレツトカルトは無產者の科學教育を重大視するが、その主要なる意義はこゝに說かぬ。たゞこゝでは迷信的意識を破壞して、常に新意識を確立するものは、科學的知的意識であることを指摘し、それがプロレツトカルトの使命に分け持つ點を强調しておくにとゞめる。

いまわが國に於て、プロレツトカルトの運動は漸くその困難な第一歩を踏まふとしてゐる。それはプロレタリヤ藝術運動の初一歩の困難などに比べて、比較にならぬ困難な初一歩であるこの場合、僕だちは余り語り過ることを喜ばない。(終)

魂の共産

賀川豊彦

知慧も私有を許してはならぬ。知慧は魂の財産である。それは祖先の遺産である、それは社會の公有である。物的財が共産でなければならぬとすれば、魂の財産は猶共産であらねばならぬ筈である。

『爾曹價なくして受けたれば、價なくして之を與ふ可し』と大エイエスはその弟子に教えた。藝術も科學も宗教もそれは私有を許され無い。そう云つた心懸けは昔から宗教家の間にも相當發達してゐた筈である。然るに近世の學問が資本主義的に研發せられると共に學問は資本家の肉になつて了つた。然し、矢張り學問は私有を許され無い。それは共産であらねばならぬ。それは專賣特許たるを許す可きで無い。そう云つた意味に於て私は今日の大學に反對し、今日の中、小學校の制度に反對する。學問はその本質に於て共産であらねばならぬものだ。プロレツトカルトは別に新しき主張では無い、知慧の共産を主張するに止るのだ。

然し、世は昔の世界とは違ふ。今日既に世界はブルジョアーとプロレタリアに別れて居る。そして學問は今日ブルジョアーの獨占するところである。そこで、生産者階級はブルジョアーの學問獨占を破壞せねばならぬ。ウヰリアム、ゼームスによれば、認識も意志の執意的方向と動機によつて綜貫するものである。

今日の學問は金儲けの道具である。地質學も、天文學も、動物學も、植物學も、醫學も金儲けの爲めで無ければ研究せられ無いのが、ブルジョアー文化である。いや、それが所謂學問の自由から出發するものであるにしても、それは金持が寄附した基本金によつて飼はれて居る學問虫の仕組まれたる腦の分泌物であり得る。彼等は所謂學問の自由を得る爲めに永遠に金持に飼はれて居りたいかも知れぬ。そう云つた學問乞食から解放

せられるので無ければ、眞理の爲めの眞理に發生しない。況んや人間的眞理——卽ち規範科學と稱するものに至つては、これは全然金持ちの爲めに造られたる稱語で無ければ、强力擁護の爲めに作られたる御用學問であることが多い。プロレタリアの教養はかう云つた囚れたる學問から解放せられる必要がある。

　それはたゞ、勞働者に廣く教育を授くると云ふばかりでなしに、與へらる可き教育そのものの本質を變革せねばならぬ。

　然しプロレツトカルトは更に一段高く理想を掲く。これに、眞に學問を解放するのみならず人間性を金力の陋因より脫却せしめねばならない。この意味に於て、無産者教育は當面の問題として、資本主義的虛妄を破壞する士官學校であらねばならぬ。眞の學問は今日の無産者が眞に解放せられてその日から始まるものである。（越中滑川にて）

プロカルト雜見

室伏高信

　プロレツトカルトとはプロレタリヤ文化と解すべき者であらう。或る場合には教育といふ意味に用ゐられてゐるが、プロレツトカルトとはたゞ教育だけを云ふのではなく藝術製作の場合をも含めてゐるのであるからプロレタリヤ文化と解するのが至當であらう。プロレタリヤ文化とは何か。人によつて解釋に相異はあるようであるがブルジュア文化に對する言葉である事については何人も異論がない。今日の文化はブルヂョア文化であるからそれに對してプロレタリヤの文化をもつて代へなければならぬと云ふことである。從つてプロレタリヤ文化もまたブルヂョア文化のごとくに一つの階級文化であると云ふ事の結論に到達するわけである。ボオル夫妻の議論などがそれである。しかし階級文化と云ふ事が成立するであらうか。われ／＼はブルヂョア文化とかブルヂョア藝術とかいふことも常に口にするのであるがこうした階級が存在する場合にほんとうの文化が存在しえられるか。階級とは社會經濟階級である。階級の存在は經濟關係の支配的なる社會であるとを意味する。從つてそのよう

な經濟社會は文化的社會ではありえない。かゝる文化は全然不純なものでそれ自身の獨自性がなく經濟關係に附隨するものである。そこでこの種の社會では文化と名づけられる者があつても本質的な文化と見ることはできまい。プロレタリヤ文化にしてもそれが階級文化である間は矢張手段以上の者ではありえない。從つてほんとうの意味の文化であると云ふことはできない今日プロレトカルトと云はれてゐるのはロシヤ・ボルシエヰキの間から生れてきたものである。從つてプロレトカルトとは云つてもそれはマアクス主義の範圍を出る事はできない。主としてはマアクス主義――唯物史觀、マアクスの經濟學、若しくは國家論などを教育することであつてそれがロシヤでは國家の手によつて行はれる。從つて共產黨の手によつて行はれるのであるからマルクス主義と云つても要するにボルシエヴヰギ派のマアクス主義を教育すると云ふことであるように思はれる。この事にスヴエルトロウ大學やチノヴエフ大學で實行してゐることなどで見ても明白なところである。(Na ski, Komm uni ti che Swerdlow-Universtät in M sk u; Ram tsch, Fie : in wjew-Universtät für Arbeiter und Bauern in Petrograd) しかしマアクス主義若しくはマアクス主義についての一部の解釋を唯一の眞理として教へることは一つの獨斷であることを免れない。それは教育であるよりは宣傳であると云ふべきである。私はプロレツトカルトなるものはこのような偏狹な文化であつてはならないと思ふ。勿論階級鬪爭から私は免れることはできない。私たちは世界革命期においては階級鬪爭が一時的には何よりも根本的なものとなりうることも認めるものであるがしかしこゝにプロタリヤ文化が存在するとは思はれない。プロレタリヤ文化は既成のものではない。未成のものである。既成の如何なる學說を宣傳することでもなくて今後に培養さるべきものである。特にマアクス主義は一つの經濟學の體系をもつてはゐるにしてもそれ以上の何ものがあるか。それが一つの世界觀として多くのプロレタリヤによつて受入れられうるものであるか、と云ふことを考へると、プロレツトカルトにとつて必要なことはそれを一政黨例へば共產黨から、若しくは一派の學說、例へばマルクス主義と區別することが必要であると思はれる。文化は一階級に屬してはならぬ。特に一黨一派に獨占さるべきものではない。政治上の獨裁はあつても文化の獨裁はあつてはならぬ。プロレツトカルトが來るべき文化でありうるとすれば私はそれは少くとも無階級文化でなければなるまいと思ふ。つまりプロレタリヤや階級も廢止され從つてプロレタリヤ文化と云ふ名前さへも自家撞着に陷るよりの場合に成立するものでなけ

ればなるまいと思ふ。プロレットカルトと云ふ言葉はルナチャルスキイ等一派のロシヤ・ボルシエヴヰキの造語である。ロシヤの文部省のうちなる獨立プロレタリヤ文化教育部からこの名前が出てきたものと思はれる。ルナチャルスキイとケルシエンチウの二人はこの問題についての權威者であらう。ルナチャルスキイもケルシエンチウもこの問題については幾度か意見を發表してゐるがその最も根本的なるものはルナチャルスキイの二つの論文（Proletkult u die Kulturelle Sowjetarbeit; Die Aufgaben der sozialistischen Kultur）とケルシエンチウの二論文（Die internationale Revolution u. die proletarische kultur; Die Arbeitsmethoden der Proletkults）などであらうと思はれる。ルナチャルスキイによるとプロレットカルトとは一つの階級文化ではない。社會主義の目的は階級の廢止にある。從つてプロレタリヤ階級の廢止がなくては社會主義は存在しない。また從つて社會主義文化またはプロレタリヤ文化と無階級文化と云ふことにならなくてはならないわけである。といふてゐるのである。私はプロレットカルトはこの境地に行かねばなるまいと思ふ。それは或は遠い先きの事かも知れない。しかし如何に遠い先きの事であつてもいゝと思ふ。今日は階級闘爭の時代であるとしても文化は階級闘爭の手段にされてはならない。ブルジョア文化といはれてゐるものは確に階級闘爭の具に供せられてゐるが、こゝにブルジョア文化の間違つた點を見るべきである。プロレタリヤのための階級闘爭は文化を具に供しなくても可能である。文化は本質なものである。階級闘爭は手段である。手段のために目的を犧牲にすべきでない。目的のために手段と用いべきである。文化回復の點に階級闘爭を用ゐべきである。

みなかみ紀行

若山牧水

十月十四日午前六時沼津發、東京通過、其處よりM―、K―の兩青年を伴ひ、夜八時信州北佐久郡御代田驛に汽車を降りた。同郡々役所々在地岩村田町に在る佐久新聞社主催短歌會に出席せむためである。驛にはS―、O―、兩君が新聞社の人と自働車で出迎へてゐた。大勢それに乘つて岩村田町に向ふ。高原の闇を吹く風がひし／＼と顏に當る。佐久ホテルへ投宿。

翌朝、まだ日も出ないうちからM―君たちは起きて騷いでゐる。永年あこがれてゐた山の國信州へ來たといふので、寢てゐられないらしい。M―は東海道の海岸、K―は畿内平原の生れである。

『あれが淺間、こちらが蓼科、その向ふが八ヶ岳、此處からは見えないがこの方角に千曲川が流れてゐるのです』

と土地生れのS―、O―の兩人があれこれと教へて居る。兩人とも我等が歌の結社創作社々中の人たちである。今朝もかなりに寒く、近くで頻りに野羊の鳴くのが聞えてゐた。

私の起きた時には急に霧がおりて來たが、やがて晴れて、見ごとな日和になつた。遠くの山、ツイ其處に見ゆる落葉松の森、障子をあけて見てゐるといかにも高原の此處に來てゐる氣持になる。私にとつて岩村田は七八年振りの地であつた。

お茶の時に野羊の乳を持つて來た。

『あれのだネ』

と、皆がその鳴聲に耳を澄ます。

會の始るまで、と皆の散歩に出たあと、私は近くの床屋で髮を刈つた。今日は日曜、土地の小學校の運動會があり、また三

杉磯一行の相撲があるとかで、その店もこんでゐた。床屋の內儀は來る客をみな部屋に招じて炬燵に入れ、茶をすゝめて居た。

歌會は新聞社の二階で開かれた。新築の明るい部屋で、麗らかに日がさし入り、階下に響く印刷機械の音も醉つて居る樣な靜かな晝であつた。會者三十名ほど、中には松本市の遠くから來てゐる人もあつた。同じく創作社のN―君も埴科郡から出て來てゐる。夕方閉會、續いて近所の料理屋で懇親會、それが果てゝもなほ別れかねて私の宿屋まで十人ほどの人がついて來た。そして泊るともなく泊ることになり、みんなが眠つたのは間もなく東の白む頃であつた。

翌朝は早く松原湖へゆく筈であつたが餘りに大勢なので中止し、輕便鐵道で小諸町へ向ふ事になつた。同行なほ七八人、小諸町では驛を出ると直ぐ島崎さんの「小諸なる古城のほとり」の長詩で名高い懷古園に入つた。そしてその壞れかけた古石垣の上に立つて望んだ淺間の大きな裾野の眺めは流石に私の胸をときめかせた。過去十四五年の間に私は二三度も此處に來てこの大きな眺めに親しんだものである。ことにそれはいつも秋の暮れがたの、昨今の季節に於てゞあつた。急に千曲川の流が見度くなり、園のはづれの嶮しい松林の松の根を傳ひながら二三人して降りて行つた。林の中には松に混つた栗や胡桃が實を落してゐた。胡桃を初めて見るといふK―君は喜んで濕つた落葉を掻き廻してその實を拾つた。まだ落ちて間もない青いものばかりであつた。久しぶりの千曲川はその林のはづれの崖の眞下に相も變らず青く湛へて流れてゐた、川上にも川下にも眞白な瀨を立てながら。

昨日から一緒になつてゐるこの土地のM―君はこの懷古園の中に自分の家を新築してゐた。そして招かれて其處でお茶代りの酒を馳走になつた。杯を持ちながらの話のなかに、私が一度二度とこの小諸に來る樣になつてから知り合ひになつた友達四人のうち、殘つてゐるのはこのM―君一人で、あとの三人はみなもう故人になつてゐるといふ事が語り出されて今更らにお互ひ顏が見合はされた。ことにそのなかの井部李花君に就いて私は斯ういふ話をした。私がこちらに來る四五日前、一晩東海道國

府津の驛前の宿屋に泊つた。宿屋の名は蔦屋と云つた。聞いた樣な名だと、幾度か考へて考へ出したのは、數年前その蔦屋に來てゐて井部君は死んだのであつたのだ。それこれの話の末、我等はその故人の生家が土地の料理屋であるのを幸ひ、其處に行つて晝飯を喰べやうといふことになつた。

思ひ出深いその家を出たのはもう夕方であつた。驛で土地のM―君と松本市から來てゐたT―君とに別れ、あとの五人は更らに私の汽車に乘つてしまつた。そして沓掛驛下車、二十町ほど歩いて星野溫泉へ行つて泊ることになつた。

この六人になるとみな舊知の仲なので、その夜の酒は非常に賑やかな、而かもしみじみしたものであつた。鯉の鹽燒だの、しめじの汁だの、とろゝ汁だの、何の罐詰だのと、勝手なことを云ひながら夜遲くまで飲み更かした。丁度部屋も離れの一室になつてゐた。折々水を飲たむために眼をさまして見ると、頭をつき合はす樣にして寢てゐるめいめいの姿が、醉つた心に淚の滲むほど親しいものに眺められた。

それでも朝はみな早かつた。一浴後、飯の出る迄とて庭さきから續いた岡へ登つて行つた。岡の上の落葉松林の陰には友人Y―君の畫室があつた。彼は折々東京から此處へ來て製作にかゝるのである。今日は門も窓も締められて、庭には一面に落葉松の落葉が散り敷き、それに眞紅な楓の紅葉が混つてゐた。林を過ぐると眞上に淺間山の大きな姿が仰がれた。山にはいま朝日の射して來る處で、豐かな赤茶けた山肌全體がくつきりと冷たい空に浮き出てゐる。煙は極めて僅かに頂上の凹みに凝つてゐた。初めてこの火山を仰ぐM―君の喜びはまた一層であつた。

朝飯の膳に持ち出された酒もかなり永く續いていつか晝近くなつてしまつた。その酒の間に私はいつか今度の旅行計畫を心のうちですつかり變更してしまつてゐた。初め岩村田の歌會に出て直ぐ汽車で高崎まで引返し、其處で東京から一緒に來た兩人に別れて私だけ沼田の方へ入り込んだ。それから片品川に沿うて下野の方へ越えて行く、とさういふのであつたが、斯うして久しぶりの友だちと逢つて一緒にのんびりした氣持に浸つてゐて見ると、なんだかそれだけでは濟まされなくなつて來た。

もう少しゆつくりと其處等の山や谷間を歩き廻りたくなつた。其處で早速頭の中に地圖をひろげて、それからそれへと傳をつけて行くうちに、いつか明瞭に順序がたつて來た。『よし……』と思はず口を出して、私は新計畫を皆の前に打ちあけた。

『いゝなア！』

と皆が云つた。

『それがいゝでせう、どうせあなたゞつてもう昔の樣にポイ〳〵出歩くわけには行くまいから』

とS―が勿體ぶつて附け加へた。

さうなるともう一つ新しい動議が持ち出された。それならこれから皆していつそ輕井澤まで出掛け、其處の蕎麥屋で改めて別盃を酌んで綺麗に三方に別れ去らうではないか、と。無論それも一議なく可決せられた。

輕井澤の蕎麥屋の四疊半の部屋に六人は二三時間坐り込んでゐた。夕方六時草津鐵道で立つてゆく私を見送らうといふのであつたが、要するにさうして皆ぐづ〳〵してゐたかつたのだ。土間つゞきのきたない部屋に、もう酒にも倦いてぼんやり坐つてゐると、破障子の間からツイ裏木戸の所に積んである薪が見え、それに夕日が當つてゐる。それを見てゐると私は少しづゝ心細くなつて來た。そしてどれもみな疲れた風をして默り込んでゐる顏を見るとなく見廻してゐたが、やがてK―君に聲かけた。

『ねヱK―君、君一緒に行かないか、今日この汽車で嬬戀まで行つて、明日川原湯泊り、それから關東耶馬溪に沿ふて中之條に下つて澁川高崎と出ればいゝぢアないか、僅か二日餘分になるだけだ』

みなK―君の顏を見た。彼は例のとほり靜かな微笑を口と眼に見せて、

『行きませうか、行つてよければ行きます、どうせこれから東京に歸つても何でもないんですから』

と云つた。まつたくこのうちで毎日の爲事を負つてゐないのは彼一人であつたのだ。

『いゝなア、羨しいなア』

とM―君が云つた。

『エライことになつたぞ、然し、行き給い、行つた方がいゝ、この親爺さん一人出してやるのは何だか少し可哀相になつて來た。

と、N―が醉つた眼を瞑ぢて、頭を振りながら云つた。

小さな車室、疊を二枚長目に敷いた程の車室に我等二人が入つて坐つてゐると、あとの四人もてんでに青い切符を持つて入つて來た。彼等の乘るべき信越線の上りにも下りにもまだ間があるのでその間に宿稍まで見送らうと云ふのだ。感謝しながらざわついてゐると、直ぐ輕井澤驛稍宿驛に來てしまつた。此處で彼等は降りて行つた。左様なら、左様なら、また途中で飲み始めなければいゝがと氣遣はれながら、左様なら〳〵と帽子を振つた。小諸の方に行くのは三人づれだからまだいゝが、一人東京へ歸つてゆくM―君には全く氣の毒であつた。

我等の小さな汽車、唯だ二つの車室しか持たぬ小さな汽車はそれからごつとん〳〵と登りにかゝつた。曲りくねつて登つてゆく、車の兩側はすべて枯れほゝけた芒ばかりだ。そして近所は却つてうす暗く、遠くの麓の方に夕方の微光が眺められた。

疲れと寒さが闇と一緒にやつて來た。登り登つて漸く六里が原の高原にかゝつたと思はれる頃には全く黑白もわかぬ闇となつたのだが、車室には灯を入れぬ。イヤ、一度小さな洋燈を點したには點したが、すぐ風で消えたのだつた。一二度停車して普通の驛で呼ぶ樣に驛の名を車掌が呼んで通りはしたが、其處には停車場らしい建物も灯影も見えなかつた。漸く一つ、やゝ明るい所に來て停つた。「二度上」といふ驛名が見え、海拔[illegible]八〇九呎と書いた標がその側に立てられてあつた。見ると汽車の窓のツイ側には屋臺店を設け、洋燈を點し、四十近い女が子を負つて何か賣つてゐた。高い臺の上に二つほど並べた箱には柿やキヤラメルが入れてあつた。そのうちに入れ違ひに向ふから汽車が來る樣になると彼女は急いで先づ洋燈を持つて線路の向側に行つた。其處にもまた同じ樣に屋臺店が拵へてあるのが見えた。そして次ぎ〳〵に其處へ二つの箱を運んで移つて行つた。

この草津鐵道の終點嬬戀驛に着いたのはもう九時であつた。驛前の宿屋に寄つて部屋に通ると嬶が切つており、やがて炬燵

をかけてくれた。済まないが今夜風呂を立てなかつた、向ふの家に貰ひに行つてくれといふ。提灯をさげた小女のあとについてゆくとそれは線路を越えた向側の家であつた。途中で女中がころんで灯を消したゝめ手探りで辿り着いて替る／＼ぬるい湯に入りながら辛うじて身體を溫める事が出來た。その家は運送屋か何からしい新築の家で、家財とても見當らぬ樣ながらんとした大きな圍爐裡端に番頭らしい男が一人新聞を讀んでゐた。

十月十八日。

昨夜炬燵に入つて居る時から溪流の音は聞えてゐたが夜なかに眼を覺して見ると、雨も降り出した樣子であつた。氣になつてゐたので、戸の隙間の白むを待つて繰りあけて見た。案の如く降つてゐる。そしてこの宿が意外にも高い崖の上に在つて、その眞下に溪川の流れてゐるのを見た。まさしくそれは吾妻川の上流であらねばならぬ。雲とも霧ともつかぬがその川原に迷ひ、向ふ岸の崖に懸り、やがて四邊をどんよりと白く閉してゐる。便所には草履が無く、顏を洗ふには洗面所の設けもないといふこの宿屋で、難有いのはたゞ炬燵であつた。それほどに寒かつた。聞けばもうこの九月のうちに雪が來たのであつたさうだ。

寒い／＼と云ひながらも窓をあけて、膀を炬燵の上に載せたまゝ二人ともぼんやりと雨を眺めてゐた。これから六里、河原湯まで濡れて歩くのがいかにも佗しいことに考へられ始めたのだ。それかと云つてこの宿へ雨のあがるまで滯在する勇氣もなかつた。醉つた勢ひで斯うした所へ出て來たことがそゞろに後悔せられて、いつそまた輕井澤へ引返へさうかとも迷つてゐるうちに、意外に高い汽笛を響かせながら例の小さな汽車は宿屋の前から輕井澤をさして出て行つてしまつた。それに乘り遲れゝば、午後にもう一度出るのまで待たねばならぬといふ。

が、草津行きの自働車ならば程なく此處から出るといふことを知つた。そしてまた頭の中に草津を中心に地圖を展げて、第二の豫定を作ることになつた。

さうなると急に氣も輕く、窓さきに濡れながらそよいでゐる痩せ／＼たコスモスの花も、遙か下に煙つて見ゆる溪の川原も對岸の霧のなかに見えつ隱れつしてゐる鮮かな紅葉の色も、十

べてみな旅らしい心をそゝりたてゝ來た。

やがて自働車に乘る。かなり危險な山坂を、しかも雨中のぬかるみに馳せ登るのでたび／＼膽を冷やさせられたが、それでも次第に山の高みに運ばれてゆく氣持は狹くそのうす暗い車中にゐてもよく解つた。ちら／＼と見え過ぎてゆく紅葉の色は全く滴る樣であつた。

草津ではこの前一度泊つた事のある一井旅館といふへ入つた。私には二度目の事であつたが、初めて此處へ來たK―君はこの前私が驚いたと同じくこの草津の湯に驚いた。宿に入ると直ぐ、宿の前に在る時間湯から例の佗しい笛の音が鳴り出した。それに續いて聞えて來る湯揉みの音、湯揉みの唄。私は彼を誘つてその時間湯の入口に行つた。中には三四十人の浴客がすべて裸體になり幅一尺長さ一間ほどの板を持つて大きな湯槽の四方をとり圍みながら調子を合せて一心に湯を揉んでゐるのである。そして例の湯揉の唄を唄ふ。先づ一人が唄ひ、唄ひ終ればすべて聲を合せて唄ふ。唄は多く猥雜なものであるがしかもうたふ聲は眞劍である。全身汗にまみれ、自分の揉む板の先の湯の泡に見入りながら、聲を絞つてうたひ續けるのである。

時間湯の溫度はほゞ沸騰點に近いものであるさうだ。そのために入浴に先立つて約三十分間揉みに揉んで湯を柔らげる。柔らげ終つたと見れば、各浴場ごとに一人づゝついてゐる隊長がそれと見て號令を下す。汗みどろになつた浴客は漸く板を置いて、やがて暫くの間各自柄杓をとつて頭に湯を注ぐ、百杯もかぶつた頃、隊長の號令で初めて湯の中へ全身を浸すのである。湯槽には幾つかの列に厚板が並べてあり、人はとり／＼にその板にしかみ附きながら隊長の立つ方向に面して息を殺して浸るのである。三十秒が經つ。隊長が一種氣合をかける心持で或る言葉を發する。衆みなこれに應じて『オヽウ』と答へる。答へるといふより唸るのである。三十秒ごとにこれを繰返し、かつきり三分間にして號令のもと一齊に湯から出るのである。その三分間の間は、僅かに口にその返事を稱ふるほか、手足一つ動かす事を禁じてある。動かせばその波動から熱湯が近所の人の皮膚を刺すがためであるといふ。

この時間湯に入ること二三日にして腋の下や股のあたりの皮

脚が爛れて來る。やがては歩行も、ひどくなると大小便の自由すら利かぬに到る。それに耐へて入浴を續くること約三週間で次第にその爛れが乾き始め、ほゞ二週間で全治する。その後の身心の快さは、殆んど口にする事の出來ぬほどのものであるさうだ。さう型どほりにゆくわけのものではあるまいが、効能の強いのは事實であらう。笛の音の鳴り響くのを待つて各自宿屋から(宿屋には穩かな内湯がある。)時間湯へ集る。杖に縋り、他に負はれて來るのもある。そして湯を揉み、唱をうたひ、煮ゆるごとき湯の中へ浸つて、やがてまた全身を脱脂綿に包んで宿に歸つてゆく。これを繰返すこと私はおよそ五十日間、斯うした苦行が、容易な覺悟で出來るものでない。

草津にこの時間湯といふのが六個所に在り、日に四回の時間をきめて、笛を吹く。それにつれて湯揉みの音が起り、唄が聞えて來る。

　たぎり沸くいで湯のたぎりしづめむと病人つどひ揉めりその湯を

　湯を揉むとうたへる唄は病人がいのちをかけしひとすぢの唄

　上野の草津に來り誰も聞く湯揉の唄を聞けばなしも

十月十九日。

降れば馬を雇つて澤渡温泉まで行かうと決めてゐた。起きて見れば案外に上天氣である。大喜びで草鞋を穿く。

六里ケ原と呼ばれてゐる淺間火山の大きな裾野に相對して、白根火山の裾野が南面して起つて居る。これは六里ケ原ほど廣くないだけに傾斜はそれより急である。その險しく起つて來た高原の中腹の一寸した窪みに草津温泉はあるのである。で、宿から出ると直ぐ坂道にかゝり、五六町もとろ〳〵と登つた所が白根火山の裾野のひく傾斜の一點に當るのである。其處の眺めは誠に大きい。

正面に淺間山が方六里に亙るといふ裾野を前にその全體を露はして聳えてゐた。聳ゆるといふよりいかにもおつとりと双方に大きな尾を引いて靜かに鎭座してゐるのである。朝あがりのさやかな空を背景に、その頂上からは純白な煙が微かに立つてやがて湯氣の樣に消えてゐる。空といひ煙といひ山といひ野原

といひ、すべてが濡れた様に靜かで鮮かであつた。濕つた地を ぴた／＼と踏みながら我等二人は、いま漸く旅の第一歩を踏み出す心躍りを感じたのである。地圖を見ると丁度その地點が一二〇八米突の高さだと記してあつた。

とり／＼に紅葉した雜木林の山を一里半ほども降つて來ると急に嶮しい坂に出會つた。見下す坂下には大きな谷が流れ、その對岸に同じ樣に切り立つた崖の中ほどには家の數十戸か二十戸か一握りにしたほどの村が見えてゐた。九十九折になつたその急坂を小走りに走り降ると、坂の根にも同じ樣な村があり、普通の百姓家と違はない小學校なども建つてゐた。對岸の村は生須村、學校のある方は小雨村と云ふのであつた。

九十九折けはしき坂を降り來れば橋ありてかゝる峽の深みに

おもはぬに村ありて名のやさしかる小雨の里といふにぞありける

蠶飼せし家にかあらむを壁を拔きて學校となしつ物教へを

學校にもの讀める聲のなつかしさ身にしみとほる山里過ぎて

生須村を過ぎると路はまた單調な雜木林の中に入つた。今までは下りであつたが、今度はとろり／＼と僅かな傾斜を登つてゆくのである。日は朗らかに南から射して、路に堆い落葉はから／＼に乾いてゐる。音を立てゝ踏んでゆく下からは色美しい栗の實が幾つとなく露はれて來た。多くは今年葉である眞新しい落葉も日ざしの色を湛へ匂を含んでとりどりに美しく散り敷いてゐる。をり／＼そのなかに龍膽の花が咲いてゐた。

流石に廣かつた林も次第に淺く、やがて、立枯の木の白々と立つ廣やかな野が見えて來た。林から野原へ移らうとする處であつた。我等は双方からおほどかになだれて來た山あひに流るゝ小さな溪端を歩いてゐた。そしてその溪の上にさし出でて、眼覺むるばかりに紅葉した楓の木を見出した。

我等は今朝草津を立つときからずつと續いて紅葉のなかをくゞつて來てゐたのである。楓を初め、山の雜木は悉く紅葉してゐた。恰も昨日今日がその眞盛りであるらしく見受けられた。

けれどいま眼の前に見出でゝ立ち留つて思はず聲を擧げて眺めた紅葉の色はまた別であつた。楓とは思はれぬ大きな古株から六七本に分れた幹が一齊に渓に傾いて伸びてゐる。その幹とてもすべて一抱への大きさで、丈も高い。漸く今日あたりから一葉二葉と散りそめたといふ風に風も無いのに散つてゐる靜かな輝やかしい姿は、自ら呼吸を引いて眺め入らずにはゐられぬものであつた。二人は路から降り、そのさし出でた木の眞下の川原に坐つて晝飯をたべた。手を洗ひ顔を洗ひ、つぎ／＼に織りついだ樣に小さな瀨をなして流れてゐる水を掬んで、ゆつくりと喰べながら、日の光を含んで滴る樣に輝いてゐる眞上の紅葉を仰ぎ、また四邊の山にぴつたりと燃え入つてゐる林のそれを眺め、二人とも言葉を交さぬ數十分の時間を其處で送つた。

枯れし葉とおもふもみぢのふくみたるこの紅ゐをなんと申さむ

露霜のとくるがごとく天つ日の光をふくみにほふもみぢ葉

溪川の眞白川原にわれ等ゐてうちたゝへたり山の紅葉を

もみぢ葉のいま照り匂ふ秋山の澄みぬるすがた寂しとぞ見し

其處を立つと野原にかゝつた。眼につくは立枯の木の木立である。すべて自然に枯れたものでなく、みな根がたの一寸わりを斧で伐りめぐらして水氣をとゞめさうして枯らしものである。半ばは枯れ半ばはまだ葉を殘してゐるのも混つてゐる。見れば楢の木である。二抱へ三抱に及ぶそれらの大きな老木がむつちりと枝を張つて見渡す野原の其處此處に立つてゐる。野には一面に枯れほゝけた芒の穗が靡き、その芒の浪を分けてかすかな線條を引いた樣にも見えてゐるのは植ゑつけてまだ幾年も經たぬらしい落葉松の苗である。この野に苗から茂つてゐた楢を枯らして代りにこの落葉松の植林を行はうとしてゐるのであるのだ。

帽子に肩にしつとりと匂つてゐる日の光をうら寂しく感じながら野原の中の一本路を歩いてゐると、をり／＼鋭い鳥の啼聲を聞いた。久し振りに聞く聲だとは思ひながら定かに思ひあたらずにゐると、やがて木から木へとび移るその姿を見た。啄木鳥である。一羽や二羽でなく、廣い野原のあちこちで啼いてゐ

る。更らにまたそれよりも澄んで暢びやかな聲を聞いた。高々と空に翔ひすましてゐる鷹の聲である。

落葉松の苗を植うると神代振り古りぬる楢をみな枯らしたり

楢の木ぞ何にもならぬ醜の木と古りぬる木々をみな枯らしたり

木々の根の皮剝ぎとりて木々をみな枯木とはしつ枯野とはしつ

伸びかねし荒野が原の落葉松は枯芒よりいぶせくぞ見ゆ

下草のすゝきほゝけて光りたる枯木が原の啄木鳥の聲

枯るゝ木にわく蟲けらをついばむと啄木鳥は啼く此處の林に

立枯の木々しらじらと立つところたまたまにして啄木鳥の飛ぶ

啄木鳥の聲のさびしさ飛び立つとはしなく啼ける聲のさびしさ

紅ゐの胸毛を見せてうちつけに啼く啄木鳥の聲のさびしさ

白木なす枯木が原のうへにまふ鷹ひとつ居りて啄木鳥はく

ましぐらにまひくだり來てものを追ふ鷹あらはなり枯木が原に

耳につく啄木鳥の聲あはれなり啼けるをとほく離り來りて

ずつと一本だけ續いて來た野中の路が不意に二つに分れる處に來た。小さな道標が立てゝある。曰く右澤渡温泉道左花敷温泉道。

枯芒を押し分けてこの古ぼけた道標の消えかゝつた文字を辛うじて讀んでしまうと、私の頭にぶらりと一つの追憶が浮んだ。そして思はず私は獨りごちた『ほゝオ、斯んな處から行くのか、花敷温泉には』と。

私は先刻この野にかゝつてからずつと續いて來てゐる物靜かな沈んだ心の何とはなしに波だつのを覺えながら、暫くその小さな道標の木を見て立つてゐたが、K―君が早や四五間も澤渡道の方へ歩いてゐるのを見ると、其儘に同君のあとを追ふたそして小一町も二人して默りながら進んだ。が、終に私は彼を呼

ひとめた。

『K―君、どうだ、これから一つあつちの路を行つて見やうぢァないか、そして今夜その花敷温泉といふのへ泊つて見やう』

不思議な顔をして立ち留つた彼に私は立ちながら、いま頭に影のごとくに來て浮んだといふ花敷温泉に就いての思ひ出を語つた。三四年も前である、今度とは反對に吾妻川の下流の方から登つて來て草津温泉に泊り、案内者を雇ふて白根山の噴火口の近くを廻り、澁峠を越えて信州の澁温泉へ出た事がある。五月であつたが白根も澁も雪が深くて、澁峠にかゝると前後二里がほどはおつと數尺の雪を踏んで歩いたのであつた。その雪の上に立ちながら年老いた案内者が、やはり白根の裾野つゞきの廣大な麓の一部を指して、彼處にも一つ温泉がある、高い崖の眞下の岩のくぼみに湧き、草津と違つて湯が澄み透つて居る故に、その崖に咲く躑躅や其他の花がみな湯の上に影を落す、まるで底に花を敷いてゐる樣だから花敷温泉といふのだ、と云つて教へて呉れた事があつた。下になるだけ雪が斑らになつてゐる遠い麓に、谷でも流れてゐるか、丁度模型地圖を見るとおなじく幾つとない細長い窪みが糸屑を散らした樣にこんがらがつてゐる中の一個所にそんな温泉があると聞いて私の好奇心はひどく動いた。第一、そんなところに人が住んで、そんな湯に浸つてゐるといふ事が不思議に思はれたほど、その時其處を遙かな世離れた處に眺めたものであつたのだ。それがいま思ひがけなく眼の前の棒杭に『左花敷温泉道、是より二里半』と認めてあるのである。

『どうだね君、行つて見やうよ、二度とこの道を通りもすまいし、………、從つてその不思議な温泉をも見ずにしまふ事になるぢやァないか』

その話に私と同じ心を動かしたらしい彼は、一も二もなく私のこの提議に應じた。そして少し後戻つて、再びよく道標の文字を調べながら、文字のさし示す方角へ曲つて行つた。

今までよりは險しい野路の登りとなつてゐた。立枯の楢がつゞき、をり〳〵栗の木も混つて毬と共に笑みわれたその實を根がたに落してゐた。

夕日さす枯野が原のひとつ路わが急ぐ路に散れる栗の實

高さやぐ落葉が下に散りてをるこの栗の實の色のよろしさ

芝栗の芝の枯葉のなかばだに如かぬちひさき栗の味よさ

おのづから干て搗栗となりてをる野の落栗の味のよろしさ

この枯野猪も出でぬか猿もゐぬか栗美くしう落ちたまりたり

かりそめにひとつ拾ひつ二つ三つ拾ひやめられぬ栗にしありけり

萱の中の險しい坂路を登りつくすと一つの峠に出た。一歩其處を越ゆると片側はうす暗い森林となつてゐた。そしてそれがまた一面の紅葉の渦を卷いてゐるのであつた。北側の、日のさゝぬ其處の紅葉は見るからに寒々として、濡れてもゐるかと思はるゝ色深いものであつた。然し、途中でやゝこの思ひ立ちの後悔せらるゝほど路は遠かつた。一つの溪流に沿ふて峽間を降り、やがてまた大きな谷について凹凸烈しい山路を登つて行つた。十戸二十戸の村を二つ過ぎた。引沼村といふのには小學校があり、山蔭のもう日も暮れた地面を踏み鳴らしながら一人の年寄つた先生が二十人ほどの生徒に體操を敎へてゐた。

先生の一途なるさまもなみだなれ家十ばかりなる村の學校に

ひたひたと土踏み鳴らし眞裸足に先生は敎ふその體操を

先生の頭の禿もたふとけれ此處に死なむと敎ふるならめ

遙か眞下に白々とした谷の瀨々を見下しながらなほ急いでゐると、漸くそれらしい二三軒の家を谷の向岸に見出だした。すゞしい岩山の根に貼り着けられた樣に小さな家が並んでゐるのである。

岸に降り橋を渡り一軒の湯宿に入つて先づ湯を訊くと、庭さきを流れてゐる溪流の川下の方を指ざしながら、川向ふの山の陰に在るといふ。不思議に思ひながら借下駄を提げて一二丁ほど行つて見ると、其處には今まで我等の見下して來た谷とはまた異つた一つの谷が、折り疊んだ樣な岩山の襞の間から流れ出して來てゐるのであつた。ひたくと瀨につきさうな危い板橋を渡つてみると、なるほど其處の切りそいだ樣な崖の根に湯が湛へてゐた。相並んで二個所に湧いてゐる。一つには茅葺の屋根があり　一方には何も無い。

相顧みて苦笑しながら二人は屋根のない方へ寄つて手を浸し

てみると恰好な溫度である。もう日も暮つた山蔭の溪ばたの風を恐れながらも着物を脫いで石の上に置き、ひつそりと清らかなその湯の中へうち浸つた。一寸立つて手を延ばせば溪の瀨に指が屆くのである。

『何だか溪まで溫かさうに見えますね』と年若い友は云ひながら手をさし延ばしたが、慌てゝ引つ込めて『氷の樣だ』と云つて笑つた。

溪向うもそゝり立つた岩の崖、うしろを仰げば更に膽も冷ゆべき斷崖がのしかゝつてゐる。崖から眞横にいろ〳〵な灌木が枝を張つて生ひ出で、大方散りつくした紅葉がなほ僅かにその小枝に名殘をとゞめてゐる。それが一ひら二ひらと斷間なく我等の上に散つて來る。見れば其處に一二羽の樫鳥が遊んでゐるのであつた

　　眞裸體になるとはしつゝ覺束な此處の溫泉に屋根の無ければ

　　折からや風吹きたちてはらはらと紅葉は散り來いで湯のなかに

　　樫鳥が踏みこぼす紅葉くれないに透きてぞ散り來わが見てあれば

　　二羽とのみ思ひしものを三羽四羽樫鳥ゐたりその紅葉の木に

夜に入ると思ひかけぬ烈しい木枯が吹き立つた。背戸の山木の騷ぐ音、雨戸のはためき、庭さきの瀨々のひゞきの寒さは、枕もとに吊られた洋燈の灯影もたえずまたゝいて、眠り難い一夜であつた。

十月二十日。

未明に起き、洋燈の下で朝食をとり、まだ足もとのうす暗いうちに其處を立ち出でた。驚いたのは、その足もとに斑らに雪の落ちてゐることであつた。慌てゝ四邊を見廻すと昨夜眠つた宿屋の裏の崖山が斑々として白い。更らに遠くを見ると、漸く朝の光のさしそめたをちこちの峰から峰が眞白に輝いてゐる。

　　ひと夜寢てわが立ち出づる山かげのいで湯の村に雪降りにけり

　　起き出でゝ見るあかつきの裏山の紅葉の山に雪降りにけり

朝だちの足もと暗しせまりあふ狭間の路にはだら雪積み

上野と越後の國のさかひなる峰の高きに雪積みにけり

はだらかに雪の見ゆるは檜の森の黒木の山に降れる故にぞ

檜の森の黒木の山にうすらかに降りぬる雪は寒げにし見ゆ

昨日の通りに路を急いでやがてひろ〴〵とした枯芒の原、立枯の楢の打續いた暮坂峠の大きな澤に出た。峠を越えて約三里、正午近く澤渡温泉に着き、正榮館といふのゝ二階に上つた。此處は珍しくも双方に谷地を持つた樣な、小高い峠に湯が湧いてゐるのであつた。無色無臭、温度もよく、いゝ湯であつた。此處に此儘泊らうか、もう三四里を歩いて四萬温泉へ廻らうか、それとも直ぐ中之條へ出て伊香保まで延ばさうかと二人していろ〳〵に迷つたが、終に四萬へ行くことにきめて、晝飯を終るとすぐまた草鞋を穿いた。

私は此處で順序として四萬温泉の事を書かねばならぬ事を不快におもふ。いかにも不快な印象を其處の温泉宿から受けたからである。我等の入つて行つたは、といふより馬車から降りるとすぐ其處に立つてゐた二人の男に誘はれて入つて行つたのは田村旅館といふのであつた。馬車から降りた道を眞直ぐに入つてゆく宏大な構への家であつた。

とろ〳〵と登つてやがてその庭らしい處へ着くと一人の宿屋の男は訊いた。

『エヽ、どの位ゐの御滯在の御豫定で被入つしやいますか』

『いゝや、一泊だ、初めてで、見物に來たのだ』

と答へると彼等は、にたりと笑つて顔を見合せた。そしてその男はいま一人の男に馬車から降りた時强いて私の手から受取つて來た小荷物を押しつけながら早口に云つた。

『一泊だとよ、何の何番に御案内しな』

さう云ひ捨てゝおいて今一組の商人態の二人連に同じ樣な事を訊き、滯在と聞くや小腰をかゞめて向つて左手の渓に面した方の新しい建築へ連れて行つた。

我等と共に殘された一人の男はまさ〴〵と當惑と苦笑とを顔に表はして立つてゐたが、

『ではこちらへ』

と我等をそれとは反對の見るからに古びた一棟の方へ導かう

とした。私は呼び留めた。

『イヤ僕等は見物に來たので、出來るならいゝ座敷に通して貰ひ度い、たゞ一晩の事だから』

『へ、承知しました、どうぞこちらへ』

案のごとくにひどい部屋であつた。小學校の修學旅行の泊りさうな、幾間か打ち續いた一室で、しかも間の唐紙なども滿足には緊つてゐない部屋であつた。疊、火鉢、座布團、すべてこれに相應したもののみであつた。

私は締めてその火鉢の側に腰をおろしたが、K―君はまだ洋傘を持つたまゝ立つてゐた。

『先生、移りませう、馬車を降りたツイ横にいゝ宿屋があつた樣です』

無口で穩かなこの靑年が、明かに怒りを聲に表はして云ひ出した。

私もそれを思はないでなかつたが、移つて行つてまたこれと同じい待遇を受けたならそれこそ更らに不快に相違ない。

『止さうよ、これが土地の風かも知れないから』

となだめて、急いで彼を湯に誘つた。

この分では私には先づ夕餉の膳の上が氣遣はれた。で、定つた物のほかに二品ほど附ける樣にと註文し、酒の事で氣を揉むのをも慮つて豫じめ二三本の德利を取り寄せ自分で燗をすることにしておいた。

やがて十五六歳の小僧が岡持で二品づゝの料理を持つて來た。受取つて箸をつけてゐると小僧は其處につき坐つたまゝ、

『代金を頂きます』

といふ。

『代金?』

と私は審つた。

『宿料かい?』

『いゝえ、そのお料理だけです、よそから持つて來たのですから』

思はず私はK―君の顏を見て笑ひ出した。

『オヤ〳〵、君、これは一泊者のせいのみではないのだよ、懷中を踏まれたよ』

十月廿一日。

朝、縁に腰かけて草鞋を穿いてゐても誰一人聲をかける者もなかつた。帳場から見て見ぬ振である。もつとも私も一錢をも置かなかつた。旅といへば樂しいもの難有いものと思ひ込んでゐる私は出來るだけその心を深く味はひたいために、不自由の中から大抵の處でも多少の心づけを帳場なり召使たちなりに渡さずに出た事はないのだが、斯うまでも挑戰狀態で出て來られると、さういふ事をしてゐる餘裕がなかつたのである。

面白いのは犬であつた。草鞋を穿いてゐるツイ側に二疋の仔犬を連れた大きな犬が遊んでゐた。そしてその仔犬たちは私の手許にとんで來てじやれついた。頭を撫でゝやつてゐると親犬までやつて來て私の額や頬に身體をすりつける。やがて立ち上つて門さきを出離れ、何の氣なくうしろを振返ると、その大きな犬が私のうしろについて歩いてゐる。仔犬も門の處まで出ては來たがそれからはよう來ぬらしく、尾を振りながらぴつたり三疋引き添うてこちらを見て立つてゐる。

『犬は犬好きの人を知つてるといふが、ほんとうですね』

と、幾度追つても私の側を離れない犬を見ながらK—君が云つた。

『とんだ見送がついた、この方がよつぽど正直かも知れない』

私も笑ひながら犬を撫でゝ、

『少し旅を貪り過ぎた形があるネ、無理をして此處まで來ないで澤渡にあのまゝ泊つておけば昨夜の不愉快は知らずに過ごせたものを……』

『それにしても昨夜はひどかつたですネ、あんな目に私初めて會ひました』

『さうかネ、僕なんか玄關拂を喰つた事もあるにはあるが…………、然しあれは丁度いま此の土地の氣風を表はしてゐるのかも知れない、ソレ上州には伊香保があり草津があるでせう、それに近頃よく四萬々々といふ樣になつたものだから四萬先生すつかり草津伊香保と肩を並べ得たつもりになつて鼻息が荒い傾向があるのだらうと思ふ、謂はゞ一種の成金氣分だネ』

『さう云へば彼處の湯に入つてる客たちだつてそんな奴ばかりでしたよ、長距離電話の利く處に行つてゐたんぢやア入湯の氣

持はせぬ、朝晩に何だ彼だとかゝつて來てうるさくて仕様がない、なんて』

『とにかく幻滅だつた、僕は四萬と聞くとずつと溪間の、靜かなおちついた處とばかり思つてゐたんだが……ソレ僕の友人のS―ネ、あれがこの吾妻郡の生れなんだ、だから彼からもよくその様に聞いてゐたし、……、惜しい事をした』

路には霜が深かつた。峠から這入つた朝日の光が溪間の紅葉に映つて、次第にまた濁りのない旅心地になつて來た。そして石を投げて辛うじて犬をば追ひ返した。不思議さうに立つて見てゐたが、やがて尾を垂れて歸つて行つた。

十一時前中之條着、折よく電車の出る處だつたので直ぐ乘車、日に輝いた吾妻川に沿ふて走る。この川は數日前に嬬戀村の宿屋の窓から雨の中に忙しく眺めた溪流の末であるのだ。澁川に正午に着いた。東京行沼田行とそれ〲の時間を調べておいて驛前の小料理屋に入つた。此處で別れてK―君は東京へ歸り私は沼田の方へ入り込むのである。

看板に出てゐた川魚は何も無かつた。鶏をとりうどんをとつて別盃を擧げた。輕井澤での不圖した言葉がもとになつて思ひも寄らぬ處を兩人して歩いて來たのだ。時間から云へば僅かだが、何だか遠く幾山河を越えて來た様なおもひが、盃の重なるにつれて湧いて來た。午後三時、私の方が十分間早く發車する事になつた。手を握つて別れる。

澁川から沼田まで、不思議な形をした電車が利根川に沿ふて走るのである。その電車が二度ほども長い停電をしたりして、沼田町に着いたのは七時半であつた。指さきなど、痛むまでに寒かつた。電車から降りると直ぐ郵便局に行き、留置になつてゐた郵便物を受取つた。局の事務員が顏を出して、今夜何處へ泊るかと訊く。變に思ひながら澁川で聞いて來た宿屋の名を思ひ出してその旨を答へると、さうですかと小さな窓を閉めた。

宿屋の名は鳴瀧と云つた。風呂から出て一二杯飲みかけてゐると、來客だといふ。郵便局の人かと訊くと、さうではないといふ。不思議に思ひながらも餘りに勞れてゐたので、明朝來て呉れと斷つた。實際K―君と別れてから急に私は烈しい疲勞を覺えてゐたのだ。然し矢張り氣が濟まぬので自分で玄關まで出

て呼び留めて部屋に招じた。四人連の青年たちであつた。矢張り郵便局からの通知で、私の此處にゐるのを知つたのだらうだ。そして、

『いま自轉車を走らせましたから追つ附けU―君も此處へ見えます』

といふ。

『ア、さうですか』

と答へながら、矢つ張り呼び留めてよかつたと思つたU―君とは前に云つた歌の結社創作社の一社友の一人であるのだ。この群馬縣利根郡からその結社に入つてゐる人が三人ある事を出立の時に調べて、それ〴〵の村をも地圖で見て來たのであつた。そして都合好くばそれ〴〵に逢つて行き度いものと思つてゐたのだ。

『それは難有う、然しU―君の村は此處から遠いでせう』

『なアに、一里位ゐのものです』

一里の夜道は大變だと思つた。

やがてそのU―君が村の俳人B―君をも伴れてやつて來た。もう少しませた人だとその歌から想像してゐたのに反してまだ紅顔の青年であつた。

歌の話、俳句の話、土地の話が十一時過まで續いた。そしてそれ〴〵に歸つて行つた。村までは大變だらうからと留めたけれど、U―君たちも元氣よく歸つて行つた。

十月廿二日。

今日もよく晴れてゐた。嬬戀以來、實によく晴れて呉れるのだ。四時から强いて眼を覺まして床の中で幾通かの手紙の返事を書き、五時起床、六時過ぎに飯をたべてゐると、U―君がにこ〳〵しながら入つて來た。自宅でもいゝつて云ひますから今日はお伴させて下さい、といふ。それはよかつたと私も思つた。今日はこれから九里の山奥、越後境三國峠の中腹に在る法師溫泉まで行く事になつてゐたのだ。

私は河の水上といふものに不思議な愛着を感ずる癖を持つてゐる。一つの流に沿うて次第にそのつめまで登る。そして峠を越せば其處にまた一つの新しい水源があつて小さな瀨を作りながら流れ出してゐる、といふ風な處に出合ふと、胸の苦しくな

る樣な歡喜を覺えるのが常であつた。

　矢張りそんなところから大正七年の秋に、ひとつ利根川の水上をたづねて見やうとこの利根の峽谷に入り込んで來た事があつた。沼田から次第に奧に入つて矢張り越後境の淸水越の根に當つてゐる湯桧曾といふのまで辿り着いた。そして其處から更らに藤原鄕といふのへ入り込むつもりであつたのだが、時季が少し遲れて、もうその邊にも斑らに雪が來てをり、奧の方は眞白妙に輝いた山の並んでゐるのを見ると、流石に心細くなつて湯桧曾から引返した事があつた。然しその湯桧曾の邊でも、跳子の河口であれだけの幅を持つた利根が石から石を飛んで徒涉出來る愛らしい姿になつてゐるのを見ると、矢張り嬉しさに心は躍つてその石から石を飛んで步いたものであつた。そしていつかお前の方まで分け入るぞよと輝き渡る藤原鄕の奧山を望んで思つたものであつた。

　藤原鄕の方から來たのに淸水越の山から流れ出して來た一支流が湯桧曾のはづれで落ち合つて利根川の溪流となり沼田の水上の處で赤谷川を入れ、やゝ下つた處で片品川を合せる。そして漸く一個の川らしい姿になつて更に澁川で吾妻川を合せ、此處で初めて大利根の大觀をなすのである。吾妻川の上流をば曾つて信州の方から越えて來て探つた事がある。片品川の奧に分け入らうと云ふのは實は今度の旅の眼目である。そして今日これから行かうとしてゐるのは、沼田から二里ほど上、月夜野橋といふ橋の近くで利根川に落ちて來てゐる赤谷川の源流の方に入つて行つて見度いためであつた。その殆んどつめになつた處に法師溫泉はあるのである。

　讀者よ、試みに參謀本部五萬分の一の地圖「四萬」の部を開いて見給へ。眞黑に見えるまでに山の線の引き重ねられた中に唯だ一つ他の部落とは遠くかけ離れて溫泉の符號の記入せられてゐるのを、少なからぬ困難の末に發見するであらう。それが卽ち法師溫泉なのだ。更らにまた讀者よ、その少し手前、沼田の方角に近い處に視線を落して來るならば其處に「猿が京村」といふ不思議な名の部落のあるのを見るであらう。私は初め參謀本部のものに據らず他の府縣別の簡單なものを開いて見てこの猿が京村を見出し、サテも斯んな處に村があり、斯んな處にも歌

を詠まうと志してゐる人がゐるのかと、少なからず驚嘆したのであつた。先に利根郡に我等の社中の同志が三人ある旨を云つた。その三人の一人は今日一緒に歩かうといふU―君で、他の二人は實にこの猿が京村の人たちであるのである。

月夜野橋に到る間に私は土地の義民磔茂左衛門の話を聞いた。徳川時代寛文年間に沼田の城主眞田伊賀守が異常なる虐政を行つた。領内利根吾妻勢多三郡百七十七箇村に檢地を行ひ、元高三萬石を十四萬四千餘石に改め、川役網役山手役井戸役窓役産毛役等（窓を一つ設くれば即ち課税し、出産に課税するの意）の雜役を設け終に婚禮にまで税を課するに至つた。納期には各村に代官を派遣し、滯納する者があれば家宅を捜索して農産物の種子まで取上げ、なほ不足ならば人質を取つて皆納するまで水牢に入るゝ等の事を行つた。この暴虐に泣く百七十七個村の民を見るに見兼ねて身を挺んで江戸に出で酒井雅樂守の登城先に駕訴をしたのがこの月夜野村の百姓茂左衛門であつた。けれどその駕訴は受けられなかつた。其處で彼は更らに或る奇策を案じて具さに伊賀守の虐政を認めた訴狀を上野寛永寺なる輪王寺宮に奉つた。幸に宮から幕府へ傳達せられ、時の將軍綱吉も驚いて沼田領の實際を探つて見ると果して訴狀の通りであつたので直ちに領地を取上げ伊賀守をば羽後山形の奥平家へ預けの身としてしまつた。茂左衛門はそれまで他國に姿を隱して形勢を見てゐたが、斯く願ひの叶つたのを知ると潔く自首するつもりで乞食に身をやつして郷里に歸り、僅かに一夜その家へ入つて妻と別離を惜み、明方出かけやうとしたところを捕へられた。そしていま月夜野橋の架つてゐるツイ下の川原で磔刑に處せられた。しかも罪ない妻まで打首となつた。漸く蘇生の思ひをした百七十七個村の百姓たちはやれ〳〵と安堵する間もなく茂左衛門の捕へられたを聞いて大に驚き悲しみ、總代を出して幕府に歎願せしめた。幕府も特に評議の上これを許して茂左衛門赦免の上使を遣はしたのであつたが、時僅かに遲れ、井戸上村まで來ると處刑濟の報に接したのであつたさうだ。

舊沼田領の人々はそれを聞いていよ〳〵悲しみ、刑場跡に地藏尊を建立して僅かに謝恩の心を致した。ことにその郷里の人は更らに月夜野村に一佛堂を築いて千日の供養をし、これを千

日堂と稱へ、今日に到るまで一日として供養を怠らなかつた。が、次第にその御堂も荒頽して來たので、この大正六年から改築に着手し、十年十二月竣工、地藏尊を本尊として其處に安置することになつた。

斯うした話をU—君から聞きながら私は彼の佐倉宗吾の事を思ひ出してゐた。事情が全く同じだからである。而して一は大に表はれ、一は土地の人以外に殆んど知る所がない。さう思ひながらこの勇敢な、氣の毒な義民のためにひどく心を動かされた。そしてU—君にそのお堂へ參詣したい旨を告げた。

月夜野橋を渡ると直ぐ取つ着きの岡の上に御堂はあつた。田舍に在る堂宇としては實に立派な壯大なものであつた。そしてその前まで登つて行つて驚いた。寧ろ凄いほどの香煙が捧げられてあつたからである。そして附近には唯だ雀が遊んでゐるばかりで人の影とてもない。百姓たちが朝の爲事に就く前に一人々々此處にこの香を捧げて行つたものなのである。一日として斷らない事はないのださうだ。立ち昇る香煙のなかに佇みながら私は茂左衛門を思ひ、茂左衛門に對する百姓たちの心を思ひ瞼の熱くなるのを感じた。

堂のうしろの落葉を敷いて暫く休んだ。傍らに同じく腰をおろしてゐた年若い友は不圖何か思ひ出した樣に立ち上つたが、やがて私をも立ち上らせて對岸の岡つゞきになつてゐる村落を指さしながら、『ソレ、あそこに日の當つてゐる村がありませうあの村の中ほどにやゝ大きな藁葺の屋根が見えませう、あれが高橋お傳の生れた家です』

これはまた意外であつた。聞けば同君の祖母はお傳の遊び友達であつたといふ。

『今日これから行く途中に鹽原太助の生れた家も、墓もありますよ』

と、なほ笑ひながら彼は附け加へた

月夜野村は村とは云へ、古めかしい宿場の形をなしてゐた。昔は此處が赤谷川流域の主都であつたものであらう。宿を通り拔けると道は赤谷川に沿うた。

この邊、赤谷川の眺めは非常によかつた。十間から二三十間に及ぶ高さの岩が、楯を並べた樣に並び立つた上に、かなり老

木の赤松がずらりと林をなして茂つてゐるのである。三町、五町、十町とその眺めは續いた。松の下草には雜木の紅葉が油繪具をこぼした樣に散らばり、大きく露出した岩の根には微かな青みを宿した清水が瀨をなし淵を作つて流れてゐるのである。

　登るともない登りを七時間ばかり登り續けた頃、我等は氣にしてゐた猿ケ京村の入口にかゝつた。其處も南に谷を控へた坂なりの道ばたにちらほらと家が續いてゐた。中に一軒、古び煤けた屋根の修繕をしてゐる家があつた。丁度小休みの時間らしく、二三の人が腰をおろして煙草を喫つてゐた。

『ア、さうですか、それは……』

　私の尋ねに應じて一人がわざ／＼立上つて煙管で方角を指しながら、道から折れた山の根がたの方に我等の尋ぬるM—君の家の在る事を教へて吳れた。街道から曲り、細い坂を少し登つてゆくと、傾斜を帶びた山畑が其處に開けてゐた。四五町も畦道を登つたけれど、それらしい家が見當らない。桑や粟の畑が日に乾いてゐるばかりである。幸ひ畑中に一人の百姓が働いてゐた。其處へ歩み寄つてやゝ遠くから聲をかけた。

『ア、M—さんの家ですか』

　百姓は自分から頰かむりをとつて、私たちの方へ歩いて來たそして、畑に挾まれた一つの澤を越し、渡りあがつた向うの山蔭の杉木立の中に在る旨を教へて吳れた。それも道を傳つて行つたでは廻りになる故、其處の畑の中を通り抜けて……とゆびさししながら教へやうとして、

『アツ、其處に來ますよ、M—さんが……』

　と叫んだ。囚人などの冠る樣な編笠をかぶり、辛うじて尻を被ふほど、短い袖無袢纏を着、股引を穿いた、老人とも若者ともつかぬ男が其處の澤から登つて來た。そして我等が彼を見詰めて立つてゐるのを不思議さうに見やりながら近づいて來た。

『君はM—君ですか』

　斯う私が呼びかけると、じつと私の顏を見詰めたが、やがて合點が行つたらしく、ハッとした風で其處に立ち留つた。そして笠をとつてお辭儀をした。斯うして向ひ合つて見ると、彼もまだ三十前の靑年であつたのである。

　私が上州利根郡の方に行く事をば我等の間で出してゐる雜誌

で彼が見てゐた筈である。然し、斯うして彼の郷里まで入り込んで來やうとは思ひがけなかつたらしい。驚いたあまりか、彼は其處に突立つたまゝ殆んど言葉を出さなかつた。路を教へて呉れた百姓も頬かむりの手拭を握つたまゝ、ぼんやり其處に立つてゐるのである。私は昨夜沼田に着いた事、一緒にゐるのが沼田在の同志のU―君である事、これから法師溫泉まで行かうとしてゐる事、一寸でも逢つてゆきたくて立ち寄つた事などを說明した。

『どうぞ、私の家へお出で下さい』

と漸くいろ〳〵の意味が飲み込めたらしく彼は安心した風に我等を誘つた。なるほど、ツイ手近に來てゐながら見出せないのも道理なほどの山の蔭に彼の家はあつた。一軒家か、乃至、は其處らに一二軒の隣家を持つか、兎に角に深い杉の木立が四邊を圍み、濕つた庭には杉の落葉が一面に散り敷いてゐた。大きな圍爐裡端には彼の老母が座つてゐた。

　お茶や松茸の味噌漬が出た。私は圍爐裡に近く腰をかけながら、

『君は何處で歌を作るのです、此處ですか』

と、赤々と火の燃えさかる爐端を指した。土間にも、座敷にも、農具が散らかつてゐるのみで、書籍も机らしいものも其處らに見えなかつた。

『さア……』

　羞しさうに彼は口籠つたが、

『何處といふ事もありません、山ででも野良ででも作ります』

　と僅かに答へた。私が彼の歌を見始めてから五六年はたつであらう。幼い文字、幼い詠みかた、それらがM―といふ名前と共にすぐ私の頭に思ひ浮べらるゝほど、特色のある歌を彼は作つてゐるのであつた。

　牧穫時の忙しさを思ひながらも同行を勸めて見た。暫く默つて考へてゐたが、やがて母に耳打して奧へ入ると着物を着換へて出て來た。三人連になつて我等はその杉木立の中の家を立ち出でた。恐らく二度とは訪ねられないであらうその杉叢が、[illegible]どろに私には振返へられた。時計は午後三時をすぎてゐた、法師までなほ三里、よほどこれから急がねばならぬ。

猿ヶ京村でのいま一人の同志H—君の事をM—君から聞いた、土地の郵便局の息子で、いま折悪しく仙臺の方へ行つてゐる事などを。やがてその郵便局の前に來たので私は一寸立寄つてその父親に言葉をかけた、その人はゐないでも、矢張り默つて通られぬ思ひがしたのであつた。

石や岩のあらはに出てゐる村なかの路には煙草の葉がをり〳〵落ちてゐた見れば路に沿ふた家の壁には悉くこれが掛け乾されてゐるのであつた。此頃漸く切り取つたらしく、まだ生々しいものもあつた。

吹路(ふくろ)といふ急坂を登り切つた頃から日は漸く暮れかけた。風の寒い山腹をひた急ぎに急いでゐると、をり〳〵路ばたの畑で稗や粟を刈つてゐる人を見た。この邊では斯ういふものしか出來ぬのださうである。從つて百姓たちの常食も大概これに限られてゐるといふ。かすかな夕日を受けて咲いてゐる煙草の花も眼についた。小走りに走つて急いだのであつたが、終に全く暮れてしまつた。山の中の一すぢ路を三人引つ添うて這ふ様にして辿つた。そして、峰々の上の夕空に星が輝き、相迫つた峽間の奥の闇の深い中に溫泉宿の灯影を見出した時は、三人思はず大きな聲をあげたのであつた。

がらんどうな大きな二階の一室に通され、先づ何よりもと湯殿へ急いだ。そしてその廣いのと、湯の豐かなのとに驚いた。疊敷よりもつと廣からうと思はるゝ浴槽が二つ、それに滿々と湯が堪へてゐるのである。そして、下には石ころが敷いてあつた。乏しい灯影の下にづつぷりと湯に浸りながら、三人は唯だてんでに微笑を含んだまゝ、殆んどだんまりの永い時間を過した。のび〳〵と手足を伸ばすのもあり、蛙の様に浮んで泳ぎの形を爲すのもあつた。

部屋に歸ると炭火が山の様におこしてあつた。なるほど山の夜の寒さは湯あがりの後の身體に浸みて來た。何しろ今夜は飲みませうと、豐かに酒をば取り寄せた。罐詰をも一つ二つと切らせた。U—君は十九か廿歳、M—君は廿六七、その二人のがつしりとした山國人の體格を見、明るい顏を見てゐると、私は何かしら嬉しくて、飲めよ喰べよと無理にも強ひずにはゐられぬ氣持になつてゐたのである。

其處へ一升壜を提げた、見知らぬ若者がまた二人入つて來た。一人はK―君といふ人で、今日我等の通つて來た鹽原太助の生れたといふ村の人であつた。一人は沼田の人で、阿米利加に五年行つてゐたといふ畫家であつた。畫家を訪ねて沼田へ行つてゐたK―君は、其處の本屋で私が今日この法師へ登つたといふ事を聞き、畫家を誘つて、あとを追つて來たのださうだ。そして懷中から私の最近に著した歌集『くろ土』を取り出してその口繪の肖像と私とを見比べながら、

『矢張り本物に違ひはありませんねエ』

と云つて驚くほど大きな聲で笑つた。

十月廿三日。

うす闇の殘つてゐる午前五時、昨夜の草鞋のまだ濕つてゐるのを穿きしめてその溪間の湯の宿を立ち出でた。峰々の上に冴えてゐる空の光にも土地の高みが感ぜられて、自づと肌寒い。K―君たち二人はけふ一日遊んでゆくのださうだ。

吹路の急坂にかゝつた時であつた。十二三から廿歳までの間の若い女たちが、三人五人と組を作つて登つて來るのに出會つた。眞先きの一人だけが眼明で、あとはみな盲目である。そして各自に大きな紺の風呂敷包を背負つてゐる。訊けばこれが有名な越後の瞽女（ごぜ）であるさうだ。收獲前の一寸した農閑期を覘つて稼ぎに出て來て、雪の來る少し前に斯うして歸つてゆくのだといふ。

『法師泊りでせうから、これが昨夜だつたら三味や唄が聞かれたのでしたがね』

とM―君が笑つた。それを聞きながら私はフツと或る事を思ひついたが、ひそかに苦笑して默つてしまつた。宿屋で聞かうよりこのまゝこの山路で呼びとめて彼等に唄はせて見たかつた然し、さういふ事をするには二人の同作者が餘りに善良な青年である事にも氣がついたのだ。驚いた事にはその三々五々の組が二三丁の間も續いた。すべてで三十人はゐたであらう。落葉の上に彼等を坐らせ、その二三十挺の三味を掻き鳴らさせたならば、蓋し忘れ難い記臆になつたであらうものをと、そゞろに殘り惜しくも振返へられた。這ふ樣にして登つてゐる彼等の姿は、一丁二丁の間をおいて落葉した山の日向に續いてゐた。

猿ヶ京村を出外れた道下の笹の湯温泉で晝食をとつた。相迫つた斷崖の片側の中腹に在る一軒家で、その二階から斜め眞上に相生橋が仰がれた。相生橋は群馬縣で第二番目に高い橋だといふ事である。切り立つた斷崖の眞中どころに鎹の樣にして架つてゐる。高さ二十五間、欄干に倚つて下を見ると膽の冷ゆる思ひがした。しかもその兩岸の崖にはとりどりの雜木が鮮かに紅葉してゐるのであつた。

湯の宿温泉まで來ると私はひどく身體の疲勞を感じた。數日の歩きづめとこの一二晩の睡眠不足とのためである。其處で私は二人の青年に別れて、日はまだ高かつたが、一人だけ其處の宿屋に泊る事にした。もつともM―君は自分の村を行きすぎ其處まで見送つて來てくれたのであつた。U―君とは明日また沼田で逢ふ約束をした。

一人になると、一層疲勞が出て來た。で、一浴後直ちに床を延べて寢てしまつた。一時間も眠つたとおもふ頃、女中が來てあなたは若山といふ人ではないかと訊く。不思議に思ひながらさうだと答へると一枚の名刺を出して斯ういふ人が逢ひ度いと下に來てゐるといふ。見ると驚いた、昨日その留守宅に寄つて來たH―君であつた。仙臺からの歸途今日沼田の本屋に寄つて私たちが一泊豫定で法師に行つた事を聞き、ともすると途中で會ふかも知れぬと云はれて途々氣をつけて來た、そしてもう夕方ではあるし、ことによるとこの邊に泊つて居らるゝかも知れぬと立ち寄つて訊いてみた宿屋に偶然にも私が寢てゐたのだといふ。あまりの奇遇に我等は思はず知らずひしと兩手を握り合つた。

十月廿四日。

H―君も元氣な青年であつた。昨夜、九時過ぎまで語り合つて、そして提灯をつけて三里ほどの山路を登つて歸つて行つた。

今朝は私一人、矢張り朗らかに晴れた日さしを浴びながら、ゆつくりと歩いて沼田町まで歸つて來た。打合せておいた通り、U―君が青池屋といふ宿屋で待つてゐた。そして昨夜の奇遇を聞いて彼も驚いた。彼はM―と初對面であつたと同じくH―をもまだ知らないのである。

夜、宿屋で歌會が開かれた。一二三日前の夜訪ねて來た人たち

を中心とした土地の文藝愛好家たちで、歌會とは云つても專門に歌を作るといふ人々ではなかつた。みな相當の年輩の人たちで、私は彼等から土地の話を面白く聞く事が出來た。そして思はず酒をも過して閉會したのは午前一時であつた。法師で會つたK―君も夜更けて其處からやつて來た。この人たちは九里や十里の山路を歩くのを、ホンの隣家に行く氣でゐるらしい。

十月廿五日

昨夜の會の人たちが町はづれまで送つて來て呉れた。U―、K―の兩君だけはもう少し歩きませうと更らに半道ほど送つて來た。其處で別れかねてまた二里ほど歩いた。收獲時の忙しさを思つて、農家であるU―君をば其處から強いて歸らせたが、K―君はいつそ此處まで來た事ゆゑ老神まで參りませうと、終に今夜の泊りの場所まで一緒に行く事になつた。宿屋の下駄を穿き、帽子もかぶらぬまゝの姿である。

路はずつと片品川の岸に沿ふた。これは實は舊道であるのださうだが、故らに私はこれを選んだのであつた。樂しんで來た片品川峽谷の眺めは矢張り私を落膽せしめなかつた。ことに岩室といふあたりから佳くなつた。山が深いため、紅葉はやゝ過ぎてゐたがなほ到る處にその名殘を留めて、しかも岩の露はれた險しい山、いたゞきかけて煙り渡つた落葉の森、それらの山の次第に迫り合つた深い底には必ず一つの溪が流れて瀧となり淵となり、やがてそれがまた隨所に落ち合つては眞白な瀬をなしてゐるのである。歩一歩と醉つた氣持になつた私は、歩みつゝ思ひつ幾つかの歌を手帳に書きつけた。

きりぎしに通へる路をわが行けば天つ日は照る高き空より

路かよふ崖のさなかをわが行きてはろけき空を見ればかなしも

木々の葉の染れる秋の岩山のそば路ゆくとこころかなしも

きりぎしに生ふる百木のたけ伸びずとりどりに深きもみぢせるかも

歩みつゝこゝろ怯ぢたるきりぎしのあやふき路に匂ふもみぢ葉

わが急ぐ崖の眞下に見えてをる丸木橋さびしあらはに見えて

散りすぎし紅葉の山にうちつけに向ふながめの寒けかりけり

しめりたる落葉がうへにわが落す煙草の灰は散りて眞白き

とり出でゝ吸へる煙草におのづから心は開けわが憩ふかも

岩陰の青渦がうへにうかびゐて色あざやけき落葉もみぢ葉

苔むさぬこの荒溪の岩にゐて啼く鶺鴒のあはれなるかも

高き橋此處にかゝれりせまりあふ岩山の峽のせまりどころに

いま渡る橋はみじかし山峽の迫りきはまれる此處にかゝりて

古りし欄干ほとほとゝわがうちたゝき渡りゆくかもこの古橋を

いとほしきおもひこそ湧け岩山の峽にかゝれるこの古橋に

老神温泉に着いた時は夜に入つてゐた。途中で用意した蠟燭をてんでに點して本道から温泉宿の在るといふ川端の方へ急な坂を降りて行つた。宿に入つて湯を訊くと、少し離れてゐてお氣の毒ですが、と云ひながら背の高い老爺が提灯を持つて先に立つた。どの宿にも内湯は無いと聞いてゐたので何の氣もなくその後に從つて戸外へ出たが、これはまた花敷温泉とも異つたたいへんな處へ湯が湧いてゐるのであつた　手放しでは降りることも出來ぬ嶮しい崖の岩坂路を幾度か折れ曲つて辛うじて川原へ出た。そしてまた石の荒い川原を辿る。その中洲の樣になつた川原の中に低い板屋根を設けて、その下に湧いてゐるのだ。這ひつ坐りつ、底には細かな砂の敷いてある湯の中に永い間浸つてゐた。いま我等が屋根の下に吊した提灯の灯がぼんやりとうす赤く明るみを持つてゐるだけで、四邊は油の樣な闇である。そして靜かにして居れば疲れた身體にうち響きさうな荒瀬の音がツイ横手のところに起つて居る。やゝぬるいが、柔かな、滑らかな湯であつた。屋根の下から出て見るとこまかな雨が降つてゐた。石の頭にぬぎすてゝおいた着物は早やしつとりと濡れてゐた。

註文しておいたとろゝ汁が出來てゐた。夕方釣つて來たといふ山魚の魚田も添へてあつた。折柄烈しく[illegible]ゝ降りそめた雨を聞きながら、火鉢を擁して手づから酒をあたゝめはじめ

た。

十月廿六日。

起きて見ると、ひどい日和になつてゐた。

『困りましたネ、これでは立てませんネ』

渦を卷いて狂つてゐる雨風や、ツイ溪向うの山腹に生れつ消えつして走つてゐる霧雲を、僅かにあけた雨戸の隙間に眺めながら、朝まだきから德利をとり寄せた。止むなく滯在ときめて漸くいゝ氣持に醉ひかけて來ると、急に雨戸の隙が明るくなつた。

『オヤ〳〵、晴れますよ』

さう云ふとK―君は飛び出して番傘を買つて來た。私もそれに賴んで大きな油紙を買つた。そして尻から下を丸出しに、尻から上、首までをば僅かに兩手の出る樣にして、くる〳〵と油紙と紐とで包んでしまつた。これで帽子をまぶかに冠れば洋傘はさゝれずとも間に合ふ用意をして、宿を立ち出でた。そして程なく、雨風のまだ全くおさまらぬ路ばたに立つてK―君と別れた。彼はこれから沼田へ、そして自分の村下新田まで歸つて

ゆくのである。獨りになつてひた急ぎに急ぐ途中に吹割の瀧といふのがあつた。長さ四五町幅三町ほど、極めて平滑な川床の岩の上を初め二三町が間、辛うじて足の甲を潤す深さで一帶に流れて來た水が或る場所に及んで次第に一個所の岩の窪みに落い瀨を立てゝ集り落つる。窪みの深さ二三間、幅一二間、その底に落ち集つた川全帶の水は、まるで生糸の大きな束を幾十百ち集めた樣に、雪白な中に微かな青みを含んでくるめき流るゝ事七八十間、其處でまた急に底知れぬ淵となつて靑み湛へてゐるのである。淵の上にはこの數日見馴れて來た嶮崖が散り殘りの紅葉を纏ふて聳えて居る。見る限り一面の淺瀨が岩を掩ふて流れてゐるのはすがすがしい眺めであつた。それが集るともなく一ところに集り、やがて凄じい渦となつて底深い岩の龜裂の間を轟き流れてゆく。岩の間から迸り出た水は直ぐ其處に湛へて靜かな深みとなり眞上の岩山の影を宿してゐる。土地の自慢であるだけ、珍しい瀧ではあつた。

吹割の瀧を過ぎるころから雨は晴れてやがて澄み切つた晩秋の空となつた。片品川の流は次第に痩せ、それに沿ふて登る路

も漸く細くなつた。須賀川から鎌田村あたりにかゝると、四邊の眺めがいかにも高い高原の趣きを帶びて來た。白々と流れてゐる溪を遙かの下に眺めて辿つてゆくその高みの路ばたはおほく桑畑となつてゐた。その桑が普通見る樣に年々に根もとから伐るのでなく、幹は伸びるに任せておいて僅かに枝先を刈り取るものなので、一抱へに近い樣な大きな木が畑一面に立ち並んでゐるのである。老梅などに見る樣に半ばは幹の朽ちてゐるものもあつた。その大きな桑の木の立ち並んだ根がたにはおほく大豆が植ゑてあつた。既に拔き終つたのが多かつたが、稀には黃いろい桑の落葉の中にかゞんで、枯れ果てたそれを拔いてゐる男女の姿を見ることがあつた。土地が高いだけ、冬枯れはてた木立の間に見るだけに、その姿がいかにも佗しいものに眺められた。

そろ〳〵暮れかけたころ東小川村に入つて、其處の豪家C―家を訪うた。明日下野國の方へ越えて行かうとする山の上に在る丸沼といふ沼に同家で鱒の養殖をやつてをり、其處に番小屋があり番人が置いてあると聞いたので、その小屋に一晩泊めて貰ひ度く、同家に宛てゝの紹介狀を沼田の人から貰つて來てゐたのであつた。主人は不在であつた。そして內儀から番人の許諾を得番人へ宛てゝの添手紙をも貰ふ事が出來た。

村を過ると路はまた峽谷に入つた。落葉を踏んで小走りに急いでゐると、三つ四つ峰の尖りの集り聳えた空に、望の夜近い大きな月の照りそめてゐるのを見た。落葉木の影を踏んで、幸に迷ふことなく白根溫泉のとりつきの一軒家になつてゐる宿屋まで辿り着くことが出來た。

此處もまた極めて原始的な湯であつた。湧き溢れた湯槽には壁の破れから射す月の光が落ちてゐた。湯から出て、眞赤な炭火の山盛りになつた圍爐裡端に坐りながら、何は兎もあれ、酒を註文した。ところが、何事ぞ、無いといふ。驚き慌てゝ何處か近くから買つて來て貰へまいかと賴んだ。宿の子供が兄妹つれで飛び出したが、やがて空手で歸つて來た。更らに財布から幾粒かの銅貨銀貨をつまみ出して握らせながら、も一つ遠くの店まで走つて貰つた。

心細く待ち焦れてゐると、急に鋭く屋根を打つ雨の音を聞い

た。先程の月の浸み込んでゐる頃に、この氣まぐれな山の時雨がいかにも異樣に、佗びしく響いた。雨の音と、ツイ緣側のさきを流れてゐる溪川の音とに耳を澄ましてゐるところへぐしよ濡れになつて十二と八歲の兄と妹とが歸つて來た。そして兄はその濡れた羽織の蔭からさも手柄顏に大きな壜を取り出して私に渡した。

十月廿七日。

宿屋に酒の無かつた事や、月は射しながら烈しい雨の降つた事がひどく私を寂しがらせた。そして案内人を雇ふこと、明日の夜泊る丸沼の番人への土產でもあり自分の飲み代でもある酒を貰つて來て貰ふことを昨夜更けてから宿の主人に賴んだのであつたが、今朝未明に起きて湯に行くと既にその案内人が其處に浸つてゐた。顏の蒼い、眼の險しい四十男であつた。

昨夜の時雨が其儘に氷つたかと思はるゝばかりに、路には霜が深かつた。溪の上の空は耳の痛むまでに冷やかに澄んでゐた溪に沿ふて危い丸木橋を幾度か渡りながら、やがて九十九折の險しい坂にかゝつた。それと共に四邊はひし／＼と立ち込んだ深い森となつた。

登るにつれてその森の深さがいよ／＼明かになつた。自分等のいま登りつゝある山を中心にして、それを圍む四周の山が悉くぎつしりと立ち込んだ密林となつてゐるのである。案内人は語つた。この山々の見ゆる限りはすべてC—家の所有である、平地に均らして五里四方の上に出てゐる、そしてC—家は昨年この山の木を或る會社に賣り渡した、代價四十五萬圓、伐採期間四十五個年間、一年に一萬圓づつ伐り出す割に當り、現にこの邊に入り込んで伐り出しに從事してゐる人夫が百二三十人に及んでゐる事などを。

なるほど、路ばたの木立の蔭にその人夫たちの住む小屋が長屋の樣にして建てられてあるのを見た。板葺の低い屋根で、その軒下には女房が大根を刻み、子供が遊んでゐた。そしてをり／＼溪向ふの山腹に大風の通る樣な音を立てゝ大きな樹木の倒るゝのが見えた。それと共に人夫たちの擧げる叫び聲も聞えた或る人夫小屋の側を通らうとしてに不圖立ち停つた案内人が、

『ハ、ア、これだナ』

と呟くので聞いて立ち寄つて見ると其處には二尺角ほどの大きな厚板が四五枚立てかけてあつた。

『これは旦那、楓の板ですよ、この山でも斯んな楓は珍しいつて評判になつてるんですがネ、……、なるほど、いゝ木理だ』

撫でつ叩きつして暫く彼は其處に立つてゐた。

『山が深いから珍しい木も澤山あるだらうネ』

私もこれが楓の木だと聞いて驚いた。

『もう一つ何處から途方もねえ黒檜が出たつて云ひますがネ、みんな人夫頭の飲代になるんですよ、會社の人たちア知りやしませんや』

と嘲笑ふ様に云ひ捨てた。

坂を登り切ると、聳えた峰と峰との間の廣やかな澤に入つた。澤の平地には見る限り落葉樹が立つてゐた。これは楢で、これが山毛欅と平常から見知つてゐる筈の樹木を指されても、到底信ずる事の出來ぬほど、形の變つた巨大な老木ばかりであつた。そしてそれらの根がたに堆く積つて居る落葉を見れば、なるほど見馴れた楢の葉であり山毛欅の葉であるのであつた。

『これが橡、あれが桂、惡ダラ、澤胡桃、アサヒ、ハナ、ウリノ木、……』

事ごとに眼を見張る私を笑ひながら、初め無氣味な男だと思つた案内人は行く〱種々の樹木の名を倦みもせずに教へて呉れた。それから不思議な樹木の悉くが落葉しはてた中に、をり〱輝くばかり楓の老木の紅葉してゐるのを見た。おほかたはもう散り果てゝゐるのであるが、極めて稀にさうした楓が、白茶けた他の枯木立の中に立混つてゐるのであつた。

そして眼を擧げて見ると澤を圍む遠近の山の山腹は殆んど漆黒色に見ゆるばかり黒に茂り入つた木の山であつた。常盤木の森であつた。

『樅、栂、檜、唐檜、黒檜、とゞ、とゞ』

と案内人はそれらの森の木を數へた。それらの峰の立ち並んだ中に唯だ一つ白々と岩の穗を見せて聳えてゐるのはまさしく白根火山の頂上であらねばならなかつた。

下草の篠のしげみの光りゐてならび寒けき冬木立かも

あきらけく日のさしとほる冬木立木々とりどりに色さびて

立つ

時知らず此處に生ひたち枝張れる老木を見ればなつかしきかも

散りつもる落葉がなかに立つ岩の苔枯れはてゝ雪のごと見ゆ

わが過ぐる落葉の森の木がくれて白根が嶽の岩山は見ゆ

遅れたる楓ひともと照るばかりもみぢしてをり冬木が中に

枯木なす冬木の林ゆきゆきて行きあへる紅葉にこゝろ躍らす

この澤をとりかこみなす樅栂の黒木の山のながめ寒けき

聳ゆるは樅栂の木の古りはてし黒木の山ぞ黒色に見ゆ

黒色に澄める黒木のとほ山にはだらに白き白樺ならむ

澤を行き盡くすと其處に端然として澄み湛へた一つの沼があつた。岸から直ちに底知れぬ蒼みを宿して、屈折深い山から山の根を浸して居る。三つ續いた火山湖のうちの大尻沼がそれであつた。水の飽くまでも澄んでゐるのと、それを圍む四邊の山が墨色をしてうち茂つた黒木の山であるのとが、この山上の古沼を一層物寂びたものにしてゐるのであつた。

その古沼に端なく私は美しいものを見た。三四十羽の鴨が羽根をつらねて靜かに水の上に浮んでゐたのである。思はず立ち停つて瞳を凝らしたが、時を經ても彼等はまひ立たうとしなかつた。路ばたの落葉を敷いて、飽くことなく私はその靜かな姿に見入つた。

登り來しこの山あひに沼ありて美しきかも鴨の鳥浮けり

樅黒檜黒木の山のかこみあひて眞澄める沼にあそぶ鴨鳥

見て立てるわれには怯ぢず羽根つらね浮きてあそべる鴨鳥の群

岸邊なる枯草敷きて見てをるやまひたちもせぬ鴨鳥の群を

羽根つらねうかべる鴨をうつくしと靜けしと見つこゝろかなしも

山の木に風騒ぎつゝ山かげの沼の廣みに鴨のあそべり

浮草の流らふごとくひと群の鴨鳥浮けり沼の廣みに

鴨居りて水の面あかるき山かげの沼のさなかに水皺寄る見ゆ

水鐵寄る沼のさなかに浮びゐて靜かなるかも鴨鳥の群

おほよそに風に流れてうかびたる鴨鳥の群を見つゝかなしも

風たてば沼の隈回のかたよりに寄りてあそべり鴨鳥の群

さらに私を驚かしたものがあつた。私たちの坐つてゐる路下の沼のへりに、たけ二三間の大きさですつと茂り續いてゐるのが思ひがけない石楠木の木であつたのだ。深山の奥の靈木としてのみ見てゐたこの木が、他の沼に葭葦の茂るがごとくに立ち生うてゐるのであつた。私はまつたく事ごとに心を躍らせずはゐられなかつた。

沼のへりにおほよそ萃の生ふるごと此處に茂れり石楠の木は

沼のへりの石楠木咲かむ水無月にまた見に來たぞ此處の沼見に

また來たと思ひつゝさびしいそがしきくらしのなかをいつ出で來む

天地のいみじきながめに逢ふ時しわが持ついのちかなしかりけり

日あたりに居りていこへど山の上の凍みいちじるし今はゆきなむ

昂奮の後のわびしい心になりながら沼のへりに沿うた小徑の落葉を踏んで歩き出すと、程なくその沼の頭とも云ふべき清らかな水がかなりの瀬をなして流れ入つてゐる處に出た。そして三四十間その瀬について行くとまた一つの沼を見た。大尻沼より大きい、丸沼であつた。

沼と山の根との間の小廣い平地に三四軒の家が建つてゐた。いづれも檜皮葺の白々としたもので、雨戸もすべてうすく白く閉ざゝれてゐた。不意に一疋の大きな犬が足許に吠えついて來た。胸をときめかせながら中の一軒に近づいてゆくと、中から一人の六十近い老爺が出て來た。C―家內儀の手紙を渡し、一泊を請ひ、直ぐ大圍爐裡の榾火の側に招ぜられた。

番人の老爺が唯だ一人居ると私は先に書いたが、實はもう一人、棟續きになつた一室に丁度同じ年頃の老人が住んでゐるのであつた。C―家がこの丸沼に紅鱒の養殖を始めると農商務省

の水産局からC―家に頼んで其處に一人の技手を派遣し、その養殖狀態を視る事になつて、もう何年かたつてゐる。老人はその技手であつたのだ。名をM―氏といひ、桃の樣に尖つた頭には僅かにその下部に丸く輪をなした毛髮を留るのみで、つる〱に禿げてゐた。

言葉少なの番人は暫く榾火を焚き立てた後に、私に釣が出來るかと訊いた。大抵釣れるつもりだと答へると、それでは沼で釣つて見ないかと云ふ。實はこちらから親み度いところだつたので、ほんとに釣つてもいゝかと云ふと、いゝどころではない晩にさしあげるものがなくて困つてゐたところだからなるたけ澤山釣つて來いといふ。子供の樣に嬉しくなつて早速道具を借り、蚯蚓を掘つて飛び出した。

『ドレ、俺も一疋釣らして貰ふべい』

案内人もつゞいた。

小舟に棹をさして、岸寄りの深みの處にゆき、糸をおろしたいつとなく風が出て、日はよく照つてゐるのだが、顏や手足は痛いまでに冷えて來た。沼をめぐつてゐるのは例の黑木の山である。その黑い森の中にところ〲眞白な樹木の立ち混つてゐるのは白樺の木であるさうだ。風は次第に強く、やがてその黑木の山に薄らかに雲が出て來た。そして驚くほどの速さで山腹を走つてゆく。あとから〱と濃く薄く現はれて來た。空にも生れて來た。空にも生れて太陽を包んでしまつた。

細かな水皺の立ち渡つた沼の面はたゞ冷やかに輝いて、水の深さ淺さを見ることも出來ぬ。漸く心のせきたつたころ、ぐいと糸が引かれた。驚いて上げてみると一尺ばかりの色どり美しい魚がかゝつて來た。私にとつては生れて初めて見る魚であつたのだ。惶てゝ餌を代へておろすと、またかゝつた。三疋四疋と釣れて來た。

『旦那は上手だ』

案内人が側で呟いた。どうしたのか同じところに同じ餌を入れながら彼のには更らに魚が寄らぬのであつた。一疋二疋とまた私のには釣れて來た。

『ひとつ俺は場所を變へて見やう』

彼は舟から降りて岸づたひに他へ釣つて行つた。

何しろ寒い。魚のあぎとから離さうとしては鈎を自分の指にさし、餌をささうとしてはまた刺した。すつかり指さきが凍えてしまつたのである。あぎとの血と自分の血とで掌が赤くなつた。

丁度十疋になつたを折に舟をつけて家の方に歸らうとすると一疋の魚を提げて案内人も歸つて來た。三疋を彼に分けてやると禮を云ひながら木の枝にそれをさして、やがて沼べりの路をもと來た路へ歸つて行つた。

洋燈より榾火の焰のあかりの方が強い様な爐端で、私の持つて來た一升壜の開かれた時、思ひもかけぬ三人の大男が其處に入つて來た。C―家の用でこゝよりも山奥の小屋へ黑檜の板を挽きに入り込んでゐた木挽たちであつた。用が濟んで村へ歸へるのだが、もう暮れたから此處へ今夜泊させて呉れと云ふのであつた。迷惑がまざ／＼と老爺人の顔に浮んだ。昨夜の宿屋で私はこの老爺の酒好きな事を聞き、手土産として持つて來たこの一升壜は限りなく彼を喜ばせたのであつた。これは早や思ひがけぬ正月が來たと云つて彼は顔をくづして笑つたのであつた。そして私がM―老人を呼ばうといふのをも押しとゞめて、たゞ二人だけでこの飲料を樂しまうとしてゐたのであつた。其處へ彼の知合である三人の大男が入り込んで來て同じく爐端へ腰をおろしたのだ。

同じ酒ずきの私には、この老爺の心持がよく解つた。幾日か山の中に寢泊りして出て來た三人が思ひがけぬこの匂ひの煮え立つのを嗅いで胸をときめかせてゐるもよく解つた。そして此處にものゝ五升もあつたらばなア、と同じく心を騷がせながら咄嗟の思ひつきで私は老爺に云つた。

『お爺さん、このお客さんたちにも一杯御馳走しやう、そして明日お前さんは僕と一緒に湯元まで降りやうじやアないか、其處で一晩泊つて存分に飲んだり喰べたりしませうよ』

と。

爺さんも笑ひ、三人の木挽たちも笑ひころげた。

僅かの酒に、その場の氣持からか、五人ともほと／＼に醉つてしまつた。小用にと庭へ出て見ると、風は落ちて、月が氷の樣に沼の眞上に照つてゐた。山の根にはしつとりと濃い雲が降

りてゐた。

十月廿八日。

朝、出がけに私はM―老人の部屋に挨拶に行つた。此處には四斗樽ほどの大きな圓い暖爐が入れてあつた。その側に破れ古びた洋服を着て老人は煙管をとつてゐた。私が今朝の寒さを云ふと、机の上の日記帳を見やりながら、

『室内三度、室外零度でありましたからなア』

といふ發音の中に私は彼が東北生れの訛を持つことを知つた
そして一つ二つと話すうちに、自身の水產學校出身である事を語つて、

『同じ學校を出ても村田水產翁の樣になる人もあり、私の樣に斯んな山の中で雪に埋れて暮すのもありますからなア』

と大きな聲で笑つた。雪の來るのももう程なくであるさうだ。一月、二月、三月となると全くこの部屋以外に一歩も出られぬ朝夕を送る事になるといふ。

老人は立ち上つて、

『鱒の人工孵化をお目にかけませうか』

と板圍ひの一棟へ私を案内した　其處には幾つとなく置き並べられた原板作りの長い箱があり、すべての箱に水がさら／＼と寒いひゞきを立てゝ流れてゐた。箱の中には孵へされた小魚が蟲の樣にして泳いでゐた。

昨夜の約束通り私が老番人を連れてその沼べりの家を出かけやうとすると、急にM―老人の部屋の戸があいて老人が顏を出した。そして叱りつける樣な聲で、

『××』

と番人の名を呼んで、

『今夜は歸らんといかんぞ、いゝか』

と云ひ捨てゝ戸を閉ぢた。

番人は途々M―老人に就いて語つた。あれで學校を出て役人になつて何十年だつか知らんがいまだに月給はこれ／＼であること、然し今はC―家からも金は幾ら／＼を貰つてゐること、酒は飲まず、いゝ物はたべず、この上なしの吝嗇だからたゞ溜る一方であること、俺と一緒では何彼と損がゆくところからあゝして自分自身で煮炊をしてたべてゐる事などを。

丸沼のへりを離れると路は昨日終日遠く眺めて來た黒木の密林が中に入つた。樅、栂、などすべて針葉樹の巨大なものかはてしなく並び立つて茂つてゐるのである。ことに或る場所では見渡す限り唐檜のみの茂つてゐるところがあつた。この木をも私は初めて見るのであつた。葉は樅に似、幹は杉の樣に眞直ぐに高く、やゝ白味を帶びて聳えて居るのである。そして賣り渡された四十五萬圓の金に割り當てると、これら一抱二抱の樹齡もわからぬ。大木老樹たちが平均一本六錢から七錢の値に當つてゐるのださうだ。日の光を遮つて鬱然と聳えて居る幹から幹を仰ぎながら、私は涙に似た愛惜のこゝろをこれらの樹木たちに覺えざるを得なかつた。

長い坂を登りはてるとまた一つの大きな蒼い沼があつた。菅沼と云うた。それを過ぎてやゝ平らかな林の中を通つてゐると端なく私は路ばたに落た何やらの青い草むらを噴きあげてむく／＼と湧き出てゐる水を見た。案内人に訊ねると、これが菅沼、丸沼、大尻沼の源となる水だといふ。それを聞くと私は思はず躍り上つた。これがそれらの沼の水源と云へば、とりも直さず片品川、大利根川の一の水源でもあらねばならぬのだ。ばしや／＼と私はその中へ踏みこんで行つた。そして切れさ樣に冷いその水を掬み返へし／＼幾度となく掌に掬んで、手を洗ひ顏を洗ひ頭を洗ひ、やがて腹のふくるゝまでに貪り飲んだ。

草鞋を埋むる霜柱を踏んで、午前十時四十五分、終に金精峠の絕頂に出た。眞向ひにまろやかに高々と聳えてゐるのは男體山であつた。それと自分の立つてゐる金精峠との間の根がたに白銀色に光つて湛えてゐるのは湯元湖であつた。これから行つて泊らうとする湯元溫泉はその湖岸であらねばならぬのだ。ツイ右手の頭上には今にも崩れ落つるばかりに見える白根火山が聳えてゐた。男體山の右寄りにやゝ開けて見ゆるあたりは戰場ケ原から中禪寺湖であるべきである。今までは每日／＼おほく深間へ／＼、山奥へ／＼と興深く入り込んで來たのであつたがいまこの分水嶺の峯に立つて眺めやる東の方は流石に明るく開けて感ぜらるゝ、これからは今までと反對に廣く明るく、その方角へ向つて進むのだとおもふと自づと心の輕くなるのを覺えた。背伸びをしながら其處の落葉の中に腰をおろすと、其處には

群馬栃木の縣界石が立つてゐた。そして四邊の樹木は全く一葉をとゞめず冬枯れてゐる。その枯れはてた枝のさき〲には、既に早やうす茜色に氣色ばんだ木の芽が丸みを見せて萌えかけてゐるのである。深山の木は斯うして葉を落すと直ちに後の新芽を宿して、さうして永い間雪の中に埋もれて過し、雪の消るを待つて一度に萌え出づるのである。

其處に來て老番人の顏色の甚しく曇つてゐるのを私は見た。どうかしたかと訊くと、旦那、折角だけれど俺はもう湯元に行くのは止しますべえ、といふ。どうしてだ、といぶかると、これで湯元まで行つて引返すころになるといま通つて來た路の霜柱が解けてゐる、その山坂を酒に醉つた身でば歩くのが恐ろしいといふ。

『だから今夜泊つて明日朝早く歸ればいゝぢやないか』

『やつぱりさうも行きましねエ、いま出かけにもあゝ云ふとりましたから……』

淚ぐんでゐるのかとも見ゆるその濁んだ眼を見てゐると、しみ〲私はこの老爺が哀れになつた。

『さうか、なるほどそれもさうかも知れぬ、……』

私は財布から紙幣を取り出して鼻紙に包みながら、

『ではネ、これを上げるから今度村へ降りた時に二升なり三升なり買つて來て、何處か戸棚の隅にでも隱して置いて獨りで永く樂しむがいゝや、では御機嫌よう、左樣なら』

さう云ひ捨つると、彼の挨拶を聞き流して私はとつと掌を立てた樣な急坂を湯元溫泉の方へ馳け降り始めた。（終）



雜　七

武者小路實篤

早く出て來い。

自分は何處かに
本當のことのわかる巨人が
かくれてゐることを信じる
早く出て來い。

お前の出てくるのを
世界は待つてゐる
お前は靜かに生長してゐるのだらうか

早く出て來い。

嵐は叫び
海面はざわつけども
お前は靜かに考へてゐるのだらう。
早く出て來い。

お前が立ち上る時
すべてのものは解決がつくであらう。
わからずやどもは影をひそめるだらう
早く出て來い。

今はもの丶わかる人が
孤獨な時代だ
わからずやが時を得てゐる
早く出て來い。

私は何にも要求しない
たゞ痒い處に手がとゞき
合點のゆくことをはつ切りしてくれるものが出てほしい。
早く出て來い。

今はあまりに頭のわるい
がさつなものが時を得てゐる。
彼等の云ふことは實にはがゆい

早く出て來い。

彼等の云ふことをきくと
頭が益々こんがらがる
本當のことがわからなくなる。
巨人よ。早く出て來い。

呪ひの返上

昨日
自分の處に死神と號して
ハガキをよこしたものがある
この十五日に迎ひにゆくから
棺をけをつくつておけと云ふのだ。

から云ふ呪ひは
自分は御返上することにきめてゐる。
どうか受けとつてほしい。

自分は

自分はわからずやを
氣にしないで
自分の云ひたいことだけを
平氣に云つてゆきたい。
自分は一人になればなんでもわかるのだ。
たゞそれを人に通じさせやうと思ふと
いつもはがゆい
自分が馬の言葉が云へないのは
殘念なことだ。

水平社の運動

水平社の運動には全然賛成だ
彼は他人を人間ぢやないとは云はない、
自分達が人間だと云ふのだ
之はまちがいのない事實だ。

武士階級

今に段々
新しい武士階級が生れさうだ
暴力以外たよりになるものはないと、
生命の惜しい窮猫や窮鼠が思ふやうになつた、
困つたものだ。

暴力否定

暴力否定と、
支配階級の否認
之が新しい社會運動には
是非、必要なものだ
さもないと野心家に利用される
野心家の野心がどうしても
生きない社會が
自分達の望む社會だ。

自分は

自分は何と云つても眞理は死なゝいことを知つてゐる。

より本當のことが生ることを知つてゐる。
それはいかなる思想上の嵐が來ても
暴力が來てもどうすることも出來ないことを知つてゐる。
自分は益々本當のことが知りたい。
それが自分の願ひだ。
（二三、三、）



わが叙情詩集

室生犀星

ここに蒐めたるはみな我が十八九歳より二十二歳までに書きためたる叙情詩なり。されば其の調べみな幼なく情切なく心いつも柔順なるときの姿なれば、取り出して世に問はんとするにはあらず、ただわが詩をよみたまふ人々に讀み棄てたまへとは言はんとするなり。――いまは俗人悪文のわれなれど、そのかみは良き心もてる青年なりしならん――かく信ずるがゆえに斯くは蒐めしなり。言葉にがくは咎めたまふなかれとこそ――。

春の寺

うつくしきみ寺なり
み寺にさくられうらんたれば
うぐひすしたたり
さくら樹にすずめら交り
かんかんと鐘鳴りてすずろなり。

かんかんと鐘鳴りてすずろなれば
をとめらひそやかに
ちちははのなすことをして遊ぶなり。
門もくれなゐ炎々と
うつくしき春のみ寺なり。

朱の小箱

君がかゆげなる卓のうへの

いつも朱なる小箱には
何にを秘めたまへるものなりや。
われきみが窓べを過ぎむとするとき
小箱まづ月にうつり
こころあやしく跳りてやまず……。

そは柔らかきりぼんのたぐひか
もしくば
うら若き娘ごころをのべたまふ
やさしかるうたのたぐひか——。

逢ひて來し夜は

うれしきことを思ひて
ひとりねる夜はかぎりなく
さひはひの波おさまり
小さくうれしさうなる
われのいとしさよ。

やがてまた
うれしさを祈りに乘せて
君がねむれる家におくらむ。

山なみ

うれしや
ふるさとに自動車がしなをつくりて
鋭き山なみのもとを過ぎゆきぬ。
山より月のぼりいで
われらが上に玻璃をはりつむる。
君にこそこよひ
わが思ひおかさむ。

山の温泉

めさむれば寂しやひとり
うぐひすの蒼き谷間に鳴き居れり、
寂しや、ただに鳴き居れり。

朝はすずしく明らかによくぞ晴れたり、
と見れば
谷あひの畑に
いとも靜かに
畑打つをみなあり――。

寂しやわれひとり山の温泉にありて
ものの本などを讀む。

櫟

しづかなる月のなか
櫟はそらを散りゆけり。

しぐれ過ぎ去り過ぎ來たり
つめたき月は水を出づ。

水のくらきに魚むらがり
ひかりのもとを泳ぎゆく。

南天の朱き玉

冬ざれのあらになるそのふに
南天の朱き玉のみをとりつややかに
くもりし空にうつりたり。

その朱なるたまに指ふるれば
わが永き眠りよりさめきたる。

青き魚を釣る人

ほのかなるなやみのうちに
ひと日過ぎゆき
ひと日しづかにかへりくる。
魚はかたみに青き鱗を上げ
噴き上げに打たれかなしむ。

藍のうろこも痛く
つりうどの眼もいたく……
魚はかなたにのがれゆき
鉢なでしこの日の表
つよき反射のなかに浮きも悲しむ。

榎の實

くらきは榎の實
枯れ草のなかに零れしが……
鬱々しきはその暗きいろ
立ちのぼり
光もとどかぬ草の冷たさ。
くらきは榎の實
つつくなよ
ゆがあきの鳥。

路上にしるすうた

ゆきずりのをみなをして
われらをおもはしめ
われらをおもはしめ

われらのごとく微かなる
そのなりはひをうたふもののために
なべての幸ひあらむこと。

日は夜に繼ぎてさびしさを
もはやわが忍びうるところにあらず、
をみなをして物をおもはしめ
をみなをしてものおもはしむること。

友に與へて

ともよ、なべてのともよ
われらまことにあどけなく
あどけなく物語ることを得ず
そのおもふこと深けれど
われらあひ逢ひはすれども
われら寂しくひとみ交はすのみ、
ともよ
なべてのともよ
われかくても過ぎゆくものか。

雪くる前

ひとすぢに逢ひたさの迫りて
酢のごとく烈しきもの
胸ふかく走りすぐるときなり
雪くると呼ばはる聲す
はやも白くはなりし屋根の上。

哀しき都市

都をおもふごとに、
こころ哀しくあえぎゆく。

都をおもふごとに
こころ酸ゆくおどりいで
靜かに座ることすらなし得ず。
都にはわが殘しつる
あえかに悲しき生活あり、
その生活の苦しくにがき顏
ああ、窓をさしのぞく。

都をおもふごとに
しろがねの建物すずしく浮み
その窓々の灯うかみいで
ああ、戀ひしともこひしや――。
都をおもふごとに
庭にいでてまだ朱き葉を見つむ。

冬の逢瀨

するどく透明なる玻璃をもて
わが身ぬちをとりまける冬、
夕となりて埋るる落葉のなかより
さしのぞく鋭どき冬、

ひややかに茶の木原花つけて
白々しきあけがた
ぴよろぴよろと渡りくる鳥をながめよ
うれひは又も伸びゆきて
かへりくる日もわかたず
君がふくらなる肩の上に
ふり積む雪をかきよけて
わが手もてしたしまむとする冬、

ああ冬となり
枯木のなみに打たれて
こひびとよ
われらいかなる逢瀬つづけむ。

栗寳

つゆふかきあしたなり
栗呼ぶこゑはかなしみて
晴れしがなかに起りくる。
ひびきにも影のさしそふ
あゝ、秋のあしたの路をいそしめよ
その聲はをみななり
鋭どさへ加へつつ
あでにやさしく
その聲はをみななり。

とんぼ釣り

ひげのある身がとんぼ釣り
このふるさとに
飛行機がとぶといふ
そのひるころのとんぼ釣り。
とんぼ釣りつつものを思へば
とんぼすういとのがれゆく。

洲崎の海

あかき日のもとにいづるなかれ
そのあほきひたひは光にいたからめ

×

君のねむれる顔は硫黄のごとし

なじみ深なるひたひなれど死のごとし。

×

冬ざれの洲崎の海
ひとりめざめかなしく
さぐりもあてしは冷たき肌なり。

×

宿を趁はれ
かくるべき家なし、
哀しき終電車にひたひ垂れ
きみとともにきく海の音。

×

あけぼののなかよりきたる電車に
いづこにかへらむわれかは知らず、
その蒼かりし空のはるかに
ひとつらの雁のわたれり。

×

あはれおもひいづるは洲崎の海、
かれはみやこになにをすつらむ。

滞郷異信

われ僧院にうづくまり
その眼もかたくとざされてあり
いかなる日のきたらば
この眼のひらかるべきかは知らず。
曙はしづかにひらかれ
ほのかに窓をあかるくす。

友よ、ふるさとはただに雨ふり
くらき日のみ垂れもなやめり。
その空のくらきをながむれば

わが心はかなしく閉さされ終る。
友よ、都よりゆめみけるふるさとの十月は
その綠を震はせわが指をおそれたり。

友よ、かの都なる過ぎこしにつかれ
とほくふるさとをおとなはむとして
まづしき旅裝をととのへしに
君はその手を振りてとどめたり。
ああ、ふるさとはわがさしのべし手にそむき
つめたき石を握らせり。

友よ、むしろ哀しきわれを生める
その母のひたひにむたび石を加ふるとも
かなしきわが出産はかへらざるべし。
まして山川の青きにつつまれあらむは
くるしき窒息のごとき假寐にして
わが眼はながく開かるべし。

浴泉雜詩

……伊豆伊東にて……

一人居

一人ゐて幾週りの日かすごしけむ——
日ごと　溫かさ加はりて
こころすこしあかるくなりゆく。
そのこころの明るさを日にいくたび
我が手にすくひ
嬉しげに眺めてはきのふけふを暮らしつ
されど寂しとはゆめ思はず。
かく妻には告げむ——。

みかんの木

だんだん畑の蜜柑の木に
あかつきの白雲かかり
黄ろき實の
世にとほとく洗はれ出でぬ――
かかる美くしき實の何せば生れしならん、
みなたわわにたり
みなまことのこころ湛えて
微風(そよかぜ)くればうなじ動き
あさ日にきらめく。

砂白くかわきて
影はみなひと葉とて漏ることなく
こまやかに匂ひこぼるる。

まことにこの木のかげに來れば
世はあかるく心晴れゆく。
童(わらべ)の群れてさわぐも
かかるこころを解きてぞあらん。

あかつきに佛あゆむといはば
このみかんの木のうへに
その足音のあらなむ。
かく思ひてみかんの木にもたれてあれば
世の憂きこころ早やも澄みゆく。

淺い春

みやこには霜まだきびしきに
早やも溫泉どころに
春のけはひさまよひ充ちぬ。

われのごとく心けがれしもの
行ひわるきものの
けふ病ひを得て
いと淺き春にめぐりあふとも
何のよろこびあらんものぞ――。

喜ばんとするは世過ぎたものの爲すこと、
わがごとく若くして老ひたる心もちたるものは
なにごとも坐して思ひ深むこと、
人に告げんこととてはなし。

まことに餘處人(よそびと)のきたりて
君はも何しに生きたまふぞと問はば
わがいのちしぜんに盡きるまで
ただ坐りてあらんと答へんのみ。

喜び樂しみのたぐひ今は全くかげなく
いたづらに温泉にこの身ひたすとも
汚れし俗人のこころ
何とて洗ひ清めんことを得べきぞ――。

俗人の歌

われは日ごとに詩文を賣り
詩文のこころそこなへども
かへり見るいとまとてはなし。
まことはうた人(びと)にあらずして
市に商ふひとびとに異はることを知らず。

われもの書けば悪鬼らむらがりて
なれこそまことを書くべしとは思はず
なれこそ恥ぢて世のそとに行くべしといふ。

まことにわれは俗人のこころを持ち
今様文人の道をけがすのみ。
いついかなる日とても
この花園の埒を越えゆかん――。

ひとたびは花園の径を喜びしかど
わがこころ世の好みにもるるか
世はさとく我がおろかなる性もてるか――
われはひたすらに俗人の道こひしく
世の常人のすぎこしにならふことの
朝夕に
身にしみてぞ覚ゆ。

昴星讃仰

新　村　出

夏の夜更けに織女と牽牛とが銀河を隔てながらしめやかに西をさして動いてゆくと、かささぎならぬ白鳥は翼(つばさ)をひろげ首をのばしてさも二人の仲を隔てようといらだつて天の河を南に突進しようとしつつも、これもやはり宿命に曳きずられて私たちの頭の上を西の方へと越してゆく時分、もう北冠の珠の飾りは大角星に引つぱられて遥かあなたに薄くなつてしまひ、こなた東のかたを仰ぐと天馬の形相がいよ〳〵高くなつて見える。もう星の品定めも一とほりついて少し退屈になつて來るころ、比叡山の方からあらはれて來た馭者座の主星がきらきらして更けゆく空の單調を破るかと思ふと、東山の上をかなりのぼつてお待兼ねの七つ星らしい一むれが見えそめる。もしや眼の迷ひではないかと疑はれるばかり最初はちらついてはつきりそれと定めがたい。舞子の花かんざしの銀のぴらぴらか、天女の瓔珞(やうらく)のゆらぎかと、暫しはかはゆらしさに氣を取られる。『澄んだ闇の空をのぼつて來て、銀絲にからみつけた螢の一むれのやうにちらつく」とテニスンが形容したそのスバルを今夜見つけたのだ。ほんに銀の螢籠を高く夜の空に吊るした様に見える。

私たちの氣のせいか、清少納言が枕草紙に「星は」と題してまつさきに「すばる」の名をかかげたのは、まんさら筆まかせではなく、敏感な女性の眼にこの星がえならずうつくしいと映じたためではなかつたか。いやいや、それなら得意の筆法で何とか一ことありさうなものと打消されさうでもあるが、無意識にその名が劈頭に筆端をほとばしつたその奥底に何やらわけがありげだと思ひたくてならぬ。この草紙には星の名を五つ數へ

立てたが、一時代以前の源順が勤子内親王に書いて上げた和名抄には、星に關する名稱を七八つ掲げてある。そこにもスバルは漏れなかつた。して見ると、平安朝の中ほどには、歌や文にこそ現はされなかつたけれど、民衆の眼についてゐた知名の星であつたことは爭はれない。さるにても萬葉以來七夕を詠じた無數の歌があるに反して、このかはいい一むらぼしが、因襲とはいひながら、一人の作家をも有ちえなかつた不幸を私たちは悲しんでやりたい。そこでこのいとしい星を先頭に出してくれた淸女をたたへずにはをられぬわけである。この憫むべき星の名は、歌詞には度外視されたから、例へば順徳院の八雲御抄にも上げて戴けなかつたのは當然な運命で今更愚痴もいへぬ。

舊約聖書の約百記に、昴すばるの絡を結びつけ得べきかといふ意味の文句があつて人のよく引く所である。然し日本語でスバルといふ語は、元來スブル（統括）シバル（緊縛）などの語と同源で、スベラギ（天皇）等のスベラとも亦同じ語根から出たのだから、初から散りぢりなものを統べくくつてある形になつてゐる。即ち連珠とも呼んでよからう。星の名としてこんな美しい名まへが、またと他にあらうか。近世になるとムツラボシ（六連星）といふ異名がこれに與へられた。こんな稱呼よりも上古以來傳統の正しいスバルといふ名の方がどんなに好いか知れない。一體スバルは肉眼の利き方によつては六つにも見え七つにも見えるので、西洋ではセブン・スターと言つてゐるが、日本ばかりでなく、印度や支那でも或る時代までは六星と數へてゐたことがある。唐の不空三藏の翻譯で弘法大師の將來本として名高い宿曜經によると昴を六星としてある。唐代は固より漢代に於ても既に七星としてあるにも拘はらず、印度の天文學では六星となし、スカンダ神の乳母六人に見たてて、その名をクリッテイカー、音譯して迦提と云つた。火神の子供を守り立てる六人の御乳の人に擬してあるのは、希臘でスバルをアトラス神の七人娘として美はしい神話が出來てゐるのと比べると、面白い對照であるが、私たちは保姆とするよりも少女とする方がふさはしいと感ずる。七人娘のうち一人の娘が隱れたと云ふ物語も希臘にあつた位だから、スバルを六星としたり或は七星としたりするのは古今東西その揆を一にすると云つてよい。支那

でも六星と考へたことがないではない。又アイヌ語にイワンリコプといふ星の名があることが藻汐草といふ文化初年の辭書に出てゐる。イワンは六でリコプは星であるから或はこれもスバルのことかも考へられるが確かでない。

近世の書物にも稀にはスマルといふ語形が見えるが、これこそ古語を傳へたもので、スバルといふのは中古以來の形なのだ。上古の麻行音が婆行音になる若干の語例に照して上古のスマルが中古に至つてスバルに轉化したことは直に首肯される所である。星の名ではないが、玉の一聯を上古タマノミスマルと云つた。古事記に美須麻流之珠また御須麻流之珠と書いたのを日本紀の方には御統としてある。記の歌にも多麻能美須麻流と詠んである。萬葉集の歌にも頂きに著(き)須賣流玉といふ句がある。珠玉は上古の純日本式裝飾であるから、これらの文句は、直に私たちに太古上代の風俗を想起さしめずんば止まない。五百箇御統(イホツミスマル)などといふその意味、その響き、何といふ美妙な表現であらう。それが延喜六年の日本紀竟宴和歌にはイホツスバルとなつてゐるから、星の名の方でも、やつぱり同樣な音聲變化が起つたものだと考へてよろしい。

平安朝以前には星の名としてのスマルは、直接文獻にあらはれて遺つてゐない。然し延曆二十三年の皇太神宮儀式帳に天(アメノ)須婆留女命また須麻留女神といふ女神の名が三ケ所（渡會郡神社）に見える。この女神こそ昴星(スバル)の象徵に違ひないと私は思ふ。但し延喜式の神名帳には須麻漏賣神社となつてゐるが、その座は多氣郡の方にある。言語學的に觀て面白いと思ふのは、延曆年代の丁度過渡期にスマルとスバルとの兩音形があらはれてゐることである。延喜式の神社名は古形を傳へてゐるに止まるものと見てよからう。さてこのスマルメの神といふ女神は、儀式帳による大歳御祖命とも縁故があり、倭姫命とも因みがある所から推して農事に關する神ではなかつたかと想像する。記紀の神代の卷にはあらはれて來ず、以後の古典にも說いてないから神祇史に通ぜぬ私たちには確かなことは言へないけれど、どうも秋の收穫の緣のある女神らしいやうに思ふ。即ち私は須麻留女神を昴女神と解しておきたいのは、このスバル星は東西共に農耕に結びつけられ、而も女性に擬せられて居るからである。

尤も釋日本記に引く丹後國風土記には、水の江の浦嶋が昴比賣すなはち乙姫様に伴はれて龍宮に赴いた時、宮門に出迎へたスバル星の化身を七竪子としてあるが、文字通りに解すれば、直にこれを乙姫に扈從する女童（めのわらは）としてしまふわけにはゆかぬかも知れぬが、まあ概してこの可憐な星を女子に見立てるのに誰も異論はあるまい。珠を聯ねたミスマルの様なスバル星が、六七人の女神として少女として擬人され又それが農事に繋がつてをるとすると、よしやそれが支那の天文學的智識と沒交渉であつた所で、日本人の天體に關する純古の想像を表現したものとして、うぶであるだけ却て興趣が深いのである。私の考では、スマル星は、農耕時代の上世日本人の幼ない天體觀察から知られ又、或は三韓を通じ或は直接に支那天文學の影響を受ける以前の命名にかかるものだと見るのである。上世日本人が見分けた恒星はひとり此のスバルのみに限らなかつたであらうけれど、かかる愛すべき名をつけられた星、かく神格化された星、かくばかり農民に親しまれた星は、我國の天文界にあつては格別の取扱ひを受けた果報者であつた。

秋から冬にかけてスバルは日沒又は宵の口にへと一晩毎に高く見えて來て人々の眼に慣れる。尚書堯典に、日短星昴、以正仲冬とあるのも、冬至をさすので、それから大戴禮記の夏小正を見ると、四月昴則見とあるから、スバルは仲冬に中し、それから早く西に沒して、夏正の暦の四月に再び東に見えはじめるを、支那でも古代から注意したことがわかる。詩經の國風一召南の一に小星と題した五句詩二章がある。

嘒彼小星、三五在東、肅肅宵征、夙夜在公、寔命不同、
嘒彼小星、維參與昴、肅肅宵征、抱衾與裯、寔命不猶、

參はミツボシで、オリオン星座の三王星、俗にオリオンの帶といふ名高い星だ。これも東西の古典に有名であるが今は詳說せぬ。（嘒の字には、實は口扁が附いてゐるが印刷上除いた、原音はケイである）召南の國風にはこの二星を題材にしてあるが、西洋ではオリオンは、七人娘スバルを追つかけて東から登つて來る獵夫となつてゐる。希臘では太古農民詩人ヘシオドスが英雄詩人ホメロスとの歌合せにスバルを歌つて、みごとに勝を得た話がある。希臘農事記（とでも云はうか、「日々の仕事」（エルガ・ヘーメライ）

も隨さうか）の中にも同じ文句が見えてゐる、

アトラス神の七人娘スバルが上つて來るころ、麥の收穫は始まり、それが沈んでゆくころ、畑の耕作は始まる。四十晝夜この星は隱れ、さて歳一周りして、畑がその鎌をとぎだす時分に、再び見はれる。

こんなにスバルは農民に親しまれた星である。東に上つて來るのは五月西に沒して往くのは十一月とされてゐた。支那にも大昴中して芋食すとか、仲冬昴星中して芋を收むとかいふ俚諺もあると云ふ。日本でも近代信州の俗諺に、「スバルまん時粉八合」と云つて、スバルの中する時蕎麥を種ゑると一升で粉が八合取れると農家でいひはやしたさうだ。かう云ふ俗説が今も信州その他の地方にあつたら知りたいと思つてゐる。この俗諺は今から百二三十年前寛政時代の言草であるが、同じ頃の大和にも農民が星を觀察して種蒔などの時を定めたといふ話がある。それは京都の老學者畑維龍の「四方の硯」といふ隨筆中に見える話で、それによると、

星家を見ることは農民よりくはしきはなし。大和の國は水のとぼしき處なれば四月比より夏中農民夜もすがらいねずして星を象ばかり見て種おろし、あるひは夜陰の露おきたるに苗のしめりをしり、米穀の實のるとみのらざるとを、あらかじめ知る事なり。その星にカラスキボシ、ヒシボシ、スバルボシ、クドボシなどやうの名をつけて某の星は何時に何の位にあらはれ何時に何の方にかくるなどいひて、その目づもりにてはかることと覺たがはず。

とある。上古の大和の遺風とも考へられる。外國から影響された天文學や星辰崇拜乃至星辰傳説とは全く起源を異にするに違ひない。カラスキボシは參（シン）で、オリオン座の三ツボシであるが近世以降の文獻に見えるだけで、上古中古の典籍には錄してない。ヒシボシ及びクドボシのことは未だ考へない。

近世の事情から上古を推すると、スバルは農民に注目された星で、あゝいふ美名を與へられ、更に天須麻流女命と云つて農耕に關係ある女神とされたのであらうと思ふ。希臘語のプレイアデス（それから英佛語また獨語のそれが出てをる）の語源には二説ある。一はプレオーン即ち衆多といふ義だといふ説、こ

れは日本のスマル又スバルと稍似た意味だが、國語の方には衆多の統一といふ意味があるだけ優つてゐる。第二の説は、希臘語でプレオーといふ語は、航海すると云ふ義で、スバル星の東へ上り西へ沈む期間（五月十一月）が航海季節であるから、プレイアデスとは航海星の意だといふ考である。この説の方が言語學者間に用ゐられてゐる。日本でも、この星は舟人にはよく知られた星であつた。物類稱呼によると、伊勢鳥羽伊豆の船詞に、十月中旬に吹く北東風を星の出入といふが、それは夜明けにスバル星西に入る時に吹くのだとしてある。同書に又畿内及び中國の船人の言葉に、十月の風をほしの入りごちといふとある。これもスバル星のことである。その他明治時代にも同樣な天氣占ひがあると見えて、幸田露伴氏の水上語彙にもさういふ事が蒐つてをる。然しながら日本の古典上ではスマルは希臘語の場合のやうに航海に緣のある命名とは言はれない。

スバルを又ハウキ星と呼んだことがある。それは宿曜經の註釋書に見える異名で、滿洲語又は同系の東北方言にもさういふ稱呼があるから、幾らか尤もな所もある命名だと云つてよい。西洋で七つ星といひ、昔日本で六連星（江戸）とも七曜の星ともいつた外に、關東で九曜の星ともいつたさうであるが、若し實際スバルに九箇の星を認めたとすると、頗る慧眼だ。何故といふに七人娘の外に、父アトラスと母プレイオーネとを加へると九人となり、十七世紀西洋の一天文家の所見に暗合するわけだから。

希臘語で鳩のことをペレイアデスと云ひ、スバルのプレイアデスと音が似てゐる所から、この星の名を鳩の意味だと俗解し又この一むら星、七人娘がさつをオリオンに追はれて逃げて來たので神樣はそれを鳩に姿を變へさせて下さつたので、無事に天上することが出來たなどといふ御伽話めいた昔話も起つた。

拉丁語ではこの星をヴェルギリアエと呼んだ。春の星といふ意だとも云ふし、又瑞枝星の義だとも云ふ。春草木が靑々としげり、瑞瑞しい小枝がすくすくとのびる季節に出てくる星だからさういふのだ。ヘシオドスの文句に見える所と異曲同工の命名である。これも亦愛すべき名まへといふべきである。私たちは、スバルの可愛い姿を讃美する。それと同時に、あちこちに於けるその命名の來歷を考へると感興が更に深い。

時評

國民外の國民投票案

高畠素之

一

近頃、主義者連の中から事新しく、政治運動の可否とか能否とかいふ問題が聞かされるやうになつた。今更らこんなことが論議されるのも滑稽な話で、社會主義運動が結局國家權力を階級的に移動せんとする運動である限り、政治運動を離れてその目的を達し得る筈はない。逆理的にいへば、政治運動に依つてのみ社會主義の目的は達成し得る。若し問題とすべき餘地があるなら、かかる政治運動の態樣如何に存する。さすがに主義者と呼ばれてゐる連中にも、經濟運動一點張りで、潔癖的に政治運動を拒否するといふ野暮天は少ないやうであるが、議會政策を認容するか否かといふ段になると、自ら諸說は分脈して來るやうである。

いふ迄もなく、議會政策主義は政治運動の唯一無二な表現ではなく、ただその一態樣たる位置を有するに過ぎない。從つて政治運動即議會政策と解することが出來ないのも當然である。然し現在行はれてゐる大方の主義者なるものの意見のやうに、政治運動の意義を殊更ら議會運動から分けて考へてゐるのは笑ふべきである。即ち政治運動は認めるが議會運動は認めないとか、議會に依る運動は認めるが、それは所謂議會政策を認めるといふ意味に於てではなく、議會を利用して內部からブルヂヨア議會の破壞を實行する意味に於てであるとか、すべてさうした議論ほど噴飯に價ひするものはない。議會を破壞することが議會運動といへるなら、資本主義組織を破壞する社會主義運動が資本主義運動になつたり、國家を破壞する無政府主義運動が

國家主義運動となつたりすることにならう。それは兎に角として、主義者がかくの如く議會政策を毛嫌ひする心理は、議會政策即改良主義となす觀念が土臺となつてゐるので、自らの硬派感を傷つけまいため、飽くまでも議會政策をば自己の政治運動の概念の圏外に、驅逐せんとする態度を意識的に採らしむることになつたのである。その潔癖性の强さは尊敬すべきものか知れないが、傍の見る目には寧ろ氣の毒である。何といつても、議會政策は政治運動の中心題目となるべきものであるばかりでなく、それを利用する効果に於て最大である。問題の要點は微溫的だとか、改良主義的だとかいふことにあるのではなくして、當面の効果を如何に收むべきかといふ所に存する。自己の硬派感を滿足させるため、頭腦の中で如何に手淫して見たところで始まらない話である。

二

主義者への抗議はその一例であるが、近來議會否認の傾向が一種の流行となつてゐる。最近に至つてその流行も余程下火にはなつたやうだが、反議會の氣勢は依然として低迷してゐる。その由來するところは頗る多元的でもあり、且つかかる氣勢の生じたことに對しては、決して無理でないことを首肯される。然し議會制度を廢棄したとして、果してこれに超えるべきいい制度があるかどうか。少くとも現在の狀態を對象として考へ得るかどうか。

議會制度が萬全の望みを懸け得ないことはいふまでもない。然し他の如何なる制度がかかる望みを懸け得るか。議會が國民の名に於て、國家意思の決定に參與する立法機關とされてゐながら、實質がこれに伴はないことも確かである。然しされば といつて、現在の狀態の社會に於て、他の如何なる制度が、果してよくこれに代るべき可能性が賦與され得るか。議會制度の如きは比較的無難な制度と見做していい。最善を得ざれば次善を得よといふ意味に於て、議會制度必ずしも野暮に拒否する必要がないばかりでなく、大いに利用することを心掛けて然るべきである。議會制度そのものが、假令ブルヂオアの搾取を支持擁護するために確立されたものであつたにしても、その機關を逆用してプロレタリアの武器となし得る道が開かれてゐるなら、殊更ら潔癖的にこれを憎惡する必要は少しもない。時に毒藥を變じて藥となす智略を廻らして見るのも面白いではないか。

事實上の問題として考へて見ても、結局のところ政治運動は認めるが、議會政策は認めないなどといふ論理は成立し得ない。ブルヂオアの政治的權力の總和が議會に集約されてゐる以上、その權力をプロレタリアの手に奪還せんとすれば、當然

問題を離れて議會を無視することが出來ない譯である。現實の存在として君臨してゐる議會を度外視して、他に特別な而して高級な政治運動が存在するやうに考へるのは、徒らに空想の遊戯に耽る者の戯言といふしかない。古い言葉だが政治は機のものである。勢ひによつて動くものである。あらかじめ豫定してその豫定のままに働いてくれるものではない。從つて政治的直接行動なら認めるとか、議會破壊政策なら認めるとか、或は政黨組織は認めないとか、議會による運動は認めないとか、その他凡百の『プロレタリアの政治運動』の概念を頭の中で作り上げて見たところで、それがどうなるものでもない。生きた證據はお祖師様レーニンの政策の跡を紀ねれば充分である。

その意味に於て議會政策の如きは、當面の策略として最も無難な方法であるし、且つ比較的効果の多い運動であるから、進んで利用すべきものである。ストライキやサボターヂュによる運動ばかりが社會主義の運動で、立法上に社會主義の實現を期する議會政策の運動が社會主義の運動でないなどといふ、そんな莫迦げた潔癖病患者は通用しない。

三

然し以上の議論は議會政策ばかりが、萬能だといつてゐるのではない。同じ高峰の月を眺むる社會主義の運動方法は數あるが、その中で議會政策運動の如きは、他に比較して捷徑の、い坦々たる大道だといふに過ぎない。つまりその拓かれた大道を故意に嫌惡して、他の間道ばかりが道だと思ひ込むには當るまいではないか。

議會政策の大道を開拓するためには、目下の日本としては普選運動の如きが、その基礎工事となるべきものである。然るに日本の主義者とか運動屋とかいふものは、普選とでもいはうものなら、何か惡事の相談にでも加擔する如くに心得てゐる。勞働團體や社會主義團體の如きも、麗々しく團體として決議してまで普選默殺の態度を取つてゐる。軟派硬派の爭ひもいい。右黨左黨の區別もいい。然し勞働者として又は社會主義者として、一人の議員をも議會に送つたことがない癖に、右黨の左黨のでもないではないか。毛唐の附けてくれた名稱を直譯的に捧戴して、天晴れ硬派がつて見たところで、余りドッとした話でもない。それよりか有効でもあり、且つ可能でもあり得る普選運動に對してまでも、その安直な右黨振りを示し、共同戰線とやらの範圍を擴張して呉れた方が有りがたいのである。鎬を削る場合は、普選でも通過して、雜多の社會主義者や勞働者を議會に送り込み、名實共に右黨左黨の內容が備つてから後のことにして貰ひたい。

尤も繰り返へしていふ如く、制度としての議會が必ずしも最高唯一のものでない限り、これに伴ふ短所弊害は擧げて數へ切れない程あらう。といつて、その短所弊害にのみ着眼して、議會否認の傾向に走らなければならないといふ必要は、必ずしもない筈である。

議會制度に對する採長補短の手段としての一面には、當然選擧權の問題とか、選擧區とかの問題が含まれるであらうが、制度そのものに對しての手段としては、直接民主々義とか內閣民主々義とかの名を以て呼ばれてゐるところの、レフエレンダム、リコール、イニシエチーヴ等の諸制度が數へられよう。即ち特に國家の重大問題乃至國民に取つての重大法案等が議せられる場合、豫め國民の公議輿論の存する所を問ふとか、又は議會の議決が、國民の公議輿論と背反してゐると認めた場合、內閣が直接に國民一般に向つて賛否を問ふとか、或は國民が自主的に輿論の存するところを發表するとか、その他これに類した諸制度を以て、議會制度によつて生ずる弊害を、ある程度まで矯正し得るのである。

四

先頃、普選案が議會に上程された折り、多數黨に依つて例の如く而決否決の運命に置かるべきことが、既定の事實として看取されてゐたので、革新俱樂部は國民投票案なるものを考案するに至つた。これ明らかに議會の議決が國民の公議輿論を代表するものと認めず、國民の一般投票によつて普選の賛否を採らうとしたもので、前述の直接民主々義の一例と認めることが出來る。

勿論、革新俱樂部の所謂國民投票案なるもの內容が、これによつて單純に國民の意思を表示せしむるに止まるものか、或は實際立法權に關係せしむるものか不明だが、兎に角も、議會の決議が民意を代表するものでないと認めたことだけは確かである。この案に賛成した憲政會の鈴木富士彌、永井柳太郎の二君を始め、幾多の共鳴者も革新俱樂部の代議士と共に、議會の意思を以て國民の意思を表現したものと認めない點は同樣である。彼等は普選に關して絶對に相容れない二個の對立群を認めた譯である。即ちその一は國民であり、他は議會である。

この際普選案の是非とか、普選の要求が國民全般の要求か否かといふ問題の如きは、論ずるまでもなく明瞭な話である。議會に二百八十名を挾む政友會代議士を除く外、國民の凡ど大多數はこの法案の通過に對して賛成するものと認められる。その意味に於て、普選案の如き重大法案の通過又は不通過に關して、議會と國民とが絶對反對の地位に立つた場合、議會は

の代表機關たる任務を沒却して國民の利益と幸福を蹂躙したものと認め、一般投票によつて國民の意思の存するところを表示し得べき制度を拓くことは必要である。而もそれが單なる意思表示をなさしむる意味に於てではなく、更に立法權の範圍に關係せしむるやう、國家の根本法たる憲法によつて、新に規定することも必要であらう。現に瑞西、獨逸、米國の諸州等に行はれてゐる一般投票の制度の如きは議會を超えた權限を與へられてゐるのである。

五

然し先般革新倶樂部が提唱し、一部の憲政會代議士の贊成を得た所謂國民投票案なるものは、立論の過程に於て頗る皮肉なものであつたことは見逃せない。

大體國民投票即ち一般投票なるものは、議會が民意を代表してゐないと認識した場合、即ち國民が議會の意思を否認する場合を要素として出發してゐるものである。從つてその要求を提出し得る者は、議院に席を有する議員以外のもの、即ち內閣側か國民側かその何れかでなければならぬ筈である。議員に席を有しながら、尙ほ且つ議院の議決を否認する態度は、延いて議會そのもの、即ち議員としての彼等自身の立場をも否定する結果となるのである。勿論、彼等の考慮の內容を忖度すれば、國民投票といふも何等立法權に關係せしめたものでなく、單純に參考のため普選案に對する國民の輿論を調査し、以て政府並に政友會に對する武器となさんとしたものらしく察せられる。然しその何れにもせよ、明らかに議會の議決に對して、少くとも普選案に關しては、彼等は議會の立法權を否認し去つてゐるのである。而も彼等は自己の否認した議院に依然として止まり、他の一面に於て國民投票建議案なるものを提出せんとしてゐる既に現行の議會制度を是認し、また現行の選擧制度によつて議院に席を有するに至つた彼等であつても、議會そのものが民意を代表してゐないことを普選案に於て悟つたといふなら、議員としての自己の責任上、かかる民意を代表しない議會は直ちに去るのが當然である。然るに依然として議席を退かないのみか、民意を代表しないと稱した議會に臨み、更に現在の議會を事實上否定すべき、國民投票建議案を提出せんとしてゐるのである。

彼等の所謂國民投票案なるものが、時宜に適した建議案であることは認める。然しこれを提出するからには、彼等が議員の責任を辭した後、國民の一人として要求すべきことである。普選派代議士と稱せられる彼等の全部が議員を辭任し、議會は政友會員のみを以て組織せしめ、然る後始めて國民投票なり何なりに問ふがいい。

議員は辭したくなし、さればといつて國民には申譯けないといふ態度は、兎に角も不愉快極まるものである。

ルール占領の前途如何

青木得三

占領は永續すべきか

ルールの占領は永續するであらうか、是れは世界の經濟界にとつても、又我國の經濟界にとつても、何れも極めて重大な問題である。ルール占領の結果世界市場に於ける鐵、石炭、染料等の價格は騰貴するに至り、英米の經濟界は活氣を示し、我邦の經濟界も亦此頃中間景氣と稱すべきものを現出するに至つた。然らばルールの占領は永續するであらうか、此の疑問に對する回答はやがて今日世界市場及日本市場に於ける好景氣の將來に於ける運命を豫斷することになる。私は日本の實業家が好景氣は永續すべし永續すべしと考へて、事業を擴張し商品株式を買進んだ結果、大正九年三月、急轉直下して一敗復た起つ能はざる窮境に陷つたことを心から悲む、故に私は此度はどうか左樣なる悲慘事を繰り返さない樣にして貰ひ度いと思ふ、それは啻に彼等實業家の爲に希望するのみならず、又日本經濟界の進展の爲に切に左樣に考へるのである。之が私のルール占領は永續すべきかといふ問題を論じて見たいと思ふ動機である。而して私の結論はルール占領は永續すべしといふことになる。從てルール占領の結果生じたる中間景氣も亦容易に終止しないであらうといふことになる。私は持論として日本に中間景氣の起ることを喜ばなかつたものである。日本の經濟界は左樣な中間景氣を見ないで、どん底の落付く先迄落付いて然る後徐ろに眞正の好景氣に向つて回復するといふのが、私の希望であり又經濟界の眞正の徑路であると思つて居たのであるが、今ルール占領といふ豫期しない事件の突發に遭つて、故に中間景氣を見るといふことも又已むを得ない世の中の勢である。私はルール占領の永續するであらうと豫斷する理由を下に詳論し度い。

佛蘭西の態度

ルールの占領が永續するであらうと考へる第一の理由は此の

事が佛蘭西の一時の思付ではなくして、多年熟慮した宿望の結果であることである。佛蘭西がルール占領の意向の一端をほのめかしたのは昨年八月倫敦首相會議の際であつた。此の時佛國首相ポアンカレー氏は獨逸支拂猶豫の擔保として森林鑛山を聯合國の管理に移すことを主張した、所謂生産的擔保 garantic productive なるもの即是れであつた。しかしロイドジョウジ氏は絕對に之に反對したので會議は破裂した。その後獨逸は六ケ月期限の大藏省證券を引渡すこととなり、其の擔保はライヒスバンクの裏書といふことになつたので問題は一時小康を得たのであつたが、一九二三年の支拂猶豫問題が起るに及んで問題は再燃した。

昨年十一月廿八日の巴里の諸新聞は左の驚くべき報道を傳へた。即佛國政府は廿七日ジヤンゼリゼーの大統領官邸に於て大統領主宰の下に、ポアンカレー首相以下大藏、陸軍、工部、荒廢地各大臣竝賠償委員會佛國委員にして同議長たるバルツー、フオツシユ元帥、ライン地方高級委員會佛國委員チラール、參謀總長ブア及炭鑛總監コスト等參列一大重要會議を催した。此の會議に於ては萬一ブルユツセル會議開催するに至らざるか、又は開催せらるるも其の結果佛蘭西の正當な希望に副はない場合に於て結局取るべき手段に付いて攻究したが、其の手段の中には、現に占領中なるライン地方の永久占領及同地獨乙官吏の放逐賠償としての石炭及佛國の必要とするコークスを獲得する爲ルール地方の約三分の二（エツセン及ボクームを含む）の占領も含んで居た。而して右會議の結果は廿八日の閣議に附して決定せられた。

故にエツセン及ボクームを含むルール地方の占領は既に佛蘭西に取つては昨年十一月末に決定せられた大方針であつた。私は此の會議に陸軍大臣と參謀總長と而して元帥フオツシユの入つて居ることを見て、ルール占領が單純なる經濟的占領であるとの意見を排斥する。成程佛蘭西政府はルールの占領は單純なる賠償取得の擔保であつて決して軍事占領ではない、鑛山技師の安全を確保する爲に軍隊を隨伴せしむるに過ぎないと內外に宣言して居るけれども私は疑問を懷かざるを得ぬ。私は決して之を以て佛蘭西を軍國主義なりと非難するのではない。一八七〇年と一九一四年と半世紀の間に兩度、巴里の城壁近く獨逸軍の馬蹄の音を聞いた佛蘭西人が獨逸人の復讐を恐れること、狐の狼を恐れるが如くであることは全く同情に値する。ライン川を以て永久に獨逸の西部國境とすることは元帥フオツシユが一九一九年の講和會議に於て極力主張した所であつた。然しロイドジヨウジとウイルソンの反對に逆つて、ライン左岸の占領は

十五年間に限定せられた、その時元帥フォッシュは十五ケ年に限定するならば全く占領せざると同一であると絶叫した。今やロイドジョウジもウイルソンも共に失脚して、元帥フオッシュ獨り尚勢力を維持する一九二三年に至つて、佛蘭西軍の馬蹄ラインを越えてルールの奥深く、エッセン、ボクーム、ドルドムンドに及ぶのを見る者、誰れか之を獨逸の賠償不履行に赫怒した一時の發作的行動であると思ふ。ルールの占領は佛蘭西の熟慮した後の決行である。占領の口實は或は賠償履行の擔保といひ、或は賠償不履行の制裁といふやうに色々變つた。然し目的たる占領には變りはない。

斯くの如くルールの占領が賠償を得る手段ではなくして、占領自身が目的であると觀察するときは、今日世界の新聞雜誌の或る者が論じて居るやうに、ルール占領は經濟的に失敗であるとか、從て佛蘭西は遠からず占領を中止するであらうとか、拔いた刀のやり場に困つて第三國の仲裁を待つて居るとかいふ見解は何れも皆誤つて居ると斷ぜなければならぬ。佛蘭西はルールの占領に滿足して居る。見よ、佛蘭西の兩院は近來稀に見る多大の信任投票を首相ポアンカレーに與へて居るではないか。それは或は佛蘭西のルール占領は世界經濟の大局から觀察すれば、佛蘭西の爲に不利益であるかも知れない。しかし佛蘭西國民の大多數は左樣に考へて居らぬ。占領軍費の支出もフラン相場の低落も意とせないで、ポアンカレーに信任を與へて居るのである。然らば則佛蘭西が容易く第三國の干渉に應じてルールより兵を引くべき筈がない。是れ私がルール占領は永續すべしと斷ずる第一の理由である。

英吉利の態度

次に吾々の考へねばならぬのは第三國は果して干渉するであらうかどうかといふことである。其の第一に論ずべきものは英國である。英國の態度に就いては二月二十日英國下院に於ける討論が最もよく之を説明して居る。即同日開院式勅語に關する捧呈文の議事に際して、自由黨は修正案を提出し、勞働黨も亦之に贊成して政府黨案と鬪つた。此の時ロイドジョウジは起つてルール占領は『最大の錯覺』a psychological blunder of the first magnitude であると述べ、獨逸革命勃發の危險を論じ、佛國の取つた手段は賠償金を獲得せんとする欲求に出たものであるとの見方を排斥して曰く、佛國外務省は多年愼重に計劃を進めて來たが今や之を抛ち、新しい道を取つて出直さうと

して居る。而して之が爲には四萬の兵員では足らないで、四十萬の大兵を要するであらうと。更にロイドジョウジ氏は政府に對し佛國を此の災禍より救ひ出すことを求め、その爲に英國は先づ米國と交渉し、次に英米兩國から佛國に交渉するがよいと述べ、米國と協同するは聯盟に訴へるよりも一層有望な手段であると主張し、米國々務卿ヒューズ氏が昨年十二月米國が歐洲を救はうとするの途は開けたと述べた演説を解釋して之れ正に英國政府が回答を與へなければならぬ提議であると云つた。自由黨修正案の贊成議員等はルール問題に對して國際聯盟が干渉することを主張した。

之に對し首相ボナーロー氏はルール占領は惡事 wickedness とは云へない、しかし悧巧なやり方 wisdom ではないと云つた。更に曰く、英國政府の考は佛國とは違つて居るがそれかといつて佛國に對して敵對的態度を取つた所で世界の利益になるとは思はない。政府と反對黨との意見の相違は唯此の點だけである。ボナーロー氏は又曰く、昨年の八月に佛國は國際聯盟の提議を聽かうとしなかつたが、今度とても同樣佛國の估券に拘はることであるから、到底聽き入れさうもない。そこで吾々の方から干渉の擧に出れば必佛蘭西はこれに反感を抱くに相違ない。勿論政府は國際聯盟を有力にし度いと希望して居る。併し乍ら若し佛國が之に反旗を飜へし、次で恐らくは白伊兩國が反旗を飜へした場合には、米獨露三國とも加入して居ない國際聯盟は果してどうなるであらうか。首相は亦ヒューズ氏の説を引用し米國が歐洲の問題に干與する準備を爲したとの信念に對しては ヒューズ氏の演説中には之を裏書する文句は何ものもないと述べ、干渉の爲有害な結果を來すにきまつてゐる時分に干渉するよりも、徐に干渉の時機を待つ方がよいと述べた。ボナーロー氏は更に曰く、我々の贊成出來ない行動を佛國が取つて居るのに、依然として我々が軍隊を獨逸に駐めて置くのは確に困難なことに相違ないけれども、聯合國の利益の爲に英國軍は出來るだけ長く駐つて居なければならぬと。而して修正案は三百五に對する百九十六で否決せられた。

右の英國首相の演説は明瞭に英國政府の態度を表示したものである。即英國政府は今日に於て干渉する氣はないのである。尤も自由黨と勞働黨とは干渉を希望して居るけれども、英國政府は今や議會に於て絕對過半數を持つて居る。而して政府黨中

現内閣成立の際反對した前院内總理チエンバレーン及前大藏大臣サー、ロバート、ホーン兩氏も又英國政治家中最國際聯盟に氣を入れて居るロード、ロバート、セシルも共に二月二十日の議場に於て政府案に贊成した所を見ると、英國政府の此の態度は容易には變らぬものと見なければならぬ。

況んや世の中には皮肉なる論者があつて、ルール占領は英國經濟界を活躍せしめた、故に英國資本家はルール占領に干渉することを欲しない、而して資本家を擁護する英國保守黨、保守黨より成る英國政府も亦然りであると云ふ。私は此の説に贊成し度くない、英國政府の干渉せざる理由の全部をボナーロー氏の演説の中に見出し度いと思つて居る。然し二月二十八日倫敦發ロイテル電報はヤローのパマーズ製鐵工場は二ケ年間閉鎖して居たが今回作業を再開した、蘇格蘭製鋼業者は製艦用船舶用鋼板其他の値段を一噸に付平均十五志方引上げたことを報じて居る。然らばボナーロー氏の所謂干渉の時機 an opportunity for intervention は果して何れの時に來るか、實に覺束ないのである。是れ私がルール占領は永續すべしと斷ずる第二の理由である。

米國の態度

議論は大西洋を越えて合衆國に移る。合衆國はルール占領に干渉するであらうか、誠に米國の一部の輿論はルール占領に干渉すべしと叫んで居る。例へば米國勞働聯合會長ゴムパース氏は獨逸勞働組合が歐洲の救護方を米國議會に哀訴したに同情を表し之に贊成することを勸告して、米國は佛獨間の協定を遂げることに協力すべき道德上の義務を有つて居ると述べた。二月十五日米國下院に於て佛國のルール占領問題に關してミネソタ州選出共和黨議員ハロルドナツソン氏は米國が長らく守つて居た沈默を破るべき時が來たと叫んだ。しかし米國の輿論が如何であらうとも米國政府は近き將來に於てルール占領に干渉しないであらうと私は信ずる。

私のかく信ずるのは二の重要な理由がある。一は對佛債權整理の問題である、二は海軍制限條約批准の問題である。此の二の問題は共に未解決の問題である。而して佛國の同意を要する問題である。米國は最近英國との債務書替の問題を解決し、債務總額四十六億弗を昨年十二月十五日から十年間は三分、其の

以後は三分五厘の利子を付けて六十二年間に返濟することとなり、二月末日大統領の裁可を經た。米國の對歐債權は英國に對する四十六億弗を最多とし、之に次ぐものは佛國に對する三十七億弗である、今や米國は對英債權の整理を了つたのであるから、次に來るべきものは當然の順序として佛國に對する債權である。然るに佛國は從來其の戰爭債務は世界共同の利益の爲に負擔したものであるから佛國單獨で之を返濟する理由がないとか、或は佛國に對する債務者たる獨逸が支拂をしないのに佛國のみ獨り債務を履行することは出來ないといふて居た。故に若し米國がルール占領に干渉したならば佛國は對米債務の整理に指を染めることとすら肯じないであらう。

次に、華盛頓會議をして意義あらしめたものは海軍制限條約であつた。之があつてこそ華盛頓會議は光彩を放つことが出來るのである。然るに此の條約を日英伊米の四國が批准したにも係らず、佛國は批准しない。若し佛國が批准しないならば華盛頓會議の光彩は其の大部分を失はねばならぬ。故に米國は佛國の批准を熱望することは勿論である。然るに米國がルール占領に干渉したならば如何であるか。佛國は必然怒つて海軍制限條約を批准しないであらう。

米國は海軍制限條約を佛國が批准しない間はルール占領の干渉を斷行し得ないだらう。成程今迄佛蘭西は此の條約を批准しない樣な風を見せて居らぬ。少くとも公然とは見せて居らぬ。從て世間には佛蘭西も必之を批准するといふ意見が行はれる、殊に佛蘭西の批准しないことが自分の外交の失敗となるべき諸國の政府は頻りに批准說を宣傳する。けれども佛蘭西は未だ批准しない、華盛頓會議終了後既に一年を經過したのである。

以上の根據に依つて私は米國が近き將來に於てルール占領に干渉しないといふ結論に達する。是れ私がルール占領は永續すべしと斷ずる第三の理由である。

伊、白、日の態度

私は既に英國と米國とが干渉しないであらうといふ意見を述べた、世界の各國中此の外に干渉し得る國は伊太利と白耳義と日本とあるのみである。嘗て瑞典の首相ブランチイング氏は國際聯盟理事會に於てルール占領干渉論を持ち出したけれども顧られなかつた。獨逸賠償問題に付條約上の權利を持たない國の

主張は力がない。故に殘る所は白伊日の三國である。然し乍ら白耳義は既にルールの占領に參加した。白耳義人は一九一四年獨逸兵の馬蹄に其の祖國を蹂躪せられた怨を如何にして忘れる事が出來よう。たとひ一時は忘れて居ても今度の樣な機會が起ると彼等の血は新に湧き立つのである。ルール占領地方の北端は即白耳義軍の固める所である。白耳義首相チュニス氏は屢ポアンカレー氏と會見して占領を永久ならしむる方策を講じつゝある。白耳義議會も大多數を以て此の政府の態度を支持しつゝあるのである。吾々は白耳義より干渉の來ることを夢想だにすることは出來ぬ。

然らば黑上衣團を率ゐる伊太利新首相の態度は如何、ムッソリニ氏はルールの軍事占領には反對であつて、嘗て其の意思を表明したことがあり、且獨佛間を調停する意向を持つて居る樣である。しかし獨逸に支拂能力なしとすることには絶對に反對であつて、昨年十二月の倫敦首相會議、ムッソリニ内閣成立後最初の首相會議に於て提出した伊太利の獨逸賠償解決案は獨逸をして相當の賠償支拂をなさしむる案であつた。故に千九百二十三年の獨逸賠償不拂を理由とするルール地方の經濟的占領には贊成であつたものと見えて、伊太利政府はルール占領の當初鑛山技師一二名を參加せしめた、その事は佛國政府が聯合各國に對して發した文書の中にも書いてある。故にムッソリニ氏がルール占領に反對するといふともそれは極めて微温的なものである。假にさうでないとしても伊太利一國の力で佛白兩國を動かすことは出來ない。

終に日本は如何、日本の民間にはルールの占領に對して日本政府が無干渉であるとを不滿とし、進んで何等かの處置を採るべしとする二三の論者がある、その多くは在野黨の代議士である。しかし私はその政府を動かす力のないことを思ふ。日本の當局は決して一文も利益にならないルール占領の干渉などはやらない、又日本の輿論も若し政府が左樣なことをしたならば必餘計な事をしたといふて外交失敗を糺彈するであらう。要するに日本からルール占領干渉の起らないことは、極めて確實に斷言し得ることとである。

占領は永續する

以上說く所の如く佛蘭西は容易にルール撤兵を肯んぜず、英

米伊白日の何れよりも干渉が來らないとすれば、如何にしてルール占領の終むことがあらう。ルール占領は永續するといふ結論に到達するのは誠に已むを得ないのである。

誠に已むを得ない結果である。私は決してルール占領の永續を希望するものではない。私は熱烈にルール占領の一日も速に終らんことを切望するものである。然し乍ら私の此の熱烈なる希望にも係らず、世界の大勢はルール占領を永續せしめんとして居る。然らば私は何故に私の希望に反する事實を斯くも詳細に論ずるものであるか、それは私がルール占領は我が邦の經濟界に中間景氣を齎らすであらうと考へるからである。どうか日本の實業社會をして經濟界の眞相を誤解せしめ度くないものである。曾て大正九年三月日本の經濟界が永久に好景氣なるべしと考へた日本の實業家は非常なる痛手を蒙つた。大正十二年に入つて後の我邦經濟界の恢復は、私の見る所を以てすれば決して不景氣のどん底に沈んだ後の順當の恢復ではない、中間景氣である。然し乍ら不幸にしてルールの占領は永續する。從て我邦の中間景氣も相當永く續くであらう。大正四年より大正九年に亘る我國の好景氣は勿論歐洲戰爭の賜であつた。しかし乍ら大正三四年の我邦經濟界は不景氣のどん底に沈んで居た、好景氣に轉ずべき順當の時機であつたと思ふ。大正十二年に於ける好景氣はルール占領の結果である。たとひ永續すると雖決して歐洲戰爭の結果の如く大規模なるものではない、又極度に達すべきものでもない、此等の觀察を誤らないで經濟界に處することが日本民族の經濟的發展の爲に必要である。若し幸にしてルール占領は永續するといふ私の豫測が當らなかつたならば、私は不明を『改造』の讀者諸君に謝さなければならないけれども、尙私は世界人類の祝福の爲に衷心より之を慶賀するであらう。然し乍ら今日不幸にして私の豫測を覆す材料を見出し得ない。然り不幸にしてルール占領は永續する。（大正十二年三月四日）

吉田絃二郎作

小說 ダビデと子たち

定價貳圓廿錢

送料十七錢
四六判布裝

第八版

時代の要求する宗教的名著を見よ

創作壇の人格者と稱せらるる吉田氏の傑作として自らも認め、他よりもしかく推稱せられつつある本書は、氏が宗教的感激より得たる獨特のもので、王者として自己の精神的空虛を感じたダビデが、三角戀愛より端なくも自己の皇子と或女を競爭したため、老臣からは愛憎をつかされ、又自身も腫物の膿血に惱む人生の愛慾と苦惱を氏一流の感激を以つて綴られたものだ。

識者に清洌の一感激を投げた逸作

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

谷崎潤一郎作

四六判 布装

定價弐圓 書留送料拾七錢

戯曲 愛なき人々

最新刊

天上の星と語るがやうな美はしさは獨り此作者に求められ、そして底ひも知れぬ人間の愛慾を、そして血で血を洗ふ悪魔的精神を、自由に、また無造作に捉へて、我々の心の奥の、その又奥に潜む、悩み、悶え、憤怒、悲みをありのままに、その姿をくづさずに引きずり出す氏の藝術の力の異常さには一種の恐れを抱かしむ、本書は「愛すればこそ」の姉妹篇で、三角戀愛を取扱ふメスは寒月の如く冴え、そして暗に漾ふ宿命の情緒には思はず讀む人の涙をそそる、眞に名匠の名作で、名光千里の嘆がある。

「愛すればこそ」●姉妹篇出づ

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四二〇

室伏高信著（最新刊）

印象と傾向

定價貳圓

定價十七錢

四六判上製

世界はいかに動いておるか、世界の主潮を動かす人々はいかに活躍して居るか、而して我が少壯論壇の一明星室伏氏は新世界を何と展望しておる？

本書は著者が歐洲大戰後米國から英吉利、佛蘭西、獨逸などを歷遊した約一年間に亘っての印象見聞を輯めて、『世界の傾向』と、『人の印象』とに分って記述したものである。

大戰後の勞働運動が異常な發達を遂げたことについて著者は特に『世界の階級運動と其主潮』その他のうちに論じてゐるが、それと共に世界の支配階級の間で自由主義が亡び、反動的傾向が强大となつたことを痛切深刻なる筆で書いて居る。

『人の印象』は著者が直接に會見したアインスタイン、ロマンロオラン、ベルグソン、カアペンタア、ウエルス、カウツキー、ベルンシタインなど其他の世界的名士の印象」である。

室伏高信著

靈の王國（四版）

定價壹圓五十錢

送料十五錢

レニンの唯物主義政治を知るものは本書によりて精神主義の大政治家ラテノウの思想を知る必要がある前者は勞農露國を代表し後者は新獨逸の新政治を代表す、「靈の王國」は唯物主義に反抗する一大狼火である　新獨逸を知らんと欲するものは必ず本書を讀め。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

法學博士 福田徳三

ボルシェヴヰズム研究

◇定價貳圓九十錢◇送料十七錢◇四六判◇

十版

レニンの國家理論、ボルシェヴヰズム、マルキシズムニ關する世界的文献で、學徒の必讀に値すべき名著、博士の説によればレニンも眞正のマルキストではない、勞農露國を學理的に研究するには本書を措いて他にない。

社會運動と勞銀制度

三・參名著

十版

社會政策と階級鬪爭

◇定價參圓九十錢◇送料廿一錢◇四六判◇

世界的の經濟學者としての博士最近業の大傑作だ勞働運動は此からが眞劍に入る、そしてその指導者も俄仕込では駄目だ、嶄然斯界に卓越した博士の本著は社會運動と勞銀制度の基調をなす名著である。

廿一版

◇定價貳圓八十錢◇送料十九錢◇四六判◇

「資本主義は必然的宿命によつて崩壞するものではない、この儘に放擲する時は人生眞の厚生幸福は全くその爲に蹂躪せらるゝの外はない我々は人爲の政策を以てこれに對抗せねばなゝぬ」といふ立場より博士一流の卓論を以て本書は成る。

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

ESPERANTO

自由エスペラント講義録

會員募集

御申込みあり次第
會則並に內容見本を
進呈いたします

三ヶ月卒業

會費全額前納者には
エス和・和エス辭典を
贈呈いたします

講師

秋田雨雀氏
エロシェンコ氏
佐々木孝丸氏
蓬阪正氏
他數氏

略規

五月一日第一册發行
每月一回一日發行
一册二百頁至六百頁
會費一月一圓八十錢
三月分金額前納五圓

東京淺草
松葉町八七
日本エスペラント文化學會
（電話淺草二〇一九
振替東京三二八一五）

文學博士 瀧精一著

定價二圓 送料拾七錢

挿畫拾五葉 菊判上製

文人畫概論

第六版

有識階級よりの註文殺到す

文人畫の流行今日より甚だしきはなく、またそれほど喜ばしく美はしきことはない、されど悲しいことには文人畫の概念を得るの一書だにないことだ、斯界の第一人者瀧博士は、深くそれ等の缺陷を遺憾に思ひ、本年東京帝國大學にて「文人畫概念」てふ趣味深き講演をなされた、本書は實にその講演を基礎として（一）文人畫の起源（二）文人畫の流派化（三）文人畫の原理（四）文人畫と南畫（六）文人畫の精華（六）將來の文人畫を說いたものだ、挿畫も麗しきコロタイプ十五圖を挿入したれば、美術の國の人々が必ず一讀せではすまぬ含蓄多き著書。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

◆新興文壇の巨匠 ◆前田河廣一郎新著

創作 赤い馬車

苦惱から生れて苦惱に死ぬ近代人の喜悲劇は、茲に怪奇な赤光の下に、假借するこころなくじりじりと反映されて、混亂せる世紀の騷音大地獄のドラマを演じては、一人一人消えて行く。曩に『三等船客』を著はして新興藝術の深みと强さとをもつて讀者に肉迫した著者は、其益々冴えたる靈筆を驅つて、本書を著はし、無產階級藝術の價値を滿天下に問はんとしてゐる。人獸苦界の血と、涙と、饑餓と、遊戲と、破壞と、死を凝視する瞳とは、本書の一頁ごとに讀者の前に亂舞狂奔す。眞に是、人類の臟腑を目の前に、力を籠めて摑み出したるが如き、藝術！『三等船客』は第一步にして、本書は、著者の第二步である。

定價 二圓二十錢 送料十七錢

◆前田河廣一郎著（處女作）

創作 三等船客

◆定價二圓廿錢 ◆送料十七錢

姉妹篇忽十二版發行
本書の賣行愈白熱化

東京市神田區表神保町一〇　自然社　振替東京三五五一〇番

雷鳥

興趣多き
著書出づ

雪白き日本アルプスの峯頂、まだ雷鳥は曉を告げない、其清高な大氣に打たれながら、賀川氏が瞑想の感激は玉の如く斷片的にノートせらる。或は近代人の愛に觸れ、無抵抗の愛を說き、人類愛の立場より

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

賀川豐彦著

空中征服

定價金貳圓貳拾錢
送料十七錢
四六版上製

第二十版

世界ユトピア文學の新彩を見よ

世界のユトピア文藝に一つを加へたと稱せらるる本書、大正十一年度の一ばん面白い小說であると谷本博士が叫んだ本書「死線」以上に文學的價値を認められた本書、諧謔文學の第一線を承つた本書、諧謔は改造運動には必要であり、そして諧謔は未た中間の樂しいチイタイムに値する諧謔が諧謔に於て人生の樂しい泉を發見せざる、本書は實に我々の缺陷の一つを補足し、そして我々にユトピア的興趣をそゝらしむる近代稀なる快著だ。

本書に對する谷本博士の賞讃

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

小泉信三著

價値論と社會主義

定價參圓　送料十九錢　四六判上製

第五版

河上、山川、高畠氏等との論戰の戰鬪記錄と云ふても差支ない本書は、經濟學者中の隨一の新進たる小泉氏會心の著だ、その內容はマルクス及びロオドベルトスの學說に對する熱心な研究である、二氏が新經濟學の發途にいかに重要な人物であるかは呶々を要しない、本社は舊經濟學崩壞の時に當りて本書の如き新經濟界を高く指南する快著の上梓されたことを讀者と共に喜ぶものである。

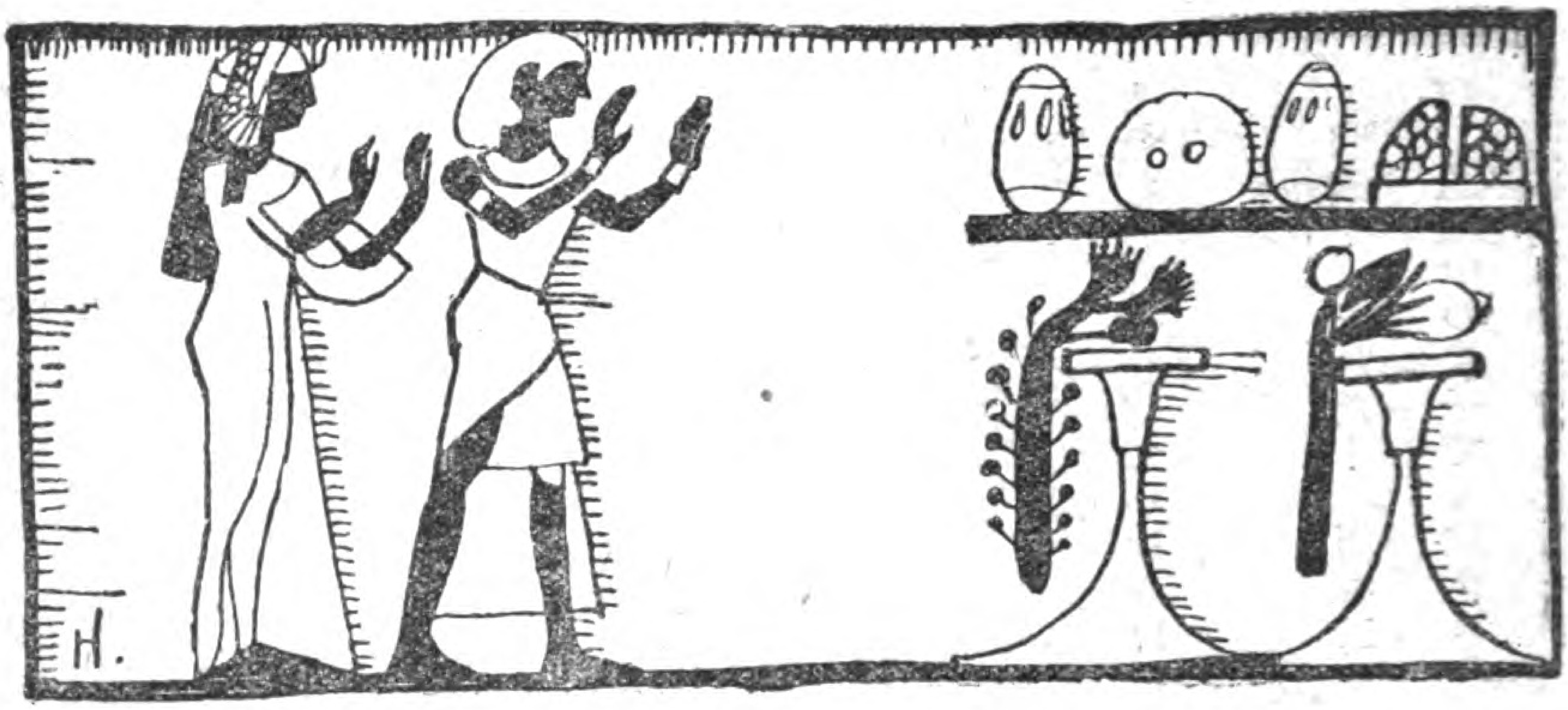
東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

四月特大號創作

私と名づけられたる妖怪　武林無想庵
生まれ來るもの　吉田絃二郎
朧夜　犬養健
彼等と私　佐藤春夫
職務　久米正雄
（戯曲）同志の人々　山本有三
ある夜　葛西善藏
踏切　里見弴
（戯曲）義民甚兵衛　菊池寛



私と名づけられたる妖怪

武林無想庵

四年前……さう、いつのまにかもう四年前だ。すべてが悉く四年前だ。四年前の私自身、四年前の私の妻、四年前の私達夫婦を圍繞した人々、土地、空氣、時世粧、四年前の東京、日本、四年前の北京、支那大陸、四年前の巴里、佛蘭西、歐羅巴……さうした四年前の一切をば、一切？ いや、一切ぢやない、たゞ私自身の生活に纏はつて來たゞけの……さう、やッぱり一切か、たゞそれだけに即した一切をば、さうした特殊の一切をば、出來るだけ精確に、出來るだけ遺漏なく而も出來るだけ簡潔に、鮮明に、さうして出來るだけ面白く……然り、面白く！ と云ふのは、云ふまでもなく、勿論、讀者にあきられないやうに、即ち出版者に喜ばれるやうに、從つて、原稿料と印税とが、澤山〳〵這入つて來るやうに、要するに、私の古い覺束ないペン先の勞働によつて、私達一家族が安穩にその日〳〵を生活してゆかれるやうに、と、さう、心ひそかに念じながら、一生懸命に話し出さうとしてゐるのは今だ。四年後の今だ。今といふうちにも、それ〳〵、そばから遠慮會

釋なく、つツつツ過去となつて了つてゆく、ゆきつゝある今だ。捉まへどころのない、捉まへて見ようのないそれほど神變不可得な、摩訶不思議な今だ。その今の私なのだ。その今といふ、絶對に姿を見せぬ、恰もかくれ簑のやうな時空機に乘つた、たゞもう盲滅法に突進しながら、而も皆目方針といふもの丶立たぬ、永遠に立ちツこのない、私と名づけられたる妖怪だ。

然り、私は妖怪だ。既に私が妖怪なんだから、その妖怪のベタア・ハーフたる私に連れ添ふ女房だつて、無論、妖怪でないとは云はれない。怒るかも知れないが、妖怪でよろしい。よろしいどころでない。たしかに彼女は妖怪だ。たゞに彼女ばかりぢやない、直腸癌の難病床に横たはつて、憔悴しきつた彼女の父親、その長い／＼看護に倦怠の色さへ見せず、甲斐々々しく浮身を窶しつゝあつた彼女の繼母、繼母であつて、同時にまた彼女の叔母、スツペリと見事に頭の禿げあがつた、酒で染まつた顔色のつや／＼した、達磨七分、布袋三分、兎に角、五百羅漢の一人に似た彼女の保護者、今の私の意識に上つて來るところのさうした人々は、どう考へて見ても悉くみな妖怪だ。妖怪ばかりだ。

なぜ？ まぼろしばかりが存在して、照應する彼等の實體が、既に跡方もなく消滅して了つてゐるものなら、それはもう妖怪だ。妖怪でいけなければ、幽靈だ。

幽靈！ それだ！ 而も二つ、男性と女性、女性が彼女で、男性が私だ、さうした幽靈が二つ、長い短い人生のうちの、過程中の墨子でも泣きさうな唯ある黄昏、ユニークな夕まぐれ、蝙蝠の夫婦者か、或は驅落者のやうに、降りしきる雨を幸ひ、朦朧と人知れず、恰も亡魂の如くフラ／＼と濱松町の院線を離れた。

二人とも傘がない。さうして混凝土の階段を踏下りて、トンネルを潜り出ると、生憎、俥が一臺しきや客待してゐなかつた。

――困つちやツたわねえ…………ちやア、俥やさん、かうしてくれない？　ちき此の近所なんですからねえ…………二十四番地の、學校の手前よ…………だから、面倒でも、一人々々、二度に運んでくれない？

――一緒にお乘んなさい。なアに、かまふもんですか…………よう、お乘んなさい、抱ツこしてサ…………桐油でかくして了ふから、見えツこはねえや。ハ、ハ。

――アラ、要領がいゝのね。ホ、ホ、ホ。

ふうわりした、華車な、かぼそい、の子供のやうな可愛らしい兩手をば、恍惚として握りしめてゐた。

ひいらいた、ひいらいた、恰もさうした蓮華の花のやうに、運命の扉が、キリギリスの格子戸が、何の苦もなくサフリとあいた。福島縣から立戻つてゐた女中のトン君が、慌てゝ出迎へるまでなく男性女性兩個の亡魂は、吸はるゝやうに三日目か四日目で、再び同じ長火鉢を擁して差向つて了つたものだ。

――こんな穢らはしい湯呑はいやだ。

――なぜよ。

――だつて、新橋の口をつけた湯呑だらう？

――棄てゝ了ひませうか？　と、トン君が横合から如才のない口をきく。

——來てゝ了へ——

——さう致しませう。

氣前のいゝ赤ら顏のトン君は、忽ち湯呑をひッたくるや否や、ガラリ小窓の障子をあけると、折から雨で一杯に溢れてゐる小溝の中へ、ザンブとばかり抛り込んで了つた。

——ウン、その意氣、〱。なか〱君は話せるよ。

——オホヽホヽ。と、トン君はいかにも得意然と高笑ひしたが、女はたゞニヤ〱と、さうした兒戲に對しては、一向に氣乘りのせぬ、謎のやうな、止む事を得ぬ笑顏だけ、とッてつけに見せてゐた。

その晩の寢物語。

——あなた、あしたね、、あのデコちやんに逢つてくれない？　知つてるでせう？　あの叔父さん、あれでゐて、あたしの父の親友なのよ。本當の意味で、あたしの保護者よ。あたし、スッカリ話しちやッたわ………父にも、T先生にも………いけない？

——へえ？　ばかに手廻しがいゝんだね。

——いけない？

——いけなかないが………さうさなア……逢つてどうするんだい？

——たゞ逢つてさへ下されぱいゝのよ、あした、一寸、お風呂の歸りにでも………すぐ近所よ。水道栓があるでせう？　あの前よ。同番地なの………

——なんだい？　こッちから、伺候しろといふのかい？

——不見識？

——そんな事に見識も不見識もいらんがね………何だか少々妙ぢやないか？

——ちツとも妙な事はないわよ………デコちやん、とても大喜びなの………今迄に私の仕出かした事のうちで、今度の事が一番大出來だつたツて、

——へえ？　なるほどね………

私にはまた女の段取が聞かされた。そうして、一寸いやな氣もしたが、考へて見ると、もと／＼、どうでもなれといふ旋毛の曲がつた、不貞腐れた、行きあたりバツタリな、棄鉢な、自暴自棄の無目的方針から割出された結果なんだから、序での事に、この女の、果してどこまで俺を引張つてゆくつもりか、勿論、好奇心も多分に手傳つて、女のなすがまゝに、段取どほりに、暫くなつて見る氣になつたのが運のつきだ。

——逢つてくれる？

——逢つてもいゝ。

——T先生にも？

——逢はうよ。

——父にも？

——ウム。

私が私の女房の生活の、その單純なる一個の道具になつて了つたのは、要するに、つまり、その晩からだ。

眞夏の夢に、オベロンとチタニアとが、喧嘩口論でも始めさうな、キリギリスの宿、云ひ換へれば、ばけもの屋敷、そのグラグラする二階の六疊へ現れたのは鳩さんだ

鳩さん、第二夫人、昔の新橋藝者、今まさに晴れて私の女房になりかゝつてゐるこの家の女主人とは、きのふまでお互に嫉妬聯盟の各一員だつたカマラード、飼主との間に男の子が一人あつて、從つて食へるだけの家作を貰つて、その旦那でもあり色男でもあるところの米國文學博士、實業家、會社流し、即ち腕のあるとかいふ新橋氏が、時々は駄々も捏ねに來るといふ、さうした結構な御身分であらせられるお姿さんだ。

ばけもの屋敷の女主人は、やゝソワソワして、而もやゝ得意さうに、またやゝきまりもわるさうに、思ひ切つて私を鳩さんに紹介する。鵠沼で大變にお世話になつたお友達だと云つて紹介する。かうした女の口癖に云ふところのお友達とは、大抵の場合、色男か、旦那か、若しくは結局、或は亭主にでもしようかと、内々企てゝゐる男の別名だ。この際私は、勿論その、所謂結局の場合であつたものに外ならぬ。

眼のやさしいとかいふ鳩さんは、どんなお伽噺でもたわいもなく信じて了ひさうな眼で、それでも、兎に角、まづ胡散くさゝうに、とは云へ、もうスッカリ呑込み顏に、同時に少しは好奇の念にも驅らるゝやうに、眞甲からジロリと私に一瞥をくれる。

――かういふお友達が出來た以上は、もうあの方には斷然お目にかゝらないつもりなんですから、あの方へはあなたから、どうぞ宜しいやうに仰ツしやつて置いて下さいましよ。などゝ臆面もなく云つたものだ。

――えゝ、えゝ、その點はお心配なく。さうときいたら、さぞビックリもするでせうが、またそれが爲に、さすがに少しはうぬぼれの鼻も折れて、却つてあの人のためにもなりますよ。

第二夫人は第四夫人の申し出でをば、その飼主へ傳ふべく、寧ろ快諾して、喜びまで述べて、いそいそと立歸る。

次は五百羅漢……ばけもの屋敷の事だから、いろいろな妖怪が、フラフラと薄氣味わるく現はれて來る。

この家の女主人が、かつて『お目見え廻り』を書いた時代の、さうして首尾よく社長のお手がついた時代の、その時代のチヤキチヤキだつた。その新聞の有力な記者先生だ。勿論、五百羅漢氏の事だ。國木田獨步の親友の一人だつたので、二十年前、龍土會などで、一應は私も見知り越しだ。その時分から、頭だけは見事に禿げてゐたものだ。

氣がきいて、向ふから朝湯の歸り、ドテラのまゝで手拭をブラ下げながら、酒がすぎたら豚右衛門に化けさうな足どりで、天空海濶に這入つて來る。

——いやア、どうも、承りまして、甚だもつて結構な次第で……と、まア、云つたやうな調子だ。で、醉つて來ると

——我輩だつて、これで元來、どこへ出してもヒケをとらないほど、それほど立派な虛無主義者なんだ。一切が虛無だ。虛無にはきまりきつた話だ。國家も虛無だ。社會組織も虛無だ。この宇宙現象はすべて虛無だ。さうだらう？だから、我輩は一切を否定する。一切を否定する事は、つまり、一切を肯定する事と同じわけになる。さうぢやないか？さうだらう？だから、常識は常識として、習慣は習慣として、コンヹンショナルな社會道德はコンヹンショナルな社會道德として、そのまゝに受け入れる？いかんかね？虛無だから、それでもかまはん筈だらう？……

一口に云つて了へば、なアに、正式に結婚してくれといふ事なのだ。戶籍吏まで屆出てくれといふ事なのだ。親類、緣者、知己、朋友、さうした人々を一堂の下に集めて、形式的に改めて披露の宴を張つてくれといふ事なのだ。さうして、民法の規定に從つて、同棲扶養の義務を負つてくれといふ事なのだ。虛無もヘチヤムクレも、實はあつたものぢや

ないわけサ。

その次が繼母だ。繼母であつて叔母さんだ。繼母だから、つまり、このばけもの屋敷の女主人を生んだ母親ぢやない。而も生んだ母親の、二十八歳を一期として、心臓辨膜症で夭死した母親の、たつた一人の實妹ださうだから、たしかに叔母さんだ。

子供のない人だから、年よりは若い。妾の女主人のやうに、頻繁に男を取換へたり、支那、滿韓を股にかけたりしなかつたから、さうして十年一日の如く、病人の介抱ばかりして暮した位だから、親切で、内氣で、質實で、生眞面目でや〻お茶の水式良妻賢母型で、惡く云ふと、小官吏の奥樣風で、從つて、ひどく世間並で、と云つて、嫌味などはさらさらないけれど、甚だもつて平凡だ。平凡だけに一向面白くもない代り、相對する人に少しも不安や危險を感じさせない。そこが取柄だ。たゞその言葉がばかに早口の松山調なので、き〻馴れぬ私の耳などには、どうもよくハツキリとき〻とれぬのが難だ。尤も何もこの人を女房に持たうといふわけではないのだから、その位の事はいくらでも辛抱する。

——はじめまして……今回はまことに不思議な御緣で……病人も一方ならず喜んでをります……何しろ、かういふ親達の手にあはぬ、我儘一杯な變りものでムいますので……甚だお氣の毒樣だとは存じますが……と、ポツリ、ポツリ遠慮ぶかさうな口の内だ。

なアんだ！伺うだけでは、何もかも、話はもうチヤンと出來上つて了つてゐるのだ。コツちではたゞ、ウンとさへ一言、應諾の内意を洩せば、それでい〻事になつてゐるわけだ。

何と云つても、三萬圓だ。洋行だ。親の財産を叩き賣つた三萬圓だらうが、物見遊山の延長にすぎぬ洋行だらうが、

三萬圓でありやア、それでい丶のだ。洋行が出來りやア、これでい丶のだ。それで共産主義でも無政府主義でも何でもないんだから、チヤンチヤラをかしくなる。だから、ばけもの屋敷だといふんだ。だから、妖怪の巣窟だといふんだ四年前までは、日本といふ國にも、白晝公々然と、妖怪どもが横行出來たものサ。今日ではどうか知らぬがね……

翌日はお揃ひで、父上様の御病氣見舞に出かける段となる。

直腸癌！癌！人間には病氣といふものが附きものだ。殊に癌腫は人體本來の組織そのもの丶一部で、結核菌だとか、梅毒だとかいふ、外來移住の寄蟲ではないのださうだ。さうだとすると、一層人間には附きもの丶病氣だと云へやう。生老病死を四苦といふ。冠婚葬祭より科學的だ。從つて自然だ。從つて必然だ。從つて當然だ。自然と必然と當然とは、論理學的に考へると、果してその間にどれだけの差異があるか、そこまでは先づ手をつけずに引きさがつて置いて一度生れたら、それに伴ふ老病死の三過程、或は三方面は、人間にはどうあつても、自然に必然に當然に免かれられぬものだとする。

ところが、爰に或種の人間があつて、死ぬのは止むを得ないが、老人になるのはいやだ、病氣をするのはいやだ、など丶いふ。さういふ人の爲に、昔から自殺といふ死に方がある。せツかちな、短氣な人にとつては、全く便法だ。然るに、その便法には、近來、有力な多數の反對論者があつて、自殺はどうしても卑怯だと主張する。卑怯とは道徳的回避の名だ。道徳とは生の當然の過程を指示する言葉だ。して見ると、老病をいやがるのは、生の當然の過程を回避する事なんだから、さうして生の當然の過程を回避する死に方が、即ち自殺といふ便法なんだから、なるほど、或は、自殺は卑怯かも知れぬ。卑怯かも知れぬが、自殺には非常な勇氣が要る。勇氣とは決して道徳的回避の名ではない。さうして

卑怯な行爲を遂行する場合には、人間は大抵勇氣を要するものだ……さア、分らなくなつた……

分らぬ余談は休題として、病氣見舞の條下に還る。ばけもの屋敷の女主人公の父親は、直腸癌などゝいふ、元來自分自身にとつては、何等の責任もない、不都合極まる業病にとつ附かれて、六七年このかた、寢床の上ばかりで、徒らに轉々反側しつゞけて來たといふ、たゞその話をきいたゞけでも、何ともはや、お氣の毒な人であつた。

紅療法、沃度、カルシユーム、草根木皮の漢法に至るまで、凡ゆる方法を盡しての後、ムダだと思つて、肛門のスペシアリテ、飯田町の、何のなにがしといふ、きたならしい病院、大變にいゝ醫者だと、小耳にはさむとすぐ様入院する氣になるほど、それほど病人も、看護に附き添ふ人々も、恐らく神經がスツカリ草臥れきつて了つてゐたものであらう

何丁目かで電車を降りて、いゝ天氣になつてゐたので、ブラブラ歩きながら、漸くさがしあてゝ、病室へ通る。

血の毛の失せた顏も手首も、もう、あたりまへの人間の皮膚の色ぢやなかつた。蠟だ。死蠟だ。蠟人形の色だ。それでも眼はまだ美しく澄み輝いてゐた。

――やア、はじめて……

仰向けに臥たまゝ、病人は挨拶したが、聲には意外に生氣があつた。語尾のハツキリした明晰な土佐辯で、姿は見ずに、聲だけきいてゐたら、誰も病人だとは思ふまい。

――一人娘ぢやが、親のいふ事はきかんで、好き方題の眞似ばかりしとるので、人様にお話も出來んやうな始末ですそれも親の家へ寄りつかんといふのなら、結句、その方がよろしいのぢやが、困れば、やはり、私のところまで尻を持つて來る……甚だ外聞のわるいお話でなア……で、今度のところは、どうか、人様から聞かれて、ハツキリとお答への出來る程度に願ひたいので……承れば、近々に御洋行なさるとやら、結構な事で…それにつけても、旅券などの關係上

籍の方はなるべく早く入れて置いて戴いた方が、都合がよろしからうと思ふが……
滔々として、どうして、壯者にも及ばぬほどの雄辯だ。酒でも飲まぬ時は、まるで啞のやうな口不調法な私は、一言一句、唯々諾々として、やがてコソコソと引きさがる。
歸りに、四谷見附の三河屋で、牛鍋をつゝき合ひながら、
——どう？ 印象は………
——何？
——父のサ。
——思つたよりは若いね。それに案外元氣ぢやないか。あの調子ぢや、一寸死にさうもない………
——さうね………だけど、あんまり身勝手な事ばかり云つてるので、いやな氣がしなかつた？
——いゝや、別に………
——なら、いゝけれど………それから、もう一度、おいやでせうが、あした、代々木のT先生のとこまで、母と三人で行つて下さらない？
——どうせ、もう、かうなりやア、どこへでも行くよ。
——さう？ お氣の毒だわねえ………あたしは、そんな事、眼中にないんだけれど、父のあの姿を見ると、やッぱり、喜ばしてやりたくなつて………
——出來るだけ喜ばしてやるサ………と、上の空で、フワ〱と答へたが、どうした加減か、その言葉が、自分ながら、妙に、かう、シンミリと、心の底に浸徹して、恰もエオリアンの琴線に觸れて、と、朦朧と雜司ケ谷の共同墓地

が、蜃氣樓のやうに、心眼に浮かび上る

――どうだい？……これから、足序でに、と云ッちやア、變だが……これから、一つ、我輩の母の墓まゐりにつき合はないか？……君のおやぢさんに逢つたので、こッちも、その……さうサ、つひ、誘はれて、一寸、その、奉公式かね、とでも、まア、云つたやうな眞似が、何となくして見たくなつたといふものサ。ハ、ハ、ハ。

――どこへでもお供するわ……お母アさんがもし生きていらしッたら、どんなにお怒りになるでせうね？

――なアに、そんなんぢやない……我輩の母はね、凡そ我輩の愛するほどのものだつたらね、たとへそれが氣違ひだらうが朝鮮人だらうが、きつと我輩と一緒になつて、心から愛してくれたものサ……況んや君のやうな可愛らしい人間なら、どんなに喜んでくれたか分りやアしない……

――さう？　だと、本當に嬉しいけれど……

妖怪どもの咽喉笛からも、時としては、かうした聲が、かうした柄にないシホラしい音樂が、人間並に出て來る事もあるから妙だ。

墓……十二年？　いや、もう、十五六年前には、たしかになる。即ち養父の死んだ翌年だ。一周忌が來て、角塔婆を石のそれに取り換へるべき必要に迫られた時、人生に對して、もう何物も興味を惹き得なくなつて了つた養母の、とり殘された養母の、その心身の持つてゆきどころとして、云はゞ、保養院とでも云つたつもりで、その頃、食客をしてゐた、若い、無器用な、さうして意地ばかり徒らに強い美術院畫家に一任して、五尺立方のカロウトを塗りかため、吟味した上等の小松石を積みかさね、玉垣をめぐらし、玉石を敷きならべ、ピタリと大理石の定紋うつた扉を閉ぢた、少

くとも一寫眞師の妻であつた養母の歡心と虛榮心とを購ふには足るだけに金をかけた、借上ながら、何々伯爵家に於けるそれを模倣した、その時分の私自身の坊ちやん形氣をば遺憾なく發散させた、多少は誇大妄想に失したが、それでも割合に上品な墓だ。

墓……人は死ぬものだ……物心づくと、私の弱い頭には、逸早く、ヅキンと、先づ髑髏が刻みつけられて了つたものだ……墓……人は死ぬものだ……死……と、思ふと、何事も既う手にはつかなかつた。さうしてその『何事も手につかない』狀態のまゝ、不安極まる、味氣なさ極まる、右へも、左へも、結局どこへも持つてゆきどころのない、七轉八倒の懊惱に襲はれつゞけたまゝ、それこそ油紙に火のついたやうに、二十年、三十年、メラ〱と燃燒して了つた。

墓……それでもまだ、それを建てた時には、それがどうやら人生終極の目的でゞもあるやうな氣がしたもので、同時に葬式以來きゝ覺えの正信偈など誦しながら、親鸞上人にまでなりすまして、そのカロウトの墓穴へは、燒いて骨にすれば、二百や三百の骨壺を塡積出來るほどの空間を創造したわけだ。さうしてその空間を充たすべく、淮陰の韓信と、漂母の餐にガツ〱しながら、股から股の間をば潜りぬけながら、高敞の地を相して、楚王の印綬でも夢見つゝあつたやうな、早い話が、通俗漢楚軍談に於ける韓信と、ほとんど大して遠くもない距離にあるところの、稚氣と衒氣と客氣とを以つてしたものだ。

——たとへ世界のどこをどう流浪するやうになつてもだ。我輩はもとより、我輩と生活を諸共にしつゝある人が死んだらだ。アフリカからでも、南米からでも、燒いた骨だけ、必ず爰まで郵送してもらふ事にして置かうよ。ワツ、ハツ、ハツ。なんかんと、逢ふ人每を辟易させながら、自分だけはいゝ心持で、そこら邊へホザキちらしてゐたものだと

——イスラエルよ、汝の到るところは皆うつくし。

——人間到るところ青山あり。

さうした程度のボヘミアニズムにさへ、さうした安價な、お手輕な、しかし、とにかく、インタアナショナルな心境にさへ、さうした時代にはまだ、とても到達出來るものでないといふ、簡單な原則すら、御本人、一向にお氣がつかれないで………

墓………男性女性兩個の幽靈は、とにかく幽靈らしく墓の前に立つ。一寸お辭儀の眞似もする。大理石の扉をば、ギーと左右へ推開く。定紋はコクモチに抱き橘だ。

——どうだい、割合に立派な墓だらう？ 白く塗れる墓サ………でもね、母の喜びッたら、それは大したものだつたよ。ほとんど隔日には爰まで歩いて通つたものサ………え？

巣鴨宮下町からだ。半道ぐらゐあるだらう………さうして持病のミゾホビイをば遠慮なく墓の中まで延長してからに、この玉石をだ、君、こいつを一々克明に、念入りに、洗つたり磨いたりしたもんだ………金田流の江戸つ子だつたから、たまつたものぢやない。墓の中の玉石だらうが、庭の中の飛石だらうが、銅壺だらうが、オトシだらうが、磨くとなると、まるでもう見境が、なくなつて了ふんサ………が、計略圖に中つて、四十年も同棲した、大事なく、夫を先立たせた、つまり疲勞やら悲歎やらが惹起したところのサ、目もあてられぬ母のヒステリイも、それがために、どうやら持ち直して來たぢやないか？………我輩もこれで、やりやア、人なみに、親孝行だつて何んだつて出來るのサ。どうだい？ ハ、ハ、ハ、ハ。

——平凡でゐて、一寸變つたお墓ね………名字だけ書いて、代々の墓とも何ともしてないところが珍しいわ………あの字はあなたが書いたの？

——とんでもない………あれだけ書けりやア、書で飯がくへる。あれは我輩の友人の父親に書いてもらつたんサ………その友人は今ぢやア朝鮮銀行へ行つてるから………フヽ、例の五百里さんなンぞは、ひよッとすると、知り合ひかも知れない。ハヽヽ。

——アラ、また、そんな人の惡い………お母アさんの前で、そんな事をスッパぬかれると、すぐ追ひ出されて了ひます。

——大丈夫。何もかも母にはもう見透しだ………のみならず、追ひ出したくたつて、もう家がないから安心サ。

——このお墓の中には、御兩親の外に、どなたが這入つてるの？

——我輩の長男サ。それだけサ。

——生きてると、もう、いくつ位になるの？

——さうサ………十ばかりになるだらう………でも、あゝいふ子供は、却つて死んだ方が幸福だつたよ………

——なんて名前？

——文哉、ツてつけたね………周は二代に鑑みて、郁々として文なる哉だ………親は苦勞し、子は樂をしながら、孫を乞食にしまいといふ、ばかに蟲のいゝ命名法サ………だから死んだんだらう………釋名は闇玄童子といふね………丁度、湯ケ原の天野屋で、ゼームスのプリユウラリステツク・ユニヴアスを翻譯なンぞしてた時に死んだんだから、ひどく哲學的な戒名だ。今時の坊主も中々味をやるよ。偶然の皮肉サ………

——さう？………

葉のない、枯枝を縱橫に錯綜させた、それでなくても、いやに物淋しい、墓地の、黄昏の、ぶく／＼した、ねば／＼た、下し駄にからまる大地からの、土からの、ばかげて陰氣くさい化銀杏が、どうやら目に見えぬ灰色の金網でも投げかぶせて、一氣に二個のこの、幽靈の畸形兒、妖怪のバケモノ、滅多にはかゝらぬさうした掘り出しものをば、ひそか

に切利天の歌舞市へでも、手一杯に引きとつてもらふつもりか何かで、巧にスウツと、人知れずたぐりよせられて了ひさうな、さすがに敏感な女性の方がまづ、ゾツと寒氣でも催したやうな様子をした。と、見てとると、男性の方も、漸く後ればせに、

——歸らうか………と、我に返つた。

——でも、ヘルンさんのお墓は？

——ウム、さうだつた………

女詩人サツフオの物狂ひ、その昔、レスボスにはじまつた變態性慾、トリパデイブス、逆上して投身したラフカデオの岩、そんな事を思ひ浮べながら、墓前に默禮して、生垣を出て來る出合ひがしら、

——どなた様でいらツしやいますか………わざ〳〵どうも有難うムいます………故人もどんなに喜びますでムいませう………

被布を着た、花の細枝を携へた、上品な、落ちついた、切髮の未亡人が、丁寧に頭を下げた。

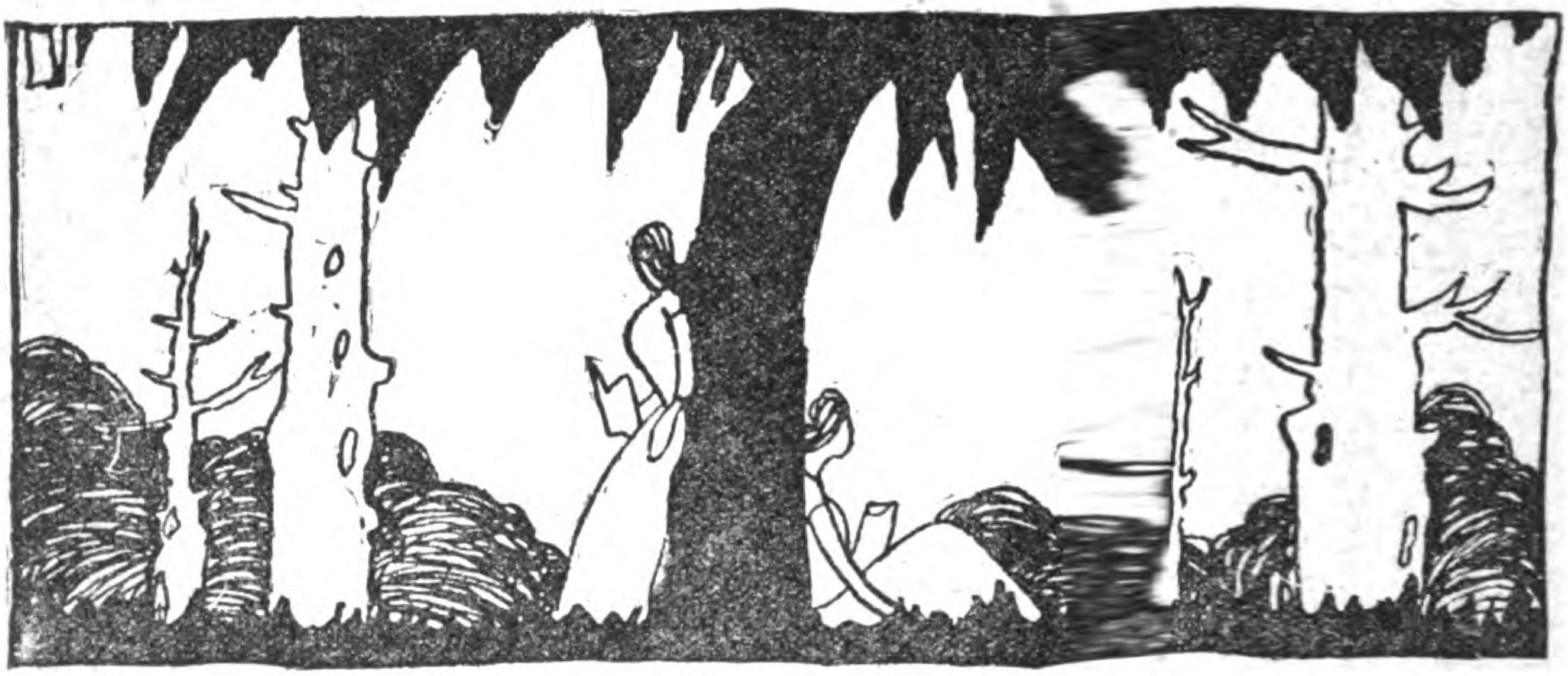
サツフオの國で生まれたアイリツシ、希臘から北米へ、北米から日本へ、出雲八重垣、古事記から日本人になつた小泉さん………放浪者………

——かういふ人にはあやかりたいよ。

——さうねえ………

——どこかの國でかうなるまで、放浪して放浪して、一生を送りたいよ。

——さうなさいな………



生まれ來る者

吉田絃二郎

幸吉は自轉車を壁に立てかけて置いて、いつものやうに銀行の表戸の鍵を外からはづした。薄暗い部屋の中には、鎧戸の隙間から洩れて來る日の光りが、金庫の前のデスクの上に一筋の細い明るい線を投げかけてゐた。入り口の土間に下駄を脱いで、そこにあつた草履を突つかけて部屋のなかにはいつて行くと、極かすかではあるが、ちよつと、むつとするやうないきれが感じられるのであつた。

『夏になつて來たんだな！』と幸吉は思ひながら、硝子戸を明けて、さらに鎧戸を左右に押しやつた。

一時に明るい光線が部屋の隅々までも流れ込むやうに、青々した麥畑の面の風と一緒に漂ふて來た。

直ぐ窓の前の麥畑の上では小鳥が鳴いてゐた。

幸吉はそこの窓のところに立つと、よく、きよとんとして小半時も、黄ばんで來た麥や、日に日に切りつめられてゆく桑の畑や、木曾へ通ふ白い埃の路を見つ

めてゐるのであつた。

かれの家からこゝの銀行まで一里ばかりの縣道を毎朝自轉車で走らせる間はさうでもないが、さていよ〳〵表の戸を明けて部屋のなかに落ちついてしまうと、かれはこのころきまつたやうに、現在の自分の色も艶もない生活をかへり見て、ぼんやりしないではをられないやうな氣持ちになるのであつた。

かつては東京にも出て、よく青年にありがちな文學に對する憧憬を持つてゐたこともあつた。別に自分で作家にでもならうといふそれほどの野心も持たなかつたが、『どうせわたしのやうな人間は百姓もできなければ、なほさら商賣もできない。先づ文學でも……』といふやうな極めて單純な考から、中學を出て間もなく東京に出かけて行つたのであつた。「何のために東京に來たのだ。何のために文學の講義なんか聽いてゐるのだ？』かれは時々自分でもこんな疑ひを抱いた。

何だか、わけはわからなかつたが、文學といふものゝ話を聽いたり、そのやうな方面の本など讀んでゐると、どこからか、そしていつかはもつと明るい、はつきりした、生き應へのある世界が生まれて來さうな氣がしてならなかつたのであつた。

かれと同じクラスの人たちでも、一度だつてかれが心から聲を出して笑つたのを見た人はなかつたであらう。かれはいつも秋の曇り日のやうな眼をしてゐた。かれの聲はいつも虛ろな感じを起させた。

かれと同じクラスの人たちは、たいていは文學青年らしいアンビションに燃えてゐた。そして集つては高い聲で議論を鬪はせてゐた。かれは人々の議論を靜かに聽いてゐた。しかし自分ではかつて一度も意見を吐いたことはなかつた。

かれは、どこかに、たれかの口から、或ひは作品の中から、かれの生まれつき憂欝な心を引き立たせ、かれの人生に明る

い光りを投げかけてくれるものが、いつかは見出されるにちがひないと思つてゐたこともあつた。

かれと一緒に牛込の小ひさな暗い正覺院といふお寺に自炊をしてゐた川面といふ男も、かれと同じやうに憂欝な男であつた。川面は兩親の愛といふものを知らず、一人の兄に育てられたせいかして、やはりいつも孤獨を守つてゐる男で、幸吉の他にはほとんど友達といふものを持たなかつた。しかも幸吉に對してすら隨分ヱゴイステックな男であつたが、幸吉は兄弟のやうな心持ちで川面の面倒を見てやつたので、幸吉に對してだけは川面も心から賴り合つてゐた。

三年間の東京の滯在中に幸吉は友人としては、このヱゴイステックな、感情的な憂欝家の川面を持つたゞけであつた。

幸吉は川面とつれ立つて三崎に行つたこともあつた。房州に行つたこともあつた。二人が二人ともいつも憂欝な顏をして、無口がちであつた。かれ等は兩國から房州まで、汽車の中でほとんど一言も語らないで行つたこともあつた。

幸吉の父が年寄つたこと、家の事情が幸吉をいつまでも手離して置くことができないといふことで、東京から故郷に歸るやうにと言つて來た時は、さすがに幸吉は東京を去りがたく思つた。しかし、かれの心の一面には『いつまで東京にゐても、俺の心に明るい世界が生まれて來ようとは思はれぬ。父をよろこばせるためには國に歸ることも惡いことではあるまい。どこに行つたつて俺の心からこの憂欝さがとりのぞかれることはない』といふやうな諦めもついてゐたのであつた。かれは川面とも別れて故郷に歸つて行つたのであつた。

中學時代からむつつりやで、氣弱で、憂欝な男であつた幸吉が、東京から歸つて來るといふ噂を聽いた村の人たちのうちでは、幸吉がどのやうに變つて來るであらうかといふことに對しては、幾分の好奇心を抱いて待つてゐた者もあつた。

しかし幸吉はどこまでももとのまゝの幸吉であつた。村の人たちは幸吉が三年前の影の薄い姿で、秋の曇り日のやうな眼をしばたゝいて桑畑の中などにきよとんとして立つてゐるのを見た。

かれが東京から歸つて來た時は恰度桑の芽が一雨ごとに目立つほどずん〳〵伸びて行つて、村中の建物が桑の廣野につゝまれかけたころであつた。

かれは父につれられて信濃の田舍まで、養蠶期の手傳ひの男や女たちの相談に出かけたりしなければならなかつた。

かれが三年故鄕にゐなかつた間に、年々信濃附近から出て來た手傳ひの女たちの間には、もう嫁に行つたりしてしまつたのもあつた。かれは時としてその女たちのことを思ひ出すこともあつた。しかし殆んど不眠不休で手傳ひの若い男や女たちと桑を運んだり、桑を刻んだりしてゐる間だけはかれはむしろ幸福を感じてゐた。かれは日暮れころよく桑を積んだ馬に跨つて、霧の中の小徑を歸つて來たりした。

その年はいつになく絹糸の市價はひどい暴落を示して來たので、『高い桑を食はせて、安い繭を作るくらゐなら、蠶を捨てゝしまつて、桑の葉を賣りこくつた方がましぢや』などといふ考からして、村の人たちは可なり大きくなつた蠶を川に持つて行つて捨てた。

村の人々は蠶を捨てるやうにとすゝめたが、幸吉と父は『どうして捨てることができるものか。お蠶さんだつて生き物ぢやないか』と言つてしまひまで蠶を飼ひ上げてしまつた。

果して出來上つた新繭の相場は非常な暴落であつた。去年一圓八九拾錢であつたものが今年は八拾錢くらゐの相場であつた。

『松前の家ぢや親爺さんも幸吉さんも人間はづれぢや。』『二人ともよつぽど頭が悪い。』『まあ言つて見れば阿呆ぢや。』村の人たちはよく何かにつけてこんなことを言つた。幸吉は村の人たちのこのやうな陰口を聽いてはゐた。しかしそれよりもかれが川に捨てられてあつた繭を拾つて來て、こつそり桑をやつてゐるのを父に發見せられた時、屹度叱るであらうと思つてゐた父が『ほんに、村の衆はひどいことをする』と言つて、かれがとつた行爲をむしろ是認してくれたとき、かれは自分の父が村の人たちのやうに冷酷でなく、エゴイステツクでなかつたことを嬉しいと思はずにはをれなかつた。

春、夏、……秋の繭までが、幸吉の一家にとつては損失の上の損失を重ねてゆくばかりであつた。

かれが今の銀行に雇はれてゆくやうになつたのも、こんな事情からして、せめて自分一人の身じんまくでもつけなければならぬといふ必要上からであつた。

銀行にでも行つて、まあ、わづかでも月々きまつた月給を貰うた方がよい。とてもお前には百姓仕事もできなければ、商賣といふやうなことは柄にもないことぢやで……』幸吉の父は自分で奔走して幸吉を銀行に入れたのであつた。

その秋は幸吉の生活にとつては變化の多い時であつた。かれは山一つ向うの村から若い妻を貰つた。幸吉はまだ自分は一人のしかくもつかなかつたので、結婚をするといふことは躊躇せずにはをれなかつた。それでもかれはその女とは以前から知つてもゐたし、好きでもあつたのですゝめらるゝまゝに結婚してしまつたのであつた。

夜が更けて來て、若い妻と二人で、直ぐ家のまはりの柿の葉音など聽いてゐる時、女がつゝましやかに俯向きがちに針などを運んでゐるのを見る時、幸吉は自分の結婚を後悔することもあつた。無能な自分のために一生を苦しまなければならぬ女のことを思ふと氣の毒でならなかつた。

かれはほとんど機械的に一里あまりの道を自轉車を走らせて銀行に通つた。

銀行と言つたところで、道路に面した方に二つの窓があり、左右にたゞ一つづゝの窓があるだけで、部屋の中には一つの金庫と事務用のデスクが一つ、椅子が三脚あるばかりであつた。

行員と言つてはかれ一人で、他には小使一人ゐるのでもなかつた。かれは自分で火鉢の火もおこさなければならぬし硝子窓も拭かなければならなかつた。

縣道を通つて行く人たちは、いつもかれが秋の曇りのやうな眼をしばたゝきながら往來をながめたり、遠い中央山脈の雪の連亙を見つめてゐる寂しい姿を發見するのであつた。

繭の取引期や、秋の收穫時を除いては終日一人の客の影すら見えないことも少くはなかつた。

たまに纒つた金の必要が起れば、かれは銀行の戸は明けたまゝ、金庫の鍵だけを握つて自轉車を飛ばして、そこから三里ばかりの山道をへだてた或る山の中の町の本店まで出かけて行くのであつた。

デスクに凭りかゝつたまゝ尺八など吹いてゐるかれの姿を見かけることもあつた。

一度などは銀行の表の戸を鍵かることを忘れて歸宅してしまつたのを翌日村の駐在所の巡査に注意されたこともあつた。

そのやうな勤め振りでも、勤めて行けるほどの銀行だつたので、ともかくかれは憂欝な眼をしばたゝきながらも、毎日銀行のデスクに凭りかゝつてゐた。

×

窓のそばからデスクの方へやつて來た幸吉は、懐から鍵を出して、金庫を明けて見た。そこには昨日のまゝに少かば

りの紙幣と二三冊の帳簿が箱の底に置かれてあつた。

がたんと金庫の音をさせて、かれは椅子に腰を卸してから所在なさゝうに、尙一度窓から麥畑の方を見た。

今朝、着物を着替へてゐた時、『何だか月のものがとまつたやうです』と言つて心持ち顏を赧らめた妻のことがかれの頭に泛かんで來るのであつた。

うれしいやうな、恐ろしいやうな、かつて經驗したことのない複雜な感じがかれの心をいつぱいに充たすのであつた。

新らしい生命の芽がめぐみかけてゐるのだ。新らしい生命が生まれる。嚴かな自然界の新らしい事實が忽然としてかれの意識の上に現はれて來た。

『だが、自分には妻と子を養つて行くだけの力はない。その力を持たないものが妻を持ち、子を產むといふことは恐ろしいことではないか』何の考もなしにうか／＼と結婚してしまつたことが後悔されるのであつた。妻に對しても、まだ生まれない子に對しても、かれは責任を感じないではをられなかつた。

空想ではない。どうしても動かすことのできぬ事實がかれの心を脅すのであつた。

『大分暑うなりましたッ………』

いつも盆のころになれば近江から來る絹問屋の若い洋服の男が赤革の手提げカバンを抱えて、靴のまゝ上つて來たのであつた。

『何してゐなさる。いつもこゝの銀行は靜かで、景色がよい……』その男は帽子を脫いで額の汗を拭いた。『まだ鶯が鳴いとる、ふむ……やつぱり山の中ちやなあ。わしらの國では鶯は春鳴くもんにきまつとるに……』若い男は窓の方に

近づいて行つて、耳をかたむけては、麥畑の向うの森の方から、途切れ〲につたはつて來る鶯の聲を聽いてゐた。

『あすこの白い花が見えるのは何ですかい？あの森の前の……』若い男はなほ頸のまはりの汗を拭いてゐた。

幸吉はのびをして森の方を見た『あれは罌粟ですよ。』

『罌粟の花ですかい。ちがひない。わしら去年の恰度今ころだつた、奈良から法隆寺さんに參りましたが、法隆寺のねきにも白罌粟が咲いとりました　あすこからは大和の郡山も見えたし、荒木又右エ門がゐたといふところですわ、よいところですぜハツハツハツ……』

若い男は一人でしやべつて、一人で笑つた

『今日はな、ちよつと預つといていたゞきたいんです。また持つて歸るのも厄介ですし、直きこの近在に品さへ揃へばまた出直して來んぢやなりませんで……』から言ひながら、その男は赤革の手提カバンの中から束にした紙幣を取り出して、デスクの上に置いた。

幸吉が受け取つて、金庫の中に藏ひ込みにかゝつた時は、その男はもう土間の方へ下りて行つた

その男が銀行から出て行つてからしばらく、幸吉は再び、今朝の妻の言葉や、まだ生れない子のことについて幻を追ふてゐた。

それは明るい夏の太陽にかがやいた野であつた。そこには色々な美しい花や草の葉が光りに滿ち、微笑に溢れた世界を作つてゐた。綠の木蔭が風のたんびに、濃い波のやうにゆらいでゐた。若い一人の母が、一人の子を抱きながら頬擦りしてゐた。嬰兒の笑ひ聲が、木の實のはじけるやうにからからと幸福な明るい空氣に響いてゐた。

幸吉は思はず微笑した。

と、その時であつた。幸吉は入口の戸の前を立ち塞いだ大きな影に氣が付いた。そこにはこの附近では滅多に見かけたことのない背の高い男が立つてゐた。

幸吉はわけもなしに、出しぬけに堅い物で胸を刺されたやうな氣がした。かれはまだその刹那まで、そこに立つてゐる男が誰であるかさへ意識しなかつたのであつたが、たゞ入口に立つた暗い影の男が、何んとなしに不吉な事件を豫兆してゐるやうな感じを直覺的に持つたのであつた。

男は土間にはいりながら卑しい笑ひ方をした。

×

『僕ですよ……まだわかりませんか……筒井田ですよ……もうひと昔前にお目にかゝつたからハツハツハツ……』男は笑ひながら土間の上に突つ立つてゐた。

『あツ、筒井田さんですかツ！』幸吉は強ひて笑はうとしたが、かれの唇は恐怖に似た感覺に顫へてゐた。殊に對手がぢわ／＼と素直な風で近寄つて來るのがこの上もなく無氣味でならなかつた

『さあ、どうぞ……』幸吉はかう言つてその男の方へ近づいて行つた。自分の心に對しては（氣をゆるしては駄目だぞ。この男は何をしに來たのかわからないのう）と命じながらも、どうしてもその男に面しては、まるで征服者に對する被征服者のやうな力弱さを感じないではをられなかつた。

『ほんとに御邪魔でせう。上つてもよろしいでせうか？』その男は土間の上に立つたまゝ、幸吉の顏を見上げるやうにした。いかにも氣の弱さうな、臆したやうな風をしながら微笑んだ。

『えゝ、ちつとも。さあこちらへ……』幸吉は對手のもぢ／＼した態を見てゐると、今まで自分が警戒する心を胸に抱

いてゐたことを恥づるやうな氣にもなるのであつた。

『ほんとうにお仕事の邪魔にはならないでせうか……』その男は板の床の上に足をかけた。幸吉は上草履を出してやつて椅子の方へその男を招いた。

『いかにもいゝ景色ですなあ。こんなにいゝ景色とは思ひませんでしたよ。日本アルプスが見えますね、この窓からは……』その男もしばらく窓の傍に立つたまゝ麥畑を越えて山の方を眺めてゐた。

『日本アルプスはこの裏の山まで行かねば見えますまい。あれは御嶽さんのつゞきの山脈かと思ひますが……』

『あなたは幸福ですな。故郷でかうやつて御兩親と御一緒に靜かな平和な生活を送られることができるのですから……』その男は窓に凭りかゝつたまゝ遠い山を見ながら輕い溜息をついた。『雲雀も鳴いてゐますね。……ほんとうに平和なものですね。僕等が中學に通つてゐたころとそつくりですね……』

幸吉はぢいつとその男の横顔を覗くやうにしてデスクの方から眺めてゐた。

その男の溜息や、咏歎的な言葉や　さらにその衰へた姿が、幸吉の胸から最初の警戒心をとりのぞいてしまつた。

筒井田は幸吉よりずつと上級生であつた。背も高いし、胴のまはりはまるで頑丈な樫木を聯想させるほど厚く、がつしりしてゐた。

そのころから薄い髭をたくはへてゐた。筒井田はいつでも懷にピストルを持つてゐるといふやうな噂が、幸吉等の仲間を顫へ上らせたこともあつた。かれはまつたく中學第一のタイラントであつた。恰度春のなまあたゝかい雨に蠶豆の花が咲くころであつた。美少年のことからして筒井田が、城の裏の山の中で同じクラスの男と決鬪をして、日本刀で對手の横顔を切つたゝめに學校を追ひ出されたのは。

中學を追ひ出されてからも、筒井田はやつぱり中學生たちに對してはタイラントの脅威を充分持つてゐた。一度かれに睨まれたものはかれの前に慴伏するより他はなかつた。

幸吉は、筒井田が放校された後、一度大きなステツキを握つて同じグループの上級生たちと一緒に肩を怒らせながら縣道を歩いて來るのを見たことがあつた。桑の葉が繁つてゐたころであつたし、それに幸吉の方が早くそれに氣付いたので、かれはすばしこく桑畑の中を走つて隠れたことがあつた。そのころの記憶が、今もなほ幸吉の胸によみがへつて來るのであつた。

『けれども、何といふひどい變りかたであらう――』幸吉はかう思はずにはゐられなかつた。窓によりかゝつてゐる筒井田の顔には、もうそのころのタイラントの人を威壓するやうな努力もなかつた。かれは昔と同じやうに背だけは相當に高かつた。しかし胴のまはりなどは昔の半分くらいしかなかつた。

かれの肩の肉はげつそりと落ちてゐた。そこには世間の波にもまれ、さいなまれ、疲れ切つた男が呆然として立つてゐるのであつた。

『實際いゝですなあ、こゝの生活は。理想的ですよ。』筒井田は袂から敷島を出した。そしてマツチを擦りながら、そこにあつた椅子に腰を卸した。つづけさまに二三本の巻煙草を灰の中に突込んだ。

窓から、天井、天井から壁、デスク、金庫と部屋中を珍しさうに眺めてゐたが、不圖棚の上の尺八を見付けた。

『あなたは尺八を吹くんですか。』もうかれは尺八を摑んでゐた。『僕も中學時代からよく吹きました。シベリヤにゐた時も時々吹いては、日本のことを思ひましたよ。こゝで吹いてもいゝでせうか。幾年振りでせう、吹くのは？』

筒井田は眼をつむつた。

まつたく筒井田は尺八はうまかつた。眼をつむつて筒井田の尺八の音を聽いてゐると、ほんとうに筒井田の過去の小說的な、悲劇的な異鄕の生活が眼の前に泛かんで來るやうにすら思はれた。

幸吉は眼をつむつてゐる筒井田の顏を覗いて見た。筒井田はどうしても感激を抑へることができないほどな感動をもつて尺八を吹いた。

『いや、もう吹くのはやめませう。尺八を吹いてると過去の苦しかつたこと、悲しかつたことばかり頭に泛かんで來て耐らなくなりますから。』筒井田は再び溜息をついて尺八をデスクの上に置いた。

『あなたはどう思ひます。人生といふものを？』筒井田は幸吉の眼の底を覗くやうな姿勢をとつて、椅子を幸吉の方へすゝめた。『僕は隨分人生といふものについて考へさせられましたよ。殊に御存じの通りの僕でしたから、……父には無論、村の人たちにも、すつかり誤解されてしまひましたし、故鄕にはをれなくなるし、この八九年といふもの一日でも滿足な日を送つたことはなかつたのですからねえ。朝鮮から、滿洲、シベリヤ、それからサガレンにも行きましたよ。每日、每夜、それやとてもあなた方には想像もつかないやうな生き方をして來たんですからねえ。實際幾度血淚を絞つたか知れませんよ。』筒井田は再びデスクの上の尺八を握つたが、直ぐとデスクの上に置きなほした。『實際人間といふものは、僕等くらゐの年輩になつてはじめて人間世界の苦といふやうなことが幾分わかつて來るんですねえ。』筒井田の調子はばかにしんみりしてゐた。

『さうでせう。えゝ…』幸吉はうなづいて見せた。自分のこのころの心持ちにひきくらべて、筒井田の言葉にひとりでに惹きつけられてゆくのであつた。

『あなたももう御結婚なすつたさうですねえ。』

幸吉にはちよつと皮肉にも聞えた。殊に筒井田が下から見上げるやうにして幸吉を見た白い眼が、ふたゝび幸吉に或る警戒心を呼び起させた。けれども次ぎの瞬間にはもう幸吉はすつかり筒井田の話に惹きもどされてゐた。

『いゝえ、まだ早いなんていふことがあるものですか。結婚は早いほどいゝですよ。妻といふものを持つて見なければ人間の世界のほんとうな苦勞はわかりませんよ。』筒井田はまた白い上眼をつかつて幸吉を見た。そしていかにも生活といふものに疲れ切つた人のやうな溜息をついた。

筒井田の輕い溜息や、沈んだ話し振りに惹きつけられてしまつた幸吉は、筒井田の白い上眼つかひをさへ好意に解釋するやうになつてしまつた。

『この人はほんとうなことを話してゐるやうだ。ほんとうにこの數年の間に苦しんだにちがひない。』筒井田の話を聽いてゐる間に、幸吉は幾度もかう思つた。かつては中學第一のタイラントであつた筒井田が、そして年少の幸吉なんかに對しては一瞥をも與へなかつた筒井田が、今かうしてかれの前に媚を呈し、上眼つかひをしてゐる卑屈なやつれた風貌を見ては、幸吉は妙な寂しい感じにならずにはをれなかつた。

實際、筒井田はむさぼるやうにして敷島を喫んだ。巧みに小指と藥指とを使つては、喫みさしの卷莨の灰を手際よく火鉢の中に落した。そして半分ばかりになると惜しげもなく灰の中に突つこんでしまつた。着てゐる銘仙の色もはげかかつた袷や、袖口も叩き切れてゐる褞袢などから推して、現在の筒井田の生活は想像されるのに、惜しげもなく、殆んど浪費的に喫みさしの卷莨を捨てゝゆくやり方は、幸吉にも不審に思はれないこともなかつたが、氣の毒な人だといふ感じでいつぱいになされてゐる幸吉の頭には、そのやうな不審はぢきに消えて行つてしまうのであつた。『これも或る過去の浪費時代の悲しい遺物にちがひない』筒井田のすべてをよい意味にのみ考へてしまつた。

『また雲雀が鳴き出しましたねえ。』筒井田は再び窓の方へ立つて行つた。『實際たまりませんねえ、平和な世界ですねえ。まつたく……………』しばらく窓から外を眺めてゐた。桑を積んだ車が麥畑の間を二台つゞいて森の方へ行つた。

『あなたはまつたく幸福ですよ。自分の故鄉で生きて行くことのできる人は……………』再び筒井田は椅子に凭りかゝつて卷莨に火をつけて、しばらく俯向いて考へ込んだ。

『御存じの通り、僕の父と來てはあんな頑固な男でせう。家庭はあんな亂脈です。お恥かしいことですが……』筒井田はちよつと少年らしい羞恥を顏に泛かべて見せた。

村中の誰れ彼れにも、一滴の血も涙も持たぬ因業爺として敬遠せられてゐる筒井田の父、氣の弱い、人のいゝ母、親子ほど年のちがつたお兼といふ若い妾のことなどが、幸吉の頭に泛かんで來るのであつた。

『あんな家ですから、僕がたとへどんな女をつれて來たつて家庭圓滿とは行きませんよ。今度のやうに久し振りで故鄉に歸つて來ても邪魔物にこそさるれ、誰れ一人、歸つて來たかと言つてくれるものもないんですからねえ。まつたくつまりませんよ。ほんとうに僕くらゐ不仕合せな人間はありません。中學時代は僕が亂暴者だつたのも、ほんとうは自暴自棄からでしたよ。みんなが僕を誤解したのです。僕は生まれてからこつち眞實に親の愛といふものを味つたことはないのですからねえ……』筒井田は溜息をついた。そして下を向いてしまつた。

『…………………』幸吉は筒井田の俯向いた横顏を覗いた。眦のあたりにすでに細い皺ができて皮膚がたるんでゐるのが暗い感じを起させた。放校される少し以前に、同級生の書物と外套とを何うかしたといふ噂を聽いたことなどがかれの記憶によびさまされてゐたが、かれは惡い憑き者でも叩きのけるやうにして、その記憶を打ち消してしまつた。

『僕もやはり結婚しましたが、僕の家庭があんな風ですから妻にも氣の毒でなりません。尤も僕の妻は父が決めたので

はありません。僕が北海道に行つてゐたところ、妻は女學校の先生をしてゐたんですが、僕と一緒になつたのです。いよいよ結婚の式を上げるとなつても父の方からは錢一文も送つてはくれませんでした。北海道の雪の中で五六人の友人たちと寂しい結婚式を擧げました。子供が生まれたことを父に知らせてやりましたが、やつぱり祝ひの手紙一つ寄越してはくれませんでした。僕はあんまり妻に對して氣の毒でなりませんので、たうとう贋の手紙を書いてポストに入れましたよ。その父の贋手紙を讀んで、妻がどんなによろこんだか知れません。あんなにまで僕の父の手紙を待つてゐたのかと思ふと僕は泣かずにはゐられなくなりました…』筒井田はこゝまで話して、再び俯向いてしまつた。膝の上に組んでる筒井田の手の甲に涙がぽとりと落ちた。

それからなほ筒井田は一時間ちかくも話しつゞけて行つた。そして最後に、『今度こそはいよいよ北海道で立派な事業が見つかつたので一旗擧げるつもりだ。二三日うちには北海道から金は來るが、それまで急に金が欲しいから幸吉にとつては可なりの大金を貸してくれるやうにと相談を持ちかけた。幸吉はどうしても斷はることはできなくなつてゐた。

さつき洋服の男が預金に持つて來たすつかりの金と、今まで金庫に殘つてゐた金の大部分とを、筒井田は無雜作に新聞紙に包んで、麻絲でくゝつて小脇に抱へながら銀行を出て行つてしまつた。

『では、三日のうちには乾度返しますから……』

白い砂埃を立てゝ縣道を一直線に大股で走るやうに歩いてゆく筒井田の姿を、幸吉はしばらく見つめてゐた。まるで魔術にでも魅せられたもののやうに。

×

かれは筒井田の姿が見えなくなつてからもなほ縣道の方を眺めてゐた。かれは思はず深い溜息をついた。かれの顔は

一層蒼白くなつてゐた。

恐ろしい罪を犯した者のやうな恐怖と不安とが、どしんとかれを暗い穽の中に突き落したのであつた。

かれは振りかへつて、そこにある空の金庫を見る勇氣も持たなかつた。

何の信用もない、何處に住んでゐるか、それさへわからぬ、言つて見れば、今では立派な風來坊である筒井田に、何の考もなしに、ありつたけの行金を掴み出してやつたといふことが、自分自身でも不思議でならなかつた。

『何といふ俺は……』かれは自分の髪をもみくしやに掴んで、自分といふものを土間の上に叩きつけたいと思つた。

かれは窓から金庫の方へ歩いて行つた。膝ががくがくとして少しも力がはいらなかつた。投げつけるやうに椅子に凭れて、かれはぼんやり帳簿を開いていつまでも一つの個所を見つめてゐた。泣くにも泣けない、砂を噛ませられたやうな不愉快さが頭いつぱいにこびりついてゐるのであつた。

時計が三時を打つた。かれは金庫を閉めなければならぬことに氣づいた。

『いつたい何うすればいゝのだ？』かれは再び空になつた金庫の前に突つ立つてゐた。

かれの頭をかすめて暗い、恐ろしい決心の影が閃き流れた。

かれは生まれて始めて恐ろしい犯罪の意識に顫へ上つた。手錠をかけられた囚人の姿や、編み笠や、高い煉瓦塀や、鐵の門や、鐵の格子や、それからそれへと恐ろしい幻影がかれの心を壓へつけるのであつた。

かれは今から自轉車を驅つて山を越えてゆけば本店の主人が銀行にゐる間に、充分行きつくことが出來ると思つた。何も彼も打ちあけさへすればとも思つた。しかしかれはその結果を恐れた。妻や父の悲しみ、自分の上に加へられる人々の侮蔑の眼を恐れた。かれは躊躇した。かれは主人の前に立つたところで、事實を打ち明けるだけの勇氣のない自分

自身をあまりによく知つてゐた。

かれは土間まで下りてゐた足を尙一度デスクの方へ運んだ。

明收がかすかすに干からびてしまつた。かれは顫へる手でペンを走らせた。かれは今帳簿の上に書いたばかりの文字が、まだべつとりと濡れてゐるのをそのまゝ伏せてしまつた。

かれはいつものやうに銀行の表戶を閉めて、自轉車に乘つた。膝頭や、腕の顫へがまだ止まらなかつたので、しばしば桑畑の中へのめり込まうとした。

夕陽が眞正面からかれを射してゐるのが熱い炎でも叩きつけられるやうに苦しかつた。

家に歸りついた時はもう家のまはりの柿の木が夕暮の影を作つてゐた。人々は薄暗い板の間で桑の葉をむしつたり、土間の隅の竈の火を焚いてゐたりした。

このやうにして家ぢうの人々が一年中働き通しに働いたところで、今日筒井田が抱へて行つただけの金を儲けることはできないのだといふことなどがかれの頭に考へられるのであつた。かれは妻が桑の葉を抱へながら庭から土間にはいるのを見たが、妻の視線を避けるやうにして離れの方へ急いで行つた。

かれは夜になつても滅多に妻とも口を利くこともしなかつた。妻がいつものやうに電燈の下で縫ひ物をしてゐる姿を見てゐるのさへ苦しかつたので、いつもよりずつと早く寢床をひろげてもらつて寢た。

しかし寢床についたまゝ、妻の落ちついた、何の悲しみも持たないやうな顏を見てゐるとかれは幾分心の落ちつきを取りもどすことができた。「わけもなしに自分ひとりが心を苦しめてゐるのだ。自分で自分を苦しませてゐるのだ」とも思ふのであつた。

『人を疑ふくらゐ惡いことはない。あの男は屹度立派な仕事をするにちがひない。三日經てば屹度金を返しに來るにちがひない。人を疑ふなんて、俺は何んといふ心のきたない人間だらう。』幸吉はかうも思つて見た。そして自分の醜い心を叱つても見た。

×

幸吉はどんなにか三日目の日が來ることを待つてゐたか知れない。筒井田が金庫の金を持つて行つてから三日目の日が來た。幸吉は朝から心待ちに筒井田の姿を待つてゐた。午後になつても筒井田は顏を見せなかつた。

幸吉はいつもよりおそくまで銀行を明けて置いたが筒井田は見えなかつた。

かれは銀行からの歸り途に、少しまはり路をして筒井田の父の家のあたりを歩いて見た。筒井田は父の家へゐるやうなけはいも見えなかつた。近所の人に訊ねて見たがたれも筒井田の息子が旅から歸つて來たことすら知らなかつた。幸吉は忌々しいやうな、泣き出したいやうな氣にもなつた。

『でも、人を疑つてはならぬ。何か都合の惡いことが突發したのだらう』かれは自分で自分を說き伏せながら家に歸つて行つた。

十日經つても筒井田は見えなかつた。

かれは心當りの人々にもたづねて見たが、誰も筒井田の消息については知らなかつた。

『いよいよ誑されたにちがいない。疑ふのではない。たしかに僞られたのだ。』かれは腹立たしい數日夜を送つた。

×

朝からぎらぎらと太陽が麥畑の上に燃えてゐた。麥を刈る鎌の音が窓の外に聞えてゐた。

『暑くなりましたなあ。』板の間に上草履も引かけないで素足のまゝはいつて來たのは、この邊では一番大仕掛に養蠶をやつてゐる草刈といふ家の主人であつた。草刈の主人は單衣羽織を脱いで、椅子に投げかけると、ふくらんでゐた懷から金包みと帳面を出して、デスクの上で丹念に金を算へはじめた。

幸吉が數字を記入して渡すと、尙一度丁寧に帳面を見て、大事さうに風呂敷に包んで、羽織を引つかけて、やがて銀行を出て行つてしまつた。

この男が出てやつと鐵道を一丁ばかりも行つたところであつた。幸吉は再び入り口に暗い大きな人の影が射したことに氣付いた。かれは直感的に或る不安を感じた。

『やあ、飛んだ御心配をかけました。ほんとうに待ちかねたでせう。僕を詐僞師とでも思つたでせう。ほんとうにすみませんでした。三日目にはお返しに來るつもりでしたが、あの晩でした、北海道のあの事業一切をまかせてゐる男から直ぐ大阪まで行つて至急材料を買つて届けろといふ電報が來たのですよ。ですからその晩直ぐ大阪まで出かけて神戸から下の關までも、材料のことで飛び歩いてゐたものですから……』筒井田はまるで親しい友達のやうに打ち解けた態度で話しかけた。この前來た時とは血色もよく、見なりなどは見ちがへるほど立派にしてゐた。ばかに太い金鎖などを兵兒帶に絡みつかせてゐたりした。

『大阪の取引銀行には恰度二萬圓の爲替を北海道から送つて置いて貰つたものですから、まあそれでたいてい買物は出來たのです。』こちらで拜借して行きましたお金もそんな都合で、非常におくれてすみませんでしたが、やつとお返しに來たのでした。ほんとうに心配をかけましたハツハツハツハツ……』筒井田はつゞけさまに金口の卷莨を喫んだ。そして快濶さうに哄笑した。

幸吉は自分の心をかへり見て、この數日、筒井田を疑つてゐた自分自身を恥ぢないではをれなかつた。

筒井田は懷から紙入れを取り出してデスクの上に投げ出すやうにして置いた。そして中から金貨を四五枚出して手の平に載せて、幸吉に見せた。

『これは英吉利の金貨ですよ。今度神戸に行つた時、あちらに少し爲替を組んだものですから、その時、あつちの銀行員に賴んで替へて貰つたのですよ。あなたにも上げませうか……』筒井田は手の平に載せたゞけの金貨をさし出した。

幸吉は笑つたまゝ壁の方へ退つた。

『これつぱかし何でもないぢやありませんか。日本の金にして五十圓か六十圓くらゐなものですよハツハツハツ……遠慮なんかいるものですか……』

筒井田は今日もまた北海道の話だの、シベリヤの話だのをつゞけた。そしてしまひには肩を脫いで背だの、腕だのを見せた。そこには滿洲やシベリヤで命のやりとりをしては切られた傷だといふのが、黑いひきつりになつてゐた。

『命はいつでも捨てゝるんですから、どんなことがあつても恐いとは思ひませんよ。』肌を入れながら、幸吉を見つめてゐる筒井田の眼は中學時代のタイラントを聯想させた。ほんの瞬間ではあつたが。

筒井田と向かひ合つて語つてゐる間は、幸吉はまつたく憑き物に憑かれたものゝやうに、筒井田の意志通りに働かねばならぬ傀儡物になつてしまふのであつた。かれを抑へつけて、引き摺つて行く暗い重い力を、かれはどうすることもできなかつた。

づるづると一言一言かれは筒井田の手に引きづられて深い淵の方へはまつて行くのでつた。かれは警戒することも忘れてしまつて夢遊病者のやうに筒井田が命ずるまゝに働かねばならなかつた。さうすることがその刹那のかれにとつて

は何よりも自然なことのやうに思はるゝのであつた。

『では、今日は僕が持參した金はこの次ぎまでお借りして置くことゝして、さらにこの机の上にある金だけ拜借することにしませう。さうすると事業の方もたいへん助かりますので……。いづれ一週間のうちには屹度持參しますよ。今度はもう、御心配はかけません。ほんとうにすみませんでした。』筒井田は引つたくるやうにして、さつき卓刈の主人が持つて來て置いたばかりの金を、そつくり無雜作に古新聞に包んで懷にねぢこんだ。

『ぢや、今度は屹度一週間内には來ますから。今度もやつぱり關西まで事業の方の關係で廻つて來ますから……』筒井田は銀行を出るとすぐ外を見て手をさしまねいだ。銀行の横手に待たせてあつたのか、一臺の俥が走つて來た。

幸吉は俥が桑畑の中にかくれてしまふまで、見送つてゐた。

『どうしたといふのだらう俺は？』またしてもかれは筒井田の誘惑を退けることは出來なかつたのであつた。筒井田から遠ざかつてゐれば、いろ／＼に疑つても見るのであつたが、筒井田の顏を見る刹那に、かれはどうしても筒井田を疑ふことができなくなるのであつた。

かれは自分の愚かさを後悔せずにはをられなかつた。かれは懲り性もない愚かな自分を床の上に叩きつけてやりたかつた。

筒井田が來るのはこの前も、今日も、大きな金を持つた預金者が銀行の中へはいつて來た日にかぎられてゐる。しかも預金者が銀行を出てゆく姿が見えなくなる暇もないくらゐに筒井田は銀行を襲ふて來るのであつた。

『或ひはあの男は毎日毎日、この近くの畑の中か、何處かに、身を隱してゐるのではないか。そして預金者が來るのを見張つてゐるのではないだらうか？』かれは窓の外の麥畑や桑の間を見すかすやうにして眺めた。無氣味な感じさへ湧

いて來るのであつた。

『あの男は、どうして俺だけをこんなに苦しめるのだ。あの男は三度來るに違ひない。四度、五度……そしてたうとう俺を狂ひ死にさせるまで苦しめるにちがひない。』かれは絶息しさうであつた。

『いや、そんなことはない。俺はどんなことがあつても、何うあの男に誑されはしない。』かれは自分で自分に命ずるやうに獨語ちた。

かれはまたその日第二の恐ろしい罪を犯した。かれの顫へる手は金庫の中の帳簿のに不正な文字をにじませた。

×

一週間經つた。筒井田は來なかつた。

幸吉の顔は日に日に蒼ざめて行つた。

かれは或る日何うしても山を越えて本店まで行かなければならなかつた。

本店の主人はいつもと少しも變らぬやさしい調子でかれと語つた。かれは主人の前に立つてゐる間に幾度か眼がぐらぐらとした。今にも床が落ちて、底知れぬ深い淵に落ち込んで行くやうな氣がしてならなかつた。

『それではこれだけ持つて行つてくれ給へ。』主人はかう言つて可なりかさだかな金を手渡しゝた。

幸吉は腕と脚とがわなく／＼と顫へるのを何うすることも出來なかつた。かれの息はつまつて、後頭部をかあんと堅い物で打ちのめされたやうな氣がした。

主人が何か語つてゐるのも、殆んど耳に入らなかつた。そして逃げるやうにして本店を出た。

妻は惡阻に苦しんでゐた。妻は幸吉が日に日に憂欝になり、蒼白い顔をしてゐることのみを案じてゐた。
『何うかなさつたのぢやありませんか？』妻は夜、二人きりになるとよくこんな事をたづねた。
『何でもない。』かれは腹立しかつた。かれは妻にすら自分の心を打ち明けたくなかつた。夜具を引つ冠つたまゝかれは瞼の上がほてつて來るのを、ぢつと耐へてゐることもあつた。自分自身の愚を笑ふべきか、泣くべきか、かれを僞つた筒井田を憎むべきか。かれは自分でも何うしていゝかわからなかつた。

たゞ日に日に恐ろしい暗い世界が迫つて來、歩、一歩、生活の深い罪の中に追ひやられて行くことだけが感じられるのであつた。

銀行の周圍の麥の畑は刈られてしまつた。太陽がぎら〳〵と切り株の上を燒きつけてゐた。筒井田に貸した金を如何にして補塡することが出來るか？これが毎日夜のかれの苦痛であつた。もし本店の主人に帳簿を調べられたとしたら、はたしてかれの數字上の不正が發見せられないでゐやう筈はないのであつた。その後の悲しい、恐ろしい結果はあまりに明かにわかつてゐた。

田には稲の葉が青々とかがやいてゐたころであつた。筒井田が或る日また突然銀行をたづねて來た。
幸吉はやつぱり意氣地もなく筒井田に魅せられてしまつた。
筒井田のおづ〳〵した眼、快濶た笑ひ、そこにはどうしても疑ふことをゆるさぬ善人らしい素直さがあつた。
『たとへ僞られてもいゝ。あの不幸な家庭に生まれた不運な男を救ふことさへできるのなら……』幸吉は、筒井田の顔を見てゐる間にこんな氣になるのであつた。そして催眠術にでもかゝつた人のやうに最後には可なりな高の金を渡してやらなければならなかつた。

幸吉はますます憂鬱な顔をするやうになつた。かれは筒井田を憎んだ。自分の意氣地なさを呪つた。

筒井田は夏の終りころになつて尙一度銀行をたづねて來た。

筒井田がたづねて、歸つて行くたんびに、幸吉は頻々手で帳簿の面に不正な文字をにじませた。

秋に入つてからであつた。かれは或る日本店の主人から近いうちに支店の決算を締めてくれるやうにといふ命令を受けた。

かれは前後數回にわたつて筒井田に渡してやつた金額の、あまりに多かつたことを今さらのやうに驚いた。

かれがこれから後數年俸給なしに働いても、到底追つ濟くことのできないほどの額であつた。

「ほんとうに俺は何といふ馬鹿なんだらう。たしかに俺は生理的の欠陷を持つてゐるにちがひない。俺の頭は物の正しい判斷を持つてゐないのだ。俺は精神的不具者であるにちがひない。正しい精神作用を持つてゐる人間が、どうしてこんなに幾度も同じ失敗をくりかへすことがあるものか。俺はたしかに精神病者にちがひない……」筒井田を憎む心よりは、ともすれば幸吉自身の精神的不具を恐れる念が一層はげしく、苦しく、幸吉の心のうちで働くのであつた。

決算期の二週間ばかり前であつた。かれはある夜たうとう自分の苦しみを包み切れないで妻に打ち明けてしまつた。

姙娠中の妻の體にどのやうに恐ろしい結果をもたらすか知れないと案じてゐたが。

妻は唇の色を失ふまでに驚いた。妻はしばらく言葉を出すこともできなかつた。

秋の夜は靜かであつた。

二人は毎夜おそくまでひそひそと語り合つた。妻の手にも、幸吉の手にも、とてもそれほどの大金の工面はつかなかつた。父や母に話したところで、連年損失だらけの中からそれだけの纒つた金を作り上げるといふことは思ひも寄らな

いことであつた。

家の外では柿の實がぽとりと地を打つ音が、秋の夜らしく響くこともあつた。死といふやうな恐ろしい幻影がかれ等の心を支配してしまうこともあつた。

『でも、かうなつては筒井田さんを憎んだつて仕方はありません。筒井田さんを憎んではいけませんよ。村の人たちが噂するほど惡い人でもありますまい。』妻はこんなことを、よく、幸吉に語つた。幸吉はその場合だけはげまされた。

針を運んでゐるかの女の手の上にぽろ〳〵と涙を落すこともあつた。

『このごろはほんたうによく泣きます。こんなに泣いてゐたらどんな悲しい子が生まれるでせう』妻は縫ひかけてゐた着物の中に顔を突つ伏せてしまつた。

×

銀行の窓からは柿の葉をかざして高い明るい秋の山が見えてゐた。

隣り村から隣り村へとかれは心あたりの人々をたづねては金の工面に出かけて歩いた。そしていつも失神したやうな蒼い顔をして銀行に歸つて來た。

『でも筒井田さんを憎んではなりません……』口癖のやうに言ふ妻の言葉が幸吉の耳に刻みつけられてゐるのであつた。

『この精神的不具者を見よ。白痴を見よ。かれはかれ自身の愚のために、自分を苦しめてゐる。妻を苦しめてゐる。うんと笑つてやれ……』幸吉は自分の面に唾でもひつかけてやりたかつた。

かれは何をするともなくデスクの前の椅子に腰を卸した。そして見るともなく遠い山を眺めたりした。

或る一人の男がはいつて來た。

デスクの上に紙幣と銀貨とが高く積まれた。

幸吉は殆んど機械的にペンを走らせた。

その男はやがて銀行を出て行つてしまつた。その男の影が見えなくなると殆んど同じ刹那に、他の黑い大きな影が銀行の戸口を塞いでしまつた。

幸吉は顏を上げ切らない間に、それが何を意味する影であるかを直覺することができた。かれの臆病な魂は顫へ上つた。

『ほんとうに御無沙汰をしました。厄介ばかりかけてすみません。北海道に歸つてゐたものですから。今朝こつちに着いたばかりです。いつもお達者でヘツヘツヘツ……』筒井田は强ひて快濶さうに笑ひながらデスクの方へ近づいて來た。筒井田の視線は直ぐにデスクの上の紙幣と金貨に注がれてゐた。

幸吉は決して笑はなかつた。幸吉は脣を動かすこともできなかつた。興奮の絶頂にあつた。幸吉は筒井田の視線と、デスクの上の金とに全身の注意力をそゝいでゐた。

『どうかしたんですか。顏色が惡いですよ。變ですねえ、眼の色までがヘツヘツヘツ……』筒井田の聲はいかにも冷笑を含んでゐるやうに響いた。

『どうもしみません……いつたい……金はいつ、返してくれます。』幸吉はやつとこれだけを途切れ途切れに言ふことができた。

『もすこし待つてくれたまへ、乾度拂ふからさ』筒井田の言葉はひどくぞんざいになつて來た。

『早く……返してもらはんと……困りますが……』

『たつたあればかりの金を、ごまかすやうな僕ぢやないから、安心したまへヘツヘツヘツ……』

『あればかしですかツ？』

『さうぢやないか……』筒井田は人を馬鹿にしたやうな顔つきをした。しかし次の刹那には最も眞劍な、そして中學時代のタイラントの恐ろしい暴力を誇示するやうな眼でデスクの上を睨んだ。同時に猛獸のやうに飛びかゝつて行つてデスクの上の金を掴まうとした。

幸吉は筒井田の胸に向つて躍りかゝつて行つた。かれは兩方の拳で力まかせに筒井田の胸を突いた。

筒井田は不意を喰つてよろめいた。それでもなほ體勢を取り直して、腕を伸ばして金を掴まうとした。銀貨が板の上にはげしい音を立てゝ散つた。

『ぬすとうツ！、畜生ツ！』幸吉はデスクの上にあつた鉛の文鎭を掴んで、筒井田の肩をいやといふほどどやしつけた。筒井田がひるんでゐる間に、かれはなほ筒井田の胸を突いた。

その時近所にゐた人々が銀行の戸口に集まつて來るけはひを知つたのか、筒井田は幸吉を罵りながら飛び出してしまつた。

『筒井田の息子でしたかツ！』

『あの極道者がなあ……』

『駐在所に知らせてやればよい。』

『自轉車で追つかけりやあ間に合ふが。』

『畜生がなあ！』

『幸さんの口から血が出てるが……』

集まつて來た人々は口々に筒井田を罵つた。

幸吉は心配して集まつて來てくれた人たちに對してたゞ『へえ、へえ…』と言つて答へるだけで、この場合どんなことをすればいゝのか、たゞ部屋の中をうろうろ歩き廻つてゐるだけであつた。

人々は板の間に撒き散らされた銀貨だの、紙幣だのを拾つてはデスクの上に集めてくれた。そして筒井田親子のことを罵りながら歸つて行つた。

人々が歸つてしまつてからも、かれはデスクの上に金を積んだまゝぼんやり椅子に腰を卸して往來の方を眺めてゐた。

かれは紙で唇を拭いた。血が紙に赤くにじみ附いた。

五分、十分、かれは啞のやうになつてデスクの上を見つめてゐた。

『何のために俺はあの男を突き飛ばさなければならなかつたか。何のために俺はあの男を擲り付けなければならなかつたのか。』

かれの興奮した心がだんだんしづまつて行くにつれて、かれは醜い人間そのものゝ心を恥ぢないではをられなかつた。

かれは今までになく深い心の空虛を見出した。

ここには筒井田に對する憎みもなく、憤りもなかつた。

たゞ人間と人間とが、少かの金といふもの丶ために、肉を貪り喰らうほどに、命を捨てゝかゝるほどに掴み合はなければならぬことを思ふと、かれが今までなほ少かに抱いてゐた人間の心の光りに對する希望すらもうすつかりくつがへされてしまうのであつた。

『あんまり殘念だ……人間をこんな醜い物に作つた自然そのもの丶意志が……』

幸吉はデスクに額を突つ伏せたまゝ泣いた。

×

荒寥たる桑の畑が幾十里となくつゞいてゐた。遠い山には雪が降つていた。

幸吉はなすこともなしに毎日冬ざれの桑畑の間を歩いてゐた。

筒井田に騙られた銀行の金を調へるために、夜も晝も苦しみ藻掻いた折の疲勞が肉體的にも精神的にもかれを夢遊病者のやうにしてしまつた。

何の能力もないかれのために可なり莫大な金を貸して、すつかり銀行の方の整理をつけてくれた恩人に對しても、幸吉を一日も早く自分の生活上の新しい道を切り拓いてゆかなければならぬと思ふのであつた。

けれどもかれの日夜の苦しみが突發的であり、激しかつたゞけに、かれはそのための疲勞からなかなか癒されさうもなかつた。

かれはあまりに心配したゝめに一夜で白髪になつた人があるといふやうな傳説を思ひ出すこともあつた。まつたくかれ自身の心の核までが、過去の數ケ月の患ましさのために、傷められ、ぐだぐだに碎かれてゐた。

苦しい長い道中のともかく一階段だけでも片が付いたと思つたゞけで、ともすればかれの心はへなへなと押し潰され

さうになつて來るのであつた。
これから先きの道、それは二十年つゞくのか、三十年つゞくのか……その苦しい長い將來の道を望みながらも、かれは先づ今まで歩いて來た數ケ月間の生活の道の疲れのために、どうしても足を前の方へすゝめて行くことができなくなつてゐたのであつた。
『どうかしなければならぬ。愚圖々々してゐた日には元金どころか、金の利子さへ拂ふことはできぬ。どうしても俺はうんと働かなければならぬ。』かれは桑畑の間の徑を歩きながら、自分を強くするやうに、自分の心に命ずるのであつた。
小學校の代用敎員、水力電氣の事務員……かれに出來さうな仕事といふ仕事はあたつても見たが、雇入れてくれる所もなければ、たまに口があつても、それは今までの銀行よりもずつと割が惡かつたりした。
『利子を拂ふだけの月給でもよいから勤めて見たら……』妻はよくこんなことを言つた。安吉もうなづいては見せた。しかしそれだけの少かな給料さへ滿足にくれさうな所はなかつた。
しかし實際のところ、適當な仕事がないといふことは、今のかれにとつては大した問題にはなつてゐなかつた。時としてはそれは、かれにとつては却つて自分の陰鬱な心、自棄的な生活を自分自心の良心に是認させる理由にもなつてゆくのであつた。たとへ適當な仕事があつたとしても、今のかれはとても規則正しい生活を送つてゆく氣にはなれなかつた。かれの心はあまりに傷けられてゐた。
『もすこし、俺をさうつと放つて置いてくれ。俺には考へて見なければならぬ根本的な問題がある。』
妻や父たちがかれの仕事のことについて、心配すればするほどかれは、かれ等から離れて靜かに自分自身といふもの

を見つめてゐたかつた。人生といふことについてもつと〱考へて見なければならないと思つた。

現在のかれ一家の悲境、かれの妻、かれ自身の悲哀の原因はどこから生まれたのであるか。

『俺の意志が弱かつたからだ。俺がアブノーマルであつたゝめだ。俺はたしかに精神的不具者であるにちがひない。俺はこれほど筒井田に苦しめられてゐて、筒井田の肉に食らひつくほど筒井田を憎むことができない。もし俺が尚一度銀行に勤めたとしたら――そしてもし筒井田が同じ態度で金を借りに來たとしたら――俺はやつぱり筒井田に誑されるにちがひない。俺は誑られないと斷言することはできない。俺はどうしたといふのだらう。俺は白痴だ！　白痴だ！』かれはいつもこのやうな結論に達するのであつた。

かれは自分の額や後頭部を指でこつこつと叩いて見た。神經が痲痺したやうに感じが鈍く重かつた。

かれは枯れ草の上にしやがんでなほこつこつと顳顬のあたりを叩いて見た。

『たしかに俺の頭は痺れてゐる！』

東京での、たつた一人の友人であつた川面が故郷に歸つて自殺をしたといふ手紙を川面の兄からこのころ受けとつた幸吉は一層人生に對して憂欝な心を抱くやうになつた。そしてよく〱と思ひに顳顬のあたりにピストルの口を當てゝ腐れかゝつた自分の頭を射貫いて見たらばと考へることもあつた。

森の陰の草村の中でピストルを胸に當てたまゝ眠つてゐたといふ川面の姿が、英雄的な聯想に彩られてかれの頭に描かるゝのであつた。

川面の姿が、かつて讀んだツルゲネーフの或る作品の悲劇的主人公になつて來たりするのであつた。それは志ならずして郷土の墓に葬られてしまつた若い革命家であつた。

幸吉はその若い革命家の葬に母親が詣りに行くシインを今でもはつきり記憶してゐた。かつて川面と二人でツルゲネーフを一緒に讀んだ折の感激に充ちた友達の眼がかれの頭に刻みつけられてゐるのであつた。

川面は何故に自殺したか？　その心持ちは幸吉にもわかるやうであつた。人生といふものはあまりに感激のないダルな場所であつた。笑ふこと、よろこぶことすら空虚なことであつた。一年生きることも、三十年生きることも結句同じことであつた。自分自身生きてゐること、惱んでゐること、考へてゐることすら何の變哲もないことであつた。恰度冬枯れの桑の平野のやうに、行つても行つても何の感激も見出すことのできない場所であつた。どこまで歩いて行つても同じ落莫たる桑の畑であつた。

『川面は單調な道を歩くことに倦いてしまつたのだ』

幸吉は日暮れ方の桑畑に立つてつくねんと涯もない平原をながめてゐた。地も空も疲れてゐた。かれ自身の魂と同じやうに。

×

しかし幸吉はまだ川面にはなれなかつた。かれは兩親を持つてゐた。若い妻を持つてゐた。生まるゝばかりの孩兒を持つてゐた。

『自分さへ死んでしまへば、生き殘つてゐるかれ等と自分との間に何の關係があらう？　すべては滅びるのだ』かうも考へることもあつたが、しかしこの考へ方は理論がまだ勝ちすぎてゐるやうに思はれた。かれは何うしても川面と同じ道をたどることはできなかつた。

代用教員も駄目、水力電氣も駄目…………立て替へて貰つた利子だけでも毎月拂つてゆかなければならぬ。かれはい

つきでも夢遊病者のやうな氣ではをれなくなつた。一日遅るれば一日遅るゝほどかれの首に卷き附けられた綱はかれの咽喉を強く締めつけるのであつた。

かれが突然東京行きの汽車に乘つて故郷を立つたのは、桑畑の中にも雪が白く積つたころであつた。

褪茶けたインバネス、垢じみた毛糸の襟卷につゝまれた幸吉が東京驛に下りたのは朝の六時であつた。まだ消え殘りの電燈が大きな建物の中からも、屋根からも寒さうにまたゝいてゐた、

誰れも彼れもが、かれ等を待つてゐる明るい團欒や、幸福を持つために敷石の上を走るやうに開札口の方へ歩いて行つた。靴の音も下駄の音もみな幸福の響きのやうに聞えた。

この世界でかれたゞ一人だけが取りのこされた人間のやうに思はれた。かれはみんなの人たちと同じく急ぎ足で歩いて見た。かれ自身幸福な世界へ走つて行く人のやうに。

けれども無駄であつた。かれは自分の心を無理にも僞らうとしてゐる自分の企てを、冷笑しないではをれなかつた。

『いつたい俺はどこにゆけばいゝのだ。何のために東京に來たのだ？』

不圖硝子窓に映つたかれの眼は（愚なるがために不運に陥つた人間）そのものを語つてゐた。

そこに歩いてゐるすべての人々が賢かつた。すべての人々が敏捷の臆病な心を脅迫するものであつた。

かれは三等の待合室の方へ歩いて行つた。そこには少かではあつたがストーヴには石炭が燃えてゐた。かれはちよつとはいりかねたが、顔のほてるやうな思ひをして部屋の中へはいつて行つた。しかしそこにはかれが豫期したよりは居心地のよい空氣が漂ふてゐた。そこに集まつてゐる人々は、都會の人たちのすばしこさも幸福も持たなかつた たいていはかれと同じやうな日焼けのした顔色の惡い、どんよりとした眼を持つた土臭い人たちであつた。今朝暗いうちに驛に着

いて、なほ睡眠をむさぼるためにストーヴの前の長い椅子に横はつてゐる男や、敷石の上に新聞紙をひろげてそこにしやがんでゐる黄色い顏の女もあつた。幸吉は周圍の人たちを見てゐる間に寛いだ呼吸をすることができるやうになつた。

七時が打ち、八時が打つた。日の光りが硝子窓を通して、疲れた人々の背や肩を柔かに照らしはじめた。

幸吉は袋に入れたパンを買つて來て、俯向きがちに食つてから、驛の前の廣場に出た。大きな建物の蔭にはまだ雪が消えのこつてゐた。

『ともかく正覺院に行つて見よう？』驛前の停留所にしばらく立ち停つて牛込の見當の空を見た自殺した川面と學生時代に宿を借りてゐた正覺院の藤卷といふ若い坊さんのことが國を立つ時からかれの頭に刻まれてゐたのであつた。

正覺院に行くとして、壹日中ひよつこりみすぼらしい風をして訪ねるといふことは氣おくれがしてならなかつたのでしばらく時間を費すために日比谷公園の方へ歩いて行つた。比較的あたゝかな日であつたので、かれはほとんど終日たゞ一つのベンチに凭りかゝつたまゝほとんど身じろぎもしないで水の面や、折々の空の色などをながめてゐた。秋の曇り日のやうな寂しい眼で。たまにかれが腰をかけてゐるベンチの前を田舍から出て來たばかりの人が通りかゝると、かれはその人たちを懷しいと思ふこともあつた。

日暮れ方、かれは正覺院をたづねて行つた。藤卷さんは心からよろこんで迎へてくれた。そしてかれが『今度はどうしても東京で仕事を求めたいのです。四年や五年は國にも歸らないで稼いで見る決心で出て來ました……』と途切れ途切れに話した時、快く就職の周旋のことなどを承諾してくれた。

かれはその夜遲くまで藤卷さんと語つた。藤卷さんは勞農政府のことだの、婦人問題のことだの、殊に近ころ興味を持つて藤卷さん自身にやつてゐる活動寫眞の撮影のことなどについて雄辯に語つた。『これからの宗教傳導は說教では駄

目ですよ。フイルムでやる方が一番エフェクティヴです。僕自身役者にもなつてフイルムの中に活動してゐますよハッハッハッ……』と言つて机の中から色々な寫眞を取り出して見せた。藤卷さんが美しい女優たちにとりまかれて映つてゐる寫眞もあつた。

そんなことを話してゐる藤卷さんの顔はほんとうに生き生きしてゐた。美しかつた。

幸吉は藤卷さんの明るい顔を見てゐると、殊に强く自分の顔の暗さ、陰鬱さを思ひ出すのであつた。幾年も違はないうちに、藤卷さんとかれとは、一層遠いへだゝりを持つた二つの明、暗の世界に住んでゐるのであつた。

『父が死んでからは、僕一人でこの寺を持つてゐるのですが、僕がこんな風なものですから壇家あたりでは時々厭なことを言ふ人もあるんですよ。でもかまひません。もし何だつたら寺も何も捨てゝしまつて活動役者にでもなりますからアッハッハッ………』藤卷さんは快濶さうに哄笑して欄間の方を見た。そこには美しい西洋婦人の裸體畫が懸つてゐた。

三日目の朝であつた。かれは藤卷さんに伴はれて電車に乘つた。藤卷さんは背廣を着てゐた。二人は或る黑い堀割の水に沿ふた古い大きな建物の中にはいつて行つた。

藤卷さんだけ二階に上つて行つてしばらくすると、藤卷さんが階段の上からかれをさしまねいだ。かれは藤卷さんについて暗い廊下を大分長いこと歩かなければならなかつた。忙しげに人々は歩いてゐた。あつちらでも、こちらでも人々はペンを走らせたり算盤をはぢいたりしてゐた。

『このやうな大きな建物の中に、そしてあの多勢の人たちと一緒に俺は四年も五年も生きて行かなければならぬのか知ら？』誰れも彼れも、かれとはまるでちがつた世界に住んでゐる人たちのやうに思はれた。暗い脅迫を感じないではを

れなかつた。藤谷さんを置き去りにして逃げ出さうかと考へたこともあつた。

『君は英語はお出來になるんでせうね？』

不圖かれは或る色の白い、品の宜い人の前に立つてゐる自分自身を見出した。かれは胸がどき〱した。

『あまり出來ません。』

對手の人は微笑みながらかれを見てゐた。

『字はうまいですか。』

『あまりうまくございません。』

『珠算は？』

『珠算は殆んどやつたことはありません。』

對手の人はやさしい微笑を洩らしてゐた。

『たくさんは上げられませんが、日給一圓くらゐと思つてゐてください。それでお宜しければそのうちに履歴書を出しといてください………』

一圓といふ言葉を聽いた時にかれは自分のやうな無能者にとつては勿體ないことだと思つた。町吉はぴよこんと頭を下げた。

『どうです。いゝ人でせう。あんな立派な人に使はるればあなたも仕合せですよ。』

『えゝ、まつたくです………』淡吉は黒い水に沿ふて歩いてゐた。

『ですから明日にも履歴書をお書きになつたらいゝでせう。』

『えゝ、ありがたうございました。いろ〱御心配ばかり……』幸吉はまつたくありがたいと思つた。世間には藤巻さんだの、今日逢つた人だのまだ親切な人がたくさん住んでゐるのだと考へると涙ぐましい氣にもなるのであつた。

しかし五六丁も歩いてゐる間に、かれは不圖何かにけつまづいたやうな不安さを見出した『日給一圓として、月に三十圓。はたしてそれで利子さへ滿足に拂へるか知ら？下宿料も出さねばならぬし……』

翌日も翌日もかれは履歴書を書かうとはしなかつた。藤巻さんや、あの親切に話してくれた人たちに對してはすまないと思ひながらも、何だか氣がすゝまなかつた。それかと言つて別に、東京にさへ出れば容易に一時に大金が摑まれるといふやうな空想を抱いて來たのでもなかつたが、かれは履歴書を書く氣にはなれなかつた。『月に三十圓。それだけでもお前のやうな無能な人間にはありがた過ぎることではないか。』と自分を叱りながらも、決心することはできなかつた。

『それなら、いつたい、俺はどうすればいゝのだ？』自分の心にたづねて見てもわからなかつた。

朝から雪まじりの雨が降つてゐた。

藤巻さんは朝ちよつと形式的に本堂の方でお經を讀んだばかりで、今日は天鵞絨のヅボンなどを穿いて出かけて行つた。

時々お詣りに來る人たちの下駄の音が雪に濡れた敷石の上にがちりと寂しい音を立てた。

幸吉は自分にあてがはれてゐる庫裏の隅の六疊の部屋にきよとんとして、机に凭りかゝつたまゝ考へ込んでゐた。妻のこと、まだ生まれない子供のこと、桑畑の中の小ひさな銀行のこと……。

『何で俺はこんな苦しい思ひをしなければならぬのか？　何で妻をも父をも不運な目に合はせなければならぬのか？果して俺は世間に出て人並に幸福に生きてゆくことができるか？………お前は精神的不具者なんだ。お前は白痴なのだ。お前は幾度後悔しても筒井田のやうな人間が來るたんびに、生きてゐる間は同じ失策をくりかへさなければならぬのだ。お前の父もさうであつた。お前もさうだ。お前たちのなかには永久にそのやうな精神的缺陷が流れてゐるのだ』

幸吉はぢいつと自分の心の底を見つめてゐた。

おぼろげにかれの記憶にのこつてゐる祖父の姿がかれの眼に映つて來た。いつも離れの縁側に出ては病みほうけた顔をして、外をながめてゐた老人の姿が………。死ぬ二三年前からほとんど妻や子の顔すら忘れるやうになつてしまつた人であつた。

やつぱり雨の降る日であつたが、幸吉の母が泣き叫びながらはだしで家の中へ駈け込んで來た。間もなく人々は雨にすつかり濡た祖父の死骸を裏の柿の木の下から、家の中へ運んで來た。『おぢいさんは人が善過ぎて、人の保證をして家も屋敷もとられてしまうたんで氣が狂うた』といふやうなことを幸吉は子供心に聽いたことがあつた。

幸吉は現在かれの父が、また祖父にも劣らぬほどの氣の弱い男であることを考へた。父はすでにそのためこの數年來他人のために桑畑を奪はれ、山を賣られてしまつたのであつた。

『たしかにそこには精神的不具者の血が流れてゐるのだ。祖父も、父も、俺も………。』かれは心臓を突かれたやうなショツキングを感じた。『そしてこれから生まれて來る俺の子も！』

かれは呪はしい、暗い恐怖に顫へた。

『俺たちの血をうけた者は生まれない方が仕合せなんだ！』

『他の子ツ…………』

かれは泣き出したくなつた。一生を不運のうちに、憂鬱な顔をして、喘ぎ喘ぎ生きてゆかなければならぬ無能者のみじめな姿が映つて來るのであつた。

かれはまだ生まれない自分の子供のために祈らずにはをれなくなつた。

『生まれない方がいゝんだ！』

×

『日給一圓ではいやなんですか…………ぢやあ、せつかくあゝ言つてくださるんですから、履歴書を出しなすつたらいゝでせう。この節どこに行つたつて、さういゝ給料ばかり出すところはありませんよ。そのうちには昇給もしますし、ボオナスもありますからさ…………』藤卷さんの顔は少年のやうに美しかつた。眼は幸福そのものゝやうにかゞやいてゐた。

東京にきてから十二三日も經てからであつた。幸吉は藤卷さんの熱心にうながされてたうとう履歴書を書くことにした。そして今度は自分ひとりで、朝九時ころから家を出て、黑い堀割の水に沿ふた古い大きな建物の中へはいつて行つた。

歸りには日比谷にまはつて、そこのベンチに三時間ばかりも腰を卸したまゝ、きよとんとして空を眺めたり、土を眺めたりしてゐた。もう物を考へたりする力さへも持つてゐないやうな疲れ切つた眼をしばたゝきながら。

電車にも乘らないで歩き歩き正覺院に歸りついたころは、もう街には電燈がまたゝきはじめてゐた。

本堂の方では何かの集りがあるので、多勢の人が蠟燭を點したり、香を焚いてゐたりした。藤卷さんが綠がゝつた法衣を着て珠數を持つたまゝ廊下を走つて、庫裏の方へやつて來るのに出會つた。華奢で、細面で、色の白い、睫の長い藤卷さんはきちんとした法衣を着くれば一層美しく見えた、

『あなたの歸つてくるのを待つてました。電報が來てゐますよ。』藤卷さんは部屋の中に走つて行つて、電報を持つて來

た。

幸吉の手はちよつと顫へた。

『お國からですか？』

『えゝ……………さうです……』

藤卷さんは心配さうに電報を覗くやうにした。

『何でもないのです……………子供が生れたのです……………』かれの顔には少年のやうな羞恥が泛かんだ

『えゝお子さんが、それはお目出度い。坊つちやんですか、お孃さんですか？』

『男です……………』

『それはます〳〵お目出度いハツハツハツハツ……』藤卷さんは面倒くささうに法衣の袖を手繰るやうにして、幸吉の手から電報を受けとつて讀んだ。

『ボシブジかツ？松前さんおごつてもらひますよアツハツハツ……』

藤卷さんはそゝくさと再び本堂の方へ走つて行つた。

間もなく本堂の方から藤卷さんがお經を讀んでゐる美しい聲が聞えて來た。

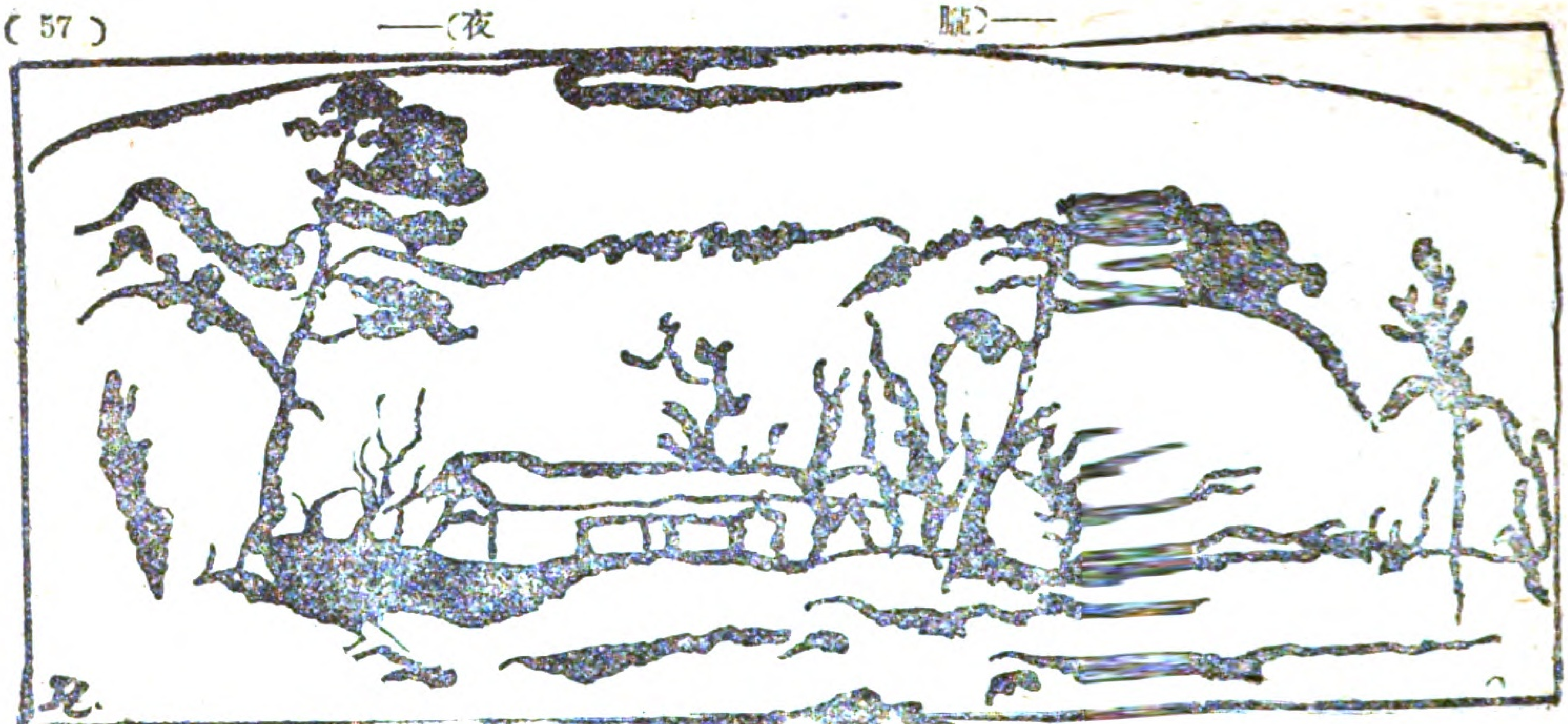
幸吉は部屋に坐つてからもなほ電報をひろげて見た。

かれの憂鬱な顔にも、秋の曇り日のやうな眼にも、言ひあらはしがたい歡喜と明るさとが閃いた。この數年來、かれの蒼白い顔から失はれてゐた光りがとりもどされたのであつた。

かれはその夜藤卷さんが止めるのも諾かないで東京を立つことにした。

停車場の傍のガアドの下の玩具店で、小ひさなセルロイドの人形を二つ買つて、皺だらけの稍茶けたインバネスのかくしに入れて、暗いぬかるみの路を乘車口の方へ急いで行つた。

――一九二三――



朧夜

犬養健

暮れかゝつて來ると、官立寄宿學校のひと棟になつてゐる少年寮では教師も生徒も――大人も子供も、芝生の廣い中庭にだん／＼降りて來て、空を眺めはじめた。彼等は當時評判のH彗星の現はれるのを觀察しようと云ふのである。五十を越した篤學者で、强度の近眼鏡をかけた、瘠せて半白の支那風の髯を生やした寮長は、懷中から厚ぼつたい銀側時計を出して時間を見計つたりしてゐた。が、さういふ間にも、生徒が不精してスリツパの儘庭に降りて來ようとすると「あ、靴をはいて。靴をはいて。」と一々丹念に注意してゐた。實際、黃ろく枯れた芝生には、霜解の土がジユク／＼とふくらんでゐたのである。

理科の講師で、綺麗に髮を分けた飯島といふ理學士は、庭の程よい處に望遠鏡を据ゑつけてゐた。太つて快濶な法學士の野田副寮長と、穩和で口數の少ない――何となく病後らしい文學士の森島和作とは、お附合でやはり庭に降りて來て、小さい生徒達のなかに混つた。

いかにも爽々した、一刻千金といふ言葉がふつと頭に浮ばずにはおかぬやうな夕暮である。威勢よく窓を開け放して什事してゐる遠くの賄部屋では、夕食の用意の皿の音を、ガチヤ／＼と起ててゐる。昇降口を透した建物の裏からは、滿開を過ぎた梅の花の蒸すやうな匂が漂つてゐた。それはあの四君子に喩へられてゐるやうな清楚なものではなく、何處か梅自身醉々と病んでゐるかのやうな、重たく濃い匂だつた。

この夕方の凡そ五時頃近くからは、有名なH彗星が地球からの視界に入る筈だつた。それは地球との數十年目の邂逅だつた。春に向ふ都會一帶の陽氣な動搖のほかに、この彗星の出現が新聞に書きたてられて以來といふものは、何かしら人心に好奇心と、一種の氣味惡さと云つたやうなものを、いろ／＼の憶測入りで與へてゐた。かういふ評判の彗星を今この寄宿舍の中庭でも、――教師も生徒も大勢たかつて、觀察しようと云ふのだつた。……五分、十分。しかし彗星はまだ現はれない。

森島和作と野田とはすぐに飽きて、建物の窓の下に据ゑてあるベンチに腰を下しながら、双方不精な口のきゝ方で雜談を始めた。それは他からはつまらなさうに見えるが、しかし長い間の友達にしか交はされることない種類の、親しい感情のかよつた會話だつた。何故ならば二人は互ひに古い幼な友達なのである。そして、この官立寄宿學校は――この小學部から六年制の中學部、それから高等學部と、前後十五年の間の同級生を持つ事の出來る特殊な組織の學校は――彼等のどちらにとつても小學一年以來の母校だつたのである。

野田は前々年に法學士になるとすぐ、この學校から話があつた。元々の樂天家だつたから、彼は普通の授業のほかに少年寮の副寮長などゝいふ、大抵の人は先づ厄介がる役目まで二つ返事で承諾したのであつた。彼は昔の學生服のかはりにフロツコートを着け、暫ぶりでまた立木の少し延び、建物の板目の少し色褪せた寄宿舍に、快濶に歸つて來た。

森島和作の方は稍々異なつた經路をとつて、此處で野田と落ち合つたのである。彼は平穏無事に中學部を終へると、突然高等學校の競爭試驗を只事でない熱心で始めて、京都の三高に入つてしまつた。これは同級生の誰にとつても意外な事だつた。その上和作は元の友達とはパッタリ便をしなくなつた。只彼が、同じ市の大學で哲學講座を持つてゐる××博士を心から敬慕して、三高を出るとその儘京都大學の文學部に移つた事だけが、野田の口から傳はつた。

處が最近野田は人づてに、和作が毎冬の京都獨特の底冷えで、だん〳〵身體をこはしたあげく、近頃は流行感冒のあとをこぢらせて、醫者から他の土地に移るやうに勸告されたといふ話を耳にしたのである。――まめな彼は早速和作との間に二三度音信を往復すると、もう和作が東京で靜養しながら生活費を得るやうな方法を工夫しはじめてゐた。そのあげくが和作はやはり此の學校で獨逸語の授業のほかに、少年寮の圖書係といふ呑氣な役目を世話して貰ふ事になつた。この少年圖書館の係の役は、手當の關係から野田が獨りぎめで添へて置いたものだつた。果して和作は野田のその氣遣ひを、手紙で心から喜んで來た。

…京都の學校に職を求める事、郷國の母をやがて呼ぶ事、そして猶何年間か××先生の傍で一心に勉强する事――さういふすべての初々しい空想や計畫をすつかり擲つて、和作はこの正月東京に戻つて來た。彼はついひと月前から職に就いた。昔馴染の周圍のなかで、彼は病後の疲れに似た、何かの安らかな休息を感じたのである。

後ろの遊戲室にパッと電燈が點き、その明るい影が芝生に落ちた。窓をガラリと開ける音がして一人の生徒が首を出した。

「先生!」とその少年は活潑に野田に話しかけた。「まだ星は出ませんか。」

隔ての窓硝子が除けられると同時に、部屋のなかゝらはピンポンの勝負をしてゐる輕い音が聞えて來た。
「まだ出ないよ。」野田はそつちを見ずに、不精な答へ方をした。
「ぢやあ、もう一番！」勝負事で愉快に昂奮してゐるらしい聲を部屋の内側に向けると、その生徒は首を引込めた。
「先生！」もう一人の、稍々神經質らしい生徒が野田を見つけて、同じ窓から呼びかけた。「先生。ピンポンの五人拔にお入りになりませんか。僕あ今三人拔いて、とう〳〵ずるされたもんで負けちやつたんです。」
「誰だい。」野田は太つた身體を後ろにねぢつて見た。「何だ、徳兵衛か。徳兵衛が相手なら左手で澤山だね。」から云つて彼は鷹揚にワツハヽ、ハと笑つた。が、森島和作は「徳兵衛」といふ名前を聞くと後ろを鋭く振返り、少年の顏を凝つと見入つた。
「チエツ。先生、徳兵衛だなんて本當に困りますよ。」眉を寄せながら、多少甘えるやうな高調子で云ふのだつた。「先生がそんな仇名をつけたんで、皆が揶揄つて仕様がないんです。」
　しかし部屋のなかのピンポンの連中は、それを聞きつけると一齊に、「徳兵衛。徳兵衛。」と囃し立てるのだつた。
「チエツ。チエツ。」
「知つてるだらう？　濱尾君の子供だよ。つまり徳次郎の甥さ。」と野田が和作を見返つた。「君がよく遊びに行つてゐた頃、水兵服か何か着て時々部屋の入口までやつて來た。あの男の子だよ。」
「さうだつてねえ。……この間はじめて教はつて、驚いたよ。」
　和作はベンチの脊にあてた片腕に首を載せ、前のまゝの動かぬ眸で少年を見据ゑてゐた。動搖した表狀が我知らず彼

に現はれた。

「君は」と和作が少時おいて突然その少年に話かけた。「鶴子叔母さんに實にそつくりだね。」

だがさう云つてしまふと、彼は固くなつて、さつと顏を赧らめた。少年の方でも自分の容貌の事を眞顏で云はれたので、同じ樣に羞かしい顏をした。

「さうか知ら。今日は特別にいゝ血色をしてゐるからさう思ふんだらう？ 今日は加納にや大出來な日なんだよ。いや惡口ぢやないさ。」と野田は子供を扱ふ事にはもう馴れた調子で喋るのだつた。「君はいつもその位運動するといゝんだよ。あんまり圖書室にばかり入り込んでゐるつて、此間寮長に叱られたらう？ ちやんと知つてるぞ。」

「叱られるもんですか。」野田の人の惡い微笑に受身になつて、加納といふその少年はむきで反抗した。「もつと運動を澤山し給へとは云はれましたけれども、本を讀んぢやいけないなんて、云はれませんでしたよ。」

「うまい事を云ふやつだな。」野田は又大聲で笑つた。

「だつて本當なんですからね……え？」加納は部屋のなかを振り向いて、何か友達に聞き返すのだつた。「ぢやあ、先生、さよなら！ 僕の番なんです。星が出たら忘れずに知らせて下さーい。」かう云つて、相變らずピンポンの輕い音の續いてゐる窓陰に、急いで引込んで行つてしまつた。

「あれあ燥ぎ出すと、なか／＼利巧で面白いやつなんだが、普段はどうも陰氣で困るよ。」野田は顏でその方を指しながら云つた。「しかし頭はいゝぜ。鋭感過ぎるくらゐだ。加納家には大出來さ。」

「うん。」和作はベンチの脊の方にねぢつてゐた身體をもとに戻しながら、ぐつたり足を前に投げ出した。彼は目を瞑むでゐた。……その少年の叔母の鶴子の事が頭に來てゐたのである。

「徳兵衛か。古い仇名だなあ！」

暫くして和作は、彗星のやがて出るといふ、夢のやうな明るみのまだ殘つてゐる前方の空を凝視めながら、大きな聲をたてた。

「うーん。三代目の仇名だもの。」

野田も腰の位置をなほしながら、應揚な微笑を相變らず見せて答へた。

──今から十何年前の事である。彼等のずつと上の級に、今は男爵の當主になつてゐる加納信徳といふ生徒がゐた。友達と一緒にその頃の歌舞伎座に「一寸徳兵衛」の狂言を立見に行つたのが元で、徳兵衛といふ仇名をつけられた──これがそも〳〵の起源である。その信徳は夙うに卒業してしまつたが、齢の大分違ふ弟の徳次郎が野田や和作と同級で、中學部に移つて寄宿生になつたのである。（小學部だけは寄宿をさせなかつた。）が、卒業生の口から傳はつたのだらう。この徳次郎もその儘徳兵衛の仇名を受け繼いだ。又時代が變つた。そして今、信徳が大學に移るとぢきに結婚して出來た長男の信一が、同じ寄宿舍に入つて來て、やはり野田の口からその古びた仇名を貰つたのである。月日が遷り二人の人間が卒業して、仇名だけが寄宿舍の建物と一緒に卒業せずに殘つたわけである。だが和作はこんな仇名などといふ、久しく忘れてゐた中學時代の紀念物を耳にすると、何か色褪せた過去の匂をかぐ思ひがした。……しかし、それは彼にとつて、特別の理由があつた。

和作はその頃よく、寄宿舍から加納の家に遊びに行つたものだつた。それは一つには和作の亡い父親と、當時死んで間もなかつた徳次郎の父との關係から來てゐた。二人は同じ藩の先覺者で、後の××伯系統の政治家だつたのである。

たゞ夭折した和作の父親が不運で、長壽ではなかつたが兎も角も十何年か後れた德次郎の父は得意時代の一部を見て死んだわけだつた。――和作が加納の家にはじめて行つた頃、切下髮の品のいゝ老婦人が出て來て、「あなたが加納さん。あなたのお父さんを、妾はよ――う存じとりますよ。」から和作の顏を覗き込むやうにして云つた事がある。その時和作は、もう夙うに散じてしまつたと思つてゐた父の遺品を、思ひがけない場所でふと見せられたやうな、胸に響く懷しさに打たれたのであつた。この懷しさはいつまでも消えなかつた。和作は段々と繁く加納の家に出入りするやうになつた。

主人の急に亡い狀態の家に爭はれぬ物靜かさを持つた、庭木の多い加納の家庭は、和作のこの最初の印象をそつくりその儘保つには應はしい場所だつた。和作のいつも通る德次郎の部屋は、二階の西端れに突出た六疊だつた。――東向の出窓の前に梧桐の大きな幹があり、それをとほして下座敷の、屋根庇に半ば隱されて寂つそりした障子の腰だけが見えた。其處からは時々若夫人の用を云ひつけてゐる聲とか「はーい」と何か老夫人に答へてゐる聲とかゞ響いて、すぐと消えるのだつた。德次郎と二つ違ひの妹の鶴子は、二階の六疊からその聲を聞きとる程の、活潑な質ではないらしかつた。どうかすると袴をはいた學校歸りの姿が廊下の角にちらと見える事はあるが、すぐにそれも下座敷の寂びた狀態に吸ひ込まれてしまふのが常だつた。

しかしそれにも拘らず、和作にはこの加納の家が、やはり何處か若い生育盛りの娘を持つた家庭に獨特の、目に見えない華手な空氣を濃く濃く漂はせてゐることを次第に感じないわけにゆかなかつた。寄宿育ちの和作は、始めてさういふ艶めかしい空氣を經驗して驚いたのである。梧桐が茂り、大きな葉が陰をさし延べると、和作は前よりも大膽に枝を透かして、下座敷の物音を彩深く窺らうとするやうな眼を向けた。

……鶴子はやつと下げ髪から拵へたての、まだ何處か身につかないで可笑しな感じのする束髪に結ひ、兄の部屋に少しの躊躇もなく入つて來て、まだ知り合ひになつた日の淺い和作に、宿題の手助けを賴むのだつた。和作はそんな事をしていいのか知らといふ樣な、固くなつた表狀を德次郎に向けなければならなかつた。しかし德次郎は妹の世話には冷淡だつたし、第一彼は學課のことはあまり得意でなかつた。――これが二階の部屋でのごく普通な出來事になつてしまふと、今度は兄のゐない間などに英語の本を持つて來て、「ねえ、お願ひ。これを寄宿舍に持つて歸つていゝから、十五頁ばかり假名をつけて置いて頂戴よ。」こんな事をそつと、無關心な態度で云ふやうになつた。和作は自分を眞面に見据ゑてゐる鶴子の吃驚したやうな大きな眼を、重苦しい避けたいものに感じた。……自分のズックの鞄の上から、タツコ、カノウと女學生らしい羅馬字で署名してある英讀本の手觸りをさぐつて見ては、何か友達を賣つたやうな心持になつて、和作は德次郎を前に置いてむつつりと不機嫌になつてしまふのだつた。下座敷の寂つそりしてゐた謎か、今は多少平凡なものになつた……

こんな漠然とした關係の正體を、和作自身よりも早く簡單明瞭に察したのは、怜悧な若夫人の當子だつた。鶴子は前ほど二階に登つては來ないやうになつた。德次郎の口振だと、この頃何となくすぐれないで引籠つてゐる老夫人が、しきりと淋しがるので、末子の鶴子を傍につけてあるのだといふ事だつた。そしてそれは事實らしかつた。「妾をお仲間にして頂戴な。」こんな事を快活に云つて、美しい當子が家事の合間に德次郎の部屋を覗くやうになつた。彼女は娘時代の躾から、客の心持を反らすやうな事は、どうしても出來なかつたのである。が、和作の方では、當子が懇意にしてくれればくれるほど、何かその裏に、加納の家に行き惡くなるものを、漠と重苦しく感じないわけに行かなかつた。――外出時間に學校の門を出て、さて今日も加納の家に行かうか行くまいかと迷ふ。だがその儘惰勢でする〳〵と玄關に行き

着いてしまつた後の、自分でもどうする事も出來ない不機嫌、退屈な會話、德次郎の工合わるさうな氣弱な顏…… この苦痛よりは途中で思ひ切つて引返す方が、まだしも遙かに遙かに樂だつた。

里川がある。親しい友達同志が流れの上で手をつないで兩岸の徑を歩く。一寸した切株に出逢ふ。二人は一時のつもりで手を離す。だが川はだん／＼と廣くなつて行き、二人の手と手との間隔は大きくなり、やがていつともなく別れ別れにしてしまふ。——その頃英語の教科書で讀んだこの喩話は、和作の心に適切だつた。

德次郎は學校の教室や運動場では相變らず和作と親しくしたが、彼に前ほど繁く來なくなつた譯を訊ねるといふやうな氣配は少しも見せなかつた。二人の會話がどうかして途切れがちになり、双方で何か心に待つものを意識する。と、德次郎は他の友達に話かけるか、口實を作つて和作の傍を離れるかした。——和作の足は、物の音響がだん／＼遠のくやうに、加納の家から遠のいた。

彼の頭のなかにぐる／＼と動いてゐたものが稍々靜まりかける時期になるにつれ、和作は加納家に對して正體のはつきりと掴めない——その理由のゆゑに猶打擊多い——漠然とした屈辱を感じるやうになつた。前から多少考へないではなかつたが、中學部を卒業すると急に、彼は思ひ立つて高等學校の試驗を受ける決心をした。殘りの日數の少ない方からも、和作の試驗準備の勉强は氣狂ぢみたものだつた。入學した事と京都に移る事との通知は、德次郎には出さなかつた。

和作の氣狂ぢみた勉强は、入學して後も暫らく續いた。もと／＼彼には、不運だつた父親を持つた息子としての、自分の未知な生涯に對する因緣深い負けん氣が潜んでゐた。それが今、彼の身體のなかでヂリ／＼と焚きつけられたのである。

それから六年たつ…………………

「見えた。見えた。」と誰か叫ぶ聲がした。影繪になりはじめた人群がガヤ〳〵と動搖した。部屋のなかに殘つてゐた生徒も、中庭で戯け事をはじめてゐた生徒も一齊に集まつて來た。野田と和作も立ち上つてその仲間に入つた。

夢のやうな最後の明るみの消えた夕空に、いつか肉眼で見えるやうになつた彗星がくつきりと現はれてゐた。斜めに落ちかゝつたやうな位置で、皎々と懸つてゐる。細かい羽根のやうな冷たさを含んだ尾は、茫つと光つた弯形で、ゆるく消えてゐた。人間には一寸譬では畫かれぬ線だつた。柔和な顏付で凝つとそれを仰いでゐた和作の顏色は思はず變つた。人間性とはあまりに違ふ冷やかさを持つたものに對する、何かしら驚きと恐れとのまぢつた變り方だつた。

寮長は顎鬚を上に向け、南畫の人物風に背中を丸くして、子供のやうに一心に凝視めてゐた。強度の近眼でよく見ようとする努力のために、今年の芽を可愛く萠いてゐる三色菫の床を知らず知らず踏んでゐる。野田副寮長は帽子を阿彌陀にずらし、兩方の手の甲を胴にあてゝ愉快さうに觀察した。理學士は忙しさうにピントを合せた。

空の闇が少しづゝ深くなるにつれ、彗星は一層くつきりと目立つて來た。彗星は時々冷え冷えとまたゝいた。それはいかにも長い長い軌道の旅を過して來たものゝ、倦ます撓ますといふ無關心を保つてゐた。いかにも何萬年となく何萬回となく、一旦環り出したらいつまでも同じ早さ、同じ歩みで環つてゐるものゝ冷やかさがあつた。――その冷やかさには、人間がぢきに形態を變へなくてはならないなどゝいふ事は、「そんな事は知らないよ。」と云つたやうな、始めから生きてゐないものゝ不氣味な魅力が含まれてゐた。

「……成程」

と和作は獨りで感服した。そして彼は膚に夜寒を感じたやうに身慄した。若い彼はかういふ光景を目のあたり見ると、やはり「天上に輝く星は地球の上の被造物としての吾らの價値を零にする。されど吾らが裡の……云々」といふ古めかしい文句を、どうも思ひ出さずには居られなかつた。その文句が今、天體の謎に對する彼の畏怖に、ぴた〳〵と身に泌みて當てはまるのだつた。何百萬光年、何億光年。こんな遙々（はるばる）とした距離の長さに考を向けてゐると、彼の平常の尺度は混亂して、氣の遠くなるやうな心持を感じるのだつた。

「さあ〳〵。見たい者は來給へ。押し合つちやいけないぜ。」

望遠鏡から眼を離した、ハイカラな理學士が快活に云つた。生徒達は、忽ちドヤ〳〵とその周圍に塊つて、順々に機械を覗いて行つた。彼等は一人一人、少年の澄んでよく響く聲で「やあ」とか「おゝ、素的」とかいふ感嘆詞を發した。

「ね、よく見えるだらう。どうだい、彗星がこんな見事なものだとは思はなかつたらう?」理學士は上機嫌で、こんな事を雄辯に説明した。「あれで實に輕い。つまり稀薄なもので出來てゐるんだぜ。どんなに淡い霞にしても、それを透して向ふ側の星を見たら、多少は星の光が薄らぐものだけれども、彗星となるとそれが少しもないんだ。彗星を透して他の星がキラ〳〵と見えるんだ。覆衣（ヴェール）のやうな春霞といふが、彗星はあれで春霞よりも一枚上手に輕いわけだねえ。」

和作は思はず微笑した。この年上の理學士が、無邪氣な感じがしたからである。

「雲が出たよ。」和作はぽつと浮んで來た二つ三つの白雲を見つけて、彼に注意してやつた。

「あゝ、成程。しかし急には擴るまい。」そして又理學士は一人一人覗いてゐる生徒を眺めるのだつた。「いゝねえ、君達

の時代は。君達の時代が、かういふものを見るには一番印象が深いんだよ。せい〴〵覗いて置き給へ。僕がまだ子供で彗星を見た時には、田舍の事でまだ〴〵開けなかつたものだから、村の人間がしきりと彗星は凶事の徴だと云つて心配するのさ。僕も夜、畑に出て見ながら、どういふ凶事が降つて來るのだらうと思つて、子供なりに悲しがつたよ。あの印象は忘れられないね。」

「それあ、先生、やつぱりH彗星だつたんですか。」と一人の生徒が訊ねた。

「何？　君は新聞を讀まないね。」理學士は微笑むだ。「H彗星を二度と見覺えるといふやうな、長壽な人は先づ少ないよ。七十五年一まはりで地球の傍に來るのだからね。」

「七十五年で一まはり！」今まで默つて聽いてゐた一人が聲をたてた。それは先刻遊戯室から首を出した加納信一だつた。

「七十五年で驚いては困るね。」理學士は輕い愉快な昂奮狀態にあるらしかつた。「千八百十一年彗星といふのは加納君。三千年で一まはりだよ。その他われ〳〵が現在、一度出逢つたきりで永久にお別れだと觀測してゐる種類の彗星でも、實は拋物線を描いてはゐずに、或ひは何萬年の後にヤツト一まはりで又やつて來るかも知れないんだ。かういふ事は人間一代や十代では分らないのさ。現に十萬年で一まはりといふ彗星もある事になつてゐるのだからね。」

「……十萬年？」信一が神經質な銳い眼をあてどなく擧げた。

「いゝ加減で止せばいゝのに」さう思つて和作は上機嫌でゐる理學士の方をチラと見た。信一の神經過敏を彼は氣に懸けたのである。――昔彼自身も、書生から生半可な宇宙論を聽かされて、廣い廣いと思つてゐたこの世界を急に轫りなく感じて、それでは一體何に賴つてそれを防がうといふやうな物悲しい日を數日送つた。その事を彼はふと思ひ出して

ゐた。

「……いゝ加減にしないか。」繰返し彼はさう思つた。

「やあ、こつちに落つこちかゝつた格好をしてゐらあ。」丁度今覗いてゐる生徒がそんな事を云つた。「あれで大丈夫なのかしら。先生、あれでどつちの方角に飛んで行くんです?」

「いやに原始的な恐怖だね。」何も知らずに、理學士は相變らず興に乘つた氣分でさう笑つた。「しかし原始的なのは君ばかりぢやあないよ。二十世紀の今日でも、彗星が出るたびに西洋では學者連が、地球と衝つかる〱。危い〱つて騷いでゐるんだよ。」

「ぢやあ」その生徒は吃驚して眼を機械から離した。「新聞に出てゐた事は、あれは本當なんですか。」

「あの箒のやうな尻尾が僕達に觸はるだらうつてのかい? 先づ大丈夫だね。今度は大丈夫だね。……しかし嚴密に云へば、これは彗星に限つた事ではないが、今後永い間のうちには、さういふ衝突も全然ないとは斷言出來ないんだね。」

「何故ですか?先生!」

「もう止せ!」和作は妙な不安から、心のなかでさう强く云つた。

「何故つて、」と理學士は考へ込むやうな様子をした。「われわれの太陽系は宇宙に擴がつてゐる銀河系のほんの一部分なんだ。粟粉よりも小さい一部分なんだ。そのわれわれの太陽系は廣い宇宙を旅してゐるんだ。無論宇宙の廣さに比べては、それは蝸牛の歩みに等しいけれども、それでも少しづつ、少しづつ旅してゐる事は確かなんだ。だから何十萬、何百萬年の後には、他の星との衝突がないとも限らないんだ。だからわれわれの大切な世界は……」

「あゝ、そいつあ厭だなあ!」

例の無邪氣な生徒が遮つて、いかにも不贊成だといふやうな澄んだ聲を發した。和作は何か凶い豫感を受けたやうに、信一の方を急いで振り返つた。

すると彼は、信一が友達の群から一人離れて、ぽかんと立つてゐるのを見つけた。信一は首を凝固させ、眠いやうな無感覺な表狀で、あてもなく眼をひと處に据ゑてゐた。血の氣のない脣を妙にしつかり結んでゐる樣子も、普通ではなかつた。と、信一は弱々しく手を額にあてた。

「加納君！」

和作は大聲で呼びかけた。信一が振り返つた。和作はその眼の表狀のないのに驚いた。

「加納君　どうした。」彼は急いで近寄つた。

信一は何か答へようとした。だが同時に彼は眼暈を感じたと見えて、又もや手で額を覆ひながら、近寄る和作を待ち切れず、靠れかゝるやうに倒れて來た。

「誰か」和作は支へながら呼んだ。「誰か早く。」

野田が飛んで來た。二人は信一を前後から抱えながら家のなかに擔ぎ込んだ。……和作が昇降口の階段を、足を踏みしめながら登つて行く時、「あいつ、何時もあゝなんだよ。弱蟲なやつ。」といふ、庭の闇から響いて來る同級生の冷笑と、建物のなかに淀んでゐた、例の馥々と病んだやうな梅の重たい匂とが、彼の感覺を現のやうに掠めた……

三十分の後、和作は廊下の角の副舍長室で野田と差向ひになつてゐた。あれから直きに夕飯の合圖の鈴が鳴つて、二人は食堂に入つたのだつた。和作が食事を濟ませて戻つて來る時、まだ共同の大きな寢室で横になつてゐる信一を見舞は

うとしたが、丁度枕元に寮長が立つて、何か相談をしてゐる様子だつたので、その位素通りして來たところだつた。——野田は立上つて和作に茶を入れてくれた。事務机と壁に沿つた本棚と、衝立の陰の寢臺しかない、簡素で小さいその部屋は、スティームで充分暖かだつた。

「まあ、僕は傍にゐなかつたんだからよく分らないがね」安樂さうに自分の机に頰杖した野田が、話の先を續けた。「加納はよく一寸した事で、あんな風になるんだよ。」

「しかし直接には飯島君の藥が利き過ぎたんだよ。」和作は野田が相手だと、時々子供らしく自説を主張するのだつた。

「さうかしら……」野田の方でも危かしい笑顏を隱さず見せた。

「さうさ。だつて君、あんな子供に油の乘つた調子で、これでもか〳〵と云ふ風に宇宙論を說くんだからね。利き目があるよ。……僕には自分に同じやうな經驗があるからさう言ふんだよ。それに神經質にかけちやあ信一君なんか、僕の子供の時とは比べものにはならないからね。」

「うん、そりやさうだ。」野田は大きく首肯いた。

「子供にあんな宇宙論なんか、どうだつていゝぢやないか。愉快にさせて置けばいゝぢやないか。」和作は云はないでは腹ふくれるといふ調子で強く云つた。

しかし野田の方では、その飯島が、食後の休息に隣の部屋に來てゐはしまいかといふ懸念を持つてゐた。

「まあ、それは別として、信一の神經過敏にも困つたもんだな」から彼は話題を外らせてしまつた。「突發的な癲癇も あるらしいが、それにしても少し病的だな。」

「どうも健康な感じぢやあないね。家であんまり利巧に、利巧にと仕向けてはゐないかね。」だがさう云つてしまふと和

作は急に冷淡な調子になつた。「……君からでも一度家の者によく聞いて見るといいね。」

野田は、加納の家の事といふと急に冷やかな調子をとる和作の態度を、近頃もうこれで二三度目撃した。……どうしたのだらうと野田は思つた。加納の家庭の空氣が、この數年のうちにすつかり變つたので、和作には氣に入らなくなつてゐるのではないか、さうも思つた。そしてその事ならば彼も贊成だつた。

「君はこの頃の加納家の感じが、氣に入らないのかい？」野田は突然、あけすけに訊ねた。

「うん？」和作は目に見えてどぎまぎとした。そして狼狽から野田を見据ゑた。

「しかし加納の家も變つたなあ！」……わるかつたかなと思ひながら、野田は椅子の脊をぐつと返らし、天井を仰いで感嘆するやうに云つた。「君はあの家の、引越したあとの文化建築を知るまい？……何故あんな奥床しい、昔の日本建を賣つてしまつたのだらう。あれあ確かに常子夫人の趣味だな。……可哀想なのは鶴子さんさ。」

「何故」短かく低く訊ねた。

「だつて君、生活から趣味からすつかり嫂さんに壓倒されてしまつてゐるんだからね。まだ結婚せずにゐるといふのも、未亡人が淋しがる點もそれはあるかも知れないが、まあ嫂さんのお眼鏡で話を探してゐるからだよ。全く大事なお人形さ。……さう思つて見るせいか、あの鶴子さんといふ人は何となく、綺麗なわりにパツトしない人だな」

「さうかね。」和作は怒つたやうな返事をした。「兎に角僕はもうちつともあの家には行かないのだからね。」

かう云ふと彼はそゝくさと立ち上つて、もう冷え切つて不味い筈の茶を注いだ。野田は吃驚した眼で和作の横顔を見た。だが彼はその和作から、茶をゴクリゴクリと味つて飲んでゐる人の表情しか觀察する事が出來なかつた……

——扉にノツクの音が聞えて寮長が首を出した。

「あゝ、其處でしたか」寮長は和作を見つけると、さう云つて入つて來た。「森島君。少しお頼みがあるんだがね」
「何ですか。」
「實は、甚だ御めんどうだが、君一つ歸りがけに加納を家まで送つて行つて貰へませんかね。」寮長は氣の毒さうな顏をした。「もう大方神經の方は鎭まつたやうですが、人氣のない醫局に今夜寢かすのもどうかと思つてゐるんですよ。さうかと云つて、療つたとも云へない者を普通に扱ふのも心配でね。まあ家で一兩日安靜にしてゐるのが一番いゝです。少し寛大に過ぎるが、あれは私、特別扱ひにしてゐるのでね。」
「誰か他に人はないでせうか。」和作は一寸困惑して云つた。
「それがねえ、私はこれから寮長會議があるし、野田君は當直だし、小使は夜分一人きりになつてゐる處を空けさせる譯にも行かぬし、まあ、君が都合わるければ飯島君に、方角は違ふが頼んで見ようと思つてゐますがね。」
それはいけない、と和作は思つた。
「君、行けよ。」同時に野田が和作を眞面に視て、顎で無雜作に合圖した。と、不思議に和作は自分の細々した感情を、その野田にすつかり預けてしまつた心持になつた。
「僕、行きませう。」彼は立ち上つた。「直ぐでよろしいですか。」
寮長はしきりと氣の毒さうに禮を云つて、出て行つた。
「和作、この間忘れて行つた蝙蝠傘を持つて行けよ。」野田が窓の方に脊を向けた儘云つた。「雨になつて濡れでもすると又いけないぞ。」
信一がマント着の姿で連れられて來た。二人は玄關に出て靴をはいた。和作は風邪をひき易くなつてゐる身體に夜氣

を感じて、外套の襟を立てた。

……「君はたゞの眼鏡だつたの。」

今電車が出たばかりの市外線の停車場で、待合室の腰掛にまだ血の氣のない顏色で倚りかゝつてゐる信一に、和作は思ひ切つてさう口を切つた。「たゞの眼鏡だつたのかい。それとも………。」

すると信一は顏を擧げ、心持微笑んで見せた。和作には思ひがけなかつた。

「それとも」追かけるやうにして彼は訊ねた。「飯島先生の話でどうかなつたのぢやあ、ないのかい?」

若しさうならば、本當に氣を替へてやる必要があると思つたのだつた。

だが信一はやはり心持強いてゐるやうな微笑を消さなかつた。その、別に意外な風にも見えぬ彼を見て、和作は「やはりさうなんだ」と思つた。

「若しさうなら」彼は抑へても起つて來る若い感情から熱心になつた。「決してあんな事を氣にかけるものぢやないよ。子供があんな事、考へなくつたつて、いゝんだよ」

和作の手嚴しい語調で、信一は悧さうな眼を大きく見張つた。

「本當に安心して居給へよ。ね?」和作は德次郎にも鶴子にも似てゐるその眼に覗入りながら、年長者らしく言葉を和らげた。「昔から、さういふ事がすつかり分つた人も、皆穩かに穩かに暮したんだからね。」

だがこんな少年の信一を前に置いて、獨りで力んでゐる自身を、和作は否ながらどうかしてゐると氣付かずには居られなかつた。

「何のための妙な昂奮なのだらう」

彼はさう思つた。

眼前の信一の少年らしい打撃が、昔の自分の思ひ出とつながつて居る爲なのだらうか。いや、現在の自分とも、それが全然無關係ではないためなのだらうか。死ぬる事と只消えてゆく事とを、どうか同じものにしたくないと云ふ夢の重み、焦慮の重みを自身のうちに抱いてゐる、その意識のためなのだらうか。それとも……

それともこれから思ひがけなく加納の家に行かなくてはならないのだといふ、意識のためなのだらうか。

だがその事を考へると、和作は先刻野田に見せたと同じやうな沈んだ不機嫌な顏付になつて、それきり又默り込んでしまつた。

電車が來た。和作は信一を隅の座席の板壁に椅りかゝらせた。そして二人はもう口を利かなかつた。

同じ晩の八時過ぎに、山手線の停車場と、丘向の公園とのどちらにも近い加納の家では、親子兄弟揃つて賑な食事をすませたところだつた。主人の信德も宴會には招ばれず、德次郎も出歩いてはゐなかつた。が、未亡人は箸を置くとすぐに、レウマチスが痛むと云つて、女中に支へられながら、これだけが新築の邸のうちで唯一つの日本間である、六疊と三疊の隱居所に入つて行つた。未亡人はもうすつかり昔と變つて、身も心も老い込んでしまつてゐた。

「お母さん、すぐにお退けですか。」

と、頭を丸刈にして濃い髭をたくはへた、一寸將校のやうな感じのする信德が、何氣ない口調で容體をさぐつた。彼

は家の者が時々閉口するほどの細かい世話燒だつた。

「ぢや折角焚いたものだ。皆あつちへ行つて、あたりながら菓子でも喰はう。ボン〳〵燃えてるぜ。」

信德は他の者を見廻しながらさつさと立つて、客が來れば客を通し、さうでなければ家族も時々使ふといふ風になつてゐる、大きな備付の暖爐(ファイアプレース)のある應接室に入つて行つた。――それはこの日珍らしく、未亡人が氣分のいゝ顏付で母屋に出て來たので、信德は若夫人に云ひつけて、家中で一番あたり心地のいゝその部屋の本式の暖爐に石炭をくべさせ、其處を半日の間一家の中心にしてゐたのだつた。そして今しがた皆で食卓につく前にも、信德は母親のために火絶えを用心して石炭をぼん〳〵投り込んで置いた。その事を今云つたのである。

常子と德次郎とは「それぢやあ一つ……」といふ格好で立ち上つた。母親の煙草盆に火を入れてゐた鶴子は、自分をを振り返つた顏に、「すぐよ」から云つて離(はなれ)の方に起つた。そこで二人だけが先きに、郵便物や調べものゝ書類や編物袋などを携へて、云はれた應接間に入つて行つた。――屋根と同じ勾配で天井が窓の方に傾斜してゐる、温室のやうな感じのするその部屋では、大きな大谷石を疊んだ暖爐に石炭が一ぱい快くゆらいで居り、三人はその周圍で腰掛椅子の位置を定めると樂々とした。

かういふ休息は、形式から云つても信德を殊に滿足させるのだつた。一家兄妹水入らず。散らずに暮すといふ考が何處か西洋風の匂をも含めて、彼の口喧しいくらゐ世話好な性質に心から適合するのであつた。彼には 兄妹が成人するにつれて幾分なりとも互ひに遠々しくなるやうな事があつては、自分が濟まないといふ、妙に律氣な心持があつた。――――つい最近外交官補になつた德次郎などは、この兄の永年の細かい世話にもう倦々して、外國在勤に廻される筈のこの秋を心待ちしてゐる形だつた。しかし信德のこの遣り口は、外見の昔臭い割合には質が籠つてゐるのだつた。末子の位

僅だけに鶴子はそれを感じてゐて、心のなかでこの兄に深い愛情を向けてゐた。

「鶴子は何してゐるんだい。」

鉛筆を持つて書類に目を通してゐた信德が、不機嫌な顏を擧げた。紅茶の土瓶に湯を差してゐた常子は、形勢を察したので、扉のところに行つて「鶴子さん」とさう呼んだ。……彼女が呼び終るまで故意と不機嫌な顏を崩さずに待つてゐた信德は、それで氣が濟んだやうに又眼を書類に落した。常子はその世話燒かげんを可笑しく思ふのだつた。

扉が緩く開いて當の鶴子が、兩手に女の兒の着物と針差とを持ち、頸に夕刊をはさんだ呑氣な恰好で入つて來た。

彼女は二十二になつてゐた。廂入髷に結つて、地味な柴の山繭織の羽織と、やはりそんな風の光らない黒つぽい着物を着てゐた。この髷もこの着物も老夫人の趣味に從つたものだが、彼女にはそれがよく似合つて美しかつた。それにも拘らず、鶴子にはやはり何となく、野田の云つたやうに美しさのどうも榮えないところがあつた。それは彼女が自身の美しさを朝夕樂しむ、それに生き生きした自覺を持つ、といふやうな性質を欠いてゐるためらしかつた。

鶴子は信德の傍に行つて夕刊を渡すとすぐに、嫂の隣に腰かけて、小さい姪が晝間の遊び事で破いた袖口の大きな綻を縫ひはじめた。――かういふ鶴子が、耳を隱した髮に結ひ、美貌も動作も萬事華手に目立つ質の義姉の傍にゐると、その對照は一寸妙だつた。

「まあ、鶴子さん。またそんな事してゐらしつたの。」と常子が眉を寄せて見せた。「あとでもいゝのに。」

「えゝ、一寸で出來てよ。」鶴子はその儘ずん〳〵縫ひ續けた。そして少しめんどうな個處に來た。

「本當によして頂戴」常子はそれを見て、くつきりと美しい眉を寄せた儘、鶴子の手を遮つた。「女中にお委せなさいよ。みんな手がすいてるぢやないの。」

「え〻。え〻。」

だが鶴子は小さい姪のかういふ世話にかまけてゐると、自分に一番適した仕事をしてゐるやうな、内氣な安堵をいつも感じるのだつた。

——夕刊を二つ三つ簡單に取り替へ〳〵見通してゐた信德が、殘らずを無造作にまとめて德次郎に渡しながら、

「どれもこれもH彗星の事で持ちきりだ。あ——。」欠伸まぢりに云つて、また元の書類に目を移してしまつた。

「……公園にも人出がある見込つて書いてありますね。そんな氣配かしら。」

德次郎は新聞を置いて腰をあげ、直ぐ後ろの窓を勢よく開けて首を出した。

「やあ、駄目。駄目。すつかり薄い雲が出て、どん〳〵擴がつてゐますよ。」空を仰いでゐる事が、聲の響き工合で分つた。「……東京の空は紅いな。……生温かいところを見ると明日は雨かな。」

彼はまた窓の金具の音を立てゝ、元の席に戻つた。

「堅つちや、天文臺でもやつぱり困るんでせうね。」常子が云つた。「でも明日も亦よく見えるのか知ら。」

「さうそ。」信德がそれには構はずに「天文臺で思ひ出したが、俺とお前との宛名で學校から（それは寄宿學校の意味だつた）招待が來てゐたぜ。何とか博士の彗星に就いての講演が、活動寫眞入りであるさうだよ。行つて見るかい？」

「あまり有難くありませんね。」

德次郎が浮かぬ顏付で答へた。彼は「學校」といふ言葉を聞くと、或る嫌厭に似たものを感じたのである。それは最近友逹から、森島和作が京都から歸つて來て、「學校」の先生になつたといふ噂を聞いたゝめであつた。——德次郎には何時か、和作の話といふと避けたい習慣が次第についてしまつてゐた。それは和作のあの京都行きの折の行動に原因し

てゐるわけではなかつた。和作のあの仕打を怒つたのは、一寸妙な話ではあるが老夫人一人だつた。局外者の信徳を除いてあとの二人は――常子は義妹に對する愛情から、徳次郎は彼の生れつきの氣弱から――すべて當らず觸らず、默殺の形だつた。が、それ以來といふもの、徳次郎は和作の名前を聞いたゞけで、もう避けたい心持の湧くのを覺えない譯にはゆかなかつた。これは彼にとつても決して快い感情ではなかつた。和作との間のいゝ記憶は數々にあつた。さういふ和作と年始狀をさへ出しあはぬ程度に遠のく事は、彼には決して辛くない事ではなかつた。が、加納の一家に對して恐らくは根强い不快を感じながら、過度な勉强を續けてゐる和作を遠くに想像すると、氣弱な徳次郎は困惑して、彼の感情はまた自分ながら窮屈な、厭なものに變化せずには居られなかつたのである……

「學校と云へば」と信徳が同じ寛ろいだ調子で喋つた。「この間電車で野田に逢つたぜ。野田の話だとあの森島ね、森島和作か、あれが今度高等部の講師になつたさうだね。お前知つてるか。」

「えゝ。知つてゐます。」徳次郎はそれをまだ家の誰にも話さなかつたので、工合の惡い顏をした。

「俺は野田にはじめて聞いたんだが、あいつは文科は哲學科を出たんだつてね。ふーん。」和作に對する印象の淡い信徳は感心して見せた。「昔自家にちよい〳〵來た時分には、俺はよく知らんが、何でもお前の部屋で騷いだりして、いやに活潑な奴らしかつたぢやないか。」

「いや。やつぱり左ういふ變つた所もありましたよ。」

「誰? 森島さん?」常子が引受けて云つた。「えゝ。えゝ。あの人は昔から哲學者よ。變人よ。」

鶴子が悠つくり顏を擧げた。

昔、老夫人が先代同志の關係を頭に置いて、和作の京都行きの折の不作法を批難した時、たゞ氣不味さうに笑つてゐて

少しも合槌をうたうとしなかつた嫂を、彼女は憾えてゐたからである。彼女の吃驚は只そのためだつた。ほかに何の理由もなかつた。

しかし常子は鶴子の様子を敏捷く見てとると、急に「ねえ、鶴子さん」かう云つて立ち上るなり、長椅子の上に放つて置いた大きな編物袋を取つて來て、快活に喋り出した。

「ねえ、貴女にお見せするものがあるのよ。御批評が願ひたいわ。」彼女は袋の中から、純白の毛糸で編んだ、女の兒の靴下の出來かけを見せた。

「昨日同窓會のバザーでお友達にこんないゝ毛糸教へて戴いてね、すぐにその場で買つてやりはじめましたの。やはりミネルヷ、ヤーンなんですつて。そのかわりこれは一番の大よそゆきよ。」

「まあ、柔らか。」鶴子は懶さうに手の甲にあてゝ見た。

「こゝの處から四本棒を五本使ふのよ。妾、今別にスコッチ糸で信一の靴下も編んでゐるんですけれどね、足の裏と踵には木綿をどしどし刺し込んでやつてゐますの。皆さんいゝ木綿糸を御存知で、それは丈夫なのを編んでゐらしつてよ。全く買つた品を一週間に二三足といふ勢で、生優しくは繕げない穴を開けられちや、堪りませんからね。」

かう云つて常子は又美しい眉を大げさに顰めて見せながら、その間も、鶴子の懶さうな表狀の一寸した動きをも見逃すまいと、一心に視まもつた。

——玄關で呼鈴が鳴つた。四人はぱつたり話を止めた。今度は長く鳴つた。と、その方に急いで行く女中の足音が、壁一重向ふで輕く聞えた。

「俺の客だつたら書齋に通せよ。」信徳が機嫌のわるい聲で云つた。

「誰だらう。今時分。」不規律な客にかけては信徳よりも自分に多い徳次郎が聞き耳を立てた。遠くに公園の周圍を行く電車のポールの音が、ゆつくり聞えた。

女中が入つて來た。

「誰方？」常子は玄關がすぐ其處なのを用心して、扉をキチンと閉めるやうに手眞似しながら、小聲で尋ねた。

「信一樣でゐらつしやいました。」

「信一？どうしたのだらう。」

「あの、何か御氣分がお惡いとかで、學校から先生のやうなお方が附いておいでなりました。」

「やうなお方といふ事はないぢやないの。お名刺は。」來客を叮嚀にもてなさないと氣持わるい常子が、不機嫌に云つた。

「戴きました。その儘お歸りなさるやうな御樣子でございましたが、無理にお待ち願つて……」

「早く頂戴。」彼女はテキパキと名刺を受け取つたが、それを一瞥すると、急に今までの氣忙しさを忘れたかのやうに「あ、さう」から云つて何氣なく立ち上つた。

「兎に角信一を休ませろよ。俺、玄關に行つてやらうか。」信徳が氣早に持ち前を出しかけた。

「はい、はい。今あれ致しますよ。」非常に思慮深い色が常子に現はれてゐた。「ではかうつと。かよ。お前は信一を向ふのソフアまで連れて行つて、少し横にならせて置いてお吳れ。それから鶴子さん。あなた濟みませんけれどあの子の樣子を一寸見てやつて頂戴な。妾、玄關に御挨拶に行きますから。」

鶴子が部屋を出て行つた。

「貴夫。……これ。」用心深く間をおいて後、常子は自身の位置から名刺を前に突き出して見せた。「二人でお暇たさるからよ。——森島和作。……いかゞ？」冷たい微笑を保ちながら讀み上げた。「妾が御挨拶して來ますわ。」

「ほう」と云つた德次郎には弱々しい困惑の色が現れた。

「森島！それあ氣の毒だつたな。此處へ通すか。」何の先入主も興味もない信德が、前と同じ調子で云つた。

「えゝ、さうねえ、でもあの方はきつと玄關でお歸りになるでせうよ。」夫に媚びるやうな調子を含めて殊更氣輕に云ひ、着ずまいを直しながら常子はもう小刻みに扉口に急いだ。「なまじ無理にお奬めすると、あのお方は遠慮深いのですからね、返つてお氣の毒ですわ。よくてよ、妾がよく御禮申して置きますから。」

……常子は義妹を心から愛してゐた。それは自身の結婚の經驗はもう過ぎた婦人の持つ、獨特の愛情だつた。彼女は自分が一から十まで世話を燒く事が出來るといふ責任感をも含めて——或ひはその爲に一層、鶴子の幸福の事をいろいろと思ひめぐらすのだつた。さういふ心持から彼女は猶、鶴子が美しさから云つても氣立から云つても可成な幸運が望めるのに、何となく萬事引込思案で印象のぱつと榮えないところのあるのを、しきりと氣に懸けてゐた。……今常子には、鶴子のために非常にいゝ緣談のあてが、ほんの緒ほど出來かゝつてゐた。常子はそれでこの頃は一層、鶴子の事にかけては神經質になつてゐた。

「……本當に玄關で歸つてくれるといゝけれど」

常子は薄暗い廊下のしつとりした空氣を顔に感じながら、それを希つた。只前から妙に遠慮深い時と、その反對の時との豫感のつかぬ和作を思ふと、彼女は昔なじみの不安に襲はれた。

「さうだ。……どうしても玄關で歸つて貰はなければ。」

彼女は一家の幸福のためにはどんな些細な邪魔物でも嫌厭したい本能で、心の引き緊るのを感じながら、もう客に接する時の態度で、レースの張つてある玄關の厚い硝子戸をそつと開いた。

だが戸外には、今廊下に漂つてゐたと同じしつとりした動かぬ空氣があり、漆喰の庇から姿を見せずに照らしてゐる燈が、徒らに石だたみの上にぽつと落ちてゐるばかりだつた。

「おや。」

常子は少時扉を開けた儘佇んでゐた。

「……まあ、よかつた。あの方は歸つてくれたのだ。」

彼女は何かの香氣のこもつてゐさうな夜氣を大きく吸ひながら、心底からこみ上げて來る安堵の表狀を抑へる事が出來なかつた。

「まあ、よかつた、まあ、よかつた。」

水の低きにつくやうに、口に輕輕とのぼつて來るその言葉を、彼女は何遍も繰返さずに居られなかつた。——これはさう大した出來事ではなかつたのだ、左うは思ひながらも、やはり何となしに一家の幸福を無事に護りおほせた感情から、彼女は眼蓋の自然に霑つて來るのを、凝つと堪えてゐた。が、やがていつもの用意周到な彼女に還ると、上草履の音をバタ／＼と起てゝ、信一の横になつてゐる筈の奥の方に入つて行つてしまつた。

森島和作は、加納の住居のある閑靜な邸町から電車通の往來に、電車通の往來から更に街路樹と街燈の並んでゐる、

眩しい大通りに出てゐた。彼はまだ自分の背後に、あの植込の黒い影につゝまれた建物の冷靜さを感じてゐた。

彼にはその建物の屋根や壁が、夜の寒氣だの不慮の災だのをしつかりと防ぎながら、闇のなかで凝つと微笑んでゐたやうに思はれるのだつた。彼は溫室のあまりに濃い空氣から、今出て來たばかりの人のやうに深い呼吸をした。

「………やはりあれでよかつたのだ。俺はほかの世界の一家を嚙かす前に、出て來たのだ。」……そして彼は何かの微やかな疲れを感じた。

和作は大通りの賑やかな人道を、夜店の前に立ち止る人を縫ひながら、スッスと歩いた。

——空にはいつの間にか變化が行はれてゐた。一時間ばかり前からどん〳〵解けて擴がつてゐた、霞のやうなあの淡い雲は、今はもうすつかり都會の上を低く覆つて、星も黒い空の闇も、何もかも殘らず隱してしまつた。そしてあとには浮浮した春の夜氣が、獨り顏に空間を領してゐた。それは、宇宙の大、人間の小といふやうな比喩を無理にもひしひしと感じさせられた先刻の空とは、似ても似つかぬものだつた。

月の在處だけが茫んやり分る……

和作は「朧夜や顏に似合はぬ戀もあらん」といふ、漱石の句を思ひ出した。そして歩きながら月の在處を凝つと視た。

だがやがて、彼はさういふ自身を冷やかに視てゐる自分に氣づいた。彼は赧くなつた。彼は腹立しく頭を振つた。

あれはたわいもなかつた事ではないか。鶴子の結婚の噂が耳に入れば、やがて跡方もなく消えてしまふ程度のものではないか！

二丁目、三丁目と彼は同じ早さで、數間先きを茫んやり見ながら歩いて行つた。

「過去、眠れ。」稍々あつて彼は、激したやうに自分にさう命じた。「あんな過去……」

沈んだ空虚が彼に來た。そして又例の疲れが――まだ〳〵どうかするとすぐに感じる病後の疲れが、彼の身體を徐々に占めて來た。こんなことではいけない、と和作は重たい心で思ふのだつた。

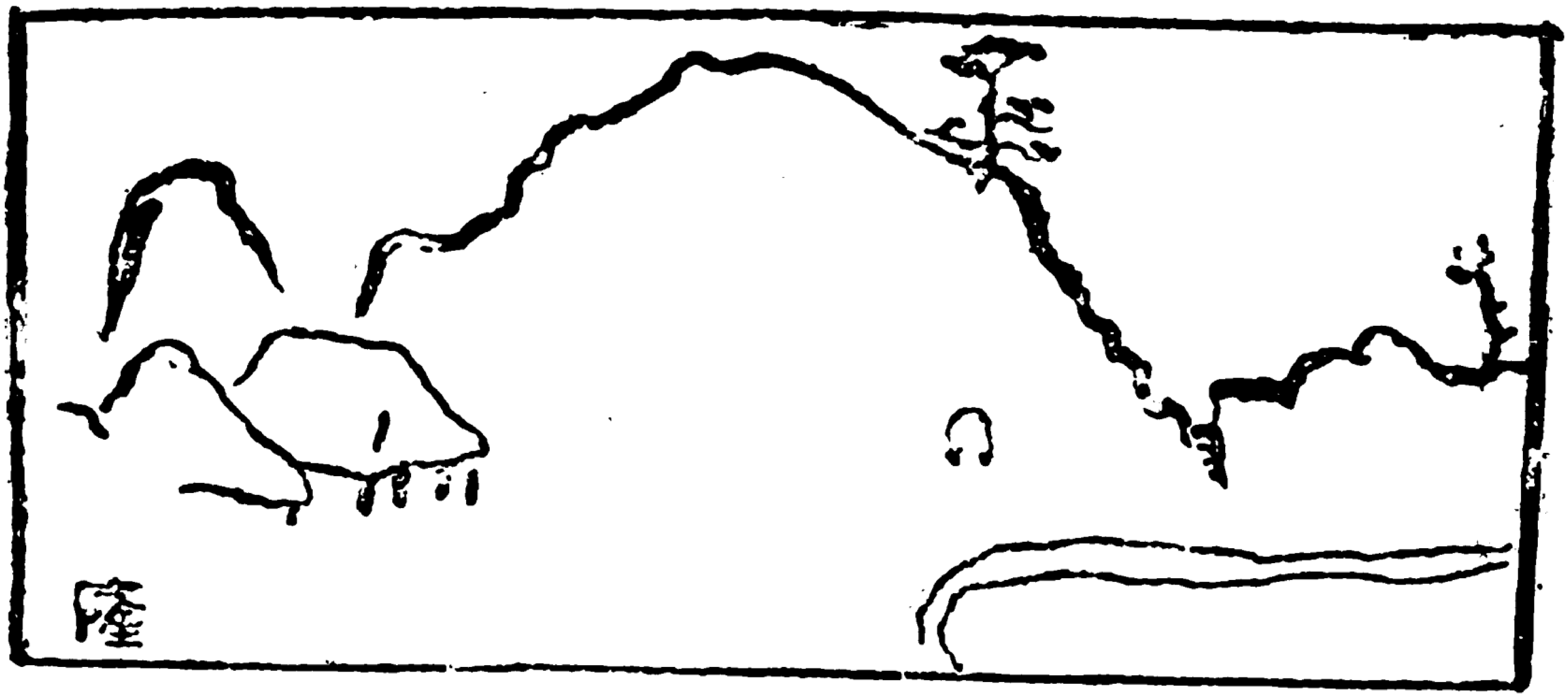
「春になつたら身體をなほして、早くまとまつた仕事に手をつけなくては！」

彼は京都を立ち去る時に××先生から大體の方針を親切に教へられて來た、或る仕事のことを思ひ出したのである。――この健康さへ恢復したら、そしてその仕事にさへ手を着けたら、もう少しは今の自分を笑つて見下せる自分になれるだらう。かう彼は考へた。

彼は病後で焦りがちの、無力な今の自身を勞はりたい、痒いところにも手のとゞくほど勞はりてやりたい心持で、一ぱいになつた。

五丁目と突き當つて、濠端の電車の交叉點に出た。和作は歩き過ぎを恐れて電車に乘つた。寄寓してゐる家に歸れば、丁度十時になると思つた。だがこんな浮浮した朧夜に、果してその儘眠かれるかどうかを氣遣つた。

（十二年二月）



彼等と私

佐藤春夫

××××君の語つた話である――書いて見よう、つまらぬかも知れぬが。

『私は本郷三丁目で電車を乗かへるために下りた。けれどもどうもそのまゝ巣鴨の家へかへる氣持にはならなかつた。といふのはその晩は散歩に適した暖い春の晩であつたし、それに家へかへれば女房に今朝からヒステリイを起してゐて彼の女のヒステリイは一日や二日はきつとつゞくのだから、歸つて見てもなほつてゐる氣づかひはない。正直に言ふが、私はその女房がどうも嫌ひであつたのだ。それには深いわけもある―がそれは今は言ふまい。たゞ私が家へかへりたくなかつたといふそのことだけ知つて貰へばよい。さういふわけで本郷三丁目の停留場の人ごみに佇んでゐた私は、この近所に友達でもあればいゝと思つた。生憎とその邊には友達といふやうなものもなかつた。が、ふつと思ひ出したのは或る女のことだ――その女とはちよつと知り合ひでもあるし、その女の亭主といふのも二三度逢つて知つてゐる

よく遊びに來いと言つてゐた——その亭主も、その女も。

私はすぐそのA子夫婦を訪ねて見る氣になつた。ふわ〳〵した若い同士の夫婦だから、こんな晩にはうちにはゐないかも知れない。居なけやゐないでもかまはない……

『そのA子夫婦といふのはホテルともつかず下宿ともつかぬやうな家の一室に住んでゐた。——その人たちと私と知り合ひになつた筋道もちよつと話して置いた方がいゝ。

そのころ私がひどく親密にしてゐた友達がひとりあつたが、そのBがつひこの間までやはりA子夫婦のゐる家にゐたことがあつた。——今考へて見ると、Bは情婦に逢ふのに都合がいゝやうに女房にはうまい口實をつけて、自分の家がありながらこんな宿屋見たやうなところへひとり住んでゐたのであつたらう。私がBを訪ねた或る時のごときもその女が入りびたりになつてゐた。さうして花を引いて遊んでゐたつけが、A子夫婦も同宿のよしみでやつぱりその仲間にゐた。——尤も僕が這入つていつたきりその遊びはやめになつてA子夫婦もBの女もそれぞれに歸つて行つたが。それだから私がA子夫婦を知つたのはその時ではない。

『それよりも前に私はBをたづねた時であつた。さうしてその安ホテルの食堂で飯を食つた時に、やはりその食堂の一隅にゐた男女があつたが、本當の夫婦にしてはどうも男の年が少し若すぎて、たとひ本當の夫婦だとしてもそれはどうしても戀人あがりの夫婦者と思へたのだが、それで私とBとはその二人の方を何とはなく注意してゐた。女は目が惡いと見えて色眼鏡をかけてゐたが、惡い女でもないやうであつた。

『或る時、Bが言つた――「君、このまへ食堂で見かけた女ね。あれや、あの時は遠かつたし眼鏡などかけてゐてよくわからなかつたが、つくづく見るとなかなか美人だよ。あの男の亭主が宿の女中に手紙をとゞけさせてね、僕にさ、逢ひたいといふのだ。逢つて見ると女房が――あの眼鏡の女が活動の女優になりたがつてゐるので、僕に聞けば誰か知つてゐるだらうと思つてたづねに來たといふのだらう。あれ（といふのはB自身の女のことだが）がやはり女優だといふことを聞いたからださうだ。それでA子をつれて來させて見たが、あれなら女優になれるとも。僕は××キネマのCに紹介してやるつもりだ……」

――そんなに美人か知ら？　と私は思つた。

『或る時またBが言つた――「あの女の亭主ね、あいつがアマイ男ださうで、女房の言ひなり次第なのださうだ――宿の女中が言つてゐる。さう言へばよほどあの女に惚れてゐるぜ。さあ、何をしてゐる男だか。いくらか金でもあつてたゞ遊んでゐるぢやないかね」

「で何か、あの女は女優になることにきまつたかね？」

「A子はともかくもCに紹介してやつた。少し見習はしてみて採否のほどは決定するさうだが、柄はあれでよかつたのだらう。生憎とBが洋行するさうだから、どんな都合だか僕も知らないが」

（Bは活動の背景のデザインをやる男である。この話をする「私」は畫家だ。だからすべてはそんな社會の出來事である――ちよつと斷つて置く）

『私はBとA子に就てこんな噂をし合つてゐるうちに、Bの部屋などで一度か二度A子にもA子の夫にも落ち合つたことがある。が、別に口を利くといふほどでもなかつた。A子と私と偶然いくらか親しくなつたのはCの送別會の席上に於てゞあつた。そこへは、かねてBとは知り合ひでもあり私も出席したがA子も來てゐた。A子は顔馴染の人が少いのでぼんやりしてゐる樣子であつたが、私を見つけると言葉をかけて、

「今晩は。Bさんはお見えになつてはゐらつしやらないやうですね」と言つた。

成る程、Bは出席してゐなかつた。そんなことからA子は私にお茶を汲んでくれたりなどして、紀念撮影の時なども私の近くのところへ來て立つてゐた。會のかへりには、(會は日本橋の或る家であつたのだが)方向も同じであつたし私とA子とは一緒に電車を待つてゐたが、電車は三つとほつたけれど、どうしてだか滿員ばかりで、私はそんな電車へ無理に乘るよりは須田町まで歩くことにした。別に誘つたわけぢやなかつたがA子も私について來た。須田町まで來ると、今度はA子が言ひ出した――こゝまで來れば本郷三丁目まではわけもないからなのだ。そこで私もそこまで歩いてもいいつもりになつた。本當のところあの時の氣持ちやA子と一緒でなくとも、ひとりでももう少し歩いたらう――會の歸りなどには誰だつてもそんな氣持が起ることがあるものだ。ところが、須田町から松住町のところをぐると電車線路に沿つて歩いて、明神前の坂あたりへ來て、あのお茶の水の學校の裏手の長い土堤のあるあたりを、プラタンの並木のところをA子と並んで歩いてゐるのは、事實、一人で歩くのとは違つた氣持がふいと感じられた。――惡い氣持ではなかつた。A子はそのつい二週間ほど前に或る展覽會へ出品した私の繪のことなどを話題にしてゐる。それから自分の亭主は詩人になるつもりだらう――才能があるのか知ら?とも話をした。A子といふ女は見かけは氣取つてゐるけれど話して

見るとちつとも氣取つてはゐなかつた。といふよりも氣取て見ても直ぐにぼろが出てゐるので、ぼろが出ても一向苦にしないやうなところがあつて、つまり氣のおけない女であつた。——私たちはそのころ人間を三つに分類してゐたが、その一つは哲人、その一つは雅人、その一つは俗人とかうである。無論俗人をひどく輕蔑するのだ。ところで女には哲人はあり得ない。女の哲人などといふ言葉は全くのパラドックスだ。そこで女にも雅人はある。けれども根が女だから深い意味で雅致はあり得ない。つまり女の雅人といふものはどこか知ら拔けたところのあるのにきまつてゐる、言はゞ、女さかしく云々といふがつまり牛を賣りそこなはない女だ。それが女としては雅人だ。もつとはつきりいふ女のうちで話してゐて面白いどこか *Idiotic* なところがある方がいい。私たちは、それでそんな性質の面白味のことを *Idiotic beauty* などといふ言葉をこしらへてゐたものだが、A子にちよつとばかりその *Idiotic beauty* があるやうな氣がする……そんなことを考へながら私は歩いてゐたのであつた。つまりごく微量な親愛を感じたのである。もとよりそれは口へ出して表現したりする程度のものではない。

別れぎわにA子は、今度遊びに來いと言つた。それからA子の夫も私を好いてゐるとも言つた。——さう言へば、それまでに一度、Bについてその青年も私のところへ遊びに來たこともあつた。A子は彼女たちの部屋の番號を敎へて、それは三階の表がわの、外から見て右から三つ目の部屋だと說明した。それからその家には彼女たちと同じ姓のDといふ人が外にもう一人ゐるから間違はないやうにと言つた。——私はそんなけぶりを別に見せたつもりはないがA子は、そのやうに私が彼女たちのところへ遊びに來ることを待つてゐるやうであつた。だから、今夜、遊びに行つても別にをかしくはないであらう……」

『正直に言ふが、私はA子のところへ遊びに行くつもりになつたので、その亭主のDのところへ行く氣持はなかつた。といふのは私はいつの間にかDを少し輕んじてゐた。一たい私は妙に金のある人間を輕蔑したがる癖がある上に、その金のある人間に才能が無いと來ては一そう好かない。どうもDは見たところさほどの才能の士とも覺えない。それから私は女房にアマイ人物は嫌ひではないが、宿の女中にまで見拔かれるやうなだらしのないアマイのはよくない。さういふわけで私にはDはちよつと、ほんのちよつと滑稽な人間に思へた。尤もこれがもしDが女だつたら、やつぱり Idiotic Beauty の仲間かも知れない。ともかくも私はDを好く好かないではない第一それほど念頭には置いてゐなかつた。しかし、A子をだつても、無論さう複雜な氣持で訪問するのではなかつた――何しろ、居なければ居ないでもいいくらゐのつもりであつたのだから。―正直に言ふ以上、掛引はないのだから私の言ふとほりに聞いて置いてくれなけやいけない。どうも君たちは、さういふことで私をひどく誤解してゐるからね(と、そこで××××君は何か外の事でも思ひ出したか、そんな事を言つた)

『私はその家の前へ來て、その高い建物を見上げた。三階の表が山の、外から見て右の三つ目の部屋。――留守ではないやうだ。兩隣の部屋は灯が消えてゐるけれどその部屋には灯がともつてゐる。けれどもカーテンは引つぱつてある。せつかく來たのだから成るべく居た方がいい。私はその窓を見上げながら歩いた。とオヤ／＼！妙なことをやつてゐるぞ！といふのはそのカーテンの上へ影法師がうつつたのだ。くつきりうつつた。突然に現はれて、それがどうも抱擁し合つてゐるらしい。在宅は結構だけれども、これや氣なしに這入て行つて邪魔にされやしないか知ら。……私は立ちどまつてそのカーテンの影が動いて消えたところを見ながら、訪ねようかどうしようか。少し戸迷ひしたがやつぱり訪

ねて見ることにした。

「二十一番のDさんはゐますかね」

と尋ねると「居る」と言つたきり宿の女中は取次いでくれさうにもない。「お部屋は御存知でせう」といふところを見ると知つてゐるならひとりで行けといふつもりらしい。女中の奴は私が以前Bのところへ來たころに顔馴染なのをいいことにして、高いところだから案内するのが大儀なのであらうと。そこで私はひとりで二十一番の部屋へ上つて行つた。

「コツ、コツ、コツ。D君、D君！ コツ、コツ、コツ！」

私は部屋の扉をノックしながら部屋の主の名を呼んだ。部屋はひつそりとしてゐる。さては？ と思つたから私はそのままで引き返さうとしてゐた。すると。ちやうどその時、不意にその扉が開いてDがぬつと現れた。私の顔を見ると彼は頓狂な聲を出した——

「や！ ××さんですか。それや珍客だ——思ひもかけない！」

さう言つて彼は、きよろ〳〵とそこで一つぐるつとまわるやうな様子をして、自分の部屋のなかを氣にしながら、それでも「さあどうぞ」と私を案内しながら奥の方の部屋へ這入つて行つたが、いきなりその机の前へきちんと坐つた。それからその上にあつた翻譯のバイロン詩集を無暗に開くと取つてつけたやうに言つた——

「バイロンはいいですね。實にいいですね」

彼のてれ方があまりひどいので私は口の利きやうもなかつた。でも、二分ほどたつとDはやつと自分のへんなのに氣がついたらしく言つた——

「××さん。實はね、今、その夫婦喧嘩をしてゐたところでした」

なるほどさう言はれて見ると、部屋の片隅ではA子がしくしくと泣いてゐた。――それではさつき抱擁してゐたと云つたのはつかみ合ひをしてゐたのであつたかも知れない。なるほど聞けばさうのやうでもある。

「一たいどうしたと言ふのです」

その私の言葉には答へないでDは泣いてゐる彼の妻をふりかへりながら言つた――

「A子、もう泣くのはやめたらどうだ――××さんが來てくださつたのだぜ、お前の大好きな××さんぢやないか。ねえ」それからDは私の方を見直して「××さん。A子はね、あなたの事を大好きなのです。東京へ來てから逢つた人のうちぢやあなたが一番好きだと言つてゐるのです」

「これや有難い。私が人に好かれたのはこれが初めてだ」私はともかくもそんなことを言ひはしたが、實際からなると今度は私がバイロン詩集を開かなけりやならない事になつた。さうして、ふとさつきの喧嘩といふのが何か自分にも關係があつた事ぢやないかといふ氣もしたけれども、そんな答もあるまい――――たとひ、さうにしたところで別に私の知つた事ぢやないなどと思ひながら、どんなつづき工合だかわからないバイロンの敍事詩を見てゐた。Dは私がバイロン詩集を見てゐるのをとつつきに何だか、再びその詩人のことを言ひ出したが、私はこのぎこちないチグハグな空氣のなかで、Dからバイロン論を聞かうとも思はなかつたから言つた――

「温かくつて、いかにもいい晩だから僕は散歩に來たついでに寄つたのです。お茶でも飲ましてもらはうと思つたが、夫婦喧嘩の最中ぢや仕方がない――ぢや、もう失敬して僕は散歩でもしよう」それから私はちよつと笑ひたがら「實はかどまで來てこの部屋の空氣がへんなことは直覺したのだが、どうも夫婦喧嘩とは氣がつきませんでしたよ」

「へ？　もうお歸りですか？　それから散步ですか？」さう答へたDは私をまともに見上げたがどうしてだかその目つきが救ひを求めてゐるやうにも思へた。

「ええ。散步です。そとはいい氣持の春の夜だ………。どうです、君たちも喧嘩は一つゆつくりやり直すことにして、今夜は散步でもしちや？」

「散步はいいですね。行きませうか。ねえA子、お前も行くだらう。大好きな××さんと一緖なら。ねえ、A子、」

「いやいや、僕は無理に誘ふわけぢやありませんよ」私は言つた——大好きな××さんと言はれるのがへんに氣になるので。けれどもDはそんなことにはかまはずに、A子の方へ立つて行きながら、女の肩へ手をかけてやはり同じやうな言葉で散步をすゝめてゐるのであつた。女は小さな聲で何か言つてゐる。

「う？　うむ。うむ、」とDは女と話し合つてゐる「……あまり賑やかでないところなら？　それやどこでもいいよ。あ、さうだ——××さん。どこでもいゝですね。ねえ、A子。行かうよ」

「…………」女は無言で大きく頷いた——私は默つて見てゐたが、その子供らしい樣子がちよつと惡くはなかつた。

A子は少し明るい方へにぢり寄つて、それから私には改めて無言のまま丁寧なお辭儀をして懷から鏡と白粉紙とをとり出すと、泣いて赤くなつてゐる鼻のさきや頰ぺたなどをしきりにお化粧し出した。女は他所行きの着物を着てゐた——外出しかけて夫婦喧嘩になつたのか、でなければ外から歸ると早々におつ初めたものにちがひない。その妻の姿をちらちらと見ながらDが言つた——

「いや、全く、私もよくない。だんだん狂暴になつて來るものだから」Dはその言葉をしぐさで見せるとでもいふやうに藝術家氣取で長くのばした髮を兩手でくしやくしやとかき上げながら「ね、××さん。見てやつて下さい。今日なども

あれの着物をあんなに引き裂いてしまつたりして」女は夫の言葉を事實で見せるつもりだか、それともそれがどのぐらゐだか見直すつもりだか、自分で引つぱつて見てゐる。なるほど羽織の袖つけが三寸ほどほどけて赤い羽二重かなにかの裏が見えてゐる。Dは言ひつづけた「手だつてもあの通りです。血を出すやうなことをして」言葉は大げさだがほんの引つ掻いたか何かしたのであらう——女は血の糸がにじみ出てゐる手の甲を、誰にといふこともなく見せた。——

Filet's beauty と私のいふのはそんなことなのだ。

、

『二人はつれ立つて出たが、女は二三歩おくれてついて來た。Dは途に私にたづねもしないことを半ば獨言で話かけた。Dは言つた——「誰が惡いのだか知らない。いや私も惡いのだ。だがA子だつて惡いのだ。ふたりが一緒にゐるのはどうもよくない。だからもう別れやうと思つて、それよりも前にともかくもひとりでよく考へて見ようと思つて、私は今夜ひとりでどこかへ行くつもりだつたのです——山の中の温泉場か何かへ。それで荷づくりをしてゐると、A子がもう一晩待つてくれと言つて泣くのです……」

「うそですわ」と不意に、Dの話を聞いてゐたらしいA子が口を利いた「今晩行くと言つたところで今はお金がないのです。だからわたし行くならお金をこしらへて來て上げるから、あしたいらつしやい——と言つただけです。」女はいつの間にか私とDとの間へ加はつて歩き出してゐた。それから言ひつゞけた「行くならば今からでも何時からでも、どこへでも行らつしやるといいわ」女はからかひ氣味にさういふのであつた。さうしてつい二十分前までは泣いてゐた女とも見えずにつこりと笑つた——どこかみだらな色氣のあるほどなまめいた笑ひ顏だ。

女にさう言はれながら男は默つて十歩ほど歩いてゐたが女のうわついた笑ひ聲とは全く反對なしみじみとした調子で

私に向つて言つた「ねえ、あの通りです。だから自然と喧嘩にならざるを得ないのです。私が金も持たずに出て行くと言つたらとめるどころか、金があるまいから金をこしらへて來てやるといふのは何といふ言ひ草でせう。おい、A子！誰にその金を借りて來るのだ！」

「おい、D君もうよし給へ」私は言つた「つまらないぢやないか」

「いやいや。さう一口に言はないで下さい。これにはわけがあるのですから——さうだ、××さん、あなたに聞いていたゞけばわかるのだが……。A子、話してもいいかい？」

「好きなやうになさいよ。わたしだつて聞いていたゞくわ」

「いや！」と私は言つた「僕はひとから大事な話を聞かされるのはいやだ。ことにそれが内證の話と來て、しかも面白いことでもあつてごらん。僕はおしやべりだから困るのだ——そいつをしやべりたい誘惑としやべつちやならないといふ義務とが内訌してね。面白い大事でない話なら聞かせ給へ。で、なけれあやめるのだね。D君、君も一たい輕卒ですぜ。僕といふ人物をよくも知らないでさ。それに喧嘩は延期したまへ。僕は喧嘩のつゞきをしなさいと言つて君たちを散歩に誘つたのぢやない」

Dは私より、六つ七つも年の若い男であつたから、私にさう言はれると叱られでもしたかのやうにしをれて默つた。A子も默つた。そこで私は何かもう少ししやべつてやらなければならなかつたので言ひつゞけた——

「君たちは御存知あるまいが、僕といふ男はまつたくのおしやべりでね。僕が小説家なら自分のおしやべりを題目にしてこんなことを書かうと思ふくらゐさ（そこで私は即興的に一つの話をつくり出しながら）——まづ或る男が人殺しをするのさ、女か何かをね。うまく秘密に運んでゐるのだ。それを偶然にも私が——私のやうな男がこつそり見出すのだ

その殺し方がいかにも深刻である。どうも自分ひとりの胸にしまつて置けないほど面白い。さういふ珍らしい怖ろしいことを自分が見たといふことを言ひたくてならない。それで密告しようかと思ふのだが、それよりもさきにその男が女を殺した原因を搜つて見るとどうも殺した男の氣持が同情出來る。それにその男は女を殺してから何か敬虔な生活をしてもゐる。どうしても密告するわけにも行かない。しかしそれを誰かに言はずにゐてはあまり言ひたいので神經衰弱がひどくなる。それで思ひ切つて言つてしまふのだ。すべての事情を――その人殺しをした當の人物にね……それからさきはどうするか知らない。ともかくも內密な話や事件を知るといふことは僕のやうなおしやべりには重荷だね。それに僕にはおしやべり哲學があるからなほいけない――いづれ人間のした事だから人間同士で內緖にしなけれやならないなんてことはあるまいといふのさ。それを內緖にしたがるのはへんだよ。――おや〳〵これぢや君に打明け話をしたまへとすすめてゐるやうな言ひ草になつたな。………」

私はなんでもそんなことをひとりでしやべつてゐたが、妙に氣がそわ〳〵してゐるせいか電車通まで來るとつひ電車に沿うて明るいところを步きさうになつた。

「あら! そちらにいらつしやるの。明るくつていやだわ――わたし、羽織のやぶれてゐるのを見られるもの」

A子がさう言つたから私たちは氣がついて大學の構內を上野の方へ拔けることにした。

私は途中で煙草を買つてゐたから、彼等よりも一足おくれた。赤門をくゞつた時には彼等から十五步はへだたつてゐた。朧月夜で、それに今までは氣がつかなかつたが極く淡い靄が下りてゐる。大學の構內は四月の夕方になると教室の階段の上を小使が古ペンと櫻とを掃くといはれるくらゐだ。その櫻の並木の下をこの朧夜に私の直ぐ前をD夫婦が步いて行くのだ。その後姿を見て私は步いてゐた。彼等は何をだか、とにかく何か話し合つてゐる。よそ目には仲のいゝ夫

婦である。——妬けたらうと言ふのかい。待ちたまへ。せつかくのお祭しだけれども私にはそれが全く反對であつた。私は急に悲しくなつてゐたのだ。それも詩人のやうにではない。たゞの人のやうに悲しくなつたのである。

私は自分の前をゆつくりと話し合ひながら歩いて行くDとA子とを見ながら、四年前の自分自身と或る女との影をそこに見たのである——

『その出來事を無論私は忘れてはゐなかつた。けれども私たちがそのやうにして、こんな春の晩に——いやもつと晩い春であつたが、ともかくおぼろの月の下をD夫婦のやうにゆつくり歩いたことがあつたといふときのその些細な情景は、その外の大きな出來事にかくれて私の心のなかには、今まで、このD夫婦のうしろ姿を見るまでは全く思ひ出したこともなかつた。私たちは歩いたのであつた。ちやうど或る先輩の夫人が死んでその弔ひのために本鄕へ來た私たちは、やつぱりこゝを通り抜けてゐた。私たちはやつぱり別れ話をして歩いてゐた。D夫婦の別れ話はどれだけ根柢のあるものだか知らないけれども、あの時の私たちのものは、もつと眞劍に進んでしまつてゐるものであつた。私の妻は別に男をこしらへるし、私は私で別に女をこしらへるし、一言に言へば私たちは互に見捨て合つたわけであつた。私たちふたりはもう諍み合ふやうなことはせずに靜かに別々の道の方へわかれ〳〵に踏み出してゐた。それゆゑ私たちはその晩にももう別に怨恨のやうなものはどちらも抱かずに、たゞ空の險惡に曇つたそれでゐてごく靜かな日のやうに平和にこの路を、やつぱり上野の方へ通り抜けてゐたのであつた………この思ひ出が不意に現はれて私のこゝろを曇らせたのだ。

私はわれ知らずとぼ〳〵と歩いてゐた——二三丁ほどの間。

氣がついて私がもう一度、さきを歩いてゐる彼等を見た時に、A子は私の方をふりかへりながら、私を待つやうに立

ちとまつた。Dも一緒に立ちとまつた。そこで私も足を早めて彼等に追ひついて彼等の仲間に加はつたには加はつたけれども、私はもうさつきまでとは違つてひとりでおしやべりをしつゞけるやうなことはなかつた。A子がまづ目ざとくそれに氣がついたと見えて私に言つた――

「さつきから何をぼんやりしてゐらしつたの？」

この女はいつの間にか私にそんな慣々しい言葉をつかつてゐる。私はそれに氣がつきながら答へた。

「なに、くたびれたからです。それに君たちが仲よく話をしてゐるから邪魔をしては惡からうと思つてひとり歩いてゐた」

「ハ、ハ、ハ！」愉快に笑ひ出したのはDであつた。さうして彼は問ひもしないことを答へた「で、私は、××さん。ともかくも今夜はどこへも行かないことにします。もう時間も遅いですからね――まだ宵の口だのにDはさう言つた

「……」私にはちよつと話のつゞきがわからなかつたが、直ぐに言つた「あゝ、それがいゝね」――Dがどこへも行かないといふのは、さつき今直ぐにも山のなかの溫泉場かどこかへ出かけて行くと言つた言葉を取消したものだといふことが私にも氣がついた。多分Dは私がおくれて歩いてゐる間にA子に謝つて仲直りをしたのであらう。

Dはこれからはひどくはしやぎ出した。A子に話しかけなけや、私に話しかけるし、でなければひとりで

「こ、ひ、の、ために、身は、と、ら、はれ……」

といふ節を口笛で繰返し繰返し吹いてゐる――

「かの、手を、と、る、のは、いつの日、いつの日」

「フ、フフ。何度おそへてあげてもあなたのは出鱈目ね。およしなさいよ、見つともない」

Dは A子にそんなことを言はれてゐる。

……それにしても私は、この男のやうにアマイ男ではなかつたらう——そんなことを思ひつゞけながら私はもうこの連中と歩くのはいやになつてゐた。電車線路に出てから私は言つた——

「D君。僕はもう歸るよ……」

「どうしてゞす？　せつかく僕たちをさそひ出して」

「××さん。もう少しいらつしやいよ。まだ七時半ぢやありませんか」

A子の言葉につゞけてDが言つた「別に用事ぢやないでせう？　もう少しつき合つて下さい——お金さへあれやどこかで御馳走するのだのにね、A子」

「あなたがみんな」とA子が言つた「みんな無駄費ひしてしまつたのです」

A子には答へないでDが私に擦り倚つて來て耳うちをする「ねえ、××さん。もう少し一緒に歩いてください。今ふたりきりになればまた喧嘩になります。——やつと直りかゝつたところなのですから」

私はさういふのをふりすてゝ歸るわけにも行かなかつたからやつぱり一緒について行つた。

A子は物好きに上野の石段を登り出した。Dがそのあとへついて行く。私も登つた—その石段を踏みのぼりながら私はさつきからの思ひ出をつゞけながら、ふと自分の心のなかで大變不愉快な一人物に出會つた。その一瞬に今まではたゞゝらけて重く曇つてゐた私の氣持が不意に開展した。——思ひがけない稻妻である——

『私の心持を突然そんなに嚴肅なものにしたその男Eといふのは或る新聞社の美術記者であつた。彼自身もきつと繪な

り彫刻なりの才能は持つてゐたのであらうけれどもその才能はまだ少しも示してはゐなかつたのに、たゞ彼が美術記者であるといふ事實でその道の大家と逢つてゐるうちにいつの間にか彼自身もやはり大家と同じやうな權威を具へて來た男であつた。私は無論そんな大家ではないから彼に逢つたことはそれまでに二三度しかなかつた。私の以前の妻F子がその男のことを私にたづねた時にも私はたゞ以上のやうに答へたゞけであつた。

私はさつき或る先輩の夫人が死んだのでその見舞のかへり道にF子とふたりで大學の構內を拔けたことがあると言つたが、その先輩の家のお通夜でF子はEに逢つたのださうである。私もその葬式や何かで偶然重ね重ねEには逢つた。けれどもそのために格別親しくなつた覺えはなかつた。

私たちがたうとう離別するやうになつたのはその葬式のすぐ後であつたが、私は或る日の三時ごろに電話を受けた。私は電話といふものは大きらひだし誰からも電話がかゝつてくる筈はないのである。若しかすると或はE子が殘夢だか殘務だか、急に思ひ出したことでもあつたのかも知れないと思ひながら私は電話口へ出た。親しげに向ふは口を利くが全く馴染のない聲であつた。男の聲である。しやがれたやうな聲である――私は向ふの名告るのを聞いて始めてそれがEの聲であつたことに氣がついた。それにしてEの電話は私には妙であつた――彼が言ふのは

「君が細君と別れるとか別れたとかいふ噂を聞いたがそれは本當か」

とそんなことなのである。私にはEのつもりがわからなかつた――無論彼から離婚を考へ直したらどうかと忠告されるほどの親友ではなし、それどころかそんな噂でわざ〳〵見舞の電話さへもをかしいのである。私は電話で言つた――

「それがどうしたのです」

「いや、何でもないのだけれどたゞ事實かどうかと思つてね」

「はあツ……お見舞は有難う」私は我知らずとぼけた氣持になつてともかくもそんなことを答へて電話をきつた。私はそんな電話をかけてよこした男が新聞記者であるだけにひよつとして何かそんな職業上の用事であつたかも知れないとも思つて見たが、しかし私のやうな一書學生の夫婦別れが何の新聞記事にならうとも思へない。私はEといふ人をへんな男だと思つた。さう思つてゐる最中にその當のEが電話があつてから一時間とは經たないのに何を思つてかひよつくり私のところに顏を出したのである――

「電話ではどうもよくわからなかつたからな。遊びに來て見たのさ」とさういふのであつた。無論、Eは今までに私のところなどへ足を踏み入れたことは一度もなかつた。

その座には外にも私の友達があつて私はその友達と一緒にちよつとした用事で或る先輩を訪問しなければならないところであつた。私も私の友達もその先輩とは初對面ではあるし、Eはそんな先輩などは呼び捨てにして噂をするほど親しいらしかつたから、私はEにその先輩のところへ一緒に行つてくれるやうに賴んでみた。Eは今日はあの邊は路がわるいからとか、あの男の顏を見ても別に面白くもなしさとか、そんなことを言つてそのまま歸つて行つたが、ずつと後日になつて私が想像するのに、Eは私たちが夫婦別れをしたところを見とどけてその足で、F子の樂屋――言ひ忘れてゐたがF子は淺草のオペラ女優であつたから、その樂屋へでも行つたのかも知れない。

それから一ケ月程の後に私がEに出逢つた時にはEはF子のことなどは何も言はなかつたが最後に一言だけ言つた――

「どうだね、前の細君には逢ふかね」

「いいや。用もないもの」

「今どこにゐるの」

「さう、深川の方へどこか部屋を借りると言つてゐたつけが、どこだか知らないよ」

「はあ、さうか」

私は正直に答へたが、やはり後で思ひ合すと、私をためして見てゐたのだらう。——といふのは、私はその後人からEがF子の旅興行のさきまで逢ひに行つて來てのろけを言つてゐるといふ噂を聞いたからである。私にとつてF子はどうせ別れたほどの女である。F子が何をしようと、F子に就てどんな噂があらうと、私は無關心であつた——正直に言ふが私は、その後六七度もF子が思ひ出したやうに呼び出しの手紙などをよこした時には、初めの二度だけはそれに應じて出て行つて見たけれども、私にはうるさく困つた事であつた。私は全然無關心になつて、時折にはこんなふうでも不人情ではないのか知ら？ われながらさう思ふことさへある程であつた。それだのに、さうしてそれはもう私たちが別れてから二年以上も經つてから私の耳に這入つた噂であつたのにEのことを聞いた時に、私は女を憫れむ氣持と一緒にEといふ男を「見下げ果てた」といふ言葉で思ひ出した。

Eのやり方のどこに道德的な批難があると私は言ふのではない。いや、私はどちらかといふと道德などといふものは知らない方の側だ。不幸なわれわれ人間の情熱の導くところ所謂道德から外れた行爲がわれわれには實に屢々あることを私は認める。さうして私はそれをわれわれ凡人の受難だと思つてゐるくらゐである。さうしてそんな場合、道德を盾にして第一の石を投げる人を見るとその彼等に、私はかへつて憤を感ずることがよくある——そんな時に、何ごとも聞かぬふりをして沙の上に文字を書いてゐたといふ人を私はえらいと思つてゐる。私がEを「見下げはてた」と思ふのはこれとは全く反對である。私はそれに就て所謂不道德でないところに寧ろ醜惡さを感じたのである。私はEのことを虛心で言つてゐるつもりだが、君がそれ以上に氣をまわすやうなら何とも仕方がないが、私といふ男は、友達の女房をつれ

て出奔する男を見るより、友達のもとの妻が藝者に出たのを買つた男の方をもつと怪しからぬやうな氣がする人間だ。──さう聞いて君がすぐに僕の感じ方に同感してくれるか知ら。私はかういふ點で私と同感でない人間が世の中に多いやうな氣がして腹立しいよ。私は世俗の道德といふものが不幸な人たちにとつては實に苛酷なくせに或る一面ではあまりに寛大な氣がしてならないことが時々ある。だから私は道德などといふものを無視してゐるのだが──道德論はまた今度の時にするとして、話のつづきだが、私はEといふ人物のことをそのやうに思ひ出すと、あの日の電話のしやがれた聲がまだ耳の底でひびくやうな氣がして、突然、私は今夜の自分──D夫婦とかうして一緒に歩いてゐる自分にハツと氣がついて、それが私には稲妻であつた──

「ハ！私は愕いて自分自身に言つた　かうしてうつかりしてゐるとおれもEになる　Eになるまい！　Eになるまい！」

『Dは私がそんなことを考へてゐようとは知る筈もないからひとりではしやぎかへつてゐた。さうしてこんなことを言つてゐる──

「ねえ、A子。一ぺんみんなでお花見をしようよ。自動車は俗だから、馬車がいい。ねえ、××さん。馬車の方がずつといゝでせう。それでこの三人で──私とA子とあなたと、然うだそれからBさんも仲間へ這入つて貰はう。一日中、その馬車で賑やかなところを通るのです。今年はもうおそくなつたから來年の春ね。けれども來年の春になつたらこの三人がみんなかうして東京にゐるかどうかはわからないな」

それには答へないでA子は私に言つた「Cさんはもうアメリカへ着いたころですわね」

「さうですね」私はさう答へたきりあの送別會のかへり路のことなど話題はあつたけれども話しつづけやうともしなか

つた。

三人は竹の臺の方へぶらぶらと歩いて居た。花の季節ではあつたが、その日は朝のうちから三時ごろまで雨であつたせいか、その邊は季節に似合はずひつそりとしてゐた。私は氣が重くなつて、その上に「Eになるまい！」といふ一言のために立場が妙に窮屈になつて默つて歩いてゐた。

「××さん」A子は言つた「おくたびれだのに御迷惑ですわね」

「本當に默つてしまつたのですね。何か面白い話をして下さい」

「うちに女房が待つてゐると思ふと」と私はわざといい加減なことを言つた「早くかへりたくなつたのでね」

A子が月をほめた。ほんとうにいゝ朧月夜ではあつた。Dが月の上をさへぎつて過ぎて行く薄絹のやうな雲をほめた。そこで私たちは自然と花や月のことを話し出した――三人は三人でそれぞれに沈默が怖ろしかつたからである。さういふ氣持だから折角の話もはづまう筈もなかつた。かうなつては三人とも、仕方なしに話し仕方なしに歩きつづけてゐる狀態であつた。公園のなかの廣い路を通る時であつた。路ばたにあつた自動體量計を見つけたDは言つた――

「どれどれ。一つ目方をかけてやらう――隨分痩せた筈だからなあ」

さう言ひながらDはその臺の上へ乘つたままポケットのなかから銅貨をさぐり出した。私はちようど新らしい烟草を口にくわへてマッチを用意してゐるときであつた。私はそのマッチの燃えさしを體量計の針のあるところへ持つて行つて覗いて見た。

「駄目だよ　針は動きやしない。この機械は壞れてゐるのだ」私は言つた。

「まあ、××さんの横顏は………」とマッチが消えて行つた時にA子が言つた「まるで△△に出る□□□□の大映しに

「そつくりよ」

△△や□□といふのは活動寫眞の題とそれへ出る役者との名であらうが、私は聞き覺えもしなかつた。私はただその路の樹立の茂みの間から、あのころF子と私との居たあの下宿のあたりが見えるのを知りながら、F子やE子やそのころのことをさしたるペーソスなしに思ひ浮べた。それから今の妻であるG子や、そのヒステリイや、ヒステリイの原因や…………

「あら！ つめたい！ ——襟首へ樹のしづくが落ちたのですもの」

A子がそんなことを言つた。

『廣小路まで來て私はもう電車へ乘ると言つた。もう少しだから一さう本郷三丁目まで歩かうとDは言つた。でも私は乘るといふとDたちもその少しの間をやはり電車でかへつた。三丁目へ來て、彼等はそこで乘り捨てるために、私は乘り換へるために、三人一緒に下りたが、私と別れて歸つて行くDを見送つてゐた時に私は彼を呼びとめた。Dは電車線路を横切つて私のところへ來た。A子は線路の向側から私たちを見てゐる。私はそばへ來たDに言つた。思ひ切つて言つた——

「君が女にアマ過ぎるのだ。それがよくないのだ。冗談にする夫婦喧嘩なら道樂もいいかげんにし給へ。でなけりやもつと愼重の態度で、さ」それは私が今までに人に忠告といふものをした唯一のものであつたが、私は急に氣恥しくなつて玉突場で流行つたことのある下手な語呂を思ひついてつけ加へた「ね、何ごとももつと眞鍮のパイプで。ハ、ハ、ハハ、」

Dは何か言ひたささうな顏つきであつたが私は言つた——

「さよなら」

『その後、正直に言ふが、私はもう一度D夫婦のゐる家の下まで行つたことがある。といふのは、あの時のDたちの夫婦喧嘩はどうやら實際に底力のあるもののやうな氣がしたから、その成り行きがちよつと氣になつたのである。けれども私はその家の前まで行つて自分で自分自身に問ふて見た——本當に心配してゐるのだらうか。それともただの物好きだらうか。それとももつと何か考へがあるのではないか——A子にほんのちよつとした興味でも持つてゐるのじやないか。

「Eにはなるまい！」

私はそのまゝ彼等の家の前を通りすぎた。事實、親切からともただ物奇きで成り行きが知りたいのだとも、言ひ切つてしまふだけの自信が私になかつたからである。

『その後、一月半ほど經つた或る晩夜更けて家の者が皆寢てゐて私だけが未だ起きてゐる時刻に、突然、表の戸を敲くものがあつた。私は二階の窓から顏を出して見るとそれは車から下りた女で、A子の聲であつた。そんな夜中に私のところをたづねて來たA子を不審に思ひながらも私は下りて行つた。

A子が言ふには、今夜いよいよDと別れることになつてあの宿は引き上げて、A子自身は神戸へ歸るつもりで、Dに送られて停車場へ行つた。終列車は十分ほどのことで乘り遲れた。もう一度あの宿屋へ歸るわけにもゆかないし、Dは

友達の部屋で泊るけれども、そこはA子まで泊れるところではない。それなら宿屋へ泊るとA子が言つたけれどもDはいけないと言つた。最後にDは私のところならばいいから行つて賴めと言つたからこんな夜中ではあつたが來たといふのであつた。その上によく聞くと、朝になればD自身もここへA子を迎へに來るのだとも言つた。私はそこでA子をとめることにした。

翌日は、Dが本當にA子を迎へに來た。Dは私がいつかあんな忠告めいたことを言つたりしたので、青年だけに單純に私を信頼出來る人のやうに思ひ込んでゐるらしい口調なのが、私には一さう身が竦みられる氣持であつた。

夜中に美しい女が突然たづねて來たといふことが私の妻のヒステリイを一さう高じさせて……いや、こんなことまで言つてゐては、この話はどこまでひろがるやらわからないから止さう。その外にさまざまな事件がこの前後にごたごたと起つてきて、それが皆、私のこころのなかでは錯雜して唐草模樣のやうにつながつてゐる。それらのすべてはいづれ出直して聞いてもらふことにして――實際は、このA子の話はもう今は言はない話のなかのエピソードなのだが。そのエピソードだけまづ聞いて貰ふのだ。で、この話のあとがもうほんの少しある。――

『その後、二年も經つてから――その二年の間に私は第二番目の妻とも別れたし、その時には全くの獨身であつたが、私は不意にA子から手紙を貰つた。A子はDともその外の人とも別れてやはり獨身であつた。A子は四五へんも私のところへ遊びに來てくれた。

A子は私のモデルになつてやると言つた。

私はA子の顏は描いたけれども Nude は描かなかつた。畫家が裸體を描くのは何でもない事だのに、私にはそれを

帰る心持があつた。――「Eにはなるまい！」

『やはりそのころの或る時。

A子は私の時計の鎖にさげてあるものを見てそれは何だとたづねた。それは locket ― 小さな寫眞入れだけれども今はからつぽだと私は言つた。

「私のを上げませうか？」とA子は冗談らしく言つた。

「有難う。貰ふのもいいが、私は氣まぐれだからせつかく貰つて見てもすぐ無くするからね」私はさう答へた。

『やはりその前後の或る時。

A子は何を思つたのか私にこんなことを言つた――「わたしね、或るひとに、女の人よ、あなたのところへ遊びに行くつて話をしたのよ。さうしたら、その人が言ふには、あなたの事を――惱つちやいやですよ――あの人は危險な人ぢやないの？ってさう言ふのですよ。」

私には何とも答へられなかつた。

A子は言ひそへた ―「あなたがあんまり女に親切過ぎるからでせう」

私には猶のこと何とも答へられなかつた。

『何？ 私が女に好かれた話で珍らしかつたつて？ 冗談を言つてからかつてはいけないよ。からかふなら―そう、私

がそんな女ときれいにつき合つたのは珍らしいと言ひ給へ――これや、僕が不愉快な思ひ出をつくりさうになるところを危く踏みとどまつた話のつもりであつたのだからね。』

××××君のその夜の話はそれだけであつた。



職務

久米正雄

工兵中尉ミハイル・ブハーニンは、今日も軍務省の屋根裏なる、秘密の狭い電信室に居て、毎もの通り脂の濃い巻煙草を口に銜へながら、電信機を前に腰かけてゐた。そして先程から、殆んど五六分間毎に、冬宮から掛つて来る電話を聞いては、その情報を戦線へ送るのに忙殺されてゐた。

十一月七日午後三時、彼の居る屋根部屋の密室を除いて、下の軍務省の全部は、完全にボルシエヴイキの占領する所となつてゐた。彼はもうずつと以前、明り取りの狭く厚い窓越しに、戸外に起つた四五度の喊聲と、七八度緩急に斷續する銃聲を聞いた。そしてやがて自分の居る下の部屋〳〵に、人々の雜めきながら入れ交る、陰欝な足音の騒擾を聞いた。

「はゝア、では愈々階下の軍務省も、トロツキーの奴の支配下に属する事になつたかな。思ひの外に早く、脆いものだつたな。階下の奴等も腑甲斐ない。もちつとは持ち堪へてもよささうなものだのに。——だが、そんな事は俺の知つた事ぢやな

い。俺はたゞ此の電信室に居て、委ねられた通信の任務を完全に果せば、それでいゝのだから。……俺はケレンスキー假政府から命令され、信任されて此の役目に服してゐる。そしてその信任を受けてゐる以上、任務だけはちやんと果さなければならない。」

　彼は階下の物音に聞入りながら、又新らしい卷煙草に火を點じて、深くそれを吸ひ入れた。そして不安の中にも、一種言ふべからざる滿足の念を胸に湧き立たせた。

「なアに此の屋根部屋だけは、いくら民衆の心理を察するに巧妙な少數派の智惠者だつて、フリーストにかけて氣が附くまい。軍務省をすつかり占領して了つた氣でゐても、俺とそして俺の居る此の部屋だけは、決して占領されはしないぞ。俺の職務だけは決して妨害させはしない。――第一あの物置の中の横手の隅から、そつと隱し扉を開けて、上つて來るやうになつてゐるあの狹い階子段なぞは、騷々しく驅け廻つてゐる彼等に、到底見附かりつこはないからな。況んや此處と冬宮とをつないでゐる電話線や、戰線へ通じてゐる電信線なぞが彼らに解つて堪るものか。……俺は今完全に彼等の重圍の中に居ながら、完全に彼等と對抗して、自分の職務を遂行してゐる。一人で、完全に彼等から一指も差されはしないで。……」

　電話の布を卷き附けた鈴が、他人には氣付かれぬ位、コト／＼と壁蝨でも走るやうに鳴つた。中尉は別に慌てもせず併し又時宜を失しもせず、受話器を耳に當てた。

「……プハーリン君かね。」

　ケレンスキーの秘書の、クルビンスキーに違ひない、少し女性的な鼻聲が、思ひの外に間近く聞えた。

「……うむ。さうですよ。」

「……そつちの樣子はどうだね。君はまだ大丈夫かね。」

「……閣下はすつかり占領されたやうですが、私は大丈夫です。貴方の方が大丈夫な限り、私の方は大丈夫です。」

「……さうかね。此方はまだ、閣議がまだ長びいて困つてゐる。そして革命軍はもう宮門の外廓まで押寄せてゐるよ。此方だつてさう容易くは落ちまいが、兎に角危險は目睫の間に迫つてゐる。——兎も角もう一度、戰線のボトコフ將軍の所へ、一刻も早く歸つて來るやうに、追ひかけて電報を打つて呉れ給へ。」

「……宜しい。文面は？」

「文面？文面なんて、君のいゝやうに、其旨を打電して呉れゝばいゝんだよ。」

クルピンスキーは、毎もに似合はず、慌てゝ居る事は確かだつた。

「……それは不可ないよ。僕にはそんな事は出來ない。そしてする權利もない。僕はたゞ、君の方からの命令に依つて、命ぜられた文面を、電信で打つだけの役目を勤めて居るんだから。」

「……今の場合、そんな事を云つたつて仕方がない。急ぐから、一ついゝやうに打つて呉れ給へ。」

「……いや、いけない。僕には出來ない。文面を云つて下さい。」

中尉は明に得意だつた。彼は自分一人で、革命軍に對抗してゐると同時に、自分一人で、假政府の鎖鑰を握つてゐるやうな氣がした。

「……ちやア仕方がない。僕の方で今拵へて云はう。——」

クルピンスキーの方では、少し腹立たしい聲だつたが、併し即刻電報の文句を、作製して云つた。そして彼はわざと冷靜に、其文句の後で念を押した。

「……いゝかね。分つたかね。」

「……宜しい。分りました。間違ひはありません。では確に打電します。」

やがて中尉の敏捷な、そして彈力ありげな指は、流れるやうに打電器の柄を叩き出した。……其顏は嚴肅に、引緊つてはゐたが、眉の間には押へ切れぬ、一種の滿足の紅潮が浮んでゐた。

かうして彼は、それから冬宮が陷るまで、幾度となく完全に、誰からも妨害される事なく、假政府と戰線との連絡をすつかり自分一人で取つてゐた。

夕方、遂に冬宮も陷つて了つた。中尉は其最後の報知を、矢張り秘書から、電話で聞き取つた時、假政府の爲に嘆きたいやうな氣も、又口惜しいと云ふ氣も起らなかつた。たゞ彼は、愈々自分の任ぜられた職務が終つた事と、それを最後まで遂行し得た事とで、すつかり滿足してゐた。そして誰にも云へないやうな、胸の底に疼くやうな、一種の快感を禁ずる事が出來なかつた。

彼はそれぞれ、打電すべき所へ最後の打電をし終ると、新らしい卷煙草に火をつけて、毎もよりも悠然と、自分の椅子から立上つた。そして何の躊躇もなく、平氣で狹い階段を下りて行つた。それから隱し扉の前で、毎ものやうに鳥渡外の氣配を窺つた後、素早く戶を開いて、廊下へ出た。それは政府の轉覆した今と前とに係らず、誰にも氣付かれはしなかつた。

戶外は薄暮だつた。何となく不安な、さわめきを持つた薄暮だつた。そして軍務省の內外には、今日占領したばかりの勞農兵が、まだ仕事らしい仕事に手を着ける間もなく、たゞうろ〳〵と屯してゐるきりだつた。

中尉は悠然と帽子を被り直し、それらの人々の中を、味方としか思はれない落着きを以て、濶歩して出て行つた。省

門を守つてゐる衛兵は、彼を見ると慌てゝ、併し親しげに銃を捧げた。彼は満足して、そのタワリーシチに擧手で挨拶すると、飽くまで悠々として、軍務省の門を出て行つて了つた。

暫らく歩み去つたところで、彼は立停つて、軍務省を見返りながら、微笑を含んで自分に呟いた。

「……右すべきか左すべきか、俺は知らない。が、兎も角も俺は、任された職務を、完全に遣り遂げた事に、満腔の満足を持つてゐる。そして其點で、あのウリヤノフと取組んで、最後まで敗けなかつたのは、恐らく世界中で俺一人だらう。……」



戯曲

同志の人々

―二幕―

山本有三

人物

橋口吉之丞　寺田屋騒動に荷擔した薩藩の士。
谷元兵右衛門　同
林庄之進　同
有馬休八　同
堤小兵衛　同
是川大介　同
吉田清左衛門　同
永山彌一郎　同
田中河内介　同、中山大納言の家臣。
其息磋磨介　同
見張の役人。

時代

文久二年五月一日。夕刻より夜にかけて

場所

船の中。

第一幕

大きな和船の艫の間。

右側は艫の戸立、左側は隔の壁板で仕切られてゐる。壁板には出入の引戸がついてゐるが、外から堅く錠がおろされてゐる。

正面は艫の船板。その上部に四角い小窓が二つほど開いてゐて、そこから夕日があか〳〵と差込んでゐる。部屋の中に太い柱が一二本。凡てが古びた感じ。

有馬は立つて小窓から外を眺めてゐる。橋口は腕をまくし上げて谷元に傷を巻きかへて貰つてゐる。堤は無聊さうに柱にもたれかゝつてをり、林は書きものを、永山は黙然と端坐してゐる。是川は入口から遠い、隅の方の柱の蔭に腹匍ひになりながら、金物のやうな堅いもので頻に床板を叩いてゐる。そしてまた床に耳を押し當ては、何かを聴き取らうとしてゐる。その近くに吉田がゐる。

年齢は二十三四歳前後の者が多い。年長者の永山にしても三十歳は越してゐない。髮は皆薩摩風の小髷に結んでゐる。但し何れも無刀。

谷元。（橋口の腕の晒を解き終へると、窓のところに立つてゐる有馬に）おい、有馬。

有馬。（振りかへり）何だ。

谷元。少し寄つてくれ。蔭になるから。

有馬無言のまゝ少し寄る。

谷元。（傷口を見ながら）大分肉が上つて來たな。

橋口。（自分も見ながら）うム、お蔭で大變よくなつた。

谷元。併しまだ痛むだらう。

橋口。いや、もう大したことはない。今日は八日目だからな。

谷元。もうさうなるかな。あゝ、あの晩のことを思ふとむしやくしやする。

永山。おい、その話は止せ。もう過ぎたことだ。

谷元話を止めて繃帶をしかへてやる。

吉田。（床に耳を押しつけてゐる是川に）どうだ。何か聞えるか。

是川。駄目だ。

吉田。波が高いせいかな。

足川。　これだけやつて居るのだから通じない筈はないのだがな。（またこつ〳〵と床板を叩く）

谷元。　（欄を卷きながら）少しさついか。

橋口。　いや、丁度いゝ。

谷元。　さうか。――さ、これでいゝ。

橋口。　有難う。

谷元。　（有馬に）おい、まだ小豆島は見えてゐるか。

有馬。　うム、見えてゐる。併しもう大分うしろの方になつてしまつた

谷元。　間もなく周防灘にかゝるのだな。

橋口。　（獨ごとのやうに）あゝ、あと幾日かな。

堤。　（あくびをし乍ら）何處へ。鹿兒島までか。

橋口。　うム。

堤。　汝は馬鹿だな。國へ歸れると思つてゐるのか。

橋口。　己達は歸りたくなくつても、送り返されるのだから仕方がないさ。

堤。　だからおめでたいといふのだ。汝は自分の行く先を知らないのか。

橋口。　何をいつてゐるのだ。此船は眞直に薩摩へ行くのではないか。

堤。　おい、國のことを考へるよりも、まあ、辭世の句でも考へておけ。

橋口。　餘計なお世話だ。辭世なんか寺田屋へ集る前にちやんと書いておいた。

堤。ふん。寺田屋か。馬鹿〳〵しい。

橋口。何が馬鹿〳〵しいのだ。

堤。汝はあれを馬鹿〳〵しいとは思はないのか。

橋口。おい、堤。汝は眞面目でいつてゐるのか。あれは己達が生命がけでやつた仕事ではないか。

堤。だから一層馬鹿らしいといふのだ。己達はあんなに意氣込んでゐたのに、その結果は何だ。こんな風に押し込められてしまつただけではないか。

橋口。己は今のことをいつてゐるのではない。あれを企てた精神をいつてゐるのだ。

堤。駄目だ〳〵。そんなものが何になる。己達は勤王だの、討幕だのと大きなことをいつてゐたつて、一體何をやつたのだ。何一つ仕出かしてゐないではないか。成程われ〳〵は此間、幕府と内通してゐる九條關白を夜討するといつて伏見の寺田屋に集つた。併し門口から一歩も踏み出さない内に、藩から取り鎭めに來た者のために、みんな叩き伏せられてしまつたではないか。

橋口。あれは叩き伏せられたのではない。君命だといふから一時を忍んだまでだ。取り鎭めに來たのは高が八九人の小人數だから、斬り捨てゝ通るのは容易のことだが、奴等も『頼む、頼む。』と哀願するし、殊には殿樣にご憂慮をおかけ申してはと思つたから、一先づ思ひ止つただけではないか。

堤。貴樣はあの時鎭撫使と斬合をやつて手痛い傷まで受けて居るのに、まだ目が醒めないのか。己達はこんなに幽閉されてしまつたのに、まだそんななまぬるいことをいつてゐるのか。

橋口。なに。

谷元。しつ。

外で重たい錠を開ける音がする。人々は默つてしまう。是川も床を叩くことをぴたりと止める。

やがて見張の役人が這入つて來る。

役人。永山彌一郎は居るか。

永山。(昂然と) 居る。

役人。お目附からお呼び出しだ。

永山。目附? よし。(心に決するところあるものゝ如く出て行く)

役人去る。續いて錠の締る音。間。

有馬。(不安さうに) 何で呼び出されたのかしら。

堤。大抵分つてゐるではないか。

有馬。分つてゐる——そんなことが、そんなことがあるものか。

橋口。永山どんが殺されるといふのか。馬鹿なことをいへ。

有馬。さうだとも。堤は先刻からいやにおぢけづいて居るのだ。

橋口。若し己達が殺されるものなら、かうして國許に護送される筈はない。京にゐた間にとうに斬られてゐる筈だ。

堤。お前等は何處まで人がいゝのだ。こんなに欺かれ、陥れられてゐても、それがみんなには分らないのか。何よりも此間の寺田屋のいきさつを考へて見るがいゝ。君命だと稱して己達を取り鎭めに來た使者たちは何といつた。『暫く待て。殿も同よりご同意のことであるから、一先づ邸へ歸つて殿にお目通をしてくれ。その上で打ち立たれて

も遅くはある い。さう繰返し〳〵賴んだではないか。相手は同藩の者であるし、殊に君命を帶びて來たのであるから、己達は心殘がしたけれど一擧を中止して、錦小路のお邸へついて行つたのだ。ところがどうだ。邸内に這入るや否や、殿にお目通を許されるどころか、直に座敷へ押し込められてしまつたではないか。それから四五日押問答をした擧句が、謹愼のまゝ國許へ護送だ。凡てがかういふ遣り口ではないか。それ故今度國許へ護送だなぞといつても、何處へ護送されるのか分るものか。

谷口。いや、それは考へ過しだ。

堤。そんなことはない。藩の重役どもは事々に幕府を恐れてゐるのだ。だから己達をこんな風に扱ふのではないか。何でこのまゝにしておくものか。

谷口。それなら先刻橋口がいつた通りとうに錦邸で斬られてゐる筈だ。當藩は先君以來勤王のお家柄だから、われ〳〵の義擧に關しては必ず御憐察があるに相違ない。

堤。まあ、おめでたい夢を見てゐるが、いゝ。（是川が床板を叩いてゐるのを見て）うるさいな。いつまでそんなことをやつてゐるのだ。

是川。無言のまゝ首を上げる）

堤。止さないか。見張の者にでも見つかると厄介だぞ。

是川。大丈夫だ。分らないやうにやつてゐるから。

堤。いくらそんなことをやつたところが下に通じるものか。

是川。どうして。

堤。　田中どんは船底にはゐやしない。

是川。　いや、そんな筈はない。河口で乘船するとき、河内介どんと瑳磨介どんが、この下の部屋に入れられるのを己は確に見たのだ。

堤　その時はどうあらうとも、もう居やしない。

是川。　汝は何でそんなことを言ひ張るのだ。

堤。　田中どんはわれわれの同志だから、護送をするなら、この部屋に入れるのが當然だ。それをわざ〱船底の別な部屋に押込めたといふのは、はじめから底意があるからではないか。それが汝には讀めないのか。

是川。　いや、それは思ひ違ひだ　田中どんは己達と違つて中山大納言殿のご家來だから、別の部屋に入れられるのに不思議はない。

堤。　ところが今はその主にさへ見離された身體ではないか。

是川。　いや、見離されたのではない。主人はお公卿だから、幕府を憚つて引き取られないだけのことだ。併し幸に當藩で御庇護あつて、己達と一しよに薩摩へ護送されるからは……。

堤。　おい、是川。己達すら今は風前の燈火ではないか。他家の家來、まして主に離れた者が何で安穩の筈がある。

吉田。　本當にもうやられたのかしら。

堤。　うム、とうにやられてゐるとも。

是川。　いや、そんなことはない。……そんなことがあつてたまるものか、

堤。　いや、この推量に誤はない。何なら己は賭をしてもいゝ。

橋口、堤。何をいふのだ。人の患に賭をするといふことがあるか。
是川。汝は一體田中どんに怨みでもあるのか。何故先刻からそんなことばかりいつて居るのだ。
堤。いや、意趣も遺恨もない。それどころか實に落着いた立派な仁だと思つてゐる。寺田屋のあの騷動の最中にも、河内介どのは悠々と軍扇を使つて、少しも動ずる景色が見えなかつた。己はそれを見てほと／＼感服してゐる。しかしどれ程の器量人でも、行きどころがないやうになつては……。
是川。もう止めてくれ、そんな話は。
堤。おい是川。他人の心配をするよりも、自分の始末をしてはどうだ。
是川。そんなことはとうにしてある。汝はまだ覺悟がついてゐないのか。
堤。それなら餘計なことはしないで、ぢつとしてゐたらよいではないか。
是川。汝こそ默つて居るがいゝ。
橋口。おい、そんなものゝ相手になるな。堤は先刻から嫌がらせばかりいつて居るのだから。
林。（筆を止めて）おい、殉難の『じゆん』はどうであつたかな。
有馬。殉難。かうだ。（指で書いて見せる。）
林。うム、さうだ。有難う。（また書きつゞける。）
谷元。何を書いてゐるのだ。
林。これか。この間の寺田屋の事件を記しておかうと思ふのだ。
堤。そんなものを書いたつて何になる。己達はみんな叩つ斬られるのだ。

林。だから書いておくのだ。死後己達の精神を傳へるものはこの外にはないではないか。

堤。汝もやはり甘いな。己達が殺された後で、そんなものを殘しておいてくれると思ふのか。

林。(相手にならないで、先を書きつゞける)

　　間。風の音。波の音。

吉田。(床板を叩いてゐる是川に) おい、矢張何にも聞えないか。

是川。(無言。たゞ叩いてゐる)

吉田。本當にやられてしまつたのかしら。

是川。(無言)

橋口。通じないのか。——おい、己に貸して見ろ。

是川。(元氣なく叩く物を捨てる)

　　橋口代つて床板を叩く。

　　間。

是川。永山どんはどうしたんだらう。大分長いな。

谷元。もう歸つて來さうなものだ。

有馬。さうだな。

堤。いや、今度は己達の番だ。

是川。おい、泣きごとは止めないか。

堤。　己は本當のことをいつただけだ。

是川。　何が本當のことがある。汝は生命が惜しいのでびく〳〵してゐるのではないか。

堤。　汝は生命が惜しくないのか。

是川。　なに。

堤。　まあ、お互に後生を願はうよ。

是川。　あゝ、こんな奴が仲間にゐたと思ふと…………同志の名折だ。

堤。　ふん、汝達はたゞ强がつてゐるのだ。

是川。　强がつてゐるとは何だ。

堤。　さうではないか。內心では心配でたまらないのだが、强いて空威張をして自分の弱さを隱さうとしてゐるのだ。

是川。　えゝ、いはしておけば。

堤。　さうでなければ、何故永山どんのことをそんなに心配するのだ。歸つて來ようと歸て來まいと平氣な答ではないか。

是川。　無禮なことをいふな。(急に堤を擲りつける)

堤。　何をするのだ。(擲り返さうとする)

有馬。　(堤を止める)　おい、止さないか。止さないか。

谷元。　(是川を止め乍ら)　おい、是川、是川。

是川。　離せ。こんな腰拔は成敗しないと。

堤。　腰拔とは何だ。

有馬。（堤を止めながら）おい、止さないかといふのに、お互に同志の者ではないか。
堤　もうかうなれば同志もくそもあるものか。
谷元。おい、何をいふのだ。是川も止さないか　内輪喧嘩なんか見つともないではないか。
強いて兩方を引き離す。
間。
吉田。（急にしく〳〵泣き出す）
有馬。どうしたのだ。
吉田。（泣き乍ら）いや、何でもない。何でもない。
有馬。おい、吉田、どうしたのだ
吉田。たゞ、今のを見てゐたら、急に涙が出て來たのだ。…………いや、もういゝ、もう直つた。
有馬。どうも寺田屋以來みんな氣が立つてゐて仕方がないた。
谷元。無理はないさ。企は失敗する、押し込めはくふ。そりや誰だつて……。
堤。おい、人の機嫌をとるやうなことは止めてくれ。
間。
小窓から波のしぶきが時々はいる。
谷元。大分しぶきが飛び込むな。
林。（昔き乍ら）いよ〳〵周防灘にかゝつたのだらう。波が高くなつて來た。

間。

橋口。（けたゝましく）是川。是川！

是川。何だ。

橋口。おい、聞える。

是川。聞える。本當か。（床に耳を押し當る）

橋口。（床を叩くと、自分もまた耳を押しつける）ほら。

是川。うム、聞える。聞える。――どれ、己に貸して見い。（叩いて耳を當てる）うム、確に聞える。――おい、みんな。田中どんは生きてゐる。下から合圖が聞える。

林。なに、田中どんが。

是川。（床に伏したまゝ、船底に向つて大聲で叫ぶ）おうい、田中どん！

谷元。しつ、そんな大きな聲を出す奴があるか。

是川。（心配さうに）見張に聞えたか。――まあ、谷元、ちよつと耳を當てゝ見ろ。本當に聞えるのだ。おい、みんなも聞かないか。

橋口。（伏せつたまゝ）おい、下でもどんどん叩いてゐるぞ。

是川。さうか。ぢやこつちでもどんどん叩いてやれ。

　谷元等二三の者も耳を床に當てる。

是川。聞えるだらう。

谷元。　うム。
是川。　あゝ、何だか胸がどき〳〵して來た。
橋口。　かうなるとこの位の合圖ではもの足りないな。
是川。　あゝ、ことに穴を剞り明けて、確磨介どんと話がして見たい。
谷元。　（起き上り）確に田中どんは存生だ。
是川。　おい堤。先刻の賭はどうした。
橋口。　はゝはゝ、これは一言もあるまい。
堤。　いや、糠悦といふこともある。
是川。　何をいふのだ。不吉なことをいふな。それ程疑はしくば床へ耳を當てゝ見るがいゝ。
その時突然外で重たい錠をはづす音がする。一同緊張する。
戸が開くと、永山が沈んだ顏をして這入つて來る。やがてまた戸が締まる。
是川。　どうだ。永山どんも歸つて來たではないか。
林。　その爭はもう止めないか。（永山に）實はみんなお前のことを心配してゐたのだ。
永山。　さうか。それはどうも……。
林。　で、何の用事だつたのだ。呼び出されたのは。
永山。　おい、車坐になつてくれないか。談合したいことがあるのだ。
一同車坐になる。

永山。　實は目附から難題を持ちかけられたのだ。それで今迄押問答をしてゐたのだが、どうにも自分だけではは
　からひかねたから、お前等の意見を聽きたいと思つて歸つて來たのだ。

有馬。　難題。それはどういふことなのだ。

堤。　今更改まつてきく程のことはない。きまつてゐるではないか。

橋口。　そんなにいひ澁ることはない。己達はみんな覺悟をしてゐるのだ。

永山。　いや、われ〳〵の身命にかゝはることではない。それどころか向後は却て寬大な取扱を受けることだらう。併
　しさうなるためには、己達はある非道なことを行はなければならないのだ。

有馬。　一體何をしろといふのだ。

永山。　この船底にゐる田中河内介殿父子を殺害しろといふのだ。

吉田。　なに、田中どんを。

永山。　さうだ。

是川。　（突然堤を睨みつけ）堤、それは何だ。

堤。　己は別に何もしやしない。

是川。　嘘をいへ。今「それ見ろ。」といはぬばかりの目附をしたではないか。貴樣は人の患を喜ぶのか。

永山。　おい、扣へないか。まだ話は濟まないのだ。

谷元。　で、どういふ訣で田中どんを殺せといふのだ。

永山。　それはいふまでもなく幕府を憚つてのことだ。寺田屋の一件以來、田中どんは身を寄せるところもない有樣で

あつたから、藩では行きがかり上ひとまづ田中どんを引き取つて、己達と共に薩摩へ送ることにした。これはお前達も知つてゐることだ。ところが主すら引き取らぬ反逆者を、殊更藩で庇護するといふことは、幕府に對して如何にも事を構へるやうに聞える。だからどうしても田中どんを國に匿ふ訣にはいかないといふのだ。そこで向ふに着かぬ内に是非とも己達に處分をしろとかういふのだ。

是川。そんな理不盡なことがあるものか。獵師すら窮鳥が懐に入れば射たぬといふではないか。一旦田中どんを匿つておき乍ら、途中から變替をするとは何事だ。それこそ薩藩の名折ではないか。

永山。いや、それは己もどの位いつたか分らない。併しどうしても受けつけられないのだ。

堤。さうだらう。それが分る位なら、公武合體なぞと煮え切らぬことは唱へない筈だ。藩の重役どもは何といつても江戸が恐いのだから、田中どん父子は見殺しにしても、幕府の機嫌を損ねないのが大切なのだらう。

永山。さうだ。何處までもさういふ態度なのだから己は實に困つてしまつたのだ。

吉田。さうでなければ己達もこんな風にはなりやしなかつたのだ。

柴口。いや、今は愚痴をいつて居る場合ではない。――永山どん、何故同志であるわれ〳〵に殊更田中どんを殺せといふのだ。己にはそれが呑み込めない。

永山。それはかうだ。表向藩で手を下せば、田中どんの主である中山家に義理が立たぬ。さうかといつていつまでもこのまゝにしておいては幕府の怨を買ふ。そこで同志の間に仲間割が起つて殺された體にすれば、藩としてはどちらに對しても不義理にならないで濟む。それ故是非とも己達の手でやつてくれとかういふのだ。それからなほ目附のいふのには、若し己達が此役目を果せば、自然幕府への義理合もよいから、歸國の上は寛やかな取扱をするといふ話だ

つた。

有馬。寛やかな取扱とは。

永山。歸國の上は二三ケ月の輕い謹愼で濟ませるといふのだ。

堤。そんな話は當になるものか。

谷元。いや、それは差し迫つた問題ではない。それよりも己達はこれを引き受けるか、引き受けないか、それが何よりも肝要なことだ。

橋口。さうだ。それをきめるのが眞つ先のことだ。

谷元。ところで若し己達が此役目を拒んだらどういふことになるのだ。

有馬。それこそ重く罰せられるだらう。

谷元。いや、己達のことは措いて、田中どんの身體はどうなるであらうといふのだ。

堤。己達が引き受けなければ、それは役人どもが殺すまでだ。そして兔向はどこまでも己達の仕業にされるだらう。

永山。さうだ。恐らくさういふことになるだらう。

吉田。では、田中どんはどちらにしても……

永山。さうだ。

林。それならもう談合するせきはないではないか。

是川。ないとは。

林。氣の毒ながら田中どんに犧牲になつて貰ふより外はない。

是川。では、田中どんを殺さうといふのか。
林。どちらにしても助からぬ人なのだから、止むを得ないではないか。
是川。いや、己は不同意だ。同志の者を殺して自分たちの罪を輕くして貰はうなぞとは人非人の仕業だ。己にはそんな得手勝手なことは出來ない。
林。いや、これは決して自分の利得のためではない。己達が再擧をはかる上には………
是川。再擧！こんな狀態で再擧なぞ許れるものか。
有馬。いや、謹愼さへ許れさへすれば己達はまたどんな働でもすることが出來る。やがては藩論を覆すことも出來よう。いや、是非とも天下を覆へさなければならないのだ。
是川。さうするためには猾吏田中どんのやうな謀士が必要ではないか。己達は身代に立つても是非田中どんは生かさなくつてはならない。
堤。己は身代に立つことなぞは迷惑だ。第一そんなことは申し出しても取り上げられる筈がない。
是川。汝は先刻から田中どんの死を祈るやうなことばつかりいつてゐたが、それでそんなことを唱へるのだな。
堤。己は小さな行きがかりでいつてゐるのではない。その證には外の者も皆同じ意見ではないか。
是川。おい、みんな。何故今度に限つて、こんなひねくれた奴と一しよになるのだ。何故田中どんを殺さうといふのだ。
橋口。是川どん、お前は田中どんとは別懇の間だから、不同意なのは無理はないが、併しかういふ事情であつて見ればもう仕方がないではないか。

是川。仕方がないとは何だ。おい橋口、己達は生死を誓つた同志ではないか。生きるときは一しよに生き、死ぬときは潔く一しよに死ぬのが道ではないか。

永山。では汝はどうしようといふのだ。

是川。田中どんのために死んでやるのだ。田中どんを救ふために根かぎり戦つて、力が盡きたらみんな一しよに死んでしまうのだ。

谷元。いや、それは暴論だ。そんなことをして役人を傷けたところが何になる。たゞ寺田屋の二の舞をやるだけではないか。それで田中どんが助かるのならいゝ。田中どんも死に、己達も死に、同藩の役人たちも死ぬだけではないか。

是川。汝達は今まで死を覺悟してゐたのではないか。それが二三ケ月の謹愼で濟むと聞いたら急に生命が惜しくなつたのだな。

林。おい、是川。何をいふのだ。われわれがかうした押し込めの恥辱を忍んで、今日まで切腹をしないで來たのは何のためだ。たゞ再擧を計りたいからばかりではないか。寺田屋でこそ失敗をしたけれど、この次には、この次こそ皇國を安ずる偉業を成就させなくつてはならないのではないか。われ／＼は大事を控へてゐる身體だ。大事の前には心を鬼にしなくつてはならない。そのためにはある時は同志をも、ある時は親友をもあやめる位の苦肉がなくつては、とても大業は出來やしないぞ。

是川。それが同志の者の意見か。それでも汝達は田中どんと同志だといふのか。あゝ、己と同じ意見の者はないのか。一人もないのか。（永山の方を向いて）永山どん、あんただけはそんなことはありャすまいな。

永山。（無言）

是川。何故默つてゐるのだ………あゝ、貴殿も矢張………

永山。外に思案はないではないか。己は目附から此話を聴かされた時旣にさう思つた。併し自分だけでは計らひかねたからみんなの意見を求めたのだ。ところが多數のものも同じ意見である以上、もう引き受けるより外はないではないか。

是川。（力なく座に突つ伏してしまう）

堤。併し己達が引き受けるとして、誰が一體その任に當るのだ。

永一。さうだ。それが一番難關だ。

谷元。敵を斬るのは何でもないが、同志を斬りに行くのはたまらないな。

橋口。それは誰にしてもいやなことだ。併し引き受けるときめた上はやらない訣にはいかない。どうだらう。誰かれといふより籤を引くことにしては。

有馬。成程。それがいゝだらう。

林。では己が籤を作らう。だが、何人行くことにするのだ。

橋口。相手は二人だから三人もあつたらいゝだらう。

林。よし、それでは長いのを三本作るからそれを引いた者は行くんだぞ。

林、紙を裂いて紙縒を作る。

間。船に當る波の音。風の響。

林。さあ、出來たから引いてくれ。

橋口。どうも籤を引くつて、いゝ氣持のものではないな。――えゝ、思ひ切つて。（籤を引く）助かつた。短い。

林。では、その次誰か。（籤を前に出す）

是川。（突然起き上つて籤をみんな奪つてしまう）えゝ、止めてくれ、こんなもの。

林。おい。何をするのだ。

堤。卑怯ではないか。汝は氣おくれがしたのか。

是川。いや、それは已が引き受ける。

吉田。汝と誰が。

是川。已ひとりでいゝ。

吉田。けれども……

是川。こんなことは誰にしたつて厭なことだ。だから已ひとりで澤山だ。

橋口。だが、汝は田中どんを斬ることについては今まで不同意を唱へてゐたのではないか。

是川。さうだ。

橋口。それだのに何故引き受けるのだ。

是川。どうしても助からないものなら、已が殺してやりたくなつたのだ。

谷元。併し汝は田中どんとは親しい間柄ではないか。

是川。うむ、それだから引き受けたいのだ。どうか已をやらせてくれ。已は二人を立派に死なせてやりたいのだ。

谷元。さうか。さういふ心なのか。

林。併しひとりで行くことは。
是川。いや、大丈夫だ。きつと己がやつて見せる。どうか己に任せてくれ。
橋口。どうだらう。では、是川に任せては。
堤。己に異存はない。外の者はどうだ。——
（見渡して）皆異存はないやうだ。
永山。それではこのことを目附に答へなくつてはならない。是川も同道してくれ。
是川。（無言のまゝうなづく）
永山。（戸のところへ行つて）お役人衆、ご面倒ながらお開け下さい。
外で錠を明ける音がする。その間是川はさつき合図を取り交はした床のところに立つたまゝ、ちつと下を見てゐる。
やがて戸が開いて二人の姿が外に消える。また錠を締める音。
小窓から差し込んでゐた光がもう薄れてゐる。
烈しい風の音。

幕

第二幕

同、船底の一室。

小さな、きたない部屋。天井に格子のはまつた、四角い穴がある外何處にも明いたところがない。そこが出入口で、そのすぐ下に粗末な梯子段がついてゐる。

第一場と同じ日の夜。部屋の中には乏しい明がともつてゐる。

外は風の音がすさまじい。

田中河内介とその子の瑳磨介とが默然として坐つてゐる。二人とも無刀。瑳磨介は床の上をぢつと凝視してゐる。しばらくそのまゝの狀態が續く。

河内介。　瑳磨介、

瑳磨介。　はい。

河内介。　何をそんなに見てをるのだ。

瑳磨介。　父上。驚きますな。

河内介。　どうしたのだ。

瑳磨介。　いや、あんな小さな身體をしながら、あんな大きなものを運んでゐますから。

河内介。　羽蟻を見てをるのか。

瑳磨介。　所在がないものですから、あれを何處へ運んで行くかと、先刻から見て居るのです。

河内介。　この船も餘程古いな、羽蟻が沸くやうでは。

瑳磨介。　どうせわれ〳〵を護送するやうな船ですから、新しい氣遣はありません。……併しよく疲れないものですな。あんなに休まずにやつてゐて。

河內介。　うム、實際根氣よく働いてゐる。

間。

二人ぢつと床の上の蟻を見てゐる。

瑳磨介。　父上。

河內介。　うム。

瑳磨介。　動いてゐるものを見ると羨しくなりますな。

河內介。（答へない。）

間。

河內介。　おゝ、また大分飛んで來た。

瑳磨介。（突然扇でばた〳〵と羽蟻を叩き殺す。）

河內介。　何をするのだ。止せ。取り謐せるものではない。それにこれはさう刺しはせぬから大丈夫だ。

瑳磨介。　いゝえ、刺すからではありません。癪にさはるから殺してゐるのです。

河內介。　何がそんなに癪にさはるのだ。

瑳磨介。　見てゐるうちに急に腹が立つて來たのです。

河內介。　はゝはゝ、蟲に腹を立てる奴があるか。

瑳磨介。 いゝえ、蟲でも何でも、かうして自由に飛んだり、歩いたりしてゐるのを見ると悄くなつてまゐります。

河内介。 所在がないとつまらぬことにまで腹を立てるな。

瑳磨介。 どうもこんな奴に目の前を飛んで歩かれると、面當をされてるやうな氣がしてたまりません。どうだ。大きな體はしてゐてもお前なぞは動けないのだらう。押し込めをくつてゐるのだらう。口惜しかつたらかうやつて飛んで見ろ、歩いて見ろと、寄つてたかつて……えゝ、畜生。（と、また叩く）

河内介。 蟲を嫉むやうになつては、われわれの境涯もおしまひではないか。

瑳磨介。 併し父上！

河内介。 いや、愚痴だ。愚痴だ。

間。

瑳磨介。 あゝ、かうしてゐると海の上を自由にかけ廻つてゐる、あの風が羨ましい。あゝ、自分もあゝいふ風に力強く駈け廻りたいな。

河内介。（ふと、聞き耳だてして）瑳磨介。

瑳磨介。 はい。

河内介。 大勢の足音がするやうだな。

瑳磨介。 こちらへですか。

河内介。 うム。

二人耳を澄ます。

瑳磨介。　いゝえ、何にも聞えやしません。

河内介。　さうかな。

瑳磨介。　今時分誰も來る筈はないではありませんか。

河内介。　聞き違ひかしら。

瑳磨介。　風の音でございませう。

河内介。　（ぢつと考へてゐる）

瑳磨介。　今夜はひどく吹きますな。嵐になりやしますまいか。

間。

瑳磨介突然立ち上つて梯子のところに行き、上をのぞく。それからまた靜かに元の坐にかへる。

河内介。　どうしたのだ。

瑳磨介。　いゝえ、何でもなかつたのです。たゞ鳥渡もの音が聞えたやうな氣がしたものですから。

河内介。　さうか。

間。

瑳磨介。　父上、もう何時でございませう。

河内介。　おほかた四つ近くであらう。

瑳磨介。　もうさうなりませうか。

間

河内介。　瑳磨介。

瑳磨介。　はい。

河内介。　これはかねて話しておいたことではあるが……

瑳磨介。（突然）お待ち下さい。父上。人影が！

天井の格子が明いて、上から人が下りて來る。瑳磨介きつとなる。下りて來たのは是川である。兩刀を帶してゐる。

是川。　瑳磨介どん。

瑳磨介。　おゝ貴殿か。誰かと思つた。——父上、是川氏でございました。

河内介。　おゝ、さうか。

是川。（河内介に一禮し乍ら）ご安否は氣づかつて居りましたが、何しろ今の身の上なので。…………

河内介。　いや、それはお互のことです。貴殿もご息災で何よりに存じます。同志の方々もご無事でせうな。

是川。　はい。みんな健固です。

瑳磨介。　是川氏、よく訪ねてくれた。——寺田屋以來だな。

是川。　うム始終別々に押し込められてゐたので、逢ふ折がなくつて殘念だつた。もつとも大阪で乘船の節、貴殿の後姿だけは見かけたのだが、場所が場所であつたから言葉をかけることが出來なかつた。

瑳磨介。　さうか。それは少しも知らなかつた。だが、貴殿は何處に入れられてゐるのだ。

是川。　この上の部屋だ。

瑳磨介。この上？　では、先刻貴殿はこの天井を叩きはしなかつたか。

是川。　おゝ、叩いた。貴殿達の安否が知りたかつたので……

瑳磨介。　さうか。矢張貴殿だつたのか。はじめは何だか分らなかつたが、餘り續けざまに音がするので、だん／＼不思議に思ひ出したのだ。それで何といふ訣なしにこちらからも叩き返へして見たのだ。

是川。　いや、あれで己達はどんなに雀躍したかしれない。己が「田中どうん。」―と、どなつたのは聞えなかつたか。

瑳磨介。　いや、それは聞えなかつた。併しあのこと／＼といふ音は、どんなに懐しかつたか分らない。もとより貴殿が叩いてゐるとは知らなかつたが、二人ぎりで、こんな中に押し込められてゐると、外のものはどんなものでも懐しいのだ。あのびゆう／＼唸つてゐる風の音でさへしみ／＼戀しく思はれる程だ。外はどうなのであらう。世の中はどうなつてゐるのであらうと思ふと、無性に外のことが知りたいのだ。併しこゝは船のどん底だから空一つ見ることが出來ないのだ。

是川。　お察しする。お察しする。

瑳磨介。　庇護を受けてをりながら、かういふことをいつては恩を知らぬやうに聞えるかもしれないが、併しこの頃の貴藩の扱には某は不服でたまらないのだ。これでは匿つてくれるのではなくつて、ほとんど罪人の扱だ。それで自分は毎日腹ばかり立てゝゐる。貴藩には今のところお禮をいひたいよりも、怨をいひたい心の方が、先に立つてゐる位だ。併し貴殿等はよもやかういふ扱を受けて居るものではあるまいな。

是川（無言）

瑳磨介。　はじめ京の藩邸に押し込められた時は、名は同じ押し込めでも、食事は五つ組の椀、毎日浴湯を賜はつて、實に丁重を極めたものだつた。ところが薩摩へ護送するといつて此船に乘せてからは、待遇が全く違つてしまつたのだ併しこれは恐く小役人どもが考へ違ひをしてをるのだと思ふ。貴殿から上役の人へ何とか話をして貰ふわけにはいかぬものだらうか。

是川。（困る。無言）

河内介。　瑳磨介、それは是川殿に申すことではない。筋違のことだ。

瑳磨介。　併しこのまゝでは餘りにひど過ぎますから。

河内介。　ときに是川殿はもう謹愼は許れたのですか。

是川。　いや許れたどころではありません。

河内介。　さういふお身でよくこゝへ來られましたな。

是川。（いひにくさうに）實は、貴殿達にどうしてもきいて貰はなくてはならないことがあつてやつて來たのです。

瑳磨介。　そんなに改まらなくつてもいゝではないか。で、賴といふのは。

是川。（一層いひにくさうに、もぢ〱してゐる）

河内介。（すぐに洞察して）左樣か。――では、こゝに出向かれたのは貴殿ご一人ではありますまい。

是川。　いや、ひとりきりです。

瑳磨介。　父上、それは何の話でございます。

河内介。　何を申してをるのだ。分つてをる筈ではないか。

是川。（兩手をついて）田中どん、まことに申しにくいことだが、どうか何にもいはずにこれで切腹をして貰ひたい。

（脇差を二人の前に差し出す）

間。

瑳磨介。なるほど、父上の豫測のとほりだ。これではわれ〳〵を虐遇するのも當前だ。併し某は理由もなく切腹するわけにはいかない。何の咎でわれ〳〵は腹を切らねばならないのか、それを承らう。

河内介。瑳磨介。今更そのやうなことを是川氏に尋ねる要はないではないか。

瑳磨介。いや、切腹といふなら檢使から申渡を受けるのが常法だ。書付を讀んで貰ひたい。

是川。瑳磨介どん。どうかさう角目立たないでくれ。己は檢使ではない。書付なぞも持つてはゐない。己はたゞ貴殿達のためを思つてやつて來たのだ。大抵は貴殿も察しがついてゐることゝ思ふ。どうか何にもいはずに潔く切腹をして貰ひたい。

瑳磨介。いや、上意でないなら切腹はお受け出來ない。如何に親しい間柄とはいへ、たゞ貴殿の言葉一つでさう易々死ぬことが出來るものか。

是川。なるほど、貴殿がさういふのは無理はない。併しこのまゝだともつと悪いことが起るのだ。

瑳磨介。では、誰かわれ〳〵を殺しに來るといふのか。

是川。いや、どうかそんな風にはとらないでくれ。たゞ時勢が悪いのだ。實際時勢がよくないのだ。どうかさう思つて諦めて貰ひたい。

瑳磨介。それではじめの約束とは違ふではないか。貴藩ではわれ〳〵を薩摩へ帰してくれるといつたではないか。

あすこなら安全だといつたではないか。それとも匿ふといつたのは、あれはわれ〱をおびき出す手段であつたのか。貴藩でははじめからわれ〱を騙すつもりでかゝつてゐたのか。

是川。いや、決してさういふわけではない。何度もいふとほり今の時勢がよくないのだ。藩では匿ひたくつても……實際板挾で苦しいのだ。それや貴殿達はもつと切ないには相違ない。それは重々分つてゐる。けれども、みんな辛いのだ。己もこのことではどんなに苦しんだかしれない。どんなに争つたかしれない。併しどうしても力が及ばなかつたのだ。

瑳磨介。では、幕府に對する手前、われ〱を匿ふことは出來ないといふのだな。

是川。まあさう思つてくれ。

瑳磨介。さうか、分つた。――では、寺田屋の一件に關係の者はみんな殺られるのだな。……さうなのだらう。

是川。(無言)

瑳磨介。是川氏、何故返事をしないのだ。同志の者はみんな一しよに殺されるのだらう。……それとも貴殿等だけは助かるのか。……おい、何故默つてゐるのだ。

是川。(なほ無言)

瑳磨介。さうか。さうなのか。――併しどうして貴殿等は助かつて、われ〱父子だけ殺されるのだ。貴殿等もわれ〱と同じことをやつたのではないか。若し罪があるとすれば兩方とも同じではないか。父上、父上。何故先刻から默つてをられるのです。何故こゝを責めないのです。……いゝえ、某は默りません。某は生命が惜しくつてかういつてゐるのではありません。訣さへ分ればそれは隨分死にもいたしませう。併しある者は助かつて、われ〱だけ死ぬ

やうなそんな依怙の沙汰には服すことが出來ません。――それや成程われ〳〵は主から見離されてゐる。だから主のある人達とは境遇が違ふ。併し薩藩の重役はわれ〳〵を庇護するといつた。それは確にいつた。某はこの兩の耳でたしかに聞いた。某はそれを信じたればこそかうしてこの船に乘つたのだ。そして明い南國を毎日〳〵憧れてゐたのだ。………

是川。瑳磨介どの、貴殿のいふことは一つ〳〵もつともだ。併し今はどうにもしようがないのだ。だからどうかもう何にもいはないで潔く切腹してくれ。貴殿に立派に死んで貰ひたいと思つて、己は殊更この役を引き受けて來たのだ。貴殿の介錯は外の人にはさせたくないのだ。今となつてはこれが貴殿に對する己のせめてもの志なのだ。

瑳磨介。いやだ。國家のために死ぬのなら、もとより身命は惜しまないけれども、理由もなしにこんな汚い船底で死ぬのはどうしてもいやだ。

是川。潔く死ぬといふことは、決して場所についていつたのではない。死方の美しいのをいつたのだ。どうか武士らしく死んでくれ。

瑳磨介。いやだ。何といはれてもいやだ。死ぬ時は自分勝手に死ぬ。貴殿の指圖なぞは受けやしない。

是川。おい、瑳磨介どん、己は貴殿達二人だけを殺しはしない。己も一しよに死ぬ。だからどうか一しよに死んでくれ。

瑳磨介。是川氏、何をつまらないことをいつてゐるのだ。貴殿がわれ〳〵と一しよに死んだところが何になるのだ。たゞ死骸が一つふえるだけではないか。一體貴殿やわれ〳〵は何のためにこゝで死なゝければならないのだ。そんな無意義な死方をしたところが、何の足にもたらないではないか。

是川。　貴殿には己のこゝろが分らないのか。

瑳磨介。　分らないこともない。併しそんな見えや痩我慢はお互にもう止さうではないか。某は形ばかりの武士道なぞは大嫌だ。何も腹を切るばかりが武士の本分でもあるまい。今の世の中は男が何人あつても足りないのだから、こんな下らないことで死ぬのは眞平だ。

是川。　（訴へるやうに）瑳磨介どん。

瑳磨介。　いや、某は卑怯でかう云ふのではない。生命が惜しくつてかういふのではない。死すべきときに本當に死にたいと思ふからだ。不正なものを倒して正しい世の中にしたいと思へばこそ、今の生命が惜しまれるのだ。回天の事業が成就しないうちは某にはどうしても目をつむることは出來ない。少くともその曙光が見えるまでは、どんなことをしても死にきれないのだ。見ろ、幕府はまだ傲然と構へてゐるではないか。そして天朝のために盡さうとするわれ〳〵を苦しめてゐるではないか。われ〳〵が望んでゐる聖徳の國はいつ來るのだ。まだその曙さへ見えないではないか。そんな時に、そんな時にどうしてやみ〳〵死ぬことが出來るものか。われ〳〵が本當に働か　ねばならないのは寧ろこれからではないか。

是川。　さうだ。これからだ。同志の者も皆さう考へてゐるのだ。だからその偉業をやり終ふせることが出來るやうに同志の者のために犧牲になつて貰ひたい。それは實にいたはしいことだ。こんなことを賴むのは恥知らずのやうではあるが、どうかその大業のために身を捨てゝ貰ひたい。

瑳磨介。　いや、その仕事は貴殿等だけでやることではない。某もやりたいのだ。それをやりたいばかりに今日まで苦勞を重ねて來たのではないか。自分が本當に働くのはこれからなのだ。

是川。　さういはれると己は一層苦しくなるが、貴殿達はどうしても助からないのだ。そんなことにならないやうに、己はどんなに骨折つたかしれないのだけれど、どうしても……

瑳磨介。　是川氏、某は何も助けてくれといつてゐるのではない。某はそんな卑怯な男ではない。たゞ働きたいといつてゐるのだ。

是川。　併しそれが出來ないのだ。出來る位ならこんなに賴みはしない。だからどうか……

瑳磨介。　いや、他人のために死ぬことなぞは何といはれてもいやだ。

是川。　己は武士の情で貴殿にこんなに切腹を勸めてゐるのに、貴殿はどうしても聽き入れないのか。

瑳磨介。　切腹が何で武士の情だ。一緒に事を起しておきながら、自分たちだけ助かつて、われ〳〵父子を殺すのが、何で武士の情だ。貴殿は一體敵なのか味方なのか。それをまず明白にして貰はう。

是川。　どうかそんなものいひはしないでくれ……己もつらいのだ。……これだけ賴むんだから……瑳磨介どん……己のこゝろが分つてくれてもいゝではないか。

瑳磨介。　いや、分らない。そんな得手勝手な心は某には分らない。われ〳〵は主に見離された身體だと思つて、貴殿等は恐くわれ〳〵を蔑むのだらう。主に離れた奴なぞは犧牲にしてもかまはないと考へるのだらう。

是川。　さう、ものをひがんで考へられては……

瑳磨介。　ひがみ、何がひがみだ。一緒に事を起したのだから、どこまでも一緒にやりたいといふのが何でひがみだ。おのれだつて地位をかへたら何といふか分るものか。少しはこちらの身にもなつて見ろ、こんなところでむざ〳〵殺される者の身にもなつて見ろ。

是川。だから己もつらいのだ……だから己は奪つたのだ……併しどうしても駄目だつたのだ。……貴殿も切ないだらうが、己も………

瑳磨介。何度同じことばかりいつてゐるのだ。おのれが何といつたつて、そんな信も義もない奴の犠牲にはなるものか。

是川。ぢや、これほど頼んでも。

瑳磨介。いやだといつたら厭だ。——や、刀に手をかけたな。某を斬るといふのか。斬るなら斬れ。おのれは寺田屋の二階で書いた連名帳を忘れたのか。同志であるわれ〳〵を斬るといふなら斬つて見ろ。殺されるのに、切腹なぞと恩を着せられて死ぬのは迷惑至極だ。さあ、殺しに來たのなら早く斬れ。

是川。瑳磨介どん。頼む。頼む。己も一しよに切腹するから、どうか、どうか己と一しよに死んでくれ。頼む、頼む。

瑳磨介。いや、某はおのれの生命なぞを望んではゐやしない。切腹したければ勝手に切腹するがいゝ。おのれのやうなものは、もう今日からは友とは思はぬ。信もおかぬ。（前においてある脇差を手早く手許に引き寄せ乍ら）さあ、斬るなら斬れ。某にも某の覺悟がある。斬れるものなら斬つて見ろ。

是川は耐へに耐へてゐたがその言葉が終るか終らぬうちに、いきなり瑳磨介を拔打にする。

瑳磨介。うむ、おのれ！（脇差で渡り合はうとしたが、深手なのでばたりと倒れる）

河内介はぢつと瞑目してゐたが、急に瑳磨介の傍に寄る。

瑳磨介。（倒れたまゝ）うむむ。殘念だ。殘念だ。

河内介。瑳磨介。手は重い。いま苦痛を鎮めてやるぞ。

瑳磨介。　うむ、無念だ。無念だ。
河内介。　（瑳磨介の手から脇差を取つて）これ、瑳磨介、父が介錯をしてやるぞ。
　河内介は子息の介錯をすると、刀の血を拭つて靜に鞘におさめ下におく。それから自分の羽織をぬいで息子の死骸の上にかけてやる。
河内介。　（是川に）見苦しいところをお目にかけてお耻しう存じます。
　是川は瑳磨介に一刀を浴せるとすぐに二三歩すさつて相手の來襲に身構へてゐたが、河内介の動作を見てゐるうちに、だん〳〵その張がゆるんで來る。そして河内介に言葉をかけられると、急に刀を投げ出して床の上に兩手をついてしまう。
是川。　田中どん。濟まなかつた。濟まなかつた。己が惡い。己が惡かつた。
河内介。　（ぢつと是川を見つめてゐる）
是川。　瑳磨介どんの敵だ。田中どん、どうか己をこの己を、存分に………
河内介。　（たしなめるやうに）是川氏。
是川。　己はこの役を引き受けた時からもう覺悟はきめてゐたのだ。殊に瑳磨介どんを手にかけた上は………どうか、どうかご存分にしていたゞきたい。
河内介。　是川氏、何をいふのです。これ位のことにうろたへてどうなさる。囘天の偉業を志すほどの者がそんなことでどうなさるのです。
是川。　けれど、己にはもう………

河内介。　では貴殿はわれ〳〵を犬死させやうといふのですか。貴殿は倅の言葉を何と聞いたのです。あれをたゞ愚痴とのみお聞きになつたのですか。某は何度倅を止めようと思つたか知れません。併し默つてゐました。それはあんなにも此世に執し、維新の義擧に燃えてゐるものがあることを、しつかり心に刻みつけて貰ひたいのです。某は一言も發しなかつたが、無念なことは倅に百倍してゐます。貴殿は何故われ〳〵のこのおもひを生かして下さらうとはなさらないのです。何故この心を成就させようとはつとめられないのです。これを生かしてくれることが、これを成就させることが、生きてゐるものゝ勤ではありませぬか。是川。

（聲を立てゝ泣き出す）

河内介。　ひとりの血を見た位でそんなに心が弱くつてどうなさる。本當の悲壯なのはむしろこれからですぞ。是川氏、どうかしつかりして下さい。……これからは貴殿方の時代です。どうか、どうかしつかりやつて下さい。今となつては某の願はたゞこれだけです。――では、こゝでお指圖どほり切腹をしますから、ご面倒でもご介錯をお頼みします。

是川。　（無言）

河内介。　どうしたのです。さ、立ち上つてご用意を。……是川氏、是川氏。……貴殿にはまだ某の言葉がお分りにはならないのですか。

是川。　いゝえそれは分つてゐます。

河内介。　それなら、

是川。　では、是非がありません。（力なく立ち上る）

河内介。（切腹の用意をする）

是川。何かご遺言は。

河内介。たゞ同志の方々によろしくとお傳へ下さい。

是川。（涙をふき乍ら）承知しました。

河内介。ではご面倒ながらご介錯を。

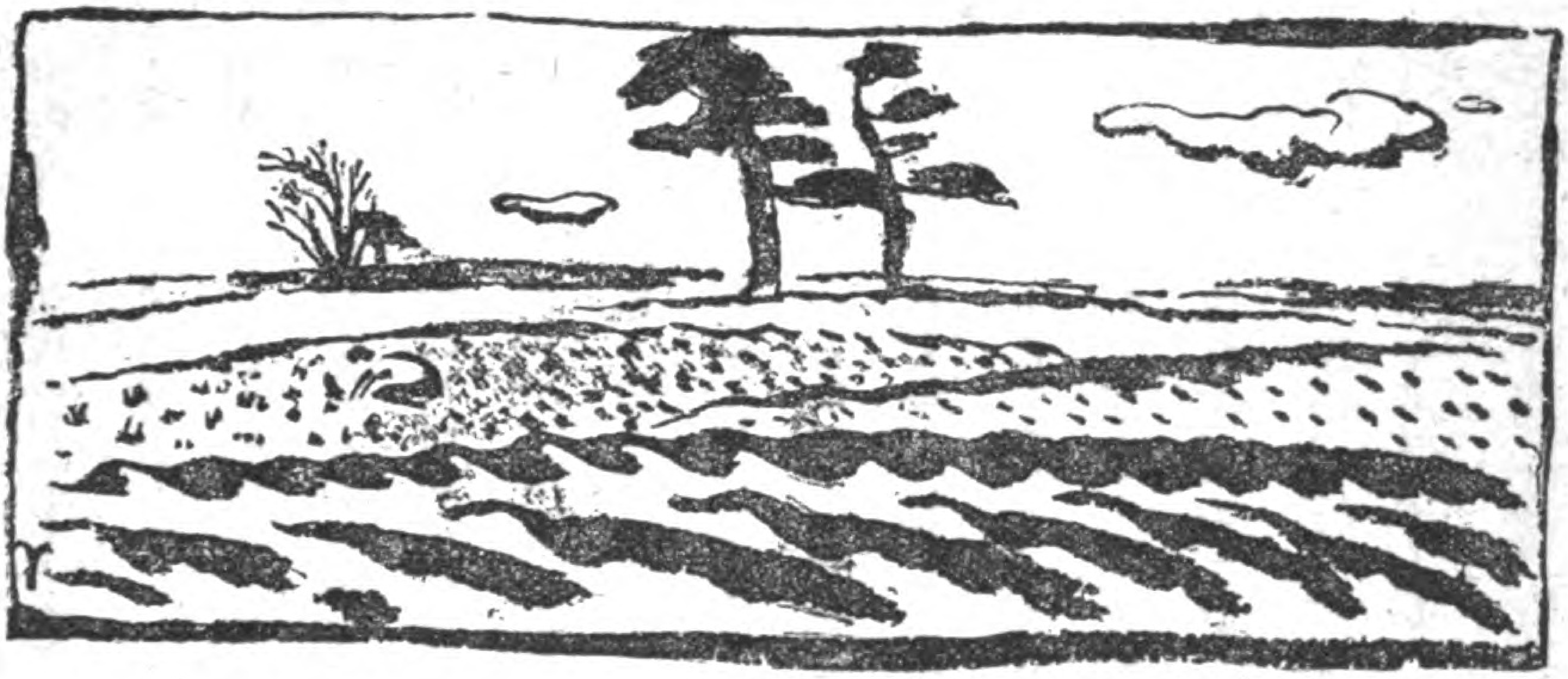
河内介、脇差を腹に突き立てる。是川は後に立つて太刀を打ち下す。併し足許がしつかりしてゐなかつたか斬り損ふ。

河内介。（苦痛を堪へながら）う、う……うろたへるな。……こ、こゝだ。（右手で首のあたりを叩く）

是川。（きつとなつて）ご免。

首を落す。併し是川は刀を下げたまゝ、放心したやうにしばらくの間立つてゐる。それから力なく、ぐつたりと坐つてしまつて、またしばらく茫としてゐる。突然二つの首を引き寄せて抱くやうに両腕の間へ抱へ込む。そして二人の顔をいつ迄も心に刻みつけておかうとするやうに、ぢつと首を見つめる。涙が止め度なく流れる。やがて首を前において、開らいてゐる眼をつむらせる。併しなか〳〵閉ぢないので長いこと瞼を押へたまゝでゐるそれから懐から紙を出して、首級の面に飛んでゐる血を靜かに拭きとつてやる。外は風の音がいよ〳〵烈しい。

一二、三、一九、



ある夜

葛西善藏

「丁度一年になりますね、お父さんがお出でになられてから。——三月の十四日……昨日の夕方あなたと井出さんと二人でおつれになつて、ゆうべもお二人でおあがりになり、今夜は隨分遲くまで、二時過ぎまでおあがりになつたのでしたね。あなたが唄つたり踊つたりして隨分賑かでしたが、あれがお父さんとの飲みじまひだつたのですね。そしてあしたは早く歸るんだ〳〵と云ひながら、たうとう三時過ぎまで一人でおあがりになつて、かなりお醉ひになつて、井出さんに介抱されてお歸りになつたんでしたね。早いもんですねえ、ほんとにもう一年になるんですかねえ……」と、おせいはいつもの晩酌のお酌をしながら、思ひ出したやうに云つた。

「さうかねえ。もうさうなるのかなあ。一寸かんがへるとまだつひ此間のやうな氣もするが。何しろ早いもんだね。それでは今夜はおやぢとの飲みじまひの一週記念日なんだな……」と、私は此頃かなり神經衰弱の氣味で、それに時候柄持病の喘息氣分も手傳つて一向に仕事の出來ないやうな狀態から、晩酌にかゝつてもいつも

ひどく不機嫌なのだが、父のことをおせいに云ひ出されて、一年前のその晩のことが思ひ出されて、近頃にない温めやかないゝ氣分に誘はれかけた。

「きのふの晩は、お父さんは一寸のことで機嫌をわるくされたやうでしたね。さう〳〵、この棚がいけないと云ひ出したんでしたよ。お前なぞまだ斯うした棚なぞ飾つて居れるほどの身分ぢやないとか何とか云ひ出したんで、あなたは非出さんに庭へ出さして毀させるとこでしたよ。しかし今夜はたいへんな御機嫌で、あなたに唄はしたり踊らしたり、それはたいへんな騷ぎでしたよ」

「さうだつたね。何しろ一寸變つたおやぢだつたからね、この棚が生意氣に見えたんだね。この鉄壽は僕の商賣道具なんだし、寒暖計だつて僕には普通の裝飾品と云ふ意味ではないんだし、この茶道具は僕の肺病記念――暴飲暴食を戒めると云ふ意味で特に斯うしたお孃さんでも使ふやうな華奢なものを買つて置いたんだが、それがおやぢの目にはどうにもヘンに見えて仕方がなかつたんだらうよ。その前最初來た時分から、目をつけてゐたんだらうからね」

「さうらしうござんしたね」

「おやぢの奴、僕の前では隨分威張るんだからなあ。東京の弟のところなんかでは隨分遠慮して、ちつとも威張つたりなんかするおやぢではないんだが、僕のところへ來ると、僕の机の前に坐り込んで、口から出放題を並べて、もう十四にもなる子供もある鬚なぞ生やした男をつかまへて、あゝしてからかつてゐるんだからね。それがまた、僕には好きでたまらなかつた。僕は若い時分から、おやぢと酒を飲むのを、誰と飲むよりも好きだつた。どんな人と飲み合ふよりも安心だつた。僕も隨分出鱈目を云ふ方だが、お互ひにどんなことを云ひ合つても、それ以上に進むことはないと云ふことを知り合つてゐるので、最後まで安心だつたが、唯あの唄へ踊れの黴をやらされるには、若い時分から隨分閉口した

ものだよ。來たばかしでまだ馴染みのない繼母の前だつてなんだつて、東京から歸つて行くと早速やらされるんでね、實に閉口したもんさ。今だつて僕は何も出來やしないんだからね。若い時分は尚更だよ。あの晩も隨分弱らされたもんだね………」と、その最後の晩のことを思ひ出すと、懷かしさと共に、苦笑を禁じ得なかつた。

「さうでしたわねえ……」とおせいも笑つた。

「ほんとにさうでしたわねえ。さう／＼大概の馬鹿――大概と云ふ言葉を使ひなさいましたよ――お前も大概の馬鹿とは知つてゐたが、それほどの馬鹿とは知らなかつた、もうそれ位ゐでいゝ、今度は坐つて飲めと云つて、それはもうたいへんな御機嫌でいらつしやいましたよ」

「さうだつたなあ。僕もそりや弱るさ。僕の知つてるものと云つたつて、ほんのラッパ節、サノサ節、都々逸、追分、盆唄、盆踊り、國の岩木山と云ふ山へ登つた時歸りの道中を歩るきながら踊つて來るヘンな踊り見たいなもの、そんなものしけや出來やしないんだからね、しまひにはつひあんな犬の眞似でもして見せるほか仕様がなかつたんだよ。しかしあれがおやぢとの飲みじまひだつたのだと思ふと、今となつては僕には多少の敎訓でもあつた譯だね」

「さうでしたわねえ。それにしても去年の方がもつと暖かだつたやうな氣がしますね、桃の花なんか咲いてたんぢやないか知ら……」

「さうかな。ちつたあ陽氣も遲れてるかも知れないな。しかしやつぱし丁度今夜のやうな晩だつたと思ふな。やつぱし蝦蟇の奴、コウ／＼やつてるぢやないか。おやぢも珍らしがつたつけね。ほんとにあんなものは正確なもんだな。六日が暦の啓蟄とか云つてあんなものゝ出て來る日とかになつてるんさうだが、その前の晩あたりからだつたよ、蝦蟇の聲

が池でし出したのは……」

風のない暗い靜かな晩である。山寺のガランとした部屋の外では、裏藪の中の古池の蝦蟇の聲ばかしだ。一年前の晩の父の姿が懷かしく思ひ出されると同時に、自分の演じた淺ましい狂態がはつきりと浮んで來て、自分は苦々しい憂鬱な氣分になつて來た。自分は四つん這ひになつて、ワン〳〵吠えながら部屋の中を駈けずり廻つた。その揚句「斯うして片脚を揚げて小便をするのはをとこ犬、斯うしてお尻を地につけて小便をするのはをんな犬、と云ふところですが……」斯う云つて、父に向つてワン〳〵と吠えて見せた。が「お前も大概の馬鹿だとは知つてゐたが、それほどの馬鹿とは知らなかつた……」斯う云つて大きく苦笑した父は、それから四ケ月と經たずに、自分等を棄てゝ東京の弟のところで死んだ。

――十二年三月――



踏切

里見弴

早春の細い雨が降つてゐた。

幌自動車の天井に佗しく灯つてゐる豆電氣は、動搖につれて明滅した。セルロイドの小窓のそとは、田や畑のなかの道で、目にさへぎる火影とてもなかつた。

運轉手の席とは反對の側の隅に、二重廻しの袖を引き合せて、——別に寒くはないのだが、小さく丸まつてゐた。戀し得る、と云ふことより大きな仕合を知らず、その仕合のために淋しくされてゐる彼だつた。仕合は、彼に、うち震ふ溜息をつかせた。

人通りのない田舍道を疾走して四五十分の道のりだつた。その間に一つ町があつた。時刻がおそいので、そこも大方は戶を鎖してゐた。とこゝ店のおでんやの赤く長い提燈が、それでも、掠めるやうに窓に映つたりした。

それから先に、四ケ所の踏切があつた。

第一のを越える時には、氣もつかずにゐた。仕合の淋しさをこらへやうとして、

彼は、うんと下肚に力を入れてゐた。二人のほかに、世の中が消え失はれて行く寒さは、心にしみ〴〵と迫つて來た。

第二のに差しかゝつた時に、運轉手が、外套の下を探つて、時計を出して見た容子だつた。それで氣がついて、彼も小高くなつた線路の右左を見渡した。こゝらの踏切は、夜が更けると、もう番人が出てあけたてすることがなかつた。思ひがけない貨物列車が來たりして、時々間違ひがあることを、運轉手も乘客も知つてゐた。……薄暗い光影に、運轉手の背なかを眺めてゐる自分と云ふものが、一瞬間の後に、ぱツとなくなつて了ふ、――それを思ふと、ちよつと好もしかつた。

（やればやるでい〻……）

その時には、軌道の上をはづみ加減に、すばやくも通り越してゐた。彼は、自分の屍體を想像し始めた。その傍に、愛人を思ひ描いてみた。生き殘りはしまいと信じられた。

（やればやるでい〻……）

然し、續いて、妻や子供たちを、それのそばへもつて來て考へた時に、頭から水をあびせられたやうに顫えあがつて、すぐそのよしない空想を捨てた。

山の間をぬけるといきなりの、第三の踏切が、やがて眼前に迫つた。怖れたゝめに、急に、ぢツと腰かけてはゐられない氣持にされた。

「君、君!……すみませんが停めて、降りて行つて見てくれませんか」

哀願するやうに、さう運轉手に聲をかけた。ヘツド・ライトの光のなかに、ピチャ〳〵と泥濘を踏んで、運轉手が直

けて行つた。そのあとの空想は、どうかした機械の調子で急に車が動き出す、汽車が來る……。慌て、扉に手をかけたが、まさかに、跳んで降りもしかねた。胸に、早鐘のやうな動悸を感じながら、どうやら腰を落ちつけてゐた。

軌道の上に立つて、右左を十分に見通してから、運轉手が駈け戻つて來て、大急ぎで車を動かした。越え切らうとする瞬間に、車の後部、丁度彼が腰かけてゐるあたりに、大きな力強い機關車が、グワンとぶつかつて來さうな氣持で、思はず立ちあがつた……。

（うん〳〵、駄目だなア俺は……）

腰をおろす序に、腰かけの上にあがつて正坐した。目をつぶつた。さうして無念無想にならうとした。

けれども、そこに愛人が現はれて來た。心臟が縮まり、身うちが顫ふほどの仕合が感じられた。

（死ぬくらゐなこと、なんでもありやアしない……）

瞑目端坐のうちに、最後の一つを越えて、心づかなかつた。死よりも強いものを、彼は心に抱いてゐた。

小さな、寢靜つた町にはいつて、間もなく彼はわが家の玄關に立つた。女中が雨戸をあけると、思ひがけなくも、七つになる長男が、腰あげをとつた寢間着を、疊の上に引きずつて妻よりも先にとんで出て來た。……彼の心臟が、冷くとまりかけた。あの、第三の踏切が、もう一度目の前に立ち現はれたやうな深い怖れで、彼の仕合は、瞬間に紛微塵にされてゐた……。

義民甚兵衛（三幕）

菊池寛

人物

農夫。甚兵衛。　廿九才、甚しき跛者

その弟。甚吉。　廿五才。

同　甚三。　廿二才。

同　甚作。　廿才。

甚兵衛の繼母。おきん。　五十才前後。

隣人。老婆。およし。　六十才以上

庄屋茂兵衛。

村人。勘五郎。

村人。藤作。

一揆の首領。甲。

同　　乙。

刑吏、村人、一揆、その他多

時
文政十一年十二月

場所
讃岐國香川郡弦打村

第一幕

甚兵衛の家。藁葺きの、大なれども汚き百姓家、左に土間、土間につゞいて臺所あり、臺所の右は八疊の居間。疊も柱も黑く光つてゐる。入口の柱には、金比羅大神宮の大なる札を帖つてゐる。その札も、黑くすぶつてゐる。八疊の奧は障子で奧に部屋のあることを示してゐる。家財道具は殆どなし。

母屋の左に接近して、一棟の建物がある。割きられて、牛小屋と納屋とになつてゐる。牛はゐない。

幕開く。甚作と甚三とが、家の前庭で、「前掻き」と稱する網を繕つてゐる（方形の形をして、柄が付いて居、小溝の鮒や泥鰌を、掬ふに用ゐるもの）。暫くすると、母のおきんが、母屋と牛小屋との間から、大根を二本携げて出て來る。冬の日の黃昏近し。

おきん。畜生！　また大根を、二三本盜みやがつた！　作、今度見付けたら背骨の折れるほど、どやし付けてやれ！　何處の何奴やらう。

甚作。新田の權が、昨日夕方裏の畑のところを、ウロ〳〵してゐたけに、彼奴かも知れんぞ。飢餓で殖えたのは、畑泥

棒ばつかりぢや。

おきん。大根やつて、今年は米の飯よりも大事ぢや、百本ばかりある大根が、冬中のおもな食物ぢやけになあ。

甚三。おつ母、本津の藤兵衛の家ぢやもう食物が盡きたけに、來年の籾種にまで、手を付けたと云ふぞ。

おきん。藤兵衛が家でけ、えゝ氣味ぢや。藤兵衛の婦め、俺が何時か小豆一升借せ云ふて、頼んだのに、借せんと云ふて、はね付けやがつたものな。

（おきん、裏所へは入り水甕より水を汲んで大根を洗つてゐる。隣家の老婆、およしは入つて來る。ボロ〳〵の衣物を着て、瘠せはてゝゐる）

およし。甚作さん達、何してゐるんぢや。

甚作。これから、魚捕ひに行くんぢや。

およし。お前の所ぢや、まだそゝなことが出來るから、えゝな、わしの所ぢや、老人夫婦で、泥鰌一疋捕ることやて川來やせん。喰べるものは、もう何にも、なしになつてしまふた。

甚三、およし婆さん。羨むなよ。これでな、二人で一日中小溝を漁つてもな。細い泥鰌の二十疋も取ればえゝ方ぢやぞ。

およし。さうかな。

甚三。この近所ぢや、銘々で取り盡くして、川には、小鮒一つやて、居りやせんわ。山には、山の芋どころか、のびる、だつて餘計は殘つて居らんぜ。

およし。もう一月もしたら、何喰ふやらうぜ。

甚三。大方壁土でも喰つてゐるやらう。

甚作。瀧の宮の方ぢや、もう松葉喰ふとるだ。

およし。民百姓が、こなに苦しんどるのに、お上ぢやまだ御年貢を取るつもりで居るんぢやてのう。

甚作。お年貢米の代りに人間の乾干しを收めるとえゝぞ。

およし。明和の飢饉ぢやて、これほどではなかつたのう。

甚三。あの時には、お救ひ小屋が、立つたと云ふぢやないか。

およし。さうぢや。さうぢや。わしもな、お救ひ小屋のお粥を貰うたがなあひどい飢饉ぢやつたけれどもな、今度ほどは困らなかつたぞ。みんな、お上がよかつたからぢや。御家老様が、偉い御家老様だつたでな。お藏米を惜しげもなくお下げになつたのぢや。

甚三。今度は、お藏米どころか、こちとらを、逆さにして鼻血まで、搾り出さうとしてゐる。

およし。わしもなあ。長生したおかげで、喰ふや飮まずの辛い目に逢ふことぢや。（ふと、この家に來た用向に氣がついて。云ひ憎くさうに）おきんさん。わしや、お頼みがあつて來たんぢやがな。

おきん。（直ぐ警戒するやうな顏をして）何ぢや！

およし。あのな。えらい云ひ憎くい頼みぢやがな。お前とこの大根を、一本借して貰へんかな。

おきん。（默つてゐる）………。

およし。村中で、みんな羨むどる。おきんさんとこぢや、よう大根作つた云ふてな。飢饉で何も出來なかつたのに、大根丈はよう出來た。おきんさんは、よう氣が付いた云ふてな。

おきん。（大根を大切さうに庖丁で、切りながら。）おぬしには、この翌日にも一本借してやつたな。
およし。あゝさう〳〵。わしもよう覺えてゐるでな。御時世がようなつたら、十倍にも百倍にもして、返さう思つとるんぢや。ぢやけどな。おきんさん。わしは、度々無心云ひとうはないんぢやけどな。家の爺がな、二三日前から、病ひついてな。――喰ふものを喰はんのぢやけに、病ひつくのも當り前ぢやがな。……それでな、青物が喰ひたい〳〵云ふて口くせのやうに云ふとるでな。何ぞ、喰べられるやうな草があるかと思ふてな、野面を走り廻つたけども、冬の眞中ぢやで何もないんぢや。わしの亭主、助けると思ふてな。大根一本融通してくれんかな。御時世が直つたらな、十本にでも百本にでもして返すけにな……。
おきん。（默つて、大根を鍋に入れる）……。
およし。なあ。おきんさん。わし達、助けると思つてな。
おきん。（冷然として）まあ、堪忍して貰はうけな。
およし。（駭いて）えゝ何やと。
おきん。御時世が直つて、大根を一車返して貰ふより、今の一本の方が大事ぢやけにな。
およし。（弱々しき反抗で）えらうまあ。無慈悲なことを云ふのう。
おきん。云はいでかのう。この時節に、食物の事では、親子兄弟でもな。血眼になつとるんぢや。
およし。大根一本が、それほど惜しいかのう。
おきん。ふゝむ。何云つてゐるだ。おぬしの方が、それほど欲しがつてゐるぢやないか。この頃では、甚吉の家の大根云ふてな、みんな評判してな。一本でも二本でも、盗まうとしとるんぢや。家中、代り番こに、ねず番しとるんぢや

一朱銀の一つも持つて來るがえゝ。大根の一本や二本與れてやるけにな。

およし。(憤然として)人情を知らんのにも程があるのう。

おきん。何云つてゐるぞ。この時節に、人情だの義理だの云つとると、乾干しになつて死んでしまふわ。木津の儀太郎を見いな。米俵、山のやうに積んであつても、一合一勺だつて、此方等に惠んでくれたかのう。一石百五十匁もしたら、賣らうと思つとるんぢやないか。此方等のやうな、水吞百姓が大根一本だつて、人に與れられるけ。無駄口利かんと、早う歸つたらえゝわ。

甚作。(見かねて)お母。そなゝ無愛想なこと云はんで、一本位借してやれな。まだ一みねはあつたんぢやないか。

おきん。何、入らんこと云ふのぢや。みんなお前達が、可愛いけに、大根の一本も惜むんぢやないか。ぐず〱云はんと、早う出かけて泥鰌の一疋でもよけい取つて來い。

甚三。甚作行かう。およし婆さ。家のお母一克者ぢやけに、云ひ出したら、後へ引かんけにな、今日は諦めて、歸るとえゝわ。

およし。何が、一克者ぢや。生死塚の婆ばあのやうに、欲の深い奴ぢや。(歸りかけて)今にみろ、わし達が飢えて死ぬときには、うんとこさと呪つてやるからな。

おきん。えゝわ。なんぼなと呪へ、おぬしのやうなおいぼれに、呪はれたつて、何の恐いことがあるもんけ。

およし。業つくばりめ。

おきん。おいぼれめ。おぬし達早う飢えて死ねよ。それ丈、穀がのびて、他の者が助かるわ。

およし。(口惜しがつて)女子のくせに、よう無慈悲なことが云へるな。えゝわ、えゝわ。今に思ひ知らせてやるけに

（退場する）

おきん。この大根と栗とで、春まで命をつなぐんぢや。一本だつて、他人にやつて堪まるけ。（大根を入れた鍋を、竈に
かけ火を點ける）

甚三。ぢや、お母。行つて來るぞ。

おきん。あゝ行つて來い！

（二人の兄弟「前搔き」と魚籠とを持つて出て行く。入れ違ひに村人勘五郎慌たゞしく入つて來る。）

勘五郎。おきんさん。甚吉どんは居らんかのう。

おきん。居らん。今朝、早うからな。落松葉をな、お城下へ賣りに出たよ。

勘五郎。落松葉を、うむそなゝものでも金になるけ。

おきん。百にもならねえだ。それでもな、栗の二合や三合は買へるけにな、

勘五郎。甚三も甚作も居らんかのう。

おきん二人とも居らん。何ぞ用け。

勘五郎。お母、恐しいことが起つたぞ。綾郡二十三ケ村に、御年貢御免を嘆願の一揆が起つたぞ。

おきん。なるほどのう。一揆でも起らうぞ。えゝ氣味ぢや。

勘五郎。それでな、段々お城下の方へ押し寄せて來る云ふのぢや。

おきん、なるほどのう。

勘五郎。それでな。もう端岡までは、來とる云ふ噂ぢやけに、この村でも、加擔するか加擔せんか、今の裡に定めとか

う云ふてな。八幡さまで、村の若い衆の集りがあるんぢや。

おきん。恐ろしいことになつたのう。

勘五郎。一揆もえゝがのう。後が恐いからのう。あんまり、有頂天になつて、やつとると、後で磔ぢやからのう。

おきん。恐ろしい、恐ろしい。飢えて死ぬと磔と孰ちらが、えゝぢやろ。

勘五郎。ぢや、俺は、急ぐけになみんな歸つて來たら、よこして呉れんかのう。村の集りに、はづれると後が悪いぞ。

およし。えゝわ。分つた。甚三と甚作とを探して、直ぐやるけにな。

勘五郎。ぢや、えゝか。暮六つまでには、集るんぢやぞ。

(勘五郎去る。およし、不安らしく考へ込みたる後兄弟をたづねるべく、つゞいて退場する。――間――小小屋に物音がする。やがて、この家の長男の甚兵衛が、其處から現はれる、つぎはぎした膝までしか來ない着物を着てゐる。憔悴してゐる。右脚甚しく短く、ちんばを引く。ひそかに、周圍を見廻したる後、臺所に忍び寄り、鍋の蓋を開け、まだ半煮えの大根を、ガツ／＼貪り喰ふ。暫くすると、背負籠を肩にしたる次男甚吉、表から歸つて來る。兄が大根を喰つて居るのを見付ける！)

甚吉。何するだ！　この泥棒猫め！

(兄の襟筋を掴み引きづり出す。)

甚兵衛。(やゝ愚鈍らしく)われこそ何するだ！　何するだ！

甚吉。おのれ。お母の目を掠めて盗み喰をしやがる。われに、大根を喰はせてたまるけ。

甚兵衛。わしやて、大根喰ひたいだ。この大根作つたの俺ぢや。

甚吉。何を世迷言云ふだ。作つたのは、われでもな。この家や、畑はおれの物ぢやぞ。この畑に出來るものは、みんな俺の物ぢやぞ。

甚兵衛。何云ふだ。新田の藤兵衛伯父が云ふた。われは長男ぢやけにな。みんなわれの物ぢや云ふて●

甚吉。（烈しくこづき廻しながら）不具者の癖に何云ふだ。爺さんが。生きてゐたときに、庄屋さま頼ふて、家屋敷とも俺の物になつてゐるのだ。われは牛小屋で、くすぶつてりや、いゝんだ。不具者のくせに、出しやばるなよ。（烈しくこづき廻す）

甚兵衛。（激怒し）お母と兄弟三人とで共謀しやがつて、長男のわしの物を、みんな取つてゐるのだぞ。この家の緣の下の塵までわしの物ぢや。

甚吉。何を、阿呆くさいことを云ひやがるんぢや。

（更に烈しく、こづき廻す、甚兵衛こづかれながら、手を振り上げて、甚吉の顏を毆つ。）

甚吉。おのれ！　毆ちやがつたな。

（二人烈しく格鬪す。甚兵衛も、絕えず壓迫されながらも、抵抗をつゞける。其處へ母と一緒に兄弟二人歸つて來る。）

甚三。吉兄い。何うしたんぢや。

甚吉。（甚兵衛を壓へながら）この不具者めがな。今鍋の大根を、盜んで喰ふてゐやがるんぢや。それでな、俺が怒鳴り付けるとな。俺に喰つてかゝりやがつてな。俺の顏を毆ちやがつたんぢや。

おきん。本當けい。この阿呆のど不具め。大根やこしお前の口へは入るものぢやねえだぞ。お前なんかに、粟の飯一杯も惜しいけどな。同じ人間の皮、被ぶつてるけにな、毎日一杯宛恵んでやつとるんぢや。それを、有難いとも思はん

でようもようも、盗み喰ひしやがつた。吉、根性骨にしみるほど、どやしつけてやれ。

甚三。おつ母、昨日畑の大根取つたのもこいつかも知れんぞな。

おきん。さうぢや。さうぢや。それに違ひない。みんなして、牛小屋の中へ追ひ込んでな。

甚兵衞。(全く抵抗力を失ひながら)何ぼ不具ぢやとて、長男の俺を牛小屋へ住はせて、粟の飯たつた一杯づゝあてかうて……。

おきん。何云ふぞ。この飢饉の時節に、粟の飯一杯ぢやとて、惜しいぞ。吉、その頰げた一つひねつてやれ。

(甚吉、云はれた通りにする。)

甚兵衞。あゝ痛い! 痛い!

おきん。さあ。皆して、投り込んでしまへ! これからは、粟の飯も勿體ないや。水丈で澤山ぢや。

(三人、母に云はれた如く甚兵衞を手込にして、牛小屋へ入れる)

甚兵衞。何うするだ! 何するだ! われ達! この兄を何うするだ!

甚吉。何が、兄だい! われのやうな不具の阿呆を誰が兄に持つものけ。

甚兵衞。何するだ! 何するだ!

甚三。(次兄に加勢しながら)えゝ。默つて、この中にすつこんで居れ!

甚作。(同じく手を借して、擔ぎ上げながら、二人の兄よりは、やゝ優しく)盗み喰ひやこしするけに、こなゝ目に會ふのぢや。大人しう、小屋の中へ、は入つて居るがえゝぞ。

(三人、跪いてゐる甚兵衞を、牛小屋の中へ擔ぎ込んでしまふ。)

甚兵衛。何するだ。何するだ。（叫びながら、擔ぎ込まれる。）

おきん。出られないやうに、戸を閉めて、しんばり棒、かうとけ。明日から、粟の飯一杯もやらんぞ。（やゝ聲を低めて）今時飢え死んだとて、誰も不思議がりやせんわい。

（甚吉、戸を閉め、棒を探してきて、しんばり棒をかう。この前より、周圍が漸く薄暗くなり初める。）

おきん。吉、聞いたか。綾郡に一揆が起つた云ふことを。

甚吉。聽いたとも、御城下でえらい騒ぎぢや。香東川の堤で、早馬に二度も行き會ふたぞ。

おきん。それでのう。御城下に押し寄せる道筋ぢやけに、この村へも追付け來るでのう。加擔するか加擔せんか、評議するためにのう。八幡様で暮六つから集りがあるから、來い云ふてな。勘五郎どんが、ふれて來たぞ。

甚吉。一揆のかたう人か。こなゝ時、下手まごつくと首が飛ぶし、それかと云ふて、後込みしとると、一揆からひどい目に會ふしのう。

おきん。兎に角、行つて來るがえゝぞ。それでのう、身をたしなんで、出しやばらんがえゝぞ。先ばしりして、わしに心配させるでねえぞ！

甚吉。ちや、ボツ／＼行かうか。

おきん。飯喰ふてからにせい。評定が、長びくかも知れんけに。

甚吉。あゝ、ど不具めと、取り組み合ふて、えらいことお腹を空かせたぞ。

おきん。（台所へは入り、鍋の蓋を開けて見て。）あの阿呆め！　三切も、喰ひやがつた。われ達に、三切づゝやらう思つてゐたら。當らんようになつたぞ。

(兄弟三人、台所に腰をかけ、粟飯を茶腕に盛りながら、大根を鍋よりはさみ出しながら喰ふ)
甚三。一揆も、やつてゐるときは、景氣がえゝがのう。後でまた、磔や打首が二三十人はあるべい。
おきん。觸らぬ神に、祟りなしぢや。なるべくなら、誰も出んで濟むとえゝがのう。
甚作。さうもなるべい。村で加擔するとなると、家では若い者が揃つとるけにのう。一人や二人は出ねばなるまい。
(この前より、周圍が、ほの明るく騷がしくなる。遠方が、火事でもあるやうに明るくなる。雜音が、だん〳〵高くなる。遠い寺の鐘が鳴り始める。)
甚作。(馳け出しながら、)何やらう。何やらう。火事かしら、向ふが眞赤ぢや。
甚吉。えゝ、何ぢやと。(出て來る)ほゝう。赤いな。何うしたんぢやらう。何處ぞで、火事を出したのか知らん。
おきん。えゝ火事ぢやと。(出て來る)
(甚七も出て來る。親子四人とも、遠方を見て、不安に襲はれる。寺の鐘烈しく鳴る。牛小屋の戸が、ガタ〳〵動く)
甚兵衛の聲。開けてくれ! 開けてくれ!
甚吉。阿呆め! お前は、其處ですつこんで居れば、えゝんぢや。
(村中が、ます〳〵明るくなる。人聲が嵐のやうに高まつて來る。犬がけたましく吠える。寺々の鐘が段々と鳴る。
甚作馳け出す。やがて、歸つて來る。)
甚作。(蒼くなつて、歸つて來る。)えらいこつちや! えらいこつちや。街道筋は、一面の炬火ぢや。
甚吉。えゝ何ぢやと。
(このとき、「一揆ぢや! 一揆ぢや! 一揆が來たぞう!」と、云ふ叫びが遠く近く聞えて來る。)

おきん。あゝ到頭、來たんぢやのう。恐ろしいことになつたのう。
甚三。御城下を、夜討ちにするんぢやのう。
おきん。まさか、此方等に、仇はしやすまいのう。
甚吉。何、そんな心配があるもんか。一揆は此方等の味方ぢやないか。
おきん。われ達、みんな隠れとれ！　加擔人させられたら、後が難儀ぢやけに。
甚吉。まだ、えゝ。まだ、えゝ。此方へ來るのには間がある。
（このとき、村人の一人、あはたゞしく馳けて來る。）
甚吉。おゝわれや、藤作ぢやねえか。
藤作。おゝ、この村も、加擔ぢやぞ。えゝか。一軒で、一人宛、人數を出すんぢやぞ。えゝか、炬火と竹槍とを用意しとけ。えゝか。後から、一揆の、統領が廻つて來るけにな。
甚吉。（蒼白になりながら）合點ぢや。
藤作。加擔の村が、二百十二ヶ村になつたぞ。夜更けにお城下へ押し寄せて、御家老達の家を叩き壞す云ふとるぞ。はよう、用意せい。えゝか、分つたか。
甚吉。分つた。分つた。
（藤作。馳け去る。）
おきん。（狼狽しながら）何うせう。何うせう。
甚吉。仕方が、ねえ。わし行くぞ。

おきん。阿呆云ふな。後嗣のお前に萬一のことがあつたら何うするんぢや。われは行くぢやねえ。

甚三。兄貴は、家に居るが、えゝ。わしが行くだ。わしが。

おきん。われも行くでねえ。加擔して、後で打首にでもなつたら、何うするだ。

甚三。そなゝ心配がいるもんけ。何萬と云ふ人數ぢやもの。たゞ、附いて行つた丈で、打首になんか、なつて堪るけい

(急に、炬火の火が近づいてゐる。一揆達が近づいて來た。物音が聞える。寺の鐘、何段々と鳴りつゞける)

おきん。こちらへ來るだ。こちらへ來るだ。われ達、みんな隠れとれ。おつ母が、えゝやうにするだ。わしに委しとけ

わしが、えゝやうにするだ。わしが、われ達、誰も行かんで、えゝやうにするけに。

甚吉。阿呆云ふな！　お母のやうな、年寄に委しとけるけ。

おきん。えゝ。默つとれ、お前達、は入つとれ。云ふたら、は入つとれ。は入つとれ！

(おきん。息子達三人を、押し込むやうに、奥の間へ入れる。そして、臺所へ行く、出刄包丁を持つて、牡屋と牛小屋の間から、奥庭へ行くと、炬火の薪と手頃の竹竿を持つて出て來る。尖端を、出刄でとがらせる。それから、牛小屋の戸のしんばり棒を、はづす。このとき、覆面をし手槍を持つた一揆の首領二人、炬火を持つた多くの一揆に圍まれながら、出て來る。村人勘五郎が案内してゐる。)

勘五郎。(首領に)へえ。この家にも男手が、ございまする。

首領の一人。わしは、綾那さる村に住む豪士ぢや。今度諸人助けのために、御年貢米御免の嘆願の一揆を起した者ぢや同心か不同心か、孰ちらぢや、同心にするに於ては、道々、所々在々の大百姓の家を叩き壊して、金銀米穀を別けてやる。

他の一人。同心なら、同心の印に加擔人一人を出せ。不同心なら直ぐこの家を叩き壞す。其方達を打殺す孰ちらぢや。

おきん。（顫えながら）へえい、へえい。同心でござりますとも、わし達小百姓には、救ひの神さまでござります。ありがたう、ございます。おありがたうございます。加擔人を出しますとも。（牛小屋の前へ進み戸を開ける）おゝ、甚兵衛お前、そなゝ所へ隱れて居らいで、出て來いや、何もこはいことありやせん。わし達の難澁を救ふて下さる神さまぢや。早う出て來い。

（甚兵衛の手を摑んで曳きづり出す）

おきん。さあ！　これを持つてな。このお方達の後から、ついて行け！（竹槍と炬火とを渡す）

甚兵衛。わしやこはい。わしやこはい。

おきん。何を云ふぞ。お前、ぐづぐづ云ふたら、竹槍で突き殺されるぞ。（竹槍を强いて押し付けながら）はやう、しつかり持たんけいな。

甚兵衛。わしやこはい。こはい。

首領の一人。臆病者め！　恐がることはない。一揆の人數は綾郡宇多郡を合はせて、五萬三千人ぢや、何の恐いことがあるものか。

おきん。うんと叱つて、貰ひたいでのう。これは生れつきの臆病者でな。（甚兵衛に）さあ、しやんとして行つて來い。この方々に、附いて行くと、白い飯が、何ぼでも喰べられるぞ。

（甚兵衛、その言葉に少しく元氣つき、三四歩歩く。）

首領の他の一人。その者は、不具者（かたわもの）ぢやないか。

おきん。何の不具者でもな。山や野良の働きは、人一倍でな。他人の二倍もの仕事しまするでな。ちんば引いても、走しるのは、人一倍ぢやぞな。

勘五郎。おきんさん。甚吉は、何うしただ。

おきん。先刻も云ふたぢやないか。御城下へ松葉賣りに行つてな。まだ歸つて來んでのう。

首領の一人。不具者でもよい。詮議してゐては手間どる！　さあ、次の家へ案内されい。

勘五郎。さあ、こちらへおいでなされい。

首領の他の一人。（甚兵衛に）後から、ついて來い。はゝゝゝ山本勘介と云ふちんばの軍師が昔あつた。お前もうんと働いてくれはゝゝゝ。その代り、白い飯を何ぼでも喰はしてやるぞ。（歩き出す）

甚兵衛。（やゝ遅れて母に恨めしげに）わしを打首にするつもりかの。

おきん。何を云ふだ！　お前に、たんと、白い飯を喰はしてやりたいのぢや。はよう、とつと附いて行け！

（甚兵衛。愚鈍な顔にも、母親を恨めしげに見返りながら、手槍を杖ついて、ヨタ／＼と出てゆく。おきん、胸を撫で下ろしながら、後を見送つてゐる。兄弟三人、奥の間から出て母親の後へ、そつと忍んで來る。）

甚吉。おつ母！

おきん。おゝびつくりした。

甚三。うまくやつたなあ。おつ母。

おきん。はゝゝゝ。

甚吉。ほんまにうまくやつたの。あの不具者が、竹槍をついて、ちんば引き／＼附いて行くのを考へると、吹き出した

くなるのう。

おきん。はあゝゝゝ。あの不具者も、廿九になるまで養ふてやつた甲斐があつたのう。思はん役に立つたわ。この一揆で御年貢は御免になるわ。米も安くなるわ。此方等親子は高見から一揆を見物して居るわ。あゝうまいことした。甚作厄逃れのお祝ひに、神棚へお燈明でもあげいよ。

甚三。一揆の大將が云ふとつた。昔、山本勘介云ふて、エライ軍師があつたと云ふてのう。けど、おつ母の方が、もつと偉い軍師ぢやのう。

おきん。どうぢや。年が寄つても、こなゝものぢや。はゝゝゝゝ。

兄弟三人。あはゝゝゝゝ。

甚吉。あの不具者め。あはゝゝゝゝ。

親子四人。あはゝゝゝゝゝゝゝゝ。

……………（幕）

第二幕

第一幕より、十日ばかりを經たるある日の夜。弦打村庄屋茂兵衞の家の廣間。村人達が緣側にも庭にも充ちてゐる。座敷には、所々に百目蠟燭が燃えてゐる。庭には、篝火が、三個所ばかりに焚かれてゐる。人數の割合に、靜粛である。みんなが、不安恐怖とに囚はれてゐるのか分る。

村年寄甲。(緣側に立つゝ見廻しながら)もう皆集つたかのう。本津の吾作は來たか。

村人一。來ただ。玆に來てゐるぞ。

村年寄。新田の新吉が見えんのう。

村人二。まだ來とらん が、先刻來るときに誘ふとな、山へ行つとるけに。歸つたら直ぐよこせろ云ふたぞ、嬶が。

村年寄乙。上笠居の甚兵衛が、見えんぞな。

村人三。うん。甚兵衛どんが、來とらん。

村人四。あなゝ氣の毒な人、來いでもえゝぢやないか。

村人五。また、あなゝ阿呆來たとて、しようがない。

村人六。阿呆々々云ふない。少し阿呆ぢやけに尙可愛いさうぢやないか。

村人七。さうぢや。阿呆ぢやけど、えゝ人ぢや。繼母や兄弟達に苛められるので、いよ〳〵阿呆になるんぢや。

村人六。さうぢやとも。長い間、苛めぬかれたでのう。家や田畑は、弟に取られるしな。喰物も、ロク〳〵喰はされんし、なんぞ口答へすると、弟三人がよつてたかつて、毆ち打擲するんだものな。

村人五。けど、阿呆ぢやもの、しようがないわ。

村人六。阿呆でも、長男は長男ぢやものな。

村人八。死んだ甚七が、あんまりおきん婆に、甘かつたから、いかんのぢや。

村人六。さうぢや。死んだ爺もわるいんぢや。だがのう、今度の一揆にやつてあのおきん婆の仕打はどうぢや。足腰の

たつしやな息子が三人もあるのにな。自分の息子は出さんでな。常日頃、苛めぬいとる甚兵衞どんを、出すんぢやものな。

村人七、八、四。さうぢや、さうぢや。ひどい仕打ぢや。

村人六。わしや、何も知らん甚兵衞どんが、竹槍杖ついて、ちんば引き〱隨いて來るのを見ると、涙がこぼれたぞな。

村人七。俺も、可愛相で見て居られなんだぞ。勘五郎どん、お前どうしただ。お前が一揆の大將を、甚兵衞どんの家へ案內した云ふぢやないか。

勘五郎。そら、後から氣の付くことぢや。わしも、竹槍を差しつけられて案內しとるんぢやらう。命がけぢやないか。

村人七。ほんとうに、あのおきん婆、一揆の大將に賴んで、突き殺して貰ひたかつたのう。早う、案內役を逃げたい思ふ一心で、何でも早う濟めばよいと。思ふとつたけにのう。

村人。四、六、八。ほんまぢや。ほんまぢや。

村人七。考へても、腹が立つでのう。

勘五郎。だが、庄屋どんや名主どんは遲いのう。

村年寄甲。なんぞ、難儀なことになつとるかも知れんぞう。

村年寄乙。松野八太夫樣が、馬から落ちくぜた所が、もう半丁も向ふだとよかつたんぢや。彼處の地藏堂の所が、村境ぢやけにな。ホンの半丁位の違で、この村に難儀がかゝるんぢや。

村人八。お上も、無理ぢやないか。郡奉行樣が、一揆に殺されたのが、弦打村の地境の內だからと云ふて、弦打村から

下手人を出せ云ふて、あんまり聞えんちやないか。

村年寄乙。ちやけど、さうでもせな、下手人が出んのちや。下手人が出んと、お上の御威光にかゝるけにな。

村人七。えらい、災難ちやのう。

勘五郎。えゝことは、二つないわ。一揆のお陰で御年貢御免になつたかと思ふと、直ぐこなゝ無理な御詮議ちや。

勘五郎。一昨日、御防川で一揆の發頭人が、五人も磔になつたと云ふから、下手人が出たら、磔は逃れんのう。

（一座、しんとしてしまふ。その時甚兵衞が、末弟の甚作と一緒に來る。）

村人七。あゝ甚兵衞どんが來た。甚兵衞どんが來た。

村人四。相不變、ニコ〳〵しとるわい。あの人は、他人には、いつも愛情がえゝわ。

（甚兵衞、蒼白な顏に微笑を湛へ、皆にペコ〳〵頭を下げて、隅の方へ坐る。）

村人八。甚兵衞どん。遲かつたのう。

甚兵衞。（默つてうなづく）…………。

（甚作、甚兵衞に寄り添ふて坐らうとする）

村人七。甚作、わりや、何しに來ただ。

甚作。おツ母が、附いて行け云ふけにな。

村人七。何やつて、おツ母がそなゝこと云ふんちや。今日の集りは、一揆に隨いて行つたもの丈の集りちやぞ。

甚作　ちやけどもな。おツ母が、兄やは少し足らんけにな、寄合の席へやこし、一人でやるのは、心元ない云ふけにな。

村人七。えらう、勝手なこと、云ひやがる奴ちやのう。そなに心元ない、甚兵衞を、何うして又、一揆にやこし、獨り

で出したんぢや。あんまり、得手勝手なことをしてゐると天罰が、恐ろしいぞと、おツ母に云つてやれ。

甚作。（言葉なく默してしまふ）………。

勘五郎。ほんまぢや、おツ母にな。少し云ふてやれよ。あんまり、ひどい事をするとな。人間がゆるしても、神さまが許さん云ふてな。

（甚作は、顏を赤めて、さしうつむいてしまふ。甚兵衛はニコ〳〵笑つてゐる）

村人九。あゝ。街道筋に提灯が見えるぞう。庄屋どん達が、歸つたんぢや。

村人十。おゝ見える。迎ひに行かう。

（一座緊張して、待つてゐる。やがて、迎ひに行つた村人が、悄然として歸つて來る。それに續いて、庄屋と三名の名主とが銘々手鎖を入れられ、郡奉行の役人に守られて、首をうなだれて歸つて來る。一座仰天する）

村人達。（口々に）どうしたんぢや。どないおとがめで、そないな目に合ふたんぢや。

村年寄甲。茂兵衛さま、一體これはどうしたんぢや。

茂兵衛。仔細はあとでお話する。先づ、おしづまり下されい。

村年寄甲。おゝ靜まるとも、皆靜かにせ。村の一大事ぢやけに、みんな靜かにしてくれ。

（村年寄達、庄屋を庇ふて、座敷へ上げ、郡奉行の役人達を案内する。庄屋正面へ出る。村人達、水を打つたやうに靜かになる。）

茂兵衛。（老眼をしばたゝき、一座を見廻しながら）かやうな姿で、御一統にお目にかゝり、面目なうござる。

村人一。何のそなゝ兼〔醉〕か入るもんけ。村のために、そなゝ身にならつしやつたことは分つてゐるでな！、

村人達。ほんまぢや。ほんまぢや、こなゝ命様は入らんぞつ！それよりも早う、話しとくれ。

村年寄甲・しつ、靜に。

茂兵衛。さう云はれては、なほ更面目ない。わし等の申し開き拙いによつて、かやうに村中一統の難儀になつたのぢや

村人一。庄屋どん、こなゝ事よりも、今日の首尾。その手鍵の仔細を早う話してくれ！氣にかゝつて仕様がないわ。

茂兵衛。さう、おせきなさるな。話すなと云ふても、話さずには居れんことぢや・實はな、今日新郡御奉行筧左太夫様のお役宅へ出たのぢや。ところが、御奉行様の仰せらるゝには、お上が今度の一揆に對しての御沙汰は、恩威並びに行ふと云ふ御趣意ぢやと、かう仰せられるのぢや。それでな。年貢米は、嘆願に依つて、免除する代りに、一揆の發頭人は、一昨日御坊川で磔にした。又、松野八太夫様に、礫を打つた下手人は、草を分けても、詮議するとかう仰せられるのぢや。

(一座から烈しい嘆息がきこえる)

それでな、御奉行様の仰せらるゝには、一揆が香東川の堤にさしかゝつた時は、弦打村の百姓が、眞先だとかうおつしやるのぢや。

村人達。(口々に)そりや、嘘ぢや。……なんぼ御奉行様の仰せでも、それは間違ふとる。……大間違ひぢや。大間違ひぢや。

(村人達口々に打ち消す。)

茂兵衛。まあ！默つて聞いて下され。一揆の發頭人達が、さう白狀したとお奉行様が仰せられてるのぢや。

村人達。(銘々に嘆息する)……………

茂兵衛。それにな。何よりも悪いことは松野様が、落馬遊ばした處が、地藏堂の手前で、まぎれもなう弦打村の境内ぢや。御奉行様も云はれるのぢや、弦打村の者が、先手にゐたと云ひ、松野殿の果てられたところが、村の境内と云ひ、嫌疑が其方達に懸るのを不祥と諦めいと、かう仰せられるのぢや。それでな、御奉行様内々の仰せでは、「村中で詮議して下手人を出すに於ては、褒美として、お救ひ米の高も他村よりは、心をつけてやるとかう仰せられるのぢや。が、若し三日の裡に下手人が相知れぬに於ては、庄屋を初め名主、村年寄一統を、下手人の代りに磔に上げるかも、知れないぞとかう仰せられるのぢや。

（嘆息嗟嘆の聲高し）

茂兵衛。その上詮議中、其方達に手錠を申し付けると云ふお沙汰で、この有様ぢや。（眼を烈しくしばたゝく）それでなわしが思ふに、あの騒動中に誰の打つた礫が、松野様に當つたか、打つた當人にも分かるものぢやないと思ふ。が、御一統の内で礫を打つた心覺えのある人は、五人や十人はあると思ふ。その中でな、村の難儀を救ふてやらうと思ふお人は、名乘つて出て貰ひたいんぢや。

（一同水を打つたやうに靜まりかへつてしまふ）

茂兵衛。御一統の内でな、礫を打つた覺えのある人は、村一統を救ふと思ふてな。名乘り出て貰ひたいんぢや。」

村年寄甲。難儀なことになつたものぢやのう。

村年寄乙。恐ろしい災難ぢやのう。

名主一。皆さん今聞かれる通りぢや。お奉行様は、まだかう仰せられた。下手人が相知れぬときは、村一統の者を、くゝり上げてあく迄も、糺明する積りぢやとのう。

（一同顔を見合はせ伏目になつてしまふ。）

村人五。わしは、左の手に炬火を持ち。右の手に竹槍を持つてゐたけに、礫を投げようたつて、投げられやせなんだ。

村人。二、三。わしやつてさうぢや。

村人四。わしやつてさうぢや。わしは、松野様のおん馬が見えたとき、すこ飛びに逃げたわ。

村人七。わしは、又ずつと後れてゐたけに、松野様のおん馬は、おろか御家中の姿やこし、まるで見かけなかつたわ。

勘五郎。おい〳〵みんな。自分の身の明しを立てるよりも、今は村の難儀を考へるときぢやぞ。

藤作。さうぢや、よう云つた。よう云つた。自分の身一つ逃れるよりも、村の難儀を逃れる工夫するのが肝心ぢや。

茂兵衛。（それに力を得たごとく）さうぢや。今勘五郎殿や、藤作どの云はれる通りぢや。この村に、お奉行様の姿を見かけて、石を擲つやうな、大それた暴れ者の居らん事は、わしが誰よりも、よう知つとる。が、時の災難で、不祥な嫌疑を受けたのを、不運と諦めて、村一統を救ふつもりで誰ぞ、名乗つて出て貰ひたいのぢや。……（間）……さう云つた處で、おいそれと名乗つて出られるものでない、命を放り出すのぢやけにのう。が昔佐倉領の宗五郎様は自分の命を投げ出して、百姓衆の命を救ふたけに、今でも神様に祭られて居る。誰ぞ、自分の身一つ投げ出し、村一統の難儀を救ふて呉れる人はないか。

（一座、寂として聲なし。たゞ、嗚咽の聲が、洩れるのみ。）

茂兵衛。御一統、誰も石を投げた仁はないか。

名主達。えゝないか。誰ぞ、石を投げたものは、居らんか。石を投げた覺のある人は、その石が松野様に中つたと諦めて、名乗つて出てくれ。

茂兵衛。えゝ、どなたもないか。

（一座、顔を見合はすのみ、一人も聲を發するものなし。）

茂兵衛。それならば、仕樣がない。是非に及ばぬ事ぢや。村一統知らぬ存ぜぬで、どなにひどい責苦にでもかゝるのぢや。その代り、みなもその覺悟してな、入牢の腹を定めて下されな。俺も、事に依つては、磔にでも何にでもなる覺悟をするけにな。

（皆淒慘な氣に打たれる。そして動搖して、口々に呟き出す）

村人五。藤作、わりや石投げたぢやねえか。

藤作。（驚いて）滅相もないこと、ぬかすな。われこそ、眞先に行つたけに、石投げたぢやねえか。

村人五。何をぬかす、この阿呆め。

藤作。お前こそ何ぬかすだ！

（二人全く摑み合ひにならうとして、傍人から止められる。）

村年寄甲。誰ぞ村の難儀を救ふ人ないか。あの騷動のとき、石投げた人ないか、

村年寄乙。村のために、誰ぞ出て呉れい。誰ぞ出てくれ。

（一座また靜まつて聲を發するものなし）

茂兵衛。ぢや、皆覺えがないと云ふなら、わしや、さう云つてお奉行樣に、お返事申上げる外はないぞ。念のためにもう一度丈、訊かう。あの騷動のときに、誰ぞ石を投げたものはないか。あの騷動のときに、誰ぞ石を投げたものはないか。石を投げた人は、村のためぢやと思つて名乘つて出てくれ。

(甚兵衛は、最初より茫然として、人々の話を聞いてゐない。たゞ庄屋の最後の聲が大きいので、ふと耳をかたむける。)

村年寄甲。さあ、今ぢやぞ、石を投げた覺のある人は出てくれ。

村年寄乙。村を救ふてくれるのなら、今ぢやぞ。今、出てくれんと、村はえらい難儀になるんぢや。

(村年寄の絶叫する聲を聞いて、甚兵衛ムク〳〵と立ち上る。甚作驚いて制止しようとする)

甚兵衛。何やと、騒動のときに、石を投げた者ないか云ふのけ。

村年寄甲乙。さうぢや。さうぢや。

甚兵衛。(子供の如く無邪氣に)わしや投げたぞ。

村年寄、村人達。えゝ、甚兵衛どん。お前投げたか。

甚兵衛。投げたとも、わしや二つ投げたぞ。

村年寄村人達。ほんまか、ほんまか。(驚嘆す)

甚作。(驅けよつて)兄や、何云ふんぢや。

(駭いて兄の口を制せんとしながら)そなゝ大それたことを云ふて、何うするんぢや。

甚兵衛。(うるさゝうに、弟を排ねのけながら)えゝ、彼方へのいとれ。わしや、投げたぞ。おまけに、一の方はこなゝでつかい奴ぢや。藤作どん、われも投げてゐたぢやないか。勘五郎どん、われも投げてゐたぢやねえか。

勘五郎。(愕然として)滅相な、わりや何に云ふだ。

藤作。(同じく)ほんまぢや。人違して何云ふだ。

甚兵衛。さうけ。人達だつたか、わしや皆投げてゐたけに、わしも眞似して投げたんぢや。

勘五郎。（狼狽えながら）滅多なこと云ふな。そりや、皆他村の衆ぢや。

甚兵衛。さうけ。

甚作。兄や、わりや。何も知らいで、そなゝ事云ふが、いふとたいへんな事になるぞ。よう、今の嘘ぢやと云へ、早う云へ！

甚兵衛。嘘ぢやねえ。われこそ、何云ふだ。早う家へ歸つとれ！

甚作。よし、歸つておつ母に云つてやる。

（甚作飛ぶやうに馳け去る。）

茂兵衛。甚兵衛殿、此方へござらつしやれ。

甚兵衛。おう何ぢや、庄屋どん。

茂兵衛。おぬし、石を投げたに相違ないか。

甚兵衛。おう、投げたとも、一つはこなにでつかい奴ぢや。

茂兵衛。誰を目當に投げたんぢや。

甚兵衛。誰彼なしぢや。わしや、皆が投げてゐたけに一緒に投げたんぢや。

茂兵衛。甚兵衛どの。おぬしは、この村の難儀救ふてくれるか。

甚兵衛。わしや、何が何だか知らねえだ。

茂兵衛。おぬしが、松野様に、石を投げたと云ふて與れると、この村の者が、みんな助かるのぢや。この村の者は、

前を神さまのやうに、一生あがめるのぢや。どうぢや、松野様に石を投げたと云ふてくれるか。

甚兵衛。わしや、何だか知らねえが、えいだとも。えいだとも。

村人達。（口々に）甚兵衛どん、拜みますぞ。拜みますぞ。お前さんの恩を、一生涯忘れんぞ。

甚兵衛。わしは、さう云ふてくれると、嬉しいだ。嬉しいだ。こないに嬉しいことは、生れて初てだ。（快く微笑す）

茂兵衛。（役人達の方へ向ひて。）お聞きの通りでござりまするが。この者が松野様に、石を投げたに相違ござりませぬ。

役人。少し、愚鈍の者と見えるが、申立に誤りはあるまいな。

茂兵衛。愚鈍とは申せ。至つて、正直者にござりまする。

役人。よし。役所に召しつれて、よく調べるであらう。甚兵衛とやらに縄打て！

（此の時、甚吉達三人の兄弟、あはたゞしく馳け付けて來る。）

甚吉。（甚兵衛に、飛び付いて引き据ゑる）この阿呆め！何云ふだ。何をロクでもないこと、喋べるんだ。親兄弟の首に、縄がかゝるのを知らんのけ。

甚兵衛。何するんだ。何するんだ。わしや、石を投げたんぢや。投げたんに違ひないんぢや。

甚吉。何ぬかす。この阿呆め！

（甚兵衛を叩かうとする。村人七、八止める。）

村人七、八。何するんぢや。假にも、兄たるものに、手を掛ける奴があるけ。

甚吉。お前さん達ぢや。お前さん達ぢや。こないな阿呆の云ふことを取り上げて、こないな阿呆を下手人にして、罪を逃れ

やうとして。庄屋どんも、聞えんぞ。阿呆は、え丶けど。阿呆につながる親子兄弟の難儀を何うするんぢや。

村人七。何やと、こな丶阿呆ちやと。そな丶阿呆を、何うして一揆に出したんぢや。おぬしのやうな悧巧な息子が、三人もあるのに、そな丶阿呆を何故一揆に出したんぢや。甚兵衛が、石を投げたと云ふのも、みんなお前達が、投げさせたんぢやないか。

甚吉。え丶！何ぬかす、お前達が皆、よつてたかつて、この阿呆になすくり付けたんぢやないか。

村人八。何ぬかす。そな丶阿呆なら、なぜ一揆にやるんぢや。

村人達。さうぢや。さうぢや。

甚吉。（甚兵衛に取りすがつて）早う、云ふたことを取り消せ。松野様に、石を投げたと云ふと、お前磔ぢやぞ。

甚兵衛。（さのみ驚かず）磔やとてえ丶わ。村の衆が、みんな欣んで呉れやるんぢやもの。

甚吉。阿呆め！俺の云ふことを聞いて、早う取り消せ。早う、取り消せ。お前のために云ふてやるんぢやぞ。

甚兵衛。あは……わしのため！あは……わし二十九になるけれどお前がわしのために、え丶ことして呉れたこと、一つもありやせん。

甚吉。え丶何ぬかす。この阿呆め。……お庄屋さま。お役人さま。兄の申すことは、みんな嘘でな。こりや、阿呆ぢや足らんのぢや。こな丶もの丶云ふこと、お取り上げになつては困りまする。お願ひでござります。（坐つて狂氣のやうに頭を下げる）

甚兵衛。（弟にならつて頭を下げながら）お庄屋様、お役人さま。ほんまぢや、わしや、こな丶でつかい石投げたんぢや、馬に乘つたお武士が來たけにのう。それを目かけて、こな丶でつかい石投げたんぢや。

甚吉。何云ふだ。この阿呆め。お前のやうな不具者に石が投げられるけ。

甚兵衛。何云ふだ、お前は一揆に隨ひて來んのぢやもの。わしがした事が、お前に分るけ……。わしや、こなゝでつかい奴を………。

甚吉。（兄に摑みかゝる）何ぬかす……（村人達、甚吉を取押へる。）

役人。その者は、何者ぢや。

茂兵衛。甚兵衛の弟では、ござりまするが、甚兵衛が愚鈍な者でござりますゆえに、此の者が家を取つて居りまする。

役人。甚兵衛は、重罪の嫌疑ぢやほどに、親子兄弟も、免れまい（手下の捕吏に）あの者を召捕れ置け！

甚吉。それは、聞えません。それは聞えません。こなゝ阿呆の云ふことを聞いて。こなゝ阿呆が、お奉行様に石を投げ打つやうな、そな、大それた………

甚兵衛。（繩にかゝりながら）わしや、こなゝでつかい奴を。………

村人達。甚兵衛どの、拜みますぞ。拜みますぞ。

甚兵衛。おゝわしはな。こなゝでつかい奴を………。

役人。その弟どもを、召捕れ。

甚吉。（口惜し泣きに泣きながら）わし達迄、難儀をかけるのか。阿呆め！と不具め！

甚兵衛。わしは、こなゝでつかい奴を………（手で石の大きさを示さうとするが、もう兩手が縛られてゐるので動かない）

村人達。甚兵衛どん、拜みますぞ。拜みますぞ。みんな、拜んで居りますぞ。

茂兵衛。甚兵衛どの。わしからも、禮を云ひますぞ。おぬしを決して、見殺しにしませぬぞ。御領分中の百姓衆の名前

を借りて、きつと嘆願に出ますぞ。
甚兵衞。何を云ふぞ。わしは皆の衆にさう云はれると。たゞうれしいだ。うれしいだ。
甚吉。（無念の形相で、睨みすゑながら）この阿呆のど不具め！
甚兵衞。わしは、こなゝでつかい奴をな………。（くゝられた手を動かさうとする）
（村人達が、感謝と賞嘆との聲の裡に）…………………………（幕）

第三幕

第二幕より數日を經たる十二月の末。香東川原刑場。小石の多い川原に竹矢來が、作られてゐる。彼方に水の枯れた川原が、つゞき、背景に冬枯れた山が見える。木枯が、川原を傳ふて吹いて來る。
幕開けば、初は矢來の外側を見せ次いで舞臺を半廻して、矢來の内側を見せる。矢來の外には多くの見物人が群衆してゐる。弦打村の庄屋、名主、年寄、村人達もその中に交じつてゐる。

村人一。庄屋どん。百餘ケ村の庄屋達が連署の嘆願もやつぱり、冗ぢやつたのかのう。
茂兵衞。わしや、さう聞かれると面目ないがのう。お奉行樣に何ぼ泣きついても、冗ぢやつた。
名主。お上ぢや、誰でもかまはん。下手人を磔にして、御威光を見せれば、えゝんぢや。
村人二。なんぼ考へても、甚兵衞どんは可愛いさうぢや。あの時は、みなめいめいに石を投げたんぢやけにのう。たゞ

甚兵衞どん丈が、正直でズケ〳〵云ふてしまふたんぢやけにのう。

村年寄。まあ、えゝわ。わしや芝山の觀音さんが、村中を助けて下さるために甚兵衞どんに、乘り移つたんぢやと、思ふとるんぢや。

茂兵衞。もう、何ぼ嘆いても取り返しが付かんわ。甚兵衞どんに、死んで貰ふて、その代り、後をようするんぢや。

名主一。さうぢや、後で村の神樣に祭るんぢや。

茂兵衞。祭るとも、祭るとも、ほんまに讃岐領の宗五樣ぢや。義民の鑑ぢや。

村人三。それにな。外の人ぢやつたら、それにつながつて、首打たれる親兄弟が、可愛い相ぢやがのう。あのおきん婆ばや甚吉は、あんまり可愛い相ぢやないわ。長年甚兵衞どんを、苛めた罰ぢやと思ふと、却つて氣色がえゝわ。

村人四、五、おゝさうぢや。それがあるわ。

村人六。わしはな、甚兵衞どんに喰べて貰はう思ふて、こないな物を持つて來たんぢや。（竹の皮に包んだ握り飯をせ見る）

名主一。おゝ、それやえゝ思ひ付きぢや、甚兵衞どんも飢餓で、ロクなもの喰べとらんけに。欣ぶに違ひないわ。

村人六。わしや、さう思つたけにのう。大事な大事な來年の籾種の中から、三合ばかり飯にたいたのぢや。

茂兵衞。おゝ、それやえゝことしてくれた。この茂兵衞が禮を云ひますぞ。

（この時、彼方より群衆のさはめきが聞える）

村人一。二。あゝ來た！　來た！　甚兵衞どんが來た。

（群衆、口口に甚兵衞の名を呼びながらその方へ波を打つて動く。やがて、裸馬に乘せられた甚兵衞母子着く。

馬から降りる。群衆の間を過ぎる。）

茂兵衛。甚兵衛どん。わし達は、みんな來て居るぞ。

名主一。わし達は、みんな陰ながら、拜んどるぞ。

村年寄二。心強ふ思ふて下されや、わし達はみんな來て居るぞ。

村人達。わし達は、みんな拜んどるぞ…………。お前さんのこと一生涯忘れんぞ。…………あとで、お前さんを神さんに祭るだ。

甚兵衛。（快き微笑を含んで村人達に會釋する）…………

茂兵衛。甚兵衛どん。わしやな、百餘ケ村を馳けづり廻つて、お前さんの命乞ひの訴狀に連署して貰ふて、お上へ差上げたんぢやがのう。到頭、お前さんを、こなにしてしまふたんぢや。堪忍して下されや、なあ甚兵衛どん。

甚兵衛。なに、えゝわ。えゝわ。わしや皆の衆にさう云はれると、うれしいだ。

村人達。（ロゝに）甚兵衛どん。有りがたう！　有りがたう！　お禮申すだ、お禮申すだ。快く成佛して下されや。

（甚兵衛、絕えず、ニコ〳〵しながら、矢來の中へは入る。おきん及び甚吉達續いて現はれる。）

村年寄一。おきんさん、お前さんも氣の毒ぢやのう、が、村一統を救ふと思ふて、死んで下されや。

おきん。（憤然として）何ぬかしやがるんぢや。皆よつてたかつて、阿呆をおだて、寃の罪に落して、親兄弟まで、こなゝ目に合して置きながら、何ぬかしやがるんぢや。

甚吉。おつ母の云ふ通ぢや。わし達を、こなゝひどい目に合はして置きながら、ようも、見に來られたのう。

おきん。覺えとれ！　わしはな、首は飛んでも、七生まで村中に祟つてやるからなあ！

村人一。何云ふだ。みんなわれ達が、人のえゝ甚兵衛を、苛めぬいた罰ぢやないか。
村人達。さうぢや！　さうぢや！
おきん。何！（くゝられて居ながら、村人達に飛びかゝらうとする）
繩取りの役人。（繩を引きながら）神妙にいたせ！
おきん。（恨めしさうに村人達に）覺えとれ、よう覺えとれ！　死んだつて、恨みを晴してやるからな。
（おきん母子、刑場の中へ歩み入る。舞臺半廻り、刑場の内部が見える。磔柱が、矢來に立てかけられてゐる。五人の四人甚兵衛を先に一列に引き揃えられてゐる。刑吏達が後からは入つて來る。刑吏の長、床几に腰を掛ける）
刑吏の長。用意は整ふて居るか。
刑吏一。萬事整ふて居ります。
刑吏長。それでは、罪狀を讀み上げい！
刑吏二。（聲高く讀み上げる）

其方儀、去る十三日領内百姓共一揆騷動致し候砌り、右一揆に加擔致し、香東川堤に於て上役人松野八太夫に投石殺害致し候始末、不レ恐二御領主を一仕方、不屈至極につき、磔申付くる者也

弦打村百姓
甚兵衛
同人母　きん
同人弟　甚吉

同じく　甚三
同じく　甚作

其方儀甚兵衛身寄につき、獄門申付くる者也。

刑吏の長。最期も近づいたほどに、何ぞ遺言があれば聞き屆けて遣はすぞ。

おきん。わしや、こなゝことで、打首になるのは不承知ぢや。なんぼ、お上のなされ方でもあんまりぢや。あんまりぢや。

刑吏。この期に、及んで未練を申すな。本人が白狀に及びたる上は、緣につながる不幸と諦めて居れ！

おきん。何仰つしやるんぢや。こなゝ阿呆の云ふこと、お取上げになつたりして、あんまりぢや。聞えんわ。聞えんわお上のなされ方が聞えんわ。（甚兵衛に）この阿呆め！

甚兵衛。（氣がないやうに笑ふ）あはゝゝゝ。

おきん。何が可笑しいんぢや、この阿呆め！親兄弟を、こなゝひどい目に會はしてこの阿呆め！

甚兵衛。あはゝゝゝ。

おきん。えゝ、この不孝者めが！

刑吏一。騷がしい。控へ！

おきん。（恨めしさうに默る）………。

刑吏の長。甚兵衛！その方は、何ぞ遺言はないか。

甚兵衛。（微笑しながら）わしや、何もないだ。村の衆が、皆んな欣んで下さるけに、わしや嬉しいだ。嬉しいだ。

（その時、村人の六、矢來の中へ馳け入る）

村人六。お願ひでございます。お願ひでございます。

刑吏一。何ぢや、何事ぢや。

村人六。お願ひでござります。これを一つ甚兵衞どんに、食べさせて下さりませ。

（竹の皮包の握り飯を出す）

刑吏一。如何、致しませう。

刑吏長。苦しうない。甚兵衞に與へてつかはせ。

刑吏一。（甚兵衞に與へながら）村の衆の志ぢや。快く喰べたがよい。

甚兵衞。（無邪氣に欣ぶ）ほゝう。これわしに吳れるか。

刑吏の長。手をゆるめてやれ！

（刑吏一、甚兵衞の前腕丈を自由にする）

甚兵衞。ほゝう、わしや。こなゝ白い飯生れて始めてぢや。これ喰べてもえゝか。ほんまに、喰べてもえゝか。

刑吏一。快く喰べるがよい。

甚兵衞。（うまさうに喰べながら）おゝ、わしこなゝうまい物、喰べたことがないぞ。頰つぺたが、落ちさうだ……。ほんまに、こなゝうまい物、喰べたことがないだ……（つゞけ樣に五つ六つ、喰べる。ふと、母達に氣が付く）……

おゝおつ母、甚吉！お前達、ほしうないか。

甚吉。何ぬかしやがるんぢや。阿呆め、首の飛ぶ間際に、そなゝ物が喉を通るけ。

おきん。ほんまに、この阿呆め！どこまで、親を馬鹿にしやがるんぢや。

甚兵衛。はあ……。さうけ、嫉か。ぢや、わし皆、喰べてやらう。あゝうまい。うまい、頸が落ちさうぢや。村の衆ありがたう！

村人達。口々に何云ふとんぢや。よう喰べて呉れた。此方等こそ拝んどるぞ。

刑吏の長。申置くことがなければ、母と弟共を最後の座へ直せ。

おきん。（慌てゝ）一寸待つて下されませ。お願ひがござりまする。

刑吏の長、何ぢや。

おきん。死際のお願ひでござりまする。どうぞ、この親不孝者を、先きへ突いて殺して下さりませ。せめてもの腹癒せに、この不孝者が、磔柱の上で、苦しむのを見させて下さりませ。

村人達。（口々におきんを罵しる）……何を云ふ鬼婆め。……お前の方から先きに死んでしまへ……。

刑吏の長。折角の願ひぢやが、聞き届けることはまかりならぬ。かやうな場合、重科の者を、後にするのが定法ぢや。それその者達を、あれへ引き据えい！

おきん。えゝ口惜しい。此奴が、突かれるのが見られないのか。

刑吏三。えゝ。やかましい！神妙にあれへ直れ！

（刑吏達、母子四人を上手の方へ連れ去つてしまふ。首斬役、刀を抜いてその後から従ふ。）

甚兵衛。（微笑を含んで、その後から見送る）おつ母も、甚吉も先きへゆくのか、長い間、わし苛めて呉れてありがたう。ありがたう。あはゝゝゝ。

（首を切る掛聲、太刀音、つゞいて聞える。見物、どよめいて聲を上げる。）

甚兵衛。（顔色、やゝ蒼白になつたが、笑ひを絶たない。）あは……。わしや、胸が、すつとしたが、わしをな、二十何年も苛めぬいたおつ母も、甚吉も、もうあなになつてしまふた。あゝおつ母、甚吉、甚三、甚作、どなゝ氣持ちやあは……（甚兵衛哄笑しつゞける）……今度はわしの番ぢや。早う、磔柱に付けて下されや。

村人達。（急に動搖す）甚兵衛どん。ありがたう。拜みますぞ。御恩を忘れませんぞ。……南無阿彌陀佛！南無阿彌陀佛！

（刑吏達磔柱を起し、それに甚兵衛をくゝりつけようとする。）

甚兵衛。何が、南無阿彌陀佛ぢや。皆喜んで、下つしやれ。わしや、こなゝえゝ氣持のしたことはないや。あはゝゝゝ

（群衆達の讃嘆、悲嘆の裡に、甚兵衛の笑ひ、いよ〳〵高くなつて行く）

……幕……

編輯を了へて

◙

ソロ／＼社會運動の或るものは具體的に深刻化しつつある、加藤や水野も議會の老耄どもを相手にするやうにいい加減であつたら一寸お手許が狂はぬとも限らぬ、社會問題を論ずるものは頃來少くなつたが、事實は異常に深刻化して來た、異常な緊張を示して來た。

◙

京都に於ける水平社の運動がそれだ、奈良に於ける警察署長の捕虜事件がそれだ、こうなつては官僚上りの政治家や、學校出の行政官には手がつけられまい、高明を推戴し是濟を謳歌する時代錯誤の大小政治屋どもが匙を投げ出す機は刻々迫つて來て居るのではなからうか。

◙

二十一ケ條問題でゴッタ返して來た、周章屋の外務省にまた頭腦の種が一つ殖えた、世界を我物顔に振舞ふ英米の天狗鼻には弱い内田も支那には案外強いそうだ、我々はすべてを道義の觀念から出發する、それで何處に向つても正しく且つ強い。

◙

植物學者として世界に有名なモーリッシュ教授から『發光植物』なる趣味ある原稿が來た、どなたも一讀の價値が充分にあります。五月號の『改造』には趣味あり、そして時評として非常なる價値あるものが登載されることになつてゐる。

◙

片山潜氏が赤露で目まぐるしい程活躍しておるそうだ、そして其精根のいいとこには流石レェン、トロツキーも驚いていゐるそうだ。彼も本東洋の生める一英雄である。

◙

倉田百三氏は『女性改造』に毎號約二十頁位づつ執筆して下さることになつたそうです。賀川豐彦氏は四月廿九日神戸發渡歐されます、一路平安を祈ります。

◙

『アインスタイン全集』が後れてすまぬと出版部員が申してゐます、校正が數字でむづかしいため五校も六校もかかるそうですから。

◙

本社出版部は廣田義夫が主任となつた、それから雜誌『改造』や出版部に寄せらるる原稿は今後山本宛てでなく直接出版部、編輯部宛てで送つて下さい。

改造定價

一冊	壹冊	半ケ年	壹ケ年
定價	八十錢	五圓六拾錢	拾壹圓廿錢
郵稅	貳錢	郵稅不要	郵稅不要

註文の注意

本號定價金壹圓參拾錢

本誌一頁廣告料（一等百二十圓 二等九十圓 三等八拾圓）

○本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇註文は凡て前金とす

◇前金切れの際は發送を停止す

◇外國發送の註文は壹部郵稅貳拾四錢を申受く（但し支那を除く）

◇見本は發送せず

◇郵稅切手代用は壹割增のこと

◇拂込みは振替によるるが最も便利なり

大正拾貳年三月二十日印刷納本
大正拾貳年四月一日發行

編輯兼發行兼印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社

電話 芝（長）一六三八 芝二八五四 芝四三〇三

振替東京八四〇二

改造社出版目錄

◇文學博士米田庄太郎著
リッケルトの歴史哲學

定價四圓七拾錢
送料廿三錢
四六版上製

八版

新獨逸の青年をして、眞に蘇生の思をなさしめたのは新理想主義哲學だ、ハイデルベルヒの彼の講座は、單に新獨逸青年のみならず實に世界の碩學が蝟集しておる彼の哲學を我が米田博士が懇切に解説されたのが本書だ。

◇ラッセル原著　宮本鐵之助譯
數理哲學概論

定價貳圓八拾錢
送料拾九錢
四六版上製

四版

本書は努めて數學專門語を避け明快通俗に記述し、何人にも理解し易からしめたものである。文化科學と自然科學の理念と其成果を完全に認識せんとせば、先づ數理哲學の門を叩くの外はない。

◇理學博士桑木彧雄著
物理學と認識

定價壹圓五拾錢
送料拾五錢
四六版上製

四版

アインスタインの原理は科學と哲學とを密接な關係にまで導きよせた此物理學上の新原理が惹起した空間や、時間の考方の變化は明かに哲學上の問題である、本書は實に科學と哲學との密接な關係につき博士が蘊奥を傾けたものだ

◇文學博士醫學博士榊保三郎・醫學博士諸岡存共著
スタイナハ若返り法研究

定價壹圓參拾錢
送料拾參錢
四六版上製

五版

スタイナハの深遠なる生理學の智識と、十數年に亘る嚴密なる實驗によりて組立てられたる「若返り法」は七十にて尙ほ廿歲前後に見る性慾生活に生き得べき事を說く。我「若返り法」研究の大家榊博士の解說せし權威ある書。

◇山川均著
レーニンとトロッキー

定價壹圓九拾錢
送料拾五錢
四六版上製

九版

現代世界の革命家として世界的環視の檜舞臺に突つ立てるレーニンとトロツキーの思想評傳である。革命は一日にして成らず、彼等の波瀾多き半生涯の生立記は義し骨鳴り血躍る。著者は我社會主義者の頭目山川氏だ。

◇バートランド・ラッセル著
愛國心の功過

定價壹圓八拾錢
送料拾五錢
四六版上製

六版

日本人にかくも鋭い警告を與へた思想家はない我々は此一書を讀むごとに、「隠れる愛國心」「眞理に徹せざる我國民」「哲學なき貧しき自分」「ラ氏の論議は論議の基礎を成す原料品」「光る眞珠」だとしみ〴〵感ぜしめ學ばせる。

◇文學博士米田庄太郎著
現代文化人の心理

定價貳圓七拾錢
送料拾九錢
四六版上製

拾五版

文化主義、文化生活等凡そ文化なる語は今や思想界の流行語となつた。其百般の文化的事象、文化的概念を尤も平易に解說した快著。つまり現代文化を研究する人の第一に手にすべき文化哲學の手引の樣な有益な良書。



花咲く頃を三越へ

◆引續き開催中……四階側にて 寄裂友物見切賣出し

年中行事中で一番高評な四月の大賣出しが來ました、四月一日よりは新柄ネル、セル陳列を三階に、袷向新製品を二階に

◆新着の寫眞機械……一階
◆流行の新衣裳……二階
◆春の帽子と洋服……三階
◆流行のパラソール……四階
◆新入學用品……四階

八日より單女帶陳列を十五日より更紗應用帶、着尺陳列を二階にて開催、◆十二日よりアクション同人洋畫展覽會を七階に開會

◆四月五日より……四階側にて 五月人形陳列

春のお用は三越へ

東京市 駿河町

三越呉服店

◆四月十日と廿五日は三越の定休日◆

HE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
ITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
CE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
ICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO